

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）

江戸の大名屋敷の考古学的研究

Archaeological Study of *Daimyo* Residences  
in Early Modern City *Edo*

2017年1月  
早稲田大学大学院 人間科学研究科

追川 吉生  
Oikawa, Yoshio



## 目次

目次 .....	3
図目次.....	7
表目次.....	11
<b>第1章 近世考古学と大名屋敷研究.....</b>	<b>13</b>
第1節 近世考古学と大名屋敷研究 .....	13
第2節 本論文の構成.....	24
<b>第2章 大名屋敷の屋敷境(1) 屋敷境の諸形態と表長屋の出現.....</b>	<b>27</b>
第1節 大名屋敷の屋敷境と表長屋 .....	27
第1項 大名屋敷の表長屋をめぐる研究のあゆみ.....	27
第2項 大名屋敷にとっての表長屋 .....	28
第2節 初期の大名屋敷の屋敷境.....	30
第1項 屋敷境遺構の諸形態.....	30
第2項 最初期の大名屋敷の屋敷境 .....	35
第3項 東京駅八重洲北口遺跡の屋敷境の変遷 .....	36
第3節 屋敷境と表長屋 .....	38
第1項 屋敷境遺構の形態と表長屋のあり方 .....	38
第2項 屋敷境と藩邸外郭部の土地利用 .....	45
第3項 東京大学本郷構内遺跡龍岡門別館地点の表長屋と屋敷境 .....	50
第4節 屋敷境の定型化と都市基盤 .....	56
第1項 初期の大名屋敷の外郭部利用の多様性 .....	56
第2項 屋敷境の定型化と都市基盤 .....	58
第5節 小結 .....	61
<b>第3章 大名屋敷の屋敷境(2) 屋敷境としての堀の機能と消長.....</b>	<b>63</b>
第1節 はじめに.....	63
第2節 屋敷境としての堀のあり方 .....	66
第1項 屋敷境遺構としての堀.....	66
第2項 17世紀前半の堀 .....	70
第3項 17世紀後半の堀 .....	72
第4項 屋敷境としての堀の機能 .....	81
第3節 大名屋敷の屋敷境としての堀と防禦性 .....	83
第4節 屋敷境の変化と堀の消滅.....	91
第1項 高田藩池之端屋敷の屋敷境 .....	91
第2項 屋敷境の変遷と堀の消滅 .....	93

第5節	小結 .....	96
第4章	屋敷内の区画施設と大名屋敷の空間構成.....	97
第1節	はじめに.....	97
第2節	大名屋敷の空間構成と区画遺構 .....	101
第1項	大名屋敷の区画施設と区画遺構の諸形態.....	101
第2項	絵図に描かれた区画施設 .....	112
第3節	区画遺構のあり方と家中秩序.....	119
第1項	区画遺構の高低差 .....	119
第2項	御殿空間と詰人空間の区画施設と家中秩序 .....	121
第4節	小結 .....	125
第5章	栽培遺構からみた大名屋敷における植物栽培の諸様相 .....	127
第1節	はじめに.....	127
第2節	大名屋敷跡遺跡の植物栽培遺構 .....	130
第1項	植物栽培遺構の諸形態.....	130
第2項	詰人空間の栽培遺構と畑 .....	137
第3節	大名屋敷での植物栽培の諸様相 .....	143
第1項	御殿空間での植物栽培.....	143
第2項	詰人空間と植物栽培.....	145
第4節	小結 .....	149
第6章	大名屋敷跡遺跡における金属加工の一様相 .....	151
第1節	はじめに.....	151
第2節	大名屋敷跡遺跡の金属加工遺構と遺物 .....	154
第1項	大名屋敷跡遺跡の金属加工遺構.....	154
第2項	大名屋敷跡遺跡の金属加工遺物.....	156
第3項	大名屋敷跡遺跡の金属加工.....	161
第3節	大名屋敷の生産活動と金属加工 .....	164
第4節	小結 .....	166
第7章	大名屋敷跡遺跡の様相の変遷 .....	169
第1節	屋敷境の変化と江戸の下水 .....	169
第2節	遺物組成の変化と大名屋敷の宴会儀礼 .....	178
第1項	御殿空間の宴会儀礼.....	178
第2項	詰人空間での宴会 .....	187
第3節	大名屋敷の生産活動.....	191
第1項	栽培・耕作活動.....	191
第2項	大名屋敷の生産活動の多様性 .....	199
第4節	大名屋敷跡遺跡の様相の変遷.....	204
第8章	資料編.....	211
第1節	資料編1：東京大学本郷構内遺跡の屋敷境遺構.....	211
第1項	東京大学本郷構内遺跡西側の屋敷境遺 .....	211

第2項	東京大学本郷構内遺跡東側の屋敷境遺構.....	219
<b>第2節</b>	<b>資料編2：大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構（東大本郷構内遺跡以外）..</b>	<b>233</b>
第1項	千代田区内の大名屋敷跡遺跡.....	233
第2項	港区内の大名屋敷跡遺跡.....	261
第3項	文京区内の大名屋敷跡遺跡.....	277
第4項	品川区内の大名屋敷跡遺跡.....	278
第5項	渋谷区内の大名屋敷跡遺跡.....	280
第6項	新宿区内の大名屋敷跡遺跡.....	282
第7項	豊島区内の大名屋敷跡遺跡.....	291
<b>第3節</b>	<b>資料編3：御殿空間の宴会儀礼とカワラケー括廃棄遺構.....</b>	<b>299</b>
<b>参考文献</b>	<b>.....</b>	<b>319</b>



## 図目次

図 1 屋敷境遺構の諸形態 (1) 1 類-4 類.....	33
図 2 屋敷境遺構の諸形態 (2) 5 類-7 類.....	34
図 3 東京駅八重洲北口遺跡 2 期の屋敷割 (『御府内沿革図書』は朝倉 1985 より) .....	37
図 4 東京駅八重洲北口遺跡の屋敷外郭部の遺構分布 (千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003 を基に作成) .....	41
図 5 東京駅八重洲北口遺跡の屋敷境遺構と表長屋の礎石間の距離 .....	44
図 6 丸の内三丁目遺跡の屋敷外郭部の遺構分布 (東京都埋蔵文化財センター1994 を基に作成) .....	47
図 7 東京大学本郷キャンパスに現存する石垣.....	52
図 8 東大本郷構内遺蹟龍岡門別館地点の遺構分布 (東京大学埋蔵文化財調査室 2004 を基に作成) .....	53
図 9 龍岡門別館地点と絵図の照合状況 (東京大学埋蔵文化財調査室 2004 より) .....	56
図 10 溝状遺構の幅と深さ (ドット横の番号は表の遺構番号に対応) .....	68
図 11 『御府内沿革図書』(朝倉 1985) にみる汐留遺跡の屋敷境.....	76
図 12 6J-500 と龍野藩邸、仙台藩邸の下水網 (東京都埋蔵文化財センター2000 を基に作成) .....	77
図 13 汐留遺跡 6J-500 (屋敷境 C) (東京都埋蔵文化財センター1997) .....	78
図 14 仙台坂遺跡堀跡 (品川区遺跡調査会 1990) .....	80
図 15 東大白山構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点 SD01 (東京大学埋蔵文化財調査室 2008) .....	85
図 16 白山御殿跡第 4 地点 1 号遺構 (文京区遺跡調査会 2003) .....	86
図 17 白山御殿堀範囲推定図 (成瀬 2008 より) .....	87
図 18 『宝永江戸図鑑』における小石川御殿 (飯田・俵 1988 より) .....	89
図 19 東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点の大聖寺-高田藩邸の屋敷境遺構 (東京大学遺跡調査室 1990 改変) .....	92
図 20 外来棟地点 SA120 と SD62 (東京大学埋蔵文化財調査室 2005 を基に作成) .....	104
図 21 加賀藩本郷邸の御殿空間を区画する排水溝の位置 (追川 2004 を基に作成) .....	105
図 22 薬学系総合研究棟地点 SB155 と 17 世紀末頃の本郷邸 (『武州本郷第図』を基に作成) .....	107
図 23 薬学系総合研究棟地点の遺構検出状況 (東京大学埋蔵文化財調査室 2006) .....	108
図 24 富山藩邸で検出した御殿空間/詰人空間の堀 (CRC-A 地点 SD12210) .....	110
図 25 東京大学本郷構内遺跡の区画境遺構.....	111
図 26 加賀藩邸の屋敷境と区画境 .....	114

図 27 市谷本村町遺跡の溝状遺構（越村 1999 一部改変） .....	133
図 28 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点の植栽痕群と藩邸内の土地利用（右は『加 藩江戸本郷屋敷総絵図』を基に作成） .....	134
図 29 東京大学本郷構内遺蹟 CRC-A 地点 SD11006（東京大学埋蔵文化財調査室） .....	139
図 30 汐留遺跡（龍野藩上屋敷南側）の遺構分布（模式図） .....	140
図 31 内藤町遺跡 1 次調査 B 区の遺構分布（新宿区内藤町遺跡調査会 1992） .....	142
図 32 『江戸藩邸図 藩邸内諸長屋配置図』（伊那市立高遠町図書館蔵） .....	147
図 33 東京大学本郷構内遺跡の金属生産関連遺構（上：農学部図書館地点、下：外来地点） .....	155
図 34 初台遺跡 055a 遺構（初台遺跡調査団 1993） .....	158
図 35 東大医科学研究所診療棟・総合研究棟地点出土の鉛塊（上：東京大学埋蔵文化財調 査室 2004、下：原 2002） .....	160
図 36 萩藩上屋敷と御用屋敷の屋敷境 『御府内沿革図書』（朝倉 1985）を基に作成 ..	173
図 37 小網町周辺の大木屋敷と下水道 『日本橋区史』（東京市日本橋区役所 1937）、『御 府内沿革図書』（朝倉 1985）を基に作成.....	175
図 38 工学部 14 号館地点の屋敷境遺構（東京大学埋蔵文化財調査室 2006 を基に作成） .....	212
図 39 本郷キャンパス西側の調査地点と加賀藩邸.....	213
図 40 『御府内沿革図書』（朝倉 1985）における加賀藩本郷邸西側の屋敷境 .....	214
図 41 本郷キャンパス西側 4 地点の屋敷境遺構（東京大学埋蔵文化財調査室 2008 ほか） .....	216
図 42 懐徳門地点 A 面 SA01（東京大学埋蔵文化財調査室 2011） .....	218
図 43 『江戸方角安見図』の加賀藩邸周辺（古板江戸図集成刊行会 2000 に加筆） .....	220
図 44 東大病院地区の屋敷割の変化（藤本 1990c を基に改変） .....	220
図 45 東大病院地区の調査地点と屋敷境想定ライン（外来診療棟地点検出 SA155 は 1829 年/文政 12 以降の屋敷境で、本図が想定した屋敷境は未検出） .....	221
図 46 火災後の復興までの仮設堀（SA1408）と冠木門（SB1335）（追川 2004d に加筆） .....	224
図 47 大聖寺藩邸南側と榊原邸北側の屋敷境遺構（東京大学遺跡調査室 1990 改変） ..	226
図 48 富山藩邸南側の屋敷境遺構（東京大学遺跡調査室 1990 を基に作成） .....	229
図 49 中診地点（東京大学遺跡調査室 1990）と外来地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2005） の屋敷境遺構（外来地点 SD62・SA120 は区画境遺構） .....	230
図 50 外来地点 SA155（東京大学埋蔵文化財調査室 2005） .....	231
図 51 CRC-A 地点遺構検出状況と屋敷境境溝.....	232



図 52 東京駅八重洲北口遺跡内の屋敷と屋敷境（『御府内沿革図書』は朝倉 1985 による） .....	233
図 53 東京駅八重洲北口遺跡 2 期・3 期の遺構配置（『慶長江戸絵図』、『武州豊嶋郡江戸 庄図』は千代田区 1988、『御府内沿革図書』は朝倉 1985 による） .....	240
図 54 文部科学省構内遺跡Ⅲ期の屋敷境遺構（文部科学省構内遺跡調査会 2004） .....	243
図 55 丸の内三丁目遺跡の屋敷境遺構（東京都埋蔵文化財センター1994） .....	244
図 56 丸の内三丁目遺跡の居住者の変遷（①・②：東京都埋蔵文化財センター1994、③・ ④：朝倉 1985 を基に作成） .....	246
図 57 丸の内三丁目遺跡 26 号溝（新）A（東京都埋蔵文化財センター1994） .....	247
図 58 丸の内三丁目遺跡 1 号溝（東京都埋蔵文化財センター1994） .....	248
図 59 有楽町二丁目遺跡 I 期の屋敷境遺構（武蔵文化財研究所 2006） .....	251
図 60 飯田町遺跡 1 期の検出遺構と 17 世紀代の遺跡周辺（①・③：千代田区飯田町遺跡 調査会 2001、②：朝倉 1985 より） .....	255
図 61 飯田町遺跡堀跡（千代田区飯田町遺跡調査会 2001 一部改変） .....	256
図 62 飯田町遺跡 6279 号遺構（千代田区飯田町遺跡調査会 2001 一部改変） .....	257
図 63 飯田町遺跡 2 期の検出遺構と 18 世紀代の遺跡周辺（上：千代田区飯田町遺跡調査 会 2001、下：朝倉 1985 より） .....	259
図 64 飯田町遺跡 6232 号遺構（千代田区飯田町遺跡調査会 2001 一部改変） .....	260
図 65 播磨赤穂藩森家屋敷 1 号遺構（港区教育委員会 2005）・『御府内沿革図書』（朝倉 1985） にみる調査地点 .....	262
図 66 『御府内沿革図書』にみる汐留遺跡（朝倉 1985 を基に作成） .....	264
図 67 屋敷境 A2 の遺構（1 号溝・4K-007）（汐留地区遺跡調査会 1996・東京都埋蔵文化 財センター1997 より） .....	266
図 68 仙台藩邸の屋敷境と表長屋・土坑の位置関係（東京都埋蔵文化財センター2000 を 基に作成） .....	267
図 69 屋敷境 B と屋敷境 F'1（東京都埋蔵文化財センター2000 より） .....	269
図 70 屋敷境 B の遺構（6L-006・6K-0796）（東京都埋蔵文化財センター2000） .....	270
図 71 6K-0796 石垣部分の断面図（左：5 段積み部分、右：2 段積み部分）（東京都埋蔵文 化財センター2000） .....	271
図 72 屋敷境 C の遺構（6J-500）（東京都埋蔵文化財センター1997） .....	272
図 73 屋敷境 F1 の遺構（6J-0545・7J-044・6K-0412）（東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成） .....	274
図 74 屋敷境 F'2（6I-407）（東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成） .....	275
図 75 6I-407 と仙台藩邸（東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成） .....	276

図 76 春日町遺跡第IV地点 1 号遺構（下 文京区遺跡調査会 2000 を加筆） .....	277
図 77 千駄ヶ谷五丁目遺跡 0725 号遺構（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997） .....	281
図 78 絵図にみる板倉邸・尾張徳川邸の西側屋敷境（東京都埋蔵文化財センター1997 より） .....	283
図 79 尾張藩・広瀬藩・大縄地の屋敷境遺構（東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成） .....	285
図 80 3-1 号溝と 3-1 号石垣（東京都埋蔵文化財センター1997 を基に改変） .....	286
図 81 3-2 号石垣（東京都埋蔵文化財センター1997 より） .....	287
図 82 内藤町 4 地点と 1 号・2 号遺構（新宿区教育委員会 2001） .....	289
図 83 新宿六丁目遺跡の屋敷境と藩邸範囲（東京都埋蔵文化財センター2005 を基に作成） .....	290
図 84 染井遺跡の屋敷境遺構（上：小川 2011、下：豊島区教育委員会 2006） .....	292
図 85 巢鴨遺跡（中野ビル地区） 1 号遺構（豊島区教育委員会 1994） .....	294
図 86 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 678 号出土遺物（東京大学埋蔵文化財調査室 1990） .....	303
図 87 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 678 号出土遺物（東京大学埋蔵文化財調査室 1990） .....	304
図 88 東京大学本郷構内遺跡中診地点 L32-1 出土遺物（東京大学遺跡調査室 1990） .....	305
図 89 東京大学本郷構内遺跡中診地点 L32-1 出土遺物（東京大学遺跡調査室 1990） .....	306
図 90 中央診療棟地点の池状遺構（東京大学埋蔵文化財調査室 1990 より） .....	309
図 91 中診地点池状遺構出土のカワラケと折敷（東京大学遺跡調査室 1990 より作成） .....	310
図 92 中診地点池状遺構出土の木簡（東京大学遺跡調査室 1990 より作成） .....	312
図 93 御殿下記念館地点 395 号遺物出土状況（東京大学遺跡調査室 1990） .....	315
図 94 御殿下記念館地点 395 号出土遺物（東京大学遺跡調査室 1990） .....	316
図 95 御殿下記念館地点 395 号出土遺物（東京大学遺跡調査室 1990） .....	317

## 表目次

表 1 1970 年代に発掘された主な近世遺跡.....	14
表 2 大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構の諸形態.....	32
表 3 初期の大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構.....	32
表 4 東京駅八重洲北口遺跡 2 期の屋敷境遺構の変化.....	37
表 5 初期の大名屋敷の外郭部の土地利用状況.....	57
表 6 屋敷境遺構の時期毎の諸形態.....	58
表 7 堀の時期と規模（屋敷種類の下屋敷には、上屋敷以外の屋敷を含む）.....	69
表 8 館林藩下屋敷・小石川御殿関連年表.....	90
表 9 大聖寺-高田藩邸の屋敷境遺構の変遷（単位はm）.....	92
表 10 空間毎の区画施設.....	101
表 11 区画場所による塀・柵の規模の違い（5 類に分類される遺構を対象とした）.....	103
表 12 『本郷邸図』での屋敷境・区画境の描写（[ ]内の色は『江戸御上屋敷絵図』での着色を表す）.....	116
表 13 区画施設の立地と区画遺構の高低差.....	122
表 14 CRC-A 地点の区画遺構と屋敷境遺構の比較.....	124
表 15 栽培・耕作遺構の種類と大名屋敷の空間構成.....	130
表 16 栽培遺構と考えられる溝状遺構.....	132
表 17 空間毎の栽培のあり方.....	136
表 18 栽培活動の諸様相（●は栽培遺構として検出例のあるあり方、○は遺構としては未検出ながら絵図で確認できるあり方）.....	143
表 19 大名屋敷跡遺跡の金属生産関連遺物・遺構.....	161
表 20 萩藩が藩邸建築に際して国許から廻漕した釘（作事記録研究会 2013 を基に作成）.....	166
表 21 『御府内備考』における「堀」、「大下水」とされた下水の一例（1 間=1.8m で換算）.....	176
表 22 初期に拝領した大名屋敷の例.....	178
表 23 家康・秀忠・家光の御成回数（佐藤 1981 より）.....	181
表 24 仙台城と仙台藩邸の御殿空間の構成変化（佐藤 1979 を基に作成）.....	182

表 25 朝鮮通信使の来聘時の饗応における供膳具（浜田・林 1989 を基に作成） .....	186
表 26 加賀藩邸の年中行事で下賜された料理（丸山 1993 改変） .....	188
表 27 加賀藩邸で年中行事に際して下賜される食事の場所と供膳具（『碁引之図』より） .....	189
表 28 遠山屯・庄七親子の購入した植木関係の品（岩淵 2007a を基に作成） .....	192
表 29 加賀藩下屋敷（平尾邸）居住の加賀藩士（1811 年/文化 8） .....	195
表 30 加賀藩下屋敷での鑄砲作業の組織 .....	202
表 31 大名屋敷跡遺跡の様相と類型（上） 大名屋敷の類型と変化（下） .....	204
表 32 本郷邸西側の屋敷境遺構.....	215
表 33 東京駅八重洲北口遺跡の拝領者.....	234
表 34 汐留遺跡内の屋敷境遺構と屋敷境（単位:m） .....	265
表 35 汐留遺跡 6L-006 の構造.....	268
表 36 屋敷境遺構一覧.....	297
表 37 東京大学本郷構内遺跡中診地点池出土カワラケの口径別資料数.....	308
表 38 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 395 号出土カワラケの口径別資料数.....	314

## 第1章 近世考古学と大名屋敷研究

### 第1節 近世考古学と大名屋敷研究

#### 1. はじめに

本論文は、近世都市江戸の大名屋敷に関する考古学的研究である。この研究では近世考古学の成果、殊に江戸の大名屋敷跡遺跡の調査成果を主な分析対象とする。

江戸の大名屋敷が埋蔵文化財として発掘調査の対象となったのは、1980年代半ば以降のことである。特に東京大学本郷キャンパス（東京大学本郷構内遺跡<sup>1</sup>）は、加賀藩邸や富山藩邸などの武家屋敷と寺院の跡地にあたっているため、1984年（昭和59）に発掘調査が開始されて以来、施設の建て替えに伴う埋蔵文化財調査が現在まで継続しており、調査成果は近世考古学研究の進展に大きく寄与してきた。

藤本強が東京大学本郷構内遺跡の発掘調査について、「大規模な土木工事、異様なまでの遺構の密集度、二桁あるいは三桁は違うのではないかと思われる遺物の量」に驚きの連続だったと述べたように（藤本1990b）、大名屋敷跡遺跡は日本考古学がそれまで対象としたどの時代の遺跡よりも、遺構や遺物が多い点を特徴とする。たとえば東京大学本郷構内遺跡では、これまでに179地点・103,000㎡（2015年10月の時点）を調査している。それでも約100,000坪（330,000㎡）の加賀藩邸（富山藩邸・大聖寺藩邸含む）と比べれば、調査面積は1/3弱である。調査地点には加賀藩邸以外にも含んでいるので、実際には屋敷全体の1/3に及ばない。

近年では汐留遺跡や尾張藩上屋敷跡遺跡のように、大名屋敷のかなりの部分を調査対象とした遺跡も加わったとはいえ、こうした傾向は開発行為に伴う事前調査を主体とする近世遺跡では、大名屋敷跡遺跡に限らず広く認められる。そのため近世考古学では、遺跡全体の構造を理解するために考古学の成果とともに、「文献史学、民俗学などの関連諸学との間に共通の場を持つこと」（藤本1990b）、則ち、学際的研究の視点と方法が他の時代の考古学研究に比べて重要となる。

考古学が歴史学との学際的研究を行うことについて、浜田耕作は次のように述べている（浜田1919）。

「考古学者が文献を利用し、之を尊重すべきことは今更云ふ迄も無い。併し歴史以前、若しくは文献の価値少なき原史時代の研究に際して、予め従来の歴史家が、後世の編纂物或は伝説等から研究した結果を、先入主として之に囚はれることは、最も避く可きことである。而かも是は我々の無意識的に、又意識的に最も陥り易き傾向である。斯う云ふ風では折角の考古学も、科学として新しい貢献を、広義の歴史の研究に寄与することが出来なくなり、其の存在の価値を失ふに至るであらう。我々は宜しく一の遺跡遺物の

---

<sup>1</sup> 東京大学本郷キャンパスは全域が本郷台遺跡群の範囲に含まれているが、本論文ではキャンパス内の遺跡を特に東京大学本郷構内遺跡と呼称する。

研究に当たっては、先づ純粋な考古学的方法によつて、遺物の時代の先後を決定し、型式の新古を順序し、果たして人種の差異を以て之を説明す可きが最も適當なるや否やを以て、説明するに若くはない。余計な人種民族の異同を其の解釈に充てるのは、徒に解釈を複雑にするのみである。而して最後に文献の告ぐる所を参考することは、我々考古学者の最も正しい態度であると、我輩は確信するのである」

谷川章雄は近世考古学研究にとっての学際的研究の方法として、「解釈の前提として、他の分野の成果を用いること」、「他の分野の着想を取り込んで、分析や解釈に利用すること」、「他の分野と資料（史料）を共有すること」の重要性を指摘している（谷川 1999）。

本研究は近世考古学のこうした学問的特徴を鑑み、考古学的方法論に依拠しつつも、谷川が指摘したような学際的研究を踏まえて江戸の大名屋敷の空間構成の解明を試みるものである。

## 2. 近世考古学と大名屋敷遺跡

江戸時代の遺跡や遺物への考古学的関心は、鳥居龍蔵が日本橋白木屋の工事現場に露出している地層の観察を行った際の考察（鳥居 1929）や、高等歯科医校（現・東京医科歯科大学）の建設工事で発見された地下室（翹室）に関する大場磐雄の考察（大場 1934）などが示すように、明治・大正期にもうかがわれる。戦後も河越逸行による近世人骨に関する研究（河越 1965）や、増上寺の徳川將軍墓の調査（鈴木尚・矢島恭介・山辺知行 1967）などがあるが、近世考古学を考古学の一分野として体系的に位置づける契機となったのは、1970年（昭和 45）の中川成夫・加藤晋平による「近世考古学の提唱」（中川・加藤 1970）である。

中川と加藤による『近世考古学の提唱』を契機に、その直後から近世考古学の研究が活発に行われるようになったわけではない。『近世考古学の提唱』後に行われた江戸を対象とした発掘調査には次のようなものがある（表 1）。

区	遺跡	調査年	概要
文京	動坂	1975	大名屋敷/旗本組屋敷
千代田	一橋高校	1975	墓地/町地
千代田	日枝神社境内	1975	遺物出土
港	伊皿子貝塚	1978	遺物出土

表 1 1970 年代に発掘された主な近世遺跡

動坂遺跡の発掘調査では江戸時代の土層は攪乱によって削平されていたが、動物遺体の種類や特徴が、この地にあった御鷹匠同心組の組屋敷の生活を反映したものであることが指摘された（動坂貝塚調査会 1978）。動坂遺跡や伊皿子貝塚の調査の主たる対象は縄文時

代の貝塚だったが、出土した近世の陶磁器や土器も遺物として採り上げられた点が研究史上重要である。動坂遺跡や日枝神社境内遺跡では、出土した近世の陶磁器が実測図と観察表によって提示された（佐々木達夫・佐々木花江 1975）。

近世遺跡が調査の主目的となった遺跡が一橋高校内遺跡だった。遺跡は墓地や町屋といった土地利用が異なる生活面が重なる低湿地遺跡で、出土遺物は陶磁器類のほか、漆器碗や下駄など多様な木製品、人骨など多岐にわたった。生活面と生活面の間層には明暦の大火による火災層が認められ、考古学的に近世都市・江戸を調査することの意義と方法論的可能性を示した遺跡である（都立一橋高校内遺跡調査団 1985）。

白山四丁目遺跡（白山四丁目遺跡調査会 1981）では、階段や竪坑を伴う大規模かつ大深度の地下室を検出しており、それらの機能についての考察が試みられている。平河町遺跡（千代田区教育委員会 1986）では出土遺物の実測図や観察所見の提示に加えて、陶磁器の編年案が提示された。

江戸を対象とした近世考古学は、1984年（昭和59年）に始まった東京大学本郷構内遺跡（加賀藩邸ほか）、麻布台一丁目遺跡（白杵藩邸・米沢藩邸）、真砂遺跡（唐津藩邸ほか）といった、大名屋敷跡遺跡の調査を機に本格化した。東京都心部遺跡分布調査団による遺跡調査や『江戸復元図』の刊行（東京都心部遺跡分布調査団・東京都教育委員会 1989）をはじめ、折からの好景気による都心部の再開発事業の進展によって、千代田区、港区、新宿区、文京区など江戸府内にあたる自治体でも近世遺跡の調査事例が増加した。各遺跡の調査組織では、多量の遺物や多様な遺構をどのように整理し、歴史的な位置づけを行っていくかが議論された。そうした中で、より多くの研究者間で情報の共有や議論の深化を目的として江戸遺跡情報連絡会（現・江戸遺跡研究会）が結成されたのは1986年（昭和61）のことである。

この時期の大名屋敷跡遺跡の研究は、多量の陶磁器・土器の組成や年代的な位置づけに関する研究の比重が高かったことが特徴としてあげられる。

近世遺跡から出土する遺物の中で主体的な地位を占める肥前製磁器に関しては、1965年（昭和40）の天狗谷窯跡の発掘調査以降、生産地遺跡での調査と研究が進展していた。生産地遺跡での研究成果と共に、限定的ではあったが全国の考古学的な成果（表採を含む）を加えて、1984年（昭和59）に佐賀県立九州陶磁文化館の企画展「国内出土の肥前陶磁」において、大橋康二が肥前陶磁器編年を提示した（佐賀県立九州陶磁文化館 1984）。

これは従来の美術史的な様式論とは異なる、考古学的な研究成果に基づくものだった。江戸の考古学的調査が本格化したのは、肥前製陶磁器の全国的な編年が整備された時期にあたり、大橋による編年案は江戸の近世遺跡の発掘調査における重要な指標となった。

大名屋敷跡遺跡は、出土する多量の遺物を「遺構一括資料」として把握できることに加え、火災や屋敷替えなどの記録から遺構一括資料の絶対年代を明らかにできる点で、消費地（江戸）の編年を策定する上で良好な遺跡だった。その成果は生産地や他の消費地（都

市遺跡)の研究にも反映されつつ<sup>2</sup>、都内各地で行われた発掘調査の進展とともに、より詳細なものへと発展し、江戸陶磁土器研究グループによるシンポジウム「江戸出土陶磁器・土器の諸問題」によって、統一的な編年としてまとめられた(江戸陶磁土器研究グループ 1992、同 1996)。また東京大学本郷構内遺跡では、遺跡内の遺物組成の変遷に基づいた編年が提示された(堀内秀樹 1997)。

1980年代半ばの研究初期段階に行われていた大名屋敷跡遺跡の発掘調査は、東京大学本郷構内遺跡や麻布台一丁目遺跡などのように、江戸城から比較的距離のある場所に立地する遺跡が多かった。再開発が行われた時期が、近世を研究対象とし始めた考古学の学的傾向と偶々一致したもののだが、明治時代以降いち早く開発が行われた都心部では、近世遺跡の大部分が既に破壊されていたと考えられていた面もある(東京都埋蔵文化財センター 1994)。1988年に行われた丸の内三丁目遺跡では、旧都庁舎による破壊は受けていたとはいえ、広範囲にわたって遺跡が良好に残っていた。とりわけ最も古い生活面では、江戸時代初期の遺構一括資料が出土した(東京都埋蔵文化財センター前掲)。

こうした大名小路や二の丸下での大名屋敷跡遺跡の調査が進展するとともに、16世紀末から17世紀中頃までの遺跡の様相が次第に明らかになった。関西近世考古学研究会が1997年に開催したシンポジウム『上方と江戸-近世考古学から見た東西文化の差異-』では、成瀬晃司と長佐古真也が天正から元禄年間後半までの陶磁器の様相を初めて体系的に提示した(成瀬・長佐古 1997)。

その後も該期の調査事例は増加しており、長佐古は千代田区内の遺跡から出土する遺物の様相を、慶長期から寛永期の編年として提示した(長佐古 2008)。堀内秀樹は17世紀代の遺物の出土状況からみた近世都市・江戸における陶磁器の消費とその社会的背景について考察している(堀内 2007)。

大名屋敷跡遺跡から出土する遺構一括資料には、高級品と目される国産陶磁器や輸入陶磁器も含まれている。出土陶磁器の品質と出土地点との関係に関しては、初期の大名屋敷跡遺跡の調査で既に考察が試みられていた(鈴木裕子・渡辺ますみ 1990、成瀬・堀内 1990)。高級磁器を主体とする遺物組成と宴会儀礼との関係については、堀内秀樹(堀内 2005b、堀内 2005c、堀内 2006、堀内 2007)や森本伊知郎(森本 2002)の研究へと展開する。

鍋島は藩窯として藩が生産と流通を管理し、将軍家への献上や大名家への贈答などに用いられた高級磁器である(大橋 2009)。江戸の鍋島の出土については水本和美(水本 1998)や成瀬晃司(成瀬 2003)によって集成が行われた。宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡では、鍋

---

<sup>2</sup> 東京大学本郷構内遺跡跡理学部7号館地点では、出土した肥前製磁器を大橋康二が生産地側からの視点で論じている(大橋 1989b)。



島が多量に出土した背景を、鍋島家と宇和島伊達家との姻戚関係を紐帯としたものと捉えている（東京都埋蔵文化財センター2003、大橋前掲）。神田淡路町二丁目遺跡では小藩・中藩の大名屋敷でありながら、鍋島をはじめ大皿や中国製磁器などが多量に出土した（四門 2011）。この遺跡は幕閣に就任する譜代大名が拝領することが多く、水本和美はそうした屋敷地の性格が遺物組成に反映していると捉えている（水本 2011b）。このように近年の調査では、大名家の石高の多寡とは異なる大名屋敷跡遺跡の様相が明らかになっている。

詰人空間の遺物組成については、成瀬晃司が 1682 年（天和 2）に焼失した黒田門邸（聞番らが居住した長屋）の遺物組成から、勤番武士が使用した什器の実態を考察した（成瀬 2000a、2000c）。内野正は尾張藩上屋敷跡遺跡で出土する柳茶碗や御小納戸茶碗などを、御小納戸役など藩邸内で勤務する藩士たちが用いた「市谷邸特有」の碗と位置付けている（内野 2005）。

江戸の旧地形については、関東大震災の復興局の調査や、『東京地盤図』（東京地盤調査研究会 1959）、『東京都地盤地質図：23 区内』（東京都土木技術研究所 1969）などでデータの蓄積が進められてきたが、近世考古学の発掘調査は旧地形を面的に把握できることと、屋敷の造成と都市開発との関係を明らかにできるという点で重要な知見をもたらした。

紀尾井町遺跡は溜池に向かってのびる谷に隣接した立地のため、台地上の遺跡であるにもかかわらず大規模な盛土造成の痕跡が認められた（千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988）。後藤宏樹は盛土造成に利用された土砂にローム以外にも、黒色土、シルトなど様々な土が用いられていることから、大名屋敷の造成が隣接する外堀の普請と同時期に行われた可能性を指摘した（後藤 2009、同 2011）。丸の内三丁目遺跡（東京都埋蔵文化財センター前掲）や和田倉遺跡（千代田区教育委員会 1995）など、大名小路・二の丸下周辺の名古屋敷跡遺跡の発掘調査によって、日比谷入江西岸の旧地形が具体的に明らかになった。2000 年代になると愛宕下遺跡（東京都埋蔵文化財センター 2009・2014）や、豊後日出藩木下家屋敷跡遺跡（港区教育委員会 2013）の調査によって、日比谷入江東岸付近の開発と武家地造成に関する知見が得られるようになった。

大名屋敷の造成と都市開発との関係に関する研究にはこの他、菊地真による長府藩邸に関する研究（菊池 2003）や、毎田佳奈子による西久保城山土取場に関する研究（毎田 2005）、江戸の土木技術の中で捉える谷川章雄の研究（谷川 2009）などがある。

### 3. 歴史学における大名屋敷研究

近世城下町研究は小野均（晃嗣）による『近世城下町の研究』（小野 1928）、『近世都市の発達』（小野 1934）を嚆矢とする。「同一郭内に存在した侍屋敷と町屋とは、都市計画の実施に際し、この郭を異にし、侍屋敷は郭内に、町屋は惣曲輪を有するものに於ては、

侍屋敷は内郭に、町屋は外郭に置かるるの傾向を有した」（小野 1928）という指摘でもわかるとおり、小野は近世城下町を都市計画（町割）によって形成され、「侍屋敷」と「町屋」とが純然と分けられたものであると位置づけていた。

小野の近世城下町研究は、都市の空間的特性にまで及ぶものだったが、大名屋敷は「侍屋敷」の中に一括されており、江戸の都市構造の中に特に位置づけられることはなかった。

大名屋敷を対象とした研究は、大熊喜邦による一連の研究から始まった（大熊 1916、大熊 1935）。大熊は大名屋敷の結構（平面構成）が、初期には「桃山時代の遺風」（大熊 1935）を伝えるような豪華なものだったことを、『向念覚書』の記述内容の検討などから示した。

「江戸初期の大名屋敷の結構は、三家を始め諸大名が江戸に其屋敷を構へてより屢將軍の御成りがあつたため、桃山時代の遺風を傳へた豪壮なる二重の櫓門、大棟門をその表門とし又別に華麗なる御成門を設け屋敷の周囲には長屋を繞らし家中の住居とし、長屋の外には高さ三尺餘の駒寄を建て門前には高八尺餘の木柵を建て、外構としてゐた。」（大熊 1935）

この一文が示すように、大熊は初期の大名屋敷の平面構成を將軍の御成を迎える機能との関わりの中で捉えている。こうした「桃山時代の遺風を傳へた」大名屋敷の景観は、幕府の住宅建築政策によって貞享年間（1684-1687年）を境に瓦葺きで塗家造（堅瓦張海鼠壁）の表長屋に囲われる型式へと固定化されていく（大熊 1921）。

内藤昌は大名屋敷の平面構成の変遷を、武家屋敷の設計規範と武家故実との関連から論じ、武家住宅研究に大名社会の多様性や幕府の大名統制といった歴史的要素を取り入れた（内藤 1966、内藤 1972）。

大名屋敷の機能の中でも特に武家儀礼を行う饗応の場に注目し、大名屋敷の接客空間の変遷を明らかにしたのが佐藤巧の研究である（佐藤 1963、1979）。佐藤は仙台城と江戸藩邸の接客空間の変遷を比較して、江戸藩邸では「上使をはじめ諸大名、旗本、諸寺院、諸家の使者等の接見、そしてその饗応といういわば横の関係が主要な部分を占めていた」ことから、大名屋敷の接客空間が享保年間（1716年-1735年）までに広間から書院へと変化することを指摘した（佐藤 1979）。

近世城下町が、家臣が城下に集住することを特徴とすることは既に小野の研究によって指摘されているところであるが、家臣団の集団居住と大名屋敷の空間構成を論じたのは西川幸治である（西川 1972）。西川は家臣団が藩邸内に居住する大名屋敷のあり方を、「近世の中央集権的な封建支配機構を明確に反映」したものと位置づけ、「大名居館」の外周に家臣団の長屋が巡るといふ屋敷の原形を、戦国時代の「野陣小屋」に求めている。

ただし西川の擬制的軍事都市論（西川前掲）と同様に、大名屋敷についても「野陣小屋」に類似しているのは屋敷の空間構成のみで、実態としての大名屋敷の防禦性については否定的である。むしろ西川は大名屋敷内での家臣団の集団居住を、江戸が巨大な消費都市となる要因として捉えている。

『江戸図屏風』（歴博本）の大名屋敷に描かれた櫓門が外様大名の屋敷にみられる点を、内藤が「一国一城の主たる意味の表現」と位置づけた（内藤 1972）のに対して、それが「防衛を固める城郭的性格を維持した」ものと捉えたのが波多野純だった（波多野 1996）。大名屋敷の櫓門は 1657 年（明暦 3）に禁止される（史料 1-1<sup>3</sup>）。

#### 史料 1-1

「明暦三酉年正月

覚

- 一 今度焼失之侍屋敷并町中わりかはり候所々可有之間、当座之小屋掛候共、成ほとかろくいたすへき事、
  - 一 同作事之儀、たとひ国持大名たりといふ共、三間梁よりひろき屋作可為無用、勿論かろく可被相立可有用意事、
  - 付、二階門可為停止、并こまよせハ先無用事、
- （略）」

波多野はこの家作制限を、城郭的な備えを江戸城に集中させ、大名屋敷に戦闘的な性格を認めない幕府の意志表示であるとする（波多野前掲）。

江戸という消費都市の経済的発展に大名屋敷が果たした役割は、出土遺物として大名屋敷の消費財を分析対象とする考古学にとっても極めて重要な問題である。伊達研次は江戸時代の経済的発展（大坂を中心とした全国規模の経済発展や、各藩の商品生産の盛行）の要因として、大名屋敷の莫大な消費支出をあげた（伊達 1935・1937）。その分析の基礎的データとして、伊達は譜代大名と外様大名の江戸屋敷の広さ、建物の規模や数、江戸屋敷に居住した人数などを比較した。

市川寛明は大名屋敷における経済活動の実態を、津山藩の寛政期と安政期の史料に基づき、詳細な項目毎に明らかにした（市川 1997）。伊達の研究が江戸と大名屋敷というマクロ経済的な視点に立脚した研究だったのに対して、市川の研究は入金、出金毎の個別の項目を具体的に分析したミクロ経済的な視点に立つものだったと評価できる。

原田佳伸は「1980 年代後半以降、東京都心部の再開発によって江戸の遺跡発掘が急増したことで、従来あまり注目されてこなかった江戸の武家地に関する研究が近年盛んになりつつある」として、江戸の武家地の研究動向を地域論、武家地の実態と幕府の政策論、政治的な「場」としての研究の 3 つに大別した（原田 1997）。

---

<sup>3</sup> 引用は『御觸書寛保集成』（高柳・石井 1934）による。

大名屋敷に居住する人びとの日常生活の実態は、従来の歴史学研究では等閑に付されてきた。御成や婚礼、葬儀などに伴う藩主の生活は種々の史料として残されているが、日常生活については浅野長勲の自叙伝（浅野 1937）のほかは少ない。藩士の暮らしについても同様である。島村妙子は紀州藩士酒井伴四郎の日記から、江戸と国許での生活と経済状況の分析を行った（島村 1972）。

こうした大名屋敷の藩主・藩士の日常生活に関する歴史学的研究も、大名屋敷跡遺跡の発掘調査を契機に進展した分野の一つである。

酒井伴四郎の日記は江戸東京博物館によって影印と翻刻が実施され（東京都江戸東京博物館都市歴史研究室 2010）、竹内誠・石山秀和による分析が行われた（竹内・石山 2010）。岩淵令治は酒井伴四郎が、初めての江戸参勤である上、臨時の勤番のため職務が少なかつたという点から、その日記をもって江戸勤番武士の日常生活の事例とすることは難しいとして、八戸藩の上級藩士である遠山屯・庄七の日記（岩淵 2007a、岩淵 2010b）や、庄内藩中級藩士である金井国之助の日記（岩淵 2007b）の分析から、勤番武士の交際関係や外部社会との関係を分析した。

大名屋敷内での食生活については、宮腰松子が岡部藩主阿部信発の食生活の一端を、日常食と行事食とにわけて明らかにしたほか（宮腰 1971）、正月や節句の際に藩主から藩士たちに供された加賀藩の料理内容に関する宮腰（宮腰 1984）や丸山雍成（丸山 1993）による分析などがある。

#### 4. 大名屋敷研究と近世考古学

1980年代以降の歴史学における大名屋敷を含む武家地研究に、近世考古学の進展が及ぼした影響は大きい（原田前掲）。しかし考古学にとっても、個別の遺構や遺物の性格付けや遺跡の歴史的解釈など多くの研究過程で、歴史学の研究成果が欠かせないものになっている。

大名屋敷跡遺跡の最初の発掘調査の一つである東京大学本郷構内遺跡では、加賀藩に関する藩政史料が豊富なことと、本郷邸の絵図面が数多く伝世していることから、史料や絵図資料を対象とした調査体制がつけられた（宮崎 1994b）。森下徹による山上会館地点の調査における育徳園に関する研究（森下 1990）、杉森哲也による御殿下記念館地点の調査における梅之御殿の構造に関する研究（杉森 1990）、細川義による理学部7号館地点の調査における八筋長屋に関する研究（細川 1989）など、調査地点毎に発掘調査とともに歴史的な調査が進められ、検出遺構と絵図との照合も積極的に行われた。

とりわけ吉田伸之が加賀藩本郷邸をモデルとして提唱した大名屋敷の二元的な空間構造（吉田 1988、吉田 1995）は、発掘調査成果の歴史的な位置づけを行う際に取り入れられた。それは御殿空間を対象とした御殿下記念館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）や詰人空間を対象とした理学部7号館（東京大学遺跡調査室 1989）のような、加賀藩邸を対象とした調査地点だけにとどまらず、加賀藩邸に比べて絵図資料が乏しい大聖寺藩邸

を対象とした中央診療棟地点（東京大学遺跡調査室 1990）においても、遺構や遺物のあり方からの空間構成の復元に際して積極的に活用された（藤本強 1990a）。

この時期の東京大学構内では、複数の調査地点の発掘調査が同時に進行中だった。各地点の考古学的調査と歴史学的調査の成果は、調査組織間の横断的な研究活動だった「三四郎考古学」によって共有されたほか<sup>4</sup>、文献・絵図史料の調査を担当した吉田伸之・宮崎勝美・杉森哲也が呼びかけ人となって、1986年（昭和 61）に藩邸研究会が立ち上げられた。この研究会は当初歴史学・考古学合をわせて 40 名以上の参加者があったというが、2 回目からは「文献・建築分野を対象を限定することにし、その後は参加者 10 名余りの小ぢんまりとした集まりとなった」という（宮崎 1994b）。研究分野から考古学が外れた理由は詳らかでないが<sup>5</sup>、これ以後も考古学と歴史学との学際的研究は個別の遺跡において進められていくことになる。

渋谷葉子は尾張藩麴町邸跡遺跡（尾張藩中屋敷）の歴史学的調査において、御殿の跡地が畑として保谷村徳右衛門なる農民に貸与されていたこと、それが 1746 年（延享 3）の市谷邸（同上屋敷）の火災によって麴町邸が居屋敷となったことで中断されたこと、1748 年（延享 5）に市谷邸に御殿が再建されたのを機に、農地の貸与が再開したことを明らかにした（渋谷 1994）。屋敷内の御殿跡地を畑として貸し出した詳しい経緯は不明だが、保谷村には尾張藩の鷹場があるという繋がりから、渋谷は尾張藩と出入関係が結ばれた百姓の貸与を推測している。発掘調査では畑遺構は未検出だったが、中屋敷とはいえ藩邸内に畑があり、それが百姓に貸し出されていたという大名屋敷の土地利用の一端が明らかになった。考古学では尾張藩麴町邸跡遺跡の遺物出土量の時期毎の変化が、史料にみられる麴町邸の変遷と同一傾向にあることが後藤宏樹によって明らかにされている（後藤 1994）。

江戸のゴミ処理については伊藤好一（伊藤 1982、伊藤 1983）、中部よし子（中部 1991）らによる研究が行われてきた。岩淵令治は龍岡町遺跡の歴史学的調査において、藩邸の下掃除を請け負った江古田村の孫右衛門という出入百姓が、屋敷との関係を維持するために刈豆上納を行うほか、屋敷の火災時には馬を預かり、火災・地震・屋敷移転の際には「大芥御掃除」として片付けを担っていたことを明らかにしている（岩淵 1995）。また大名屋

---

<sup>4</sup> 研究活動の成果は外部に向けて発表されていないが、筆者の在籍する東京大学埋蔵文化財調査室には当時の発表レジメが保管されており、その一端を知ることができる。

<sup>5</sup> 藩邸研究会が立ち上がった 1986 年（昭和 61）は、考古学、歴史学、建築学などの横断的な研究活動を志向した江戸遺跡研究会（江戸遺跡情報連絡会）が発足している。そうした点も影響していた可能性が考えられる。また、考古学でも江戸陶磁土器研究グループの活動のように、考古学的研究に特化した研究活動が行われている。

敷の江東地区へのゴミの搬出処分と、藩邸絵図に描かれた大名屋敷内のゴミ捨て場の位置や描写から、大名屋敷のゴミ処理のあり方を検討した（岩淵 2000、岩淵 2004）。

江戸の近世遺跡では動坂遺跡の調査で既に、遺物が出土する土坑について「放棄され、ある程度埋まった時点で、陶磁器等の捨て場とされたと思われる」というように（佐々木前掲）、出土遺物とゴミ穴との関係が注目されていた。麻布台一丁目遺跡では小林謙一が瓦質・土師質土器のクラスター分析を通して、使用から破損、廃棄といった遺物のライフサイクルの把握を試みた（小林 1986）。桜井準也は 1 号土坑に廃棄された魚骨の種類を層位毎に分類し、各層に共存する土器（カワラケ・焙烙・火鉢）の違いから、廃棄行為の季節性を明らかにした（桜井 1986）。真砂遺跡では小林克が遺物に遺構間接合が認められる背景を、一旦ゴミ捨て場に集められたゴミが、一杯になったところでまとめてゴミ捨て場に廃棄されるといった大名屋敷内のゴミの廃棄システムとして捉えている（小林 1987）。

岩淵が提示した大名屋敷内のゴミ処理システムは、近世考古学における廃棄論（小林 1991、小林 2007）との議論を可能とするもので、江戸遺跡研究会では 2 回にわたって『遺跡からみた江戸のゴミ』に関するシンポジウムを行い、近世考古学と歴史学から江戸の廃棄に関する議論を行った（小川望 2003、小川 2004）。

白金館址遺跡（高松藩下屋敷）の調査では、山形万里子が検出遺構の少なさを、江戸中心部の土地を入手するための原資としての下屋敷の機能との関係で論じている（山形 1989）。抱屋敷や抱地（以下、抱屋敷）に関する研究は、北原糸子・奥須磨子が戸塚村でのあり方を明らかにして以来、原田佳伸（原田 1990、原田 1997）、中野達哉（中野 1990）らによって進められている。

こうした江戸郊外の名古屋敷については、仙台坂遺跡での堀や味噌醸造遺構の検出（品川区遺跡調査会 1988、品川区遺跡調査会 1990）や、尾張徳川家下屋敷跡遺跡の「龍門瀧」の検出（新宿区戸山遺跡調査会 2003）、初台遺跡（渋谷区初台遺跡調査団 1993）での多量の鉄滓の出土など、近年の発掘調査によって多様なあり方が明らかになりつつある（古泉弘）が、府内の上屋敷に比べて調査件数や調査面積は未だ少数に留まっており、不明な点が多い。

水野原遺跡では歴史的調査で『川田久保御屋舗御長屋之図』が発見され、吉田正高がこの絵図に基づいて抱屋敷内の構造や、尾張藩の「大筒打方」の幕末の状況を検証した（吉田 2003）。水野原遺跡では化粧道具の出土や抱衣埋納遺構の検出（新宿区生涯学習財団 2002）があり、妻帯者が暮らしていたことが推測される。絵図に描かれているのは川田久保屋敷の南東部分のみのため、現時点では水野原遺跡の調査区には重ならないが、抱屋敷の居住者の一端が明らかにされたことは意義が大きい。今後の調査によって、考古学と歴史学から川田久保屋敷の実態が解明されることが期待される。

大名屋敷跡遺跡の調査と研究が、東京大学本郷構内遺跡や麻布台一丁目遺跡といった大規模な発掘調査から始められ、その後も尾張藩上屋敷跡遺跡や汐留遺跡のような調査範囲が屋敷全体に及ぶ発掘調査が続いたことが、江戸の考古学の急速な進展に寄与したことは

疑いない。それだけでなく、その学問的影響は市川が指摘したように、歴史学における武家地研究にまで及ぶものだった（市川前掲）。

しかし大規模な発掘調査が行われた大名屋敷の多くは江戸府内の上屋敷であり、特に上記にあげた諸遺跡は大大名の屋敷跡である。江戸の大名屋敷の大半は小・中大名の屋敷であり、むしろ大大名の屋敷は「特殊な事例」（宮崎 1994）といえる。郊外の下屋敷や抱屋敷を対象とした発掘調査では、御庭焼や庭園など藩主の嗜好を反映した遺構や遺物のほか、大規模な生産活動の痕跡や堀跡など、上屋敷とは異なる遺跡のあり方が明らかになりつつある。

東京大学本郷構内遺跡をはじめとした、大大名の大名屋敷跡遺跡の遺跡のあり方や、それに基づいて設定された遺物編年が、果たして江戸の大名屋敷全体に敷衍できるものであるかを改めて検討し、大名家の家格や大名屋敷の機能に即した遺跡のあり方を明らかにすることが、今日の大名屋敷跡遺跡研究に求められている。

## 第2節 本論文の構成

本研究は、大名屋敷の景観と諸活動に関する考古学的分析を通して、大名屋敷の歴史の変遷を明らかにすることを目的とする。

大名屋敷の景観では、屋敷境の諸形態と表長屋の出現、屋敷境としての堀の機能と消長、屋敷内の区画施設と大名屋敷の空間構成に注目した。大名屋敷内での活動に関しては、植物栽培、金属加工、宴会といった諸活動について注目した。本論文の構成は以下の通りである。

第2章と第3章は大名屋敷の屋敷境のあり方を検討する。

第2章では大名屋敷の屋敷境として構築された圍繞施設の形態と変遷を検証した。本研究では屋敷境遺構の形態を7つに分類した。最初期の大名屋敷を囲った施設は素掘りの溝で、塀や柵、生垣などが推測される簡易なものだった。17世紀になると屋敷境遺構の全形態が出現し、18世紀以降になると下水道を兼ねる石組の溝に収斂していく。

こうした屋敷境遺構の形態の変遷は、大名屋敷の圍繞施設が18世紀に画一化することを意味している。それに対して17世紀にみられる屋敷境遺構の多様性は、該期の大名屋敷の景観が多様なものだったことを反映したものである。本章では屋敷境遺構と屋敷外郭部の遺構のあり方から、17世紀の大名屋敷の外郭部の都地理上状況や景観を明らかにする。

第3章は屋敷境として屋敷の周囲を巡る堀のあり方を検証した。最初期の大名屋敷が江戸城の防衛を担っていたということは、内藤清成や青山忠成の屋敷地拝領の時期と特異性（馬で一駆けした範囲を屋敷地とするのは伝承としても）、あるいは『榊原氏系譜』などの大名家史料からうかがえる。しかし大名屋敷の周囲に堀が巡らされるようになるのは考古学的には概ね1630年代以降のことで、18世紀になると屋敷境としての堀は減少する。本章ではこうした堀の変遷の歴史的背景を、下水処理施設や権威を具象化する施設といった堀の機能との関わりから解明することを試みた。

第4章は大名屋敷内の御殿空間と詰人空間を区画するために構築された区画施設のあり方を検討する。大名屋敷は御殿空間と詰人空間という階層性を伴う二元的な空間構造をとるといふ、吉田伸之（吉田前掲）の構造理解は基本的に正しい。吉田による大名屋敷の二元的空間構造の重要な点は、藩邸と藩邸外部の社会との関係が、御殿空間と詰人空間という空間構成に相即している点にある。考古学的にも御殿空間と詰人空間とでは、遺物組成や遺構のあり方において異なる様相を呈している。

藩邸内の区画施設は、御殿空間・詰人空間という藩邸内のそれぞれの社会を区分すると同時に結び付ける施設であるが、絵図では単純な線で表現されることが多く、実態は詳らかでない。本章では区画遺構の分析から、大名屋敷内の階層性が区画施設にどのように具象化されていたかを検討する。



第5章は大名屋敷内の生産活動としての植物栽培をとりあげる。大名屋敷跡遺跡では少例ながら植物栽培に関連する遺構（植物栽培遺構）の検出例がある。栽培遺構の形態や絵図などから、屋敷内では花壇、畑、花・果樹栽培といった植物栽培が行われていたことが推測される（水田遺構は未検出）。

大名屋敷での植物栽培に関しては、御殿空間内で行われた藩主の嗜好に関連した栽培については絵図や史料でその一端を窺い知ることができるが、郊外の下屋敷や抱屋敷で行われた野菜生産に関しては不明な点が多い。本章では栽培遺構と大名屋敷の空間構成の関わりから、御殿空間、詰人空間のそれぞれで行われた植物栽培（畑での耕作を含む）の実態を考古学的に検証した。

第6章は金属加工に関連する遺構と遺物のあり方をみる。ただし遺構と遺物がセットで認められる例はほとんどなく、生産の実態は不明な点が多い。近年、江戸郊外の大名屋敷跡遺跡では、大規模な金属加工の存在をうかがわせる調査成果が得られている。本章では府内の大名屋敷で行われた小規模な金属加工と、郊外の大名屋敷で行われた大規模な金属加工のあり方とを比較し、それぞれの生産活動の背景について考察する。

第7章は本論文の終章である。ここでは第2章から第7章までに分析した大名屋敷跡遺跡の景観や生産活動といった様相から、大名屋敷跡遺跡の8つの類型を提示した。本章ではこれらの変遷と歴史的背景を考察する。

第8章は資料編である。第2章・第3章の論考の基礎となる大名屋敷跡遺跡の個々の屋敷境遺構、御殿空間における宴会儀礼に関連する遺物組成の特徴をまとめている。適宜参照されたい。



## 第2章 大名屋敷の屋敷境(1) 屋敷境の諸形態と表長屋の出現

### 第1節 大名屋敷の屋敷境と表長屋

#### 第1項 大名屋敷の表長屋をめぐる研究のあゆみ

大名屋敷の平面構成に関する研究は、大熊喜邦による江戸時代の住宅に関する一連の研究を嚆矢とする（大熊 1916、大熊 1935）。大熊は『向念覚書』が伝える元和・寛永期（1615-1645年）の豪華絢爛とした大名屋敷が、格式・防火・儉約を柱とした家作制限を受けていく中で、貞享年中（1684-1687年）に「瓦葺きで塗家造り、輿瓦張り造り」の長屋で囲まれるものへと変化したことを指摘した（大熊 1921）。

屋敷の周囲を囲む長屋に家臣が集住する江戸の大名屋敷のあり方を、「あたかも城郭を囲繞せる城下町を髣髴せしむる」ものと捉えたのが伊達研次である（伊達 1935・1937）。江戸時代の経済的発展を江戸の大名屋敷との関係で論じた伊達は、江戸が消費都市として発展した要因として、大名屋敷の家臣の集住と貨財の集中が大きかったことを指摘した。

大名屋敷の平面構成と戦国時代の野陣との類似性から、大名屋敷の防禦性に言及したのが西川幸治だった（西川 1972）。もっとも西川は、長屋が屋敷を囲む大名屋敷の平面構成に野陣の防禦性を見出しながらも、夜盗に侵入される例を引き合いに、実態としては防禦性を伴うものとは捉えていない（西川 1972）。これは西川の近世城下町に対する「擬制的軍事都市」に対応した捉え方だと思われるが、家臣団の集団居住が江戸の経済的発展を促したという点で長屋が囲む屋敷を評価する点においては、伊達の研究に通じるものである。

内藤昌は武家屋敷と武家故実との関わりの中で、大名屋敷の平面構成の変遷を捉えている（内藤 1972）。大名屋敷の殿舎平面については、1657年（明暦3）の大火後の家作制限によって元禄期以降に固定化するようになり、この固定化が大名屋敷の外観の固定化を伴って、大名屋敷の景観が単一なものになった要因とした（内藤前掲）。

佐藤巧は仙台城と江戸藩邸の接客空間である広間が、国許では家臣との対面機能を重視した対面所に、江戸藩邸では接客機能をより重視した書院へと変化することを指摘するなど、御殿の間取りを、単なる部屋の集合体として捉えるのではなく、接客儀礼における役割との有機的なつながりから捉えていった（佐藤 1963、1979）。

このように大名屋敷の平面構成に関する研究は、建築史を中心に進められていたが、1980年代半ばに始まった江戸の発掘調査によって、歴史学による武家地研究として急速に進展していくことになる。

吉田伸之は加賀藩上屋敷（本郷邸）をモデルに、大名屋敷の空間構成が御殿空間と詰人空間という二元的構造からなることを明らかにした（吉田 1988）。吉田による大名屋敷の二元的空間構造は、そのモデルとなった加賀藩上屋敷を対象とする東京大学本郷構内遺跡

の発掘調査をはじめとして多くの遺跡の調査において活用されてきた（宮崎勝美 1994）。あくまでも 100 万石の大大名である加賀藩の上屋敷をモデルとしたものであり、全ての大名屋敷跡遺跡に「固定的な図式」（宮崎前掲）として敷衍できるものではない。近年、小藩・中藩の大名屋敷跡遺跡の調査例が増えてきており、この点は大名屋敷跡遺跡研究の課題となる。

東京大学本郷構内遺跡では、最初の調査地点である御殿下記念館地点で既に梅之御殿に附属する長局を調査しており（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）、同時期に実施した理学部 7 号館地点でも上級藩士が暮らす八筋長屋を調査するなど（東京大学遺跡調査室 1989）、1980 年代半ばから勤番長屋の調査を実施している。成瀬晃司は 1682 年（天和 2）に焼失した黒田門邸（聞番らが居住した長屋）の遺物組成から、勤番武士が使用した什器の実態を考察した（成瀬 2000a、2000c）。しかし屋敷外郭部に構築された表長屋は多くの遺跡で調査区外となることが多く、検出例に限られているのが現状である。

後藤宏樹は千代田区内の大名屋敷跡遺跡を対象に屋敷外郭部の遺構分布状況を検証し、屋敷外郭部のゴミ処理場の利用が、大名屋敷の「塵芥廃棄処理システムの整備」が未整備だったことに起因していることや、表長屋が慶長期から元和期（1610-20 年代）に出現することを指摘した（後藤 2011）。

西澤明は汐留遺跡（仙台藩邸）で検出した 7 棟の長屋の基礎構造を比較して、根固め石と砂利を伴う礎石からなる構造が表長屋など限定された場所で用いられていることから、他の長屋とは異なる上部構造、具体的には 2 階建ての長屋だったことを推測した（西澤 2003）。

東京大学本郷構内遺跡龍岡門別館地点では、現存する石垣に残る下水の吐水口と井戸の位置から、表長屋の遺構と絵図との照合が試みられている（香取祐一 2004）。

## 第 2 項 大名屋敷にとっての表長屋

大名屋敷の全体図で表長屋の配置をみてみよう。1840 年代半ばの加賀藩上屋敷（本郷邸）を描いた『江戸御上屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館蔵）では 86 宇の長屋が描かれている（図 26）。そのうち屋敷境に隣接する表長屋は 13 宇（15.1%）、屋敷境に巡る塀を兼ねた長屋（長屋塀）は 9 宇ある（同 10.4%）。

尾張藩上屋敷（市谷邸）では 1864 年（元治元）の『御屋形御長屋之図』（徳川林政史研究所蔵）には長屋が 44 宇存在する（村田香澄 2002）。そのうち表長屋は 21 宇認められる。これは長屋全体の 47.7%である。

小浜藩上屋敷では1854年(嘉永7)の『昌平橋御上屋鋪御長屋図』(小浜市立図書館蔵)に関する斉藤悦正の研究を参照すると、屋敷内には14宇の長屋が描かれている(斉藤2011)。そのうち表長屋は4宇なので28.6%である。

田中政幸は加賀藩本郷邸を例に、「御貸小屋」(長屋)の形態と居住者の関係を分析して、長屋配置がそこに居住する藩士の身分や格式に規定されることを明らかにした(田中1995)。藩士の身分や格式による規定は長屋内の専有面積にも及んでいるので、表長屋の多寡が長屋全体の収容人数に対する割合を直接に反映するものではないが、表長屋よりも詰人空間内部の長屋の方に、多くの藩士たちが居住していた。つまり、屋敷のぐるりを囲む長屋塀は大名屋敷の景観を特徴づける施設ではあるが、藩士の収容施設としては決して主体的な位置を占めていたものではなかったのである。

上記にあげた大名屋敷の中では、加賀藩本郷邸が表長屋の割合が低い。敷地面積を比較すると、加賀藩本郷邸の敷地面積が88,482坪余(『諸向地面取調書』、1856年/安政3)、尾張藩市谷邸が75,205坪余り(同じく『諸向地面取調書』)、小浜藩上屋敷は6,567坪(『御屋形御長屋之図』の記載)である。広大な敷地上を上屋敷として拝領した大藩では、詰人空間内に多くの長屋を建築することが可能で、それが長屋塀の割合を相対的に低いものとしていると考えられる。

渋谷葉子によれば1855-56年(安政2-3)の尾張藩には、上屋敷の他に42箇所の屋敷地があった(渋谷2006)。上屋敷、中屋敷、下屋敷、蔵屋敷のように屋敷の機能が異なるものもあるが、拝領屋敷に収容しきれない藩士の居住地として獲得した抱屋敷が多く、上屋敷をはじめとした拝領屋敷内の長屋だけでは藩士を収容しきれなかった実態がうかがえる。

なお、本論文では長屋塀を大名屋敷の周囲を巡ると表現しているが、実際には表長屋は大名屋敷の全周には及んでいない。このことについて宮崎は『匠明』の「当代屋敷ノ図」や『伊与殿屋敷図』(福井藩松平家上屋敷に比定)の分析から、「築地塀こそが正式で伝統的な屋敷囲いであり、家臣団の住居を兼用する表長屋は略式で薄礼のものであるとの意識」によって、表門に連なる塀に、長屋塀を構築することを避けたとする(宮崎前掲)。

## 第2節 初期の大名屋敷の屋敷境

### 第1項 屋敷境遺構の諸形態

大名屋敷跡遺跡で検出する屋敷境の形態は、溝状を呈するもの、柱穴や土坑が列をなすもの、土留の3つに分けられる。

溝状を呈する屋敷境遺構には、素掘りの溝状遺構（これを1類と呼ぶ。以下同じ。）と石組で護岸された溝状遺構（2類）とがある。溝の護岸には杭や板によるものと、石組によるものがある。ここでは杭・板による護岸は1類に含めておく。石組護岸の多くは築石を用いた石垣積みだが、切石を積んだものもある。どちらも2類に分類する。また護岸の有無に関わらず、幅や深さが1.5mを越える溝状遺構を堀（6類）とする（第3章）。

柱穴や土坑が等間隔で並ぶ屋敷境は、柱穴列（4類）と土坑列（5類）に分けることができる。これらは柱穴または土坑状を呈した掘り方で、これを控柱とした塀や柵が推測される。土坑列による屋敷境（5類）は、主柱と控柱の掘り方が一つとなって土坑状を呈したものである。柱穴列が隣接して2条検出する場合も、造り替えのほかに、主柱と控柱の二条一対だった可能性がある。

溝状遺構の底部に柱穴を伴う屋敷境遺構（3類）は、柱穴部分が控柱の掘り方、溝部分が塀の掘り方にあたる。しかし後代の削平によって遺構の検出時には既に消失していることも考えられるので、塀と柵を考古学的に区別することは難しい。

土留の屋敷境は、隣り合う大名屋敷に高低差がある場合に構築される石垣や土塁である。これらは7類として一括する。

以上のように溝、塀・柵、土留の屋敷境は、遺構の形態として7つに分類できる（表2、図1・図2）。開発に伴う事前調査として実施されることが多い近世考古学の発掘調査では、調査範囲は開発予定地に規定される。そのため屋敷の内外にまたがる屋敷境のあり方は十分な調査ができないことが多い<sup>6</sup>。資料編に各大名屋敷跡遺跡で検出した屋敷境遺構の特徴をまとめている。

大名屋敷の屋敷境に構築された圍繞施設は、単独の施設からなっていたとは限らない。仙台坂遺跡（仙台藩下屋敷）では堀と平行する柱穴列が検出しており、塀の内側に塀・柵を伴っていたことがわかる（品川区遺跡調査会1990）。その一方で尾張徳川家下屋敷跡遺跡（東京都埋蔵文化財センター2008）や駕籠町第4地点（大成エンジニアリング2012）

---

<sup>6</sup> 明治時代以降に屋敷割を大きく変えたことで、江戸時代の道とその両側の屋敷境を検出した調査例が東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点である（資料編図47）。第3章では屋敷境の造り替えをこの部分の遺構の変遷から検証した。

のように、絵図には屋敷境として堀と共に土居・矢来、あるいは藪が描かれているにも拘わらず、発掘調査で検出したのは堀（6類）のみという場合もあり、後代の削平の影響が大きいことがうかがえる。

形態	特徴
1	素掘りの溝。土留に杭や板が用いられる。
2	石組の溝。
3	溝の底部にピットが設けられている。
4	ピット列。
5	土坑列。
6	幅、深さが1.5m程度以上ある。
7	土留。

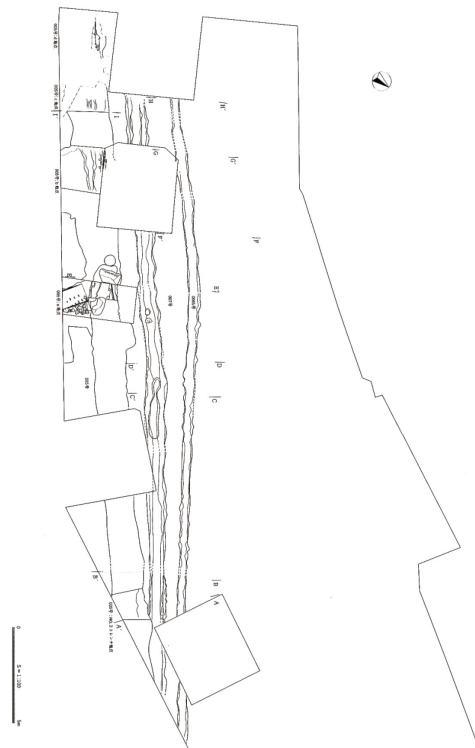
表 2 大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構の諸形態

遺跡・遺構	年代	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	不明
東大設備管理・3号溝	1580-18世紀前半	○							
飯田町・堀	1580年代-1657年						○		
内藤町4・1号溝	1580-17世紀前半	○							
内藤町4・2号溝	1580-17世紀前半						○		
八重洲北口 2期・1165号	1600頃				○				
文科省構内 Ⅱ期・006b	1600頃	○							
丸の内三 5面・26号(旧)	1615-1624年								○
東大病棟2 B3・ピット列	1616-1620年代				○				
東大病棟2 B2・SD009	1620-1630年代			○					
丸の内三 3面・26号(新)	1630年代						○		
文科省構内 Ⅲ期・005	1630年代						○		
有楽二・S113系溝	1630-1640年代						○		
尾張上3・3-1溝、4-1溝	-1657年						○		

表 3 初期の大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構

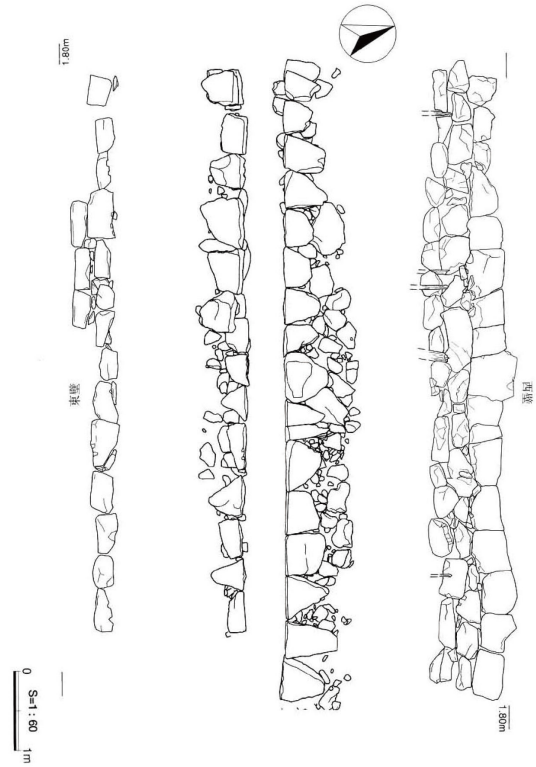


1類 素掘りの溝



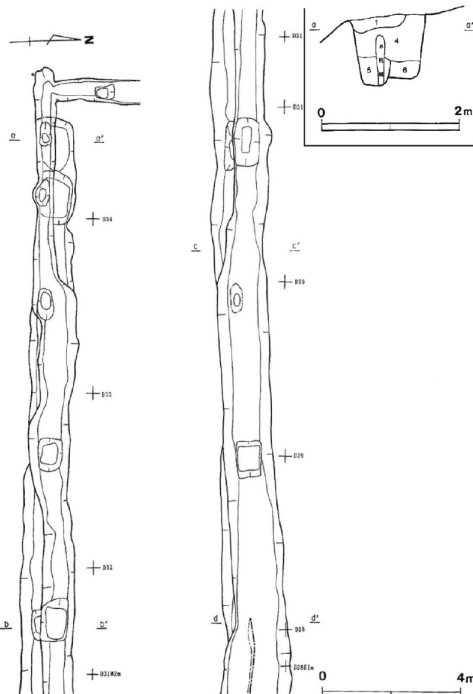
文部科学省構内遺跡 006b( 文部科学省構内遺跡調査会 2004)

2類 石組の溝



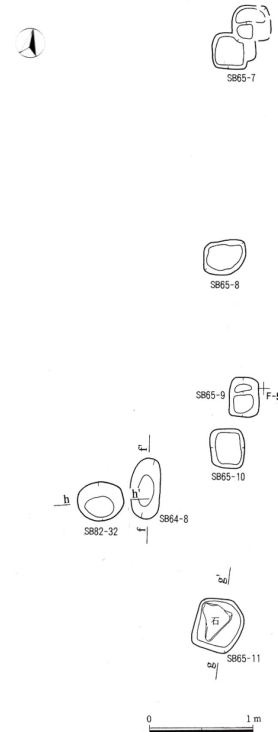
八重洲北口遺跡 0106-b( 東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003)

3類 素掘りの溝に柱穴



東大構内遺跡中診地点 1号溝 ( 東京大学遺跡調査室 1990)

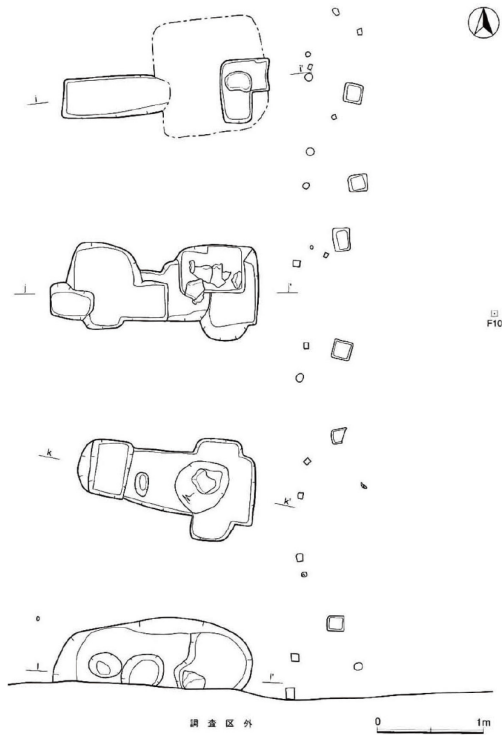
4類 柱穴列



東大構内工 14 地点 64 号・65 号 ( 東京大学埋文調査室 2006)

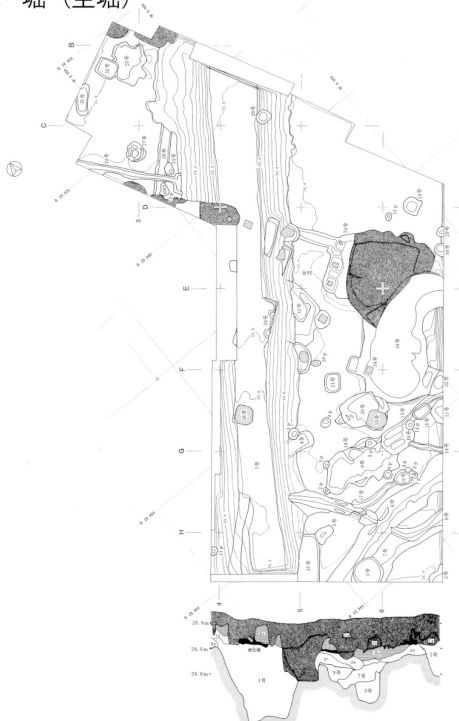
図 1 屋敷境遺構の諸形態 (1) 1類-4類

5類 土坑列



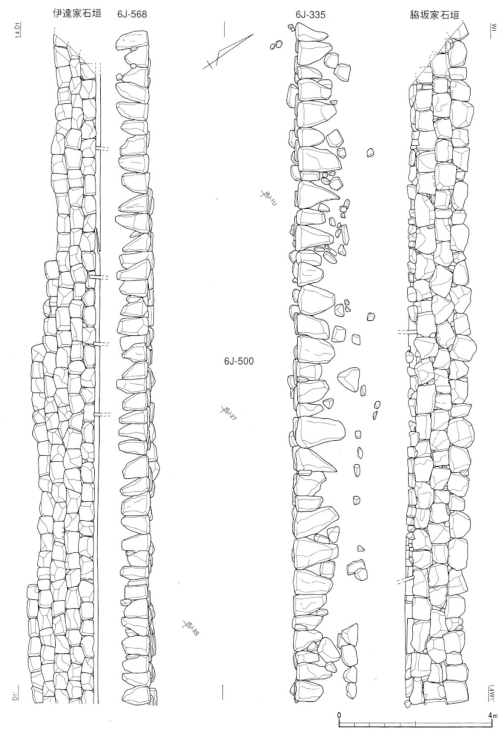
東京大学構内遺跡外来棟地点 SA155( 東大埋文調査室 2005)

6類 堀 (空堀)



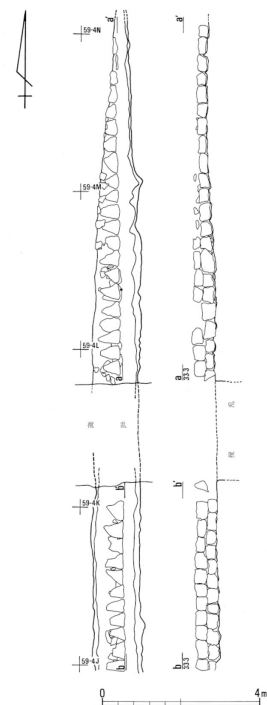
巢鴨遺跡中野地区 1号遺構 (豊島区教育委員会 1994)

6類 堀 (水堀)



汐留遺跡 6J-500( 東京都埋蔵文化財センター 1997)

7類 土留・土塁



尾張藩上屋敷跡遺跡 3-2号石垣 (東京都埋文センター 1997)

図 2 屋敷境遺構の諸形態 (2) 5類-7類

## 第2項 最初期の大名屋敷の屋敷境

江戸の大名屋敷は家康が1590年（天正18）に江戸へ入府した直後に実施した、家臣団への知行割<sup>7</sup>（中野達哉2011）に伴う賜邸を嚆矢とし、1600年（慶長5）前後になると、家康へ恭順を誓う大名の参府や証人の差し出しへの見返りに、屋敷地が与えられるようになる<sup>8</sup>。その後、参勤交代が1635年（寛永12）の武家諸法度の改訂版（寛永令）によって制度化され、1620年代半ばから1630年代半ばにかけて大名妻子が江戸に居住するようになり（丸山雍成2007）、大名の本拠としての大名屋敷（横田前掲）が江戸に成立する。

表3は17世紀前半までの屋敷境遺構の様相が明らかな大名屋敷跡遺跡である。これをみると、初期の大名屋敷の屋敷境をなす遺構の形態には、素掘りの溝（1類）、底部に柱穴を伴う溝（3類）、柱穴列（4類）、堀（6類）があることがわかる。

1590年（天正18）に拝領した屋敷のうち発掘調査が行われている屋敷には、内藤清成邸（1590年・内藤町遺跡）、榊原康政邸（1590年・東京大学本郷構内遺跡、龍岡町遺跡）、内藤家長邸（1591年・文部科学省構内遺跡）がある。そのうち東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点（榊原康政邸）では、屋敷境遺構が1類（素掘りの溝）、6類（堀）、2類（石組溝）へと変化することが層位的に明らかになっている（東京大学遺跡調査室1990）。3号溝は上幅1.0m、下幅0.3m、深さ0.3-0.7mの逆台形を呈した溝状遺構で、土留施設の痕跡を伴わないことから1類（素掘りの溝）である（資料編図47）。考古学的には上限年代、下限年代が共に不明なため、榊原家拝領以前の屋敷に伴う施設という可能性も否定できない。しかし東京大学本郷構内遺跡や龍岡町遺跡では、江戸時代以前の明確な遺構は未検出であるため<sup>9</sup>、表3では3号溝を榊原康政邸の最初の屋敷境と位置付けた。

文部科学省構内遺跡（内藤家長邸）は溜池の河口左岸の高台に立地しており、17世紀初頭に台地斜面部が切り土によって屋敷地として造成された。Ⅱ期の006b遺構は幅1.2m、

---

<sup>7</sup> 特に大知行取とされる家臣の知行割に関しては秀吉による介入があったことが川田貞夫によって指摘されている（川田1962）。

<sup>8</sup> 前田家では1600年（慶長5）に芳春院が江戸に赴く。これについて『天寛日記』には「(略) 芳春院をして江戸に赴て人質として、前田対馬守・横山山城守・太田但馬守・山崎長門守等をして、おのゝ其子をもつておなじく質となして江戸にゆく。是列国の主人質のはじめなり」とする。細川家では光（忠興三男）を証人として江戸に送っている。「慶長五年庚子正月忠興遣其三男光於江戸為質」（『細川家記』）。史料はともに『東京市史稿 市街編第二』（東京市役所1914）による。

<sup>9</sup> 隣接する東京大学本郷構内遺跡第2病棟地点や茅町二丁目遺跡では板碑が出土しており、周辺地域が中世から開発が行われていたことを示している。3号溝が江戸時代以前の屋敷に伴う施設だった場合、榊原邸の拝領時の屋敷境は6類（堀）だった可能性もある（第3章）。

深さ 1.3mの素掘りの溝状遺構（1 類）で、出土遺物から 17 世紀初頭に廃絶したことがうかがえる（資料編図 54）。

内藤町遺跡（内藤清成邸）1 号溝は上幅 1.2-1.6m、下幅 0.5-0.9m、深さ 0.7m-0.8mの溝状遺構（1 類）である。出土遺物には大窯期の坏や肩衝茶入と、初期伊万里が共存する。この屋敷境は 1654 年（承応 3）の玉川上水の開削後に 2 号溝へと変化する。2 号溝は幅 1.8m、深さ 0.9-1.6m の堀（6 類）である（資料編図 82）。

天正-文禄期（1590-1596 年）の大名屋敷に関する史料は乏しく、該期の大名屋敷の実態は歴史学的には不明な点が多い。『家忠日記』（竹内理三編 1979）の記載からも屋敷の具体的な位置を知ることはできないが、大名家の屋敷拝領に関する伝承では、例えば『榊原氏系譜』（東京市役所 1914）に池之端屋敷が「平山ノ砦ニ可成地也」、井伊直政邸が「西丸ニ続平山之砦ニ可成地也」とあるように、該期の大名屋敷が江戸や江戸城防衛を強く意図したものであったことがうかがえる（史料 3-3）。

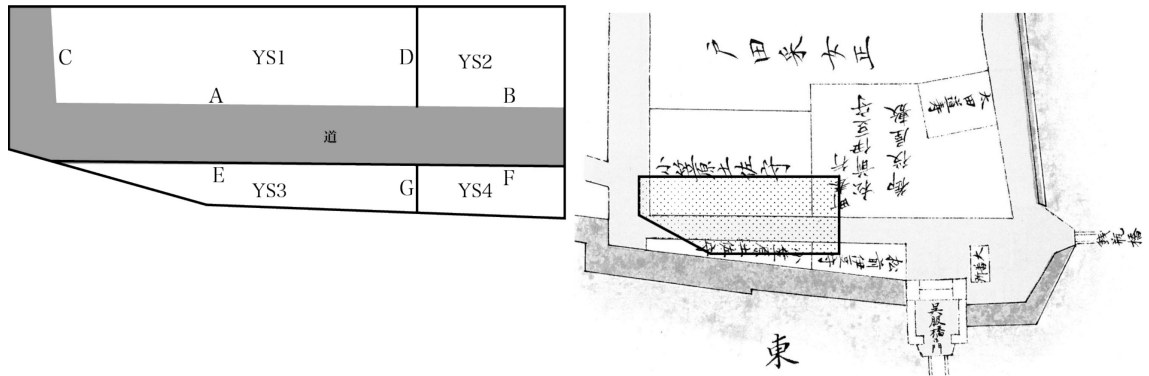
考古学でも該期の大名屋敷跡遺跡の調査例は少ないため実態は詳らかではないが、現段階の発掘調査の成果でみる限り屋敷境に構築された施設は素掘りの溝であり、おそらくその内側には柵や塀が伴っていたと思われる。少なくとも堀のような防禦性を有した施設は認められない。

### 第 3 項 東京駅八重洲北口遺跡の屋敷境の変遷

東京駅八重洲北口遺跡は呉服橋門内の大名小路東端に位置する遺跡である。大窯 4 期の遺物が出土する 1 期には、キリシタン墓地とともに、上幅 1.1-2.4m と不定形な素掘りの区画溝がある。金箔瓦も出土するが、屋敷の性格は不明である。

本遺跡で確実に大名屋敷が営まれるようになるのは 2 期以降である。2 期は 2-1 期から 2-4 期に細分される。2-1 期は 1264 号の出土遺物から 1605-1610 年に、2-2 期は 0417 号の出土遺物から 17 世紀第 2 四半期に位置付けられる。2-3 期は上水関連遺構と『玉川上水樋線図』（承応年間、1652-1654 年）との照合から、1654 年（承応 3）-17 世紀第 4 四半期まで、2-4 期の下限は 1698 年（元禄 11）の火災である（千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003）。

2 期の調査区には道路を挟んで 4 軒の屋敷が存在した。これを屋敷 YS1～屋敷 YS4 と呼ぼう（図 1）。そのうち屋敷 YS1 と屋敷 YS2 の屋敷境 A・B・D の屋敷境遺構の変遷をまとめたのが表 4 である。



『御府内沿革図書』(元禄11年以前之形)に加筆

図3 東京駅八重洲北口遺跡2期の屋敷割(『御府内沿革図書』は朝倉1985より)

期	屋敷境A	形態	屋敷境B	形態	屋敷境D	形態
2-1期	1165	4	1165	4	1875・2010	4
	↓		↓		↓	
	1205	4	1205	4	↓	
	↓		↓		↓	
	1140(控柱 1406)	4	1140(控柱 1406)	4	↓	
	↓		↓		↓	
2-2期	1161	4	?	3・4?	1770	4
	↓				↓	
	0417	1	?	3・4?	↓	
	↓				↓	
2-3期・2-4期	0106	2	0106-b	2	↓	

表4 東京駅八重洲北口遺跡2期の屋敷境遺構の変化

2-1期の屋敷境は屋敷境A・B・Dともに1140号を除いて4類（柱穴列による屋敷境遺構）である。1140号は3類（溝に柱穴を伴う屋敷境遺構）だが、1406号と共に支柱-控柱の関係を有していた可能性がある。したがって該期の屋敷境には塀や柵が設置されていたことがわかる。

2-2期は屋敷境AとDは1161号、1770号に造り替えられるが、屋敷境の形態は4類（柱穴列による屋敷境遺構）のみである。屋敷境Bは未検出である。

2-3期、2-4期になると屋敷境AとB、すなわち道との屋敷境に構築された遺構は2類（石組溝による屋敷境遺構）になる。屋敷境Aの0106号は幅0.45m、深さ最大0.7mの石組溝である。護岸は築石を用いた石垣積みで、屋敷側は安山岩製の築石が用いられているのに対して、道側はグリーントフの築石が用いられている。積み方も屋敷側の方が丁寧である。溝の底部には板状の底石が敷設されている。屋敷境Bの0106-b号は屋敷境Aから続く屋敷境である。規模は同じだが、護岸には両側とも安山岩製の築石が用いられており、溝の底部に底石はないというように、構造は屋敷境Aの0106号とは異なっている。2-3期に構築された石組溝による屋敷境の構造が、屋敷境Aと屋敷境Bとで異なるのは、屋敷境の構築が屋敷毎に行われたことを反映したもののだろう。

報告書では2-3期の屋敷境遺構である0106-b号が既に2-2期から機能していた可能性を指摘している（千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会前掲）。この場合、0106号と0106-b号の構造が異なる背景を、構築時期の違いとして捉えることが可能である。しかし石組溝が持つ導水性を鑑みれば、2-2b期の屋敷境が屋敷境Bのみ溝になっていたという状況は考えにくい。恐らく0106-b号は検出面が示すように2-3期に構築された遺構で、2-2期の屋敷境Bについては未検出ながら、塀・柵となる屋敷境遺構（3類・4類）が構築されていたのだろう。

東京駅八重洲北口遺跡では、16世紀末の屋敷は素掘りの溝（1類）で区画され、17世紀初頭の大名屋敷では柵か塀（3類・4類）が屋敷境として構築され、それが1650年代（2-3期）に石組溝（2類）へと変化した。こうした屋敷境遺構の変化が、大名屋敷の景観にどのような影響をもたらしたかを検証してみよう。

### 第3節 屋敷境と表長屋

#### 第1項 屋敷境遺構の形態と表長屋のあり方

##### (1) 2-1期

礎石建物を3基(1257号・1137・1127号)検出している(図4-上)。検出状況は良好  
とはいえないが、礎石の配列から一連のものであるとされている(千代田区東京駅八重洲  
北口遺跡調査会前掲)。

礎石分布は屋敷境とそれに平行する下水溝(1264号)に挟まれる範囲である(図4-上)。  
個々の礎石遺構の繋がりには短いですが、上記のように一連の建物として考えれば、棟が屋敷境  
と下水溝と同方向の表長屋が存在したことになる。





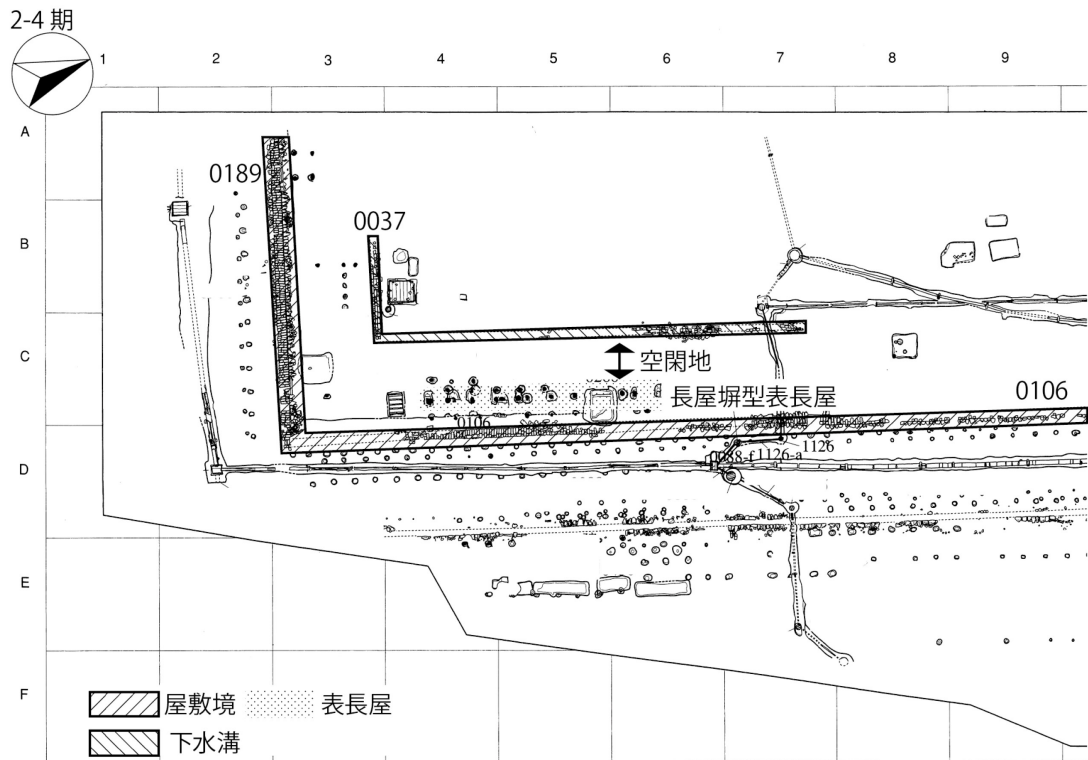
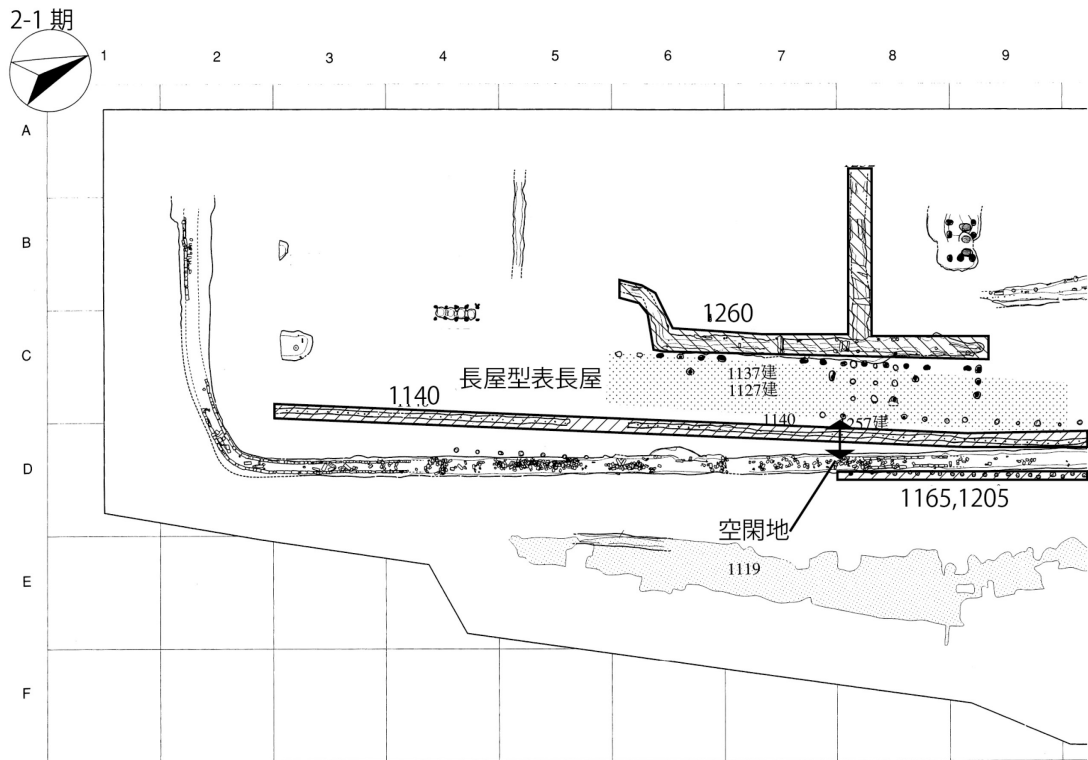


図 4 東京駅八重洲北口遺跡の屋敷外郭部の遺構分布 (千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003 を基に作成)

## (2) 2-4 期

礎石建物を 2 基 (0331 号・0329 号) 検出している (図 4-下)。両者は検出位置がほぼ同じことから、造り替えと捉えている (千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会前掲)。

礎石分布は屋敷境とそれに平行する下水溝(0037 号)に挟まれる範囲である(図 4-下)。

2-1 期と同様、屋敷境に沿った表長屋であると推測される。

このように 2-1 期と 2-4 期の表長屋はどちらも礎石建物だが、屋敷境との距離が異なっている。

2-1 期では屋敷境と表長屋との距離は、屋敷境が 1165 号・1205 号の場合で 6.5m、1140 号の場合で 3.0m である。1165 号・1205 号と 1140 号はどちらも柱穴列による 4 類の屋敷境 (塀・柵) で、調査区の 9-10 グリッドの境目付近で屈曲がみられる。これは『慶長江戸絵図』にある「小笠原左エ門佐」の屋敷割りに共通する。したがって 2-1 期の段階で道が拡幅もしくは縮小し、それに伴って小笠原邸の屋敷境が造り替えられたものと考えられる。

両遺構の間には切り合い関係はないが、2-2 期の直線状の道に沿って設けられた屋敷境遺構 (0417 号) の検出位置は、屈曲部分を除いて 1140 号とほぼ一致していることから、1165 号・1205 号から 1140 号への造り替え、即ち、道の拡幅による小笠原邸のセットバックが行われたことが推測できる。

2-4 期では屋敷境 (0106 号) と表長屋の距離は 1.0-1.5m になる。

2-1 期と 2-4 期の屋敷境と表長屋との距離を模式的に示したのが図 5 である。棒グラフが屋敷境遺構と礎石間の距離を表している。Y 軸が長いほど、屋敷境と表長屋との間には空閑地がひろがっていたことになる。

屋敷 YS1 の屋敷境 A は、2-1 期では塀・柵の屋敷境 (1165 号・1205 号) と表長屋との間に 6.5m の空閑地があり、その間には地下室や便所など長屋の生活に伴う遺構は未検出である。2-4 期になると屋敷境は石組溝 (0106 号) に変化し、表長屋との間の空閑地は 1.0-1.5m になる。この間にも遺構は未検出だった。

このように 2-1 期から 2-4 期にかけて、屋敷境と表長屋との間に存在した空閑地は大幅に減少する。2-4 期の表長屋 (0329 号建物と 0331 号建物) の柱穴列は、南北 1.5m、東西 2.0m 間隔なので、屋敷境と長屋との間隔は南北方向の柱穴列 1 スパン分とほぼ等しいこ

とになる。このことから2-4期の表長屋は屋敷境（0106号）の石垣の上に柱が据えられた長屋塀だったことが考えられる<sup>10</sup>。

東京駅八重洲北口遺跡2期の表長屋には、屋敷境の形態や長屋と屋敷境との間隔から次の2つのあり方が存在する。

#### ①長屋型表長屋

塀や柵が屋敷境に構築され、その内側に建てられた表長屋。長屋との間にはオープンスペースとしての空閑地がひろがる。

#### ②長屋塀型表長屋

石組溝（堀）が屋敷境に構築され、護岸の石垣を土留として、その直上に建てられた表長屋。石垣の上に建つ表長屋は屋敷境の塀を兼ねる。

東京駅八重洲北口遺跡では17世紀半ばに長屋型表長屋から長屋塀型表長屋へと変化することが発掘調査から明らかになった。こうした表長屋の変化は、同時期の大名屋敷に普遍的に認められるものなのだろうか。丸の内三丁目遺跡、有楽町二丁目遺跡、東京大学本郷構内遺跡から検証してみよう。

---

<sup>10</sup> 2-1期、2-4期ともに屋敷境と表長屋の間の空閑地にあたる部分の地表面の縮まり具合は詳らかでない  
ので、居住者が行き来するオープンスペースとしての空閑地か、床下としての空閑地かを検証することは  
できない。

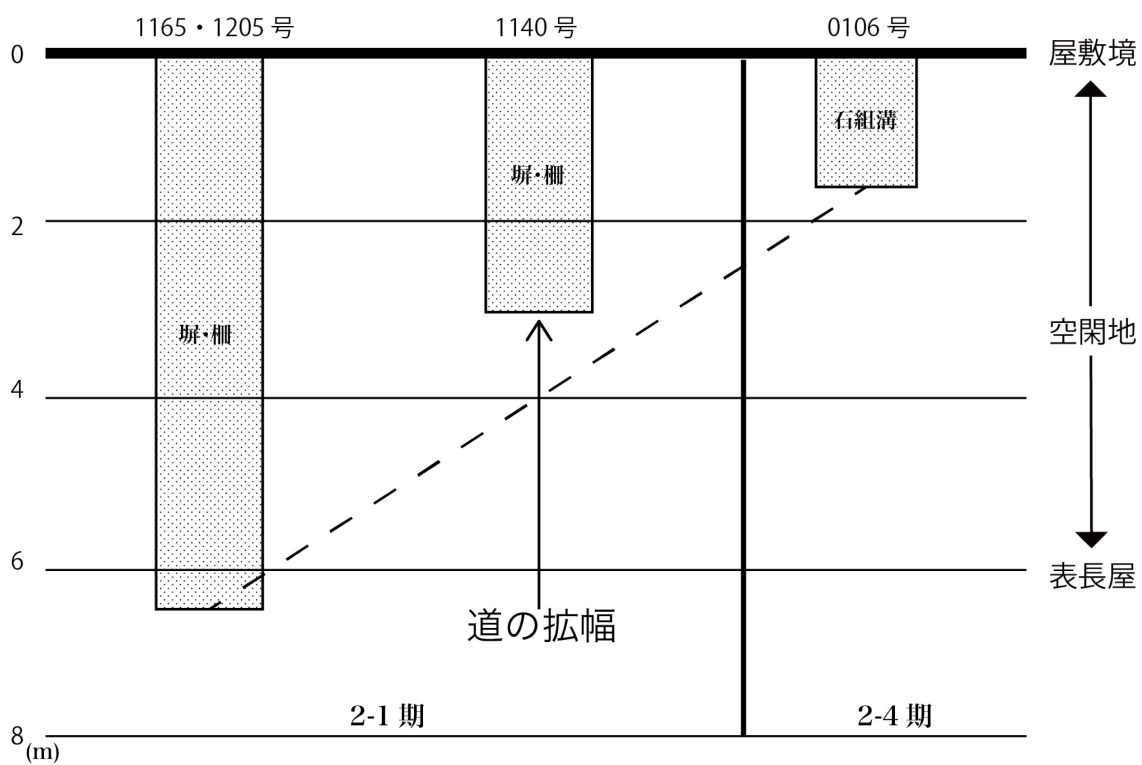


図 5 東京駅八重洲北口遺跡の屋敷境遺構と表長屋の礎石間の距離

## 第2項 屋敷境と藩邸外郭部の土地利用

### (1) 丸の内三丁目遺跡

日比谷入江東岸に立地する遺跡である。52号土坑（5面）の遺物組成が元和年間前半頃（1610年代中葉-後葉前後）に位置づけられており（長佐古真也 2008）、江戸でも早い時期の大名屋敷跡遺跡の一つである。

本項で対象とする5面と3面の屋敷境遺構（26号溝）は石組の堀（6類）で、造り替えの痕跡から新旧2つの遺構にわけられる。5面段階の屋敷境遺構を26号溝（旧）、3面段階の屋敷境を26号溝（新）と呼ぶ。ただし26号溝（旧）の大部分は、26号溝（新）によって壊されているため詳細は不明である。

屋敷境26号溝（旧・新）の北側の屋敷（MS1）と南側の屋敷（MS2）を例に、屋敷境と藩邸外郭部のあり方をみていくことにする（資料編図 57）。

#### ① 5面（図 6 上）

##### a. 北側の屋敷（MS1）

26号溝（旧）に平行して堀・柵をなす柱穴列（5号ピット）がある。26号溝（旧）と5号ピットとの間隔は9mである。屋敷境の堀に伴う堀・柵ではなく、屋敷内の何らかの施設を区画するものだろう。柱穴列北側の遺構分布状況は詳らかでないが、東京駅八重洲北口遺跡2-1期と同様に、長屋型表長屋が構築されていた可能性がある。

屋敷境と区画施設との間の屋敷外郭部では土坑群を検出した（図 6 上で土坑群を切っているのは26号溝（新）である）。これらの土坑は遺物を出土していないことから、採土坑と考えられる。

##### b. 南側の屋敷（MS2）

26号溝（旧）に平行して堀・柵をなす柱穴列（6号ピット）がある。北側の屋敷（MS1）とは異なり、ピット列は堀の肩に構築されているので、堀とともに屋敷境をなした堀・柵と捉えられる。

南側の屋敷（MS2）の内部には建物遺構は未検出である。52号土坑をはじめとして、南側の屋敷（MS2）内部で検出した土坑は遺物を多量に出土するものが多く、ゴミ穴に転用されたことがうかがえる。屋敷外郭部がゴミ捨て場として利用されていた状況が推測される。

## ② 3面 (図 6下)

### a. 北側の屋敷 (MS1)

26号溝(新)に隣接して礎石建物(5号礎石)がある。長屋の礎石には円礫(直径40-50cm)と角礫(一辺20-30cm)が使われている。前者には礎石表面に番号や線が墨書されているものもある。円礫を用いた礎石は掘り方の中に据えられているが、角礫を用いた礎石は掘り方を伴わない。円礫による礎石が長屋の主要な柱を支える礎石だったと推測される。堀と礎石列の間隔から長屋塀型表長屋だった可能性が高い。

長屋の範囲は堀と平行に走る下水溝(89号溝)までだと考えられるが、15号瓦溜りのために長屋北側の空閑地にどのような施設が存在したかは不明である。

瓦溜りが下水溝を切っているので、瓦溜りの方が新しい。長屋廃絶時に屋根に葺かれていた瓦を廃棄するために構築した遺構と考えるなら、この長屋塀型表長屋は瓦葺きだったことになる。

### b. 南側の屋敷 (MS2)

南側の屋敷 (MS2) は遺構の遺存状況が悪く、詳細は不明である。

## (2) 有楽町二丁目遺跡

有楽町二丁目遺跡は江戸前島の尾根先端に位置する遺跡である。『別本慶長江戸図』(1602年頃/慶長7)では町人地にあっており、1606年(慶長11)に堀秀家らが屋敷地を拝領するのが大名屋敷の始まりである。

検出した屋敷境(S113系溝)は堀(6類)で、出土遺物から1630-40年代に廃絶したことがうかがえる。S113系溝は調査区の北寄りで見出しているため、北側の屋敷(桑山邸、後、井伊邸)は2基の溝状遺構を検出するのみで詳細は不明である(資料編図59)。

南側の屋敷(堀邸)では、屋敷境の堀(S113系溝)に隣接して平行するピット列(S236系ピット列ほか)や溝(S240溝)を検出する。屋敷境には堀と塀・柵が構築されていたことがわかる(資料編図59)。この南側が南側の屋敷(堀邸)の外郭部である。

屋敷境に隣接して土坑を多く検出するが、建物遺構はみられない。土坑は1610-30年代の遺物を多量に出土し、特にS230、S231からは貝片も多く出土している。このことから屋敷境に隣接した外郭部が、日常のゴミを処理する場として利用されていたことがうかがえる。

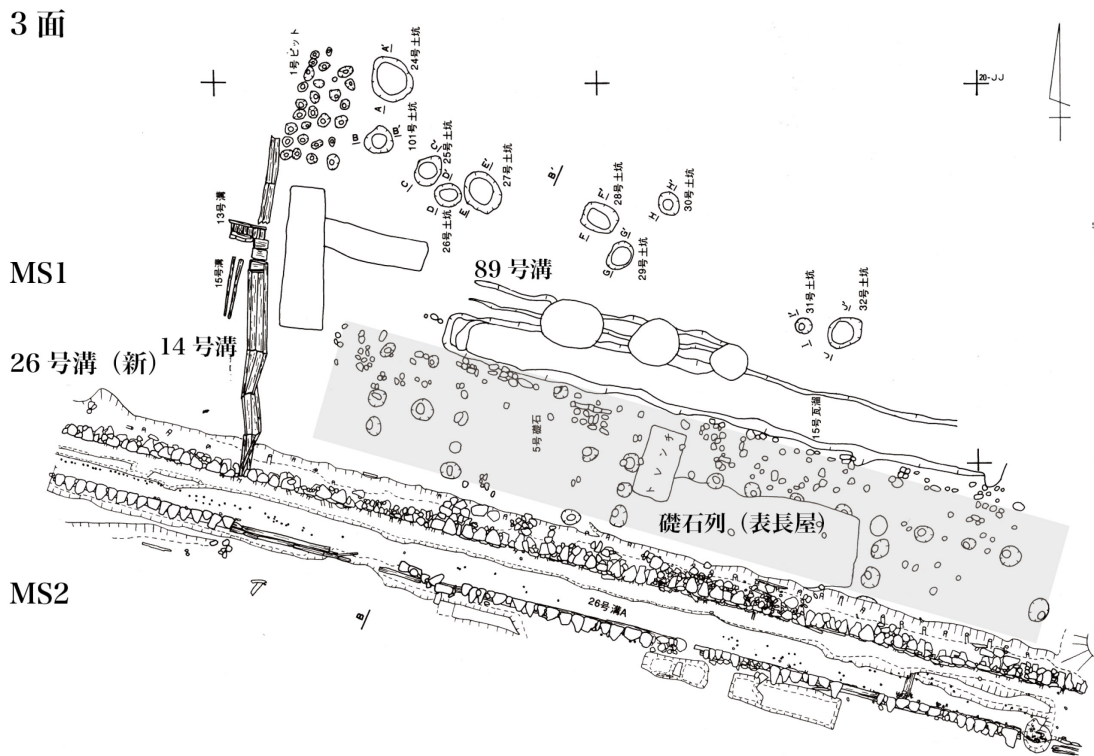
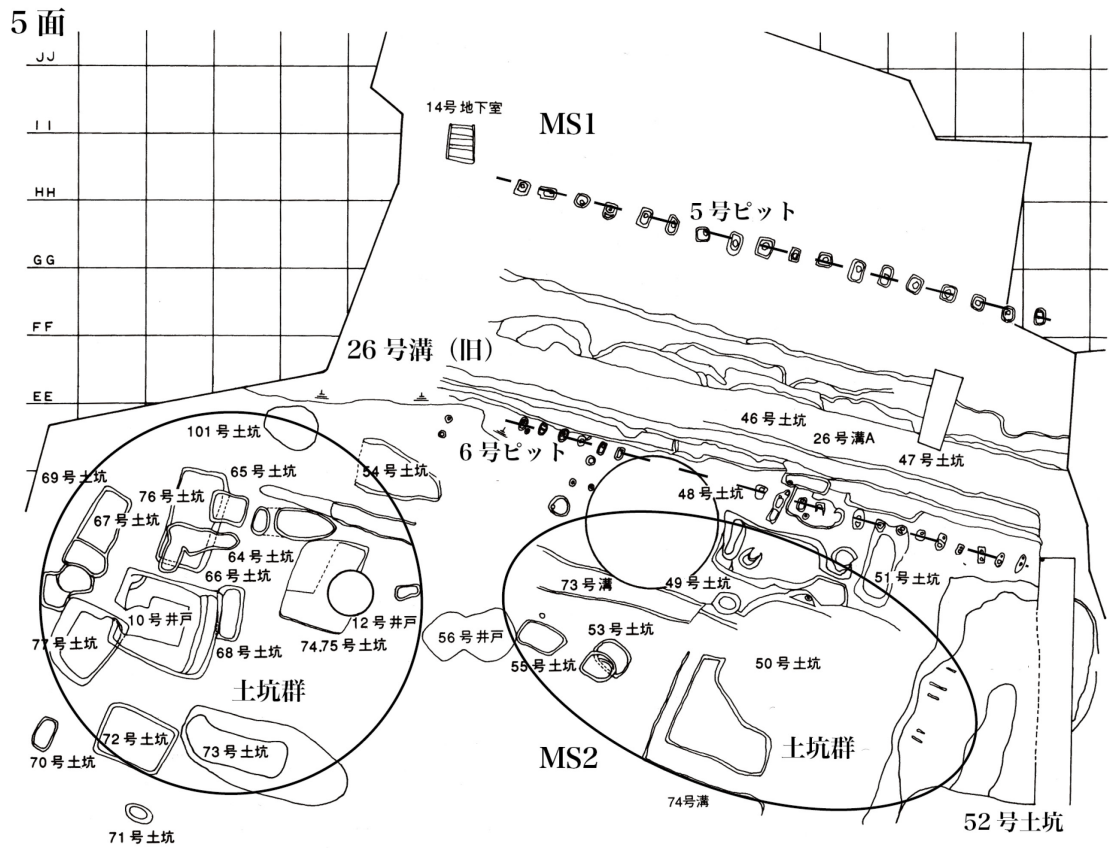


図 6 丸の内三丁目遺跡の屋敷外郭部の遺構分布 (東京都埋蔵文化財センター1994 を基に作成)

### (3) 東京大学本郷構内遺跡

東京大学本郷構内遺跡を最初に大名屋敷として拝領したのは大久保忠隣だった。加賀藩が本郷の地に屋敷を拝領した正確な時期は詳らかでない。『東邸沿革図譜』によれば大久保忠隣失脚後の1616年または17年（元和2、3）と言われている<sup>11</sup>。大久保邸の状況は該期の遺構がほとんど検出していないため不明である。

第2病棟地点（表3の東大病棟2）B3面は自然堆積層の生活面で、東京大学本郷構内遺跡の加賀藩邸内の調査において、現在のところ最も古い段階に位置づけられる生活面の一つである。この面では柱穴列からなる屋敷境遺構（4類）を検出した。遺物は未出土である。

B2面は自然堆積層に最初に盛土造成された整地面である。ここで検出した屋敷境遺構（SD009）は、溝状遺構の底部に柱穴列を伴う3類である。

SD009からは砂目積みの肥前製磁器が出土していることから、1620-30年代に位置付けることができる<sup>12</sup>。したがってB3面は遺物未出土ながら加賀藩が拝領した直後の屋敷境、最初の盛土造成が行われたB2面が1620-30年代の屋敷境の状況を反映していると捉えられる。

『三壺聞書』には最初の本郷邸の開発について次のような記述がある（史料2-1<sup>13</sup>）。

#### 史料 2-1

「従前のまゝにて篠若草蔓芥然たり。只守邸舎又は臧獲の徒住居し、其舎傍に茗園を為すのみなるを、寛永三年丙寅始めて四界に木墻を環らし、明年丁卯千勝・宮松の二公子、諸翁主及び寿福孺人面々の座所経営有りて、金府より北発、此邸内へ移らせ、且小田原・めつた町に賃居せし微臣の輩を、此邸内に外廂を構へ盡く聚め入れ置かせらる。」

B2面で検出した屋敷境遺構SD009は、本郷邸が最初に開発された寛永3年（1626年）とほぼ同時期であり、史料2-1にある四界に巡らせた木墻（垣根）がSD009を指す可能性は高い。拝領直後に柵（B3面柱穴列）で屋敷を囲った本郷邸が、最初の造成工事にともなって屋敷境を塀・柵（B2面SD009）に造り替えたことが史料と遺構からうかがえる。

---

<sup>11</sup> 「賜年不詳れ共、愚按、大坂両役落着後、元和二三年の頃なるべし。」富田景周・太田敬太郎 1972 による。

<sup>12</sup> 調査を担当した成瀬晃司氏の御教示による。

<sup>13</sup> 石川県図書館協会 1972 による。





### 第3項 東京大学本郷構内遺跡龍岡門別館地点の表長屋と屋敷境

#### (1) 龍岡門別館地点の屋敷境遺構

東京大学本郷キャンパスには加賀藩上屋敷の石垣が3ヶ所で現存しており、いずれも塀の一部として使われている(図7)。無縁坂に向かう道沿いの石垣は、『江戸御上屋敷絵図』(1840年代後半、金沢市立玉川図書館蔵)などに「東御長屋」と記された表長屋に伴うものである。山上会館龍岡門別館地点(以下、龍岡門別館地点)はこの塀から1.5-2.0mほど西側(屋敷内)に位置しており、4枚ある生活面の全てで表長屋の礎石を検出した(図8-①～③)。各生活面の年代的位置付けは、1期が出土遺物から17世紀後半、2期が1703年(元禄16)の火災層でバックされていることから18世紀初頭、3期・4期は18世紀以降である。3期と4期は層位的な区分ではなく、『加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図』(1863年/文久3、石川県立歴史博物館蔵)に描かれた「東御長屋上壇」と一致する遺構群を4期にあてている(東京大学埋蔵文化財調査室2004)。

龍岡門別館地点の調査から、加賀藩本郷邸東側外郭部の屋敷境と表長屋との関係をみてみることにしよう。

#### ① 1期

礎石列(SB25)は掘り方が長辺1.0-1.2m、短編0.6-1.0m程度で、礎石は抜き取られていた。調査区西端での検出のため礎石列の広がり是不明だが、少なくとも礎石列の西側に下水溝があり、それが屋敷境側にL字状に延びていることから、表長屋は西側に展開し、東側が空地だったことがわかる(図8-①)。

調査区の東端土坑列(SB31)は一辺1.5-2.0mの不整円形を呈した土坑からなる塀・柵である。表長屋(SB25)から延びる下水溝はL字状に延びてこの塀・柵(SB31)に沿うことから、これが表長屋の東側を区画する施設だったことが推測される。

キャンパスに残る石垣(加賀藩邸の屋敷境)からSB31までの距離は3.0-3.5mである。石垣が面する道の幅は約7mであるが、1682年(天和2)の火災以前は5mだったことが設備管理棟地点の調査で明らかになっている(東京大学遺跡調査室1990)。この調査では大聖寺藩邸の敷地をセットバックすることで道を拡幅したことが屋敷境の変化で判明しているので、これに続く龍岡門別館地点周辺では加賀藩邸側がセットバックした可能性が高い。その場合、屋敷境とSB31との距離は5m程度まで広がっていたことになる。

SB31 以東の状況は不明だが、東京駅八重洲北口遺跡 2-1 期の屋敷 YS1 や、丸の内三丁目遺跡 5 面の北側の屋敷 MS1 と共通した遺構のあり方から、SB31 が長屋型表長屋の範囲を区画した塀・柵だったことがうかがえる。

## ② 2 期

礎石列 (SB4) は一辺 0.5m の礎石で、掘り方は直径約 1.0m である。礎石の最も西側の列には下水溝 SD36 が接しているので、これが長屋の西端になる。一方、東側の礎石列は調査区外へ続いている (図 8-②)。

長屋の西側はこれに附属する空閑地で、下水溝 SD36 を挟んで地下室、土坑、便所遺構を検出した。屋敷境遺構は未検出である。

## ③ 3 期・4 期

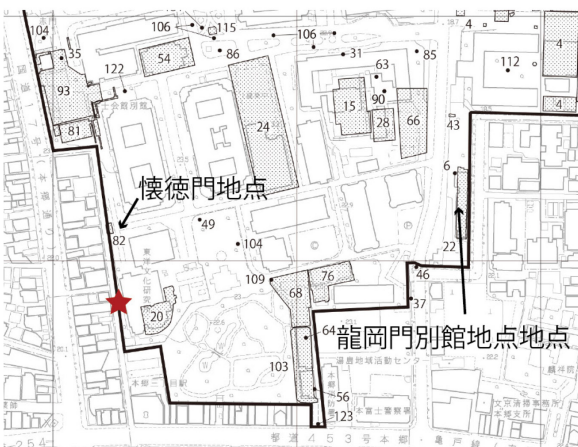
3・4 期の遺構の検出状況は 2 期と類似しており、調査区の東寄りで礎石列 (SB34) を検出した (図 8-③)。

SB34 は直径 0.8-0.9m 程度の掘り方のみで、礎石は残っていない。調査区内では東西 3 列にわたる分布を確認した。礎石列西側には地下室や土坑が構築されている。また礎石列を貫くように 3 基の石組溝 (SD1・SD2・SD6) が東西方向に構築されている。

屋敷境遺構は未検出である。しかし石組溝 (SD1・SD2・SD6) の西側の延長線上に、石垣に穿たれた吐水口が位置しているので、SB34 が現存石垣を屋敷境とする東御長屋 (長屋塀型表長屋) の一部であることがわかる。



① 暗闇坂沿いの石垣

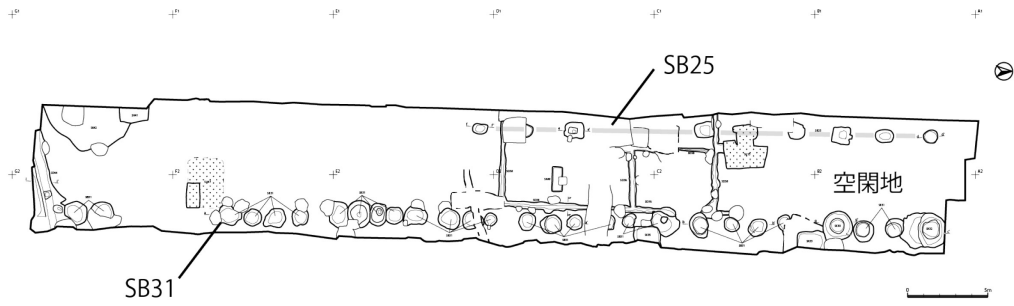


② 日影通り沿いの石垣

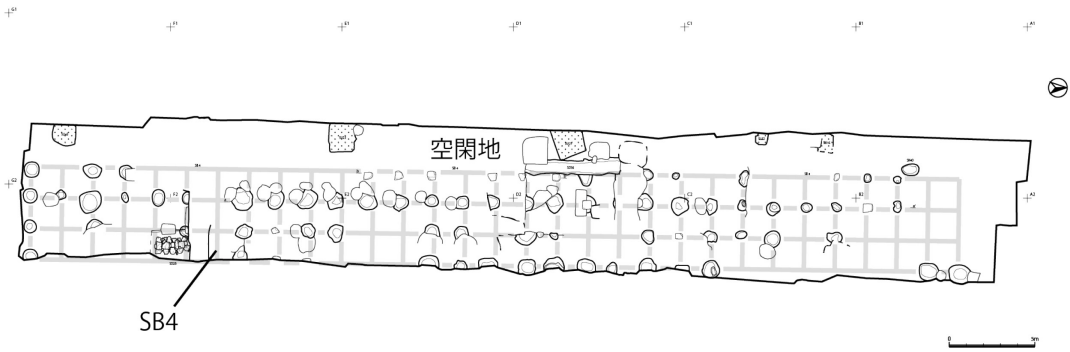


図 7 東京大学本郷キャンパスに現存する石垣

1期 長屋型表長屋 (SB25) と屋敷境 (SB31)



2期 長屋塀型表長屋 (SB4)



3・4期 長屋塀型表長屋 (SB34)

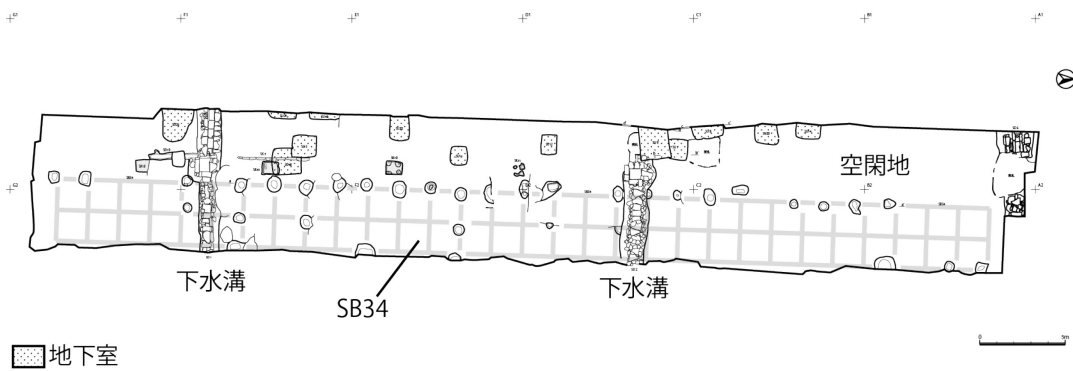


図 8 東大本郷構内遺蹟龍岡門別館地点の遺構分布 (東京大学埋蔵文化財調査室 2004 を基に作成)

## (2) 加賀藩本郷邸東南外郭部の景観の変遷

各期の遺構分布状況を比較した結果、本郷邸東南の外郭部の土地利用状況は、1期と2期以降で大きく変化していることが明らかとなった。

1期は調査区の西寄りでは表長屋を検出している。屋敷境とは別に設けられた長屋型表長屋である。屋敷境に構築した囲繞施設の種類は不明だが、長屋型表長屋は屋敷境から3-5m内側にあった。下水や地下室など、長屋に附属する諸施設は長屋東側の空地に造られている。

2期以降になると、長屋は調査区の東寄りでは検出するようになる。地下室、便所といった諸施設が造られた空地は長屋の西側に移る。3・4期では下水溝が長屋を東西に貫き、下水は石垣に設けた吐水口から屋敷外へと排出されていた。

この下水溝や調査地点西側に現存する井戸をもとに、調査区と『加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図』との照合の結果、検出した長屋が「東御長屋」（長屋塀型表長屋）であることが明らかになった（香取前掲・図9）。東御長屋は明治時代以降もキャンパス内に残っており、明治末から大正期に撮影された写真<sup>14</sup>から、瓦葺き・海鼠塀だったことや、道との間に石組の下水溝が敷設されていたことがうかがえる。

2期の遺構配置は3・4期と類似していることから、2期に検出した表長屋も長屋塀型表長屋と考えてよいだろう。2期をバックしていた焼土層から、この長屋は1703年（元禄16）の火災で焼失したものと位置付けられる。1688年（元禄元）に制作された『武州本郷第図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵）をみると、本地点は南側から「役人並」、「侍分並」（2部屋）、「与力並」（7部屋）と続き、その北側に「東門」が設けられていた長屋が描かれている。

1616・17年（元和2・3）に下屋敷として拝領した加賀藩本郷邸は、1682年（天和2）の火災を機に上屋敷に唱替となった。本郷邸最初期の屋敷境のあり方は前段でみたとおりのだが、本地点1期の長屋型表長屋を伴う藩邸外郭部の様相は、それに続く下屋敷段階のものである。

加賀藩邸では2期に長屋塀型表長屋が出現する。1期の遺物は17世紀後半のものが多くことから、その時期は17世紀後半以降のことである。『武州本郷第図』が1682年（天

---

<sup>14</sup> 角田真弓は東御長屋の背後に医科大学外来診察室の時計塔が写っていることから、撮影時期を1910年（明治43）から1923年（大正12）の関東大震災までに位置づけている（角田2000）。写真は東京大学大学院工学系研究科建築学研究所蔵。

和 2) の火災で焼失した本郷邸の普請予定図（細川義 1990）だったことを考えると、本郷邸での長屋塀型表長屋の構築は、1683 年（天和 3）の藩邸再建を契機とした可能性が高い。

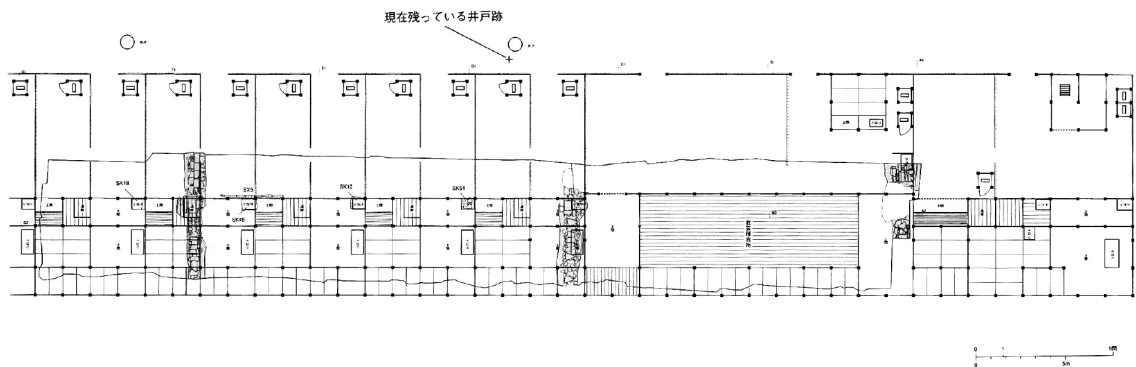


図 9 龍岡門別館地点と絵図の照合状況（東京大学埋蔵文化財調査室 2004 より）

## 第 4 節 屋敷境の定型化と都市基盤

### 第 1 項 初期の大名屋敷の外郭部利用の多様性

1590 年代の大名屋敷は現段階までの調査例でみる限り、素掘りの溝が屋敷周囲を圍繞する施設として構築されていた。屋敷境遺構周囲に建物遺構や地下室が伴う遺跡はなく、屋敷外郭部の土地利用状況は不明である。該期の大名屋敷は家康の家臣に与えられたものであり、大名の本拠として藩主一族や多くの藩士が居住する後代の大名屋敷ほどの居住者がいないことも考えられる。そうした屋敷拝領層の違いが、外郭部の遺構分布状況にも反映している可能性がある。

1600 年前後（慶長期）になると、政治の中心はいまだ上方にあり、諸大名の本拠としての大名屋敷も京・大坂に設けられていたとはいえ、家康への恭順の見返りに大名に屋敷地が与えられるようになる。『向念覚書』に記された桃山風の豪壮な大名屋敷がこの段階である（大熊 1935）。内藤昌は『伊与殿屋敷』の絵図から、元和期（1615-1623 年）には表長屋が屋敷の周囲を巡っていたと捉えている（内藤 1972）。このように該期は、歴史学的には大名屋敷の平面構成に一定の規範が認められるようになった時期と位置付けられている（波多野純前掲）。

1600 年代末から 1610 年代（慶長後半期-元和前半）に比定される東京駅八重洲北口遺跡 2-1 期では、屋敷境が塀・柵で囲われ、それよりも 6.5m ほど内側に表長屋（長屋型表長屋）が設けられていた（図 4）。

それに後続する 1610 年代中葉から後葉（元和前半）の丸の内三丁目遺跡 5 面では、屋敷境は塀・柵を伴う溝だった。北側の屋敷（MS1）では屋敷境から 9m ほど内側に屋敷内を区画する塀・柵があったので、東京駅八重洲北口遺跡 2-1 期と同様に長屋型表長屋が設けられていたものと思われる。屋敷境と表長屋との間の屋敷外郭部では、土の採掘活動が



行われた。西側が日比谷入江の埋立地だった屋敷内にあって、未だ造成工事が進行中だった状況がうかがえる（図 6 上）。

南側の屋敷（MS2）では長屋型表長屋は認められない。代わりに検出した多くの土坑から、屋敷外郭部がゴミ処理場として利用されていたことがわかる（図 6 上）。屋敷外郭部をゴミの埋土処分地とする土地利用状況は、有楽町二丁目遺跡（1630-40 年代）でも認められる。

東京大学本郷構内遺跡では、加賀藩の屋敷拝領（1616・17 年/元和 2・3）直後の屋敷境は、柵によって囲まれていた。この時期の本郷は江戸の郊外であり、下屋敷だった本郷邸は拝領から 10 年ほどはほとんど利用されていなかった。1610 年代の東京駅八重洲北口遺跡や丸の内三丁目遺跡といった大名小路の諸遺跡とは異なる屋敷外郭部の状況は、郊外という地域性と下屋敷という大名屋敷の役割に起因したものだろう。

本郷邸は開発が本格化した 1626 年（寛永 3）頃に、屋敷境が塀か柵へと造り替えられた。この時期の長屋遺構は未検出だが、『三壺聞書』に「邸内に外廂を構え」とあるので（史料 2-1）、長屋型表長屋が存在した可能性が高い。大名小路の諸遺跡よりも表長屋の出現は遅れている。

このように遺跡からみる 17 世紀前半（慶長-元和期）の大名屋敷の平面構成は、『向念覚書』や『伊与殿屋敷』が伝えるような屋敷が斉一的に存在するわけではないことを示している。屋敷外郭部に関しては、藩士の居住地として長屋型表長屋が構築されたほか、ゴミの埋土処分地や採土場など多様だった（表 5）。その多様性は各屋敷が居住者数や屋敷の利用状況に応じた平面構成を選択した結果であるが、逆に言えば大名屋敷のあり方が未だ固定化されていなかったということである。

	外郭部の利用状況	外郭部の施設	主な遺跡
ア	居住地	長屋型表長屋	八重洲北口・東大龍岡門
イ	空閑地	ゴミ処理場	丸の内三丁目MS2・有楽町二
ウ	空閑地	土砂採掘場	丸の内三丁目MS1

表 5 初期の大名屋敷の外郭部の土地利用状況

大名屋敷跡遺跡で検出した屋敷境遺構の形態を、時期毎にまとめたのが表 6 である。屋敷境遺構の形態は 17 世紀代に最も多様なあり方を呈し、時期が下るにつれて石組溝（2 類）が主体的な形態となっていく。しかしこれまでにみたように、17 世紀第 2 四半期までの大名屋敷跡遺跡には、石組溝による屋敷境遺構（2 類）の検出例はない。石組溝による

屋敷境は大名屋敷の屋敷境にとって画期となるが、その時期は 1650 年代以降のことである。

石組溝による屋敷境遺構（2 類）の出現は、屋敷外郭部の利用状況に大きな変化をもたらした。即ち、石組護岸を土留とする長屋塀型表長屋の建築によって詰人空間の敷地一杯までを居住地として利用できるようになったのである。

大名屋敷は 1620 年代から 30 年代半ばにかけて整備された参勤交代制と大名妻子江戸居住制によって制度的に完成した。これによって江戸は全国の勤番武士が集まる巨大城下町に発展する（岩淵令治 2010）。一方、個々の大名屋敷にとっては、居住者数の増加と居住スペースの慢性的な不足が生じる要因となった。宮崎は表長屋の成立を「限られた敷地の中に殿舎（時に御成御殿を含む）と詰人住居のすべてを収めなければならないという所与の条件を満たすための、必然的でやむを得ざる選択の結果」と指摘している（宮崎前掲）。第 1 節第 2 項で指摘した通り、長屋塀型表長屋は詰人空間内の居住施設の中で主体的な位置を占めるものではないが、長屋が圍繞施設を兼ねる長屋塀型表長屋のあり方は、屋敷外郭部の土地利用として極めて合理的なものだった。

1650 年代以降の石組溝による屋敷境とそれに伴う長屋塀型表長屋の出現と、明暦の大火（1657 年/明暦 3）後に出された防火を意図する家作制限によって、「瓦葺きで塗家造り、興瓦張り造り」による長屋塀が屋敷を囲む大名屋敷の景観が成立したのである（大熊前掲）。

形態	16世紀代	17世紀代	18世紀代	19世紀代	不明
1類	4	10			1
2類		16	6	5	3
3類		6			
4類		16	4		1
5類		3			
6類	1	25	3		
7類		2	2		

表 6 屋敷境遺構の時期毎の諸形態

## 第 2 項 屋敷境の定型化と都市基盤

東京大学本郷構内に現存する石垣の吐水口と龍岡門別館地点との関係からも明らかのように、石組の溝による屋敷境（2 類）は下水溝を兼ねていた。江戸の下水網整備につい

ては、初期の法制史料の欠落によって不確かなことが多い。現在残る下水に関する最も早い史料である 1648 年（正保 5）2 月 21 日の触書きをみてみよう（史料 2-2）<sup>15</sup>。

## 史料 2-2

「御請負申事

一 町中海道悪敷所江浅草砂ニ海砂ませ、壱町之内高ひきなき様ニ中高ニ築可申事、并こみ又とろにて海道つき申間敷事

一 下水并表之みぞ滞なき様に所々に而こみをさらへ上ケ可申候、下水江こみあくた少も入申間敷候、若こみあくた入候ハ可為曲事」

「下水并表之みぞ」という記述から、1640 年代には市中の一部に下水網が整備されていたことがわかる。北原糸子は下水浚いに関する町触が寛保期（1741-1743 年）以降に少なくなることを、江戸の下水管理システムの定着と捉えている（北原 1990）。

考古学では紅葉堀遺跡（新宿区教育委員会 1990）で 1641 年（寛永 18）に御手伝普請によって構築された市谷田町大下水<sup>16</sup>の一部を検出した。江戸の下水は小下水・大下水のような、その規模に応じた呼び分けはなされていなかったという説もあるが（栗田 1995）、ここでは便宜的にいくつかの下水を集めた幹線を大下水と呼ぶと、同様の調査例には上野広小路遺跡（加藤建設株式会社 2007）がある。また『御府内備考』や『寛保沽券図』には、「松平豊後守様御屋舗下水」（『御府内備考』「本芝一丁目」、「本芝材木町」）や「安藤対馬守様屋舗下水」（『寛保沽券図』）のように、大名家の名が冠せられた下水も存在する。屋敷境遺構との関係では、下水溝を兼ねる石組溝による屋敷境遺構（2 類）の出現が、史料的に不十分な江戸の下水網整備の時期を間接的に示していると考えられる。

大名小路と本郷とでは、石組溝の屋敷境（2 類）と長屋塀型表長屋の出現時期に若干の時期差が存在する。前節ではこれを地域差と屋敷の機能差として捉えたが、下水道の敷設時期の違いがその前提にあった可能性が高い。これについては個々の大名屋敷跡遺跡だけでなく、その周辺の武家地や町地の遺跡における屋敷境遺構の様相も併せて検討を進めて行くことが必要である。今後の検討課題としたい。

幕府が江戸の公共的機能を各種の武家屋敷組合に担わせていた実態は、岩淵令治による武家方辻番（都市の安全性）に関する研究（岩淵 1993a、1993b）、藤村聡や松本剣志郎による上水、橋々組合（都市の利便性）に関する研究（藤村 1996、松本 2005）によって明

<sup>15</sup> 『江戸町触集成第一巻』（近世史料研究会 1994）による。

<sup>16</sup> 『御府内備考 牛込之一』による。

らかになっている。特に松本がとりあげた三味線堀定湊組合は、下水の浚渫を主目的としながらも、柵の設置や石垣の修復など、下水道の広範囲にわたる維持管理を担っていた（松本前掲）。武家屋敷組合による下水道管理が、江戸の下水網のどの程度にまで及んでいたかは不明だが、大名屋敷の屋敷境に構築された下水道（石組溝による屋敷境遺構・2類）は、当該屋敷の下水のみを排出するものではなく、隣接する大名屋敷や周囲の町屋の下水をも流し、大下水へと至る江戸の下水網の一部を担っていたのである<sup>17</sup>。

武家地は本来的に在地性が強く、完結性をもったものである（波多野前掲）。16世紀末に出現した最初期の大名屋敷に構築された素掘りの溝、あるいは17世紀前葉の塀や柵といった囲繞施設は、いずれも江戸における個々の大名屋敷の独立性を示すものだった。下水道を兼ねる石組の屋敷境の出現は、長屋塀型表長屋が屋敷のぐるりを囲む大名屋敷の景観を定型化させるとともに、下水道という都市基盤を紐帯とした地域社会との繋がりを大名屋敷にもたらしたのである。

---

<sup>17</sup> 『御府内備考 源助町』に、「大下水 巾六尺 右者町内西之方新道武家方御屋敷境ニ有之……（略）…水吐口之儀者芝口式丁目同三丁目露月町柴井町より之落合ニ而町内横切下水え水落申候」とある（下線は筆者による）。ここにある「町内横切下水」は仙台藩邸と会津藩邸との屋敷境をなした堀（会仙川）のことで、武家屋敷や周辺の町屋の下水が合流していたことがうかがえる。

## 第5節 小結

本章では大名屋敷の屋敷境と外郭部の土地利用状況から、長屋塀型表長屋で囲まれる大名屋敷の成立を検証した。ここで分析対象とした大名屋敷跡遺跡は江戸御府内に立地する上屋敷が中心である。一方、近年調査事例が増えつつある江戸近郊の下屋敷、抱屋敷<sup>18</sup>といった大名屋敷跡遺跡では、これと異なるあり方が認められる。

たとえば尾張徳川家下屋敷跡遺跡や仙台坂遺跡では、屋敷境遺構として堀（6類）を検出している。これらの遺跡では屋敷外郭部に建物遺構は未検出であることから、表長屋は設けられていなかったことがうかがえる。尾張藩下屋敷の絵図に長屋塀型表長屋が描かれるのは19世紀に描かれた『戸山山荘絵図』（江戸東京博物館蔵・1820-1839年）以降のことである。こうした郊外の下屋敷を対象とした調査事例からは、大名屋敷の多様性がうかがえる。しかし府内の大名屋敷跡遺跡に比べて調査事例が少なく実態は不明である。

本研究で明らかにしたように長屋塀で囲まれる大名屋敷の景観の成立には、下水道敷設という都市基盤の整備が密接に関わっているので、江戸郊外に展開した大名屋敷の景観を明らかにしていくことは、江戸の都市構造を解明していくためにも重要な課題である。

---

<sup>18</sup> 抱屋敷・抱地は、享保二酉年十月（1717年）の覚えに「抱屋敷構之囲取払申候」とあるように（『御触書寛保集成』、高柳真三・石井良助 1934）、屋敷の周囲に圍繞施設を設けることが規制されていた。抱屋敷の屋敷境は千駄ヶ谷五丁目遺跡に検出例がある。



## 第3章 大名屋敷の屋敷境(2) 屋敷境としての堀の機能と消長

### 第1節 はじめに

大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構には、遺跡によって「大型溝」、「溝状遺構」、あるいは「堀」と呼ばれる遺構がある。今井林太郎は屋敷の周囲が堀と土塁で囲まれる「居館」（武家屋敷）を、中世の史料にある「堀内」、「土居」と捉え（今井 1938）、在地領主の開発拠点と位置づけた。このいわゆる「堀ノ内体制論」以降、中世前期の武士の住まいが防禦性の高い「居館」であると考えられるようになった。

小山靖彦が上野国新田荘上今井郷などの堀の内の様相を検討し、在地領主の屋敷に巡らされていた堀が農業用水という勸農機能を有していたことと、在地領主は用水の把握を通して領地支配を行っていたことを明らかにして以降（小山 1966）、堀と土塁に囲まれた「居館」は防禦性とは別のものと捉えられるようになったが、長く東日本の中世の武家屋敷（方形居館）のあり方として認識された。橋口定志は中世考古学の調査成果に基づいて、こうした武家屋敷のあり方が中世後期（14-16世紀）のものであることを明らかにした（橋口 1987、橋口 1990）。

溝と堀とが本来区別されたものであることを明らかにしたのは、高島緑雄による『正統庵領鶴見寺尾郷図』の分析だった。高島は本図で、集落の範囲が堀（「本境堀」など）として、溜池（別所池）につながる用水が「ミソ」（溝）として区別されていることを明らかにした（高島 1987）。

橋口は当時の社会で異なる役割を担うものとして認識されていた堀と溝を、「未検討のまま“溝状遺構”という名称で一括して扱った場合には、この遺構が検出された調査地区の関連遺構群の捉え方を根本的に誤ってしまう」恐れがあることを指摘している（橋口前掲）。

北垣聰一郎は城郭の堀を、「味方守兵をよく守り、城内への敵による攻撃を困難にするため、表土を人工的に深く掘り割り、主郭周囲にめぐらせた塹」であるとするが、堀幅についての明確な基準はあげていない。ただし大堀とされる諏訪原城や滝山城でも堀幅は20m未満であることをあげ、広すぎる堀は却って不都合だったことを指摘している（北垣 1981）。

西川幸治は大名屋敷の周囲に家臣を収容するための長屋が巡る構造が、戦国時代の野陣小屋に似ている点を指摘しつつも、実態は形骸化して防禦性は乏しかったと否定的にみる（西川 1972）。西川が江戸の大名屋敷と比較したのは戦国時代の陣屋だが、宮崎勝美は大名屋敷の防禦性に関連して、「都市の大名屋敷は、そうした城郭や戦陣とはまったく条件が違うのであるから、たとえ形態的に類似点があるにしても、それだけをもって大名屋敷の「防御的性格」を強調するのは適当ではない」と指摘する（宮崎 1989）。

江戸の大名屋敷は「御成」を迎えるという点で、京都や伏見の大名屋敷を引き継いだものであるとしたのは大熊喜邦（大熊 1916）や内藤昌（内藤 1972）だった。内藤昌・大野耕嗣は慶長末年以降の『洛中洛外図』にみられる大名屋敷の楼閣を式正の御成の際に建立されたものと捉え、それが寛永期の『江戸図屏風』でも多くみられることを指摘した（内藤・大野 1971）。内藤らは京都や伏見の大名屋敷に防禦性は認めていない。江戸の大名屋敷についての明確な言及はないが、その文脈から判断して防禦性は認めていなかったことがうかがえる。

『江戸図屏風』（歴博本）の大名屋敷に描かれた櫓門が外様大名の屋敷にみられる点を、内藤が「一国一城の主たる意味の表現」と位置づけた（内藤 1972）のに対して、それが「防御を固める城郭的性格を維持した」と捉えたのが波多野純だった（波多野 1990）。大名屋敷の櫓門は 1657 年（明暦 3）に禁止される<sup>19</sup>。波多野はこの家作制限を、城郭的な備えを江戸城に集中させ、大名屋敷に戦闘的な性格を認めない幕府の意志表示であるとする（波多野前掲）。

考古学では後藤宏樹が初期の大名屋敷跡遺跡のあり方を検討する中で、櫓を配置した延岡藩内藤家上屋敷（文部科学省構内遺跡）や白山御殿（東大小石川構内遺跡ほか）から、防禦施設としての大名屋敷を論じている（後藤 2011）。ただし両遺跡とも調査範囲が限られており、櫓は未調査である。

橋口は豊島区の名古屋敷跡遺跡の調査事例から、中山道・日光街道沿いに位置する大名屋敷（下屋敷）が、「江戸城下を防衛する前線基地としての役割」から堀に囲まれた可能性を指摘する（橋口 2006、小川祐司 2011）。併せて「屋敷地の全体を堀で区画して中世城館のような状況」を示す事例はない点もあげている（橋口前掲）。

成瀬晃司は東京大学白山構内遺跡（白山御殿）で検出した堀について、遺構の規模や史料にみられる白山御殿の景観から、「城郭建築としての威容」が備わっていたと指摘した（成瀬 2008）。その背景として、将軍となった綱吉がしばしば行った桂昌院のもとへの御成との関係をあげている。

本章では屋敷境遺構としての堀の分析を通して、大名屋敷に構築された堀の役割について考察する。

---

<sup>19</sup> 「明暦三酉年正月

覚

一 今度焼失之侍屋敷并町中わりかたり候所々可有之間、当座之小屋掛候共、成ほとかろくいたすへき事、  
一 同作事之儀、たとひ国持大名たりといふ共、三間梁よりひろき屋作可為無用、勿論かろく可被相立可有留意事、

付、二階門可為停止、并こまよせハ先無用事、  
(略)」

引用は『御觸書寛保集成』（高柳・石井 1934）による。





## 第2節 屋敷境としての堀のあり方

### 第1項 屋敷境遺構としての堀

大名屋敷跡遺跡で検出する屋敷境の形態は、溝状を呈するもの、柱穴や土坑が列をなすもの、土留の3つに分けられ、屋敷境遺構にはそれぞれに対応する7つの形態がある（表2）。溝状を呈する屋敷境に該当する遺構の形態は、素掘りの溝（1類）と石組によって護岸された溝（2類）である。大名屋敷跡遺跡で検出した溝状遺構のうち、幅と深さが計測可能な遺構を集成したのが図10である。

ドットの広範囲の広がり、溝状遺構の規模が幅、深さともに多様であることを示しているが、特に幅・深さが1.5m内の範囲（図中の赤枠内）に集中する傾向をみてとることができる。以下では、遺構の規模がこの範囲内の溝状遺構を、護岸の構造によって素掘りの溝（1類）と石組溝（2類）に分けることにする。そして、幅・深さが1.5mよりも大型の溝状遺構を堀（6類）とする。

屋敷境遺構の形態は、江戸での大名屋敷出現期である16世紀末に素掘りの溝（1類）から始まり、17世紀代になると7つの形態全てが認められるようになる。17世紀中葉から後葉に江戸の下水道が整備されることによって、屋敷境に下水溝を兼ねる石組溝（2類）が現れ、18世紀以降になると石組溝（2類）が大名屋敷の屋敷境として主体を占めるようになる（表6）。

この表から本章が分析対象とする堀（6類）の時期毎の多寡をみてみよう。堀は17世紀代に出現し、この時期に最も多くの検出例が認められる。18世紀代には減少して3基となり、19世紀代の検出例はない。ただしこの表は遺構の構築年代を基に集計した結果なので、19世紀代の欄が空白であることが、大名屋敷の屋敷境として0であることを意味するものではない。

例えば尾張藩徳川家下屋敷跡遺跡5次調査で検出した1号堀<sup>20</sup>は、尾張藩が下屋敷を拝領した1671年（寛文11）頃に構築され、18世紀中頃に廃絶となった堀である。仙台坂遺跡で検出した堀跡からは17世紀代から19世紀代の遺物が出土しており、1658年（万治

---

<sup>20</sup> 5次調査（東京都埋蔵文化財センター2008）では1号堀に続いて、90度屈曲する1051号堀が出土している。また4次調査（新宿区生涯学習財団2001）での1号遺構、6次調査（共和開発株式会社2013）の36号遺構が屋敷境の堀として同一のものである。

元)の拝領直後から19世紀に至るまで屋敷境として堀が機能していたことがわかる。こうしたケースは17世紀代の堀として扱っている。存状況が比較的良好な検出例を修正した表7も同様である。また『寛保沽券江図』(1743年)では安藤対馬守屋敷の屋敷境が「堀」記載されているなど(図37)、絵図資料からも18世紀以降にも屋敷境として堀が存在したことがうかがえる。

No.	遺跡	遺構	幅	深さ	No.	遺跡	遺構	幅	深さ
1	東大情報学環	S D8	0.50	0.65	28	有楽二	S123	1.27	1.08
2	東大外来	SD45	3.20	1.40	29	有楽二	S110	1.86	0.99
3	東大CRC-A	SD 11473	1.80	1.90	30	飯田町	堀跡	13.00	1.50
4	東大理7	1号溝	1.48	0.86	31	飯田町	6279	1.00	1.00
5	東大中診	5号溝	1.20	0.80	32	飯田町	6232	0.50	1.20
6	東大中診	2号組石	0.70	1.00	33	赤穂藩森家	1	1.50	2.30
7	東大中診	6号組石(組石部分)	1.70	1.60	34	汐留	4K-007	0.90	1.28
8	東大中診	6号組石(南北部分)	1.10	1.20	35	汐留	1号溝	0.55	0.86
9	東大中診	10号組石	1.00	0.50	36	汐留	6L-006	1.00	1.12
10	東大中診	12号組石(新)	1.80	1.00	37	汐留	6J-500	3.80	2.40
11	東大中診	2号溝	1.50	0.90	38	汐留	6K-0545/7J-044	0.48	0.32
12	東大CRC-A	SD 12091など	0.50	0.70	39	汐留	6I-407	0.40	0.32
13	東大設備管理	1号溝	3.00	1.10	40	東大白山博	SD01	9.20	2.70
14	東大設備管理	AB33・34区組石	1.00	0.60	41	白山御殿	1	17.00	3.00
15	八重洲北	1221	1.40	0.70	42	鶯籠町4	40	3.98	2.23
16	八重洲北	0417	0.80	0.70	43	錦糸町北	54	1.20	0.62
17	八重洲北	1080	0.30	0.25	44	仙台坂	堀跡	5.00	2.00
18	八重洲北	0106	0.45	0.70	45	千駄ヶ谷五	0725	4.44	1.59
19	八重洲北	0106-b	0.45	0.70	46	尾張上	3-1溝・4-1溝	2.00	0.80
20	八重洲北	0189	0.90	0.30	47	春日町IV	1	4.00	1.40
21	文科省	006b	1.20	1.30	48	内藤4	2	1.80	1.60
22	文科省	006a	0.60	0.30	49	新宿六	202	2.60	1.20
23	文科省	007	1.00	0.50	50	新宿六	301	2.60	1.20
24	丸三	26(新)	1.80	1.50	51	新宿六	2420	2.60	1.20
25	丸三	1	1.80	1.50	52	染井	クラウド地区313など	5.60	3.41
26	有楽二	S113系	2.54	0.64	53	巢鴨1	1	5.50	2.00
27	有楽二	S205	0.74	0.18	54	津和野藩亀井	31	2.4	1.00

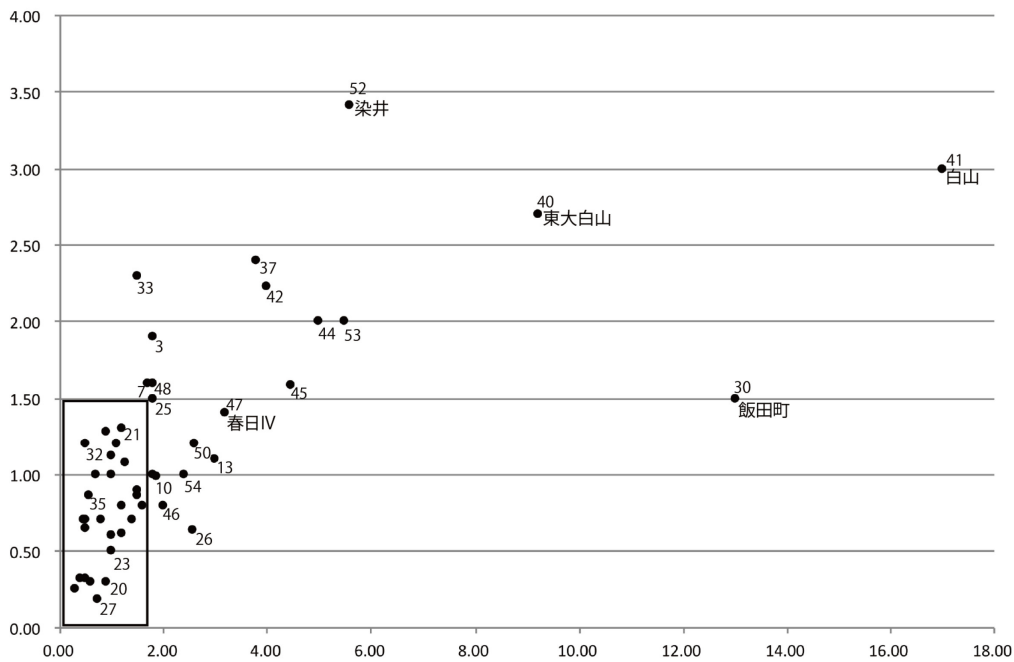


図 10 溝状遺構の幅と深さ (ドット横の番号は表の遺構番号に対応)

時期	遺跡・遺構	屋敷	上幅	下幅	深さ	流・滞水
17前	有楽町二丁目S113	上	2.5		0.6	×
17前	文科省005号	上	1.78		1.56	○
17前	紀尾井町SD34	上	13.0		4.0	×
17前	尾張上3-1号・4-1号	上	2.0	0.8	1.0	×
17前	飯田町堀跡	上	10-13		1.0-1.5	○
17後	丸の内三丁目26号新	上	0.7-1.8	0.8	1.4	○
17後	春日町IV1号	上	4.0		1.4	○
17後	汐留6J-500	上	3.8	3.6	3	○
17後	東大小石川1号	下	17.0	-	-	不明
17後	鶯籠町4_40号	下	3.7-4.0	1.1	2.23	×
17後	尾張藩下屋敷1号堀	下	3.1	1.2	1.8	×
17後	新宿六丁目202号	下	0.8-2.6		0.3-1.2	×
17後	千駄ヶ谷五丁目0725号	下	3.8-4.4	1.3	1.4-1.6	×
17後	染井313号ほか	下	5.3-5.6	1.6	2.7-3.4	×
17後	仙台坂堀跡	下	5.0	2.5	2.0	×
17後	巢鴨 I 1号	下	5.5	1.5-2.0	2.2	×
17末	丸の内三丁目1号	上	1.8		1.5	○
不明	東大設管1号溝	下	2.5-3.0	0.5	1.0-1.1	×

表 7 堀の時期と規模（屋敷種類の下屋敷には、上屋敷以外の屋敷を含む）

家康の江戸入府（1590年/天正18）後の家臣団への賜邸から始まった江戸の大名屋敷は、1600年（慶長5）頃には家康への恭順の見返りとして与えられる屋敷が加わり、1620年代半ばから30年代半ばにかけて整備された参勤交代制や、大名妻子の江戸居住制によって、制度的に完成した。

家康の家臣や、大名が恭順の見返りとして拝領した当初の大名屋敷は、基本的に一つだった。一部の有力大名は複数の屋敷（上屋敷に対して下屋敷）を拝領していたが<sup>21</sup>、下屋敷は1657年（明暦3）の大火を契機に、郊外に避災屋敷を持つようになることで広くみられるようになった。

以上のように17世紀代の大名屋敷は、1630年代半ばの制度的な完成と、1650年代以降の下屋敷の普及が画期となるが、表7は17世紀代を前後二つの時期に分けて堀（6類）のあり方をまとめたものである。堀には水が張っている水堀と、水のない空堀とがあり、それぞれに「濠」と「堀」の字が宛てられている。本研究では水の有無に拘わらず「堀」

<sup>21</sup> 榊原康政は1590年（天正18）に池之端邸（東京大学本郷構内遺跡・龍岡町遺跡）を拝領し、1590年代後半に小石川邸（飯田町遺跡）を拝領している。また前田家は1605（慶長10）に辰口邸を拝領しているが、1616年または17年（元和2、3）に本郷邸として下屋敷を拝領している。

と呼称するが、遺構としての堀は覆土の水成堆積層の有無から判断できる。表 7 にある【流・滞水】の欄は、報告書の堆積状況に基づく空堀（×）・水堀（○）の別である<sup>22</sup>。

17 世紀代前期の大名屋敷では水堀と空堀はほぼ同数の調査例がある。下屋敷が多くみられるようになる後期になると、上屋敷は水堀、下屋敷<sup>23</sup>は空堀というように、大名屋敷の種類と堀のあり方との間に相関関係がみられるようになる。

中世集落では「堀」と「溝」とが、境界を分ける境堀と水路という役割によって使い分けられていた（橋口前掲）。大名屋敷の屋敷境でも、上屋敷と下屋敷とで屋敷境として異なる堀が構築されていたということは、堀自体の機能が異なるばかりでなく、各屋敷に期待される屋敷境としての堀の機能も異なっていた可能性がある。

そこで 17 世紀代を前半と後半とにわけて、水堀・空堀それぞれの堀のあり方から屋敷境としての堀の変遷をみることにしよう。

## 第 2 項 17 世紀前半の堀

### (1) 水堀

飯田町遺跡は麴町台地と本郷台地に挟まれた谷に位置する遺跡である。17 世紀前半の飯田町遺跡は榊原家の上屋敷である。『正保年間江戸絵図』（1644-1648 年）には、堀跡に該当する流路が、榊原邸と旗本屋敷との屋敷境となっていた様子を見ることができ（資料編図 60）。「堀跡」（図 61）は、幅 10-13m、深さ 1.0-1.5m である（千代田区飯田町遺跡調査会 2001）。屋敷境の堀の中でも幅の広い遺構の一つだが、底面の造りは平坦で浅さが特徴的である（図 10-30）。

北垣によれば、城郭の堀には水に弱く崩落の恐れがある水堀は好んで用いられるものではなかったとされる（北垣前掲）。堀幅は矢や鉄砲の射程距離によって大小に変化するが、いずれにしても飯田町遺跡の「堀跡」ですら、堀幅としては広すぎることではない。浅く平坦な飯田町遺跡の水堀は、この点において防禦性を有していたものではないといえる。「堀跡」を検出した砂利面では、堀の土留や護岸施設の他に遺構は未検出なため、屋敷内の下水との関わりや、屋敷境として塀や柵を伴っていたかなどは不明である。

榊原家は 1590 年（天正 18）に不忍池を臨む高台に屋敷（池之端屋敷）を拝領しているが、小石川御門外のこの屋敷地は 1590 年代終わりまでに拝領した。拝領時の屋敷周辺は、江戸城直下から日比谷入江へ注ぐ平川の流路にあたっていた。初期の江戸にとって物資流

<sup>22</sup> 文部科学省構内遺跡は覆土には明確な水成堆積層は確認できないが、遺構が江戸城外堀に接続していることから通水があったものと判断した。

<sup>23</sup> 【屋敷】の欄では、中屋敷・下屋敷・抱屋敷を一括して下屋敷（下）としている。

通の要衝だった点を、報告書では榊原康政がこの地に屋敷を与えられた背景として注目している（千代田区飯田町遺跡調査会 2001）。

「堀跡」の構築年代は詳らかでない。また前述のように検出面に「堀跡」以外の遺構が未検出なので、これが榊原家拝領直後から屋敷境だったかは不明である。しかし『正保年間江戸絵図』で描かれた流路がこれに該当するという前提に立てば、堀は平川が埋め立てられて宅地化された段階で構築されたものと位置付けることができる。平川周辺の宅地化は 1620 年代に行われた駿河台の堀割工事によって、神田川が大川へ接続したことを契機に進められる（郭内を流れる平川は一部が外堀に利用された他は埋め立てられた）。飯田町遺跡の「堀跡」は、この段階で構築された榊原邸の屋敷境である可能性が高い。

後藤は江戸の市街地が拡大していく中で、臨海部や河川部が水はけのための堀や排水路を設けた上で埋め立てられていったことを指摘している（後藤 2004）。本遺跡の北側にある春日町遺跡第Ⅳ地点や後楽二丁目南遺跡でも、堀（6 類）にあたる大型の溝状遺構を検出している。そのうち春日町遺跡第Ⅳ地点 1 号溝は、安志藩と小嶋藩の屋敷境をなした幅 4m を越える水堀（1 号遺構）である（図 10-47、資料編図 76、文京区遺跡調査会 2000）。

両遺跡の立地は飯田町遺跡と同様に、東側を本郷台地に、西側を麴町台地に挟まれた谷にあたる。『御府内備考』には小石川大谷と呼ばれる湿地がひろがっていたことが記されている。飯田町遺跡周辺で大型の堀（6 類）を多く検出しているのは、これらが谷の宅地化に伴う排水施設としての役割があったからと推測される。

山の手台地と呼ばれる武蔵野台地東側は、台地内の谷頭から発する小河川による樹枝状の浸食谷が多い（貝塚爽平 1979）。山の手台地に立地する江戸西側の宅地化は、これらの谷にまで及んでおり、飯田町遺跡や春日町遺跡以外にも、造成地の排水を意図した屋敷境として大型の水堀（6 類）が構築されていたものと考えられる。

文部科学省構内遺跡 005 号は、外堀に面した内藤邸の屋敷境である。内藤家長がこの地を拝領したのは 1591 年（天正 19）のことで、拝領当初の屋敷境は素掘りの溝（1 類）である。005 号は自然堆積層上に盛土造成された生活面に伴う屋敷境で、素掘りの溝（1 類）である 007 号を切っている（資料編図 54）。構築年代は不明だが、出土遺物から 1630 年代に廃絶したことがうかがえる（文部科学省構内遺跡調査会 2004）。

005 号には木組みの溝や暗渠が接続していることから、屋敷内の下水を集約し、外堀へと排出した役割を担っていたことが推測される（遺物に基づく廃絶年代から、この外堀は 1639 年/寛永 16 に整備される以前のものである）。

遺跡は溜池東岸の台地上に立地しており、発掘調査では宅地造成のために行われた切り土の痕跡が認められているので、水堀の屋敷境には飯田町遺跡のような地盤の排水機能は有していない。

## (2) 空堀

有楽町二丁目遺跡は江戸前島の尾根先端に位置する遺跡である（武蔵文化財研究所 2006）。『別本慶長江戸図』（1602年頃/慶長7）では町人地にあっており、1606年（慶長11）に堀秀家らが屋敷地を拝領するのが大名屋敷の始まりである。

検出した屋敷境（S113系溝）は堀（6類）で、出土遺物から1630-40年代に廃絶したことがうかがえる（資料編図59）。

尾張藩上屋敷跡遺跡3-1号・4-1号は板倉周防守下屋敷の西側の屋敷境である（資料編図80）。構築年代は不明だが、1656年（明暦2）に尾張藩がこの地を拝領するので17世紀前半に位置付けた。

尾張藩邸になると、この堀を壊して石垣（3-1号石垣）が構築される（資料編図80）。3-1号石垣は上部が攪乱によって削平されているが、3-1号溝の上に堆積した硬化面（1層）が3-1号石垣に伴う尾張藩上屋敷の生活面と考えられる。また石垣のすぐ裏側にも硬化した地層（9層）が認められることから、3-1号石垣は土留（7類）となる。したがって両者はほぼ同じ場所に構築された屋敷境でありながら、尾張藩邸になった際に屋敷境としての堀は引き継がなかったことになる。

なお紀尾井町遺跡で検出したSD34は幅13m、深さ4mで、遺構の形態と規模からは堀（6類）に分類できる（千代田区紀尾井町遺跡調査会1988）。しかし遺構内部に木樋や廃棄土坑が構築されており、SD34自体が単独で屋敷境の施設にはなっていないことから分析の対象からは除外する。

## 第3項 17世紀後半の堀

### (1) 水堀

#### a. 丸の内三丁目遺跡

丸の内三丁目遺跡は調査区西側を日比谷入江の埋め立てによって造成された大名屋敷である。26号溝には、5面段階に帰属する26号溝（旧）と3面段階に帰属する26号溝（新）とがある（図6）。26号溝（旧）は日比谷入江の埋め立て時期や5面の出土遺物の年代から、17世紀前半に帰属する屋敷境だが、26号溝（新）に大部分が壊されているため詳細は不明である。3面の上限年代は不明だが、26号溝（新）は両岸が築石で護岸された水堀で、北側の土佐藩邸（MS1）では長屋塀型表長屋を伴うことから17世紀中葉以降であると考えられる。



26号溝（新）に伴う長屋塀型表長屋の北側にある89号溝が、長屋の北側を区画する施設である。素掘りの溝だが、西側の延長上に板樋の13号溝が存在することから、89号溝も本来は板樋だったことが推測される。13号溝と89号溝は14号溝に接続しており、これが26号溝（新）に接続している（図6）。このことから26号溝（新）が屋敷内の下水の排出先だったことがわかる。

長屋塀型表長屋は石組溝による屋敷境（2類）の石垣護岸を土留として利用した居住施設である。石組溝による屋敷境（2類）は下水溝を兼ねているが、長屋塀型表長屋に伴う26号溝（新）も下水溝を兼ねていた。屋敷境の形態が堀（6類）なのは、日比谷入江の埋立地に立地しているために、地盤に含まれる地下水の排水処理を兼ねたものだったことによるものだろう。

#### b 汐留遺跡

汐留遺跡には北から龍野藩上屋敷、仙台藩上屋敷、会津藩中屋敷の3つの大名屋敷を含んでおり、それらに伴って8箇所の屋敷境（図11のA-F3）がある。発掘調査の対象となったのは屋敷境A2・B・C・F1・F2で、そのうち屋敷境として堀（6類）が構築されているのは屋敷境C（龍野藩邸と仙台藩邸の屋敷境、図12）と、屋敷境D（仙台藩邸と会津藩）である。発掘調査は屋敷境C（6J-500、資料編図72）で実施されており（東京都埋蔵文化財センター1997）、屋敷境Dは会仙川のため調査の対象外だった。

仙台藩邸内で検出した下水溝遺構の分布が図12下である。仙台藩邸は図面左（西側）に表門を構えており、図面右（東側）は汐留川になる。屋敷内の下水網は、屋敷の表から奥へと向かう東西の列線となる下水溝と、それに直交して南北の列線となる下水溝から構成されている。

屋敷境6J-500周辺の屋敷外郭部の遺構分布状況をみると（資料編図68）、6J-500と東西方向の下水溝（5K-109など）との間に表長屋（5K-141）がある（この表長屋と6J-500の間に土坑列があるので、長屋型表長屋だった可能性が高い）。長屋に伴う下水溝（5K-109）は調査区外を汐留川側へと続いている一方で、5K-633や5K-142によって屋敷境6J-500に繋がっている。そのほかにも屋敷内の下水溝のほとんどが、東西方向、南北方向にかかわらず4K-001や5K-009を介して6J-500に接続している。一方、屋敷内の下水溝で屋敷境A2へ接続するのは27号溝（汐留地区遺跡調査会1996）のみである。この屋敷境A2

(4K-007・2類)も北側で6J-500と接続してるので、仙台藩邸内の下水網は屋敷境C(6J-500)を幹線として敷設されていたことがわかる<sup>24</sup>。

汐留遺跡は江戸前島先端部の葦の茂る沿岸部<sup>25</sup>を、寛永年間に埋め立て造成した大名屋敷である(仙台藩の屋敷拝領は1641年/寛永18)。石崎俊哉による仙台藩邸の造成過程に関する研究によれば、造成の各段階で船入場空間が変化し、1676年(延宝4)に下屋敷から上屋敷へと唱替になる際に、船入場空間が表向に設けられた庭園の池となって消滅した(石崎2011)。

石崎は拝領直後の造成の目的の一つとして、海手側に大規模な船入空間を設置することをあげている。下屋敷段階の藩邸の状況は考古学的には不詳なため、仙台坂遺跡のような大規模な生産活動が行われていたかは不明だが、屋敷地の造成や屋敷の普請に必要となる多量の物資を搬入する上で、船入空間の整備は不可欠なものだった。船入堀を伴う船入場空間は、造成地の排水処理という点でも一定の役割を果たしていたことが推測される。上屋敷になって船入空間は消失したが、下水道を兼ねた屋敷境C(6J-500)が水堀として地盤の水はけの機能も担っていたのである。

屋敷境D(会仙川)は調査対象外のため、下水との関わりは考古学的には不明である。しかしその実態は『御府内備考』の次の記述から窺い知ることができる(史料3-1<sup>26</sup>)。

### 史料3-1

「大下水 巾貳間 右者町内往還横切下水ニ而町内新道之分より浜御殿脇え流落候」

史料3-1の大下水が会仙川のことで、幅が2間(約3.6m)の下水として機能していたことがうかがえる。この下水、即ち会仙川には「町内新道之分」の下水も合わせて浜御殿の西側を流れる汐留川に合流した。「町内新道之分」とは東海道の西側にある日影通りの沿いの下水のことで、図11にある芝口二丁目、芝口三丁目、源助町、露月町、柴井町の西(裏側)にあたる。

---

<sup>24</sup> 『仙台藩江戸上屋敷略絵図』(松林家資料、渡辺洋一1987、1817年/文化4)では、屋敷境Cに該当する部分に「御堀堀」という書き込みがあり、『御上屋敷絵図』(奥州市立水沢図書館、19世紀初め)には「下水堀」とある。当時の仙台藩邸でも、屋敷境Cが下水を流す「堀」と認識されていたことがうかがえる。なお上記の絵図では屋敷境A(4K-007)についても「此堀」、「御堀」と記されている。本研究では4K-007を石組溝(2類)に分類しているが、当時の認識ではどちらも「堀」であったことは留意すべきだろう。

<sup>25</sup> 『武州豊島郡江戸庄図』の描写による。

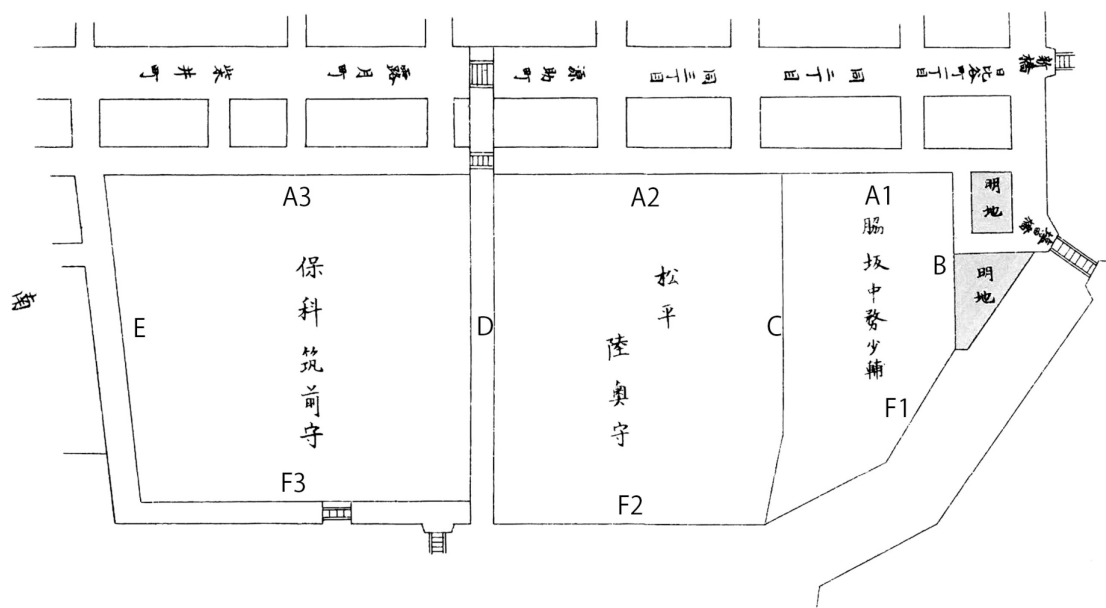
<sup>26</sup> 『御府内備考 芝之二 源助町』。以下、『御府内備考』は蘆田伊人編(1970年・雄山閣)によった。

この下水は同じく『御府内備考』には幅 6 尺（約 1.8m）<sup>27</sup>で、武家屋敷との屋敷境になっていたことが記されている。このように東海道沿いの町屋や日影町通りに面した武家屋敷から排出された下水は、仙台藩邸と会津藩邸の屋敷境の堀（会仙川）に合流して、汐留川へと流れていた。仙台藩邸内の下水についても南側は会仙川に排出されていたことが考えられる。

---

<sup>27</sup> 会仙川の半分程度に過ぎないが、やはり「大下水」と表記されている。

『御府内沿革図書』延宝年中之形（1673-1681）



境	遺構	形態	構造差	上幅	下幅	深さ
A1	—					
A2-1	4K-007	2	不明	0.91	-	1.28
A2-2	1号溝（調査会）	2	○	0.48-0.55	-	0.86
A3	—					
B-1	6L-006	2	○	1.00	-	1.12
B-2	6K-0796	8		-	-	2.10
C-1	6J-335	7	○	3.80	3.80	2.40
C-2	6J-500	7	○	〃	〃	3.00
D	—(会仙川)					
E	—					
F1-1	6K-0412	8	-	-	-	-
F1-2	6K-0545/7J-044	2	不明	0.48	-	0.28
F2	6I-407		不明	0.40	-	0.32
F3	—					

図 11 『御府内沿革図書』（朝倉 1985）にみる汐留遺跡の屋敷境

龍野藩邸

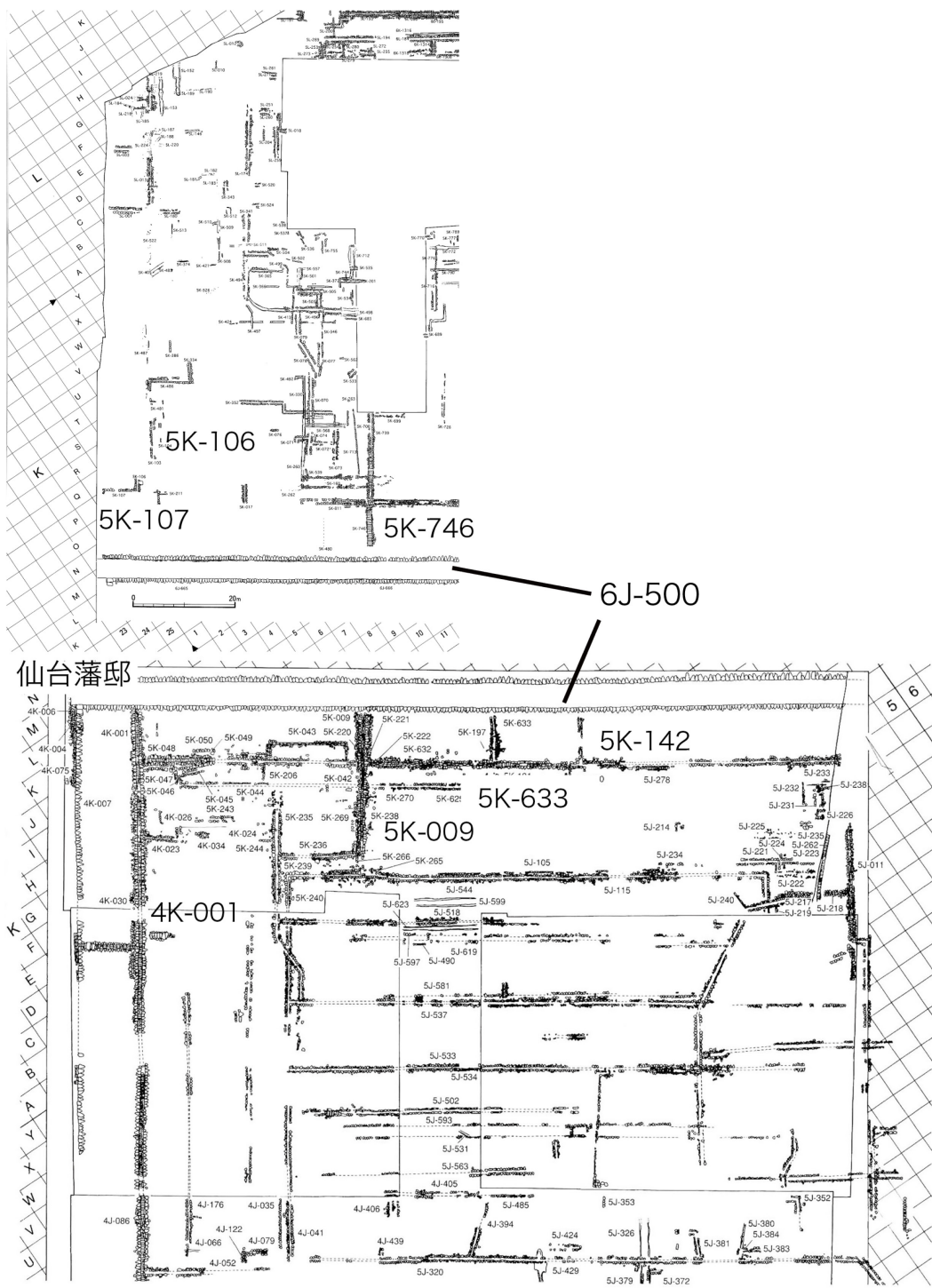


図 12 6J-500 と龍野藩邸、仙台藩邸の下水網（東京都埋蔵文化財センター2000 を基に作成）



## (2) 空堀

空堀は江戸郊外の下屋敷と強い関係が認められる（表 7）。通水の痕跡が認められないことから下水道としての機能を有していなかったことは明らかだが、具体的な機能・用途は不明である。橋口は「江戸城下を防衛する前線基地」としての役割を調査例から想定しているが（橋口前掲）、空堀による屋敷境は中山道・日光街道沿い以外の下屋敷跡遺跡でも検出しており、その検出例は主要街道筋とは限らない。加えて、構築年代が 17 世紀後半以降<sup>28</sup>であることから、この仮説はなお検討を要するものと思われる。

下屋敷の屋敷境としての空堀（6 類）の検出例は、橋口が例にあげた豊島区内の諸遺跡のほか、仙台坂遺跡や新宿六丁目遺跡などがある。

仙台坂遺跡は仙台藩の下屋敷（下大崎の拝領屋敷）である。『諸向地面取調書』（1856 年・安政 3）によれば敷地は 16,680 坪を擁していた。調査地は屋敷北側の外郭部一帯にあたる

検出した屋敷境遺構は「堀跡」と呼ばれる上幅 5.0m、下幅 2.5m、深さ 2.0m の断面が逆台形を呈した遺構である（図 14）。軸は北西から南東方向で、藩邸北側にある道（仙台坂）に沿っている。

堀は地山を掘削して構築されているが、断面には土留め施設の痕跡は存在しない。覆土の堆積層には水付きの痕跡は認められない。堀の屋敷側には、立ち上がりの肩の部分（平坦部）に 3 号堀跡がある（図 14 の断面図）。これは堀の内側に巡っていた堀と推測される（品川区遺跡調査会 1990）。

いずれも広大な藩邸の中で、調査を実施したのは屋敷境を含むごく一部の範囲に過ぎないので、屋敷の空間構成への位置づけが十分に行われていないのが現状である。ここで注目されるのが大村藩下屋敷（東京大学白金構内遺跡）の拝領に関する記録である（史料 3-2<sup>29</sup>）。

### 史料 3-2

「一 御下屋敷被成御拝領候由、然共御地奉行衆方御渡し不被成候由、御受取被成候者、屋敷惣かわ堀を堀、土居を上ケ、竹植候様ニと被 仰付候由、其上屋敷内ニ番衆家一御作り被成候由、是ニも大分御物入かと奉存候」

---

<sup>28</sup> 構築時期が、1657 年（明暦 3）に大名屋敷の家作制限として櫓門が禁止され（注 19）、「大名屋敷に戦闘的な性格を認めない」（波多野前掲）という時期にあたる。

<sup>29</sup> 『大村見聞集』。引用は藤野・清水 1994 による。

大村藩が白金に屋敷を拝領したのは1662年（寛文2）のことである。史料3-2は拝領の進捗状況を江戸から国許へ報告したものである。これによって下屋敷の周囲には堀と土居による屋敷境が構築されていたことがうかがえる。さらにこの堀と土塁が、「御地奉行」からの指示で構築されていたことがわかる。

大村藩下屋敷を描いた絵図は伝世していない。東京大学白金構内遺跡でも、これまでの発掘調査はいずれも屋敷内側のため、屋敷境の状況は不明である。今後の白金構内遺跡の調査によって、屋敷境遺構の実態が明らかになることが期待される。

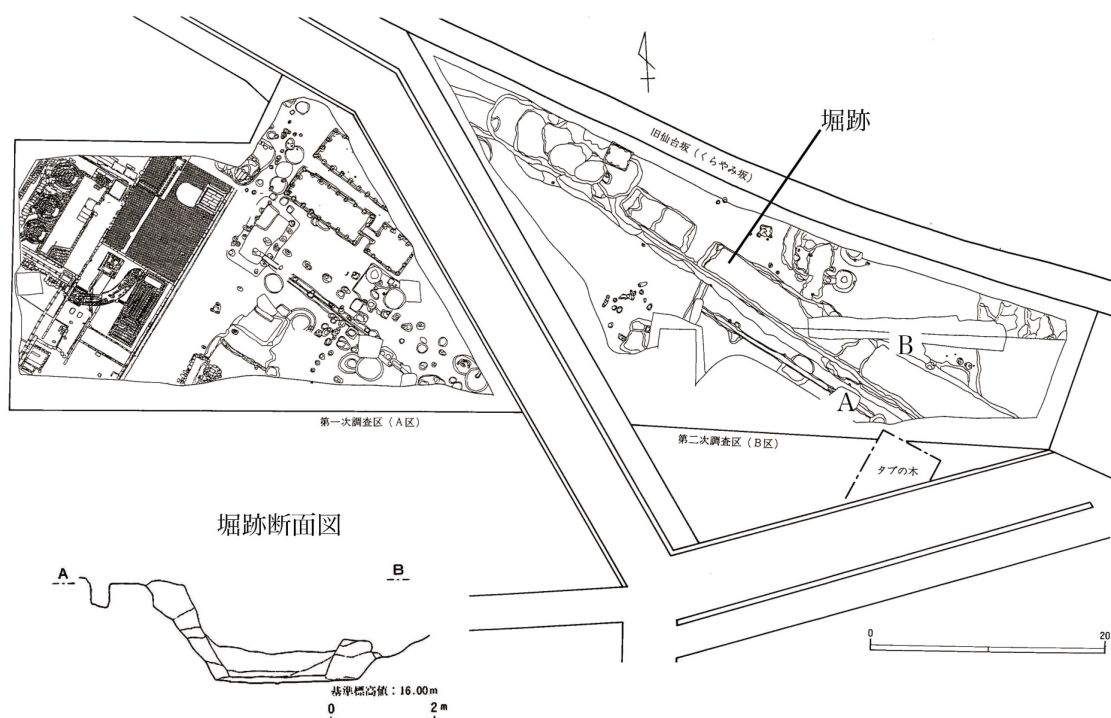


図 14 仙台坂遺跡堀跡（品川区遺跡調査会 1990）



#### 第4項 屋敷境としての堀の機能

以上のように大名屋敷の屋敷境としての堀は、水堀と空堀とで異なる機能を有していた。水堀は埋立地に立地する大名屋敷に伴い、湿潤な地盤の水はけを目的とした排水処理の役割を担っていた。日比谷入江や沿岸部のような東京低地に留まらず、山の手台地でも小河川の開析谷を宅地化している場所では屋敷境として水堀が構築されている。その意味で水堀は、江戸の拡大に伴う都市開発に不可欠な都市基盤であったといえるだろう。

17世紀後半になると大名屋敷の屋敷境は石組溝（2類）が出現し、急速に普及する。これは下水道を兼ねており、江戸の下水網整備に伴って大名屋敷の屋敷境に構築された施設が、塀・柵（3類、4類、5類）から下水溝へと替わっていった<sup>30</sup>。地盤の排水処理を担った水堀もまた、この時期から下水道としての役割を担っている。なお17世紀前半の文部科学省構内遺跡005号は、屋敷内の下水を外堀へ排出している状況がうかがえるので下水処理施設である。しかし史料3-1にあるように、17世紀後半の屋敷境が担った下水溝（水堀も含む）は、個々の大名屋敷の下水のみを排出するのではなく、周囲の武家屋敷や町屋の下水も流した都市インフラとしての下水道だった（史料3-1）。文部科学省構内遺跡005号は、あくまでも屋敷内の下水を屋敷外（この場合は外堀）へと排出する施設であるという点で、都市インフラとしての下水道とは異なるものである。

春日町第IV地点1号遺構では水堀の護岸に雁木が設けられていた（文京区遺跡調査会前掲）。検出例は少ないが、屋敷境が水堀だった大名屋敷では舟運としての利用もなされていたことがうかがえる（資料編図76）。

一方、空堀（6類）は屋敷境という機能は水堀と共通するとはいえ、下水道を兼ねるという附帯的な役割は伴っていない。17世紀前半の屋敷境の主体的な形態は、柱穴列（4類）や柱穴を伴う溝状遺構（3類）であり、これに最初期の大名屋敷の屋敷境に伴う素掘りの溝（1類）も10基認められる（資料編表36）。こうした状況は、屋敷のぐるりを塀・柵が取り囲む景観を推測させるものである。

該期の空堀の検出例は、現在までのところ有楽町二丁目遺跡、尾張藩上屋敷跡遺跡に限られている。いずれも遺構深度は1.0m以下と浅く、立ち上がりは緩やかな台形状をなしているものの、素掘りの溝（1類）のような塀・柵・生垣の掘り方とは異なり、堀、即ち溝状の掘り込み自体が屋敷境として機能していた点で、塀や柵をなす諸形態とは異なる屋

---

<sup>30</sup> 江戸の下水道整備は史料の欠落によって、1648年（正保5）の触書き（史料2-2）以前の状況が不明である。考古学的には石組溝による屋敷境（2類）が下水道を兼ねているので、これが出現する17世紀半ば以降に下水道が普及したと捉えられる。それ以前の下水処理は史料としては不明だが、会所地などの明地への排出（伊藤好一1982）や、屋敷内や近隣を流れた河川へ排出したことが考えられる。

敷境のあり方である。このことから 17 世紀前半の大名屋敷の景観には、屋敷のぐるりを塀や柵などが囲むものを主体としながら、空堀が取り囲む（その内側に塀や柵を設けていた可能性がある）例も存在したことがうかがえる。

17 世紀後半以降になると上述のとおり石組溝（2 類）が普及することに伴い、堀（6 墨）の中でも下水道を兼ねない空堀は、他の形態と同様に石組溝（2 類）へと替わっていく。これについては本章第 4 節でとりあげるが、そうした変化があってもなお屋敷境として敷設され続けたのが江戸郊外の下屋敷である。

17 世紀前半にみられた空堀が、立ち上がりが緩やかな台形状の断面を呈するのに対して、該期の空堀は立ち上がりが急斜度の、いわゆる薬研堀と呼ばれる堀に類似した形状を呈している点で異なっている。江戸郊外の大名家敷という空間的なひろがり、該期の空堀の形状から、江戸の防禦を担う大名屋敷の役割が推測される（橋口前掲、小川前掲）。しかし史料 3-2 にみたように、郊外にある下屋敷の屋敷境としての空堀構築には幕府の指示があったことは明らかであるが、その意図は不明であるので、17 世紀後半以降という時期的にもただちに防禦性と結び付けることは避けるべきだろう。

### 第3節 大名屋敷の屋敷境としての堀と防禦性

1590年代の大名屋敷の実態は、文献史料と考古資料がともに限られているため不明なことが多い。史料3-3は、『榊原氏系譜』での榊原邸（池之端邸）と井伊邸拝領に関する記述である<sup>31</sup>（傍線は筆者による）。

#### 史料3-3

「天正十八年庚寅年九月十日、家康公関東御入国、江戸御城御巡見有之、井伊直政ニ居屋敷地賜之。西丸ニ続平山之砦ニ可成地也ト。深キ思召ニテ被下候由。

同日康正エ池ノ端向ヶ岡ノ臺を被下。此地後ニ茂ミ有之、平山ノ砦ニ可成地也。其上阿波・上総及奥州羽州之海道ヲ遙ニ見下し、前ニ大成池ヲ構エたり。其時関東筋未穩、依テ御入国之砌、領家エ要地賜之旨申伝。」

「関東筋未穩」という時世にあつて、江戸城の出城（平山の砦）となることが期待された賜邸だった。しかし第2章の分析から、該期の大名屋敷の屋敷境は素掘りの溝（1類）で囲まれていたことが明らかになった。溝の内側には、塀や柵、あるいは土塁などが構築されていたことも考えられるが、発掘調査の成果からはそうした痕跡は現段階では認められない。

また榊原康政は池之端邸を拝領してから程なく、小石川門外にも屋敷を拝領した（第2章第2節第2項）。拝領直後の屋敷境については詳らかでないが、平川が埋め立てられて市街地化した段階の屋敷境である飯田町遺跡堀跡は水堀（6類）ながら、浅く平坦な構造は埋め立て地盤の水はけを促す排水施設と捉えられた。このように16世紀末から17世紀前半の大名屋敷においては、「堀」を構えた江戸城の出城的な防禦性を持つ大名屋敷という景観は、考古学的には浮かびあがってこないのである。

東京大学小石川構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点（以下、東京大学小石川構内遺跡博物館地点）SD1（図17-A）と白山御殿跡遺跡第4地点1号遺構（図17-C）は、3m以上の深さまで掘削された大型の堀（6類）であるという点で、屋敷境の堀（6類）としては特異なものである。両地点の屋敷境遺構から、大名屋敷の堀と防禦性との関わりを検証しよう。

---

<sup>31</sup> 史料は『東京市史稿 市街編第二』（東京市役所1914）による。

#### (1) 東京大学小石川構内遺跡博物館地点 SD1

東京大学白山構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点 SD01 は幅 9.2m 以上、確認面からの深さは 2.7m 以上ある。遺構の確認面から 2.6m ほど掘り下げたあたりで遺構の壁面が粘土層から砂礫層へと変わり、湧水を確認した。これより下位の掘削は断念した。遺構両側の立ち上がりは確認できていないが、壁面の仰角は約 37°で、途中で犬走り状の施設を持つ（成瀬晃司 2004・図 15）。

調査面積が 45 m<sup>2</sup>と狭小のため、遺構の完掘には至らなかったが、調査地点が小石川御殿の南西隅にあたることから、堀による屋敷境遺構 6 類と捉えられる。

遺物は少なく、破片も含めて十数点に過ぎなかった。肥前製の碗や鉢、カワラケが含まれている。遺物の年代からは 17 世紀後半から 18 世紀初頭に位置づけられる。

#### (2) 白山御殿跡遺跡第 4 地点 1 号遺構

白山御殿跡遺跡第 4 地点は白山御殿北東側に位置する。1 号遺構は幅 17m 以上、深さ 3m の溝である（文京区遺跡調査会 2003）。全体の形状は調査区からは窺い知ることができないが、平面形状が L 字状を呈している（図 16）。堀による屋敷境遺構 6 類である。

遺構の最下層に堆積している土は黄褐色土である。D トレンチでは灰色粘土層の下に褐色土層が堆積していて、観察所見によればロームの褐色土を貼り床状に構築したとある（文京区遺跡調査会前掲）。こうした覆土の堆積状況は前段の SD01 にみられた水成堆積とは対照的である。

遺物は肥前製の陶器碗 1 点、瀬戸・美濃製の陶器碗 1 点と、挿鉢 2 点が報告されている。肥前製陶器碗は「小松吉」の刻印を有した京焼風陶器である。ただし点数が少ないため遺物組成から年代を位置づけることは難しい。18 世紀代の遺構に切られていることから、1 号遺構は 17 世紀代に位置づけられる。

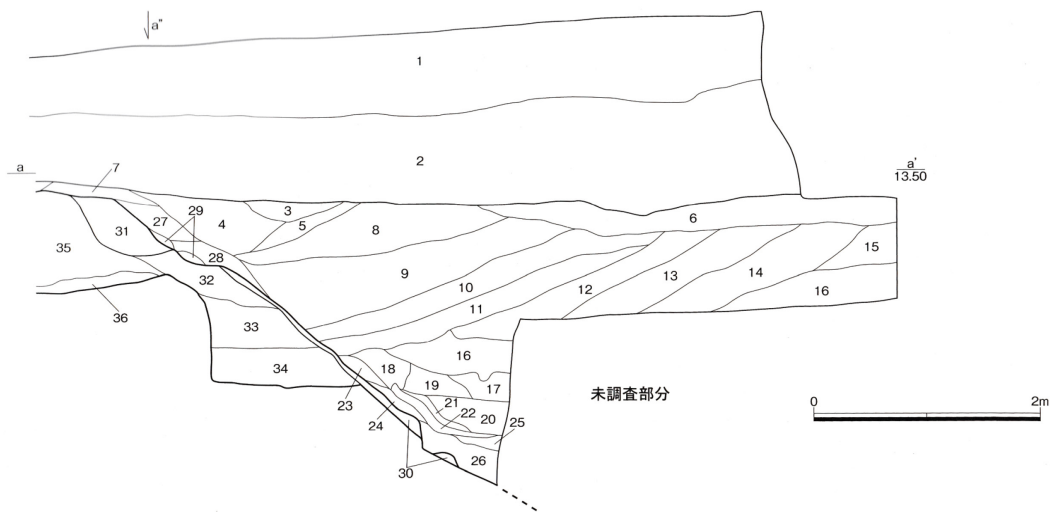
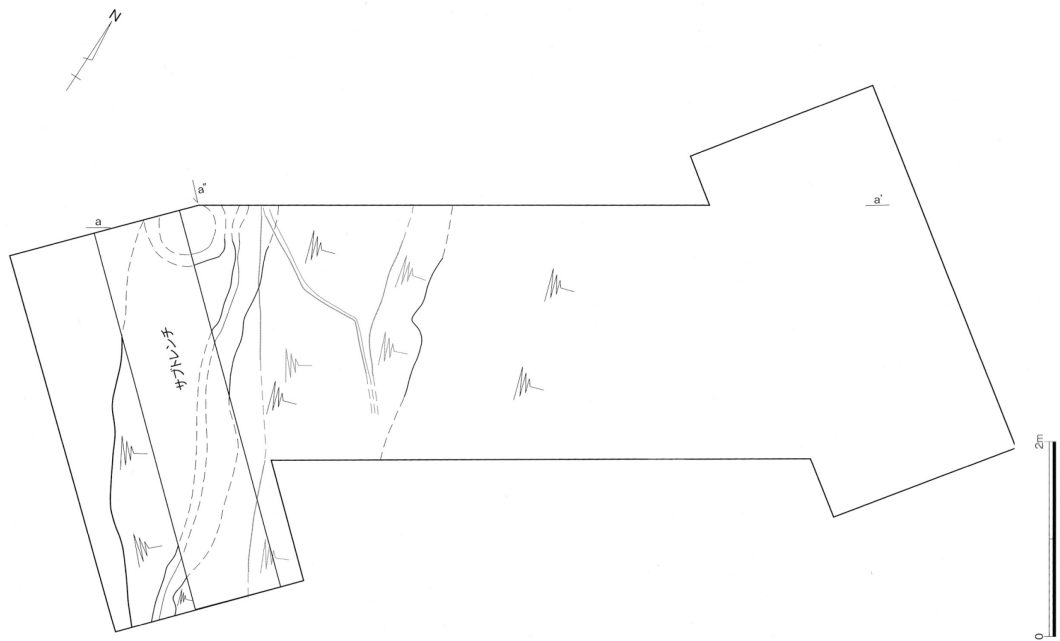


図 15 東大白山構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点 SD01 (東京大学埋蔵文化財調査室 2008)



断面図記録部分

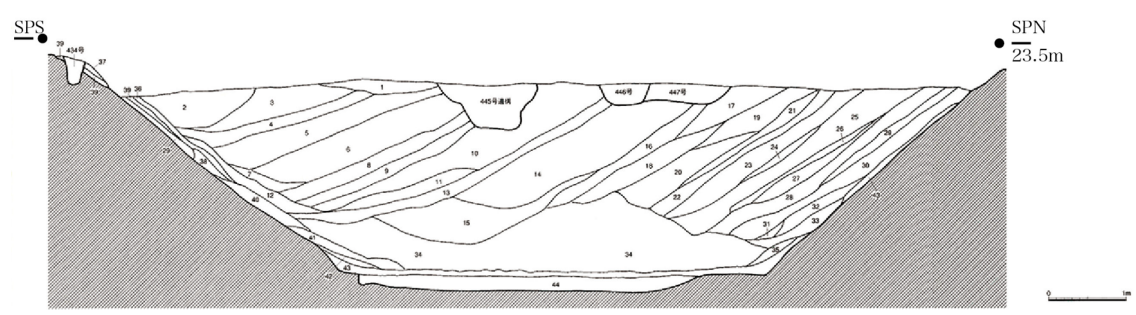


図 16 白山御殿跡第 4 地点 1 号遺構 (文京区遺跡調査会 2003)

成瀬晃司はこの二つの遺構と、図 17-B の整地遺構<sup>32</sup>には、規模の大きさに加え、次のような共通点が存在することから、図 17-A から図 17-C を、大名屋敷を囲む一連の屋敷境（6 類・堀）と想定した<sup>33</sup>（成瀬 2008）。

- ①底面が平坦に成形される。
- ②遺構立ち上がりの勾配が 30-40 度。
- ③溝底または壁面直上に貼土が認められる。
- ④覆土の堆積状況から遺構の埋め戻しが一方向からなされたと判断できる。



図 17 白山御殿堀範囲推定図（成瀬 2008 より）

<sup>32</sup> 原町遺跡では自然地形による落ち込みを平坦に造成した痕跡としたことから、遺構の形態などが不明となった（文京区遺跡調査会 1994）。そのため本論文では分析対象から除外した。

<sup>33</sup> 東京大学小石川構内遺跡では湧水が認められるが、白山御殿跡遺跡では水付きの痕跡が認められないので、表 7 の【流・滯水】欄は不明とした。

遺構の構築年代は詳らかではないが、SD1 では 18 世紀前葉の遺物が出土しており、1 号遺構は 18 世紀代の遺構に切られていることから、廃絶年代の下限は 18 世紀前葉に位置づけられる。この時期の遺跡は幕府の白山御殿にあたる<sup>34</sup> (表 8)。

屋敷内の様子は『御府内備考』に、「周囲に渠を鑿ち、土手あり、石垣を築きて白壁の塀、.....東に面して楼門と櫓とあり」とある<sup>35</sup>。図 18 は『宝永江戸図鑑』における白山御殿である<sup>36</sup>。藩邸内部の構造は詳らかでないが、屋敷の周囲は堀と石垣が巡っていて、所々に櫓門が設けられている。

現在までのところ、発掘調査で櫓跡や石垣の状況は未確認だが、屋敷をめぐる堀や石垣などのあり方が『御府内備考』の記述通りであるならば、小石川御殿は極めて防禦性の高い屋敷ということになる。

大名屋敷の櫓門は 1657 年 (明暦 3) の家作制限によって禁止された (高柳・石井 1934)。1680 年 (元禄 11) に成立した白山御殿は、大名屋敷ならば時期的に櫓門の建築は不可能だった。この屋敷にみられる防禦性の高さは、幕府の御殿 (将軍の別邸) だったことによる可能性が高い。

発掘調査によって櫓門の存在を確認しているわけではないので、『宝永江戸図鑑』に描かれた堀と石垣が周囲を取り囲む小石川御殿の景観も、どれほど実態を反映したものであったかは不明である。しかし屋敷境の堀 (6 類) の中でも特に大型の堀が、小石川御殿の時期に構築されたことから、屋敷に備わる防禦性が将軍の別邸という歴史的背景による可能性が高い。

それでは小石川御殿の堀 (6 類) の防禦性はどの程度のものであったのだろうか。江戸城の堀と比較してみよう。

『五千分一東京図測量原図』<sup>37</sup>によれば、江戸城外堀の幅は大手門付近で 50m、市谷門付近で 75m である。深度は文部科学省付近で約 3m である<sup>38</sup>。丸の内一丁目遺跡では外堀普請以前に構築された江戸城の堀の一部を検出した (03 号遺構)。堀幅は不明だが、深さは 4.4m 以上あり、障子堀の可能性が指摘されている (千代田区丸の内一丁目遺跡調査会

---

<sup>34</sup> 東大小石川構内遺跡博物館地点は 1698 年 (元禄 11) に屋敷が拡張された際に藩邸へ組み込まれた場所なので、SD1 の構築年代はそれ以降である。

<sup>35</sup> 『御府内備考』は蘆田伊人編 (1970 年/雄山閣) によった。

<sup>36</sup> 飯田・俵 1988 によった。

<sup>37</sup> 参謀本部陸軍部測量局。日本地図センターによる復刻版 (参謀本部陸軍部測量局・日本地図センター 1984) によった。

<sup>38</sup> 明治時代の測量図では堀の上面の標高は 6.7m である。文部科学省構内遺跡で検出した堀底の標高は 3.7 m (文部科学省構内遺跡調査会 2005) なので、堀の深度を約 3m と算出した。



2005)。江戸城は近世城郭の中でも最大規模の城ではあるが、そのことを差し引いても大名屋敷の堀として特に大型の小石川御殿の堀であっても、波多野の言うような「戦闘のための城郭的な構え」（波多野前掲）を見出すことは難しいのである。

ここで想起されるのが、江戸の武家屋敷で枳形門を構える浜御殿である。この屋敷は承応年間（1652年-1654年）に徳川綱重が甲府藩下屋敷として拝領し、家宣の將軍就任（1704年/宝永元）とともに將軍の別邸となった来歴がある。大名屋敷の門は大名家の家格によって型式が細かく規定されている。しかし武家故実をまとめた『青標紙』（大野広城・江戸叢書刊行会 1980）をみても、枳形門をとる大名屋敷は存在しない。

以上のことから、小石川御殿で検出した堀や、絵図に描かれた櫓などは、実戦に即した大名屋敷の防禦的機能と捉えるよりは、むしろ堀と櫓を備えた屋敷の景観が、將軍の權威を具象化したものであった可能性が高い。權威性を考古学から検証することは難しいが、小石川御殿や浜御殿はいずれも大名屋敷から將軍の別邸になっているので、屋敷境遺構や門遺構を発掘調査する機会があれば、その構造や変遷を通して考古学的に検証できると思われる。

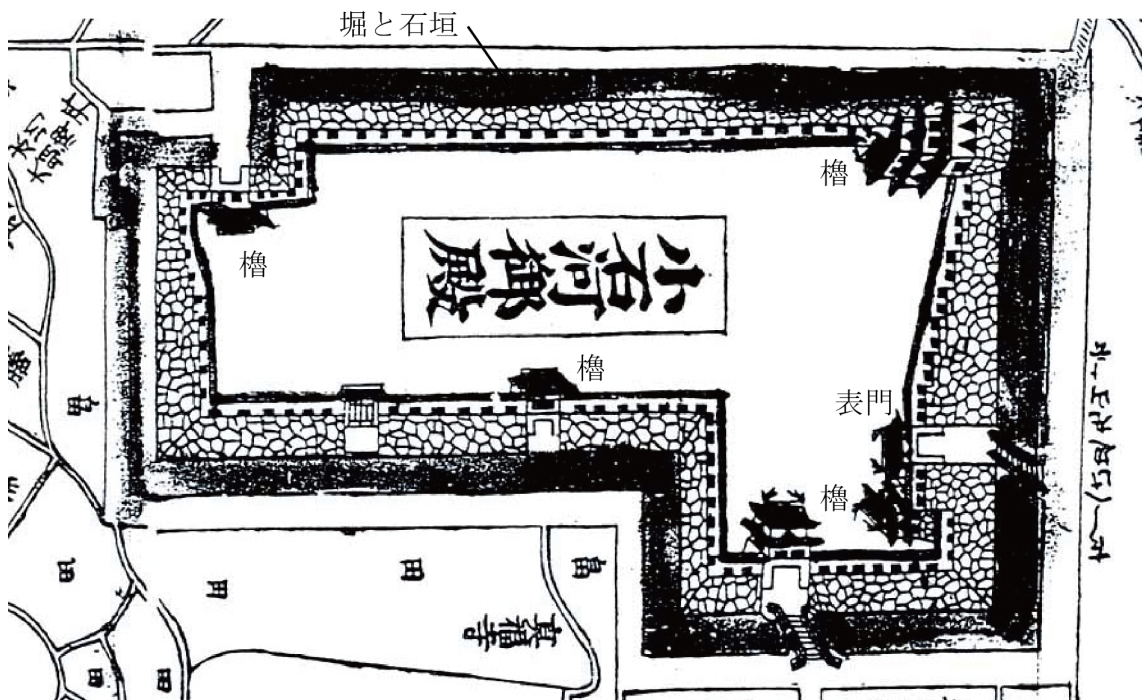


図 18 『宝永江戸図鑑』における小石川御殿（飯田・俵 1988 より）

年代	館林藩邸/白山御殿	綱吉の動向
1652（承応元）	松平徳松、下屋敷として拝領	松平徳松、下屋敷として拝領
1661（寛文元）		館林藩主就任

1680 (延宝8)	白山御殿 (天和初年頃)	将軍就任
1698 (元禄11)	北・西側に拡張	
1705 (宝永2)		桂昌院逝去
1709 (宝永6)		逝去
1713 (正徳3)	廃止	

表 8 館林藩下屋敷・小石川御殿関連年表

## 第4節 屋敷境の変化と堀の消滅

### 第1項 高田藩池之端屋敷の屋敷境

東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点の調査区は無縁坂から続く道を含み、その北側が大聖寺藩邸、南側が榊原邸である。調査では北側で大聖寺藩邸の屋敷境を、南側で高田藩邸（榊原邸）の屋敷境を検出した（資料編図 47）。

榊原邸の屋敷境遺構は、3号溝、1号溝、石組遺構（AB33・34区組石遺構）の3基が認められる（図 19）。

#### (1) 3号溝

3号溝は上部幅1m前後、下部幅30cm前後の逆台形状をなす溝で、護岸のための板材や石材の痕跡は認められない。素掘りの溝による屋敷境遺構1類である。深さは0.3-0.7mで、南側の一部を除き大部分が1号溝によって壊されている。

そのため3号溝を屋敷境とする段階の道については不明である。しかし遺構掘り込み面が1号溝とほぼ同じであることと、1号溝に伴う道（18層）が自然堆積層直上に構築されていることから、3号溝も18層を道としていた可能性が高い。

#### (2) 1号溝

1号溝は上の幅が2.5-3.0m前後、下の幅が0.5mの逆台形状を呈し、深さは1.0-1.1mである。3号溝と同様護岸の痕跡はない。堀による屋敷境遺構6類である。遺物は18世紀後半の陶磁器類が出土している。

1号溝を屋敷境とする道（18層）の北側に、東西方向にのびる柱穴列（2号柱穴列）を検出する。これが大聖寺藩邸の屋敷境（柱穴列・4類）である。したがってこの間の4.5mが、榊原邸と大聖寺藩邸との間の道幅である。

#### (3) 石組遺構（AB33・34区組石遺構）

AB33・34区組石遺構は幅1m、深さ0.6mで、南側の護岸の一部に築石を1段残す石組溝（2類）である。榊原邸（1号溝）と大聖寺藩邸（2号柱穴列）との間の道が0.5m嵩上げされた（13層）ことに伴って造り直された榊原邸の屋敷境である。

大聖寺藩邸の屋敷境は未検出だったが、道（13層）は北側（大聖寺藩邸側）に6.8m以上続いている。したがってこの嵩上げによって、道幅が4.5mから6.8m以上に拡張された

ことになる<sup>39</sup>。榊原邸の屋敷境は形態こそ変化しているものの、位置はほぼそのままであるのに対して、大聖寺藩邸の屋敷境は2号柱穴列の周辺に新たな屋敷境遺構を検出していないので、道の拡幅に伴う屋敷地のセットバックが北側の屋敷（この部分では大聖寺藩邸）を対象に行われたことがうかがえる。

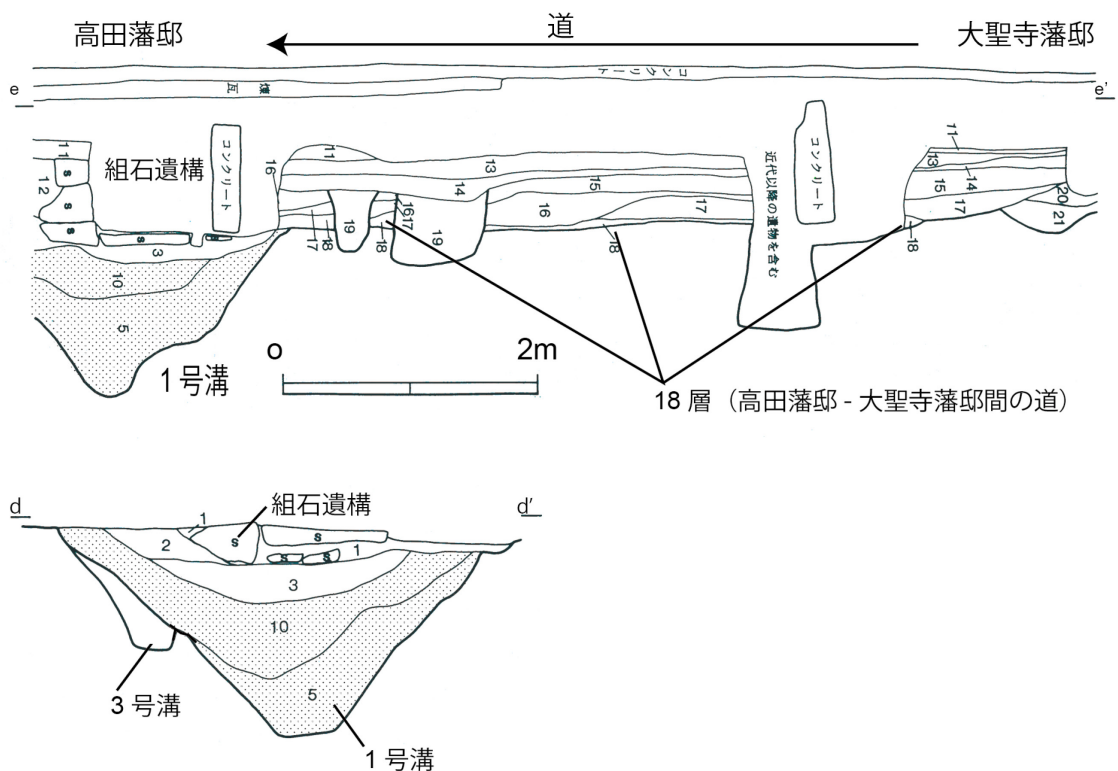


図 19 東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点の大聖寺-高田藩邸の屋敷境遺構（東京大学遺跡調査室 1990 改変）

遺構	上幅	下幅	深さ	時期	形態
3号溝	1.0	0.3	1.0未満	1590年頃	1類_素掘り溝
1号溝	3.0	0.5	1.1	-18世紀後半	6類_堀
石組遺構	1.0	-	0.6	19世紀	2類_石組溝

表 9 大聖寺-高田藩邸の屋敷境遺構の変遷（単位はm）

<sup>39</sup> 藤本強は現在の無縁坂に続く道幅が7mである点から、この拡幅によって街区が定まったと位置付けた（藤本 1990a）。

## 第2項 屋敷境の変遷と堀の消滅

### (1) 素掘りの溝から堀への造り替え

以上のように榊原邸の屋敷境は、素掘りの溝（1類）から堀（6類）へと造り替えられ、最終的に石組溝（2類）へと変遷する（表9）。この変遷のうち、時期が明らかなのは石組溝（2類）への変化が18世紀末までに行われたということのみである。他の屋敷境遺構については構築年代、廃絶年代ともに詳らかではない。

本地点に隣接する第2病棟地点や茅町二丁目遺跡では、中世の板碑が複数基出土している。特に茅町二丁目遺跡では27基出土していて、いずれも近世の遺構覆土と包含層から出土したものだが、「應永十三年」（1406）や「康正二年」（1456年）の紀年銘を有する板碑も含まれる（台東区文化財調査会2005）。このことは池之端邸周辺が中世段階から生活が営まれた地域であることをうかがわせるもので、最初の屋敷境である3号溝も榊原邸拝領以前の屋敷に伴う屋敷境だった可能性も考えられる。

榊原邸内にあたる龍岡町遺跡第6地点では、中世の常滑製の甕または壺の破片が出土している。しかしこれは近世遺構の覆土に混入したものと捉えられており（文京区教育委員会2015）、現在までのところ東京大学本郷構内遺跡や龍岡町遺跡において、家康入府以前の屋敷の存在を積極的に窺わせる遺構や遺物は認められない<sup>40</sup>。このことから本研究では3号溝を、榊原邸に最初に構築された屋敷境遺構と捉えることにする。

『榊原氏系譜』では池之端邸は東北方面、房総方面などに対する江戸防衛のための出城として位置付けられている（史料3-3）。しかし拝領直後の池之端邸の景観は、素掘りの溝（1類）、即ち、簡易な塀や生け垣などで囲繞されたものである。

塀・生垣（3号溝）と堀（1号溝）の切り合い関係をみると、屋敷が接する道（18層）はそのままだに、屋敷境の施設のみが造り替えられたことがうかがえる（図19）。その理由は不明だが、初期の大名屋敷が景観的にも性格的にも、防禦性を伴う屋敷ではなかったことを示すものである。

### (2) 堀から石組溝への造り替え

榊原邸の屋敷境は、18世紀末までに堀（1類）から石組溝（2類）へと造り替えられる。石組溝（AB33・34区組石遺構）は覆土の堆積状況が不明であるが、他の大名屋敷で検出

---

<sup>40</sup> 龍岡町遺跡第7地点では宇井義典が中世段階の湯島の状況と、池之端屋敷との関係について考察を行っている（宇井2015）。

している石組溝（2類）と同様（図 6、図 12）、これも下水道を兼ねていたものと推測される<sup>41</sup>。

『御府内備考』の茅町二丁目の下水に関する記述には、榊原邸の下水について次のように記している（史料 3-4<sup>42</sup>）。

---

<sup>41</sup> 『高田藩池之端屋敷絵図』（東京大学大学院工学系研究科建築学科蔵・18世紀末）では、藩邸北側の屋敷境が青色で彩色されているので、下水溝だったことがうかがえる。

<sup>42</sup> 『御府内備考 卷之三十四茅町二丁目』。

#### 史料 3-4

「右当町南横町町屋際に幅貳尺五寸余の大下水有之候。右は無縁坂上榊原遠江守様御屋敷方土手際通り不忍池え落候下水に御座候。尤堀割候年代等相分り不申候。但右下水往還埋下下水にて橋等無御座候」

史料にある無縁坂上の榊原遠江守様御屋敷が、設備管理棟地点を含む榊原邸北側の屋敷境にあたる。この記述にみられるような下水網が整備された時期は不明だが、1号溝は覆土の堆積状況を見る限り空堀なので、18世紀後半に AB33・34 区組石遺構が構築されてはじめて、榊原邸の北側に下水道が構築されたことになる。

東京大学本郷構内遺跡で近く調査が予定されているクリニカル・リサーチセンターB 地点は、設備管理棟地点に続く榊原邸の屋敷境を調査区内に含んでいる。石組溝出現以前の屋敷内の下水処理や屋敷境の変遷に関しては、この発掘調査において更に解明したい。

17世紀代には多様な形態が認められた大名屋敷の屋敷境遺構は、18世紀以降になると石組溝による屋敷境（2類）に収斂していく。これは堀についても例外ではなく、17世紀後半以降になると屋敷境としての堀は、府内では谷や低地を造成した大名屋敷の排水施設としての水堀と、郊外の下屋敷に構築された空堀が残ることになる。特に府内の大名屋敷に関しては、湿潤な造成地に立地する屋敷以外の堀は、屋敷境遺構の他の形態と同様に下水を兼ねる石組溝（2類）へと変化する（表 6）。

榊原邸にみられる堀（6類）から石組溝（2類）への変遷は、こうした屋敷境としての堀の動向を具体的に示す事例である。

## 第5節 小結

本章では大名屋敷の屋敷境としての堀のあり方をみた。堀に囲われる大名屋敷は、一見すると防禦的な性格が想起される。しかし江戸城の要衝に配置されたと言われる最初期の大名屋敷には、考古学的には堀で圍繞された例はない。初期の大名屋敷の景観は、屋敷の周囲を簡易な塀や生け垣が巡るものである。

大名屋敷の屋敷境として堀が構築されるようになるのは17世紀前半になってからのことである。水堀は低地や台地上の開析谷にある大名屋敷跡遺跡で検出することから、湿潤な造成地の排水施設としての機能を担っていたことが推測される。空堀は掘削深度が1.0m以下と比較的浅く、両側の立ち上がりも緩やかであるという形状と、底部に畝や掘り込み、あるいは杭穴など、戦国時代の空堀にみられるような防禦性を高める施設が構築されていないことから、防禦性を伴わない大型の溝と捉えられる。

大名屋敷の屋敷境にとって画期となるのが、石組の屋敷境の出現である。江戸府内の下水網整備によって、17世紀中葉以降になると大名屋敷を囲っていた塀や柵は、下水道を兼ねる石組溝と長屋塀型表長屋へ替わっていく。

これを画期として堀のあり方は、水堀、空堀それぞれで大きく変わっていく。低地や谷の排水施設だった水堀は、下水道の機能を兼ねて18世紀以降も引き続き屋敷境として機能する。一方、空堀については、塀や柵のような他の屋敷境の施設と同様に、石組の下水道へと替わる。大名屋敷の屋敷境として幕末まで機能し続ける堀は、低地部の宅地化と密接に結び付いた水堀で、ここに大名屋敷の堀の本質を見ることができる。

こうした堀のあり方は、江戸府内の大名屋敷にみられるものである。将軍別邸である小石川御殿では、屋敷境として幅、深さともに最大の堀を検出しており、本研究では将軍の権威を象徴する圍繞施設であると捉えた。明暦の大火（1657年/明暦3）を契機に、避災施設として郊外に与えられるようになった大名屋敷（下屋敷）では、屋敷境に空堀が構築されている。郊外の下屋敷を対象とした調査例はまだ少ないため、下屋敷の屋敷境として空堀が普遍的な施設だったかを判断することは現段階では難しい。将軍別邸や郊外の名古屋敷に伴う堀のあり方については、今後の調査事例の増加を待って改めて検討したい。



## 第4章 屋敷内の区画施設と大名屋敷の空間構成

### 第1節 はじめに

大名屋敷の平面構成に関する先駆的研究である大熊善邦の『近世武家時代の建築』（大熊 1935）では、初期の大名屋敷が将軍の御成を迎えるために「桃山時代の遺風を伝えた」結構になったことが指摘された。内藤昌の研究は設計規範と武家故実との関係から大名屋敷の平面構成を解明することを目指したもので、式正御成を武家社会の主要社交儀礼と位置づけ、大名屋敷内でも特に式正御成に関連した施設のあり方に注目した（内藤ほか 1971、内藤 1972）。

佐藤巧は仙台城と江戸藩邸の接客空間に注目し、当初はどちらも広間だった接客空間が、延宝期（1673-1680年）を境に国許では対面所（家臣との対面機能）、江戸では書院（接客機能）へと変化することを明らかにした。接客空間が国許と江戸とで異なる変化を遂げる歴史的背景を、「仙台城居館における諸行為が君臣関係を軸とした縦の関係で営まれたのに対し、江戸藩邸では、上使をはじめ諸大名、旗本、諸寺院、諸家の使者等の接見、そしてその饗応といういわば横の関係が主要な部分を占めていた」ことによるものとする

（佐藤 1963、1979）。御殿の間取りを、単なる部屋の集合体としてではなく、接客儀礼における役割との有機的なつながりから捉えることを指向した点が研究史上特筆される。しかし分析対象として上屋敷のみならず、中屋敷・下屋敷までを網羅していたとはいえ、そこで言及されたのは、御殿の表向の空間構成のみにとどまっていた。中奥や奥向といった大名の生活空間や、藩士や武家奉公人の居住空間が、大名屋敷の中でどの様に位置づけられるかといった視点は欠いていた。

武家地研究の多くが、80年代半ば以降に始まった大名屋敷跡遺跡の発掘調査を契機に展開したという市川寛明の指摘にあるように（市川 1997）、大名屋敷の空間構成に関する研究もまた、江戸の考古学研究が本格化したことを画期とする。東京大学本郷構内では、1984年（昭和 59）からキャンパスの再開発に伴って加賀藩邸跡や大聖寺藩邸跡を対象とした発掘調査が始まると、それと並行して大名屋敷の歴史的調査も行われた。

吉田伸之は加賀藩本郷邸（上屋敷）の『江戸御上屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館蔵・1840年代後半）を基に、大名屋敷が御殿と庭園を中心とする「御殿空間」と、家臣や武家奉公人が暮らし、藩邸を維持する種々の用役が行われる「詰人空間」とからなる、二元的な空間構造を提唱した（吉田 1988）。

この吉田による二元的な空間構造は、御殿空間と詰人空間はそれぞれ塀と門とで囲まれた閉じた空間で、御殿空間は屋敷境と、詰人空間と御殿空間との区画という2つの境界によって、藩邸の外部からは「二重に閉じた空間」となる点を特徴とする。吉田はこうした

大名屋敷の空間構造を「城下町の藩主の御殿と家臣の屋敷との二つの要素から成る武家屋敷地の構成と相似的」なものであると位置づけた（吉田前掲）。

東京大学本郷構内遺跡の発掘調査に伴う歴史学的調査は、絵図や関連史料の集成と、各調査地点の藩邸内での空間的位置づけを軸に進められた。宮崎勝美による本郷邸に関する総体的な研究（宮崎 1990）のほか、森下徹による育徳園の構造に関する研究（森下 1990）、杉森哲也による梅之御殿に関する研究（杉森 1990）、細川義による八筋長屋に関する研究（細川 1989）など、調査地点毎に各論的な研究も行われた。そのうち梅之御殿や八筋長屋に関する研究では、検出遺構と絵図との照合が試みられ、溝や柱穴列といった遺構が各空間を区画する施設であることが学際的に判明した。

吉田による二元的空間構造論は、モデルとしたのが加賀藩本郷邸だったこともあって、東京大学本郷構内遺跡の諸地点での遺跡のあり方を理解する上で極めて有効に機能した。中央診療棟地点は伝世した藩邸絵図が一枚のみの大聖寺藩邸<sup>43</sup>を対象とした調査だったが、地下室の配列や出土遺物の組成から、吉田の二元的空間構造に基づいた空間構成の把握を試みている（藤本 1990a）。

加賀藩邸の空間構成の考古学的研究には、地下室の形態や配列に基づいて御殿空間・詰人空間を判別できる可能性を指摘した成瀬晃司の研究（成瀬 1990）や、井戸との照合によって御殿空間と詰人空間にまたがる法学部4号館地点の空間的位置付けを明らかにした堀内秀樹による研究（堀内 1990）などがある。初期の報告書の刊行から10年を経た2000年になって、その間の調査成果を含めた研究が、御殿空間に関しては追川吉生（追川 2000）、堀内（堀内 2000c）によって、詰人空間に関しては成瀬（2000）によって行われた。

1990年代以降になると、大名屋敷のほぼ全域を調査対象とする、尾張藩上屋敷跡遺跡や汐留遺跡のような大規模な大名屋敷跡遺跡の調査が都内各地で始まった。これらの遺跡でも、区画遺構を基に大名屋敷の空間構成を捉える試みが行われた。一方で、絵図に描かれた区画施設の描き分けと、各種の区画遺構との関係についての検討は等閑に付されてきた。江里口省三による尾張藩上屋敷跡遺跡の区画遺構と『新御楽屋等之図』（名古屋市蓬左文庫蔵）などの絵図との照合は、数少ない研究例の一つである（江里口 1999）。

渋谷葉子は尾張藩市谷邸の絵図の作図法が18世紀前半に貼絵図から書絵図へと変化する理由の一つとして、17世紀半ばからの「家臣団の官僚化」による殿舎空間の肥大化をあげた（渋谷 2000）。内野正は18世紀中期以降に御小納戸碗や柳茶碗などの出土量が増加

---

<sup>43</sup> 文化年間の藩邸を描いた絵図が『大聖寺藩史』（大聖寺藩史編纂會 1938）に掲載されている。しかし原図は焼失して残っていない。

する背景を、渋谷が指摘した御殿空間の「空間構成の転換」との関係で捉えている（内野 2005）。

大名屋敷跡遺跡の調査事例の拡大に伴って、下屋敷や抱屋敷など大名屋敷の多様なあり方が考古学的にも明らかになった。古泉弘は白金館址遺跡（高松藩下屋敷）を例に、下屋敷跡遺跡の空間的特徴として低密度な遺構配置をあげた（古泉 2004）。高松藩ではこの下屋敷を、江戸中心部の土地を入手するための原資としており（山形万里子 1989）、古泉が指摘した遺構密度の少なさは、切坪相対替の資産としての下屋敷（宮崎 1992）の一面を反映したものと考えられる。

一方、萩藩毛利家屋敷跡遺跡（萩藩下屋敷）では、遺構の密度が高く、御殿空間と詰人空間も厳密に区画されていた状況が認められた（東京都埋蔵文化財センター2005）。村田香澄は萩藩下屋敷のこうした遺構分布状況を、屋敷がしばしば藩主の居屋敷となっていることを反映したものと捉えている（村田 2005）

また尾張藩邸、仙台藩邸、安志藩邸、高田藩邸などのように、江戸の複数の屋敷が発掘される例も増加しつつある。特に尾張藩邸は上屋敷（尾張藩上屋敷跡遺跡）、中屋敷（麴町遺跡）に加え、下屋敷（尾張徳川家下屋敷跡遺跡）や抱屋敷（水野原遺跡）が調査され、多岐にわたる屋敷の空間利用のあり方が比較できる点で注目される。

尾張徳川家下屋敷跡遺跡では広大な大名庭園を反映した、詰人空間-御殿空間-庭園空間が並列する空間モデルが及川良彦によって提唱された（及川 2008b）。及川はこれを吉田の「求心構造に対して、下屋敷は分節構造を示す」と解釈するが、吉田の二元的空間構造の重要な点は、御殿空間と詰人空間とがそれぞれ扉と門で閉じた空間をなした上で、各空間が、町人地社会とそれぞれの空間構造に相即した関係を構築するという「分節構造」にある。大名屋敷の空間構造は、御殿空間と詰人空間の配列状況という形而上的な差異ではなく、屋敷内の居住者数や居住者の階層、あるいは屋敷内部で行われた活動の違いや、大名屋敷外部との関係といった点から比較・検証していくことが求められよう。

水野原遺跡では川田久保屋敷と呼ばれる尾張藩の抱屋敷を調査した（新宿区生涯学習財団 2003）。川田久保屋敷は屋敷のほぼ全域に藩士の長屋が設けられ、御殿空間は存在しない。調査では生垣と柵列で区切られた長屋を検出した。この生垣による区画の内側では抱衣埋納遺構が検出しており、化粧道具を多量に出土する遺構も存在することから、抱屋敷の藩士の中には、世帯で居住した者もいたことが明らかとなった。発掘調査とともに進められた文献調査で『川田久保御屋鋪御長屋之図』が発見され、吉田正高がこの絵図を基に川田久保屋敷の空間構造を検討している（吉田 2003）。現段階で行われている発掘調査の範囲は、この図に描かれた屋敷の部分とは重ならないが、大名屋敷の空間構成の多様性を明らかにする上で、今後の学際的な調査の進展が期待される遺跡である。

吉田による二元的空間構造が指摘する「御殿空間」と「詰人空間」間の階層性は、それが加賀藩本郷邸をモデルとしているだけに、東京大学本郷構内遺跡（加賀藩本郷邸）をは

はじめとした大藩の大名屋敷跡遺跡の調査においては極めて有効なものだった。しかし石高別の大名の数では、大名の大半が小藩・中藩と呼ばれる15万石未満であり<sup>44</sup>、加賀藩のような大藩の大名屋敷のあり方を、全ての大名屋敷の空間構造に当てはめることを危惧する指摘もなされている（宮崎1994）。

とはいえ屋敷の空間構成を遺跡から把握できるような、面的な調査が行われた大名屋敷跡遺跡の多くが大藩の大名屋敷だったこともあって、大名屋敷の空間構造の多様なあり方を考古学的に検証することはできなかった。1990年代半ば以降になって、千駄ヶ谷五丁目遺跡（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会1997、同1998）や初台遺跡（初台遺跡調査団1993）のような江戸郊外の下屋敷・抱屋敷や、和泉伯太藩上屋敷跡遺跡（地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会1994、東京都埋蔵文化財センター2007）や陸奥八戸藩南部家屋敷跡遺跡（港区教育委員会ほか2012）のような小藩・中藩の大名屋敷を対象とした調査例も増加している。小・中藩の大名屋敷跡遺跡では、屋敷内の空間構成の違いを考古学的に検証するまでには至っていない。

本章では東京大学本郷構内遺跡を中心に、歴史学から明らかにされた「御殿空間」と「詰人空間」間の階層性が、実際の藩邸ではどのような区画施設として構築されていたかを検証する。

---

<sup>44</sup> 太政官布告第79号（1870年/明治3）では、「藩分爲三物成拾五万石以上を大藩とし五万石以上を中藩とし五万石未満を小藩とす」と規定されている。

## 第2節 大名屋敷の空間構成と区画遺構

### 第1項 大名屋敷の区画施設と区画遺構の諸形態

大名屋敷で構築される区画施設には次の3つがある。

A：御殿空間と詰人空間の区画

B：御殿空間内の区画

C：詰人空間内の区画

区画遺構<sup>45</sup>が想定する区画施設は、素掘りの溝（1類）が塀、生垣<sup>46</sup>、柱穴列を伴う溝（3類）、柱穴列（4類）、土坑列（5類）が塀・柵である。石組の溝（2類）は下水溝である。その他、堀（6類）と石垣・土塁などの土留（7類）がある。

図25-①は東京大学本郷構内遺跡で検出した区画遺構である。区画する空間（A～C）と、区画施設の種類の関係をまとめると次のようになる（表10）。

区画する空間	塀・柵のみ	塀・柵に下水	堀	土塁・土手
A（御殿/詰人）	●	●	●	●
B（御殿空間内）	●	●		
C（詰人空間内）	●			

表10 空間毎の区画施設

これらは屋敷内の境界施設という性格上、東京大学本郷構内遺跡、尾張藩上屋敷跡遺跡、汐留遺跡のように、ある程度広範囲にわたって面的な調査を実施した遺跡の成果に基づくものだが、少なくとも屋敷内に御殿空間と詰人空間を擁する上屋敷跡遺跡では、空間構成に応じた区画施設として上記のあり方は共通するものと考えられる。

<sup>45</sup> 区画遺構の形態分類は、屋敷境遺構のそれを踏襲している（第2章）。屋敷境遺構の形態は時期によって変化が認められたが、区画遺構では形態と構築時期関係は現在までのところ認められない。

<sup>46</sup> 水野原遺跡のA-002-18は溝と柱穴列からなる区画遺構で、生垣と柵が想定されている（新宿区生涯学習財団2003）。本研究での遺構の形態分類では1類と4類に相当する。

中・下屋敷跡遺跡では、渋谷（渋谷 2000）や村田（村田 2005）の指摘するように時期的に空間構成に変化を来す場合もある。しかし御殿空間と詰人空間の二元的空間構成をなすという点で、やはり上記のあり方と共通するものと思われる。

抱屋敷は、屋敷の利用目的が藩士の居住地、耕作地など多様で、かつ現段階では調査事例の蓄積が考古学的な検証を加えるまでに至っていないので、ここでは除外しておく。

本節では大名屋敷内の諸空間を区画する区画遺構のあり方を、東京大学本郷構内遺跡（加賀藩邸・富山藩邸・大聖寺藩邸）で検出した区画遺構を中心に検討していくことにする。

#### (1) 塀・柵

図 25-②のグラフが示すように、区画遺構の検出例は区画する空間が A-C いずれの場合であっても塀・柵が多い。区画場所と区画施設の構造との関係を、土坑列（5 類）のあり方からみていこう（表 11）

##### ① 異なる空間の塀・柵

異なる空間（御殿空間/詰人空間・A）の塀・柵である法学部 4 号館地点 B9-4・B9-5 は、ともに長軸が 2.4m 以上と大型の土坑からなる。それに対して同一空間（御殿空間内・B、詰人空間内・C）の塀・柵は、例えば理学部 7 号館地点 2 号杭の長軸が 1.0m 前後、短軸が 0.5m-0.7m であるように、御殿空間と詰人空間との区画（御殿空間/詰人空間・A）に構築された塀・柵より小型である。

##### ② 同一空間内の塀・柵

同一空間（御殿空間内・B、詰人空間内・C）内に構築された塀・柵の規模は、御殿空間と詰人空間との間で差異は認められない。ただし御殿空間内の区画（B）である山上会館地点 30 号は、外来棟地点で検出した加賀藩邸と大聖寺藩邸との屋敷境（図 20）と同程度なほどに規模が大きい。ここに構築された区画施設は、育徳園（大名庭園）を囲むものである。

大名庭園の囲いの管理が厳重であったことを示すのが史料 4-1 である。

史料 4-1<sup>47</sup>

---

<sup>47</sup> 『参議公年表』 48。引用は森下 1990 による。

「(略) 御門外ヨリ煩罷帰候時分、切通橋際、御守殿御露地外堀江行倒申候、右之節、堀高サ二尺計ニテ幅一尺計壁打抜有之、依之御横目中ヨリ達 御聴、夜中 御守殿御露地不残相改」

史料 4-1 は 1718 年（享保 3）1 月 29 日に、藩士が誤って育徳園の堀を破壊するという事案に関連したものである。加賀藩では横目を通じて、育徳園周辺を夜通し見廻りを行うことを指示している。

御殿空間である大名庭園は、吉田が言うように藩邸外部からは「二重に閉じた空間」（吉田前掲）であるので、堀の一部が破損したとしても外部からの侵入者が入り込む恐れはほぼないといつてよい。それでも夜通し見廻りが命じられた点に、家中における大名庭園（御殿空間）に対する意識がうかがえる。

30 号遺構が御殿空間内の堀・柵（5 類）の中で例外的に堅固に構築されているのも、大名庭園を区画する施設だったことを反映したものと考えられる。

区画場所	地点	遺構	区画状況	長軸	短軸	深さ
A	法学部	B9-4	御殿空間北西の区画	2.5	0.7	0.5
〃	〃	B9-5	同上	2.4	0.6	0.5
B	御殿下	466	役所五・役所六と空閑地の区画	0.5-1.0	0.5-0.7	
〃	山上会館	30	御殿と庭園の区画	1.4-1.7	0.5-0.7	1.0
〃	御殿下	33	米蔵と庭園の区画	0.5-0.6	0.5-0.6	
C	理学部7	2号杭	長屋の区画	1.2	1.1	0.1

表 11 区画場所による堀・柵の規模の違い（5 類に分類される遺構を対象とした）

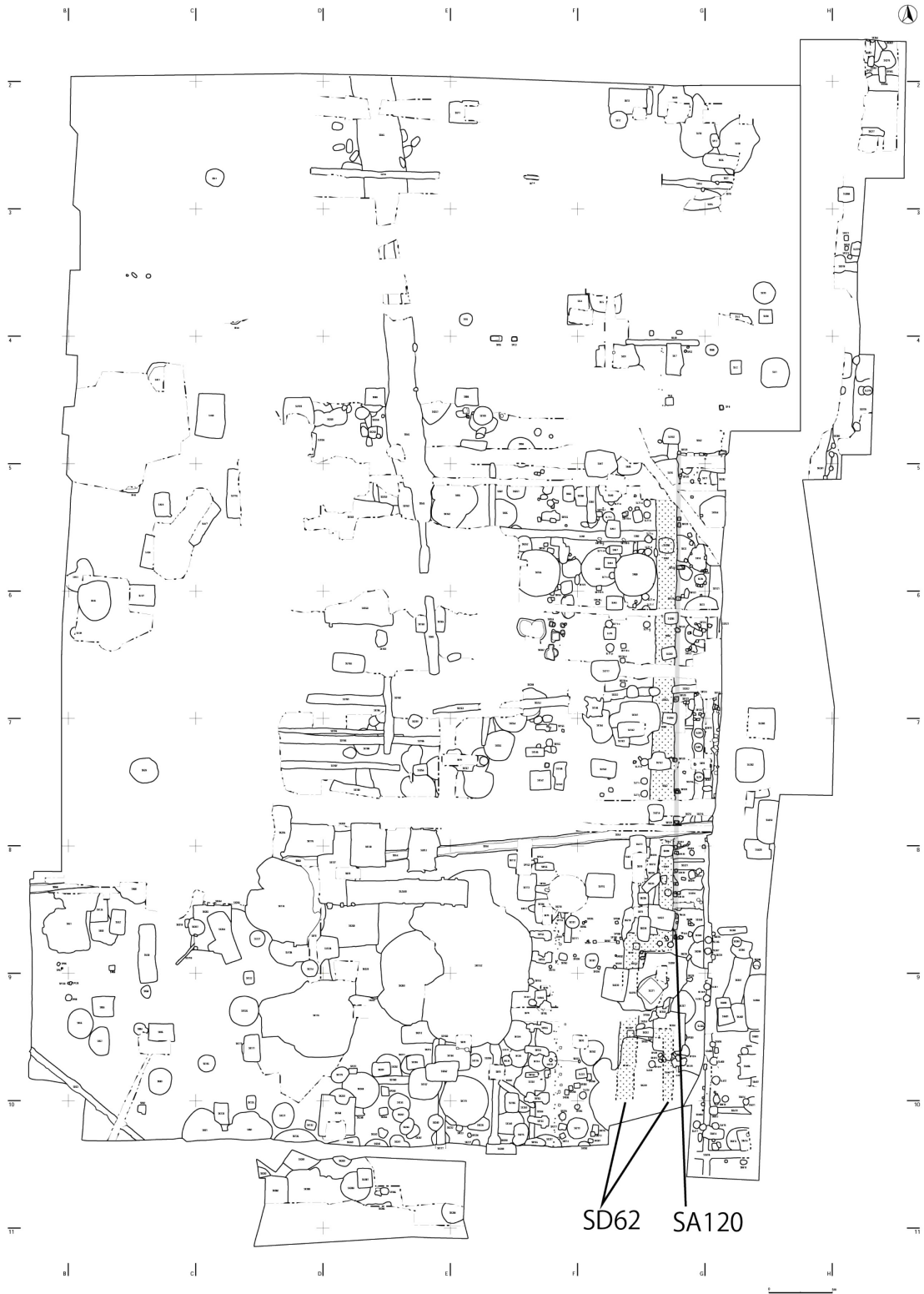


図 20 外来棟地点 SA120 と SD62 (東京大学埋蔵文化財調査室 2005 を基に作成)



(2) 下水

外来棟地点では大聖寺藩邸の御殿空間と詰人空間の区画遺構として SD62（石組溝・2類）と SA120（柱穴列・4類）がセットで検出した（図 20）。これは下水溝に塀・柵が伴っていた状況を示すものである。

『江戸御上屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館蔵・1840年代）における加賀藩邸の御殿空間と詰人空間の境界である。『江戸御上屋敷絵図』は施設によって色分けされており、御殿空間と詰人空間との区画には黒色の線と、一部に青色の線が引かれている（図 21-①-④）。凡例では青色の彩色は「此色御泉水御表廻り敷石等」である。①-④のうち、①は屋敷境である。ここに下水道（石組溝による屋敷境・2類）が構築されていたことは、情報学館地点、伊藤国際交流地点、経済学研究科学術交流棟地点で明らかになっている（資料編図 39、表 32）ので、御殿空間と詰人空間との区画である②-④にも下水溝が伴っていたことはほぼ確実だと思われる。

ただしこれまでの発掘調査では、②-④にあたる区画施設は調査の対象になっていない。『江戸御上屋敷絵図』では青い線のみが御殿空間と詰人空間との間に引かれているに過ぎないが、おそらく外来棟地点 SD62 と同様、石組の下水溝（2類）に塀や柵が伴っていたことと思われる。

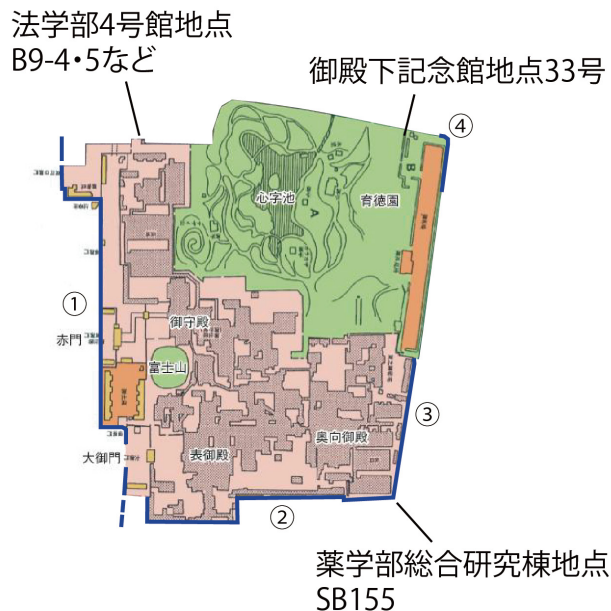


図 21 加賀藩本郷邸の御殿空間を区画する排水溝の位置（追川 2004 を基に作成）

### (3) 土塁・土手

堀（6類）と土塁・土手（7類）は御殿空間と詰人空間の区画（A）のみに認められる施設である（表 10）。

土塁・土手（7類）の例は薬学系総合研究棟地点で検出した東西方向にのびる堤状遺構（SB155）で、遺構の南側には石組溝が伴っている（図 23）。ここは図 21 の③にあたる部分だが、調査地点は御殿空間と詰人空間の境界よりもやや西側、御殿空間の内側なため下水溝は未検出だった。

堤状遺構（SB155）を検出した D 面は 1703 年（元禄 16）の火災層にパックされた生活面である。本地点は略報が刊行されているのみで（東京大学埋蔵文化財調査室 2004・2006）、周辺の生活面との具体的な高低差などに関する詳細は不明である。

遺構の年代に近い『武州本郷第図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵・1688 年/元禄元）では、調査地点を含む御殿空間は黒色の線で囲まれて、東側と南側はそれぞれ道を挟んで長屋が展開する。この黒色の線が区画遺構を示しているが、東側と南側とで表現が異なっている点に注目したい（図 22）。

東側：黒色の線 1 本

南側：黒色の線 2 本

南側の黒色の 2 本の線の寸法は記入がないため、これと SB155 の幅（図 23 の網線）とを照合することは不可能だが、これが土塁を表現している可能性がある（2 本線の途中に「門」とあるが詳細は不明）。

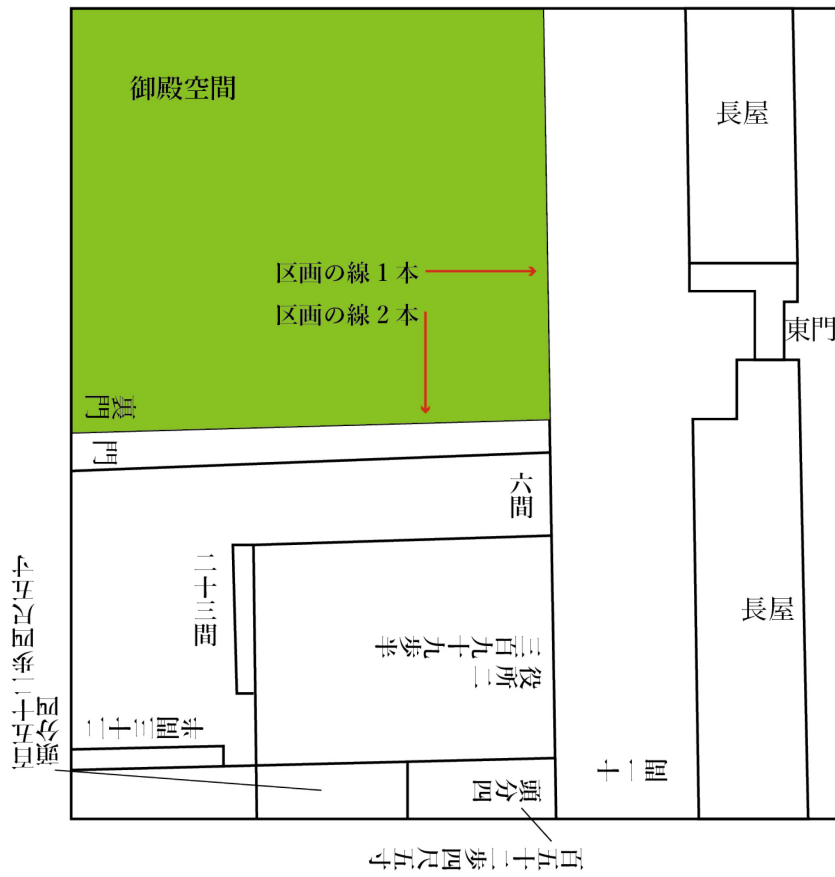


図 22 薬学系総合研究棟地点 SB155 と 17 世紀末頃の本郷邸 (『武州本郷第図』を基に作成)

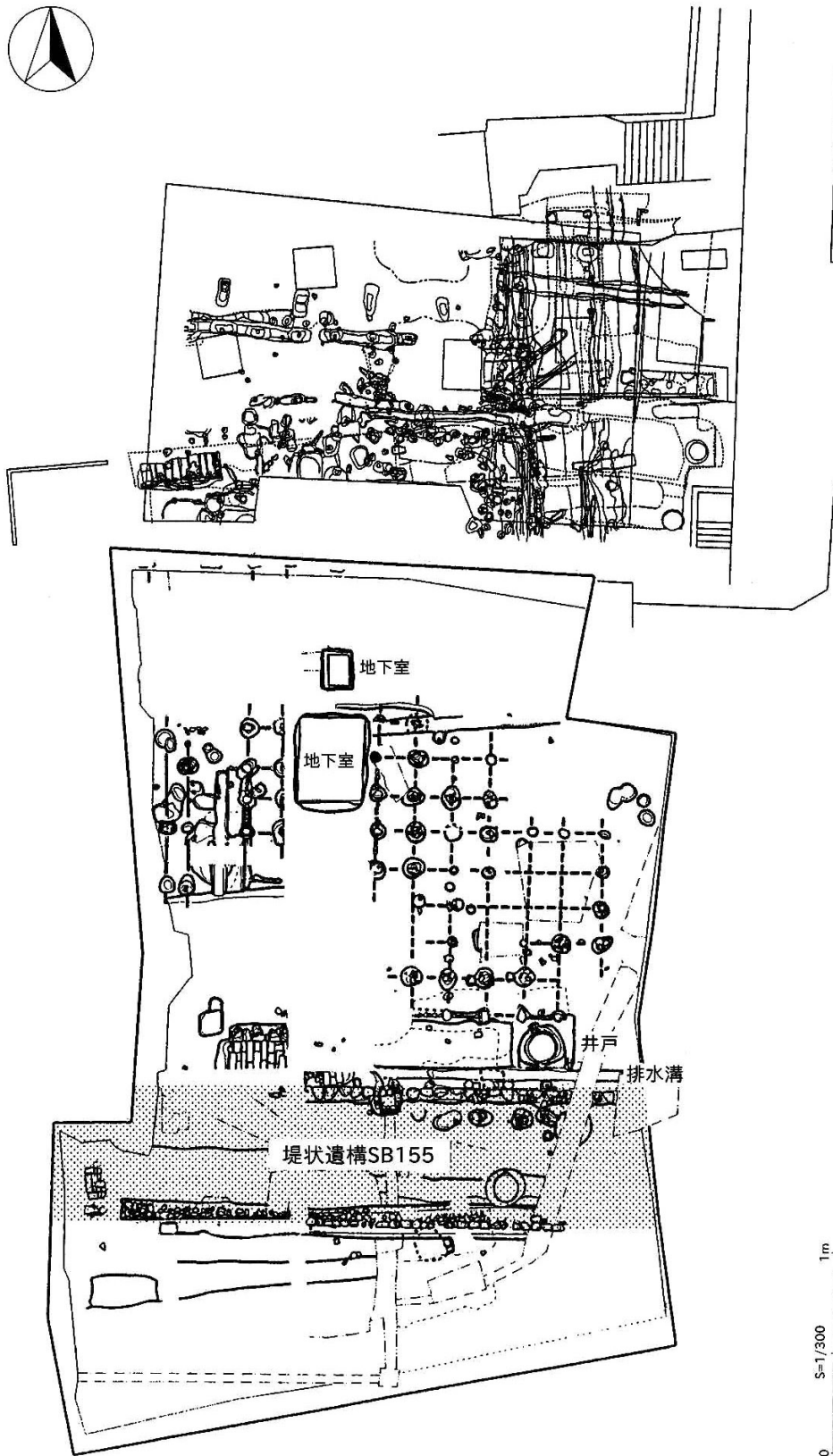


図 23 薬学系総合研究棟地点の遺構検出状況（東京大学埋蔵文化財調査室 2006）

#### (4) 堀

御殿空間と詰人空間の区画として堀（6類）が構築されている例は、江戸の大名屋敷跡遺跡の中でも、現在のところ富山藩上屋敷（東京大学本郷構内遺跡 CRC-A 地点・看護師宿舎地点 2 期）のみである。

CRC-A 地点は加賀藩邸と富山藩邸にまたがる調査地点である<sup>48</sup>。富山藩邸側で検出した SD12210 が、長軸 6.5m 以上、短軸 2.2m、深さ 1.3m（断面は箱葉研形）の堀である（図 24）。遺構の西側には堀に沿って並ぶ柱穴列を検出した。堀に伴う塀・柵と考えている<sup>49</sup>。

堀は北側を幕末の瓦廃棄土坑（SK12200）で壊されていることから、少なくとも幕末以前のものである。

看護師宿舎地点 2 期 SD03 は東西 3.3m、南北 9.0m 以上、深さ 2.1m 以上の堀である（調査では大溝と呼称している）。報告者の大成可乃は、調査地点は SD03 の東西で遺構の様相が異なることなどから、「藩邸内の地割りに関係する溝」であることを指摘している（原・大成 1999）。

SD03 は北側に隣接する別地点で未検出なことが、藩邸内の区画施設であると判断する上で問題となる。しかし遺構を挟んで遺跡の様相が異なるという考古学的所見から、CRC-A 地点と同様、富山藩邸の御殿空間と詰人空間との区画施設である可能性は高い。

---

<sup>48</sup> 発掘調査は筆者が 2012 年から実施しており、2016 年の時点で未だ継続中である。そのため詳細な分析は未着手である。

<sup>49</sup> 東側は大学の共同溝が敷設されていたため、塀・柵の有無は不明である。

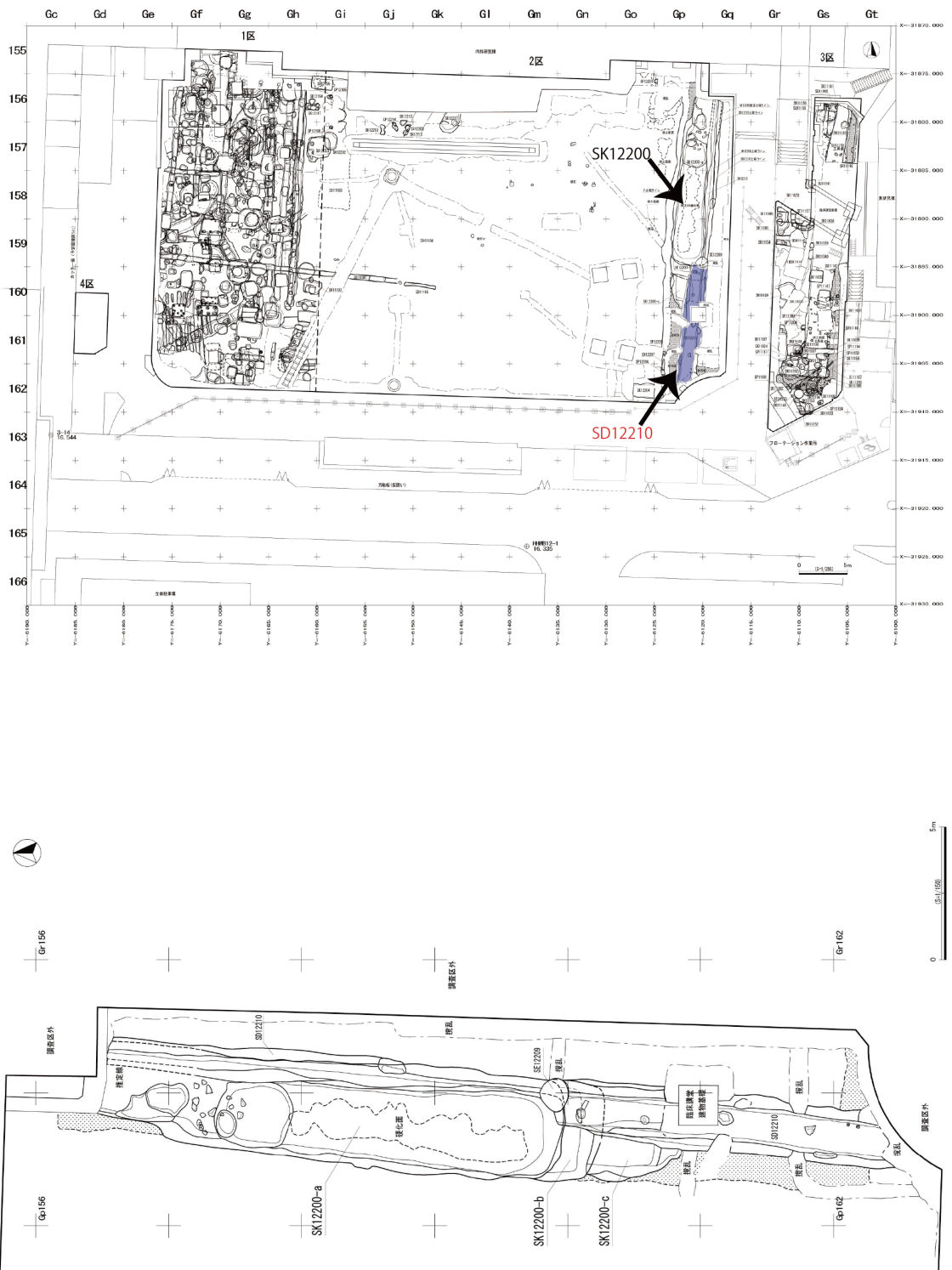


図 24 富山藩邸で検出した御殿空間/詰人空間の堀 (CRC-A 地点 SD12210)

① 区画遺構一覧

藩邸	地点	時期	遺構	形態	空間	備考
加賀	御殿下	17中-後	758	5	C	調査区東端のため詳細不明
	御殿下	17中-後	951	5	C	調査区東端のため詳細不明
	御殿下	17中-後	958	5	C	調査区東端のため詳細不明
	御殿下	17後-18初	834	3	B	外局
	御殿下	17後-18初	289	3	B	役所四・役所五
	御殿下	17後-18初	466	4	B	政庁ゾーンと空閑地
	御殿下	17後-18初	339	3	B	政庁ゾーンと道
	御殿下	19前	1溝	2	B	長局
	御殿下	19前	20	2	B	人足溜りなど
	御殿下	19中	33	4	B	厩役所(米蔵)と空閑地
	理7		1号杭	5	C	
	理7		2号杭	5	C	
	理7		3号杭	5	C	
	法4	18c後以前	B9-4・5など	5	A	
	法4		D11-1	1	A	B9-4・5よりも古い
	外来	17後-19前	SD191	1	C	
	外来	17後-19前	SD195	3	C	
	外来	17後-19前	SD196	1	C	
	外来	17後-19前	SD197	3	C	
	山上会館		30	5	B	Bの大名庭園の区画
	薬総	18初	SB155	7	A	
	伊藤国際	17c	SA873	3	B	
	看宿Ⅱ		SD03	6	A	富山藩邸
富山	CRC-A		SD 12210など	6	A	富山藩邸
大聖寺	外来	19c	SD62 + SA120	2+4	A	大聖寺藩邸 SA120とセット

② 区画空間毎の遺構数

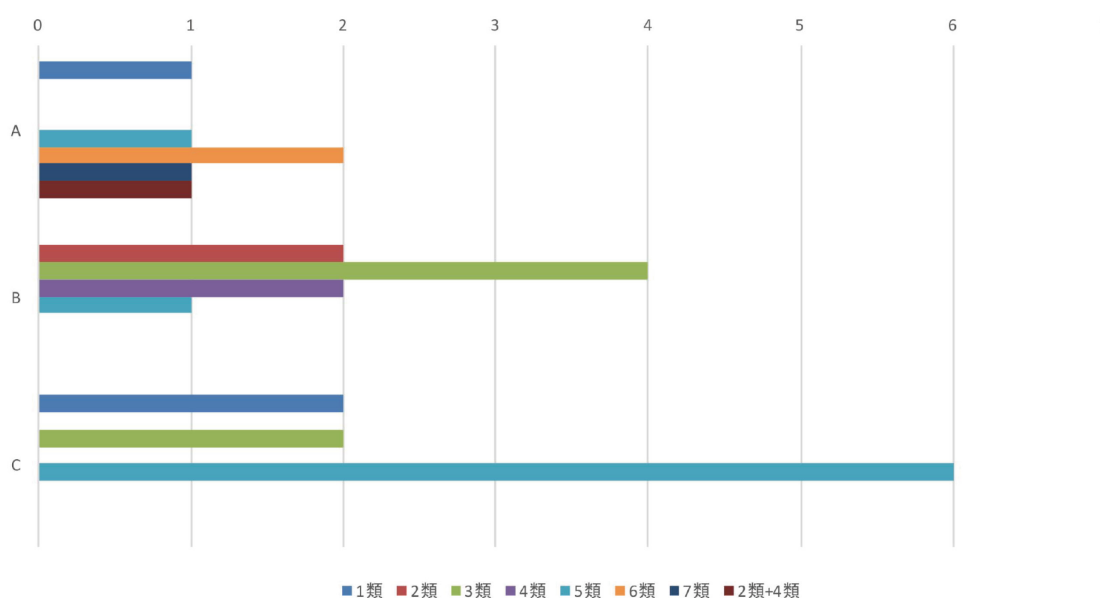


図 25 東京大学本郷構内遺跡の区画境遺構

## 第2項 絵図に描かれた区画施設

東京大学本郷構内遺跡の区画遺構を例に、大名屋敷内の区画施設のあり方を概観した。区画遺構の形態は塀・柵を基本としながらも、同じ屋敷内であっても区画する空間によって区画施設のあり方は多様である。

この多様性こそ、大名屋敷の空間構成を直接に反映するという点で重要だが、藩邸絵図の多くでは空間の境界に線が引かれるのみである。『江戸御上屋敷絵図』では一部に境界線にも着色がなされているが、区画施設の具体的な景観までは不明である。このように境界施設の多様性は考古学的に明らかなものの、発掘調査で検出した施設以外の実態は不明という状況である。

19世紀の本郷邸を描いた藩邸図の中には、区画施設の状況を具体的に窺い知ることができるものがある。本項では『本郷邸図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵）と『江戸屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館蔵）をとりあげ、絵図における区画施設の描写と発掘調査で検出した区画遺構のあり方とから、御殿空間と詰人空間との境界の景観を考察する。

### (1) 『本郷邸図』

『本郷邸図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵）は藩邸を俯瞰した状況を描いた絵図で、溶姫の「御住居」や「御住居表御門」（赤門）が描かれていることと、大聖寺藩の新廣敷建設のために加賀藩から借り受けた一帯の様子がまだ描かれていないことから、1827-1829年（文政10-文政12）に比定される（細川義1990）。特に御殿空間内の殿舎は俯瞰の度合いがデフォルメと呼べるほどに著しく、グリッドラインを付した『江戸御上屋敷絵図』に比べて正確性は劣る。しかし屋敷を俯瞰しているため、多くの絵図では等閑に付されている屋敷の屋根が描写されている点が大きな特徴である。

『本郷邸図』の屋根の描写には次の二種類がある（追川2004）。

- ①灰色に塗られている屋根。
- ②黄色で塗られている屋根。

灰色の屋根（①）は主に御殿空間内の殿舎にみられる描写であるのに対して、黄色の屋根（②）は詰人空間内の長屋に認められることから、灰色の屋根（①）は瓦葺きの屋根、黄色の屋根は板葺き屋根若しくは柿葺き屋根の可能性が考えられる。本論文では内藤の、「元来長屋は、腰壁下見板貼り上部漆喰の板葺か瓦葺が一般的であった」という指摘（内藤1972）から板葺き屋根を想定する。



『本郷邸図』で屋敷境と区画境がそれぞれがどのように描写されているかを、図 26 をもとにみてみよう<sup>50</sup>。

---

<sup>50</sup> 俯瞰図である『本郷邸図』は、屋敷境・区画境の位置関係を論じるには適していないので、図 26 は『江戸御上屋敷絵図』を基に、『本郷邸図』での屋敷境と区画境の描写を場所毎に示している。『本郷邸図』の詳細は追川 2004 を参照されたい。



図 26 加賀藩邸の屋敷境と区画境

### ① 屋敷境

【西 1】から【西 4】の外郭線は青色の線と、茶色と灰色の二本の線とからなる。そのうち青色の線が中山道と藩邸の間に構築された側溝（下水溝）である。茶色と灰色の二本の線では、灰色の線の方が太い。両者は【西 1】から【西 4】に至るまで本郷邸の屋敷の形をなぞるように延びている。【西 2】の隅には『江戸御上屋敷絵図』では「御物見」とあるが、本図では2層の櫓が描かれている。櫓は屋根が灰色で塗られ、壁が黄色で表現されている。二本の直線はこの櫓に接続していることから、灰色の線が瓦葺きを、茶色の線が塀の土台を示している。

この二本に挟まれた白色の部分は漆喰塀を表していると考えれば、大熊や内藤が指摘した（大熊 1935、内藤 1972）塗壁を、立体的に表現していることになる。この漆喰塀は【西 1】から【西 4】まで続き、藩邸南西隅の番所から屋敷に沿って南側へ僅かに続き、南御門周辺から塀の高さを増した【南 1】となる。

【南 1】は『江戸御上屋敷絵図』では長屋塀となっている（図 26 では長屋塀を赤色で示した）。『本郷邸図』では長屋を示す窓などの描写はないが、その代わりに白色の塗壁部分に「カワラダ御長や」と註記されている。屋根は灰色なので、長屋塀が瓦葺き塗壁であることが確認できる。表長屋の描写は【南 1】から【東 4】・【東 3】まで続く。

加賀藩の東側は支藩の富山藩と大聖寺藩の上屋敷が隣接している。この部分が【東 1】と【東 2】にあたる。【東 1】は北東隅が緑色で描かれた崖の中に黄色の「シカラミ」（柵）があり、土留がなされていたことがわかる。この上に「御物見」があるので、土留はこの物見櫓設置に応じた措置だろう（物見の屋根は黄色で塗られている）。

それ以外の【東 1】の屋敷境は黄色で塗られており、「ノシタテ」、即ち板塀であることが註記されている。富山藩邸との屋敷境に板塀が構築されている状況は、CRC-A 地点で検出した SD12081 など底部に柱穴を伴う溝（屋敷境遺構 3 類）の状況と極めて一致するものである（資料編図 48、資料編図 51）。黄色で塗られた「ノシタテ」の描写は大聖寺藩邸との屋敷境である【東 2】まで続いている。

【北 1】は【西 1】から続く描写から瓦葺き塗り壁だが、青色の線は伴わないため下水は敷設されていなかったことがわかる。【北 2】は黄色で描かれているので板塀である。その内側（屋敷内）に緑色の崖が描写されているので、屋敷境は崖下に設けられていた。ここには加賀藩の石垣が現存するが（図 7-①の暗闇坂）、『本郷邸図』には石垣の描写はみられない。

## ② 区画境

区画境は図 26 では【区画 1】から【区画 7】までに細分した。その描写には、屋敷境のような多様なあり方はみられない。基本的には【西 1】から【西 4】および【北 1】の屋敷境の描写と同じなので、瓦葺き塗り壁の塀によって画されていたことが推測される。その中で、【区画 2】に存在する「中御門」、「中口御門」、「御本宅御門」には、番所と思われる小窓がそれぞれの東側に一つ描かれている。

また【区画 2】と【区画 3】には塗り塀の外側に水色の線を伴っているので、下水溝が敷設されていたことがうかがえる。

『本郷邸図』における屋敷境と区画境の描写をまとめたのが表 12 である。

屋敷境	江戸本郷邸図	区画境	江戸本郷邸図
北1	漆喰塀 [黒]	区画1	漆喰塀・下水 [青]
北2	ノシタテ(板塀) [黒]	区画2	漆喰塀・下水 [青]
西1	漆喰塀 [黒]	区画3	漆喰塀・下水 [青]
西2	漆喰塀・下水 [青]	区画4	漆喰塀 [黒]
西3	漆喰塀・下水 [青]	区画5	漆喰塀 [黒]
西4	漆喰塀・下水 [青]	区画6	漆喰塀 [黒]
東1	ノシタテ(板塀) [黒]	区画7	漆喰塀 [黒]
東2	ノシタテ(板塀) [黒]		
東3	長屋塀・下水 [青]		
東4	長屋塀・下水 [青]		
南	長屋塀・下水 [青]		

表 12 『本郷邸図』での屋敷境・区画境の描写 ([ ]内の色は『江戸御上屋敷絵図』での着色を表す)

## (2) 『江戸屋敷総図』

『江戸屋敷総図』(金沢市立玉川図書館蔵)は全 21 枚で構成された屋敷絵図で、本郷邸(上屋敷)が 20 枚、蔵屋敷が 1 枚という構成をとる。絵図は上下に 2 枚重ねることで、屋敷内の施設の変遷をたどることができる。小松愛子によれば 1 枚目は溶姫の御守殿ができた 1827 年頃(文政 10)、2 枚目は 1863 年(文久 3) 3 月以降に位置付けられている<sup>51</sup>。

本図での屋敷境と区画境の描写には、黒色の一本線、灰色に着色された二本線、線はなく黄色で塗った建物の 3 種類の表現が見受けられる。

そのうち灰色の区画境に「掛塀」あるいは「腰瓦掛塀」という註記があるので、腰板部分を瓦掛けにした塗り塀だったと推測できる。また屋敷境・区画境には、「掛塀」の外側

<sup>51</sup> 小松愛子氏の御教示による。なお本図は本郷邸の絵図を集成した『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』(東京大学埋蔵文化財調査室 1990)には未掲載である。

に青色に彩色された溝を伴う部分がある。この部分が下水道を兼ねた側溝である。黄色で塗った建物は長屋塀を表している。黒色の一本線は、板塀による屋敷境・区画境であると推測できる。

区画境は【区画 1】（屋敷境の【西 3】と同一）が灰色の着色、【区画 2】が黄色で表現された長屋塀、その他の部分が黒色の線で表現されている。『本郷邸図』では【区画 2】にある三つの門に番所が設けられていたことがうかがえた。しかし俯瞰図である『本郷邸図』の描写ではそれ以上のことは不明である。『江戸屋敷総図』をみると、たとえば「御本宅御門」では、「御門番所」から東側に「勝手」、「饗応所」、「御駕籠部屋」といった部屋が続いていたことが判明する。

これらは藩士の収容施設ではないので厳密には長屋塀とは言いがたい。しかし構造と間取りからみれば、屋敷境に構築された長屋塀と同類の施設と捉えることが可能である。

19 世紀前半に制作された『本郷邸図』と『江戸屋敷総図』の描写から、本郷邸の御殿空間と詰人空間を区画している施設は、少なくとも 19 世紀段階では瓦葺きで塗壁によって構築された塀（『江戸屋敷総図』から腰瓦掛け）だったことがわかる。【区画 7】にあたる法学部 4 号館地で検出した屋敷境遺構 B9-4 がこれに相当する可能性が高い。

【区画 1】から【区画 7】にみられる瓦葺き・塗壁造り（【区画 2】は瓦葺き・塗家造りの塀）という構造が、長屋塀を含む大名屋敷の屋敷境と同じであることに注目したい。

大熊によれば大名屋敷の表長屋が瓦葺き・塗家造りとなったのは、防火対策として出された家作制限によるものである（大熊 1921）。この意味において御殿空間と詰人空間とを区画する塀が瓦葺き・塗壁（家）造りであることは、御殿空間の防火対策として捉えることができる。

しかし本項の分析で明らかとなったように、区画境が全周を瓦葺き・塗壁（家）造りの塀で囲むのに対して、屋敷境の構造は多様である。瓦葺き・塗壁造りの塀や、瓦葺き・塗家造りの表長屋（長屋塀型表長屋）が構築されるのは、【西 1】から【西 4】、【北 1】、【南 1】から【東 4】・【東 3】にかけての屋敷境に限られる。

その背景には宮崎勝美が指摘するように、「築地塀こそが正式で伝統的な屋敷囲いであり、家臣団の住居を兼用する表長屋は略式で薄礼のものであるとの意識」がある（宮崎 1994）。それとともに、これらはいずれも中山道（【西 1】から【西 4】）や不忍池へと続く道（【南 1】から【東 4】・【東 3】）に接する屋敷境であり、藩邸外部の社会から容易に目視できる場所である点にも注目したい。逆にいえば、加賀藩邸内にあつて外部からの目視できない場所にある大藩の勤番長屋は、『本郷邸図』では詰人空間内の屋根がほぼ黄色、即ち板葺き屋根で描写されているように、19 世紀に至ってもなお板葺きだったのである。このことは大名屋敷の瓦葺き・塗家造りという景観が、大熊（大熊 1921）や内藤（内藤 1973）

が指摘するような防火対策を主眼とした家作制限のみで成立したわけではないことを意味している。

御殿空間は大名屋敷の中で「二重に閉じた空間」（吉田 1988）であり、その区画は外部社会からは見ることのできない場所にある。機能的には板塀や柵でも差し支えないにもかかわらず、長屋塀型表長屋と同様の構造である瓦葺き・塗壁（家）造りで構築されたことは、御殿空間にとって詰人空間もまた、厳然たる外部の社会として認識されていたことを意味している。

このように『本郷邸図』に描かれた御殿空間と詰人空間とを区画する施設は、二つの空間に存在した階層性を多分に反映していたことがうかがえる。次にこの点を区画遺構のあり方から検討してみよう。

### 第3節 区画遺構のあり方と家中秩序

#### 第1項 区画遺構の高低差

##### (1) 加賀藩上屋敷（本郷邸）

本郷邸では御殿空間と詰人空間の区画遺構を、北西側（法学部4号館地点）と南東側（薬学系総合研究棟地点）で検出している（図26の【区画3】・【区画7】）。そのうち御殿空間と詰人空間との区画境に明確な高低差が認められるのは、土手状遺構を検出した薬学系総合研究棟地点である（図23）。

薬学系総合研究棟地点には、育徳園で顕著に認められるM1面とM2面の崖線が延びており、育徳園周辺ほど急激ではないものの西から東への傾斜地をなしている。キャンパスには現在も薬学系総合研究棟地点の北側に石段が設けられている<sup>52</sup>。

薬学系総合研究棟地点で検出した建物遺構の配置をみると（図23）、本来の地形では崖線下にあたるはずの調査区東側一杯まで礎石が分布している。このことから、調査区東側に盛土造成が行われ、土地が平準化されていたことが推測される。そのため御殿空間の東側末端部ではM1面とM2面がなす本来の自然傾斜が失われ、石垣などによる土留が構築されたものと思われる。

前節であげた『江戸屋敷総図』では、【区画3】に敷設された区画境の下水溝を渡る三基の石橋にそれぞれ石段が伴っている様子が確認できる。奥向の長局へと繋がるこれらの石段は、御殿空間東側末端の高低差を示すものである。ただし薬学系総合研究棟地点の調査区は、位置的にこの末端部を含んでいないため詳細は不明である。

一方、調査区南側は第2節第1項でとりあげた土手（7類）であるSB155が構築されている（図23）。調査区南側も地形は西から東へと傾斜している。しかし現在のキャンパスの地形では調査区北側に比べると緩やかであり、特に調査区の南側（加賀藩邸では詰人空間）との間に顕著な高低差は認められない。

この部分の区画境として検出したSB155については、現在までのところ構造や規模については明らかにされていないが、堤状遺構と呼ばれていることからすると、ある程度の高まりを伴う構築物だったことが推測される。おそらく調査区東側から北側に比べて高低差の低い南側で、詰人空間との区画を明確にするために土手（7類）となったものと考えられる。

ただし19世紀の藩邸を描いた『本郷邸図』や『江戸屋敷惣図』では、土手状の描写は見られず、瓦葺き・塗り壁造りの塀になっていることから、18世紀（SB155は1703年/

---

<sup>52</sup> 図23に示した調査区のすぐ北側にある階段がそれにあたる。

元禄 16 の火災層にパックされた生活面に構築) から 19 世紀までの間に、区画施設が土手から塀へと変化した可能性がある。

区画施設を対象とした調査例が本地点 (【区画 3】) と法学部 4 号館地点 (【区画 7】) のみの現状では、本地点でみられる区画施設の土堤から塀への変化が、加賀藩邸内で普遍的な傾向であるかを判断することはできない。

## (2) 富山藩上屋敷

CRC-A 地点では、加賀藩邸と富山藩邸の屋敷境遺構 (溝の底部に柱穴を伴う 3 類) と、富山藩邸の詰人空間と御殿空間の区画境遺構 (堀 6 類) を検出した (図 24)。調査区は西側から、加賀藩邸詰人空間、富山藩邸詰人空間、富山藩邸御殿空間の範囲を含む (資料編図 45)。

調査地の関東ローム層の堆積状況はほぼ水平で、加賀藩邸側の詰人空間と富山藩邸側の詰人空間の遺構構築面は同じ標高である。

富山藩邸の詰人空間と御殿空間の区画には堀が構築されていた。堀の東側が共同溝や大学の既存施設によって著しく破壊されていたため、現時点では高低差が存在していたかは詳らかではない。しかし本地点のすぐ東側を 2014 年にイノベーション地点 (富山藩邸御殿空間) として発掘調査しているので、将来的には CRC-A 地点とイノベーション地点との比較検討から、詰人空間と御殿空間の高低差の有無については明らかにすることができると考えている。

## (3) 尾張藩上屋敷 (市谷邸)

尾張藩上屋敷跡遺跡 13 地点では、御殿空間と道 (詰人空間) の区画施設として南北方向にのびる石組溝 (13-31・32 石組) を検出した (東京都埋蔵文化財センター 2001)。遺構の掘り込み面の標高は築石の両側ともに 30.71m で高低差はない<sup>53</sup>。しかし御殿空間側の築石の方が大きいので、屋敷境遺構の石組溝 (2 類) のあり方を踏まえれば、本来は御殿空間の生活面の方が高く構築されていたものと推測される。

3 地点の土塁 (3-1 土塁・3-2 土塁) は台地縁辺に盛土構築されており、『市谷御屋敷之図』(名古屋市蓬左文庫蔵) に描かれた西御殿南端の緑地帯に相当する (東京都埋蔵文化財センター 1998)。

土塁の下で礎石列と柱穴列を検出していることから、当初は掘立柱の塀・柵が構築され、それが礎石の塀・柵を経て土塁に造り替えられたと考えられる。

---

<sup>53</sup> 報告書の記載を基に筆者が計測した。



土塁は御殿空間と詰人空間の区画施設にあたるが、詰人空間は台地下に配置されている。当初の区画施設が塀・柵であったことからわかるように、この土塁は土留の機能を担っていたわけではない。内野正はこの土塁の役割として、詰人空間から視界を隠すことを目的としたものであると指摘している（内野 2012）。

#### (4) 萩藩上屋敷

萩藩毛利家屋敷跡遺跡（萩藩上屋敷）では、調査区の広い範囲にわたって遺構が良好に検出した（東京都埋蔵文化財センター2005）。その中で調査区の中央部（Ⅲ区）は、遺構の削平が著しく、建物遺構は未検出だった。

他地区の遺構と絵図との照合によって、Ⅲ区は表御殿や小書院があった藩邸中枢の御殿空間にあたることが想定されている。伊藤健は御殿空間と詰人空間における遺構の削平状況の違いから、「Ⅲ区に位置した表御殿は他より標高の高い位置に建っていたことになる」と、御殿空間と詰人空間の生活面に高低差があった可能性を指摘している（伊藤 2005）。

#### (5) 仙台藩上屋敷

汐留遺跡（仙台藩上屋敷）は 1641 年（寛永 18）に当初下屋敷として拝領した。『武州豊嶋郡江戸庄図』<sup>54</sup>には屋敷の拝領予定地が葦原の茂る沿岸部として描かれている。屋敷は 1670 年代まで数段階の工程を経ながら埋め立て造成された（石崎俊哉 2011）。

西澤明による遺跡と絵図との照合によって、御殿空間と詰人空間の区画施設にあたる遺構が比定されている（西澤 2003）。

4J-187 は板材で挟んだ葦や篠竹のような材を並べた垣根であるが、この他にみられる区画遺構も「塀や垣根状の施設」が推測される簡易な構造のものであり（西澤前掲）、高低差は認められない。

## 第 2 項 御殿空間と詰人空間の区画施設と家中秩序

御殿空間と詰人空間の境界付近の立地と、遺構から想定される区画施設との関係をまとめたのが表 13 である（高低差が認められる遺構を橙色で表した）。

御殿空間と詰人空間との間に高低差が認められる大名屋敷は台地上か、台地から低地へかかる斜面地上に立地することがわかる。

東京大学本郷構内遺跡（加賀藩邸）で調査した御殿空間と詰人空間との区画施設のうち、法学部 4 号館地点 B9-4（図 26 における【区画 7】）には高低差は認められない。しかし

---

<sup>54</sup> 1608 年（寛永 9）頃の様子を描いたとされる（波多野純 1996）。

御殿空間西側の情報学環地点（図 26 における【西 3】および【区画 7】）では、町屋と本郷邸（御殿空間）との屋敷境である SD8（資料編図 41）で、築石の構造から高低差が存在したことがうかがえる。このことから、法学部 4 号館地点付近にも、屋敷西側で認められた高低差が維持されていたと思われる。ただし絵図をみるかぎり、【区画 7】には下水道は敷設されていないので、下水道の護岸が高低差の土留をなしたとは考えられない。【区画 7】の高低差に関しては、法学部 4 号館地点の塀（B9-4）の内外に設けられていた高低差の痕跡が後代の削平によって失われたことと、塀（B9-4）の北側（御殿空間）に塀とは別に土留施設（7 類）が構築されていたことの、二つの可能性が考えられる。

No.	藩邸（遺跡）	遺構・調査区	区画施設の立地	遺構の高低差	区画施設
1	加賀上（東大本郷）	B9-4	平坦地	不明	塀
2	加賀上（東大本郷）	SB155	傾斜地	○	土手
3	富山上（東大本郷）	SD12210	平坦地	不明	堀
4	尾張東御殿（尾張上）	13-31・32石組	平坦地	不明	溝（塀）
5	尾張西御殿（尾張上）	3-1・3-2土塁	崖上	○	塀→土塁
6	萩上（萩上）	Ⅲ区	傾斜地	○	削平
7	仙台上（汐留）	4J-187	平坦地	×	生垣

表 13 区画施設の立地と区画遺構の高低差

御殿空間と詰人空間との間に高低差のない大名屋敷は、汐留遺跡（仙台式藩上屋敷）のように低地に立地する大名屋敷である。高低差がたとえ僅かであっても、御殿空間全体を盛土造成するためには多量の土砂が必要となる。台地上の大名屋敷ならば屋敷内での土取りによって造成土を入手することも可能だったと思われるが、低地の大名屋敷ではそれができなかったことが一因だと考えられる。

後代の削平の影響も考慮しなくてはならないが、低地の大名屋敷跡遺跡に土取り穴が認められないことや、汐留遺跡 5K-157（龍野藩邸の耕作地）の覆土のみが、屋敷外からもたらされたと考えられる黒褐色土<sup>55</sup>であることから、屋敷の立地的に高低差を設けることができなかった可能性は高い。

台地上の大名屋敷で高低差のない事例には、先にみた法学部 4 号館地点を除くと、大聖寺藩邸の区画施設である外来棟地点 SD62（2 類・石組溝）、富山藩邸の区画施設である CRC-A 地点 SD12210（6 類・堀）がある。

<sup>55</sup> 第 5 章第 2 節第 1 項 3 で触れる。

外来棟地点 SD62 では御殿空間側が築石積み、詰人空間側が板状の土留というように構造に違いが認められた<sup>56</sup>。御殿空間と詰人空間とに高低差が構築されていない場合でも、区画施設には構造上の差異を設けていたことがうかがえる。

CRC-A 地点 SD12210 は、現在のところ大名屋敷跡遺跡で唯一の御殿空間と詰人空間との境界に構築された堀である。

富山藩上屋敷を描いた 1859 年（安政 6）制作の『江戸御上屋敷図』（富山県立図書館蔵）をみると、御殿空間と詰人空間の区画施設として、青色で彩色された堀が描かれている。堀は東西を緑色で彩色されており、東側にある御殿空間の馬場を「し」の字状に囲む。

SD12210 は調査区の南側に続いていたが、CRC-A 地点の南隣にあたる立体駐車場地点では攪乱の影響が著しく、遺構終端が「し」の字状に屈曲するかは不明だった<sup>57</sup>。しかし遺構の年代と絵図の制作年代から、本遺構が『江戸御上屋敷図』で描かれた「堀」に該当すると考えてよいだろう。ただし覆土には水成堆積層は見られず、遺構側面にも石垣などによる土留の痕跡を検出していないことから、現時点では空堀と捉えている。

同地点では加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境も検出している（資料編図 51）。表 14 にあのように富山藩邸の場合、御殿空間と詰人空間の区画の方が、屋敷境よりも大規模で堅固だったのである。

加賀藩邸と大聖寺藩邸の屋敷境（SA155）は外来棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2005）で検出している（図 50）。これは土坑列（5 類）による屋敷境である。土坑の平面形は長軸 1.8m、短軸 1.0m なので、加賀藩邸と富山藩邸との間の屋敷境よりはしっかりとしたものといえる。しかし SA155 が構築された 1683 年（天和 3）以降の大名屋敷の屋敷境は、石組溝（2 類）が主体であり、それに比べれば塀・柵による加賀藩邸と富山藩邸・大聖寺藩邸の屋敷境の簡易さは、大名屋敷の屋敷境としては例外的なものである。

富山藩・大聖寺藩ともに上屋敷は拝領屋敷ではなく、宗藩である加賀藩の敷地を借用したものだ（宮崎 1990）。塀・柵で構築された屋敷境は、こうした宗藩と支藩との関係を反映したものと思われる。富山藩邸の御殿空間と詰人空間の区画施設として構築された堀は、大名屋敷の御殿空間と詰人空間を区画する区画施設が、大名屋敷の外部社会との関係（対「（他藩の）藩邸社会」、対「町人地社会」など）がどのようなものであっても、それには左右されない家中の厳然とした階層性を反映したものだであることを示すものである。

---

<sup>56</sup> 詰人空間側の一部は後に築石積みに造り替えられているが遺存状況が悪く、明確な高低差は見出せなかった

<sup>57</sup> 2009 年に筆者が調査を実施した（追川 2012c）。

御殿空間と詰人空間の区画施設のあり方で注目すべきもう一つの点が、尾張藩上屋敷跡遺跡3地点の土塁にあるような、土留の必要のない場所に構築された土塁（7類）のあり方である。

内野はこれを視界を遮るために構築された施設と想定した（内野前掲）が、掘立柱の塀・柵から礎石の塀・柵を経て、土塁へと造り替えられていることから、この指摘は妥当なものと考えられる。

こうした事例は御殿空間内の区画遺構にも認められる。同遺跡29地点の29-1号掘立柱建物は、市谷邸東御殿の表向と奥向の区画として構築された塀跡（土坑列・5類）である（東京都埋蔵文化財センター2001）。注目されるのは、この塀の南側に、直径約2.5mの円形土坑を40cm間隔で検出した点である。土坑は形状から植栽痕と考えられる。植木の根回りは植栽痕よりも小さなものになるとはいえ、40cm間隔の植栽痕列は植木の密集していた状況を推測させるものである。奥向での藩主家族のプライバシーを保護するための植栽と考えてよい。

東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点Ⅷ期は梅之御殿に伴う生活面である（東京大学埋蔵文化財調査室1990）。1号溝が長局と御殿表向とを区画する下水溝（2類）である。下水溝に並行して素掘りの溝を検出している<sup>58</sup>。区画遺構の形態が1類（素掘り溝）であることと溝幅が一定していないことから、この部分の区画施設として生垣が想定される。御殿表向が外部から覗かれることを防ぐための遮蔽物だったと考えられる。

以上にみた御殿空間と詰人空間の区画遺構の特徴は次のようにまとめられる。

- ① 御殿空間内、詰人空間内の区画施設よりも堅固に構築される。
- ② 区画遺構を境として、御殿空間の生活面が詰人空間よりも高く構築されている。
- ③ 御殿空間のプライバシーを保護するための視界を遮蔽する機能を有する。

これらの特徴は藩主と家臣という家中秩序が、大名屋敷の空間構成に反映したものである。換言すればそれが、吉田が指摘した大名屋敷の「中枢域」として外部社会から二重に閉じられた御殿空間（吉田1988）の、考古学からみた実態なのである。

遺構	形態	幅 (m)	深さ (m)	隣接状況
SD12210	6	2.0	1.0	御殿空間-詰人空間(富山藩邸)
SD12081など	1	0.5	0.7	加賀藩邸-富山藩邸

表 14 CRC-A 地点の区画遺構と屋敷境遺構の比較

<sup>58</sup> この遺構は遺構全体図に平面形が掲載されているのみで、個別の平面図・断面図は未掲載のため詳細は不明である（遺構番号も不明）。おそらく幅が一定していないことから抽出されなかったと思われる。

## 第4節 小結

本章では大名屋敷内を御殿空間と詰人空間とに分ける区画施設の実態を、区画遺構のあり方を通して検証した。

区画遺構の形態としては大名屋敷の屋敷境と共通しており、それらが想定する施設も塀・柵・生垣、下水溝、堀、土留のように、屋敷境のあり方と共通する。しかし御殿空間と詰人空間の区画遺構は塀・柵を中心とし、屋敷境遺構のように形態の年代的な変遷は認められない。区画施設としての塀・柵の具体的な姿は、加賀藩本郷邸の『江戸本郷邸図』、『江戸屋敷総図』の描写から、瓦葺き・塗壁あるいは塗家造りの塀だったことがうかがえた。

現段階までの本郷邸における発掘調査では、塀と下水溝が伴う状況は未検出である。しかし尾張藩上屋敷跡遺跡では、石組溝（2類）に築かれた築石のサイズが東西で異なることから、御殿空間の生活面の方が詰人空間よりも高く構築されていたことがわかる。

御殿空間と詰人空間の間に高低差が認められる大名屋敷跡遺跡は、台地上か傾斜地上に立地する遺跡である。低地の大名屋敷跡遺跡に関しては、御殿空間と詰人空間の区画遺構に関する事例が少ないが、汐留遺跡の調査例でみる限り、高低差は設けられなかった可能性が高い。

御殿空間と詰人空間との高低差が具体的にどの程度設けられていたのかは詳らかでない。屋敷内のことであり、個々の屋敷の立地などによっていたものと思われる。御殿空間がM1面からM2面への崖線を含む加賀藩本郷邸の御殿空間では、御殿空間西側の町屋との間に設けられた高低差よりも、東側の崖線付近の方が、傾斜地を盛土造成した分だけ大きくなる。

高低差は家中の身分秩序の反映として、御殿空間の生活面が詰人空間よりも高く構築されることが重要であり、屋敷の立地環境を活かせることができる場合はそれを取り入れていたことがわかる。敷地が台地の上下にまたがる尾張藩上屋敷跡遺跡（尾張藩上屋敷）、東京大学本郷構内遺跡（富山藩上屋敷）、千代田区和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷跡遺跡（岡部藩上屋敷）において、御殿空間が台地上に配置されているのは、それを端的に反映したものだろう。

御殿空間と詰人空間の区画施設は、一義的には二つの空間を区切るための施設である。しかしその機能には、御殿空間を外部から見えなくする遮蔽物としての側面もあった。これは御殿空間内でも表向と奥向、あるいは表向と長局といった、異なる性格の空間を区画する施設でも、植栽痕や生垣となる溝といった遺構として検出している。

御殿空間と詰人空間とを区画する塀にみられる瓦葺き・塗壁や塗家造りという構造は、大名屋敷を屋敷境として取り囲んだ表長屋（長屋塀型表長屋）と共通する。藩士を収容するといった機能こそ伴わないが、御殿空間にとって詰人空間は藩邸の外部社会と同様の、異なる社会として認識されていたことが反映されたものといえる。

史料 4-1 でみた御殿空間（大名庭園）と詰人空間の区画施設が破損した際の行動や、富山藩邸でみた屋敷境としての堀・区画施設としての堀といったあり方（東京大学本郷構内遺跡 CRC-A 地点）は、大名屋敷の御殿空間と詰人空間の階層性と、それに対する家中の認識を反映したものと理解できるのである。

## 第5章 栽培遺構からみた大名屋敷における植物栽培の諸様相

### 第1節 はじめに

近世城下町は兵農分離と商農分離の政策のもと形成され、幕藩体制の確立によって完成した都市である（西川幸治 1972）。中世都市からの移行を論じて小野晃嗣が明らかにしたように（小野 1934）、「侍屋敷」と「町屋」に分離された近世都市（城下町）は農耕の要素を含まない。江戸もこうした都市のあり方を踏襲するが、特に近世初期の江戸に関しては、史料的な制約から不明な点が多い。

『慶長江戸絵図』（1608年/慶長13）には整然と区画された大名屋敷が建ち並ぶ状況が描かれている。水江漣子はこれを『別本慶長江戸図』から数年のうちに都市化が進んだ江戸の都市開発の状況を示すものと捉えている（水江 1981）。ただし『慶長江戸絵図』が描いているのは郭内のみであることには留意する必要があるだろう。『正保年間江戸図』（1645年/正保2以前）では市谷などに百姓地が確認できる。小石川火之番町は1697年（元禄10）に六蔵なる百姓が拝領したが、ここが年貢町場となったのは1710年（宝永7）のことである<sup>59</sup>。少なくとも17世紀には、江戸城周辺域を別とすれば百姓地が存在していたことになる。

近年、小石川牛天神下遺跡（都立文京盲学校遺跡調査班 2000）、石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡（港区教育委員会 2008）、会津藩保科（松平）家屋敷跡遺跡（慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 2011）などで水田や畑が検出している。これらはいずれも武家屋敷が造成される以前のものであり、家康入府前後の江戸の景観を知る上で重要な調査事例である。

江戸を対象とする発掘調査は1980年代半ばから本格的に始まり、染井遺跡のような江戸時代の植木屋の調査も行われたが（豊島区教育委員会 1991ほか）、東京大学本郷構内遺跡、郵政省飯倉分館構内遺跡、真砂遺跡など、この時期に行われた大名屋敷跡遺跡では、栽培や耕作に関連する遺構は未検出だった。

大名屋敷跡遺跡の発掘調査は、歴史学における武家地研究の進展も促した。加賀藩本郷邸をモデルとして提示された吉田伸之による大名屋敷の空間構造では、詰人空間は家臣や武家奉公人の居住と、藩邸の生活や詰人を支配・管理するための公的施設がおかれた空間と規定され（吉田 1988）、大名屋敷の内部に生産や流通を担う要素を持たなかったことが、藩邸と江戸の町人社会との関係を形成したとされた（吉田 1995）。

---

<sup>59</sup> 『御府内備考 卷之四十四』。以下、『御府内備考』は蘆田伊人編 1970による。

大名屋敷跡遺跡の調査例が増加するのに伴って、大名屋敷の生活実態の多様性が明らかになっていく。大名屋敷跡遺跡において栽培遺構が最初に報告されたのは、内藤町遺跡 1 次調査（高遠藩下屋敷<sup>60</sup>）である（新宿区内藤町遺跡調査会 1992）。谷川章雄は「中屋敷の多様な土地利用のあり方は考古学的知見によって明瞭にとらえられるもの」として、大名屋敷の空間構造の解明における植物栽培遺構の重要性を指摘した（谷川 1992）。

市谷本村町遺跡（尾張藩上屋敷）の 1 次調査（新宿区市谷本村町遺跡調査団 1993）と 4 次調査（新宿区市谷本村町遺跡調査団 1995）では、両地点にまたがる 20 条以上の溝状遺構を検出した。大八木謙司・成田涼子は、遺構の検出状況や『市ヶ谷屋敷平面図』との照合から、この遺構が庭園内の「御花壇」に相当する施設であると位置づけた（大八木・成田 1993）。

尾張藩上屋敷跡遺跡での栽培遺構の検出は、栽培活動の実態解明のために歴史学や文化財科学との学際的研究を促した。長谷部由紀は『御小納戸日記』の分析を通じて、庭（花壇含む）で栽培されていた植物として 23 種の植物を採り上げている。これらの植物が鑑賞用であるとともに、食用及び薬用として利用されていたことから、「庭園・薬園・菜園の機能が未分化」な栽培状況と、「御花壇」の植溜としての役割を指摘した（長谷部 1993）。遺構の状況から上屋付きの花壇を想定した越村篤は、尾張藩が御殿空間で栽培した可能性のある植物として菊と朝鮮人参をあげた（越村 1999）。文化財科学による分析では、土壌分析によって考古学と歴史学から花壇と推測した溝状遺構の覆土が、耕作土だったことが明らかになった。しかし花粉分析による栽培作物の解明には至っていない（パリノ・サーヴェイ 1993）。

渋谷葉子は尾張藩中屋敷の御殿跡地の転用として、跡地が保谷村の百姓や藩士たちへ貸し出されていたことを明らかにした（渋谷 1994）。耕地の貸し出しは上屋敷の被災によって中屋敷が居屋敷となると中止になるなど、上屋敷の状況と連動していることを指摘した（渋谷前掲）。

武家地・町人地・寺社地・百姓地が混在する地域が多いという江戸の状況は、18 世紀以降も特に江戸近郊で顕著だった（原田佳伸 1997）。北原糸子・奥須磨子は戸塚村を例に、江戸郊外に展開した抱屋敷・抱地での農民による蔬菜類生産の可能性を指摘した（北原・奥 1985）。中野達哉は主に江戸東南部を対象に、百姓地に大名の抱屋敷が形成されていく状況を明らかにした（中野 1990）。原田佳伸は岡山藩大崎屋敷を例に、藩邸内の畑で栽培した蔬菜を他の藩邸へ供給していたことを明らかにした（原田 1990、1997）。

---

<sup>60</sup> 『内藤町遺跡』では 17 代当主内藤頼博の「下屋敷ともいわれるが、中屋敷の方が正しいらしい」という話から、本屋敷を中屋敷としている（北原 1992）。



都心部の大名屋敷跡遺跡に比べて、江戸郊外の下屋敷や抱屋敷の調査例は少ないが、千駄ヶ谷五丁目遺跡（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997 ほか）や新宿六丁目遺跡（東京都埋蔵文化財センター2005）など、下屋敷や抱屋敷での植物栽培遺構の検出例も増えている。ただし江戸郊外に展開した下屋敷・抱屋敷の広大さと比較して、現時点で実施している発掘調査はいずれも極めて限定された範囲を調査の対象としているに過ぎず、歴史学が指摘しているような大規模な耕作地の存在をうかがわせる調査例はない。

植物栽培遺構の分析においては、文化財科学による種々の分析が栽培活動の実態を明らかにする上で重要な役割を担っている（宮路淳子 2002）。大名屋敷跡遺跡の植物栽培遺構では尾張藩上屋敷跡遺跡での分析のほかは、向柳原町遺跡（鈴木茂 2005）や東京大学本郷構内遺跡 CRC-A 地点 SD11006 で行われているに過ぎない<sup>61</sup>。大名屋敷跡遺跡での栽培遺構の検出例に限られている現状では、科学分析を行うことを前提とした調査計画を立案することは難しいと思われる。自然科学分析によって栽培活動のあらゆる点が明らかになるとは限らないが、大名屋敷内の活動の多様性を明らかにする上では不可欠なものであり、分析事例の増加が期待される。

大名屋敷跡遺跡における耕作地に関係する遺構の検出例は増えているが、その最初の検出例である内藤町遺跡において谷川が指摘した（谷川前掲）、大名屋敷内の栽培活動の従事者が未解明である点は依然として課題として残っている。

本章では大名屋敷跡遺跡の検出した畑、畝溝、花壇など（以下、栽培・耕作遺構）の分析から、大名屋敷の生産活動としての植物栽培のあり方を検討する。

---

<sup>61</sup> 新宿六丁目遺跡でも畑跡の覆土を対象として土壌分析が行われているが、実施されたのは大名屋敷に隣接した給地手作場である。

## 第2節 大名屋敷跡遺跡の植物栽培遺構

### 第1項 植物栽培遺構の諸形態

大名屋敷跡遺跡で検出した主な植物栽培遺構をまとめたのが表 15 である。遺構の分類名や分類基準は遺跡によって様々だが、大別すると溝・土坑・溝状土坑という3つの形態に分けられる。それぞれの形態と栽培のあり方をみていくことにする。

遺跡	屋敷種類	空間	形態
市谷本村	上	御殿(庭園)	溝
向柳原町	上	御殿(庭園)	土坑
千駄ヶ谷五丁目2次	抱	詰人(空閑地)	溝状土坑
内藤町	中	詰人(空閑地)	溝
新宿六丁目	下	詰人(空閑地)	溝
尾張藩下屋敷跡	下	詰人(居住地)	溝
東大第2中診	上	不明	溝
東大CRC-A	上	詰人(居住地)	溝
東大御殿下	上	御殿(庭園)	土坑
汐留	上	詰人(居住地)	土坑
萩藩毛利家屋敷	下	御殿(居住地)	溝

表 15 栽培・耕作遺構の種類と大名屋敷の空間構成

#### 1. 溝

植物栽培に関連する溝には、次のようなものが考えられる。

- ① 花壇
- ② 畝立てに伴って形成される畝間溝。
- ③ 水場から耕作地へ水を引き込む灌漑・給水などの水利施設に伴う溝。
- ④ 耕作地の範囲を示す地境としての溝。

花壇(①)の例は、市谷本村町遺跡1次調査・4次調査で検出した溝状遺構が該当する(図27)。大八木・成田は遺構の形態(直角に近い急斜度な立ち上がり)、出土遺物(多量の釘)、そして絵図上の「御花壇」という表記から、本遺跡で検出した溝状遺構を大名庭園内の花壇であると把握した(大八木・成田前掲)。

百人町三丁目遺跡(大久保百人組大縄地)で検出した溝状遺構も、花壇(花壇状遺構)と把握されている(新宿区遺跡調査会1996、新宿区補助第七二号線遺跡調査会1998)。当遺跡の溝状遺構には釘の出土はないが、遺構の立ち上がりは市谷本村町遺跡と同様に急斜度を呈しているほか、遺構底面の根穴や黒ボク土を覆土とする点が特徴である。

畝間溝（②）は畝と畝との間にある溝状の凹みである。溝として構築された目的なものではなく、畝を立てるために土をかき上げた結果生じた凹みである。畝は畑の水はけを目的としたものなので、必要以上に高く築かれることはない。そのため畝溝も深い溝にはなることはない。また畝に伴うことから溝が一条単独で検出することではなく、複数の溝状遺構からなることも特徴である<sup>62</sup>。

その間隔は取り過ぎれば作付面積あたりの畝数の減少を来し、これは収穫量の減少に直結する。しかし間隔が狭すぎても、隣り合う作物同士で日当たりや風通しを阻害するほか、作業スペースの確保も困難となる。畑の状況によって異なるが、現在の耕作ではおよそ 20-30 cm の間隔を取る。

水利施設に伴う溝（③）は給水施設と耕地とを結ぶ導水路である。花壇や畝に伴う溝とは軸が異なる場合がある。遺構の覆土には水成堆積層<sup>63</sup>や木樋の痕跡が認められる。大名屋敷跡遺跡における明確な検出例は現段階では得られていない。

耕作地を区画する地境としての溝（④）については、宇津木台遺跡で分析例が示されている（梶原勝 1991）。耕作地を屋敷内で区画する溝は千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査で認められる。

植物栽培に関連する溝状遺構として考えられる 4 つのあり方のうち、水利施設に伴う溝（③）は大名屋敷跡遺跡での明確な検出例がないことから、耕作地を区画する溝（④）は屋敷内の区画施設という性格から分析対象から除外し、以下では栽培活動に直接関係する花壇（①）と畝間溝（②）を分析の対象とする（表 16）。

花壇跡と推測される市谷本村町遺跡 5 号遺構や百人町三丁目遺跡 16 号遺構は、溝の幅と深さ、及び溝間隔が No.1-4 よりも大きな値を示している。また表には反映していないが、遺構の立ち上がりが急斜度である点も共通している。この 2 つを除いた No.1-4 の特徴、即ち、狭くて浅い溝が 0.5m 程度の間隔で設けられるという特徴が、畝立ての結果生じたものであることを反映している。

No.	遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	溝間隔(m)	長軸
1	新宿六560	2-4	0.5	0.1-0.3	0.1-0.3	東西
2	尾張下	0.4-6.5	0.4-0.6	0.1-0.2	0.2-0.3	東西
3	第2中診SD1179	5-6	0.25-0.4	0.05-0.15	0.5-0.8	東西

<sup>62</sup> 畝の向きは東西方向に畝を立てる方が作物全体に日が当たる。しかし畑と周囲の地形との関係や、作付けの季節などを勘案するので特に決まりはなく、同じ畑であっても作付けの季節や作付け植物によって 90 度変化することがある。その場合、遺跡に残る溝状遺構は井桁状に交差した状態で検出される。したがって溝状遺構の方向は、その遺構が通常の溝であるのか、畝間溝であるかを決定する絶対条件とはならない。

<sup>63</sup> 百人町三丁目遺跡 3 次調査 25 号遺構・26 号遺構では、水成堆積層中から流水不定性の珪藻化石を検出しており、遺構内に水が流れていたことが明らかになった（新宿区遺跡調査会前掲）。

4	CRC-ASD11006	5-5.6	0.4-0.6	0.1-0.2	0.3-0.5	南北
5	市谷本村5号など	6.34	0.86	0.35	0.7-0.9	東西
参考	百人町三16	25.0	1.3	0.5	1.1	南北

表 16 栽培遺構と考えられる溝状遺構

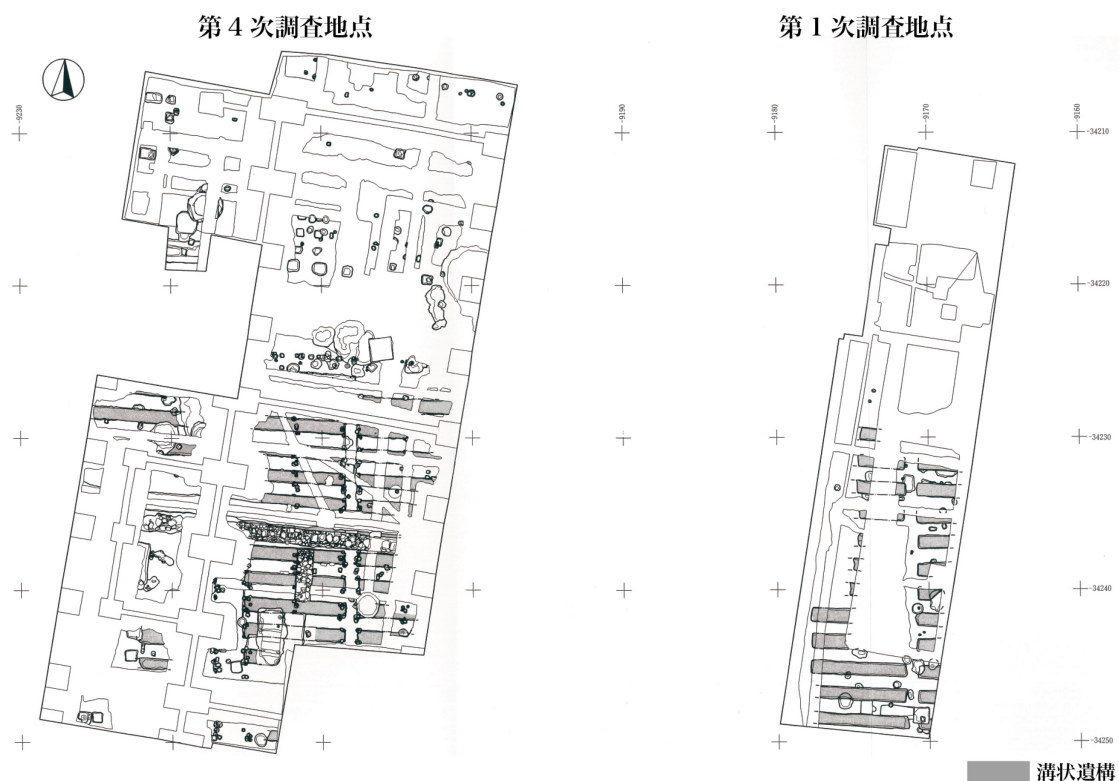


図 27 市谷本村町遺跡の溝状遺構（越村 1999 一部改変）

## 2. 土坑

向柳原町遺跡 21-U-01 は平面形が瓢形を呈しており、長軸 3.6m、短軸 1.4m、深さ 0.2m である。遺構の深度は浅いが、21-U-01 は 1806 年（文化 3）に焼失した 1 号建物跡の上に構築されていることから、近代以降の削平を受けていることが考えられる。遺構の立ち上がりが急斜度であること、覆土は灰黄褐色土で、底面に炭化物が敷かれたように分布する状況から、本稿では花壇と捉えたい。瓢形をした平面形は、溝状遺構や溝状土坑の花壇と大きく異なるが、これは庭園の一角にあたることと関係しているかもしれない。

汐留遺跡 5K-157 は、直径 0.3-0.6m の不整形円形を呈した土坑（深さ不明）が 50 cm 間隔で 3 ないし 4 列並ぶ土坑群（範囲は長さ 17.5m、幅 4m）で、土坑は 28 基以上にのぼる。個々の土坑の平面形と断面形は報告書に未掲載だが、黒褐色土を覆土とする（東京都埋蔵文化財センター 2000）。汐留遺跡は低地を埋め立てて大名屋敷を造成したので、黒褐色土による覆土は報告書が指摘したように遺跡（屋敷）外から搬入したものだろう。

土坑の断面形や深度は不明だが植栽痕の可能性が高い。しかし 3 ないし 4 列にわたって樹木が並ぶ状況は、屋敷内の空間境を目的として設けられた植栽列を想定することは難しい。報告書では本遺構を「御殿の南西に位置する。おそらく菜園の跡であろう」と位置づけている（東京都埋蔵文化財センター前掲）が、菜園といっても畝立てによる耕作ではなく、花樹や果樹の栽培だったことが推測される。

東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点の植栽痕は、報告書の附図（全体図）に記載があるのみで、遺構個別の記述や図面はなく詳細は不明である（東京大学遺跡調査室 1990）。

全体図を見る限り、直径 1-3m 程度の不整円形の土坑が切り合っている（図 28）。

該期の調査地周辺を絵図でみると、『加藩江戸本郷屋敷総絵図』（石川県立歴史博物館大鋸コレクション）に庭園（育徳園）の露地を挟んだ緑地帯があり、「梅畑」、「四十七間」と記載されている。御殿下記念館地点で検出した植栽痕は、「三拾足立御厩」に相当する建物跡遺構との位置関係から「梅畑」の北側の一部にあたる。

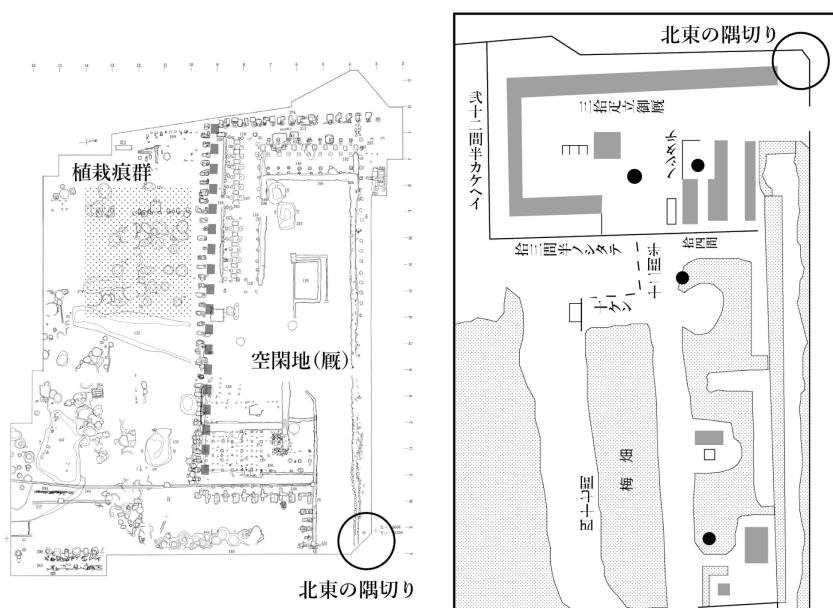


図 28 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点の植栽痕群と藩邸内の土地利用（右は『加藩江戸本郷屋敷総絵図』を基に作成）

### 3. 溝状土坑

溝状土坑は千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査において提示された遺構分類で、「長軸 12m 以下、断面形は長方形の細長い土坑」である（斉藤信弘・小高敬寛 1998）。本遺跡で検出した溝状遺構の幅は 0.6-0.9m で、長軸と短軸の比は 1:3-1:6 である。遺構の深度が浅く、立ち上がりの様子が不明なものが多いが、これは後代の削平の影響を考慮する必要があるだろう。検出状況の良好な遺構では立ち上がりが直角に近い。

また畝間溝に該当する溝状遺構のように、数条から数十条の溝が集中するような状況はみられない。千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査の報告書に掲載された写真図版では、遺構底部にピットを伴うものが多く認められる。報告書では特にこれについて言及はないが、百人町三丁目遺跡の溝状遺構（花壇）の底部に認められる根穴に類似している。こうした状況からみて斉藤・小高が指摘しているように花壇の可能性が高い。

本地点は宇都宮藩の抱屋敷である。『外畑之図』（栃木県立文書館蔵）には屋敷の中央部に畑が描かれており、『植溜之図』（栃木県立文書館蔵）はどの抱屋敷かは定かではないが（高野良徳 1997）、花壇や「植木室」といった栽培施設の存在がうかがえる。

大名屋敷跡遺跡で検出する栽培遺構の溝・土坑・溝状土坑の各形態は、以上のように「花壇」、「畑」、「花・果樹栽培」の 3 つの植物栽培に対応する。これを大名屋敷の空間構成との関わりでまとめたのが表 17 である。

花壇と花・果樹栽培が御殿空間と詰人空間のどちらにも認められる。これは庭園・薬園・菜園の機能が未分化な大名屋敷での栽培状況（長谷部前掲）が遺構の形態に反映したもので、必ずしも両空間での栽培活動が同一のものであったことを意味するものではない。栽培していた植物の具体的な品種や、栽培目的の解明には、歴史学や文化財科学との学際的な研究が不可欠である。

栽培の実態は異なるものの、花壇や花・果樹栽培が両空間に認められるのに対して、畑は詰人空間のみにみられる植物栽培である。その意味で畑での植物栽培、即ち耕作が、御殿空間と詰人空間での栽培活動の違いを最も顕著に表しているものといえるだろう。

詰人空間に畑が認められる大名屋敷は、江戸郊外の下屋敷や抱屋敷に限らない点は特に注目される。これまで屋敷内部に生産の要素を持たなかったと考えられてきた（吉田 1995）、加賀藩邸などの上屋敷にも畑が存在し、そこで耕作が行われていたことは、大名屋敷での生産活動を考える上でも極めて重要な知見である。

そこで次に、詰人空間で検出した栽培遺構との畑のあり方を個別の遺跡でみていくことにしよう。

空間	花壇	畑	花・果樹
----	----	---	------

御殿空間（庭園）	○		○
詰人空間	○	○	○

表 17 空間毎の栽培のあり方



## 第2項 詰人空間の栽培遺構と畑

### 1. 東京大学本郷構内遺跡クリニカルリサーチセンター地点 (CRC-A 地点)

CRC-A 地点は加賀藩邸と富山藩邸とにまたがっている(資料編図 45)。南北方向に延びる、底部に柱穴を伴う溝状遺構(SD12081 など)が加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境であり、畝間溝(SD11006)は加賀藩邸側で検出した。

SD11006 は10条の溝からなり、各溝の規模は長さ5.0-5.6m、短幅0.3m、深さ0.1m程度である(図 29)。溝と溝の間隔は30-50cm。覆土はロームブロックを含む褐色土層で、遺物は出土していない。検出したのは本地点で1面と呼んでいる生活面で、幕末の遺物を含んでいる。

加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境SD12081は調査区南端まで延びていない(資料編図 51)。このSD12081が途切れた部分には深い攪乱が入っており、屋敷境が南側へどのように展開するかは本地点の調査では明らかにしえなかった。本地点の南隣りに位置する立体駐車場地点でも、SD12081に続く溝状遺構は未検出である(追川 2012)。

幕末期の本郷邸を描いた絵図の一つ、『上中下屋敷絵図(御上屋敷惣絵図)』(前田育徳会尊経閣文庫蔵)では、調査地点周辺には東西に棟を持つ4宇の長屋(北から「御居宅脇壱番御貸小屋」～「御居宅脇四番御貸小屋」)が描かれている。加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境は、「御居宅脇四番御貸小屋」の南縁から西側へと鉤の手状に屈曲している。

SD12081が調査区を南側に貫かない状況が、絵図に描かれた屋敷境の屈曲を反映したものか、現段階では不明だが(西側へ延びる溝状遺構は未検出)、畑はこの4宇の長屋のいずれか、恐らく「御居宅脇壱番御貸小屋」か「御居宅脇参番御貸小屋」に隣接したものである可能性が高い。ただし絵図には畑は描かれていない。

ところで4宇の長屋のうち、「御居宅脇壱番御貸小屋」、「御居宅脇参番御貸小屋」、「御居宅脇四番御貸小屋」は、長屋の東側の一画が塀などで他の部屋とは区画されている。これは絵図に記された内容から、定府の住まいだったことがわかる。畑が「御居宅脇参番御貸小屋」に隣接したものであるならば、定府の藩士が耕作に携わっていたことが考えられる。

### 2. 汐留遺跡

汐留遺跡は遺跡内に龍野藩上屋敷、仙台藩上屋敷、会津藩中屋敷を含んでいる。植栽痕列(5K-157)は龍野藩邸の南側で検出した。報告書ではこの遺構の性格を、「御殿の南西に位置する。おそらく菜園の跡であろう」と指摘しているが(東京都埋蔵文化財センター2000)、御殿空間と詰人空間のいずれに帰属したものであるかについての明確な言及はない。そこで植栽痕列周辺の遺構分布状況から、当該遺構の空間的位置づけを検討しよう。

図 30 は龍野藩邸南側外郭部の遺構分布を模式化したものである。下水溝（5K-677）の北側は布掘りの基礎遺構が並んでいる。これに対して南側は瓦溜が多く分布する。この様に下水溝（5K-677）を挟んで南北で遺構の検出状況が異なっているのは、下水溝を境に北側に土蔵が並び、南側には屋敷境の堀（6J-500）に沿って瓦葺きの建物、礎石は未検出だが表長屋と思われる一が並んでいた藩邸の景観を反映したものだろう。

この表長屋は、御殿空間から屋敷境の堀にのびる下水溝（5K-739）によって西側を画されている。これより西側は礎石、瓦溜ともに未検出な空地となる。植栽痕集中部（5K-157）を検出したのは、この空地にあたる（礎石建物 5K-563 と重なるが、これは時期差と捉えられる）。つまり果樹などの樹木園が想定される植栽痕集中部（5K-157）は詰人空間内の、表長屋に隣接した場所に設けられた栽培地であると位置づけられる。

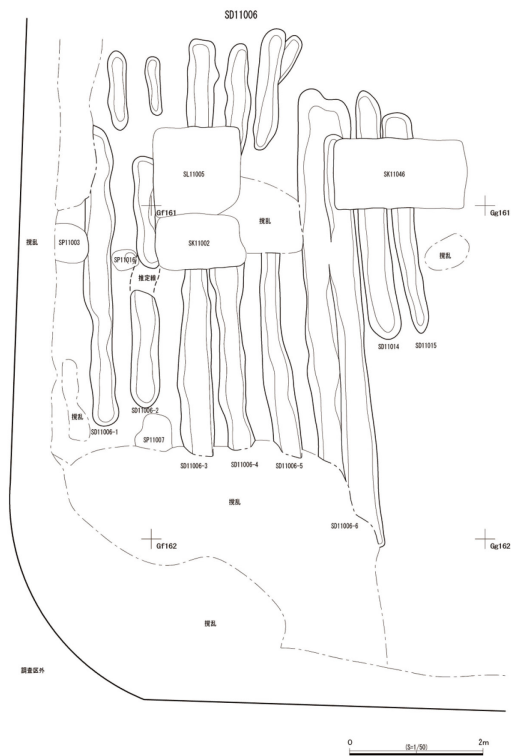
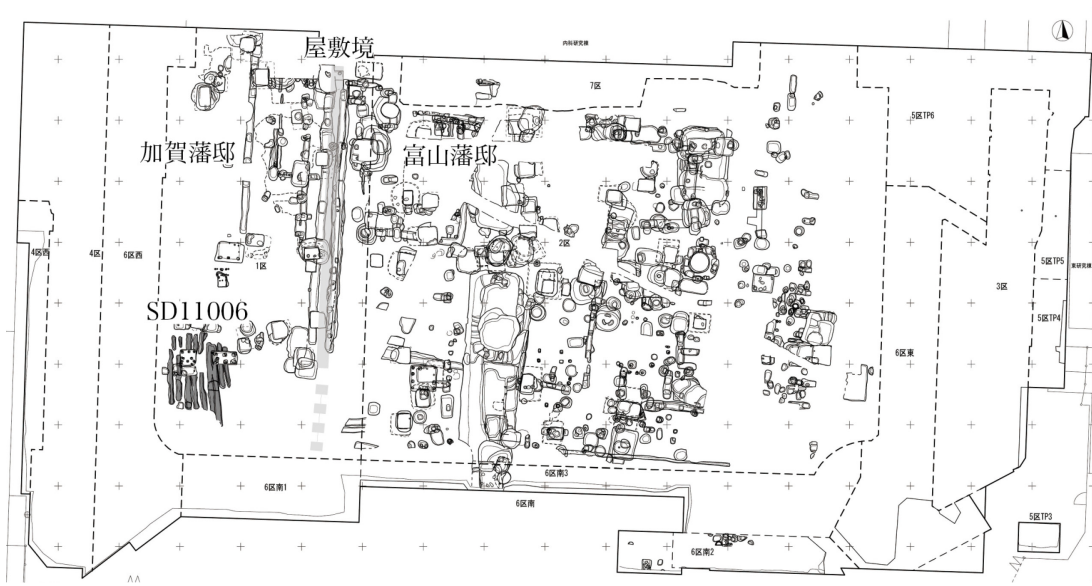


図 29 東京大学本郷構内遺蹟 CRC-A 地点 SD11006 (東京大学埋蔵文化財調査室)

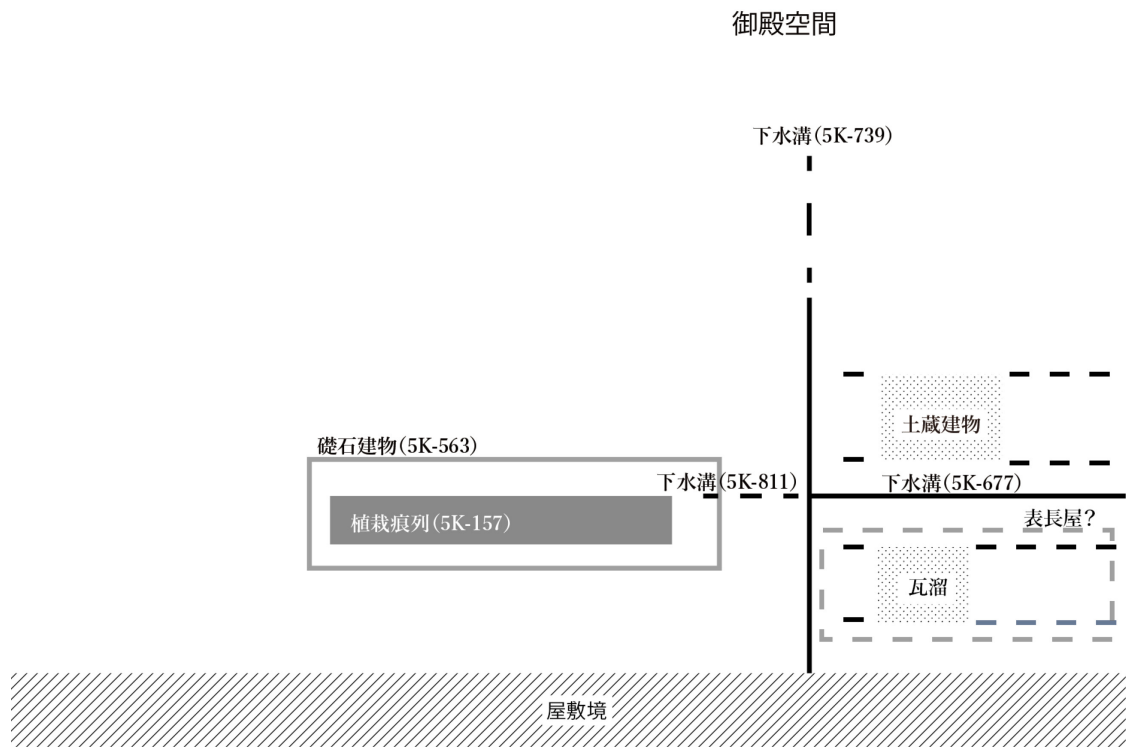


図 30 汐留遺跡（龍野藩上屋敷南側）の遺構分布（模式図）

### 3. 内藤町遺跡 1 次調査

内藤町遺跡 1 次調査は高遠藩四谷屋敷の北側外郭部にあたる。畝間溝（畑）は B 区内の小支谷を挟む東西の台地縁辺部で検出した（図 31）。

谷の東側（B3 ブロック）では、畑周辺に井戸、地下室（B-1 号遺構）、土坑（B-6 号遺構）がある。谷の西側（B6 ブロック）の畑周辺には、井戸のほか、建物跡（B-121～B-134 号遺構）、土坑（B-117、B-119、B-120）などがある。建物跡は直径 20-40 cm、深さ 10-30 cm の柱穴からなる掘立柱建物の表長屋である。谷を挟んだ東西に表長屋が存在し、台地縁辺部にそれぞれ畑が設けられていた景観が推測できる。

#### 4. 新宿六丁目遺跡

新宿六丁目遺跡は広瀬藩下屋敷<sup>64</sup>である。調査区は大名屋敷のほかに、鉄砲玉薬同心の給地手作場や東大久保村・西大久保村を含んでいるため、畑や水田跡が複数基検出しているが、560号遺構と1867号遺構が広瀬藩邸内で検出した栽培遺構(溝状遺構)である(1867号遺構については個別図がないため詳細不明)。

560号遺構は10条以上の溝状遺構からなる畑である。溝は南北16m、東西14mの範囲に分布しており、19世紀半ばの遺物が出土している。

560号遺構(畑)は藩邸西側の屋敷境遺構(202号溝)から約12m東側に位置している。広瀬藩邸では絵図から屋敷内の空間構成を知ることはできないが、『御府内沿革図書』や『江戸切絵図』にみられる拝領者名の表記方向から、屋敷の表は屋敷北側の道(調査区外)に面していたと考えられる。栽培遺構が検出した場所は藩邸東側の外郭部であり、詰人空間だったと考えられる。

広瀬藩邸内からは39基の地下室を検出している。列をなした検出状況は、詰人空間内に長屋が建ち並んでいたことをうかがわせる。しかし地下室の年代は18世紀第2四半期から中葉であり、耕作遺構と同時期の地下室は存在しない。土坑の検出状況も同様の傾向がある。広瀬藩邸の畑は詰人空間とはいえ、長屋などのない空閑地に設けられていたことが推測される。

---

<sup>64</sup> 1675年(延享3)に拝領した。1859年(安政6)以降は山上藩邸となる。調査区内は大名屋敷のほか、鉄砲玉薬同心の給地手作場、東大久保村・西大久保村を含んでいる。

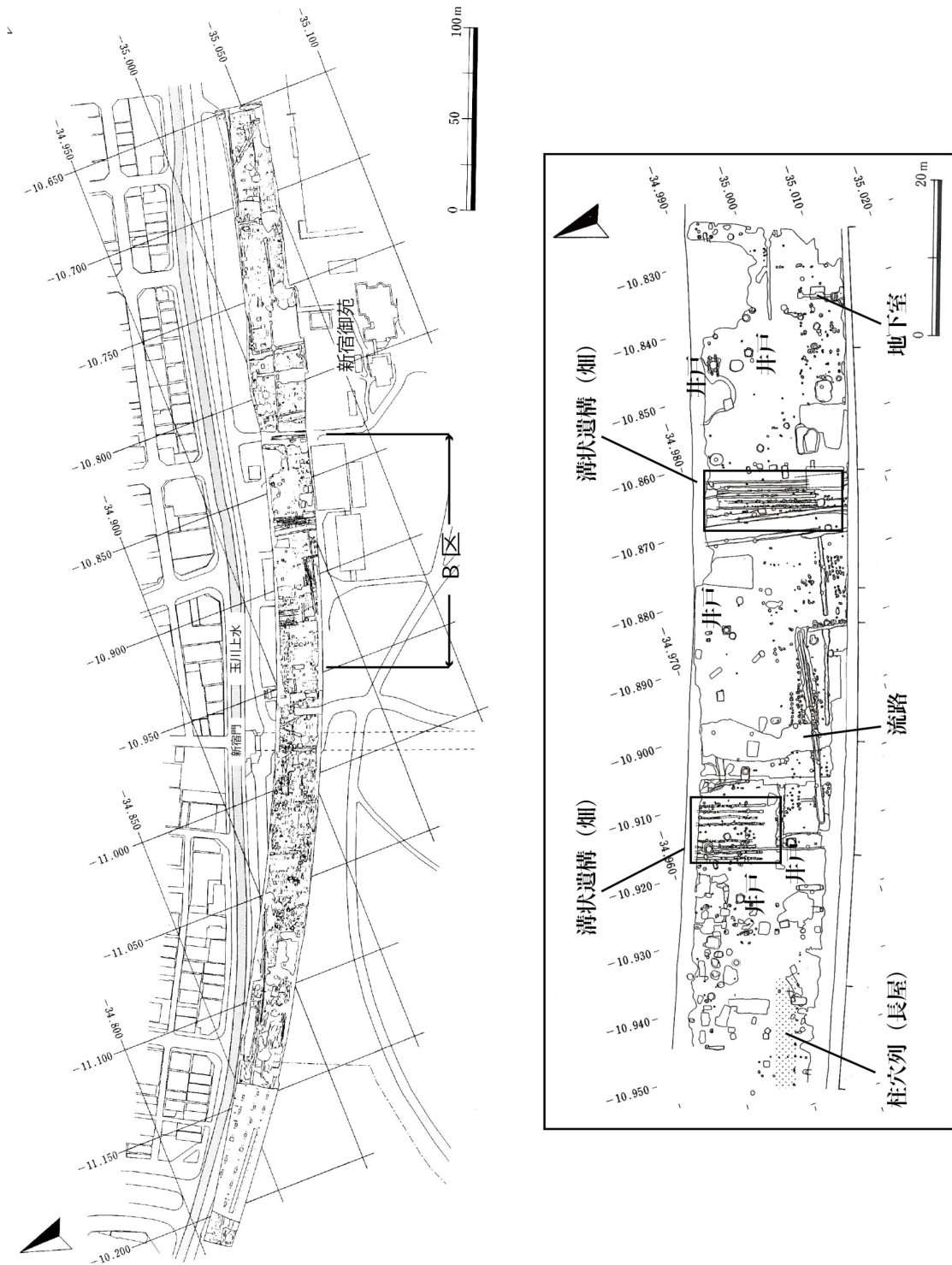


図 31 内藤町遺跡 1 次調査 B 区の遺構分布 (新宿区内藤町遺跡調査会 1992)

### 第3節 大名屋敷での植物栽培の諸様相

#### 第1項 御殿空間での植物栽培

大名屋敷での植物栽培は御殿空間と詰人空間のどちらでも行われていた。しかし詰人空間の畑のあり方を分析した結果、勤番長屋に隣接した場所に設けた畑での耕作と、空閑地に設けた畑での耕作とがあることが明らかになった。

以上のことを踏まえると、大名屋敷の植物栽培のあり方は次の3つの類型に分けることができる（表18）。

類型	栽培活動のあり方	上	下
A	御殿空間（大名庭園内）での栽培	●	○（尾張下）
B	詰人空間の居住地での栽培（耕作）	●	●
C	詰人空間の空閑地での栽培（耕作）	-	●

表18 栽培活動の諸様相（●は栽培遺構として検出例のあるあり方、○は遺構としては未検出ながら絵図で確認できるあり方）

植物栽培類型Aは御殿空間での栽培である。検出事例は3遺跡と少数だが、いずれの遺構も大名庭園内で検出している。これらはいずれも上屋敷だが、尾張藩下屋敷（戸山邸）では御殿空間内に花壇が設けられていたことが絵図からうかがえる<sup>65</sup>（ただしこれらは尾張徳川家下屋敷跡遺跡では未調査部分にあたる）。

このことから屋敷内に御殿空間を擁する大名屋敷では、上屋敷や下屋敷といった屋敷の種類に関わらず、植物栽培が行われていた可能性が高い。むしろ庭園との関わりが強い類型Aの検出状況を踏まえれば、大名庭園内に栽培地を設けることが可能な庭園の広さに規定されるといえるだろう。敷地面積が限られていた江戸城周辺の上屋敷には設けられていなかった可能性が高い。

なお尾張藩下屋敷の『戸山御屋敷絵図』（徳川林政史研究所<sup>66</sup>）には、庭園内の大原と呼ばれる藩邸北西側の台地上に畑、池に隣接して田（「御泉水田」）がみられる。戸山邸の庭園には宿場町を模した施設も設けられている。この畑や水田も、庭園内に田面風景を表

<sup>65</sup> 『山御屋敷御花壇取広ノ図』（徳川林政史研究所）は庭園内に設けられた花壇である。絵図の註記から花壇には「牡丹」の他、「しゃくなげ」（ジャクナゲ）、「はまなす」、「いはら」（イバラ）が植えられていた（渋谷2006）。『山御屋敷御指図二通（表御殿御絵図）』（徳川林政史研究所）には、表御殿の北側に花壇が描かれている。

<sup>66</sup> 本稿では『東京市史稿 遊園篇2』（東京市役所1929）を参照した。

出するための役割を担っていたとも考えられるので、米や蔬菜の生産を目的とする本来の栽培活動とはわけておく。

大名屋敷跡遺跡の栽培遺構の年代的位置付けは、御殿空間・詰人空間にかかわらず概ね 18 世紀後半である。しかし『江戸図屏風』（歴博本）には、江戸城内の「御花島」でツバキが栽培されている様子が描かれている。中尾佐助は将軍（家康・秀忠・家光）の「花癖」と呼ばれる植物愛好が、大名屋敷での花卉栽培に大きな影響を与えたことを指摘している（中尾 1986）。寛永年間に刊行された百椿集、あるいは百椿図と呼ばれるツバキの図譜には、制作や刊行に大名が関わっているものがある（箱田直紀 2006）。このことから少なくとも 17 世紀前半（寛永年間）には、御殿空間において花卉栽培が行われていた可能性が高い。

ただしそれが尾張藩上屋敷跡遺跡で検出したような花壇での栽培であったのかについては不明である。長谷部は『御小納戸日記』の記述を通して、「花壇」と「花畑」という言葉が、「同じ物の言い替え表現である可能性は高い」ことを指摘している（長谷部前掲）。御殿空間での花壇の出現時期に関しては、検出事例の増加を待って改めて検討したい。

植物栽培類型 A は御殿空間内の大名庭園で検出することから、各屋敷の庭園を職掌する部署が栽培・耕作活動も担ったものと思われる。たとえば市谷本村町遺跡で検出した尾張藩上屋敷の花壇では、庭園の管理を行う御庭中間の中に設けられた花壇懸り中間が担当した（山本前掲）。

また御殿空間内の植物栽培には、出入りの植木屋も関わっていた（秋山伸一 1997）。史料 5-1 は津藩下屋敷（1658 年・元治元年拝領）の庭園の由来である<sup>67</sup>。

#### 史料 5-1

「(略) 其初めハ藤堂大学頭高久の露除の男成しに、大学頭草花の類当座に移し持たせ、花過れハ悉くぬき捨させけるをハ、此伊兵衛植ためけるより、次第次第にきり島つゝし、百椿牡丹、(略)」

史料にある伊兵衛は駒込村染井の植木職人伊藤伊兵衛のことである。津藩邸ではキリシマツツジなど種々の植物を植えた植木職人が、その管理育成（露除）も手がけていた。尾張藩市谷邸でも 18 世紀半ば以降になると染井や高田の植木屋が出入りするようになる（山本前掲）。

---

<sup>67</sup> 『虎丘堂集書』。引用は野間晴雄 2010 による。



野間晴雄が江戸城<sup>68</sup>や大名屋敷へ出入する植木職人を、「特権的な幕府・大名相手の商売づきあい」と位置づけているように（野間 2010）、御殿空間内の栽培・耕作活動には藩邸出入の植木職人の存在が大きかったものと推測される。

## 第 2 項 詰人空間と植物栽培

### 1. 居住地の畑と耕作

植物栽培類型 B 類は詰人空間内の居住地に隣接した畑での耕作活動である。

#### (1) 加賀藩上屋敷

加賀藩上屋敷（本郷邸）の詰人空間に居住する藩士らが居住域で耕作を行っていたことは、藩士らに出された次の通達<sup>69</sup>で知ることができる（史料 5-2）。

#### 史料 5-2

「御家中家来末々之者心得違之者も有之体に付、左之通一統相触可申哉之旨、御横目申聞候に付其通と申渡候事。・・・・・・・・（略）・・・・・・・・且又御貸小屋前往来筋江、畑物抔作り置候處も有之体に相聞候。・・・・・・・・（略）・・・・・・・・」

「御貸小屋前往来筋」での耕作とは、勤番長屋の立ち並ぶ一角に（場合によっては長屋と長屋との間の路地にはみ出すように）作った畑のことと思われる。これを禁じていることが、実際に藩士たちの間で耕作が行われていたことを示している。

とはいえ『江戸御上屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館蔵・1840 年代半ば）には詰人空間に長屋だけでも 86 宇存在しており、そのうちどの程度の割合で耕作が行われていたかまでは詳らかではない。CRC-A 地点で検出した栽培遺構は、『上中下屋敷絵図（御上屋敷惣絵図）』の「御居宅脇参番御貸小屋」の定府の住まいの可能性が高いことは前述したが、長屋の居住者が勤番、定府のいずれであったにせよ、この畑は居住地に隣接していることから史料 5-2 が禁じた詰人空間内の耕作を示すものである。

なお「御居宅脇参番御貸小屋」と「御居宅」との間に建物が存在するが、『江戸屋敷絵図』（1863 年/文久 3、金沢市立玉川図書館蔵）には「植溜役所」と註記されている。御殿空間の植木を管理した役所だろう。敷地に対して「植溜役所」の建物は小さく、敷地の大

<sup>68</sup> 四代目伊兵衛は吉宗によって江戸城吹上の御用植木師として出入勝手とされている（三浦三郎 1967）。

<sup>69</sup> 『加賀藩史料』（前田家編集部 1929）による。

部分は空閑地だが、そこに植溜としての花壇が設けられていたかは『江戸屋敷総図』からは不明である。2017年度に筆者が発掘調査を行う予定のCRC-A地点では、当該部分を調査範囲に含んでいるので、詰人空間内での植物栽培との関係を更に解明したい。

## (2) 高遠藩下屋敷

高遠藩下屋敷（四谷屋敷）の絵図には、1851年（嘉永4）の大火後の藩邸を描いたと考えられる『江戸藩邸図 藩邸内諸長屋配置図』（図32・伊那市立高遠町図書館蔵）がある（長谷川正次2010）。以後、これを長谷川の呼称に従い本論文でも『嘉永図』と呼称する。

『嘉永図』は屋敷内の諸施設の配置がデフォルメされているが、屋敷内の状況は大まかに把握することはできる。本研究に関連して重要なのは、『嘉永図』の制作年代（1851年・嘉永4以後）が、1次調査B区で検出した畝間溝の年代（IV期：1809年-幕末）に近い点である。

『嘉永図』をみると、四谷屋敷北側の中央部の門から西門までは、屋敷境の塀に沿って長屋が並んでいる。デフォルメされた図ということもあり、B区の場合を図上で特定することはできないが、藩邸北側の並木道に「富士見坂」と描かれた部分がある。「富士見坂」と書かれた文字列の中程から曲線が描かれている。曲線は屋敷内の池と繋がっていることから、小河川を表していると考えられる。これが一次調査B区で検出した谷であると考えていいだろう。「富士見坂」と描かれた部分には、「小泉」、「浅井」、「酒井」などと記された長屋がある。小河川を挟んで東西に家臣の長屋が存在する描写はB区の遺構検出状況と一致している。

B区の栽培遺構と地下室や柱穴列の分布状況から、谷を挟んだ東西のテラス状の部分に長屋が設けられ、谷への傾斜が始まるテラス縁辺に畑が作られた景観が想定される（図31）。『嘉永図』に描かれた「富士見坂」周辺の状況は、遺構のあり方から復元した景観と矛盾しない。

谷の西側の三戸に分割された長屋の居住者の一人である「小泉」は、長谷川によって「下屋敷御賄方諸向勸請勘定引請」を務めた下級武士に比定されている（長谷川前掲）。おそらくこの長屋に暮らす他の居住者も、「小泉」と同様に下級武士だったことが推測される。下級藩士が長屋の敷地の一角に畑を設け、栽培・耕作活動を行っていた状況がうかがえる。

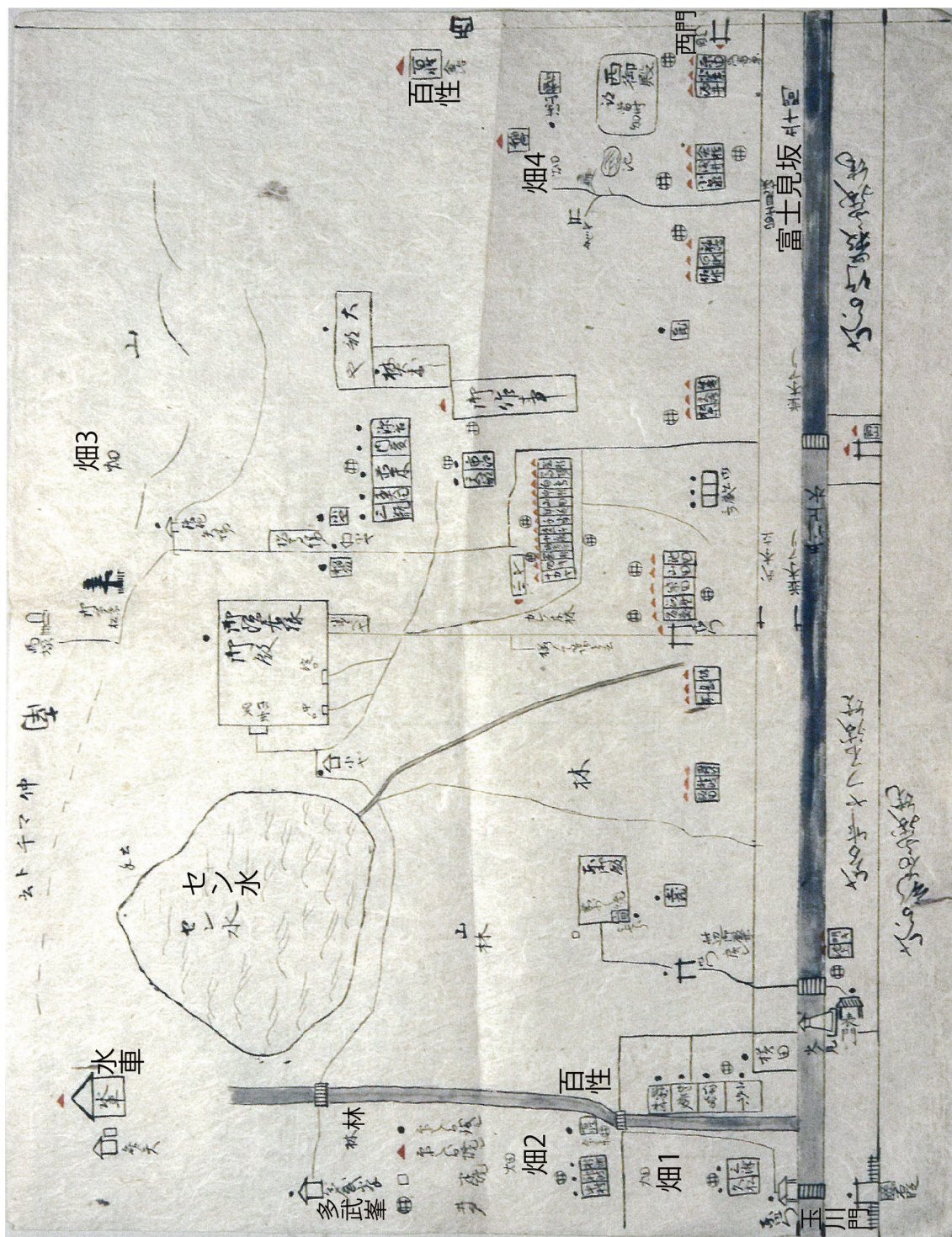


图 32 『江戸藩邸図 藩邸内諸長屋配置図』(伊那市立高遠町図書館蔵)

## 2. 空閑地の畑と耕作

植物栽培類型C類は詰人空間内の居住地から離れた空閑地に設けられた畑での耕作活動である。

加賀藩では1828年（文政11）の徳川家斉の御成の際に、下屋敷の畑で生産した蔬菜類が手土産として供せられたほか<sup>70</sup>、1850年（嘉永3）には下屋敷を訪れた会津藩主松平容敬らに、やはり下屋敷の蔬菜類が供せられている（吉田政博2010）。絵図にも畑が描かれているが、発掘調査は行われていない。

内藤町遺跡の畑との照合に用いた高遠藩下屋敷の『嘉永図』には、「畑」と記載された箇所が少なくとも5ヶ所にある。これを畑1-畑5と呼ぶことにしよう（図32）。

畑1は藩邸北東隅に設けられた区画内にある。この区画には「玉川門」の南側に二戸の長屋と、玉川上水の余水を挟んで四戸の長屋の、合わせて二宇の長屋がある。畑1は二戸の長屋の南側に位置するが、どちらの長屋の住民が耕作したのかは不明である（長屋に付された●と▲は、1851年/嘉永4の火災での焼失状況を示している）。

畑2は畑1を含む北東隅の区画の南側に位置している。三戸の長屋と、「百姓」（百姓）と記された住居（百姓家）に隣接している。絵図の凡例を挟んで南側に林があるが、畑の範囲は詳らかでない。

畑3は屋敷の南側である。屋敷地は北から南へと傾斜する立地だが、絵図でも崖のような表記と「山」とある。畑3は台地下にあたるだろう。周囲には松の木と「馬塚」が描かれているに過ぎない空閑地である。

畑4は前段で内藤町遺跡1次調査B区の小支谷と比定した富士見坂へ延びる流路の南端にある。藩邸の西端で、畑4の周囲には稻荷や鳥居が描かれているほか、藩邸西の屋敷境に隣接した部分には百姓家がある。

畑5は西御殿跡地に設けられた畑で、西御殿の囲いの内側にある。

このうち畑1と畑2は藩士の長屋に隣接している。特に畑1は区画内に二宇の長屋を伴っていることから、植物栽培類型B類とした栽培遺構のあり方の可能性が高い。前段でみたように、内藤町遺跡1次調査B区の居住域に該当する長屋には「畑」に関する記述はないので、屋敷内にはこの他にも畑が作られていた可能性は高い。畑3-畑5は周囲に長屋などの居住施設はなく、これが藩邸内の空閑地の畑、即ち栽培遺構C類とした栽培遺構に該当する。

---

<sup>70</sup> 『加賀藩史料』1828年（文政11）3月13日の条による。

藩邸内には、百姓家が2軒描かれている。これによって四谷屋敷内の畑の耕作に、百姓が関わっていたことが推測される。長谷川によれば藩邸内の居住者には家臣やその家来などのほか、「郷歩」と呼ばれる下級武士と共に藩の仕事にあたる領民もいた（長谷川前掲）。百姓や郷歩の人数や仕事内容については不明だが、「大部や」（大部屋）とは別に、独立した住まいとして描かれた百姓家は、世帯での居住を想起させる。原田佳伸は角筈村の抱屋敷のあり方を分析し、大名・旗本の抱屋敷で家守や地守を務めるのは、その屋敷の先地主百姓であることを明らかにした（原田前掲）。高遠藩四谷屋敷は拝領屋敷であるが、『嘉永図』の畑と百姓屋は、藩邸内の耕作に藩士以外の労働力を動員したことを示している。

## 第4節 小結

本章では植物栽培遺構と大名屋敷の空間構成との関わりから、大名屋敷で行われた植物栽培のあり方を3つに類型化した。

植物栽培は大名屋敷の御殿空間（植物栽培類型A）と詰人空間（植物栽培類型B・C）のいずれにおいても行われていたが、詰人空間の植物栽培では畑での耕作が特徴としてあげられる（以後、栽培・耕作活動と呼ぶ）。

植物栽培類型Bは藩士たちが自家消費するための蔬菜の生産活動と位置づけられる。加賀藩本郷邸の詰人空間で畑を耕作したのは「御家中家来末々之者」であるが（史料5-2）、その階層的広がりについては不明である。東京大学本郷構内遺跡では加賀藩邸の長屋の調査報告例は少ないが、上級藩士が居住していた八筋長屋にあたる理学部7号館地点では、長屋の空閑地を調査したにもかかわらず栽培遺構は未検出だった。

高遠藩四谷屋敷の『嘉永図』では、内藤町遺跡1次調査B区の畑に隣接した居住地に該当する長屋で暮らす藩士は下級藩士だった（長谷川前掲）。山本が指摘するように屋敷地の畑作利用が扶持を補う「生活防衛の手段」であるならば（山本前掲）、居住地での耕作は下級藩士を中心とした生産活動だった可能性が高い。

植物栽培類型Cは、主に郊外の大名屋敷で認められる栽培・耕作活動である。考古学的には検出例が未だ少数に留まっているが、歴史学的には周辺の農村から雇った百姓や国許から召し抱えた領民などを労働力としていることが明らかになっている（長谷川前掲、原田1997）。原田は『大崎御屋敷諸事留帳』から岡山藩大崎屋敷では、余剰生産品を屋敷外の者へ売却して収益を上げていたことを指摘している（原田前掲）。ここでの生産活動が、生業（なりわい）と位置づけられるような規模を有していたかは不明だが、植物栽培類型AやBとは質的に異なるものである。

19世紀になると各藩とも藩政改革の一環として殖産興業政策をとる（吉永昭1977・1978）。それに伴って江戸の大名屋敷では、特に下屋敷において農業試験場的な役割を担うような変化がみられる。たとえば水戸藩では1835年（天保6）に国許の緑岡で茶園を

創設するが、その前年に駒込の下屋敷において宇治出身の浪人・小川佐助に茶の試験栽培を行わせている<sup>71</sup>。駒込下屋敷は東京大学本郷構内の一部で、水戸藩邸を対象とした発掘調査も実施しているが、現在までのところ植物栽培遺構は未検出である。

会津藩では国許での養蜂の事業化を目指し、三田の下屋敷で試験的に養蜂を行っている<sup>72</sup>。三田下屋敷での試験的な養蜂は割場と材木蔵の両方で実施され、その後、飼育場所を増設しているので養蜂が成功したことがうかがえる。

農業振興に伴う大名屋敷内の植物栽培を、詰人空間で行われた耕作（植物栽培類型 C）として捉えるのか、大名屋敷の植物栽培の新たな様相として捉えていくかは、下屋敷跡遺跡の 19 世紀代の栽培遺構の検出を待って改めて検討したい。

---

<sup>71</sup> 『水戸藩史料 別記下』（編著者不明 1915）。

<sup>72</sup> 『家世実紀卷之二百五十三』（家世実紀刊本編纂委員会 1988）1797 年（寛政 9）。

## 第6章 大名屋敷跡遺跡における金属加工の一様相

### 第1節 はじめに

近世の工業には二つの様相がある。一つは都市における工業で、これは小規模な手工業を特徴とした。もう一つが農村における農産物加工業で、これは農村内の農工が未分離だったことを背景とする（葉山禎作 1992）。

近世の金属器生産に関する初期の考古学的研究に、金箱文夫による釘生産に関する研究がある（金箱 1984）。金箱は赤山陣屋跡で出土した和釘が、農具を小割して鍛造したものであることを明らかにした。この研究は特定の釘生産遺跡を対象としたものではないが、「地方で独自に生産され消費された釘」の存在は、葉山が指摘した農工未分離な農村の状況を具体的に示す事例と位置づけることができる。

城下町の小手工業が支配者層の「軍事的・政治的支配に必要な諸手段や諸物資をつくりだすため」のものであり、「都市上層民の奢侈的需要を充足するため」という側面も併せ持つ（葉山前掲）ものならば、幕藩体制社会の中心で、大名屋敷をはじめとした武家屋敷や寺社が多い江戸には金属器の需要も多かったと思われる。しかし江戸の遺跡では金属器の生産遺跡の調査例は少なく、鞆の羽口が出土する遺跡でも、明確な金属加工遺構の検出例を伴わないことが多い。

岩本町二丁目遺跡では、長屋の一角で焼土と鉄片が分布した鍛冶炉を検出し、鞆や坩堝も出土している（千代田区教育委員会 2001）。芝田町五丁目町屋跡遺跡では、鉄鍋の把手の鋳型と、それを焼成するための炉跡を検出した（港区教育委員会 2005）<sup>73</sup>。調査地点は工房があったと思われる場所からやや離れているが、生産品が判明する鋳型とその炉跡がセットで認められる例は江戸の遺跡の中で唯一の例である。

武家屋敷跡遺跡でも羽口や坩堝の出土はあるが、生産の実態は不明である。坂町遺跡4号遺構では3点の坩堝が出土している。新免歳靖・二宮修治はそのうち2点の坩堝を対象に、溶解した金属を明らかにすることを目的としてエネルギー分散型蛍光X線分析を行なった。その結果、坩堝は亜鉛・銅の合金である真鍮を扱っていたことが判明した（新免・二宮 2002）。

坂町遺跡では新免・二宮が溶解用と取瓶に分類した坩堝が共に出土している（新免・二宮前掲）。これは坂町遺跡において鋳造に伴う一連の工程が行われたことを示すものであ

---

<sup>73</sup> 港区教育委員会の高山優氏・毎田佳奈子氏（当時）のご厚意により実見させていただいた。

る。しかし坂町遺跡第4地点の遺構一括遺物のあり方を検討した小川祐司・阿部常樹によれば、本地点には町屋で生じたゴミが廃棄されている可能性もある（小川・阿部 2002）。したがって埴塙が組屋敷に暮らした御家人の生産活動を示すものとは現段階では断定できない。

原祐一は東京大学本郷構内遺跡から出土した煙管の蛍光 X 線分析と PIXE 分析の結果から、それらが真鍮製であることを明らかにした。原は分析結果と、文献史料から明らかにした亜鉛の輸入量などを勘案して、国内の真鍮製造の実態の解明を試みている（原 2000）。こうした考古学と文化財科学の学際的研究は、生産地遺跡の調査例が乏しい金属器にとって、生産の実態を解明できるものとして期待したい。

新宿区内の埴塙の集成と形態分類を試みた熊坂正史は、その形態から「決して大掛かりなものではなく、修復といった簡易的な作業が行われていた可能性を指摘」する（熊坂 2006）。

東京大学本郷構内遺跡工学部 14 号館地点では、調査区の御先手組屋敷側でまとまった量の金属器生産に関連する遺物が出土している。羽口は完形 7 点を含む最小個体数 49 個体、埴塙は陶磁器を転用した例が 21 点報告されている。鉄滓は 10 遺構から出土しており、形のまとまっているものが 74 点、破片は 203 点で総重量 81 kg に及ぶ（東京大学埋蔵文化財調査室 2006）。その他、錆や赤色の付着物を有する磁器碗や徳利がある。

北野信彦は徳利の付着物の科学的分析を通して、これらが鑄鉄廃棄物などの鉄屑を用いた鉄丹ベンガラを生産に関連するものであることを明らかにした（北野ほか 2006）。

この地点では 19 点の埴塙に加えて、鑄型 1 点が出土している。鑄型は網の錘であり、御先手組の組屋敷の生業として漁具は結び付かないので、居住した御家人の内職として金属加工が行われていたものと考えられる。

本郷五丁目東遺跡では鑄型と天目碗を転用した埴塙が出土している（加藤建設 2008）。鑄型は長辺 5 cm、短辺 5 - 4 cm 前後の大きさで、鑄造した製品は具体的にはわからないが、実見した限りでは工芸品的なものが推測される<sup>74</sup>。

筆者は江戸の各遺跡で出土した埴塙を集成し、その形態とサイズから江戸における小規模な鑄造作業（出職の鑄掛けを含む）のあり方を分析した（追川 2009）。

千駄ヶ谷五丁目遺跡第 3 次調査では、140 号遺構から 2,179 点の釘が出土した。釘は頭部に打撃の痕跡があることから使用済みのものと判断される。共伴資料には羽口 36 点、埴塙 1 点、鉄滓類 37 点といった鍛冶に関連する遺物が多い（四門 2013）。向井互は内藤

---

<sup>74</sup>文京区教育委員会の池田悦夫氏・小野田恵氏（当時）のご厚意により実見させていただいた。



新宿周辺に古鉄取引にかかわった町人が暮らしていたことを念頭に、140号遺構の多量の釘や鍛冶関連遺物を、古鉄回収で集められた釘が再生産されていた可能性を指摘した（向井 2013）。140号遺構周辺の調査地は黒鍛者大縄地だが、遺物は1830-40年代から1880年代までの陶磁器を含んでいる。陶磁器には酒杯や端反碗が多く、全てが黒鍛者の大縄地で使用された道具とは限らないが、江戸から明治初期に行われた小規模な金属加工の状況を示す好例である。

近年、江戸の大名屋敷跡遺跡の調査でも、大規模な金属加工の存在をうかがわせる遺物の出土例が見られるようになった。初台遺跡では鉄精錬に関連した500kgの鉄滓が出土した（初台遺跡調査団 1993）。完形の碗形鉄滓を含む鉄滓資料の文化財科学的分析が田口勇によって行われており、製錬によって得られた鉄を二次的に加熱して成型する工程で生じた鍛冶滓であることが確認されている（田口 1993）。東京大学白金構内遺跡医科学研究所診療棟・総合研究棟地点では約100本の鉛インゴットが束ねられた状態で出土している（大成 2004）。

本章では大名屋敷跡遺跡の金属加工に関連する調査事例の集成を通して、大名屋敷の生産活動の一端を明らかにする。

## 第2節 大名屋敷跡遺跡の金属加工遺構と遺物

### 第1項 大名屋敷跡遺跡の金属加工遺構

#### 1. 東京大学本郷構内遺跡農学部図書館地点

東京大学本郷構内遺跡農学部図書館地点は水戸藩中屋敷にあたる。

SK10は長軸1.2m、短軸0.9mの平面の形状が楕円形を呈した土坑である。西寄りに直径0.3mの掘り込みが認められる(図33上)。断面図の情報が残されていないので、遺構の深さや堆積状況は不明である<sup>75</sup>。しかし遺物が二次焼成を受けていることや、円柱状の未加工の鉛が出土していることから、筆者はSK10が金属加工に関連した遺構であることと、「その規模の大小はともかくとして……(略)……(金属関連の生産活動が)藩邸内で行われていた可能性」を指摘した(追川2004c)。

調査地点には遺構の分布が少なく、SK10の検出位置も調査区西端だったことから、SK10が金属器生産に関わる遺構であったとしても、周辺にもこれと関連する遺構が存在したかは不明である。

調査区東側で検出した溝底に柱穴を伴う区画溝(SD9)は、詳細は不明ながらこの作業場を区画した塀となる可能性がある。

#### 2. 東京大学本郷構内遺跡外来診療棟地点

東京大学本郷構内遺跡外来診療棟地点は加賀藩邸と大聖寺藩邸にまたがる調査区である。加賀藩邸側に位置するSX200は直径1.0mの竪坑に、長軸1.3m、短軸0.9mの横坑が接続する遺構である(図33下)。

出土遺物はない。遺構の性格は不明だが、成瀬晃司は竪坑内の覆土が焼土であったこと、遺構の形態が前述の農学部図書館地点SK10と類似していることから、金属器生産に関連した遺構と推測している(成瀬2005)。

---

<sup>75</sup> 後述の外来診療棟地点SX200は本遺構と形態が類似している。SX200には遺構内に焼土が充填されていることから、本遺構も焼土が充填していた可能性が高い。

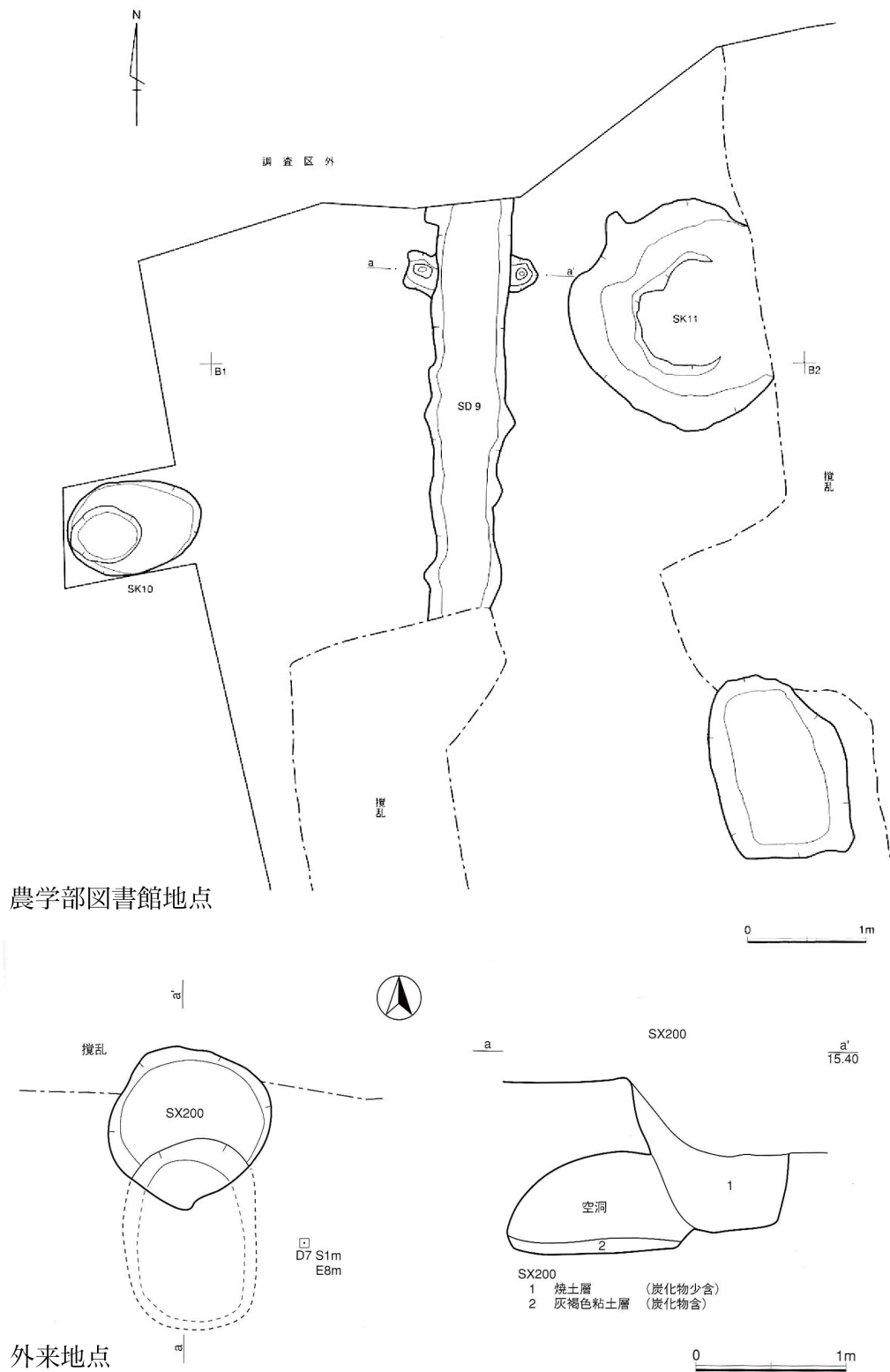


図 33 東京大学本郷構内遺跡の金属生産関連遺構（上：農学部図書館地点、下：外来地点）

## 第2項 大名屋敷跡遺跡の金属加工遺物

### 1. 近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡 TC 地点

近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡は1689年（元禄2）から1858年（安政5）まで山上藩上屋敷だった。これまでに実施した2回の調査は、藩邸表側の道に沿った部分である（港区教育委員会2004・同2005）。

藩邸の北西側にあたるTC地点の386号遺構から4点の埴塼が出土した。この埴塼に関しては、筆者が江戸の小規模鋳造の一例としてとりあげた（追川2009）。

386号遺構は直径4.9mの円形を呈した土坑で、深さは1.4mである。出土遺物は19世紀前半の陶磁器が主体で、埴塼以外に金属加工に関連する遺物は出土していない。覆土にも焼土層や焼土を多く含む土層の堆積は認められないことから、廃棄土坑に転用された土坑に、埴塼が他のゴミと共に捨てられたものと考えられる。

埴塼が出土していることから、藩邸内のいずれかの場所で金属加工作業が行われていたことは確実だが、詳細は不明である。

### 2. 初台遺跡

初台遺跡は松江藩松平家の下屋敷（抱屋敷）である。屋敷のある豊嶋郡幡ヶ谷村は江戸近郊農村で、松江藩は延宝年間（1673-1680）から幕末までここに下屋敷をおいた。

甲州街道に面した屋敷は8,780坪余り<sup>76</sup>と広大だが、発掘調査を行ったのは街道沿いの約690坪（調査面積2,275㎡）である。

055a号遺構は不整形を呈した遺構で、南東側が調査区外に延びているので本来の規模は不明だが、一辺4.0m、深さ1.0m、東側に階段が構築された地下室である。磁器8点、陶器14点が出土しており、その年代から17世紀前半から中頃に位置づけられている（初台遺跡調査団1993）。

この遺構からは鉄滓が6,282点（536.1kg）出土した。田口勇による鉄滓の科学分析によって、これらの鉄滓が製錬で還元した鉄を成形化する鍛冶の工程で生じたものであることが明らかになった（田口1993）。

055a号遺構は地下室であり、覆土にも焼土や灰はないので、この遺構は金属加工に直接関係を持つものではない。一方、共伴する陶磁器の出土数が22点とわずかなことは、この地下室が一般的なゴミを廃棄するための廃棄施設に転用されたのではなく、鉄滓の廃棄施設として転用されたことが考えられる。

---

<sup>76</sup> 『新編武蔵風土記稿』（蘆田伊人1957）豊嶋郡の項による。

調査区内には 055a 号遺構の他に、金属加工に関連する遺構はないので、作業は藩邸内の別の場所で行われていたものと推測される。

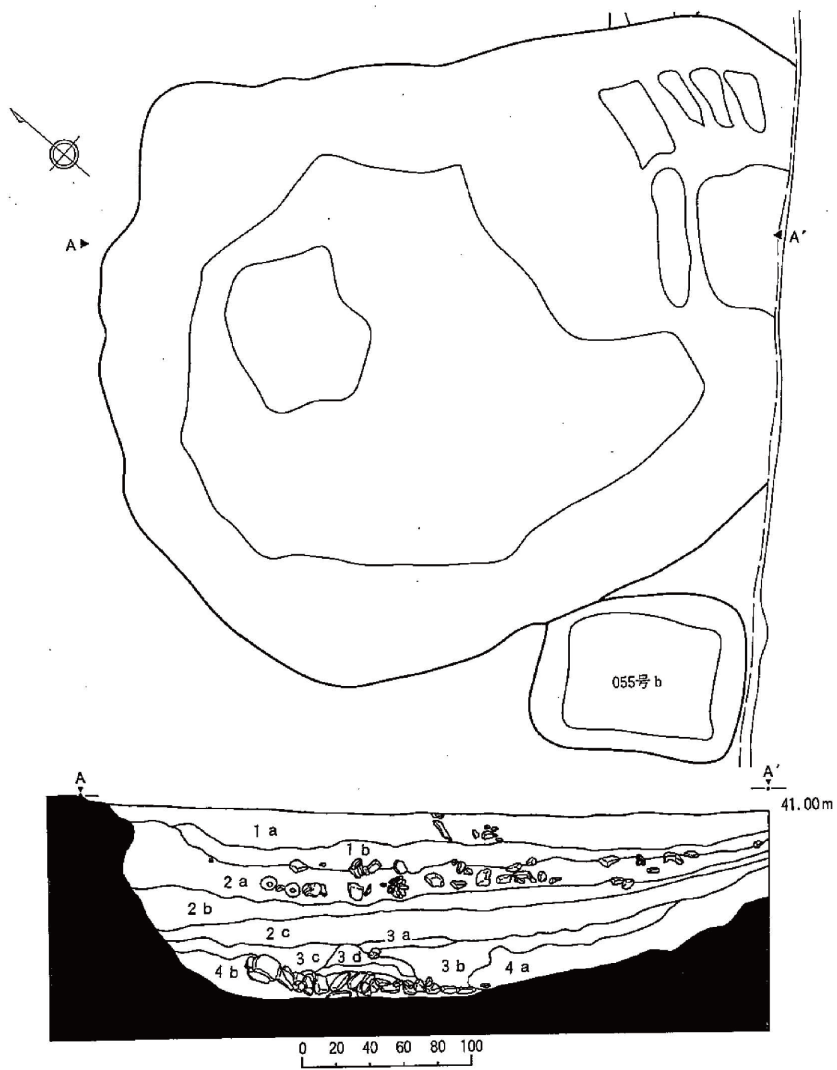


図 34 初台遺跡 055a 遺構 (初台遺跡調査団 1993)

### 3. 東京大学白金構内遺跡医科学研究所診療棟・総合研究棟地点

東京大学白金構内遺跡は大村藩の拝領下屋敷跡である。調査地点は東側に谷が入る複雑な地形を呈していた。谷の斜面には、段切りによる3段のテラスが造成されており、最上段のテラスに掘立柱建物が建っていたことが遺構分布から明らかになった（大成可乃 2004）。鉛インゴットが出土した地下室（SU360）は、段切りの縁辺で検出した（18世紀後半）。

鉛インゴットは長さ20 cm、幅2 cm、厚さ1 cmの棒状で、地下室の床面に約100本が束ねられた状態で出土した（図35）。鉛インゴットは住友銅吹所跡での出土例があるが（大阪市文化財協会 1998）、本遺跡から出土した鉛はいずれも純度99.4%と高純度のものであったことから、精錬用としてではなく、何らかの金属加工の材料として屋敷に持ち込まれたものであると考えられている（原 2002）。



鉛塊 (原 2002 より)

図 35 東大医科学研究所診療棟・総合研究棟地点出土の鉛塊 (上：東京大学埋蔵文化財調査室 2004、下：原 2002)



### 第3項 大名屋敷跡遺跡の金属加工

#### 1. 金属加工作業の場と大名屋敷の空間

大名屋敷跡遺跡の金属加工に関連する遺構と遺物をまとめたのが表 19 である。

金属加工に関連する遺構と遺物の出土・検出例は、大名屋敷跡遺跡の調査例に比して極めて少ないため、これをもって大名屋敷内で行われた金属加工の一般的なあり方とすることは難しい。そもそも出土・検出例のこれほどの少なさは、金属加工が大名屋敷で行われた生産活動の中で特殊なものだった可能性も検討すべきものであるが、ここでは大名屋敷で行われた金属加工の一樣相として分析をすすめていくことにする。

No.	遺跡	藩邸	種別	遺構	遺構	遺物	備考
1	東大農園	水戸	中	SK10	○	○	鉛(未加工)
2	東大外来	加賀	上	SX200	○		
3	初台	松江	下	055a		○	鉄滓 500kg
4	近江山上藩	山上	上	386号		○	坩堝 4点
5	東大医科研	大村	下	SU360		○	鉛塊 100本

表 19 大名屋敷跡遺跡の金属生産関連遺物・遺構

絵図との照合が可能な遺跡は、東京大学本郷構内遺跡農学部図書館地点（水戸藩中屋敷）、同外来棟地点（加賀藩上屋敷）、初台遺跡（松江藩下屋敷）である。共伴遺物に基づく遺構の帰属年代が絵図資料の制作年代と一致するとは限らないが、上屋敷・中屋敷・下屋敷（抱屋敷）ごとに、金属加工作業の場が検討できる。

東京大学本郷構内遺跡外来棟地点 SX200 は帰属年代が詳らかでないので、17 世紀後半に描かれた本郷邸最古の絵図である『武州本郷第図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵 1688 年/元禄元）と、18 世紀後半の絵図である『前田家本郷御屋鋪図』（三井文庫蔵・1760 年代）、『江戸御上屋敷図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵・1770 年代）を参照する。

『武州本郷第図』では、遺構の検出場所は表長屋の北側にある「役所一/九百四十四歩二尺七寸四分余」にあたる。同図で「役所」と記入された施設は、御殿下記念館地点の「役所五」、「役所六」のように御殿空間にもあるが、「役所一」は西側に御殿空間との区画施設が描かれていることから詰人空間である。

「役所一」の役割については不明だが、屋敷外につながる入口（門）には「作事方門」と記入されていることから、作事方との関係が推測される。

『前田家本郷御屋鋪図』では、『武州本郷第図』で「役所一」と記入された施設が、「御作事所」となっている。『江戸御上屋敷図』で「御作事所」周辺の施設をみると、「御

作事物置長屋」、「割場役所」、「掃除役所」、「物置」、「板口（掛カ）小屋」などがある<sup>77</sup>。割場は藩直属の足軽・小者を管轄する機関である。森下徹は金沢の割場を対象に、普請での労働力の編成に果たした役割について分析した（森下 1990）。本郷邸においても、「割場役所」が「御作事所」や「掃除役所」に隣接している場所に配置されているのは、現業的な作業に応じた労働力を編成していたことを反映したものと思われる。

このように SX200 の検出場所は、詰人空間の中でも藩邸内の現業的な労務の拠点となる場所である。作事あるいは掃除などの労務に用いられた金属製品の修繕・加工のための作業が行われたことが考えられる。

東京大学本郷構内遺跡農学部図書館地点は水戸藩中屋敷である。水戸藩中屋敷の空間構成については、原祐一により精力的に絵図との照合が試みられている（原 2011）。その成果によれば、当該地点は藩邸西側にひろがる台地上の南側、主に長屋や役所のある詰人空間にあたる。調査地点は 408 m<sup>2</sup>と小さいが、検出遺構が 11 基のみだったことは、詰人空間の中でも積極的に利用された場所ではないことがうかがえる。

初台遺跡は松江藩下屋敷の甲州街道に面した部分である。鉄滓が出土した 055a 号遺構の廃絶年代は 17 世紀前半から中頃だが、その時期に制作された絵図はない。報告書では『畑ヶ谷御屋舗分間惣絵図』<sup>78</sup>（島根県立図書館蔵・1841 年/天保 12）との照合を試みている（初台遺跡調査団前掲）。絵図では調査区周辺に建物が東側に 2 棟、西側に 1 棟描かれているのみで、それ以外の場所には畑と庭園がひろがっていた。庭園の中心付近に建物があるが、これは茶室など庭園での饗応施設だろう。

甲州街道沿いの建物は広大な敷地を管理するための施設だったと思われる。幡ヶ谷屋敷の空間構成は、吉田の二元的空間構造とは異なるものと推測されるが、055a 号遺構は藩邸の管理施設周辺ということから、詰人空間に準じた空間に位置づけたい。

東京大学白金構内遺跡医科学研究所診療棟地点・総合研究棟地点である大村藩白金下屋敷は絵図は伝世していない。しかし段切りによって平坦地を造成した谷に、掘立柱建物が建っている状況は詰人空間だった可能性が高い。

このように金属加工に関連する遺構の検出場所・遺物の出土場所は、大名屋敷内の詰人空間内であるという傾向が認められる。

## 2. 金属加工作業と大名屋敷の生産活動

前段の検討によって、金属加工遺物の出土場所や遺構検出場所は詰人空間に帰属することを確認した。

---

<sup>77</sup> 絵図の解説には小松愛子氏にご協力を賜った。

<sup>78</sup> 本論文は報告書に掲載されているトレース図を参考にした（渋谷区初台遺跡調査団 1993）。

東京大学本郷構内遺跡外来棟地点（加賀藩邸）は「御作事所」に隣接した場所にあたることから、作事所などで使用する金属製品の加工・修理を想定した。金属加工遺構は SX200 のみで、これと同様の遺構が複数伴わないことから、大規模な作業ではなかったことがうかがえる。

遺物が出土するのみの遺跡（表 19 の 3-5）でも、初台遺跡の鉄滓 500 kg 以上の出土や、東京大学白金構内遺跡の鉛インゴット 100 本という出土量から考えると、御殿空間で行われた作業とは考えにくい。

東京大学白金構内遺跡（大村藩下屋敷）では、調査区内に鉛インゴットを出土した SU360 以外に金属加工に関連する遺物や遺構はないので、調査地点は金属加工の場ではないと考えられる。しかし SU360 の鉛インゴットの出土状況から、SU360 が鉛インゴットの保管場所だった可能性がある。

『大村見聞集』（藤野・清水 1994）には白金下屋敷での金属加工に関する記録はみられないが、藩邸内での生産活動として鉛の加工作業が行われていたことは明らかである。

以上のことから金属加工遺構・遺物と大名屋敷の空間構成との関わりは、次の 2 つの類型として捉えられる。

金属加工遺構・遺物 A 類：詰人空間にみられる小規模な金属加工の痕跡。

金属加工遺構・遺物 B 類：詰人空間にみられる大規模な金属加工の痕跡。

金属加工遺構・遺物 A 類（小規模な金属加工）は東京大学本郷構内遺跡外来棟地点や同農学部図書館地点の金属加工遺構にみられるあり方である。外来棟地点では、詰人空間内の現業部門（「御作事所」）との関係を有していた可能性がある。

金属加工遺構・遺物 B 類（大規模な金属加工）は初台遺跡や東京大学白山構内遺跡の金属加工遺物にみられるあり方である。どちらも周辺に金属加工遺構は未検出だが、遺物の出土量から大規模な生産活動だったことを推測した。

大規模な金属加工作業が行われた大名屋敷は、どちらも江戸郊外にある広大な下屋敷という点も共通する。作業内容が不明なため、作業にどの程度の空間が必要とされていたのかはわからないが、江戸郊外の名古屋敷の生産活動として、大規模な金属加工作業（金属加工遺構・遺物 B 類）を位置付けることができる。

### 第3節 大名屋敷の生産活動と金属加工

江戸時代の経済的発展の要因として、大名屋敷での消費活動に注目したのは伊達研次だった(伊達 1935、1937)。また西川幸治は大名屋敷の長屋塀で家臣団が集団居住する点を、防禦性よりも江戸の消費都市としての発展に寄与していたものと位置づけている(西川 1972)。しかし第1節でも述べたように、江戸の工業は小規模な手工業を特徴とする(葉山前掲)。

その背景には楫西光速が指摘するように、江戸が日本の中心地となるに及んで、関八州(関東地方)が江戸と「比較的強固に結合した一地域を形成」し、これらの地域で江戸をマーケットとした各種の産業が発達したことがあげられる(楫西 1959)。江戸時代初めには、地廻り商品のみで江戸の需要に対応することはできず、菱垣廻船などの舟運によっても物資が江戸へもたらされていた。享保期(1716年-1735年)以降になると、消費物資は次第に「江戸地廻り経済圏」と呼ばれる江戸周辺で生産された物資に依存するようになる(伊藤好一 1966、林玲子 1968)。

金属製品でいえば川口の鋳物生産がそれにあたる。伝世する鋳造品には17世紀から18世紀までは梵鐘が多く、19世紀に入ると水盤が多くなる。しかし『新編武蔵風土記稿』(蘆田前掲)にあるように、製品の中心は鍋・釜だった。中津川章二によれば川口の鋳物師は江戸の釘鉄銅物問屋との取引関係が強く、その関係は「前貸問屋制的支配」とも言うべき支配関係を伴うものだった(中津川 1959)。

江戸の遺跡では芝田町五丁目町屋跡遺跡で、田中七右衛門知次が営んだ金屋の調査例がある(港区教育委員会 2005)。調査区は鋳物師の作業場よりも奥側にあっていたため、鋳造作業に直接結び付く遺物や遺構はなかったが、鋳型や鋳型を焼成するための炉を検出した。鋳型は鍋の把手なので、ここで鍋・釜が鋳造されていた可能性は高い。

『江戸買物独案内』(1824年/文政7)には、遺跡隣接地に釜屋源八なる鍋釜問屋の名が見える。高山優は芝田町五丁目町屋跡遺跡が江戸外縁部の東海道沿いに位置している点に注目し、江戸の鍋・釜需要に応える生産とともに、江戸近郊農村向けの農具の生産も手がけていた可能性を指摘した(高山 2005b)。

本章で対象とした大名屋敷での金属加工ないし金属器生産の実態についてはよくわからない。江戸の武家地で小規模な金属器生産が行われていたことは、『幕末百話』(篠田鉦造・新聞紙上での連載開始は1902年)に収録された「武士気質由緒の具足」で知ることができる。このエピソードでは、5,000石の旗本屋敷において、家来が内職として「家根釘」の生産を行っていたことが触れられている。

『幕末百話』はインフォーマントの情報や、聞き取りを行った時期が明示されていない点が史料として用いる上で問題である。このエピソードも、釘の生産体制や生産規模に関

する言及はないが、大身旗本の屋敷内で釘が生産されたこと、その製品である屋根釘が巷間知られた存在だったことがうかがえる点で重要である。

安田善三郎は江戸の下級武士が内職として行った釘生産が、小割を鋳物屋から購入し、鍛造のみを行う生産様式だったことを指摘している（安田 1916）。金箱の研究で提示された釘の生産様式（金箱前掲）は、おそらく安田のこの論考に基づくものと思われるが、安田が下級武士の内職としての釘生産のあり方として依拠した史料については不明である。

大名屋敷における生産活動としての金属加工は、篠田や安田が紹介したような内職によるものと位置づけられるのだろうか。

確かに大名屋敷跡遺跡の金属加工遺構・遺物はいずれも詰人空間での出土・検出である。しかし遺構の検出場所を詰人空間内の空間利用状況と照らし合わせると、小規模な金属加工（金属加工遺構・遺物 A 類）と位置づけた加賀藩本郷邸（東京大学本郷構内遺跡外来棟地点）の金属加工に関連する遺構（炉）は、作事所の一角にあたる場所である。水戸藩中屋敷（同農学部図書館地点）の炉も、藩邸内の空間的位置づけは詰人空間とはいえ、長屋が配置された居住域ではなかったことがうかがえる。どちらの遺構も長屋での内職というよりは、詰人空間で行われた種々の役務の一つとして行われた金属加工と捉えることが適切だと考える。

一方、大規模な金属加工と位置づけた松江藩下屋敷（初台遺跡）や大村藩下屋敷（東京大学白金構内遺跡）は、いずれも遺構は未検出だが、鉄滓 500 kg や鉛インゴット 100 本という出土量から推測して、内職の範疇を超えた生産活動が存在したことがうかがえる。

府内の大名屋敷と郊外の大名屋敷でそれぞれ行われた金属加工の具体的な内容の解明は課題として残る。現段階の調査事例では、金属加工という生産活動と勤番長屋での内職とは結びつかない点を提示するにとどめておきたい。

1772 年（明和 9）の大火で焼失した萩藩上屋敷と中屋敷の復旧と、下屋敷の新築に関する記録である『江戸三御屋敷新御作事記録』には、藩邸の建築工事に用いる物資が国許で調達されて江戸へ廻漕されたことがうかがえる記録が収められている（作事記録研究会 2013）。国許で調達された物資は板材や瓦、壁土など多岐に及ぶ。表 20 はそのうち、釘に関する記録を集計したものである。

種類	合計（本）
五寸釘	76,300
四寸釘	120,400
三寸釘	118,150
二寸釘	871,000
一寸五歩釘	343,650
五歩釘	424,300

表 20 萩藩が藩邸建築に際して国許から廻漕した釘（作事記録研究会 2013 を基に作成）

6 種類のサイズで合わせて約 200 万本の釘が国許で調達され、江戸へ運ばれた（作事記録研究会前掲）。記録には釘の廻漕は 8 回認められ、一度の航海で少ない時で 106,500 本、多い時で 520,000 本の釘が江戸へ廻漕されている。

これは大名屋敷の建築という特別な状況下での消費動向であり、必要となる量も特に多かったと思われる。萩藩の藩邸が通常必要とする釘の入手のあり方を反映しているわけではないが、大名屋敷が購入する金属製品が、必ずしも江戸や江戸地廻り経済圏での生産品とは限らないことを示す一例である。

## 第 4 節 小結

大名屋敷跡遺跡の金属加工のあり方は、遺物の出土状況および遺構の検出状況と、空間構成との関わりによって金属加工遺構・遺物 A 類と同 B 類の 2 つに類型化できた。

金属加工遺構・遺物 A 類は小規模な金属加工作業が想定され、府内の大名屋敷にみられるあり方である。詰人空間の中でも藩邸の生活を支える現業部署での生産活動に位置づけられる。この生産類型が長屋に認められない点から、大名屋敷の金属加工遺構・遺物 A 類は組屋敷（東京大学本郷構内遺跡工学部 14 号館地点）でみられる生産活動、即ち内職とは異なるものだったことを推測させる。

金属加工遺構・遺物 B 類は郊外の大名家敷で行われた大規模な金属加工作業が想定される。現段階では出土遺物のみなので、生産活動の場を考古学的に実証しているわけではないが、遺物の出土は詰人空間である。

金属加工遺構・遺物 A 類である東京大学本郷構内遺跡外来棟地点 SX200 は、加賀藩の「御作事所」周辺の現業部署の役所との関係がうかがえた。加賀藩では藩主の御手廻御用を勤める工人（御細工者）が勤務した「御細工所」でも金属加工が行われていた。御細工所は金沢と江戸の両方に置かれていたが、藩主の江戸出府の折りには、御細工者も随伴して本郷邸の御細工所に増員がはかられた。しかし基本的に御細工所は藩主御手廻御用であ

ることから、藩邸内の細工仕事には町方の細工人が起用された（金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1989）。

加賀藩邸には御目見町人 35 人を含む 300 人以上の町人が出入関係を有していた（金沢市史編さん委員会 1996）。御目見町人の名が記されている『江戸御目見町人名列覚』<sup>79</sup>には、金具師として明神裏門通所在の村田平兵衛の名があげられている。「御作事所」や「掃除役所」が用いる道具との関連が推測される荒物に関しては、同史料には 4 名の出入町人の名が記されている。

吉田伸之による分節構造では「藩邸社会」と「町人地社会」の関係は、「御用聞・出入」といった個別的・契約的・対自的なものであるため、関係を有する町人たちが門前町のような固有の領域を形成することはなかったことが指摘されている（吉田 1995）。『江戸御目見町人名列覚』にあがった町人でも、35 名中、本郷邸周辺の本郷・湯島・無縁坂・茅町に居住するのは半数の 16 名に留まっている<sup>80</sup>。

吉田は大名屋敷が周辺の「町人地社会」との関係に依存する必要が生じた要因として、屋敷内に生産・流通という都市的要素を持たなかった点をあげている（吉田前掲）。本郷邸において行われた小規模な金属加工作業（金属加工遺構・遺物 A 類）が、道具の修理や加工に留まるのか、それとも生産活動に位置づけられるものであったのかは現段階では詳らかでない。しかしこれまで実施した東京大学本郷構内遺跡の調査では、金属加工関連の遺構や遺物は極めて限られているので、前者であった可能性が高い。

金属加工遺構・遺物 A 類の実態を明らかにすることは、大名屋敷内の生産活動だけでなく、大名屋敷と都市社会との関係においても重要である。

金属加工遺構・遺物 B 類が想定した郊外の大名屋敷（下屋敷・抱屋敷）で行われた大規模な金属加工というあり方は、従来の大名屋敷研究では等閑に付されていた生産活動である。

郊外の大名屋敷の生産活動については、栽培・耕作（原田 1990、原田 1997）や味噌醸造（上野恵司 2004）に関して研究が行われている。そのうち畑での耕作に関しては、先地主百姓をはじめとする大名屋敷周辺の百姓や領国の百姓が従事していたことが原田によって明らかにされている（原田 1997）。しかし金属加工遺構・遺物 B 類が想定した作業は、ある程度規模の大きなものであることが推測される。この作業に従事したのは、郊外の大名屋敷内に居住した、あるいは出入の百姓だったのだろうか。

『鼓銅図録』をみると、特に銅吹所で行われた作業では、工程毎に分業作業が進められていたことがうかがえる（住友史料館 2015）。金属加工遺構・遺物 B 類の具体的な作業内

---

<sup>79</sup> 『加賀藩御定書 前編』（石川県図書館協会 1981）に収録。

<sup>80</sup> 親子二代で名前が記されている例を 1 軒と扱うと、出入町人は 32 軒となる。

容は不明だが、鞆の操作のような経験や知識の蓄積を必要としない作業はあったと思われる。こうした作業には百姓を労働力として編成できる可能性がある。しかし金属加工遺構・遺物 B 類の作業が継続的なものだった場合、農業余業に基づく労働力編成は期待できず、労働力は出入百姓などとは別に確保することが必要だろう。

初台遺跡（松江藩下屋敷、以下幡ヶ谷屋敷と呼ぶ）の場合、19 世紀の段階でも広大な藩邸の大部分は庭園と畑であり、殿舎や勤番長屋は存在しない。こうした空間構成は、この屋敷が江戸郊外の下屋敷（抱屋敷）だったことによるものである。

幡ヶ谷屋敷は、抱屋敷という所有形態と、敷地の大部分が耕作地であるという絵図の描写から、栽培・耕作活動に重きが置かれていた屋敷だったと推測される。しかし 500 kg を越える鍛冶によって生じる鉄滓は、農具などの補修作業だけでは説明がつかず、藩邸内の生産活動として栽培・耕作とは別に、金属加工を位置づける必要があるだろう。

松江藩は 1689 年（元禄 2）まで下屋敷が千駄ヶ谷にも所在した<sup>81</sup>（以下、千駄ヶ谷屋敷と呼ぶ。千駄ヶ谷五丁目遺跡）。初台遺跡で金属加工（鍛冶）が行われている時期の松江藩には、千駄ヶ谷屋敷と幡ヶ谷屋敷が下屋敷として併存していたことになる。千駄ヶ谷屋敷に関しては屋敷内の土地利用状況が不明なため、幡ヶ谷屋敷との機能上の補完関係の有無などは不明であるが、生産活動を行っていた藩邸とそれ以外の藩邸との関係も、今後検討していくべき課題である。

金属加工に関連する遺構や遺物は、近年の大名屋敷跡遺跡の調査で得られた新しい知見である。本章で瞥見したように調査事例は少ないが、大名屋敷内の生産活動の実態と、特に下屋敷で見られる大規模な金属加工に関しては、大名屋敷の多様なあり方を明らかにする上で重要である。

考古学的には更なる調査事例の蓄積が必要である。また歴史的には、大名屋敷での生産活動や、その従事者に関する研究の進展が期待される。

---

<sup>81</sup>寺谷美眸子・高野良徳は『屋敷渡預絵図証文』、『相對替御書付書拔』に「松平美作守上ヶ地」とあることから、松江藩が 1689 年（元禄 2）までの間に、屋敷を松江藩から支藩の母里藩へ相對替などの交換手段で譲渡していた可能性が高いことを指摘している（寺谷・高野 1997）



## 第7章 大名屋敷跡遺跡の様相の変遷

### 第1節 屋敷境の変化と江戸の下水

#### 1. 石組溝の屋敷境の出現と江戸の下水整備

大名屋敷跡遺跡の調査によって、大名屋敷の屋敷境は1620-30年代に塀や柵から石組溝に変化することが明らかになった。これは単に屋敷境の変化に留まらず、大名屋敷に表長屋(長屋塀)が屋敷の周囲を巡るといった景観上の変化をもたらした。

屋敷境の石組溝は江戸の下水溝を兼ねたものだった。江戸の下水網整備の歴史的事象は詳らかでなく、大名屋敷の屋敷境としての石組溝の出現が、下水道整備の時期を間接的ながら示す点でも重要である。

江戸の下水のうち大下水<sup>82</sup>と呼ばれる下水の調査例には、紅葉堀遺跡(新宿区教育委員会1990)や上野広小路遺跡(加藤建設株式会社2007)などがある。そのうち紅葉堀遺跡で検出した大下水は、1641年(寛永18)に市ヶ谷田町から船河原橋脇にかけて構築された「大下水」(『御府内備考』牛込之一)にあたる。北原糸子は1666年(寛文6)の下水奉行の廃止を、下水の「抜本的な管理体制の構築」を意図したものと捉え、それ以前には既に下水網が整備されていたとする(北原1990)。

江戸の下水に関する最も早い史料は1648年(正保5)2月21日<sup>83</sup>の触書きである(史料7-1)。

史料7-1<sup>84</sup>

「御請負申事

一 町中海道悪敷所江浅草砂ニ海砂ませ、壺町之内高ひきなき様ニ中高ニ築可申事、并こみ又とろにて海道つき申間敷事

一 下水并表之みぞ滞なき様に所々に而こみをさらへ上ケ可申候、下水江こみあくた少も入申間敷候、若こみあくた入候ハ、可為曲事」

これは下水の浚渫を促し、下水へのゴミ投棄を禁じるもので、「下水并表之みぞ」から1640年代には市中に一部であるかもしれないが、下水網が整備されていたことをうかがわせる。

---

<sup>82</sup> 江戸の下水は分類についても定かではない。たとえば小下水・大下水に関しても、個々の家から直接排水された小下水を集め、それが集約される往還道沿いに構築されたものを大下水と捉える説(北原糸子1990)と、「町の人々が、町の中にある下水を大下水とか小下水と呼び分けていた」に過ぎず、機能(幹線や枝線)や規模による使い分けはなされていなかったと捉える説(栗田彰1995)の二つがある。

<sup>83</sup> 慶安への改元は町方へ未伝達だったため2月21日付の触書きでも正保5年だった。

<sup>84</sup> 『江戸町触集成第一巻』(近世史料研究会1994)による。

伊藤好一はこの法令で禁止した下水処理やゴミ処理の方法が、初期の江戸で行われていた下水・ゴミ処理の一端であるとする（伊藤 1982）。1649 年（慶安 2）には会所へのゴミの投棄を禁じる通達も出されている（史料 7-2）。

#### 史料 7-2<sup>85</sup>

「一 会所江只今迄捨置候こみはきため之分、四町之町中として五日之内ニ早々取捨跡をたいらにならし可申候、以来少もこみはきため捨申間敷候、若少成共捨候者於有之ハ、四町之町中江御掛被成候間、随分吟味いたし改可申候事」

江戸の会所地は京間 60 間四方の正方形街区を、間口 5 間、奥行き 20 間の屋敷地に分けた際に生じる中央部分の空地である（玉井哲雄 1992）。周囲四面いずれの側からも裏手にあたるため資産的価値は低く、土盛りのための土の掘削場（柴田孝夫 1975）、ゴミや下水の投棄場（伊藤前掲）などの用途が指摘されているが、具体的な用途については不明である。史料 7-2 の内容や、初期の江戸の遺跡に下水遺構が未検出なことから、ゴミと下水の処分地としても利用されていたものと思われる。

栗田彰は史料 7-2 を、初期の下水処理が会所地での地中吸い込みだったことの根拠とした（栗田 2005）。しかし後に、この史料に下水処理に関する言及がないことから、「会所地が下水の排出先ではなかったことを証明」する史料であると解釈を転じている（栗田 2006）。栗田が会所地での下水処理を否定した根拠のもう一つが、会所地の周囲を下水溝が巡る沽券絵図の描写である。しかし当該沽券図は 1744 年（享保 4）のものであり、史料 7-2 の触書（1649 年/慶安 2）とは約 100 年の時期差があって説得力に欠ける。

大名屋敷の下水処理に関しても初期の史料はないが、該期の屋敷境遺構が塀や柵となる形態であることと、下水遺構が未検出であることから、屋敷内の一角で地中に吸い込ませていたか、河川が隣接している場合はそこへ排出していたと考えられる。

東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 I 期で検出した 1017 号は、台地上から調査区を横断して調査区外の湧水池（後に心字池として整備）へと延びる溝である（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）。湧水池からは小河川が不忍池方面へ流れており、1017 号の詳細は不明ながら、屋敷内の下水を小河川へと排水する施設だった可能性が考えられる。

## 2. 屋敷境としての下水溝の管理と地域社会との関係

### (1) 武家屋敷組合による維持・管理

---

<sup>85</sup> 『江戸町触集成第一巻』（近世史料研究会 1994）による。

大名屋敷の屋敷境が下水溝を兼ねることの重要性は、屋敷境が私有地の境界を示す私的な施設から、下水道という都市の公共的機能の一端を担う公的な性格を兼ね備えた施設へと変化した点にある。これによって大名屋敷は江戸という都市内に単独で存在するものから、下水網を紐帯として周辺社会との関係を持つ存在になったのである。

発掘調査では大名屋敷側と道路側とで、下水溝の護岸として構築された石垣の構造に違いが認められた。基本的に大名屋敷側の石垣が道路側よりも堅固で、生活面も高く構築されている。また、下水溝を挟んで隣り合う大名屋敷の場合では、屋敷毎に構造に違いが生じている。こうした考古学的成果から屋敷境としての下水溝は、それぞれの大名が構築・管理していたと考えられている（江戸遺跡研究会 2001）。

幕府が江戸の公共的機能を、各種の武家屋敷組合に担わせていたことは、岩淵令治による武家方辻番（都市の安全性）に関する研究（岩淵 1993a、1993b）や、藤村聡や松本剣志郎による上水、橋々組合（都市の利便性）に関する研究（藤村 1996、松本 2005）によって明らかになっている。

たとえば松本がとりあげた三味線堀に関しては、橋の維持管理は三味線堀高橋組合が、浚渫は三味線堀定浚組合がそれぞれ組織されていた。両者の構成員（武家）は重なっており、三味線堀の維持・管理はほぼ全面的に流域の武家屋敷組合を通して行われていたのである（松本前掲）。

三味線堀定浚組合の主な事業は下水の浚渫だが、「原藤十郎殿屋敷柵普請」（1768年/明和5）、「三味線堀竿間石垣修復」（1778年/安永7）、「三味線堀御組合柵」（1785年/天明5）といった作業から、柵の構築や石垣修理など下水道に関わる多様な事柄を職掌していたことがうかがえる。

萩藩上屋敷（桜田屋敷）は北側に御用屋敷、南側に佐賀藩上屋敷（南）が隣接していた（図 36）。その屋敷境の維持・管理の様子を具体的に知ることができるのが史料 7-3 である。史料には年代が記されていないが、1780年（安永9）から1783年（天明3）にかけて行った上屋敷と中屋敷の作事記録である『桜田上屋舗御普請記録』に収められていることから、ほぼこの間の浚渫作業ということになる。

#### 史料 7-3<sup>86</sup>

「一、御隣御用屋敷境溝半分北ノ方平地同様ニ埋り、馬場筋水吐悪敷、見分之上堀浚之儀御伺、公儀所申合、御用屋舗御門番同心福田伝右衛門、田嶋久内江根御作事方河野理兵衛より乞合、諸沙汰相済、丑ノ六月人懸仕、土堀上、御屋敷内地上江持運せ候、半分方南之方は浚計ニ而相済候、且又鍋嶋様御境之方は浚ニも不及候事、」

史料 7-3 がこの下水溝の恒常的な維持・管理の実態を反映したものかは不明だが、少なくともこの浚渫作業に関しては、萩藩が作業員の手配や浚渫土の処分など実務一切を負担している。御用屋敷側からも同心が立会と打合せに参加しているが、これも萩藩の求めに応じてのことだった。この史料からは武家屋敷組合のような地縁的な組織の存在は認められない。

<sup>86</sup> 作事記録研究会 2013 による。

図 36 のように屋敷が相対する下水溝でも、維持・管理の負担は両者均等ではなかったことがうかがえるのは興味深い。佐賀藩との境界をなす部分は浚渫作業が行われていないため、こうした不均衡な維持・管理の負担が、御用屋敷という幕府の施設と隣り合っていることに起因しているかは不明である。

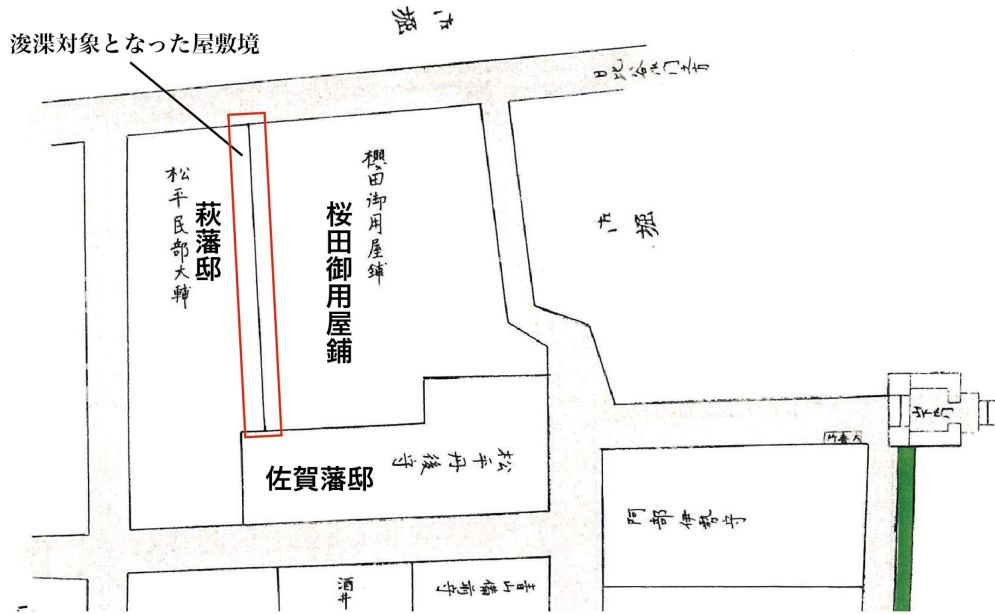


図 36 萩藩上屋敷と御用屋敷の屋敷境 『御府内沿革図書』（朝倉 1985）を基に作成

(2) 下水の維持・管理と町方との関わり

このように下水の維持・管理には、それぞれの武家屋敷が単独で、あるいは武家屋敷組合という地縁組織によって行なうなど多様なあり方が存在したが、史的には武家地の下水の維持・管理を町方が担っていた事例も多く認められる。

『類聚撰要卷之二十 神田大下水小下水』には、1795年（寛政7）の郡代屋敷前の下水落口の普請について町方と以下のようなやりとりがある（史料7-4）。

史料7-4<sup>87</sup>

「一 神田御上水年番名主蠟燭町定右衛門外三人一同申上候  
御郡代御屋敷前神田大下水落口落込場所早速取掛り普請可仕旨今般被仰渡奉畏候  
右者武家町組合持之場所御座候而前、右普請等御坐候節八年番名主方ニ而引受世話仕来候  
処武家方数多御屋敷所、引離レ有之時、御名前等相替り候も有之（略）」

この史料からは武家町組合が組織された場合であっても、普請などの実務は町方が担っていたことがあったことを示している（町方は神田上水年番であることから、神田上水に関する諸事を担う年番が、下水に関する業務も兼担していたようである）。

藤村聡は姫路藩の中屋敷奉行が書き留めた公用日記をもとに、神田上水并橋々組合<sup>88</sup>について分析した（藤村前掲）。下水組合の有無については詳らかでないが、大名屋敷の下水管理の一端を知ることができる記述がある（史料7-5）。

<sup>87</sup> 柳下 1993 による。

史料 7-5<sup>89</sup>

「芥浚等之儀ハ私共町内ニ而致来候間、何卒是迄有来之通、大下水道拝借被仰付被下置候様御願奉申上候。」

姫路藩は1792年（寛政4）に、中屋敷に隣接する田沼淡路守屋敷を獲得して一体化する。史料7-5はその際に、屋敷が隣接する小網町一丁目家主から出された願いである。

この史料は以下の二点で、江戸の下水に関して重要である。一つは周辺の町では「大下水」と呼ばれた下水の利用が、大名家から「拝借」するものであると認識されていたことである。

図37②は『御府内沿革図書』の姫路藩邸（酒井雅楽頭）と小網町周辺である。作図の基にした『御府内沿革図書』では安永年中（1772年-1781年）の田沼邸だった段階で既に小網町側の入堀（「大下水」）が埋め立てられているが、史料7-5は酒井邸が拡張した1792年（安永4）の段階でまだ堀が存在しており、小網町一丁目の町屋の下水道と接続していたようである。

その状況を示したのが図37①に示した『寛保沽券図』（1743年）である。図37②よりも約40年前の状況で、田沼邸は安藤対馬守邸であるが、掲載した範囲は図37②の赤線で囲った部分である。これをみると小網町一丁目の下水は町屋の裏手を流れており、この堀に繋がっていたことがわかる。

もう一つの重要な点は、こうした大名屋敷の屋敷境をなす下水の維持・管理を、「拝借」の見返りとして町方が行っている点である。『寛保沽券図』では安藤邸と小網町一丁目横町の間幅6尺の下水に、「安藤対馬守様屋舗下水」と記入されている。これは自分下水と呼ばれた下水（栗田1995）で、設置したのは安藤家であると思われる。小網町二丁目と安藤邸（掲載した沽券図の範囲は「稻荷社地」）との間の下水は単に「下水」として幅のみが記されているので、どちらも同じ大名家の屋敷だが、下水溝の設置は個別の状況によって異なっていたことがわかる。

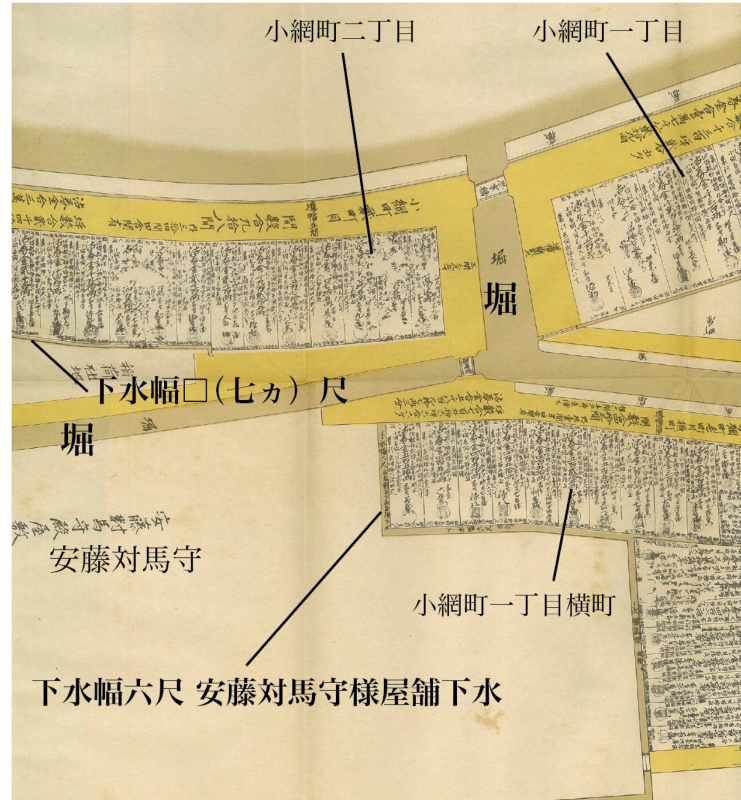
こうした大名家の自分下水と周辺社会との関係は歴史学的には十分解明されていないが、史料7-5からすると、「安藤対馬守様屋舗下水」を小網町一丁目横町が使用するにあたっては、やはりその見返りとして維持・管理を請け負っていたことが推測される。

---

<sup>88</sup> 公用日記では上水組合である蠣殻町組合と、流域の複数の橋々組合を合わせて神田上水并橋々組合と呼んでいる（藤村前掲）。

<sup>89</sup> 藤村1996による。

①『寛保沽券図』(1743)



②『御府内沿革図書』  
安永年中之形 (1772-1781)

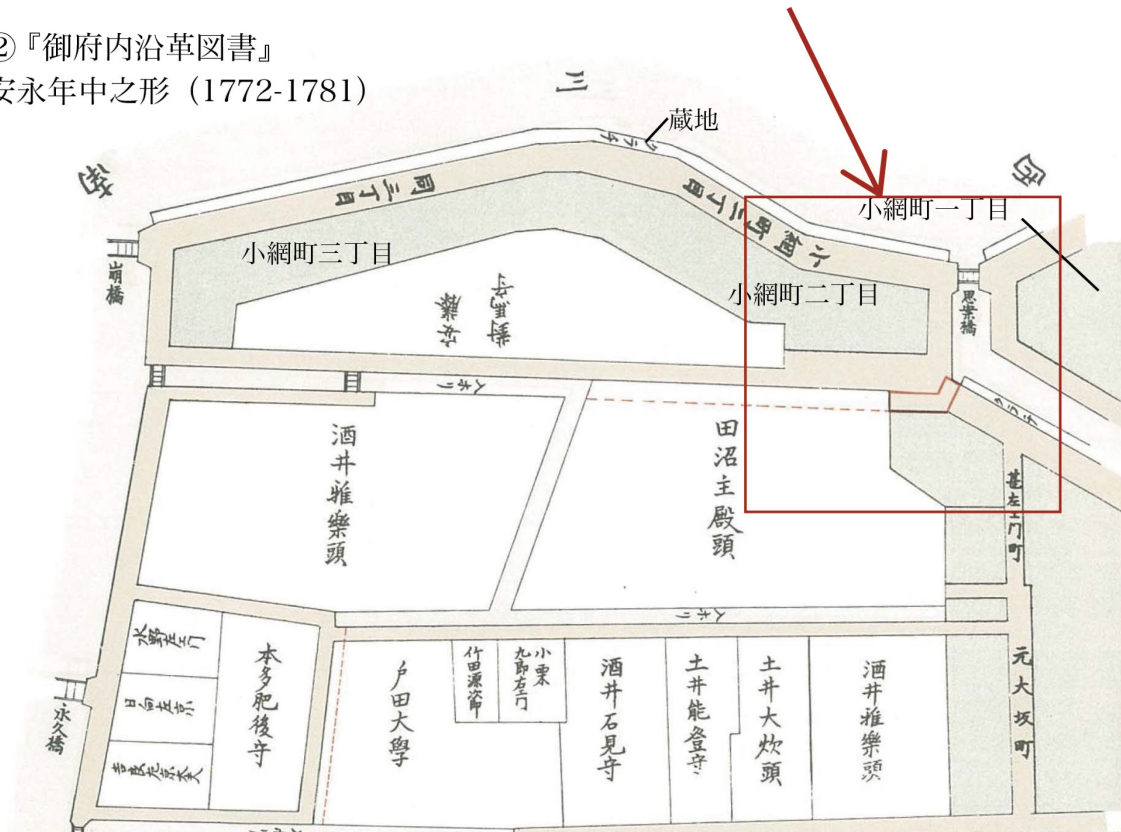


図 37 小網町周辺の大名屋敷と下水道 『日本橋区史』(東京市日本橋区役所 1937)、『御府内沿革図書』(朝倉 1985) を基に作成

### 3. 下水溝としての堀

『御府内備考』の下水に関する記述から、「下水堀」や「大下水」などと呼ばれた下水道で、溝幅がうかがえる例をまとめたのが表 21 の 1~4 である。

No	場所	呼称	幅	幅 (m)	御府内備考
1	外神田・山本町代地	下水堀	三尺	0.9	12
2	浅草・御蔵前片町代地	大下水堀	五、六尺~八、九尺	0.45-2.7	24
3	下谷・茅町二丁目	大下水	二尺五寸	0.75	34
4	巢鴨・御駕籠町	下水堀	三尺	0.9	40
5	深川・蛤町	下水道	一間	1.8	113

表 21 『御府内備考』における「堀」、「大下水」とされた下水の一例（1 間=1.8m で換算）

「下水堀」と称された下水道であっても、幅は 0.45-2.7m と開きがある。一方、深川・蛤町の下水（表 21 の 5）は幅 1.8m（幅一間）であっても「下水道」と呼ばれている。小網町の沽券図（図 37①）では「安藤対馬守様屋舗下水」が 6 尺（約 1.8m）、小網町二丁目と稲荷社地・安藤対馬守邸との間の下水が 7 尺（約 2.1m）である。江戸の下水道の呼称は、規模に応じた厳密な呼び分けはなされていなかったという栗田の指摘は十分首肯される（栗田前掲）。

本論文では屋敷境の溝のうち、幅や高さが 1.5m を越えるものを 6 類として分類し、それを屋敷境としての堀と捉えている。表 21 の 1~5 はいずれも本論文の屋敷境遺構の形態分類からすれば 6 類（堀）に該当する。

大名屋敷跡遺跡の屋敷境の堀には、

- ① 大型の素掘りの溝（空堀）
- ② 下水道としての堀（水堀）
- ③ 下屋敷・抱屋敷の屋敷境としての堀（空堀）
- ④ 屋敷の権威性を象徴するものとしての堀

がある。そのうち①の下水道としての堀は低地や谷地に分布する（表 7）。堀の検出例は少ないが、こうした傾向は表 21 のように『御府内備考』の下水で、幅広いものが江戸東側の、いわゆる東京低地と呼ばれる地域に目立つ傾向と概ね一致している。これは地下水位が高く、湿潤な地盤に対する排水処理能力を期待したことと関係すると考えられる。

下水としての堀（6 類）の出現は 1630 年代である。山手台地では 18 世紀後葉までに石組溝に造り替えられて姿を消し、府内の大名屋敷の屋敷境としての堀は、低地や谷を造成した場所に立地する大名屋敷の屋敷境として残るのみとなる。

史料 7-6 は『御府内備考』で堀が溝へと造り替えられる事例の一つである。



史料 7-6<sup>90</sup>

「下水堀

右神田明神下より御成小路を横切、樽屋三右衛門拝領屋敷より町内南の方地先、以前武家方立跡にて当時間口式拾壺間の間幅一間餘の大下水有之、地面付の方三尺通り埋申度段右地先家守共より寛政六寅年中、町年寄奈良屋市右衛門役所え相願、町奉行池田筑後守様え伺の上願の通り被仰付、尤右狭め三尺通り埋立候分、後年拝領地とは心得申間敷旨被仰渡。此下水下流和泉橋際より神田川え流落申候」

ここでは幅 1 間 (1.8m) の大下水の堀が幅 3 尺 (約 0.9m) に縮小のうえ、地中に埋設されたことがうかがえる。その時期は 1794 年 (寛政 6) で、これは考古学的にみた屋敷境遺構の 6 類から 2 類への変化が生じる時期と矛盾しない。

『御府内備考』の茅町二丁目にある「無縁坂上榊原遠江守様御屋敷方土手際通り不忍池え落候下水」が、東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点で検出した越後高田藩邸北側の屋敷境である。この屋敷境遺構は 18 世紀半ばに堀 (1 号溝) から石組溝 (AB33・34 区組石遺構) への変化が認められる (図 47)。茅町二丁目には、この下水から続く下水が「右下水往還埋下下水にて橋等無御座候」とあって、埋設下水だったことがうかがえる。ただし埋設されていた下水は高田藩邸北側の屋敷境ではなく、茅町二丁目の大下水のことと思われるので、堀から溝への変化が下水の埋設と関係したかは不明である。今後の類例を待って更に検討したい。

---

<sup>90</sup> 『御府内備考』山本町代地 (外神田)。

## 第2節 遺物組成の変化と大名屋敷の宴会儀礼

### 第1項 御殿空間の宴会儀礼

#### 1. 大名屋敷の出現と宴会儀礼

徳川家康は1590年（天正18）に関東への転封が決まると、新領地の経営拠点を江戸と定めて同年のうちに江戸へ入った。家康は江戸入府の直後から家臣団への知行割を行ったが、特に10,000石以上の大知行取の知行割は7月から8月にかけて実施している。これは中野達哉が指摘しているように、新しい領国の支配拠点である江戸・江戸城の整備や、新領国の検地などよりも早く行われており（中野2011）<sup>91</sup>、家臣団の屋敷配置を新領国の体制固めの上で重要視していたことがうかがえる。

拝領者	拝領時期	km圏内	発掘
青山忠成	1590年8月	4	×
内藤清成	1590年9月	4	○
榊原康政	1590年9月	3	○
井伊直政	1590年9月	1	×
内藤家長	1591年	2	○

表22 初期に拝領した大名屋敷の例

天正-文禄期（1590-1596年）の大名屋敷に関する史料は乏しく、この頃に行われた家臣団の屋敷配置の具体的なあり様は不明なことが多いが、表22は家康が入府直後に行った大知行取への知行割の一例である。表中の【km圏内】は江戸城からのおおよその距離である。これをみてもわかるように、家康は江戸城周辺に重臣を配置していたわけではなかった。江戸城から比較的近い井伊邸と内藤家長邸は中原街道（東海道）上に配置している。他の屋敷も街道筋という交通の要衝上に位置しており、高台にある榊原邸や井伊邸は江戸城の出城的な役割<sup>92</sup>を担っていた。家康入府直後の江戸の大名屋敷は家康家臣団の屋敷を中心としたものだった。

1596年（慶長元）には藤堂高虎が弟を証人として江戸に住ませたのをはじめとして<sup>93</sup>、大名自身が江戸へ参府し、家康への恭順を示す例も増える。その褒賞として江戸に賜邸される。これが拝領屋敷の始まりである。

塚本明は家康の1590年（天正18）から1607年（慶長12）までの居所と行動を分析した。この期間は家康が江戸に入府してから大御所として駿府城に移るまでであるが、家康は江戸より

<sup>91</sup> その背景には秀吉の意向や介入が存在したことが川田貞夫によって指摘されている（川田1962）。

<sup>92</sup> 『榊原氏系譜』にある榊原家・井伊家の屋敷拝領に関する記述には、「天正十八年庚寅年九月十日、家康公関東御入国、江戸御城御巡見有之、井伊直政ニ居屋敷地賜之。西丸ニ続平山之砦ニ可成地也ト。深キ思召ニテ被下候由。同日康正エ池ノ端向ヶ岡ノ臺を被下。此地後ニ茂ミ有之、平山ノ砦ニ可成地也。其上阿波・上総及奥州羽州之海道ヲ遙ニ見下し、前ニ大成池ヲ構エたり。其時関東筋未穩、依テ御入国之砌、領家エ要地賜之旨申伝。」とある。引用は『東京市史稿 市街編第2』（東京市役所1914）による。

<sup>93</sup> 『高山公実録』。引用は『東京市史稿 市街編第2』（東京市役所1914）による。

も京・大坂で過ごす時間の方が多かった(塚本 1994)。このことは家康が将軍に就任してもなお、当時の大名や大名社会の拠点が上方にあったことを示している。この時期の江戸の大名屋敷は家臣団の屋敷や恭順への見返りとして下賜された屋敷であり、大名の本拠としての屋敷はまだ無かったのである。

江戸の大名屋敷跡遺跡のうち、最も早い段階に位置づけられるのが東京駅八重洲北口遺跡 2-1 期である(千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003)。1264 号には景德鎮窯系の端反碗や鉢、大窯期の天目碗、志野丸皿などのほか、初期の唐津製品が認められることから、1600 年代後半から 1610 年代に位置づけられる(長佐古真也 2008)。ほぼ同時期の遺構一括資料である大坂城下町跡遺跡 OJ92-18 次調査 SK605(大阪市文化財協会 2004)とは異なり、御殿空間での使用や、大名の饗応で使用された様相は認められない。丸の内三丁目遺跡 52 号遺構(東京都埋蔵文化財センター1994)や丸の内一丁目遺跡 10 号遺構(千代田区丸の内 1-40 遺跡調査会 1998)のような、1620 年代前半(元和期)までを下限とする遺物組成についても同様である。

こうした出土遺物の様相は、江戸の大名屋敷が家康家臣団の屋敷や証人屋敷だったことと、大名社会の拠点が未だ京・大坂にあったという当時の状況を反映したものである。

## 2. 江戸の大名屋敷の成立と宴会の始まり

横田冬彦は大名屋敷の出現を、諸大名が聚楽第の周囲に築いた屋敷に求めている(横田 2001)。これは上洛時の宿舎ではなく、大名の正妻・嫡子が暮らす本宅であり<sup>94</sup>、大名の本拠地という側面を併せもつものだった。横田はここに京都という城下町を「単なる武士(家臣)団の集住地ではなく、諸大名の集住地」としての「首都」と捉える(横田前掲)。

江戸の大名屋敷をこうした視点で捉えると、大名屋敷の成立は大名妻子の江戸集住と、参勤交代の制度の確立に求められる。大名妻子の江戸集住(以後、大名妻子江戸居住制と呼ぶ)は制度として明文化されたものはないが、丸山雍成は 1624 年(寛永元)に島津家久が妻子を江戸の屋敷に住ませたこと<sup>95</sup>に求めている(丸山 2007)。1634 年(寛永 11)に「譜代大名の妻子を所領に置もの。今年よりみな江戸に引移すべし」<sup>96</sup>となっていることから、大名妻子江戸居住制は 1620 年代半ばから 10 年間のうちに完成したとみてよいだろう。

---

<sup>94</sup> 『多聞院日記』天正 17 年 9 月(1589 年)に「諸国大名衆、悉以聚楽へ女中衆令同道、今ヨリ可在京ノ由被仰付トテ」とある。史料は『続史料大成』(竹内理三編 1978)による。

<sup>95</sup> 『大猷院殿御実紀』巻 3 1624 年(寛永元)11 月 13 日。黒板勝美編 1929 による。

<sup>96</sup> 『大猷院殿御実紀』巻 26 1634 年(寛永 11)8 月 4 日。黒板勝美編 1929 による。

参勤交代制は1635年（寛永12）の武家諸法度の改訂版（寛永令）によって制度化<sup>97</sup>されたものである。1642年（寛永19）に小笠原忠真ほか34人の譜代大名にも参勤交代が命じられている<sup>98</sup>ことから、1630年代半ばから40年代初頭にかけて完成したといえる。

聚楽第とその周辺の大名屋敷での大名の活動は、1588年（天正16）の毛利輝元の上洛時の記録である『天正記』（三坂1987）で知ることができる。毛利輝元は京都滞在の一月の間に、上洛の主目的である聚楽第への出仕と秀吉への謁見のほか、公家・諸大名との交誼を結ぶことに時間を費やした。その活動の中心は請待（饗宴）や茶事といった饗応だった（仁木宏2008）。

---

<sup>97</sup> 1615年（元和元）年の『武家諸法度』にある条文（9条の「諸大名参勤作法之事」）の「京」を巡っては、これを伏見にいる家康のもとへと参勤交代する条文と捉える説（丸山前掲）と、天皇への参勤についての規定とするもの（朝尾直弘1975）とがある。本稿では江戸への参勤交代という点で寛永令を参勤交代の制度化に位置づけた。

<sup>98</sup> 『大猷院殿御実紀』卷38 1642年（寛永19）5月9日。

将軍	御成回数	前半	後半
家康	6	3	3
秀忠	77	29	48
家光	325	47	278

表 23 家康・秀忠・家光の御成回数（佐藤 1981 より）

表 23 は家康・秀忠・家光が行った御成の回数<sup>99</sup>である（佐藤豊三 1981）。家康の御成回数が秀忠・家光に比べて少ないのは、在任期間の短さによるものである。家康の 6 度の御成のうち、4 度が伏見での御成で、江戸の御成は 1606 年（慶長 11）年 2 月 8 日の伊達政宗邸への御成のみである。秀忠・家光の御成は全て江戸で実施されたものである。大熊喜邦は将軍の御成を迎えるという大名屋敷の役割のため、初期の江戸の大名屋敷が「桃山風の遺風」を伝える平面構成をとったと指摘しているが（大熊 1935）、このことは家康から家光までの御成の回数と実施場所からもうかがえるのである。

江戸の大名屋敷跡遺跡において饗応活動がうかがえる遺物組成が出現するのは、豊後日出藩木下家屋敷跡遺跡 75 号（港区教育委員会 2013）、東京大学本郷構内遺跡中診地点池状遺構（東京大学遺跡調査室 1990）で出土したカワラケー一括出土資料（資料編図 91）が最初である。前者は同一生活面の 39 号遺構に「元和八年」（1622 年）の墨書部材が出土しており、後者は 1629 年（寛永 6）の加賀藩本郷邸への家光・秀忠の御成に伴う一括資料である。

考古学的には 1620 年前後の元和・寛永期になって、江戸の大名屋敷での活動に、大名の饗応が加わったことになる。その背景は 1620 年代から 30 年代にかけて成立した大名妻子江戸居住制と参勤交代制によって、大名屋敷がそれまでの家康家臣団の屋敷や家康への恭順に対する賜邸という性格から、大名の拠点としての屋敷へと変質したことがあげられる。これによって大名の拠点は京・大坂から江戸へと移り、それまで上方の大名屋敷で行われていた饗応活動もまた、江戸の大名屋敷へと移ったのである。

### 3. 宴会に関連する一括資料の変化と饗応のあり方の変容

年代	仙台城			江戸藩邸		
	広間	対面所	書院	広間	対面所	書院
慶長年間（1596-1614）	大			大		
寛永年間（1624-1643）	小			小		
延宝年間（1673-1680）					●	
天和年間（1681-1683）		●				
元禄年間（1688-1703）		●	×			
享保年間（1716-1735）						●

<sup>99</sup> 表中の前半・後半は家康・秀忠に関しては将軍在職時と引退して大御所となった時期で前半・後半にわけた。家光では秀忠の逝去（寛永 9）を境として前半・後半にわけている。

表 24 仙台城と仙台藩邸の御殿空間の構成変化（佐藤 1979 を基に作成）

佐藤巧は仙台城（慶長年間には本丸御殿、寛永年間以降は二の丸御殿）と江戸の上屋敷の御殿の構造を、広間から対面所（家臣との対面機能を担う空間）・書院（接客機能を担う空間）への変化から捉えている（佐藤 1979・表 24）。

慶長から寛永年間（1596-1644 年）は仙台城、江戸藩邸ともに御殿空間の主たる空間は広間だった（表 24 において大は大広間、小は小広間を表す）。ところが延宝年間（1673-1680 年）以降、国許と江戸とで御殿空間の空間構成のあり方が異なってくる。仙台城では元禄年間（1688-1703 年）の改造によって内対面所が加わる一方で、書院が姿を消す。江戸藩邸では御殿空間に対面所と書院の両者を備えていたが、享保期には両者が統合した上で、表対面所が大書院に、奥対面所が小書院と呼称されることになる。つまり延宝期以降の変化によって、国許では対面所が主たる役割を担い、江戸藩邸では書院が主たる役割を担っていくことになる（表中の赤色の彩色部分）。

佐藤は仙台城で書院が必要とされなくなった背景を、藩主権力の強化によって、それまで客人として接していた一門なども家臣として扱われることになったことに求めている。江戸藩邸で書院が主となるのは、「仙台城居館における諸行為が君臣関係を軸とした縦の関係で営まれたのに対し、江戸藩邸では、上使をはじめ諸大名、旗本、諸寺院、諸家の使者等の接見、そしてその饗応といういわば横の関係が主要な部分を占めていた」ことによるものとする（佐藤前掲）。

仙台藩邸の御殿空間における広間から書院への変化は、佐藤も指摘するように饗応に伴う宴会と不可分なものである。こうした御殿空間における変化は、寛永年間に制度として成立した大名屋敷が、延宝から元禄期に機能面での完成をみたことを示している。この機能面こそが、大名屋敷で最も重要な活動である饗応にほかならない。

江戸の大名屋敷が大名妻子も居住することによって大名の拠点となることで、大名屋敷での宴会には、将軍や諸大名などとの交誼を維持するための饗応とともに、大名家の私的な武家儀礼に伴う饗応が加わることになる。加賀藩では、藩主の奥向での私的な祝い事と、その料理や行事の内容が『江戸表並御国許御広式年中御祝方』に残されている（金沢市史編さん委員会 1996）。

大名屋敷跡遺跡で宴会との関係をうかがわせる遺物が増加するのは、1657 年（明暦 3）の明暦の大火前後である。それは火災瓦礫となった食器類が多量に捨てられたことと、火災層が絶対年代を把握する鍵層となるという考古学の方法論によるもので、実態は前段であげた 1630 年代以降から増加していたとみてよいだろう。

17 世紀代の宴会に関連する遺物組成に特徴的な遺物が磁器製大皿である。東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 678 号は 18 個体の大皿が報告書に掲載されている（資料編図 86・資料編図 87）。それらと同一意匠の個体が複数個体存在しており、個体数としての把握が不可能だった資料も含めれば実数はかなりの数にのぼることが予想される。汐留遺跡 2 号土坑から出土する大皿も正確な点数は不明だが、染付のほか九谷様式の色絵が多いことを特徴とする。この遺構は 1657 年（明暦 3）の大火によるものである。

荒川正明は慶長期から寛文期頃までのおよそ 70 年間で、「生活什器において「大皿」にこそ最もその時代性が現れている」として「大皿の時代」と呼んだ（荒川 1996）。荒川は風俗画に描かれた大皿の使用場面の検討から、大皿が嶋台とともに座の中央に置かれ、その日の宴会の主たる魚を盛り付ける、宴会で使用される什器の中心的な存在だったことを指摘した。

遺跡出土の大皿に関する成瀬晃司・堀内秀樹の研究では、17 世紀代の大皿の出土遺跡は東京大学本郷構内遺跡、汐留遺跡、尾張藩上屋敷跡遺跡といった大・大名の屋敷跡遺跡に限られることが明らかにされている（成瀬・堀内 1998）<sup>100</sup>。大皿は「大名の家臣クラスの武士でさえ日常什器として頻繁に使用できるような性格の器では到底なかった」（荒川 1996）点で、大名屋敷の饗応活動を最も反映した遺物と位置づけることが可能である。

1680 年代になると大皿は減少し、尾張藩上屋敷跡遺跡 149-3N-5（東京都埋蔵文化財センター 1999）や東京大学本郷構内遺跡中診地点 L32-1（東京大学遺跡調査会 1990）に代表されるような、高品質な中皿主体の遺物組成へと代わる（資料編図 88・資料編図 89）。いわゆる「大皿の時代」の終焉の背景として、荒川は明暦の大火後の経済的な冷え込みによる「大皿を使用するような場面、つまり豪華な饗応」の減少と、中国趣味の減退をあげている（荒川前掲）。

しかし考古学的には大皿の出土は汐留遺跡 6I-060（東京都埋蔵文化財センター 1997）のように、明暦の大火以降の生活面から出土している事例もある。また江戸では必ずしも大火が「経済的な冷え込み」に直結するわけではなく、賃金などの高騰から景気を刺激するという側面（黒田喬 1999）にも留意する必要がある。史料 7-7 をみてみよう。

#### 史料 7-7<sup>101</sup>

「旧冬江戸就大火事、諸職人・日用人等ぬけ／＼江戸江参候由沙汰有之候。御郡方之者、十村並各江無断罷越者有之間敷候得共、彌為念申触候條、右之族無之様急度御郡中江可有御申触候。商等に而無據所之首尾有之候者、様子御聞届兩關之通切手御遣可有候、以上。

亥正月十八日 御算用場」

これは 1682 年（天和 2）の火災後に加賀藩の御算用場が出した通達である。加賀藩のこの火災での被害は全ての江戸屋敷に及んでおり、復興特需ともいうべき江戸の状況に、早くも国許の職人・日用者が動いていたことがわかる。こうした状況は江戸の大火の度に多くの藩でみられたものと思われる。

火災後の景気の上昇を享受できたのは町人階層であり、大名家では焼失した藩邸の再建に加え、江戸城の修復なども命じられて経済的負担は少なくなかった。しかし田中智によれば、明暦の大

<sup>100</sup> 神田淡路町二丁目遺跡は小藩クラスの大名屋敷だが、ここに屋敷を拝領した大名の多くが幕閣を務めていた。幕府への献上品である鍋島や中国製磁器もまとまって出土しており、幕府内の地位が大名家内での宴会のあり方に影響を与えていたことが予想される。

<sup>101</sup> 1683 年（天和 3）正月十八日。『加賀藩史料』による。

火後に出された家作制限などの儉約令で、再建後の大名屋敷には装飾的な要素はなくなるものの、大名屋敷の表御殿が担っていた「接客・対面の儀礼の場としての機能は踏襲」されている（田中 2000）。明暦の大火によっても、大名屋敷での宴会は重要性を減じることなく継続するのである。

考古学的に見ても大皿の減少を契機に、大名屋敷跡遺跡に宴会に関連する遺物が出土しなくなるという傾向はない。むしろ上記の尾張藩上屋敷跡遺跡 149-5N-5 や東京大学本郷構内遺跡中診地点 L32-1 のような、上質な磁器製中皿を主体とする組成が出現する。こうした状況は、明暦の大火（1657 年/明暦 3）あるいは天和の大火（1682 年/天和 2）の火災による経済的な影響が、大皿を駆逐する直接的な要因とはならないことを意味するものである。

大皿が減少する背景は受容層（大名社会）の供膳形態に関する嗜好の変化によるものと考えられる。荒川が指摘した「大皿の時代」の終焉に関するもう一つの理由である中国趣味の減退も、この変化の一つと位置づけられるだろう。

#### 4. 18 世紀末から 19 世紀初頭の宴会に伴う一括資料

大名屋敷跡遺跡の宴会に関連する遺物組成は、17 世紀後葉に大皿から中皿へと変化した以降は大きな変化はみられない。遺物編年的には東京大学 L32-1 で主体となった上質な肥前製磁器皿（東京大学編年では JB-2-c と分類した、柿右衛門 B 窯などを指標にした資料）や中国製磁器は 1682 年（天和 2）の火災までに出土しなくなる。しかし御殿下記念館地点 537 号（18 世紀前葉）のように、同一意匠の上質な磁器皿が複数個体出土する（揃い物）遺物組成はその後も認められるので、大名屋敷における饗応は継続したことがわかる。

19 世紀になると宴会の遺物組成の中に大皿が再び増加する。尾張藩上屋敷跡遺跡 2 地点 50-5L-5（東京都埋蔵文化財センター 1996）では、馬の目皿などの瀬戸・美濃製陶器大皿が複数個体出土した。陶器製大皿には墨書されているものも多く、墨書には次のようなものがある。

- ①「西膳」
- ②「寛政□/西御膳/拾内」
- ③「寛十三 拾内西膳」

①から③にみられる「西膳」・「西御膳」は、西御殿の膳所を意味している。調査地点が西御殿北側にあたることから、この一括資料が西御殿の膳所で保管され、西御殿の御殿空間で使用された什器であることがわかる。

②と③はそれぞれの馬の目皿が 10 枚セットで揃えたものであることを示している。大皿の使用自体が大人数での宴会を反映したものだが、西御殿の膳所では馬の目皿だけで 20 枚以上を購入していたことになる。

一方で 50-5L-5 には報告書掲載遺物をみる限り磁器製大皿は認められない。加賀藩邸をはじめとする多くの大名屋敷跡遺跡では、御殿空間の宴会に伴う遺物組成はカワラケを主体とするもの（萩尾昌枝 1990）や、磁器皿を主体とするものがある（堀内 2005、堀内 2006）。陶器が主体となる 50-5L-5 の遺物組成は、御殿空間の宴会に伴う遺物組成としては特殊な様相といえる。



尾張藩邸の遺物組成と加賀藩邸の遺物組成とを比較した瀬戸市史編纂委員会は、18世紀後葉以降に両者の組成に違いが生じ、尾張藩邸では瀬戸製の割合が高くなることを指摘している（瀬戸市史編纂委員会 1998）。これは焼物の一大生産地を擁する尾張藩が積極的に自藩の特産品を用いた結果だが、50-5L-5の遺物組成はそれが御殿空間での饗応活動の場にも及んでいたことを示すものである。

カワラケ一括廃棄遺構は18世紀前葉以降になると検出率が減少する。カワラケは御成をはじめ、大名の交誼を深める公的な饗応に用いられた什器だが、御成は家光の後半段階（表 23）以降、訪問先や式次第が將軍の私的なものへと変容する（佐藤 1981 ほか）。カワラケを用いる饗応は將軍の御成だけでなく、武家儀礼に伴う宴会もあるが（島田勇雄 1985）、最も規式に則った饗応である御成の変容が、他の饗応の変化を促したことが推測される。

武家の饗応が簡略化する傾向にある中で、規式に則った饗応が継続するのが朝鮮通信使の来聘と勅使の参向の際の饗応である（浜田・林 1989）。特に前者は將軍の就任を祝う使節であることから、將軍一代にとって一度の外交行事という点で後者よりも格式が高かった（浜田・林前掲）。1764年（明和元）と1811年（文化8）の通信使への饗応で用いられた供膳具をまとめたのが表 25 である。

両者には約50年の時代差があるが、饗応内容の違いはむしろ饗応自体の格式を反映したもので（浜田・林前掲）、表中の饗応では登城の際の三使の供膳具が最も格式の高い供膳形態ということになる。その膳組は膳5つによる七五三の膳で、本膳から三の膳までの料理は高盛である。それには「磨土器」、即ちカワラケが用いられていた。帰国の際の饗応には高盛がみられないことから、18-19世紀になっても格式の高い饗応では、高盛という装飾性の強い盛り付けがカワラケになされていたことがわかる。

高盛としない料理では、陶磁器や漆器が役職に応じて使い分けられている。1764年（明和元）の帰国の饗応では三使と上々官に染付、上官・次官・小童に大白、中官以下には信楽焼が宛がわれている。1811年（文化8）の登城の饗応では、三使と上々官には大白が使われ、次官・小童には漆器碗が使われた。

勅使参向の記録の中に「大白今利」や「大白瀬戸」といった記録があることが指摘されていることから（浜田・林前掲）、大白は瀬戸・美濃製陶器の太白手と呼ばれる製品ではなく、磁器製品と解釈した方がよいだろう。これとは別に「染付」という記述もあることから、白磁の可能性が高いが詳細は不明である。

尾張藩が18世紀末に定めた御三家、御三卿、前田家など諸大名が藩邸を訪れた際に供する膳部を丸山雍成が紹介している。その内容は土器の盃（カワラケ）や塗りの盃（杯）を用いたものになっている（丸山 1993）。

このように御殿空間での公的な饗応に伴う宴会では、カワラケが一部で漆器に変更になる、三方が白木ではなく塗物になる等の変化はあっても、基本的なあり方は御成の際の規式、即ち小笠原流や伊勢流といった武家礼法に則したものを踏襲（丸山前掲）しつつ、大名屋敷の重要な活動としてあり続けていたのである。

役職	登城の饗応: 1811年(文化8)			帰国の饗応: 1764年(明和元)	
	膳組	土器	食器(皿類)	膳組	食器(皿類)
三使	七五三(膳5つ)	高盛磨土器下輪杉	大白	三汁十五菜	染付
上々官	〃	〃	〃	〃	〃
上官	七五三(膳3つ)	高盛磨土器		三汁九菜	大白
次官・小童	三汁十一菜	高盛磨土器	浅黄椀内朱黒赤膳	〃	〃
中官				三汁九菜	信楽焼
下官				二汁七菜	信楽焼

表 25 朝鮮通信使の来聘時の饗応における供膳具 (浜田・林 1989 を基に作成)

## 第2項 詰人空間での宴会

大名屋敷で行われた諸活動の中で、饗応や武家儀礼に伴う宴会は極めて重要な活動だった。前項でみたこれらの宴会は藩主が行ったもので、空間的には御殿空間での活動ということになる。それでは詰人空間に居住する家臣たちの活動として、宴会はどのように位置づけられるのだろうか。またそもそも宴会という活動を、大名屋敷に居住する藩士たちは行っていたのだろうか。

史料 7-8 は加賀藩本郷邸の詰人空間での宴会の存在を裏付けるものである。

史料 7-8<sup>102</sup>

「 (略)

一、 御小屋ニ而寄合被申刻、不依昼夜料理等被出候者、一汁一菜、外ニ香物か塩辛之類一色ハ不苦候、仮令有合候とても右之外者出し被申間敷候、尤濃茶堅無用ニ候、近年一汁一菜もおもき料理ニ成候間、成程軽可被致候

(略)

一、 御大小将中、仲間之寄合之外惣而筋目茂無之方江参会、いはれざる儀候

(略)」

史料 7-8 は 1689 年 (元禄 2) に江戸に勤番となる藩士に示された生活心得にある、勤番長屋での宴会に関する制限である。その骨子は宴会が過度に贅沢になることを禁じること<sup>103</sup>と、「仲間之寄合」則ち、職域での宴会以外にむやみに参列することを制限したものであって、宴会自体を禁じたものではない。このことから加賀藩邸では、少なくとも 1660 年代から 80 年代には詰人空間で宴会が行われていたことがわかる。

史料 7-8 にあるように、詰人空間で行われた宴会は「仲間之寄合」を基本とするものだった。加賀藩では勤番藩士の多くが国許から参勤交代によって赴任した者で占められていたので、出産、元服、結婚などの武家儀礼は国許で行われていた。1630 年 (寛永 7)、1659 年 (万治 2) に藩士の衣服、金沢での藩士の家屋や饗応などに対する規制が出されている。特に 1659 年 (万治 2) の規制は嫁娶や遊戯にまでも及ぶもので、前年に「御召米」(買上米)が行われたことを併せて考えれば、規制の目的は藩士たちの経済的負担の軽減にあると考えられる。こうした一連の制限が、国許で藩士たちが武家儀礼に伴う宴会儀礼を行っていたことを示している。

定府の藩士は藩邸内で世帯居住をしていたので、武家儀礼とそれに伴う宴会は大名屋敷内の住まいで行っていたことが推測されるが、明確に定府藩士の住まいと特定できる調査の報告例はない。

<sup>102</sup> 『六冊之御定書』の「元禄二年江戸江被罷越候面々江申談品々」。史料は金沢市史編纂委員会 2001 による。

<sup>103</sup> ここで推奨された料理内容である「一汁一菜、外ニ香物か塩辛之類」という規定は、1659 年 (万治 2) 正月に出された饗応に関する制限を踏襲したものと思われる。藩士たちの饗応に関する制限が、国許だけでなく江戸の藩邸にも及んだことがうかがえる。

藩士たちの宴会の一端は、正月や節句といった非時の際に藩主から供された料理内容でうかがい知ることができる。1699年（元禄12）に作成された『一江戸上御台所座席御印絵図、二御台所年中御料理之品其外御改ヲ写付テ奉窺義相記之上基引之図、外御書出等委曲留帳一冊』には、年中行事のほか、旅行、役所で藩士たち（一部、出入の町人や百姓も含む）が藩主から下賜された料理・御酒の内容がまとめられている（丸山1993）。表26はそのうち元旦と節句（3例）、「平生朝暮」をまとめたものである。

「平生朝暮」は日常に供される食膳の内容なので、家中の身分毎に供される食事内容の標準的なあり方と考えられる。年寄中は一汁四菜に御酒がつき、人持と頭分は一汁三菜となって御酒が付く。平侍以下では料理数が1品ずつ減じられて酒は付かない。

元旦を除いた節句では、各節句に因む草餅や粽などの一品が添えられて、人持以下では一汁四菜と酒、または一汁三菜と酒のように、通常よりも料理一品と酒が加わっている。「人持」以下の料理の内容をみると、ここでも前述した1659年（万治2）に出された藩士の饗応の食膳内容（一汁三菜）が踏襲されていることがわかる。

階級	平生朝暮	元旦	3月3日	5月5日	9月9日
年寄中	一汁四菜・御酒	蓬菜雑煮 御酒 一汁五菜・吸物・御酒	草餅 御料理定なし	粽 御料理定なし	赤飯 御料理定なし
人持	一汁三菜・御酒	蓬菜雑煮 御酒 一汁四菜・御酒	草餅 一汁四菜・御酒	粽 一汁四菜・御酒	赤飯 一汁四菜・御酒
頭分	一汁三菜・御酒	蓬菜雑煮 御酒 一汁四菜・御酒	草餅 一汁四菜・御酒	粽 一汁四菜・御酒	赤飯 一汁四菜・御酒
平侍并小頭・新番・与力	一汁三菜	・蓬菜雑煮 御酒 ・一汁四菜・御酒	草餅 一汁四菜・御酒	粽 一汁四菜・御酒	赤飯 一汁四菜・御酒
御徒等	一汁二菜	蓬菜雑煮 御酒 一汁三菜・御酒	草餅 一汁三菜・御酒	粽 一汁三菜・御酒	赤飯 一汁三菜・御酒
足軽・坊主以下	一汁二菜	・蓬菜御台にて祝雑煮 御酒 ・一汁三菜・御酒	草餅 一汁三菜・御酒	粽 一汁三菜・御酒	赤飯 一汁三菜・御酒

表 26 加賀藩邸の年中行事で下賜された料理（丸山1993改変）

上記史料のうち『二御台所年中御料理之品其外御改ヲ写付テ奉窺義相記之上碁引之図』（以下、『碁引之図』と省略）は、従来の食に関する規定（宮腰松子 1984）に藩主前田綱紀の改訂を加えたものである（丸山前掲）。丸山の分析によれば『碁引之図』が準拠した加賀藩の食事規定は 1637 年（寛永 14）に定められたものである。供膳具に関する言及をみてみよう（史料 7-9）

#### 史料 7-9

「一 御徒以上、御上台所ニ而御料理被下候、但、此面々墨塗之膳具一統ニ被下候、足輕以下は御下台所ニ而被下候、膳具足なし折敷ニ新町椀ニ而御座候、御上台所ニ而被下坊主跡々有之候、此分も御徒以上膳具一統ニ而御座候事、

○向後、平士迄ハ唯今迄之通墨塗膳具ニ而被下、与力以下ハくまの足之類、輕キ膳具ニ而品替申たて可有御座候哉、尤、足輕以下ハ唯今迄之通折敷新茶椀ニ而可有御座候、若又坊主・足輕之内、役柄ニより御上台所ニ而食事不仕候ハて不叶者ハ席を替、膳具ハ御下台所ニ而被下通ニ可有御座候哉之事、」

史料 7-9 を基に、食事が下賜される場所と供膳具をまとめたのが表 27 である。正月や折々の節句では、藩士たちは下賜された料理を、御殿空間内の「御上台所」や「御下台所」で摂っていたのである。ここは御殿空間とはいえ藩主の饗応が行われる空間とは異なる場所である。それでも個々の勤番長屋ではなく、御殿空間の一角で供されていた点が注目される。

表 27 の供膳具の記載をみると、加賀藩ではこうした非時の食事の際には「墨塗之膳具」を基本的な什器としていたことがわかる。これは黒色の漆器椀を指すものと思われる。足輕以下の「新町椀」も「椀」とあることから、漆器椀の可能性が高い。本郷台に立地する東京大学本郷構内遺跡では漆器椀の出土例は限定的だが、出土漆器椀の位置づけの上で重要な記録となる。

階級	料理下賜の場所	供膳具(改訂前)	供膳具(改訂後)
年寄中	御上台所	墨塗之膳具	墨塗之膳具
人持	御上台所	墨塗之膳具	墨塗之膳具
頭分	御上台所	墨塗之膳具	墨塗之膳具
平士	御上台所	墨塗之膳具	墨塗之膳具
小頭	御上台所	墨塗之膳具	「輕キ膳具」に替える
新番	御上台所	墨塗之膳具	「輕キ膳具」に替える
与力	御上台所	墨塗之膳具	「輕キ膳具」に替える
御徒等	御上台所	墨塗之膳具	「輕キ膳具」に替える
足輕・坊主以下	御下台所	足なし折敷 新町椀	変更なし

表 27 加賀藩邸で年中行事に際して下賜される食事の場所と供膳具（『碁引之図』より）

東京大学本郷構内遺跡の勤番長屋の調査例で遺物組成をみてみよう。病棟地点で検出した黒田門邸は1682年（天和2）の火災で焼失した長屋で、焼失前には足軽や聞番などに割り当てられていた。長屋の出土遺物の組成には、宴会に関係する様相は認められない（成瀬晃司2009）。

理学部7号館地点1号井戸は碗よりも皿が多く出土しており、出土した肥前製磁器皿には染付花鳥文皿8個体以上、柳に山水人物文皿6個体などのように揃いの製品が目立つ。色絵の瓶も含まれている。瀬戸・美濃製陶器には志野も含まれるが、遺物組成からは1650-70年代に位置づけられる（東京大学遺跡調査室1989）。組成には該期の御殿空間のように大皿は伴わないが、上手の皿が揃いでみられることから、宴会に供された什器であると捉えることができる。

理学部7号館地点は本郷邸の絵図が残る元禄期以降は、八筋長屋と呼ばれる長屋にあたる。細川義によれば、18世紀以降の八筋長屋は「人持」と呼ばれる上級藩士（1,000～14,000石）が利用した長屋だった（細川1989）。『武州本郷第図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵）でも「侍分一」、「番頭並」、「使番並」という註記がみられることから、1号井戸に遺物が廃棄された当ても比較的上級の家臣が居住していたことが想定される。

藩邸南東側の勤番長屋である龍岡門別館地点では、天和の火災以前の生活面（下屋敷段階）、1703年（元禄16）の火災層にパックされている生活面、18世紀以降の生活面2枚の計4枚の生活面を検出している（図8）。しかしいずれの生活面においても、宴会に関連する遺物は出土していない（東京大学埋蔵文化財調査室2004）。『江戸御上屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館蔵）に描かれた本郷邸の勤番長屋を類型化した田中政幸は、東御長屋を中級以上の藩士が居住する長屋に位置づけている（田中1995）。

17世紀後葉の宴会を規制する史料（史料7-8）とほぼ同時期の長屋の調査で、宴会という活動が認められる長屋（八筋長屋・理学部7号館地点）と、認められない長屋（黒多門邸・病棟地点、東長屋・龍岡門別館地点）が存在するという事は、この時期の詰人空間における宴会が、藩士たちの中でも限られた階層で行われた活動だったことを反映したものと考えられる。宴会が行われた八筋長屋が上級藩士の長屋であることから、上級藩士の間で行われていた可能性が高い。ただしこれは宴会が行われた「場」が上級藩士の長屋ということであり、それに参列した藩士が上級藩士のみに限定されていたことは意味しない。だからこそ史料7-8のような江戸生活の心得が通達されることになったのだろう。

18世紀末以降になると、宴会に関連する遺物組成に再び大皿が含まれるようになる。この時期の大皿の出土傾向は、17世紀代と異なり詰人空間でも出土する。これは18世紀末以降になると詰人空間でも大皿を用いた宴会が行われていたことを示している。その背景にはこの時期になるとより広い階層の勤番長屋で宴会が行われていたことがあると思われる。

### 第3節 大名屋敷の生産活動

#### 第1項 栽培・耕作活動

##### 1. 植物栽培類型 A

本論文では大名屋敷跡遺跡の植物栽培遺構のあり方からみた大名屋敷の植物栽培（花壇、畑、花・果樹栽培の三様態）を、植物栽培類型 A、同 B、同 C に類型化した。

植物栽培類型 A は御殿空間での植物栽培である。御殿空間での植物栽培には、市谷本村町遺跡（尾張藩上屋敷・新宿区市谷本村町遺跡調査団 1993、同 1995）で検出した花壇跡が示すような花壇、あるいは汐留遺跡 4H-089（東京都埋蔵文化財センター 2006）で植木鉢が多量に出土したように、鉢植えによる花卉栽培がある。

『江戸図屏風』（歴博本）には、江戸城内の「御花畠」でツバキが栽培されている様子が描かれているが、中尾佐助は將軍（家康・秀忠・家光）の「花癖」と呼ばれる植物愛好が、大名屋敷一とりわけ御殿空間での花卉栽培に大きな影響を与えたことを指摘している（中尾 1986）。寛永年間に刊行された百椿集、あるいは百椿図と呼ばれるツバキの図譜には、制作や刊行に大名が関わっているものがある（箱田直紀 2006）。このことから少なくとも 17 世紀前半（寛永年間）には、御殿空間において花卉栽培（植物栽培類型 A）が行われていたことがうかがえる。

上田三平は浜庭（浜離宮庭園）や栗林公園などの大名庭園に薬園が併設されている点を、將軍の「花癖」によって近世薬園に鑑賞的要素が加わった結果であると見なした（上田 1972）。しかし三浦三郎によれば薬草となる植物は野生種であるため、薬草栽培には「自生要因にあわせた農業的小気象の調整」や「隣接植物との組合せ」などへの留意が必要とされ、花卉園芸と薬園経営とは別のもので理解すべきであるという指摘がなされている。（三浦 1972）。

市谷本村町遺跡で検出した尾張藩市谷邸の花壇遺構は、溝の周囲に柱穴が伴うことから上屋が設けられた花壇であると考えられている。越村篤はこの点から花壇で栽培された可能性のある植物として、菊と朝鮮人参をあげた（越村 1999）。尾張藩の薬園に関する水野瑞夫の研究によれば、尾張藩では寛永年間には国許に薬園を開設しており、朝鮮人参は国許の御下屋敷御薬園、尾張山東谷御林御人参薬園で栽培されている（水野 1972）。

朝鮮人参の栽培は尾張藩の御医師である高橋玄仙を中心に、御徒衆や御手元足軽のような藩士が携わっている。この栽培は朝鮮人参の安定的な供給を目指す幕府の方針によるもので（岩下哲典 1995）、尾張藩も商品作物として朝鮮人参の栽培化を目指していた。尾張藩の朝鮮人参の栽培と江戸藩邸との関係は不明ながら、こうした耕作・栽培活動は詰人空間で藩の許可のもと行われた植物栽培類型 C に相当するだろう。

## 2. 植物栽培類型 B

植物栽培類型 B は詰人空間の長屋隣接地において藩士が行った栽培・耕作活動である。史料的には尾張藩邸で屋敷内の明地を藩士に貸し出していることや、加賀藩本郷邸で長屋での畑作を禁じている（史料 5-2）ことが植物栽培類型 B の存在を裏付けている。その具体的なありようとして参考になるのが、『久留米藩士江戸勤番長屋絵巻』（江戸東京博物館蔵）の「戸田熊二郎の長屋部屋」である。ここでは坪庭に設けた花壇や植木鉢での花卉栽培の様子が描かれている（江戸東京博物館 2010）。しかしこの絵巻には、蔬菜栽培の様子と思われる描写は認められない。

勤番武士の生活については、彼らの日記を分析対象とした研究によって明らかになっている。岩淵令治は江戸藩の上級藩士である遠山屯・庄七親子の日記の分析（岩淵 2007a）と、庄内藩の中級藩士である金井国之助の日記の分析（岩淵 2007b）から、勤番武士の江戸での行動を解明している。

岩淵の研究で明らかになったことの一つに勤番武士の買物傾向がある。彼らの江戸での買物は江戸土産よりも、国許の実家や同僚の注文に応じた商品の購入に重きが置かれていた。表 28 は遠山家の植木関係の買物リストである。

購入時期	蔬菜	花卉(植木・鉢植え・種)	不明
1830.12.04	なすたね		
1831.05.12		唐竹	
1838.02.15	なす種		
1838.04.04	たかな種		福良堂草
1838.04.06			種物
1838.06.12		残雪柳・花かいどう・ばら・きりしま	
1838.12.04	なす種		
1838.12.24	夏大根種・婦ゆな種・つけな種・きうり種		
1839.01.24			種物類
1839.02.03	夕顔たね・きうりたね		
1839.05.17	衾りま大こんたね	松植木鉢	
1839.05.19		きりしまつつち・いわつつち・梅・さく路・紅葉・青木・紫れん	
1841.11.23	茄子種		
1841.12.22	なんばん種		
1842.02.29		紅梅・万両・やぶこうじ・青木・南天・葉らん	
1842.02.30		鉢植え松	
1842.04.23		紅したれ・緋きりしま・ひいらぎ	
1842.05.06	赤けんちん種		
1843.10.15	茄子種・かほちやたね		
1844.02.04		鉢植松	
1844.03.09		大きりしま・紅葉・青海棠・おもと・ゆす・れんけ・橘・しっぽりきりしま・れんけ・うんぜん	
1844.03.12	なんばん種	朝がほのたね	
1844.04.08		鉢植松	
1847.11.14		ゆり	
1847.12.10		ゆり	
1848.03.13		朝顔種	種物
1860.02.02	菜な種・夏大根種		種物類
1860.02.05	茄子種・秋わせ大根種	朝かほ種	
1860.02.07		竹	

表 28 遠山屯・庄七親子の購入した植木関係の品（岩淵 2007a を基に作成）

購入品の中には花卉ばかりでなく、茄子や大根といった蔬菜の種子が少なからず含まれている点に注目したい。購入品はいずれも国許へ送っている。したがってこのリストは、国許の遠山家、



あるいは同僚の屋敷で花卉栽培とともに、蔬菜の栽培が行われていたことを間接的ながら示すものである。

岩淵は遠山親子の園芸への関心の高さから「江戸長屋の庭でもこうした植物を育てていた可能性が高い」ことを指摘した。しかし日記には遠山親子の長屋での栽培・耕作活動を具体的に示す記述はないため、実態は不明である。

和歌山藩の下級藩士である酒井伴四郎の場合をみてみよう。日記を残している江戸での勤番生活は、勤務が臨時だったこともあって勤務よりも余暇の方が多いという状況だった。酒井のこうした勤番生活を岩淵は、勤番武士の生活実態として普遍化することは難しいとするが（岩淵 2007）、ここでは余暇の多い点に注目してとりあげたい。

伴四郎の江戸と国許での生活と家計に関しては島村妙子による分析がある。それによれば、伴四郎が江戸で支出した経費は勤番手当の 6 割程度に過ぎず、江戸勤番となったことによる経済的窮乏化は認められない（島村 1972）。伴四郎にとっての初めての江戸勤番という事情もあるが、日記には江戸名所の見物や稽古事などで外出する例が多く認められる一方で、豊富な余暇を勤番長屋での蔬菜の栽培にあてたような記述はみられない。

しかし国許では、伴四郎は屋敷地内で貸し長屋を営んでいるほか、「庭働き」（畑仕事）を行っている。畑で栽培した作物の種類は明らかでないが、島村によれば作物を売るほどの規模の耕作ではなかったようである（島村前掲）。販売による収益はなかったとしても、生産した蔬菜を自家消費するという点で、家計の一助となることを目的とした耕作と位置づけられよう。

遠山家や酒井伴四郎の例は、国許で蔬菜の耕作をしている藩士であっても、江戸の勤番長屋では必ずしも耕作をしているわけではないということを示している。金井国之助（庄内藩士）の日記（岩淵 2007b）、貝塚清直（秋田藩士）の日記（石山秀和 2010）にも勤番長屋での栽培に関する記述がみられないことから、勤番藩士にとって長屋での耕作（植物栽培類型 B）はそれほど一般化した活動ではなかった可能性も考える必要がある。

これには個々の藩士の在府期間、勤務状況や経済状況などが影響すると思われる。特に江戸での勤番を終えると国許へ帰ることになる勤番藩士にとって、収穫までの作業過程が農事暦によっている耕作は、自身の在府期間に合わせて作業を調整することにも限界があるため、取り組むことが難しかったものと思われる。

その点を検討するためには、歴史学的には尾張藩邸内の明地を耕作地として借りた藩士たちが勤番か定府か、あるいは借地期間がどの程度かといった点の検討とともに<sup>104</sup>、考古学的には、勤番長屋に隣接した耕作遺構（植物栽培類型 B）をより多く検出し検討すること、とりわけ定府藩士が暮らした住まいでの検出が望まれる<sup>105</sup>。

---

<sup>104</sup> 『戸山御邸見聞記』で平野知雄は藩邸内の畑の借用について記している（渋谷葉子 2008）。平野は尾張藩の定府の藩士である。

<sup>105</sup> 東京大学本郷構内遺跡 CRA 地点の SD11006 は、「御居宅前式番」、「御居宅前三番」のほか、在府の「有田庄兵衛」の住まいのいずれかに隣接する。SD11006 周辺では礎石は未検出だったので、地下室や土坑の配列と井戸の位置から検討を進めることが課題である。

### 3. 植物栽培類型 C

#### (1) 植物栽培類型 C の従事者

植物栽培類型 C は、詰人空間の空閑地で行われた栽培・耕作活動で、藩が公認していたことが推測される。当該遺構は江戸郊外の下屋敷・抱屋敷で検出する。

1648 年（慶安元）に、百姓地の貸借が「堅御停止之旨先年」より通達されているにもかかわらず、再度禁止の通達が出されている。中野達哉はこの禁令を、大名屋敷への百姓地の取り込みが 17 世紀前半には多くみられたことの証左とする（中野 1990）。

大名屋敷に取り込まれた百姓地では、引き続き百姓による耕作が行われ、年貢地として扱われる。加賀藩が下屋敷（平尾邸）拝領時（1679 年/延宝 7）に借り受けて抱屋敷とした百姓地を、1683 年（天和 3）に拝領した際に、藩と百姓との間でこれに起因する誤解が生じている（板橋区史編さん調査会 1996）。

加賀藩側の理解は、「先年困込申借地之分不殘今般拝領ニ候へハ、是以後ハ最早年貢代ハ百姓方江遣シ申義無之筈」というものだった<sup>106</sup>。この史料により平尾邸でも拝領当初から屋敷内で栽培・耕作活動が行われていたことと、それを主に担ったのが平尾邸周辺の百姓たちだったことがわかる。

内藤町遺跡（高遠藩下屋敷）では、1 次調査 B 区で検出した耕作地（新宿区内藤町遺跡調査会 1992）を、勤番長屋に隣接していることから植物栽培類型 B とし、1851 年（嘉永 4）の火災後に作成されたと考えられる下屋敷の絵図（伊那市立高遠町図書館蔵・以下「嘉永図」と呼ぶ）にある、「百姓」や「畑」を植物栽培類型 C にあてた。

角筈村（新宿区内）の『享和三年宗門改帳』（1803 年）の記載には、秋元但馬守抱屋敷守<sup>107</sup>として彌右衛門なる人物の名が記されている（新宿区役所 1950）。『享和三年宗門改帳』から彌右衛門が藩邸内で妻・倅・母と暮らしていたことがわかる。こうした例は角筈村ではいくつかみられる。原田佳伸は、角筈村の大名・旗本の抱屋敷で家守や地守を務めるのは、その屋敷の先地主百姓であることを明らかにした（原田 1990）。

高遠藩下屋敷は拝領屋敷であるが、「嘉永図」にも「百姓」家が描かれているということは、この百姓が屋敷守だったかは別として、江戸郊外の大名城敷では百姓の大名城敷内居住が拝領形態の如何に関わらず行われていた可能性が高い。

こうした郊外の下屋敷・抱屋敷の栽培・耕作活動への百姓の関わりについては、原田による岡山藩大崎屋敷を事例とした研究がある（原田 1990、原田 1997）。大崎屋敷では、下大崎村、桐合村、久ヶ原村といった周辺の農村から召し抱えられた百姓のほか、国許岡山の領民百姓も耕作に携わっていた。中でも原田は大崎屋敷と出入関係を結んでいた先地主百姓が、抱屋敷の貢租納

---

<sup>106</sup>加越能文庫『平尾邸拝領一件』。引用は板橋区史編さん調査会 1996 による。

<sup>107</sup> 1803 年（享和 3）の段階では山形藩である。

入代行や、屋敷-村間に生じる問題解決の窓口となるとともに、その見返りとして正月に上屋敷へ年頭御礼に参上するなどの儀礼的特権を与えられていたことを明らかにした（原田 1997）。

江戸郊外の大名屋敷に屋敷守が置かれ、彼らの一部には武家からの扶持方給金が与えられていた背景には、広大な屋敷に藩士が常駐できたとは限らない大名家の事情もあった（原田 1990）。

表 29 は加賀藩下屋敷（平尾邸）の 1811 年（文化 8）の居住者 52 名をまとめたものである<sup>108</sup>。

その内訳は足軽が主体で、小者には畑作小者 2 名を含んでいる。

海野修は下屋敷で暮らす藩士が軽以下の詰人を主体としながらも、台所関係の足軽や軍務に関係する足軽（大組・持方足軽）が居住しないこと、下屋敷に足軽や小者を管理した割場（森下徹 1994）が設置されていないことから、下屋敷に居住していた詰人の主な任務を、「屋敷の維持・管理であった」と位置づけている（海野 1996）。

区分	職	人数	内訳	備考
士	与力	1	定役2人交替。	
足軽	定番足軽	27	小頭2人。5人留書・木作兼帯。	定府
	境廻番人足軽	9	1ヶ所3人	
	横目足軽	2		
	手木足軽	9	小頭1人。組横目1人。	定府
小者	畑作小者	2		定府
	小遣小者	2		

表 29 加賀藩下屋敷（平尾邸）居住の加賀藩士（1811 年/文化 8）

しかし大名屋敷内の栽培・耕作活動としては、定番足軽のうち 5 名が兼帯した木作足軽や畑作小者といった職に注目したい。彼らはいずれも定府であり、足軽同士あるいは板橋周辺の町人・百姓と婚姻関係を結んでいた（海野前掲）。

木作足軽の栽培への関与の一例を史料 7-10 でみてみよう。

史料 7-10<sup>109</sup>

「亜墨利加渡来之アッフル、木作足軽へ御渡植付被仰付候所出来仕候ニ付、上之申候所御奥ニ而〇程之餅之上へアッフルをぬりて食候様」

このリングはペリー来航の際にもたらされたリングが株分けされたものである。加賀藩ではリングの栽培を下屋敷の木作足軽が担当した。広大な下屋敷に広がる畑での耕作は、出入百姓の労

<sup>108</sup> 『北藩秘鑑』。『板橋区史 資料編 3』（板橋区史編さん調査会 1998）による。

<sup>109</sup> 『御参勤御供中日記』（小川家文書）1855 年（安政 2）11 月 24 日条。史料は吉田政博 2010 による

働力が必要だったと思われるが、藩主の御用となる植物や蔬菜の栽培・耕作には木作足軽が関わっていたことが具体的にうかがえる。ここから木作足軽の技術職的性格がみえてくる。

彼らは国許からの勤番が多い加賀藩江戸屋敷の中であって、少数の江戸定府家臣だった。海野が明らかにしたように同僚や近隣町人・百姓との婚姻関係を結びながら、下屋敷に定府という形で定着する家筋として特定されていく。海野が指摘するように下屋敷の藩士たちの職務は「屋敷の維持・管理」を中心としたものだったとはいえ、植物栽培や耕作に関する専門的な知識や技術で下屋敷での栽培・耕作活動に関わっていた点を評価したい。

## (2) 植物栽培類型 C と栽培・耕作活動

植物栽培類型 C の栽培・耕作活動によって生産された作物を具体的に示す史料は少ない。史料 7-10 で加賀藩下屋敷でのリンゴ栽培をあげたが、これは由来からして特殊な例である。家斉の本郷邸への通抜(1828年/文政11)や、会津藩主松平容敬らへの饗応(1850年/嘉永3)では、下屋敷で生産された加賀野菜<sup>110</sup>が供されている。19世紀には加賀野菜も栽培されていたようである(吉田正博 2010)。

岡山藩大崎屋敷では麦、茄子、大根、里芋などが生産され、江戸の各藩邸へ供給されたほか、余った分は販売して利益もあがっていた(原田 1997)。

朝鮮人参の国産化が成功したのは1729年(享保14)のことで、幕府はこれを「御種人参」として尾張藩、紀州藩、仙台藩、会津藩、福井藩、加賀藩などへ渡して栽培を行わせた。そのうち栽培に成功したのは会津、出雲、信州の3ヶ所だった(岩下哲典 1995)。特に松江藩では1816年(文化13)頃から生産額が増加し、1838年(天保9)頃までに20,000両に上る藩の負債を皆済するばかりか、汽船や大砲購入の費用にもあてた(上野富太郎・野津静一郎 1941)。この松江藩による人参栽培は1760年(宝暦10)に江戸藩邸で始められている(島根県 1968)。依拠する史料が詳らかでなく江戸のどの屋敷で栽培していたかは不明だが、藩が導入を試みる作物の試験栽培が江戸の大名屋敷で行われていたことがうかがえる<sup>111</sup>。

会津藩では国許で薬として販売している蜂蜜の品質低下を解消するために、1797年(寛政9)に自藩での養蜂を試みる(史料 7-11)。

### 史料 7-11<sup>112</sup>

「加藤作内様御在所伊予大洲へ蜜蜂夥敷有之、軽々之者ハ面々養置、家業之営ニも致候由ニ相聞候、然処近頃会津薬店に而売候蜂蜜甚不宜を以、医師村本玄碩義先年江戸表ニ罷在候節、

<sup>110</sup> 加賀野菜とは1945年(昭和20)以前から今日まで金沢市周辺で栽培されている伝統野菜のことであるが、ここでは現在の加賀野菜にもみられる品種を含んでいることから「加賀野菜」という言葉を用いた。

<sup>111</sup> 松江藩邸は下屋敷を千駄ヶ谷五丁目遺跡として、抱屋敷を初台遺跡として調査しているが、耕作に関連する遺構は未検出である。

<sup>112</sup> 『家世実紀巻之二百五十三』。史料は家世実紀刊本編纂委員会1988による。

問屋元へ寄々聞合候得ハ、蜜之儀世上多くハ造り物ニ而、正真之品ハ無之由及承、寛政五年ニ存寄申出候ハ、作内様御在所ニ而ハ此品沢山ニ出、近頃公儀ニ而も御世話有之、既ニ松平越中守様ニ而も蜂種子御賞被成、御下屋敷ニ而御養被成、宜敷蜂蜜出来候由ニ付、滞府中薄々承合候処、寒国ニ而も手当之致方ニ寄随分被養候趣ニ相聞、三田御屋敷ニ而養候ハ、可然と吉岡昌珉見込有之由内談仕候間、(略)」

この例は大名屋敷内の畑での栽培・耕作活動とは直接結びつかないが、植物栽培類型 C の栽培・耕作活動のあり方に関する注目すべき記述がいくつかみられる。まず第一に、会津藩では国許で養蜂を始めるにあたり、「三田御屋敷」(下屋敷) で試験的に養蜂を行ったという点である。第二に当時すでに松平越中守(松平定信)の下屋敷においては、養蜂が行われていたという点である。第三に会津藩が養蜂に関するノウハウを問い合わせたのが、養蜂で知られた大洲藩ではなく、白河藩だったという点である。

特に第三の点は、領国が隣接する白河藩に尋ねれば、気候風土の面からも養蜂に関する助言を得られるという判断が働いたと思われ、会津藩の養蜂の事業化への意気込みが感じられる。史料には未引用部も含めて「寒国ニ而も手当之致方」という一文が二ヶ所出ており、下屋敷での養蜂<sup>113</sup>は、領国での生産化を視野に入れた試みだったことがうかがえる。

水戸藩では 1835 年(天保 6)に国許の緑岡の地(御殿山)で茶園を創設する。その前年に駒込の下屋敷(東京大学本郷構内遺跡内)において宇治出身の浪人・小川佐助に茶の試験栽培(「一年駒込屋敷中に有之候茶を申付試候處上々喜撰よりして摺茶迄も出来」<sup>114</sup>)を行わせている。なお緑岡の茶園では 1840 年(天保 11)から製茶の余業として菓用の養蜂を始めており、こちらも小川佐助が飼育の担当となっている。水戸藩での養蜂に関して江戸の大名屋敷が試験の場となったかは不明である<sup>115</sup>。

以上のことから、植物栽培類型 C の栽培・耕作活動で生産した作物には次のような特徴をあげることができる。

- (ア) 江戸の各藩邸へ供給する作物。
- (イ) 藩主に供される作物(藩主が食す・将軍や大名への土産とする)。
- (ウ) 国許での導入を目指す商品作物の試験栽培。

(ア) は下屋敷・抱屋敷が出現した当初から栽培されていたと考えられるので、17 世紀前半には始まっている。

---

<sup>113</sup> 会津藩下屋敷での養蜂は、当初割場と材木蔵の両所で飼育を始めたようであるが、その後飼育場所を増設していることから成功したものと思われる。

<sup>114</sup> 『水戸藩史料 別記下』(編著者不明 1915) より。

<sup>115</sup> 1798 年(寛政 10) 11 月に加賀藩主前田治脩は水戸徳川家から蜜蜂箱を贈られており、その際、水戸藩の「蜜方御役人」が加賀藩の御露地奉行へ蜜蜂の飼育法を伝えている(『加賀藩史料』)。このことから水戸藩での養蜂は少なくとも寛政期まで遡ると考えられる。

(イ) のあり方は多様だが、藩の特産品として尾張藩下屋敷の「田地牛蒡」や、加賀藩下屋敷の加賀野菜が史料に現れるのは概ね 19 世紀代のことである。

(ウ) の早い例は松江藩邸での朝鮮人参の栽培例で、1760 年（宝暦 10）のことである（島根県 1968）。ただし朝鮮人参の栽培は前述のように幕府が主導したという面が強く、各藩独自の試験栽培的な生産活動がみられるようになるのは 19 世紀前半以降のことである。

江戸近郊農村の耕作地が、下屋敷・抱屋敷として大名屋敷に取り込まれた 17 世紀前半には既に、栽培・耕作活動が行われていた。しかし加賀藩下屋敷の加賀野菜や、尾張藩下屋敷の「田地牛蒡」など、大名屋敷での生産物が特産品となる事例や、国許での農業振興のための試験栽培などがみられるようになるのは 19 世紀になってからである。このことは 17 世紀前半から行われていた大名屋敷での栽培・耕作活動が、19 世紀になって性格に変化を来したことを示していると考えられる。その要因の一つとして、財政上の逼塞などから各藩で取り組まれた藩政改革（吉永昭 1977 ほか）があげられる。

植物栽培類型 C の栽培・耕作活動では、岡山藩大崎屋敷のように余剰生産物を販売して利益としていた例もあるが（原田前掲）、概して生産量や余剰生産物の販売による利益などは不明である。そのため植物栽培類型 C の栽培・耕作活動が生業としての農業に匹敵するような生産と位置づけられるかという点については、今後の検討課題である。

## 第2項 大名屋敷の生産活動の多様性

### 1. 府内の大名屋敷の生産活動

大名屋敷跡遺跡の発掘調査によって、大名屋敷内では栽培・耕作以外にも多様な生産活動が行われていたことが明らかとなった。本論文では大名屋敷跡遺跡の金属加工に関連する遺構と遺物を取りあげ、金属加工遺構・遺物 A 類（府内の大名屋敷の詰人空間にみられる小規模な金属加工の痕跡）と、金属加工遺構・遺物 B 類（郊外の大名屋敷の詰人空間にみられる大規模な金属加工の痕跡）の二つに類型化した。

金属加工遺構・遺物 A 類は詰人空間内の遺構・遺物だが、その場所は長屋が配置される居住地区とは異なる傾向が認められる。このことから本論文では金属加工遺構・遺物 A 類を、詰人空間で行われた種々の役務の一つとして行われた生産活動に位置づけた。

勤番長屋での生産活動として想起されるのは、武士による内職である。武家屋敷では内職として各種の生産活動が行われていたことが知られている（新見由治 1951）。そのあり方は新見が分析対象とした尾張藩士久野吉兵衛（切米 6 石 2 人分）のように、「小規模の間屋的経営」の規模まで拡大する場合であっても、基本的には藩士と間屋との直接的な関係を基にしたものだった。

岩淵による勤番武士の外出時の行動の分析は、藩士の外出先は藩邸から 2 km 内外という近距離の場所が多いことを明らかにした。藩邸に隣接する社会との関係については、「経済的な関係にとどまり、彼らは外部社会と接点を持ちつつも、人的な、あるいは文化的な側面では邸内の国元出身者」の枠内に留まっていたのである（岩淵 2010）。そうした勤番武士の社会関係では吉田伸之が指摘しているように、藩邸出入層が御殿空間と詰人空間で異なっていたとしても（吉田 1995）、個々の長屋で間屋と直接的な関係を構築することは難しかったと思われる。

大名屋敷跡遺跡の長屋では、内職に伴う生産活動を示す遺構や遺物は現在までのところみられない。それは内職として行われる生産活動の規模が小さい（新見前掲）ということもあるが、それ以上に内職という労働形態が、勤番武士の大名屋敷の外部社会との関係に馴染まなかったことも背景としてあったものと思われる。

ただし岩淵が指摘したように、詰人空間に暮らす藩士たちの中でも江戸定詰の藩士たちは、江戸の町人社会と関係を持っていた（岩淵 2009）。江戸定府の藩士ならば、大名屋敷内で内職を行っていた可能性もある。定府藩士の住まいを考古学的に調査した事例は未だなく、歴史学・考古学の両分野において今後の課題である。

### 2. 江戸郊外の大名屋敷での生産活動

#### (1) 味噌醸造

仙台坂遺跡（仙台藩下屋敷）で検出した竈遺構群（品川区遺跡調査会 1988）は、『品川白金目黒之絵図』（1855 年/安政 2 板行）の「仙ダイミソヤシキ」という註記に対応する、仙台藩邸での味噌醸造に関連する遺構である。遺構の構築年代は不明ながら、調査地点の遺物組成が 17 世

紀代と 18 世紀代以降とで様相を異にしていることから、味噌生産が始まったのはこの屋敷に隠居した伊達綱宗が死去した 1711 年（正徳元）以降の可能性が高い<sup>116</sup>。

『司属部分録』にある仙台藩の職制では、「出入司」の配下として「品川御屋敷役（御塩噌方兼役）」、「品川御屋敷御塩噌添役」という役職がおかれている。斎藤鋭雄は『司属部分録』の成立年代を宝永年間（1704-1710 年）とし、1747 年（延享 4）に補足が行われたと位置づける（斎藤 1992）。斎藤の年代観に従えば、18 世紀初頭には品川の下屋敷で味噌の醸造が行われたことになる。仙台坂遺跡出土遺物の様相、屋敷の居住者（伊達綱宗の死去）、藩の職制の整備がいずれも 18 世紀初頭を示していることから、品川屋敷での味噌生産はこの時期に開始されたとみてよいだろう。

藩邸の味噌醸造は「品川御屋敷役（御塩噌方兼役）」、「品川御屋敷御塩噌添役」が職掌していたが、実作業に携わっていた労働者については不明である。味噌醸造は雑菌が繁殖しにくい冬季を中心に行われる。麴ができれば、樽に詰めて完成まで熟成させるので、恒常的な労働力はそれほど要さず、百姓の農閑期の余業として労働力が期待できる。この労働力を供給したのが、藩邸周辺の農村なのか、国許なのかは不明である。仕込みの時期は共同生活が営まれた可能性もあるが、こうした点も史料にはみられない。

味噌は江戸時代には全国的に普及していた醸造調味料だった。自家醸造を行うことも多かったようだが、藩邸内で醸造に関連する遺構を検出しているのは仙台藩下屋敷のみである。江戸では 1625 年（寛永 2）に定められた問屋扱商品の中に味噌も含まれており、17 世紀前葉には味噌を買うことが普及していたと思われる。『吹塵録』によれば 1726 年（享保 11）の江戸へ廻漕された物品として、味噌が 2,828 樽計上されている（勝海舟全集刊行会 1977）。ここには「このうち武家荷物問屋に預からざるものは、その員数知るべからず」とあるので、実数は更に多かったと考えるとよいだろう。

大名屋敷での味噌の需要と供給については詳しいことは不明だが、加賀藩では国許の大野・宮腰で醸造された味噌が江戸に送られている（全国味噌工業協会 1968）。佐倉藩では「江戸御前味噌割合」に関する史料の存在から、藩主用の味噌は国許で醸造されていたことがうかがえる（全国味噌工業協会前掲）。このように大名屋敷における味噌の需要は、多くの藩邸で国許からの取り寄せや江戸に集積した味噌の購入で対応していたものと思われる。

醸造業は恒常的な労働力はあまり必要としないが、桶や搾機といった設備、それらを用いた作業場や蔵などの施設が必要となる。さらに商品として出荷するためには発酵過程が必須なため、多額な資金投資も必要な産業である（谷本雅之 2005）。仙台藩の味噌醸造は、仙台藩が領していた龍ヶ崎の大豆生産地が有利な条件として働いたという指摘が仙台坂遺跡でなされている（品川

---

<sup>116</sup> 伊達伯爵家から味噌生産を引き継いだ八木合名会社仙台味噌醸造所によれば、藩邸での味噌の醸造は寛永年間から始まるという（八木合名会社 1914 以降）。宮城県味噌醤油工業協同組合は江戸藩邸の「御塩噌蔵」の味噌が市中へ流通したのは二代藩主忠宗（在位：1636 年/寛永 13-1658 年/万治元）の頃であるとする（宮城県味噌醤油工業協同組合 1959）。どちらも依拠する史料は不明である。



区遺跡調査会前掲)。仙台藩領としての龍ヶ崎は、国許と江戸の廻米輸送路の中継地として位置づけられているが、藩が積極的に大豆を生産した状況はみられない（龍ヶ崎市史編さん委員会 1990）。また龍ヶ崎足軽は江戸定詰足軽の補助作業のために江戸での勤務が義務づけられていたが、それ以外の領民の江戸屋敷への出仕なども認められない（龍ヶ崎市史編さん委員会前掲）。

仙台藩下屋敷では醸造した味噌を市中で販売していたことから、そこからある程度の利益が得られたものと思われるが、藩邸での味噌醸造の経費や利益に関する研究は行われていないのが現状である。

## (2) 金属加工

江戸郊外の大名屋敷跡遺跡では、初台遺跡（松江藩抱屋敷・初台遺跡調査団 1993）や東京大学白金構内遺跡（大村藩抱屋敷・大成可乃 2004）で金属加工に関連する遺物が出土している（金属加工遺構・遺物 B 類）。しかし遺構が未検出のため、生産活動の具体的なあり方については不明である。

郊外の大名屋敷での金属加工を伴う大規模な生産活動の一端が明らかになっている例が、加賀藩下屋敷（平尾邸）における大砲の鋳造である。

平尾邸では 1853 年（嘉永 6）10 月に下屋敷にて大砲の鋳造を行うことが決定した（史料 7-12）。

### 史料 7-12<sup>117</sup>

「一、御発駕前於此表大筒可被仰付、出来方等之儀可致詮議旨、三浦八郎左衛門此表へ発足前被仰含遣候に付、八郎左衛門到着後詮議取掛罷在候内、篠原監物殿心付被申上候は、此表に而大筒鋳造之御詮議有之様子に候得共、此表之儀粗承り候処、於此表被仰付候而は、逆も職人粗鹵にて御用立候御道具には相成不申、就而は此表於御屋敷、大橋等手合之内巧者成者一人に、鋳物師二人程御呼寄に而被仰付候得ば、全御道具出来申儀、其上御下屋敷には水車も有之、錘通候とも指支無之旨申上。仍而又兵衛殿へも被仰出、右之通被仰付候而、公辺向等指障り之儀も無之哉、逐詮議候様被仰出、聞番へも詮議有之候処、諸家様にも御屋敷内に而被仰付方も有之、指支之儀は無之旨申聞候間、弥可被仰付哉之旨又兵衛殿被申聞、其段相伺候処、可被仰付旨被仰出、左之通被仰出。

御家老江

近海防禦之御手当方之儀公辺より追々御手厚之被仰出も有之に付、於此表大筒鋳造可被仰付旨被仰出候条、年寄中江も被示合、鋳造方詮議有之、被相伺候様被仰出候。

十月」

平尾邸での大砲の生産では、それに先だって生産手段となる機械（「御用立候御道具」）の生産<sup>118</sup>が始められた。史料 7-12 にあるように当初その生産に失敗した結果、国許で既に鋳砲の経験を持つ者を江戸へ呼び寄せている。

<sup>117</sup> 『加賀藩史料 幕末編上巻』（前田育徳会 1958）による。ただし下線部は筆者による。

その具体的な職種と人数を、『都鄙之嵐』<sup>119</sup>を基にまとめたのが表 30 である。

職	名	備考
	小川権之助	
御台所奉行	岡田喜内	
御医者蘭学	黒川良安	
村井又兵衛手医者	明石昭斎	
割場附足軽	大和屋左衛門	
御用間鑄物師	増田金太郎	
火矢方新番	小川友左衛門	●
火矢方御雇御細工人	友山乙三郎	●
火矢方御雇大工	佐吉	●
鑄物師	四郎兵衛	●
鑄物師	多吉	●
鑄物師	直次郎	●
鑄物師	虎之助	●
割場附足軽小頭	五十嵐作之丞	
割場附小者	与三郎	
御横目足軽	吉崎新六	
大工手伝割場附小者	2人	
鍛冶手伝割場附小者	1人	
鑄物師手伝割場附小者	1人	

表 30 加賀藩下屋敷での鑄砲作業の組織

表中、備考の●を付した者が大筒鑄造方に就任するために金沢から呼び寄せた者である。これによって下屋敷では 1860 年（万延元）までに 20 基の大砲の鑄造に成功する。

1811 年（文化 8）の下屋敷の居住者の職種と人数を表 29 であげた。この時の居住者は「屋敷の維持・管理」にあたる者が中心（海野 1996）で、特に木作足軽や畑作小者などの存在は、藩邸での栽培・耕作活動に結び付いたものだった。鑄砲作業の開始に伴って下屋敷に居住することになった表 30 にあげた人々は、それまで下屋敷に居住していた藩士たちとは異なる職域に属している。ここに加賀藩下屋敷は従来の栽培・耕作活動とは異なる生産活動を始めたとみることができる。

この生産活動はペリーの来航や開国に代表される対外的危機への対応を起点とするものである。幕府の外国船への対処（対外令）は 1791 年（寛政 2）以来既に行われているが、それは領内に海浜を持つ大名への命令だった（加藤祐三 1994）。ペリー来航以降の対外的危機は全ての大

<sup>118</sup> 「御下屋敷には水車も有之、錐通候とも指支無之」は邸内を流れる石神井川を動力としたものである。近代工業において、水車は重要な工動力源であった（桶谷繁雄 1965）。関口水道町に設けられた幕府の大砲製造所でもみることができる。

<sup>119</sup> 『加賀藩史料 幕末編上巻』（前田育徳会 1958）による。

名に課せられたものであり、それぞれの藩の置かれた条件などでこの危機を克服する改革の内容は異なっている（吉永昭 1977 ほか）。その中で特に西南諸藩を中心として、軍事力強化に直結した藩営工業（以下、幕府によるものと合わせて幕藩営軍事工業と呼ぶ）が発展した（石塚裕道 1971a）。

幕藩営軍事工業のうち諸藩が行う生産活動は、基本的に各藩の城下町で発展した（石塚前掲、石塚 1971b）。明治時代になると東京・大阪への工業の集中化がみられるが、これは近代の中央集権化によってもたらされたものと理解されている（小林正彬 1966）。しかし史料 7-12 が示すように、幕藩営軍事工業の一端は江戸の大名屋敷でも展開していたのである。ここでは加賀藩下屋敷で行われた、加賀藩の幕藩営軍事工業の一端をみた。しかし加賀藩以外の大名屋敷でも鋳砲作業が行われていたことが、史料 7-12 の下線部の記述からうかがえる。

加賀藩では国許での幕藩営軍事工業の方が先に展開しており、それが洋式軍学校である壮猶館の成立（1854 年/安政元）へと繋がっていく（蔵原清人 2000）。多くの藩で国許の藩営軍事工業が、藩校での人材育成から幕末期の藩政改革へと展開するが、そうした国許でのあり方とは異なる、幕藩営軍事工業が江戸の大名屋敷で展開していた可能性が高い。

楫西光速が指摘するように、幕藩営軍事工業は明治政府の殖産興業政策を押し進める基盤となった（楫西 1965）。大名屋敷跡遺跡では幕末の幕藩営軍事工業に関連する遺物や遺構に関連する調査例はまだないが、明治時代になると加賀藩下屋敷が東京火薬製造所（東京陸軍第二陸軍造兵廠）、水戸藩上屋敷が東京砲兵工廠になっており、東京の近代工業の受容と発展を考える上でも、大名屋敷における幕藩営軍事工業に関する考古学的な知見の蓄積が求められる。

## 第4節 大名屋敷跡遺跡の様相の変遷

### 1. 大名屋敷跡遺跡の諸類型

本論文が分析対象とした大名屋敷の様相は、大名屋敷内での活動と大名屋敷の景観という二つの側面から捉えたものである。個別の歴史の変遷は本章第1節から第3節でみたとおりである。ここでは大名屋敷のあり方として特に重要な様相として、御殿空間での宴会と詰人空間の生産活動、大名屋敷の景観に注目すると、大名屋敷のあり方は8類型にわけることができる<sup>120</sup> (表31上)。

類型	御殿空間の活動	詰人空間の活動				景観				遺跡例
	饗応	栽培・耕作	金属加工	軍事工業的生産	塀・柵	下水溝・堀	堀	権威的堀	表長屋	* ( )は未調査の大名屋敷
1	×			×	●	×	×		×	八重洲北・丸の内三
2	●			×	●	×	×		×	東大本郷籠岡別
3	●			×	×	●	×		●	八重洲北・尾張藩上・汐留
4	●			×	×	×	×	●	○	東大石川橋内
5	○	○			○	×	●			尾張藩下・(加賀藩下)
6	×	●		×	×	×	●		×	千駄ヶ谷五丁目・新宿六丁目
7	×	?	●	×	×	×	●			初台・仙台坂
8	×	○		○	○	×	×		×	(加賀藩下)

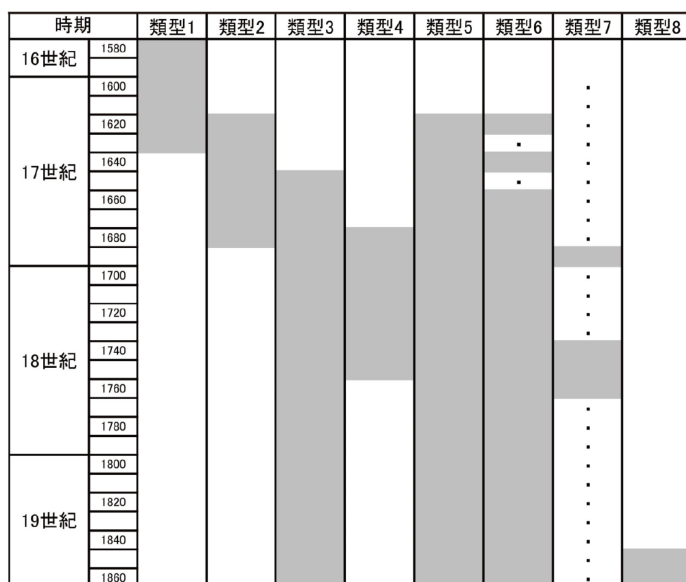


表 31 大名屋敷跡遺跡の様相と類型 (上) 大名屋敷の類型と変化 (下)

類型1: 宴会に関連する遺物は出土しないことから、饗応はない。屋敷の周囲は簡易な塀や柵、あるいは生垣で囲まれている。最初期の大名屋敷跡遺跡に認められる。

類型2: 宴会に関連する遺物が出土することから、饗応がある。屋敷の周囲は塀・柵で囲まれており、長屋塀型表長屋は構築されていない。大名屋敷跡遺跡によっては外郭部を長屋型表長屋、ゴミの埋土処分地などとして利用するものもある。

類型3: 宴会に関連する遺物が出土することから、饗応がある。屋敷境は下水溝となり、その護岸を利用して構築された長屋塀型表長屋が屋敷の周囲を囲む。

<sup>120</sup> 基本的には考古学的調査が行われた事例に基づいて (表中の黒い○印) 類型化を行うが、調査事例が未だ少数にとどまる下屋敷や抱屋敷に関しては史料や絵図での情報を加えている (表中の白抜き○印)。

類型4：将軍家の別邸として使用された大名屋敷跡遺跡。現在、小石川御殿（東京大学白山構内遺跡、白山四丁目遺跡）の調査例のみのため詳細は不明。

類型5：宴会に関連する遺物が出土することから、饗応がある。大名屋敷内では比較的大規模な栽培・耕作活動（植物栽培類型C）が行われる。屋敷境は空堀が多く、長屋塀型表長屋はない。郊外の大名屋敷屋敷跡遺跡に認められる。

類型6：宴会に関連する遺物は出土しないことから、饗応はない。大名屋敷内では比較的大規模な栽培・耕作活動（植物栽培類型C）が行われる。屋敷境の状況は考古学的には不明である。郊外の大名屋敷屋敷跡遺跡に認められる。

類型7：郊外の大規模な金属加工（金属加工遺構・遺物B類）が行われている大名屋敷跡遺跡。調査例が少ないため詳細は不明だが、対象となる生産活動は醸造などにも拡大する可能性がある。

類型8：大名屋敷内で幕藩営軍事工業に伴う生産が行われた大名屋敷。現在まで大名屋敷跡遺跡としての発掘調査例はない。

## 2. 大名屋敷の変遷と歴史的位置づけ

### (1) 1590年代-1620年代の大名屋敷

家康の江戸入府（1590年/天正18）から1620年代までにみられる様相である。この時期の大名屋敷は、当初は家康の家臣団への知行割に伴うものであり、次いで江戸へ出府あるいは証人を送り、家康への恭順の褒美として賜邸されたものだった。下屋敷や抱屋敷のように大名が複数の屋敷を所持する状況はみられない。

遺物組成には大名間での饗応・武家儀礼に伴う宴会に関連する陶磁器・土器はみられない。大名の拠点はいまだ京・大坂といった上方にあり、そのことが宴会に関連する遺物を伴わない組成に反映している。

最初期の大名屋敷の分布は史料が乏しく、発掘調査例も少数に留まっているため不明な点が多い。大名家の屋敷拝領時の伝聞では、江戸の要衝上で出城的な役割を担っていたことを示唆するものもある。しかし考古学からみた該期の大名屋敷の景観は、屋敷境に塀や柵、あるいは生垣が設けられたものであり、江戸城の出城的な役割を担うような防禦性の高いものはない。

この時期の都市基盤の整備状況は詳らかでないが、都市の公共的システムやインフラは十分に整備されていない段階で、ゴミ処理や下水処理は個々の屋敷で行っていた。屋敷の外郭部や屋敷内の空閑地に構築された廃棄遺構、屋敷内の開析谷へ接続していたと考えられる溝状遺構のあり方がそれを示唆している（類型1の大名屋敷跡遺跡）。

### (2) 1630年代-18世紀後半の大名屋敷

大名妻子江戸居住制と参勤交代制によって、江戸の大名屋敷が諸大名の拠点となった時期である。江戸郊外の農村部に下屋敷や抱屋敷を持つ例は1620年代から認められるが、本格化するのは1657年（明暦3）の大火以後のことである（宮崎1992）。

諸大名の拠点が江戸の大名屋敷へ移ったことから、大名屋敷の御殿空間では将軍、諸大名などの饗応が重要な活動として始まる。また大名妻子が江戸で暮らすことで、大名一族の武家儀礼も江戸で行われることになり、それに伴う宴会も催されることになる。

大名屋敷の御殿の構造が、国許の居城の御殿とは異なるものになるのもこの時期である。佐藤巧による仙台藩の御殿の機能と構造に関する研究では、国許の御殿が「君臣関係を軸とした縦の関係」、江戸の御殿が「上使をはじめ諸大名、旗本、諸寺院、諸家の使者等の接見、そしてその饗応といういわば横の関係」という異なる原理に基づく展開が指摘されている（佐藤 1979）。

そうした状況を反映し、本段階から大名屋敷跡遺跡でも宴会に関連する遺物組成が認められるようになる（類型 2・3・4 の大名屋敷跡遺跡）。宴会に関連する遺物の様相は時期によって変化するが、遺物そのものは幕末まで途切れることなく出土する点で、饗応は重要な活動であり続いていたことがわかる。

詰人空間でも宴会に関連する遺物の出土は 17 世紀代から認められる。ただし出土例は上級家臣の勤番長屋に限られている。史料 7-8 から藩士たちの間で広く宴会が行われていたことがうかがえるが、詰人空間の発掘調査の成果から「場」としては上級藩士の勤番長屋に限られていたことがわかる。また正月や節句の際に藩主から下賜された食事は御殿空間内で摂っていた（史料 7-9）。

御殿空間での饗応活動は上屋敷のみで行われていたわけではない。東京大学本郷構内遺跡中診地点のカワラケ一括廃棄遺構は、1629 年（寛永 6）に加賀藩下屋敷で行われた御成に伴うものである。1657 年（明暦 3）の大火以降、避災施設として江戸の郊外に増加した下屋敷・抱屋敷は、広大な敷地が大名庭園として整備されていく。尾張徳川家下屋敷跡遺跡（尾張藩下屋敷）や加賀藩下屋敷は将軍や大名を迎えた饗応の場であるとともに、詰人空間では栽培・耕作活動を行っている（類型 5 の大名屋敷跡遺跡）。

府内の大名屋敷では景観上大きな画期が生じた。1620 年代から 30 年代にかけて屋敷境に石組の溝や堀が出現し、都市の下水溝を兼ねるようになったのである。塀・柵で囲われ、それぞれ単独で存在していた大名屋敷は、この段階から下水網という都市公共施設を紐帯として、都市社会に組み込まれたのである。

また下水溝の護岸として石垣が構築されたことから、これを利用して藩邸の外周を巡る長屋塀が配置されるようになる。大名屋敷の周囲に長屋塀型表長屋が巡るという大名屋敷の景観はこの時期に完成した（類型 3 の大名屋敷跡遺跡）。

ただしこの景観は江戸の大名屋敷に斉一的に出現したものではない。大名小路周辺の大名屋敷では 1620 年代から 30 年代に塀・柵による屋敷境（類型 2 の大名屋敷跡遺跡）から、表長屋を伴う石組溝（下水溝）による屋敷境（類型 3 の大名屋敷跡遺跡）へと変化している。しかし加賀藩本郷邸では塀・柵で囲まれた屋敷（類型 2 の大名屋敷跡遺跡）から、長屋塀型表長屋を伴う屋敷（類型 3 の大名屋敷跡遺跡）への移行が、1682 年（天和 2）の火災以後であることが層位的変遷で明らかである。江戸城に隣接する大名屋敷が早く、本郷や市谷といった江戸城から 3

km-4 kmの距離にある地域の大名屋敷がそれに後続するという状況は、江戸の都市開発、とりわけ下水網の整備に関係したものと考えられる。

1620年代から80年代までの府内の大名屋敷の景観は、堀・柵で囲まれた屋敷（類型2の大名屋敷跡遺跡）と、長屋塀型表長屋が周囲を巡った屋敷（類型3の大名屋敷跡遺跡）が併存するものだった。

長屋塀型表長屋の出現は、それまでのような藩邸外郭部のゴミ廃棄場としての利用を不可能なものにしたが、ゴミ処理の制度も下水処理と同時期に整備され、17世紀中葉までには江東地区への埋め立て処分が始まった（伊藤前掲）。長屋塀型表長屋の出現は大名屋敷の居住者増と、それに伴うゴミ排出量の増加をもたらしたが、新たに制度化された深川沖での埋め立てというゴミの処分方法はそれに対応したものと思われる。ただし大名屋敷跡遺跡ではこの時期以降にも廃棄土坑を検出しているので、全てのゴミが定められた制度にしたがって処分されたわけではなかったことがわかる。

1620年代から30年代に生じる大名屋敷の変化は、都市の拡大に伴う都市基盤の整備と、大名屋敷の役割の変化（大名の本拠地化）とが、相互に関係しながらもたらされたものであるといえる。

この段階の大名屋敷跡遺跡には、屋敷境に防禦性を有する堀を伴う大名屋敷が認められる（類型4の大名屋敷跡遺跡）。防禦性があるとはいえ、その規模は近世城郭のような防禦性を期待するには狭小である。現在までのところ調査例は小石川御殿（東京大学白山構内遺跡・白山四丁目遺跡）のみだが、堀の存続期間の下限が小石川御殿の廃絶時期であることから、実践的な防禦性と捉えるよりは、幕府の権威の象徴と捉えておきたい。浜御殿の表門が枡形をなしていることを併せて考えると、類型4の大名屋敷跡遺跡は幕府の御殿（将軍の別邸）に伴う類型である可能性が高い。調査事例の増加を待つて改めて検討したい。

郊外にある下屋敷の景観は堀を伴うことが多い。堆積状況から空堀であり、府内の堀とは異なる機能が予想される。大村藩の下屋敷普請に関する史料3-2から、堀と土居の構築が大家側の意図によるものではなく、幕府からの指示によるものだったことがうかがえるが、その構築意図は現段階では不明である。

郊外の下屋敷・抱屋敷は農村の耕作地を拝領・取得したものであることから、当初から耕作（植物栽培類型C）が行われていた（類型6の大名屋敷跡遺跡）。作業に従事するのは屋敷守として屋敷内に世帯で暮らす百姓のほか、国許から受け入れた百姓など多様だった。

また郊外の名古屋敷の中には松江藩抱屋敷（初台遺跡）の大規模な鍛冶、仙台藩下屋敷（仙台坂遺跡）の味噌醸造のように、大規模な生産活動を行っていた大名屋敷もある（類型7の大名屋敷跡遺跡）。これらは歴史的な史料や考古学的な資料が少ないため未解明な部分が多いが、初台遺跡の調査例から17世紀代には金属加工に関連した生産活動は行われていたようである。

醸造や鍛冶といった生産活動に携わった人々と大名屋敷との関わりは、栽培・耕作活動の従事者と大名屋敷との関係以上に不明である。業種・業態によっては藩邸近隣の百姓による農業余業として携わることが不可能なものもあり、その労働力の確保や供給、生産品から生じる経済的利

益と藩財政との関わりなど、従来の大名屋敷研究では等閑に付されていた大名屋敷での経済活動に関して取り組むべき課題は多い。

### (3) 18世紀末-19世紀中葉の大名屋敷

18世紀末から大名屋敷の饗応に関連する遺物組成には再び大皿が含まれるようになる。17世紀半ばの大皿には大藩の御殿空間を中心とする出土傾向が認められたが、該期の大皿は御殿空間だけでなく、詰人空間でも出土するようになる。この時期になると詰人空間での宴会が、より広い階層に広がっていたことを示すものである。18世紀末から生じる藩士たちの食生活の変化が、遺物のあり方にも反映しているといえる。一方、御殿空間においては依然として規式に則った饗応が行われている。こうした宴会では供膳具の一部に陶磁器や漆器が加わるものの、主体的に用いられたのはカワラケだった。

府内の大名屋敷の下水溝を兼ねる屋敷境には石組溝と堀とがある。そのうち山手台地側の堀は18世紀後半から末までに石組溝に造り替えられて消滅する。その理由は不明ながら、『御府内備考』に「大下水」から幅を狭めて下水道を地化へ埋め立てた記述が見られることから、都市基盤の再整備という点にも注目する必要がある。

郊外の大名屋敷では17世紀前半から既に栽培・耕作活動（植物栽培類型C）が行われていたが、19世紀になると茶や養蜂などの商品化を目指す農業試験場的な役割を担う例が認められるようになる。また下屋敷で生産された野菜が、将軍や大名への土産として供されるなど、特産品として認識されていたことをうかがわせる状況がみられるようになるのもこの時期である。

各藩とも享保から寛政期（1716-1800年）にかけて、深刻化した藩財政の危機を克服するための藩政改革が行われる（吉永 1977-1981）。藩政改革の内容は藩の状況によって異なるが、殖産興業政策は共通して認められる。18世紀末から19世紀にかけて生じた大名屋敷内の栽培・耕作活動の変質も、各藩の殖産興業政策との関わりの中で捉えることができるだろう。

### (4) 19世紀中葉以降の大名屋敷

19世紀中葉以降の大名屋敷は基本的に前段階のあり方を踏襲する。しかし一部の大名屋敷では大砲・小砲などの武器生産が行われるようになる。加賀藩では下屋敷での鑄砲作業を始めるのに際して、国許で既に鑄砲に携わっていた藩士・職人を江戸へ呼んでいる。これは下屋敷で従来行っていた栽培・耕作活動とは別個の活動が新たに始まったことを意味している。

大名屋敷における武器生産は、ペリー来航とそれに続く開国という外的圧力による幕府・大名の危機への対応による幕藩営軍事工業の一形態と捉えられる（小林前掲、石塚前掲）。その意味で郊外の大名屋敷で行われていた従来の金属加工などの生産活動（類型7の大名屋敷跡遺跡）とは一線を画す生産活動と位置づけられる（類型8の大名屋敷跡遺跡）。

また大名屋敷が軍事教練の場となったことも注目すべき変化である。加賀藩では1845（弘化2）に上屋敷と下屋敷に鉄砲角場が設けられた。鉄砲角場の規模や構造は詳らかではないが、以



後、特に下屋敷では軍事教練が行われていく。一方で、下屋敷における大名間の饗応は、1848年（嘉永元）に行われた会津藩主松平容敬、容保、高松藩主松平頼胤への接待を最後に見られなくなる。

尾張藩川田久保屋敷（抱屋敷）の1864年（元治元）の絵図を分析した吉田正高は、居住者の肩書きに「大筒打方」が多い点から、屋敷内に置かれた「射小屋」が何らかの形で砲術と関係した可能性を指摘している（吉田 2003）。下級藩士の生活空間という川田久保屋敷の「格の低さ」が、幕末の社会状況を反映して砲術関係の藩士が江戸に多く居住することへも柔軟に対応できたとする（吉田前掲）。

こうした該期の大名屋敷にみられる、幕藩営軍事工業的な生産活動や軍事教練の場への転用といった、軍事力強化に関わる活動の出現は、大名屋敷の軍事拠点化を意味するものではない。しかし幕藩体制の危機への対処であったにせよ、結果的に幕末の大名屋敷における生産活動が近代日本の殖産興業化政策を進めていく上での基礎の一つとなった可能性を考えると、該期の大名屋敷の変化は重要である。

考古学的には鑄造遺構や水車遺構、埧塙や教練で使用された実弾などの出土が想定されるものの、現在までのところ考古学的な知見は得られていない。

以上にみた大名屋敷の変遷を大名屋敷跡遺跡の類型毎に模式化したのが表 31 下である。

1590年（天正18）の家康入府と共に出現した江戸の大名屋敷は、当初、饗応活動が行われておらず、柵や塙、あるいは生垣といった簡易な屋敷境で囲まれた大名屋敷（類型1）だった。

1620年代から40年代初頭にかけて、大名妻子江戸居住制と参勤交代制の制度化を背景に、1620年代から40年代初頭にかけて大名の本宅・本拠地へと性格が変遷するとともに、饗応活動を伴う大名屋敷が現れる（類型2）。ここに大名屋敷の最初の画期をみることができる。

ただし大名屋敷の外郭部（屋敷境周辺）の土地利用の状況は、長屋型表長屋を設ける屋敷、ゴミの埋土処分地とする屋敷、積極的な土地利用がみられない屋敷などが混在している。こうした初期の大名屋敷の多様な景観は、大名屋敷の空間構成に未だ型式化がなされておらず、個々の大名家によって屋敷の利用状況が多様だった状況を反映したものと考えられる。

1620年代から1680年代にかけて下水道の整備が進展するとともに、大名屋敷の屋敷境は下水道を兼ねる石組溝が増加する。これによって護岸の石垣上に礎石を据えた長屋塙型表長屋が屋敷を囲む大名屋敷（類型3）の景観が成立する。類型3の大名屋敷の出現には地域によって若干の時期差が認められる。この時期差が、歴史的には詳らかでない江戸の下水整備の状況を間接的に示しているものと推測される。

この時期はまた、明暦の大火（1657年/明暦3）を契機とした家作制限によって、大名屋敷の外観が瓦葺き・塗家造りへと変化する時期でもある。しかし長屋塙が大名屋敷の周囲を巡るといふ景観自体は1620年代から幕末まで踏襲されるので、長屋塙の出現は大名屋敷にとって二番目の画期と位置づけられる。

郊外の下屋敷・抱屋敷は明暦の大火を契機とした防災施設として増加する。下屋敷の中には、空間構成や御殿空間内での活動が上屋敷と同質のもの（類型3）がある。その一方で、広大な敷地を利用して大規模な生産活動を併せて行う屋敷もある（類型5）。藩主の御殿は設けられているものの、上屋敷のような御殿空間は認められず、敷地内の大部分が耕作地として利用された下屋敷のあり方は、耕作地を主体とする抱屋敷との共通性の方が高い（類型6）。御殿空間での饗応活動のあり方は異なるが、これら二つの大名屋敷（類型5・類型6）もまた、幕末まで継続するあり方である。

つまり江戸の大名屋敷は、1590年（天正18）の家康の江戸入府によって出現し（類型1）、17世紀半ばに景観的規制や屋敷内の諸活動によって3つのあり方（類型3・類型5・類型6）として完成し、この多様性のもと幕末まで展開したと捉えられるのである。

この大名屋敷の多様性を解明するためには、なお残された課題が多い。表41にある大名屋敷の他の類型（類型4・7・8）は、それぞれの検出例が現段階では少数にとどまっていることもあり、上記にあげた大名屋敷の多様性とどのような歴史的関わりを有するのかは不明である。

小藩・中藩の大名屋敷の空間構成や屋敷内での諸活動に関しても、基本的なあり方は長屋塀が周囲を巡り、御殿空間内で饗応活動が行われるという類型3の大名屋敷を踏襲すると思われる。しかし広大な敷地に展開した大藩の大名屋敷と比べて異なる点も存在したはずである。大名屋敷の諸様相の中で、どの活動・どの機能を他の屋敷に振り分けていたのか、換言すれば狭小な大名屋敷にも残る大名屋敷の本質的な様相は、敷地面積が限られた小藩・中藩の大名屋敷のあり方から捉えられる可能性がある。

大名屋敷と周辺社会との関係もまた、今後取り組むべき重要な課題である。吉田は「藩邸社会」と「町人地社会」との関係、個別的・契約的・対自的なものとして捉え、それが門前町のような固有の領域を形成することのなかった要因と位置づける（吉田1995）。東京大学本郷構内遺跡では、キャンパス内の本郷町屋跡遺跡を対象とした発掘調査も近年になって始まっており、大名屋敷跡遺跡とその周辺の町屋跡遺跡との関係の解明は、これからの近世考古学にとって大きな課題の一つである。

周辺社会との関係では、大名屋敷内で行われた生産活動の実態を更に検討することも求められよう。本論文では栽培・耕作活動と、金属加工から大名屋敷の生産活動の一端を提示した。どちらの活動も郊外の名古屋敷（下屋敷および抱屋敷）でのあり方は大規模なものであることは明らかになったが、その基盤となる生産資本、－大名屋敷内の労働力の編成と出入町人・百姓などとの関係や、生産手段の整備や維持－といった点や、生産活動によって生じる生産品の流通やそれによって生じる利益などは依然として不明である。

大名屋敷の多様性を明らかにする上で、郊外の名古屋敷における生産活動の実態が、生業としての農業あるいは工業に匹敵するような生産規模や組織化への展開がみられるのか、あくまでも幕藩体制社会内の構造的矛盾への対応として、個々の家中が取り組んだ藩政改革としての殖産興業政策の範疇にとどまっていたかを検証することが不可欠である。

いずれの課題も近世考古学のみでの研究では十分に解明できるものではなく、歴史学をはじめとした関連分野との学際的研究を進めていくことが求められる。これらの課題については、今後の研究を通して解明していきたい。

## 第8章 資料編

### 第1節 資料編1：東京大学本郷構内遺跡の屋敷境遺構

#### 第1項 東京大学本郷構内遺跡西側の屋敷境遺

##### 1. 東京大学本郷構内遺跡工学部14号館地点

工学部14号館地点は狭義の本郷キャンパス（言問通り以南で、弥生・浅野キャンパスを含まない）の北西隅に位置しており、中山道に面している。加賀藩邸北西側に位置する本調査地点周辺は、中山道に沿って御先手組組屋敷が配置され、東側で加賀藩邸と接している（図40-①A、②A）。組屋敷が配置された時期は不明だが、『正保年間江戸絵図』（正保元・1644）には「八代越中同心屋敷」がみえる。

調査区の東端で柱穴列（SB64とSB65）を2条検出した（図38）。どちらも御先手組組屋敷と加賀藩邸との屋敷境である（東京大学埋蔵文化財調査室2006a）。

##### (1) SB64

SB64は、南北方向に軸を持つ柱穴列による屋敷境遺構4類である。各柱穴の規模は南北50-60cm、東西30-40cm、深さは20-30cm程度である。

柱穴によっては覆土に柱痕が観察できるものがある。そこから柱の太さは10cm程度と推定される。ピット11の坑底には梅鉢紋の軒丸瓦（瓦当部）が伏せた状態で置かれていた。柱を支える根石の代わりに据えたものだろう。出土遺物は18世紀代の陶磁器が1点ある。

##### (2) SB65

SB65はSB64の東側にある、柱穴列による屋敷境遺構4類である。18世紀前半の陶磁器・土器が十数点出土した。

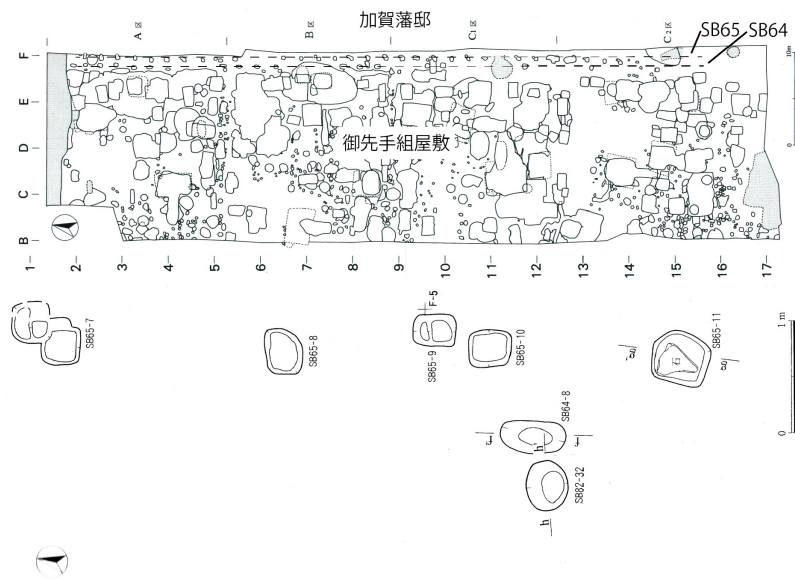


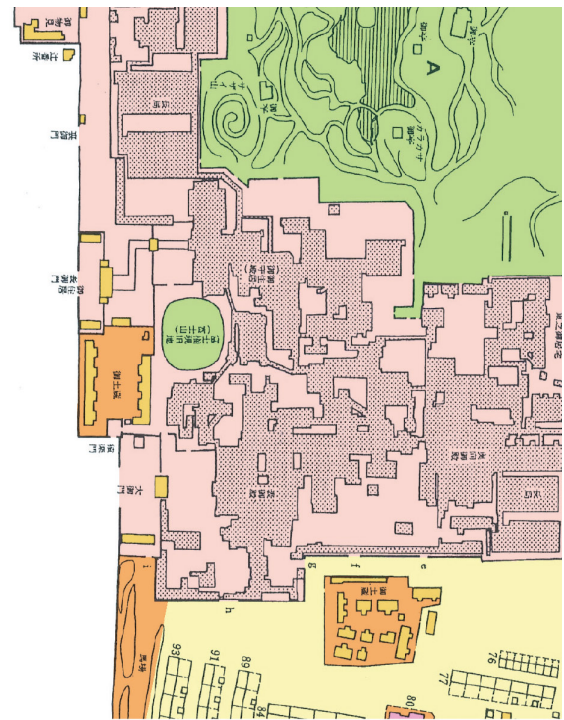
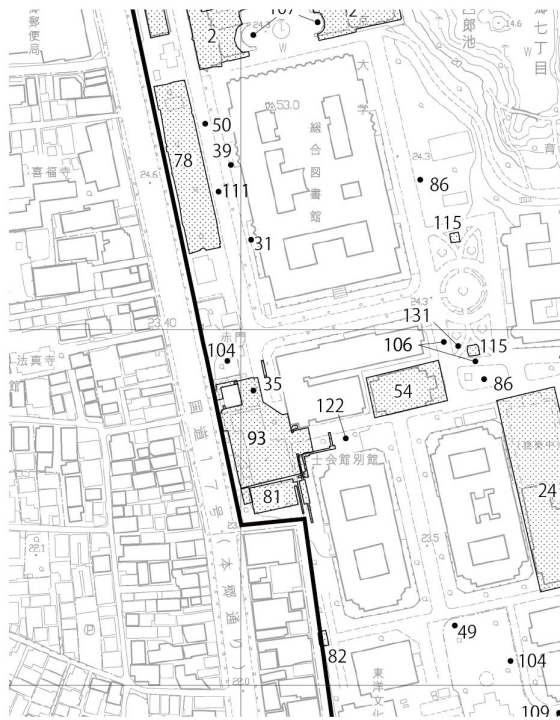
図 38 工学部 14 号館地点の屋敷境遺構（東京大学埋蔵文化財調査室 2006 を基に作成）

## 2. 情報学環・福武ホール地点・経済学研究科学術交流棟地点・伊藤国際学術研究センター地点

3 地点はいずれも中山道に面した調査地点である。それぞれの位置は、情報学環・福武ホール地点が図 39-78 (成瀬・大成 2008)、経済学研究科学術交流棟地点が図 39-81 (成瀬 2011a)、伊藤国際学術研究センター地点が図 39-93 (成瀬 2012) である。

図 40 の①と②を比べると、C 周辺の屋敷割に変化が認められる。これは 1827 年 (文政 10) に、前田斉泰の許へ入興した溶姫 (徳川家斉の 21 女) の御守殿を新営したことによるものである。御守殿の新営に伴い、本郷六丁目と同五丁目の町屋の一部が藩邸の一部に組み込まれた。ここでは御守殿が造営された 1825 年 (文政 8) 以後の屋敷境遺構をとりあげる。

表 32 がこの 3 地点で検出した石組溝による屋敷境 (2 類) である (図 41)。

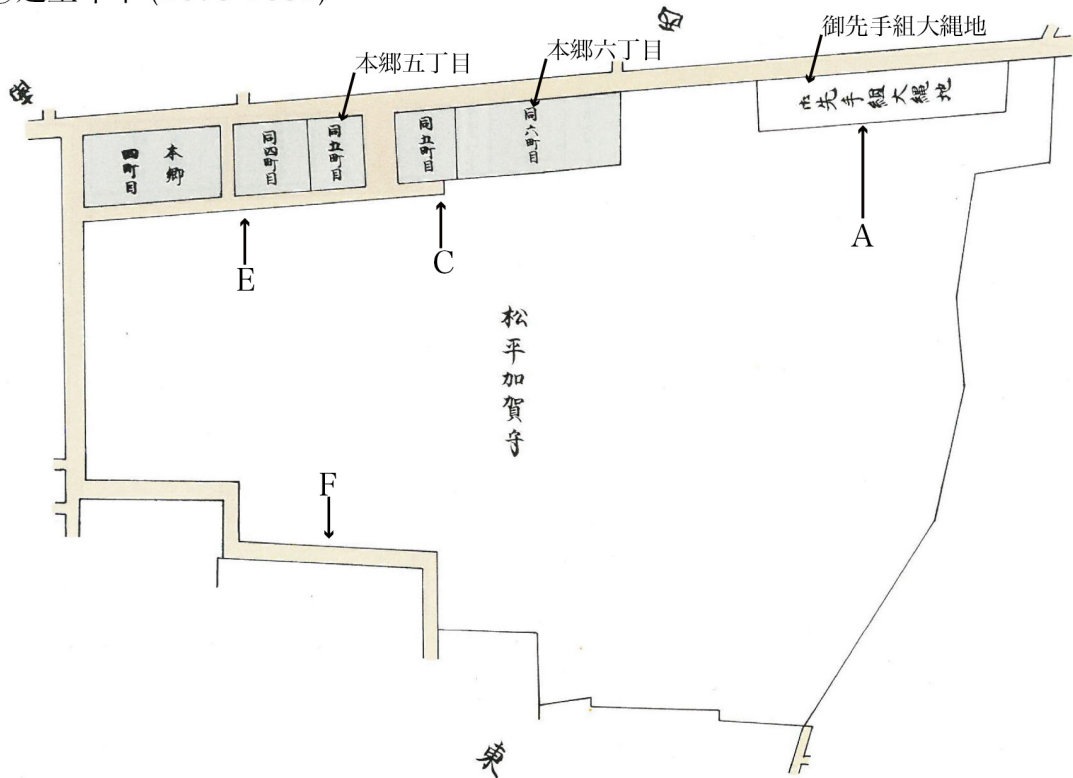


78：情報学環、93：伊藤国際、81：経済交流、82：懷徳門

1840 年代後半の加賀藩邸

図 39 本郷キャンパス西側の調査地点と加賀藩邸

①延宝年中(1673-1681)



②天保 14 年 (1843)

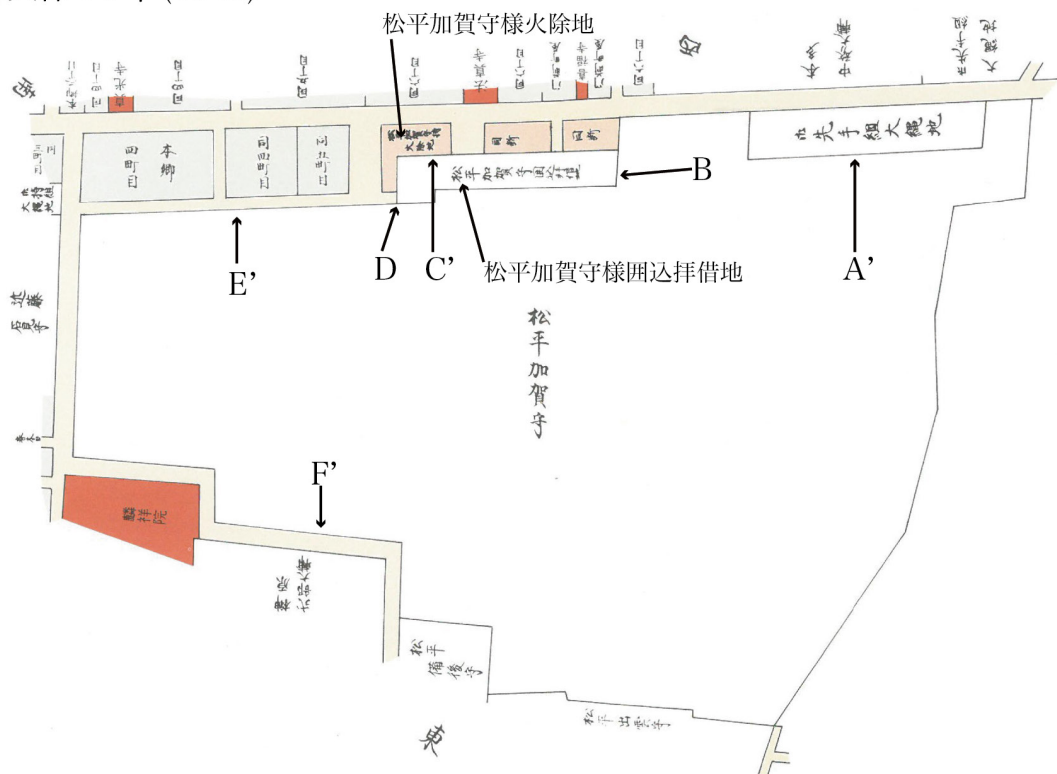


図 40 『御府内沿革図書』(朝倉 1985)における加賀藩本郷邸西側の屋敷境

	地点	遺構	主軸	幅 (m)	深さ (m)	藩邸側	道側	文献
ア	情報学環	SD8	東西	0.4-0.5	0.65	築石	築石	年報6
イ	情報学環	SD50	南北					年報6
ウ	伊藤国際	SB60	南北					年報8
エ	伊藤国際	SB95	南北					年報8
オ	伊藤国際	SB840	南北					年報8
カ	経済交流	SD15	東西	1.1		築石・切石	切石	年報7
キ	懐徳門	SD96	南北	1		築石 SA01	切石	年報7

表 32 本郷邸西側の屋敷境遺構

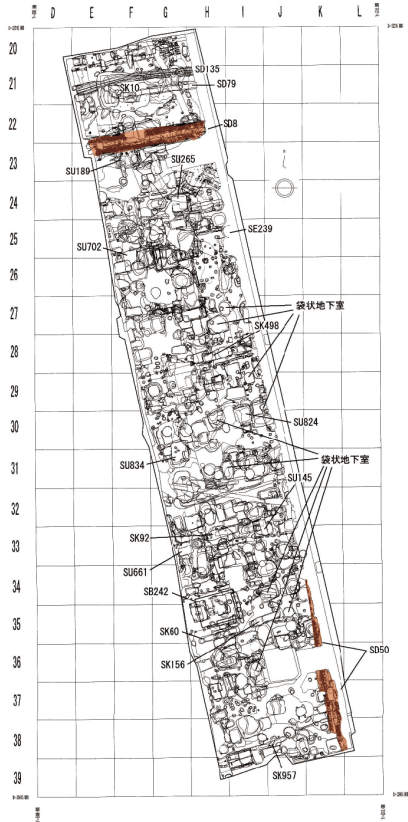
情報学環地点 SD8 は東西方向（23E～22H グリッド）にのびる石組の溝である。溝幅は 0.4-0.5m<sup>121</sup>で、深さは 0.65m。溝の底には漆喰が厚さ最大 7-8 cm で敷かれていた。

築石は北側（加賀藩邸側）は残っていないが、掘り方の規模を比較すると、北側が約 0.8-0.9m、南側が 0.7-0.8m で、北側の方が大きい。また栗石の残り具合を比べると、これも北側の方が高い位置まで認められる。このことから加賀藩邸側の護岸の方が規模の大きな築石で構築され、高い位置まで構築されていたことが推測される。

情報学環地点 SD8 は北側が加賀藩邸、南側が火除地、同地点 SD50、伊藤国際地点 SB60、SD95、SB840 は東側が加賀藩邸、西側が火除地となる。そして経済交流棟地点 SD15 は中山道から日影通りへと続く鉤の手状の屈曲部分にあたり、SD15 の北側が加賀藩邸、南側が本郷五丁目町屋の道との屋敷境に相当する。

<sup>121</sup> 後に改修されて約 100 cm に拡幅されている。

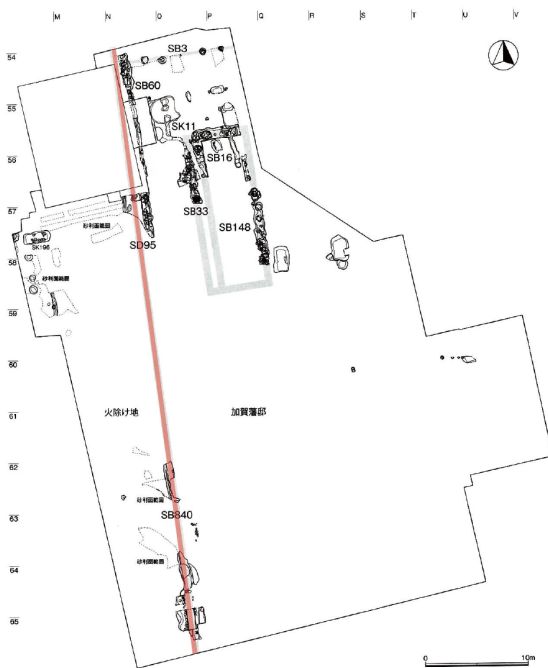
1



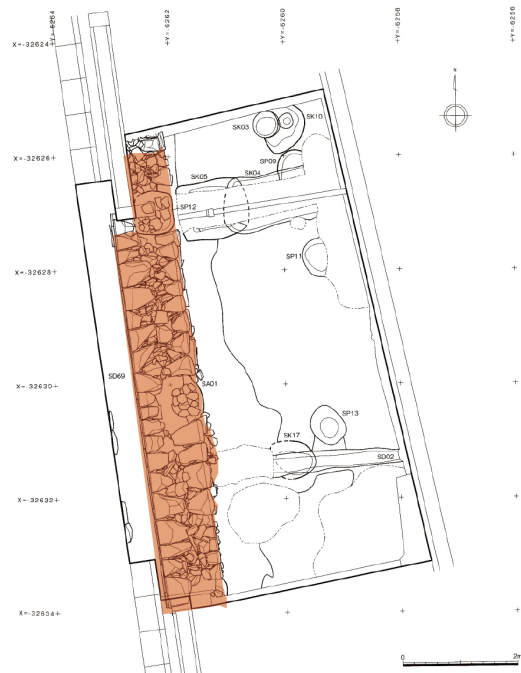
3



2



4



1：情報学環 SD8・SD50 2：伊藤国際 SD60・SD95・SD840

3：経済交流 SD 15 4：懐徳門 SA01

図 41 本郷キャンパス西側 4 地点の屋敷境遺構 (東京大学埋蔵文化財調査室 2008 ほか)



### 3. 東京大学本郷構内遺跡懐徳門地点

懐徳門地点は図 40 の E と E'にあたる。中山道から鉤の手状に分岐する日影通りに沿った、加賀藩邸東側の屋敷境である。道の西側は本郷四丁目の裏手となる。

懐徳門地点は日影通りの北端から 160mほど南側に位置する調査区である（堀内 2011）。ここには加賀藩邸の石垣が現存する（図 7）。調査地点はこの石垣の一部を含む。

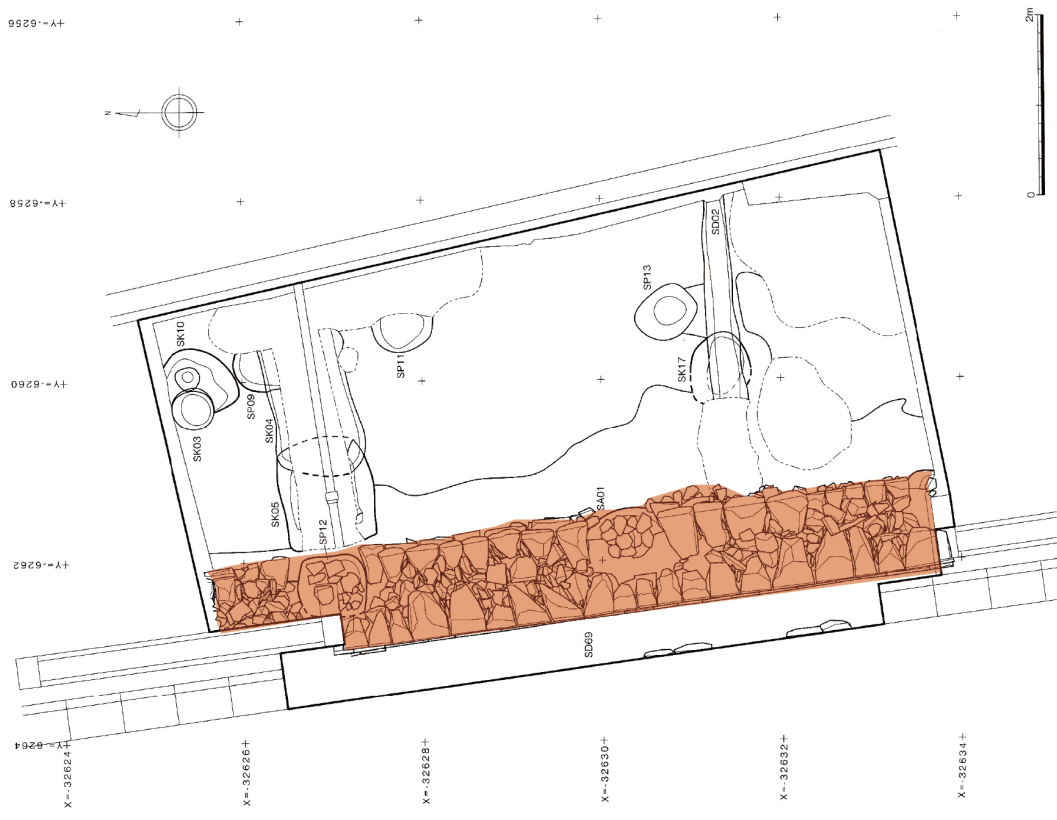
調査では江戸時代の生活面が 4 面認められた（上から A～D 面）。最も古い段階が D 面で、これはローム層上に構築された生活面である。屋敷境遺構 SK35 から出土した初期伊万里から、17 世紀前半に位置づけることができる。屋敷境遺構の様相を具体的にうかがえるのが A 面段階である。

#### (1) SA01

東側に小面が向く石垣と、西側に小面が向く石垣が背中合わせになっている（図 42）。西向き石垣は現在の日影通り下にも築石が 2 段分積まれていたことがわかった。一方、東向き石垣は土手の上に据えられている。これら東西それぞれに面した石垣によって SA01 は石塁をなしている。7 類。

#### (2) SD69

SA01 西側直下に構築された、本郷邸と日影通りとの間の石組溝（2 類）である。幅は 0.4m で、東側の護岸は SA01 の築石を利用し、西側は調査区外のため観察のみに留まるが、築石が積まれていたことを確認した。



藩邸側

道路側

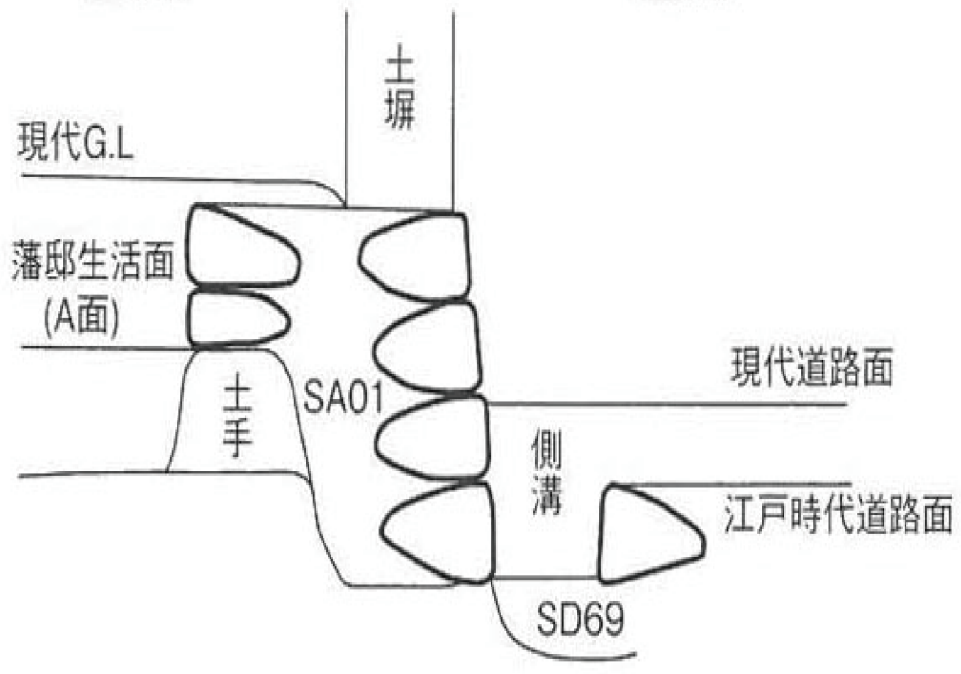


図 42 櫓徳門地点 A 面 SA01 (東京大学埋蔵文化財調査室 2011)

## 第2項 東京大学本郷構内遺跡東側の屋敷境遺構

### 1. 東京大学医学部附属病院地区の大名屋敷

東京大学本郷構内遺跡のうち医学部附属病院内（以下、病院地区）は、1984年に実施した中央診療棟地点（以下、中診地点）をはじめ、外来診療棟地点（外来棟地点）、病棟地点、第2中央診療棟（第2中診地点）、第2病棟地点、クリニカルリサーチセンター地点（CRC-A地点）など、構内遺跡の中でも大規模な発掘が行われている一帯である。

調査面積の広さとともに、屋敷境遺構に関しては次の二点で重要である。一点目は病院地区には加賀藩・富山藩・大聖寺藩・高田藩の大名屋敷と、講安寺が含まれていることである（図45）。遺構の遺存状況には差はあるものの、各調査地点においてそれぞれの屋敷境を検出している。

二点目は病院地区の屋敷割が1682年（天和2）の火災を機に大きく変化することである。図43は『江戸方角安見図』（1679年/延宝8）の病院地区周辺である。加賀藩邸は大聖寺藩邸を挟んで、その東側にも証人屋敷（黒田門邸）があった。図45で示した屋敷割は火災後のものである。大聖寺藩邸が東側に移って講安寺と道を挟んで接するようになる。この変化を模式化したのが図44である。

病院地区は本郷台地が根津谷へと向かう傾斜地上に立地しているため、屋敷境の変遷が盛土造成に伴って堆積した生活面と共に層位的に確認することができた。

現在までに報告書が刊行されている調査地点は中央診療棟地点（東京大学遺跡調査室1990）と外来診療棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室2005）だが、それ以外の調査地点の成果に関しては東京大学埋蔵文化財調査室による概報・略報<sup>122</sup>を適宜参照しながら、病院地区における屋敷境遺構のあり方をみていくことにする。

---

<sup>122</sup> 略報は主に『東京大学構内遺跡調査研究年報』に掲載されている。筆者が担当した調査に関しては、概報・略報が未刊行なものについてもその所見を述べる。なおこれらはあくまでも現時点での所見である。

富山藩邸 (図の外)



図 43 『江戸方角安見図』の加賀藩邸周辺 (古板江戸図集成刊行会 2000 に加筆)

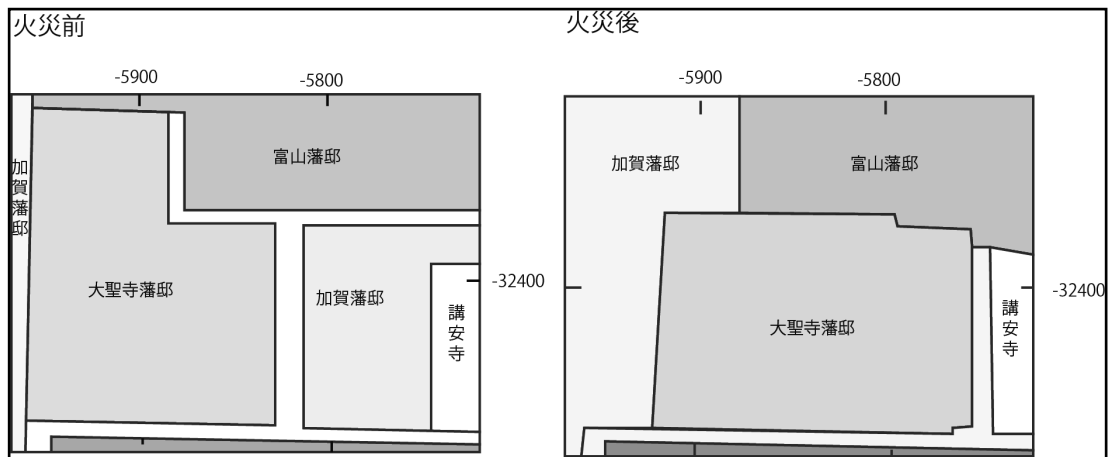


図 44 東大病院地区の屋敷割の変化 (藤本 1990c を基に改変)

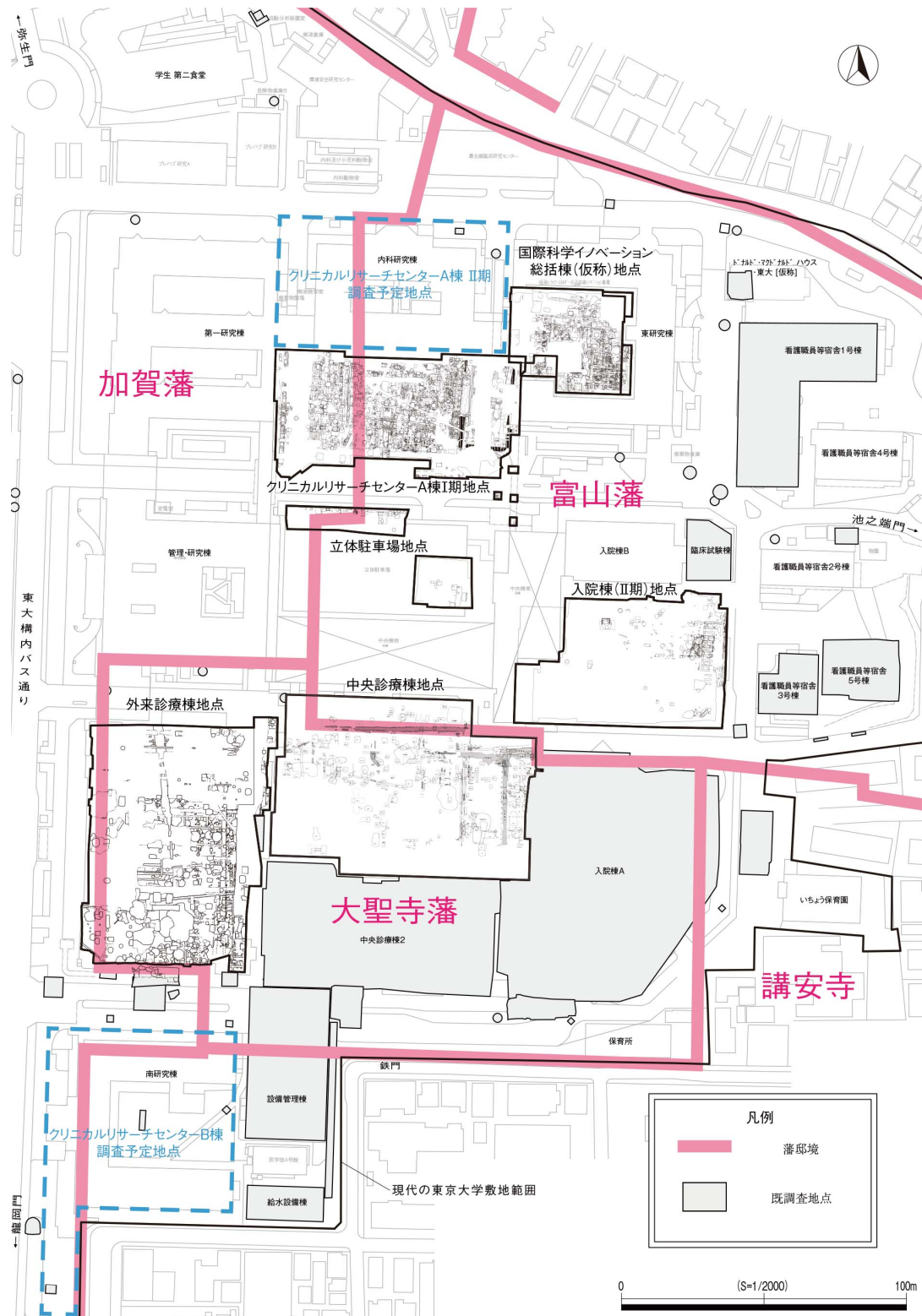


図 45 東大病院地区の調査地点と屋敷境想定ライン（外来診療棟地点検出 SA155 は 1829 年/文政 12 以降の屋敷境で、本図が想定した屋敷境は未検出）

## 2. 本郷邸拝領期の屋敷境遺構

加賀藩本郷邸の拝領に関しては不明な点が多い。拝領時期は『東邸沿革図譜』に、「賜年不詳なれ共、愚按、大坂両役落着後、元和二三年の頃なるべし」とあり、1616、17年（元和2、3）のことであると言われている<sup>123</sup>。

本郷邸が本格的に開発されたのは1626年（寛永3）のことである。同じく『東邸沿革図譜』には次のように記述が続く。

### 史料 8-1<sup>124</sup>

従前のまゝにて篠若草蔓芥然たり。只守邸舎又は臧獲の徒住居し、其舎傍に茗園を為すのみなるを、寛永三年丙寅始めて四界に木墻を環らし、明年丁卯千勝・宮松の二公子、諸翁主及び寿福孺人面々の座所経営有りて、金府より北発、此邸内へ移らせ、且小田原・めつた町に賃居せし微臣の輩を、此邸内に外廂を構へ盡く聚め入れ置かせらる。

入院棟2期地点B2面は黒褐色土によって盛土造成された最初の整地面である。不純物が少ない黒褐色土は、東京大学本郷構内遺跡では最初期の段階に伴って認められることが多い。

B2面の屋敷境遺構SD9から砂目積みの技法が認められる肥前製磁器が出土した。砂目積みの技法は肥前での磁器焼成開始から間もない1620-30年代のものであることから、B2面は史料8-1にある本郷邸最初期の開発に伴う整地面の可能性が高い。

史料8-1では「四界に木墻を環らし」とある該期の屋敷境の実態はSD9にみることができる。SD9は柱穴を伴う溝状遺構（3類）の屋敷境遺構である。柱穴の一部には、底部から切石が出土した。この切石は柱穴に据えられた礎石と思われる。

入院棟2期地点では、自然堆積層上のB3面でも屋敷境遺構と考えられる遺構を検出した。B3面は遺物は未出土だが、B2面の年代観からすると拝領直後に帰属すると考えられる。この面で検出した屋敷境遺構は柱穴群である。柱穴の数や、各柱穴の規模は現段階では不詳だが、いくつかの柱穴列にまとまりそうなので、4類の屋敷境と捉えられる。

したがって本郷邸では拝領直後に柱穴列（4類）からなる柵状の屋敷境で屋敷周囲を囲み、開発が本格化した段階で溝の底部に柱穴列が伴う（3類）塀が構築されたと考えられる。

<sup>123</sup> 富田景周・太田敬太郎（校正）1972による。

<sup>124</sup> 同上。下線部は筆者による。

### 3. 1682年（天和2）の火災前後の屋敷境遺構

1682年（天和2）の火災前の屋敷割（図44）における、大聖寺藩邸東側の屋敷境が中診地点6号組石南北部と第2中診地点SB1402である（図46）。これは幅1.1m、深さ1.2mの石組の溝による屋敷境遺構2類である。SB1402には門番所の遺構も伴った。

図44で示したように大聖寺藩邸の東側には、黒田門邸との間に道路が敷設されていた。これが第2中診地点のSR1548である。SR1548上には、直径12cm程度の柱穴列であるSA1408が構築されていた。これは大聖寺藩邸の屋敷境であるSB1402のすぐ東側に平行し、門の礎石（SB1335）を伴うことから、大聖寺藩邸の屋敷境遺構であると捉えた。道上に構築されていることと、天和の火災の焼土層を切っていることから、火災後に構築された屋敷境であると推測される（図46）。

天和の火災後に病院地区は屋敷割が大きく変化する。加賀藩が火災の復興工事に取りかかるのは1683年（天和3）3月からで、その際に1mほどの盛土造成が行われて、図44下にあるように大聖寺藩邸の屋敷境は講安寺側へ大きく移ることになる。したがって第2中診地点で検出したSA1408は1682年（天和2）12月の火災から、翌年の3月までの短期間だけ使用された屋敷境と門であると判断できる。

江戸時代の武家故実をまとめた『青標紙』によると、冠木門は大名屋敷が被災した際の仮設の門であるとされている（大野広城1980）。SB1335も礎石2基からなる簡易な基礎構造なので、冠木門が推測される。天和の火災では、焼失した屋敷境と門を代替する施設として、わずか4ヶ月程度の期間だが仮設の門と柵が道路上に構築されていたのである。

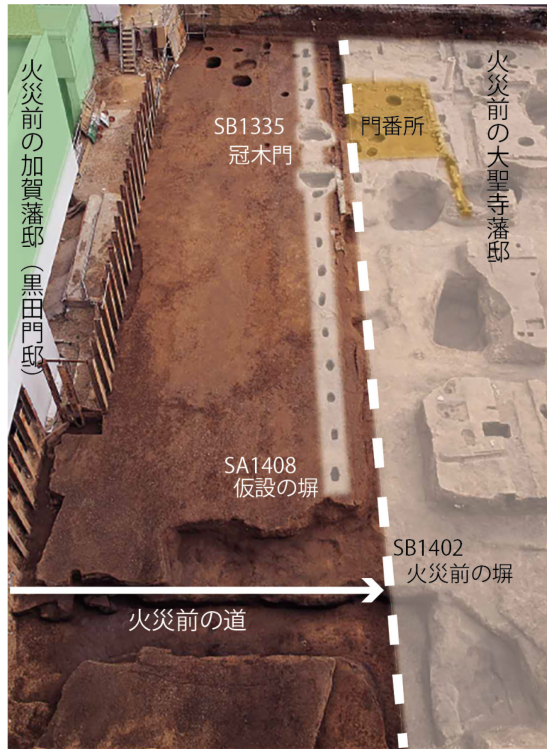


図 46 火災後の復興までの仮設塀 (SA1408) と冠木門 (SB1335) (追川 2004d に加筆)



#### 4. 大聖寺藩邸南側と高田藩邸北側の屋敷境遺構

設備管理棟地点（東京大学遺跡調査室 1990）は調査区内を無縁坂から続く道が横断しており<sup>125</sup>、この道を挟んで北側に大聖寺藩邸、南側に高田藩邸<sup>126</sup>を含んでいる。

##### (1) 大聖寺藩邸

2号柱穴列は一辺 30-40 cm、深さ 30-50 cmの柱穴列からなる屋敷境遺構 4類である（図 47）。これと高田藩邸の屋敷境までの距離、則ち道路幅は 5mである。現在の無縁坂の道幅は 7mで、高田藩邸の屋敷境は後述のように造り替えがあっても位置は不変なことを調査で確認している。1682年（天和 2）の火災までに大聖寺藩邸の屋敷境が 2m程度セットバックしたことが推測される（攪乱が著しく遺構は未検出）。

##### (2) 高田藩邸

高田藩邸の屋敷境は 3基検出しており、ほぼその位置を変えずに造り直しが行われている（図 19・図 47）。

##### (ア) 3号溝

上部幅 1m前後、下部幅 30 cm前後の素掘りの溝（1類）である。これは次の段階の 1号溝によって大部分が壊されていて構築時期などは不明である。

##### (イ) 1号溝

上部幅 2.5-3.0m、下部幅 0.5m、深さ 1.0-1.1m程度の堀（6類）である。遺物からみた廃絶年代は 18世紀後半である。

##### (ウ) AB33・34区組石遺構

1号溝の上に石組遺構が構築されている。規模は西側が攪乱によって大きく壊されているため正確には分からないが、掘り方と東側の堆積状況から判断して幅 1m、深さ 0.6m前後の石組溝（2類）である。遺物は 18世紀末から 19世紀のものが認められる。

---

<sup>125</sup> 現在は無縁坂から続く道は本地点を迂回するように鉤状に西へと延びている

<sup>126</sup> 康政は館林藩を領したが、榊原家はその後姫路藩を経て、1741年（寛保元）に高田藩へ転封となって幕末を迎える。ここでは高田藩とする。

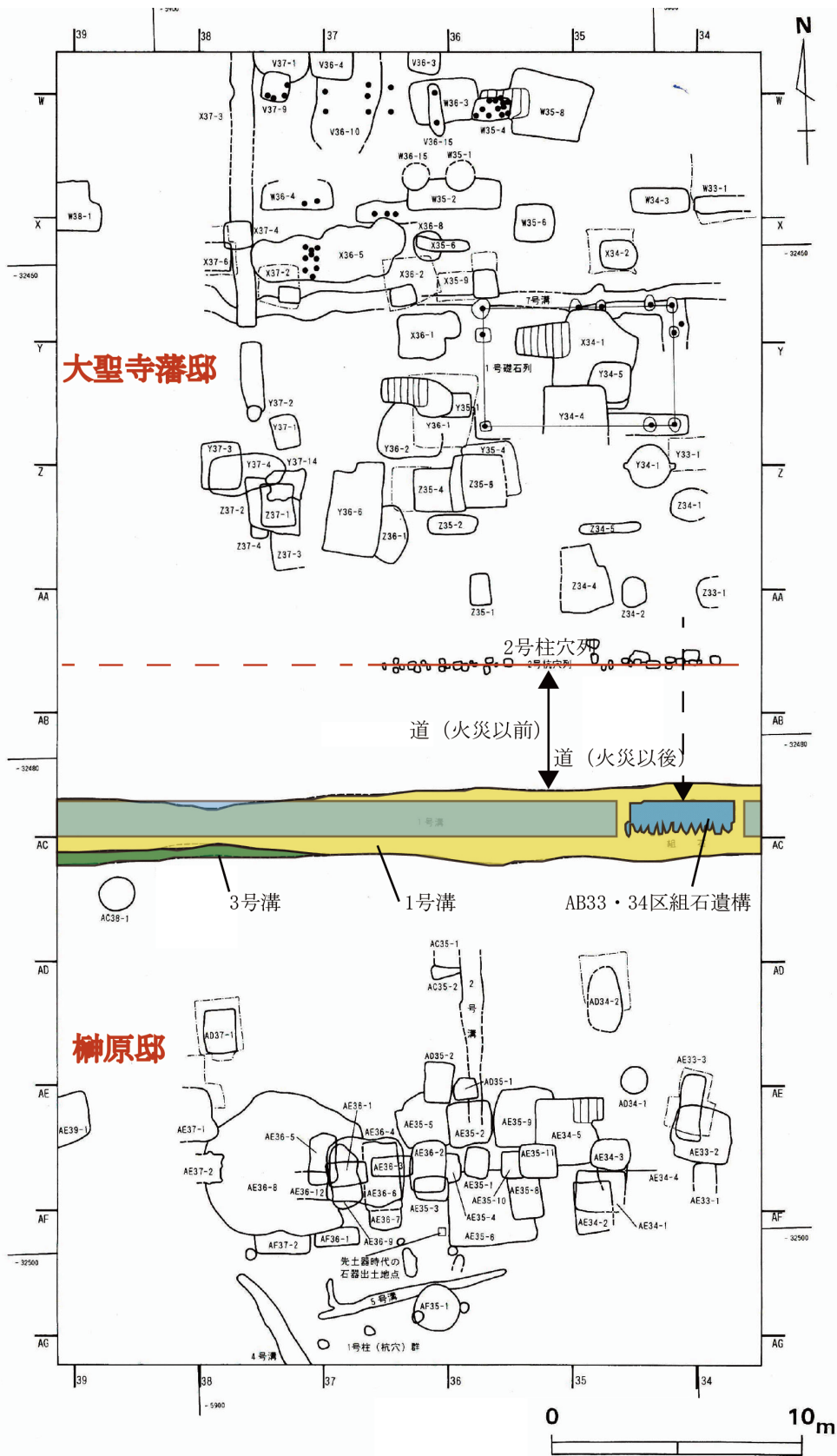


図 47 大聖寺藩邸南側と榊原邸北側の屋敷境遺構 (東京大学遺跡調査室 1990 改変)

## 5. 大聖寺藩邸西側の屋敷境遺構

大聖寺藩邸西側の屋敷境遺構は外来棟地点で検出している(東京大学埋蔵文化財調査室 2005)。屋敷西側の屋敷境は三度の変更がある。最初は 1682 年(天和 2)の火災までの屋敷割に伴うもので、これは明確な遺構として未検出だった。

火災後の屋敷割変更によって、加賀藩邸との屋敷境となるのが SA155(図 49 下)である。SA155 は東西に長い長方形を呈した土坑が南北に並ぶ土坑列による屋敷境遺構 5 類である。個々の土坑の規模はそれぞれ異なるが、そのうちの 1 基を例にあげれば東西 1.8m、南北 1.0m である(図 50)。土坑は東側に礎石を伴い、西側には礎石はみられない(浅い掘り込みを有するものがある)。深さも東西で異なっており、東側が 0.4m なのに対して、西側は 0.2m である<sup>127</sup>。東西で構造が異なるのは、この土坑が支柱と控柱の掘り方だったことによる。

三度目の変更が、1829 年(文政 12)に西側へ藩邸が拡張したことに伴う屋敷境の変更である。これは大聖寺藩が新御廣式を建築するために、加賀藩邸の東縁の一部を借用したことによる(大聖寺藩史編纂會 1938)。この時に新設された屋敷境は外来棟地点の調査範囲に含まれるが、攪乱が著しく未検出である。

## 6. 富山藩邸の屋敷境遺構

### (1) 藩邸南側

富山藩邸の南側には、藩邸に沿って東西方向にのびる道がある。この道と富山藩邸の間の屋敷境が中診地点 2 号溝と 1 号溝である(東京大学遺跡調査室 1990)。切り合い関係から 2 号溝の方が古い、2 号溝のほとんどを 1 号溝によって壊されているため、屋敷境遺構の形態は不明である。

1 号溝は上幅が 0.6-1.5m、下幅が 0.4-0.8m、深さは 0.9m の溝状遺構で、柱穴列を伴う 3 類の屋敷境遺構である。柱穴部の覆土中には木柱痕が残っている部分がある(図 48)。

1682 年(天和 2)の火災後の屋敷割では、富山藩邸と大聖寺藩邸は道を挟まず、直接隣り合うようになる(図 44)。これに対応する遺構が 2 号組石で、石組溝による屋敷境 2 類(図 48)である。東側は浅い鉤手状に屈曲して同 6 号組石となる。

### (2) 藩邸西側

---

<sup>127</sup> 報告書中の断面図 j - j' で計測した。

CRC-A 地点は 2012 年から現在まで調査中の調査地点である（追川吉生 2015）。現在のところ SD12081・SD12089・SD12087・SD12091 が富山藩邸と加賀藩邸との屋敷境に相当する遺構であると考えている（図 51）。

これらの溝はほぼ平行して構築されていることから、数度の造り替えが行われていたことがうかがえる（各遺構の年代に検討は未着手）。溝の底部には柱穴が伴うことから 3 類である。

1号溝

2号組石

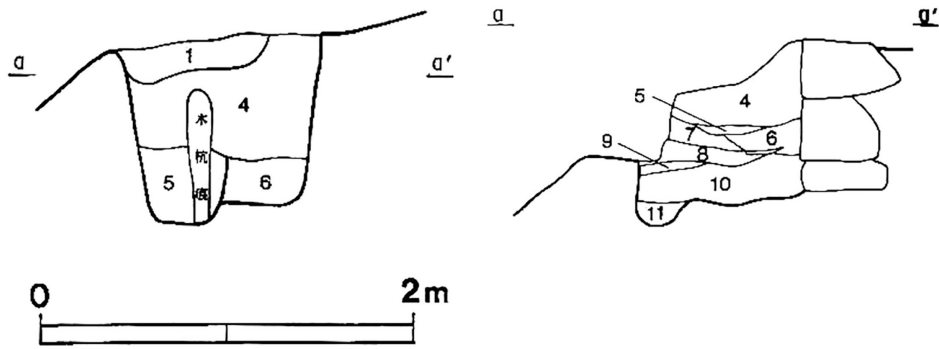


図 48 富山藩邸南側の屋敷境遺構（東京大学遺跡調査室 1990 を基に作成）

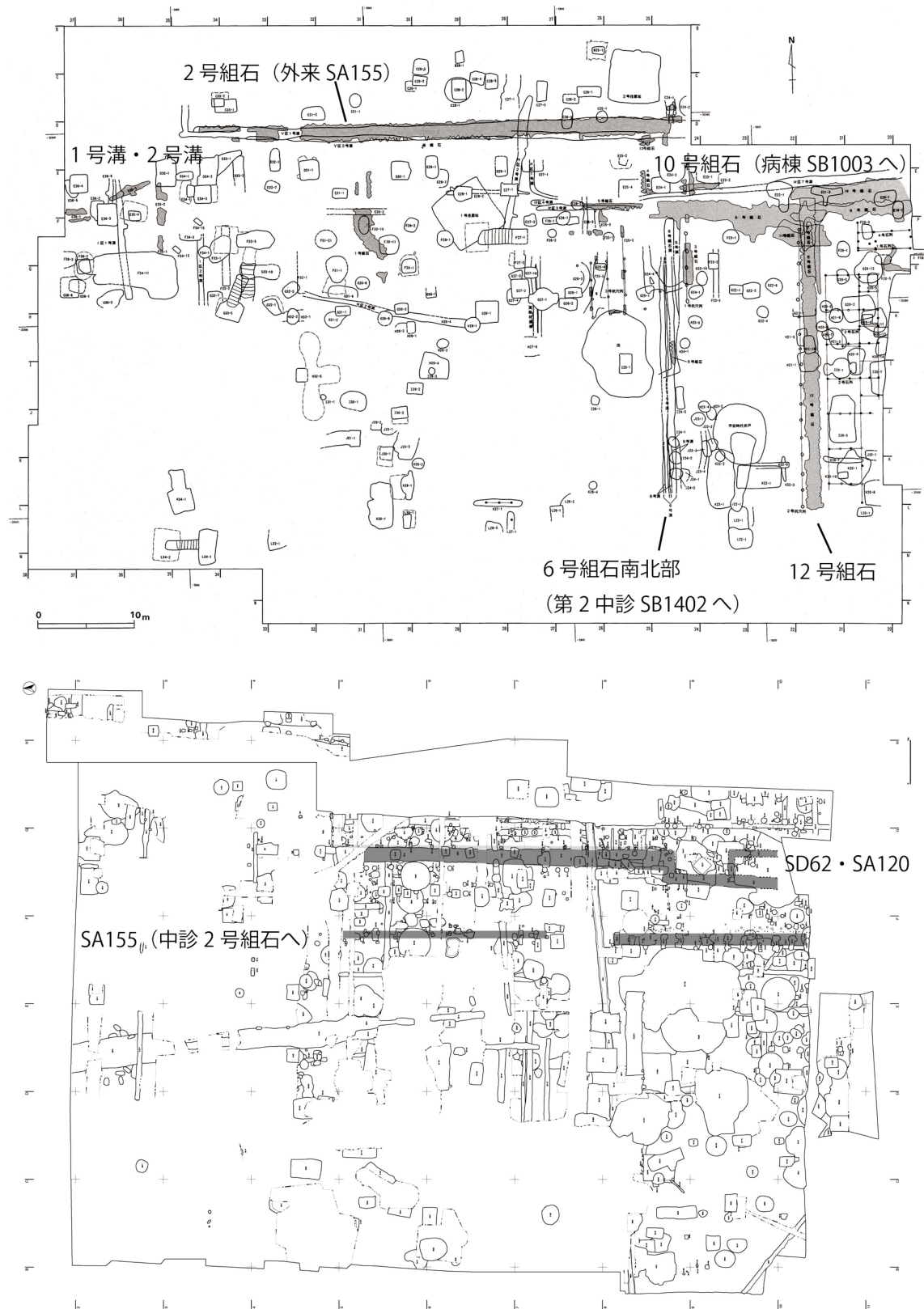


図 49 中診地点（東京大学遺跡調査室 1990）と外来地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2005）の屋敷境遺構（外来地点 SD62・SA120 は区画境遺構）

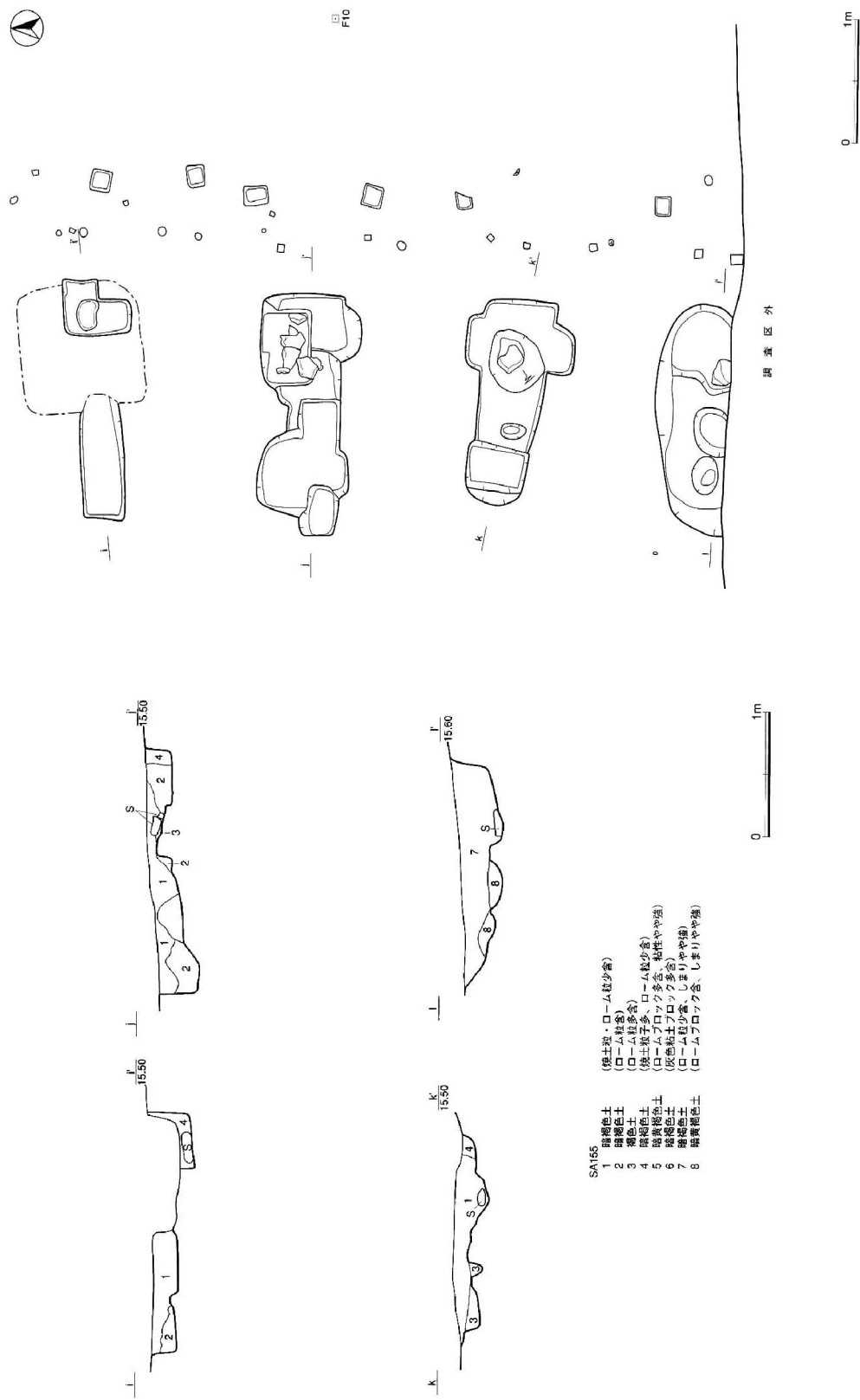


図 50 外来地点 SA155 (東京大学埋蔵文化財調査室 2005)

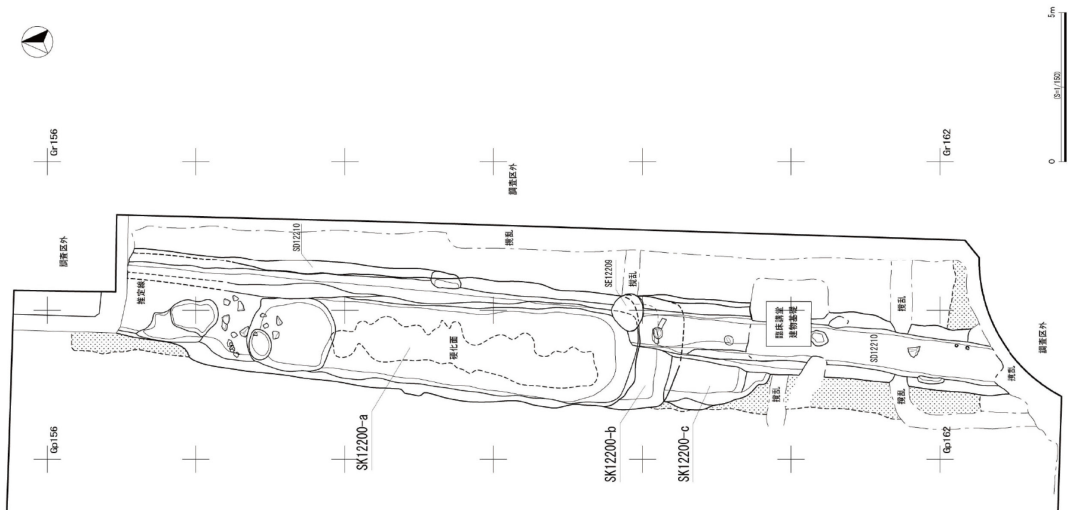


図 51 CRC-A 地点遺構検出状況と屋敷境界溝



## 第2節 資料編2：大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構（東大本郷構内遺跡以外）

### 第1項 千代田区内の大名屋敷跡遺跡

#### 1. 東京駅八重洲北口遺跡

東京駅八重洲北口遺跡の最も古い生活面（1期）は自然堆積層上にひろがっている。16世紀末から17世紀初頭の瀬戸・美濃製陶器が出土していることと、続く2期に1610年代の瀬戸・美濃製陶器が出土していることから、1590年代頃に位置づけられる（千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003）。

1期は自然堆積層上に構築された生活面で、大窯4期の遺物が出土する。キリシタン墓地とともに、上幅1.1-2.4mと不定形な素掘りの区画溝がある。金箔瓦が出土するので相応の武家屋敷だったことが推測されるが、区画内部の遺構分布は疎であるため屋敷の性格は不明である。

本遺跡が大名屋敷として利用されるのは2期以降のことである。南北に細長い調査区は、道によって四つの屋敷に細分される（図52）。以下では便宜的に屋敷YS1～YS4として、屋敷境遺構のあり方を2期および3期でみていくことにする<sup>128</sup>。

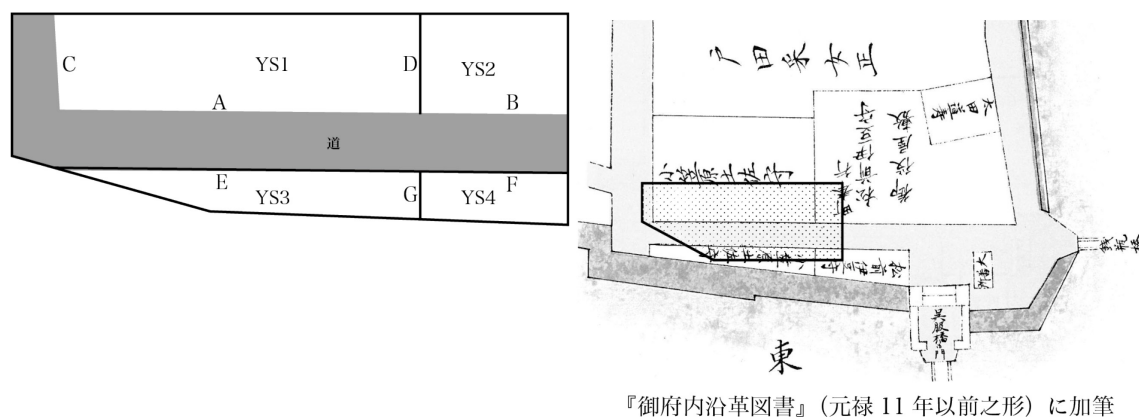


図 52 東京駅八重洲北口遺跡内の屋敷と屋敷境（『御府内沿革図書』は朝倉 1985 による）

<sup>128</sup> 後述のように3期は1698年（元禄11）の火災から、1806年（文化3）の火災までである。1806年（文化3）の火災以後は4期とされるが、火災を機に道が拡幅されることでYS1・YS2ともに屋敷は調査区外へセットバックされることになる。わずかにYS1にあたる北町奉行所の表門周辺部が調査区内に含まれるのみであるため、本論文では4期は除外する。

年代	時期	YS1(南側)	YS2(北側)	YS3	YS4
1606年(慶長13)頃	2期	本庄藩(小笠原左工門佐+1 10,000石)	戸田備後(+2)		
1631年(寛永8)		関宿藩(小笠原家+3 22,700石)			
1632年(寛永9)			南町奉行所(+4)		
1644年(正保元)頃		高須藩(小笠原家 22,700石)			
1697年(元禄10)		勝山藩(小笠原家 22,700石)		土手附屋敷(小笠原家)	土手附屋敷(松新伊豆守)
1698年(元禄11)	3期	吉良家	甘縄藩(大河内松平家 20,000石)		
1701年(元禄14)		菅川藩(米倉家 12,000石)			
1710年(宝永7)		飯田藩(堀家 20,000石)	大多喜藩(大河内松平家 20,000石)		
1719年(享保4)			杵築藩(能美松平家 32,000石)		
1756年(宝暦6)			相良藩(田沼家 10,000石)		
1767年(明和4)			川越藩(秋元家 60,000石)		
1806年(文化3)	4期	北町奉行所	山形藩(秋元家 60,000石)		
1865年(慶応元)			長岡藩(牧野家74,000石)		

注  
1:『慶長江戸絵図』(1606年)。小笠原左工門佐領之。  
2:戸田重元。5,000石。  
3:小笠原左工門佐政信。  
4:『武州豊嶋郡江戸庄園』に「嶋田弾正今八郎武部」。

表 33 東京駅八重洲北口遺跡の拝領者

(1) 2-1 期

①屋敷 YS1・屋敷 YS2 と道との屋敷境遺構：屋敷境 A・屋敷境 B

(ア) 1165 号遺構

(イ) 1205 号遺構

1165 号遺構は直径 0.3m、深さ最大 0.66m の柱穴列である。1205 号遺構は直径 0.3m、深さ最大 0.7 m の柱穴列である。ほぼ同じ位置にあることから、二条一対の柱穴列というよりは、1 条の柱穴列が造り替えられたと考えたほうがよい。柱穴列による屋敷境遺構 4 類である。

(ウ) 1406 号遺構

1406 号遺構は直径 0.4-0.5m、深さ最大 0.4m の柱穴列である。柱穴列による屋敷境遺構 4 類である。

(エ) 1140 号遺構

1140 号遺構は幅 0.5-0.6m の溝で、溝の底面に直径 10-12 cm の柱穴（杭穴）が約 96 cm の間隔で並んでいる。溝の底部に柱穴を伴う屋敷境遺構 3 類である。

1165 号遺構と 1205 号遺構は造り替えの可能性があるが、新旧関係は不明である。1406 号遺構と 1140 号遺構は 1.5-2.0m の距離があり平行するが、切り合い関係はないので遺構から前後関係を捉えることは難しい。1406 号遺構は遺物の出土はなく、1140 号遺構には磁器製品が 1 点出土するのみなので、遺物からも前後関係はわからない。ここでは造り替えの可能性の他に、1140 号遺構を主柱、1406 号がそれと対になった控柱の二条一対で構成される屋敷境の可能性も指摘しておきたい。

屋敷 YS1・屋敷 YS2 と道との屋敷境である A と B にあたる各屋敷境遺構は、(ア)～(エ)のいずれも調査区の 9 グリッドで軽く「く」の字状に西側へ屈曲する（図 53 左上）。『慶長江戸絵図』に描かれた調査地点周辺をみると、やはり屋敷境に屈曲した部分がある。『慶長江戸絵図』は 1608 年（慶長 13）頃の江戸の様子が描かれており（波多野純 1996）、遺物の年代とも矛盾しない。

このことから該期の屋敷 YS1 は小笠原家、屋敷 YS2 は旗本戸田家であることがわかる。屋敷 YS2 は戸田家以後に南町奉行所の役宅となるため、居住者の入れ替わりが屋敷 YS1 よりも多い（表 33）。

②屋敷 YS1 と屋敷 YS2 と道との屋敷境遺構：屋敷境 D

(ア) 1875 号遺構

(イ) 2010 号遺構

1875 号遺構は直径 0.3m、深さ最大 0.25m の柱穴列からなる屋敷境遺構 4 類である。2010 号遺構は直径 0.3-0.7m、深さ最大 0.45m の柱穴列である。両者は 2m ほどの間隔で南北に並んでいる。

2010 号遺構の方が大きいことから、2010 号遺構を主柱、1875 号遺構を控柱とする二条一対の基礎になる可能性もある。

③屋敷 YS3 と道との屋敷境遺構：屋敷境 E

1221 号遺構

1221 号遺構は幅 0.8-1.4m、深さ 0.3-0.7m の素掘りの溝による屋敷境遺構 1 類である。

覆土は粘土層を主体とする。遺物は 1221 号遺構から中国製の青磁皿、瀬戸・美濃製の志野丸皿に加えて、織部鉢が出土している。

(2) 2-2 期

①屋敷 YS1 と道との屋敷境遺構：屋敷境遺構 A

(ア) 1161 号遺構

直径 0.45-0.5m、深さ最大 3.5m の柱穴列。柱穴列からなる屋敷境遺構 4 類である。

(イ) 0417 号遺構

上幅 0.7-0.8m、下幅 0.4-0.5m、深さ 0.6-0.7m の素掘りの溝からなる屋敷境遺構 1 類である。前段階では 9 グリッドで「く」の字状に屈曲していた屋敷と道との境界は、本段階以降直線状になる (図 53 右上)。

遺物は肥前製磁器大皿に、瀬戸・美濃製の志野坏、志野織部の向付があるので、17 世紀前半に位置づけられる。

1161 号、0417 号ともに屋敷 YS2 まで続いておらず、屋敷 YS1 に対応した屋敷境であると推測する。1161 号遺構は 2-1 期の 1140 号遺構を切っており、0417 号遺構に切られている。

このことから 2-1 期から 2-2 期にかけての屋敷 YS1・屋敷 YS2 の屋敷境は、1140 号→1161 号→0417 号の順で変遷したことがうかがえる。

②屋敷 YS2 と道との屋敷境遺構：屋敷境遺構 B

2-2期の屋敷境遺構Bに該当する遺構は報告されていない。しかし2-3期では、屋敷境遺構Bとして0106-b遺構が検出していることから、2-2期段階から0106-b遺構が屋敷境として機能していたことが考えられる。

③屋敷YS1の南側の屋敷境遺構：屋敷境遺構C

(ア) 0905号遺構

(イ) 0906号遺構

0905号遺構は直径0.3-0.45m、深さ最大0.7mの柱穴列からなる屋敷境遺構4類である。0906号遺構は直径0.25m、深さ最大0.78mである。4類である。

④屋敷YS1と屋敷YS2との屋敷境遺構：屋敷境遺構D

1770号遺構

直径0.4-0.6m、深さ最大0.6mの楕円形の柱穴列からなる屋敷境遺構4類である。柱穴部分の覆土中に直径15-18cm程度の杭の痕跡が認められるものもある。

⑤屋敷YS3と道との屋敷境遺構：屋敷境遺構E

1080号遺構

1080号遺構は幅0.28-0.33m、深さ(残存部)0.25mの素掘りの溝からなる屋敷境遺構1類である。

上部が削平されている可能性が高いが、残っている覆土は砂と粘土が互層になっている。最下層は砂層なので、通水・滞水の可能性は低い。

磁器1点、陶器4点、土器1点が出土している。磁器は中国製である。陶器は志野丸皿のほか、大窯期の製品があることから、17世紀初頭に位置づけられる。

(3) 2-3期・2-4期

①屋敷YS1と東側の道との屋敷境遺構：屋敷境遺構A

0106号

遺構幅0.45m、深さ最大0.7mの石組溝による屋敷境遺構2類である。両側の護岸には築石が積まれているが、上部が壊れているため、本来何段積まれていたかは不明である。

築石の積み方には両側で差が認められる。屋敷側は安山岩製の築石が用いられているのに対して、道側はグリーンタフが用いられている。積み方も屋敷側の方が丁寧だった。溝幅が狭まっている箇所は両側ともに安山岩である。報告書ではここに屋敷YS1の入口があったと想定する。

溝の底部には底石が敷設されているが、この石材は不明。

②屋敷 YS2 と東側の道との屋敷境遺構：屋敷境遺構 B

0106-b 号遺構

屋敷境遺構 A から続くため、規模は 0106 号遺構とほぼ同じである。石組溝による屋敷境遺構 2 類である。しかし溝の両側の護岸に安山岩の築石が用いられている点と、溝の底部に石が敷設されていない点が異なっている。胴木は両側ともに設置されておらず、屋敷 YS1 の屋敷境遺構よりも簡単な構造といえる。築石の掘り方は屋敷 YS2 側の方がより深い。

0106-B 号遺構は 2-2 期段階から屋敷 YS2 の屋敷境遺構として機能していた可能性がある。

③屋敷 YS1 と南側の道との屋敷境遺構：屋敷境遺構 C

(ア) 0189 号遺構

0189 号遺構は幅 0.9m、深さ（残存部）0.3m の石組溝の屋敷境遺構 2 類である。構造は 0106 号遺構と同じである。

この段階から屋敷 YS1 の南側における道との屋敷境が、東側の屋敷境に繋がる様子が明瞭になる。0189 号遺構は以後、明治時代まで屋敷 YS1 の屋敷境として踏襲される。

④屋敷 YS1 と屋敷 YS2 との屋敷境遺構：屋敷境遺構 D

(ア) 1770 号遺構

1770 号遺構は直径 0.4-0.7m、深さ最大 0.6m の楕円形の柱穴列からなる屋敷境 4 類で、2-2 期から引き続いて屋敷境として機能していた。

(イ) 0106-a 号遺構

1770 号遺構の直上に構築された石組溝による屋敷境遺構 2 類である。屋敷 YS1 側の築石の多くは抜き取られているが、現状で幅は 0.6m である。

陶磁器類 522 点が出土している。肥前製のコンニャク印判が捺された磁器碗や、陶胎染付碗や刷毛目碗といった陶器碗が出土することから、17 世紀後葉に位置づけられる。

⑤屋敷 YS3 と道との屋敷境遺構：屋敷境遺構 F

0323 号遺構

0323 号遺構は幅 0.45m の石組溝による屋敷境遺構 2 類である。深さは不明である。底石は敷設されていない。築石の底部では、一部に胴木を検出している。

#### (4) 3期

3期は1698年(元禄11)の火災から、1806年(文化3)の火災を契機に調査区北側が北町奉行所になるまでの、ほぼ18世紀の段階である。この火災を機に、屋敷YS3と屋敷YS4は廃止となる(表33)。

##### ①屋敷YS1と東側の道との屋敷境遺構：屋敷境遺構A

###### 0040号遺構

石組溝による屋敷境遺構2類である。溝の幅は0.7-0.9m。築石は1~2段が残っているが、本来の深さは不明である。溝は屋敷側と道路側とで構造が異なっている。屋敷側の築石は安山岩を素材とし、その調整も丁寧である。築石は胴木の上に載せられている。一方、道路側の築石はグリーンタフを素材として、調整もやや粗雑である。胴木も据えられていない。

##### ②屋敷YS1の南側の屋敷境遺構：屋敷境遺構C

###### 0189号

0189号は2期に構築されたものが踏襲されている。構造は0040号とほぼ同じである。石組溝による屋敷境遺構2類である。

##### ③屋敷YS1と屋敷YS2との屋敷境遺構：屋敷境遺構D

###### 1526号遺構

1526号遺構は調査区内の屋敷を北側と南側とに分ける屋敷境である。石組溝による屋敷境遺構2類である。両側の護岸に積まれた築石は胴木に据えられていない。

2期

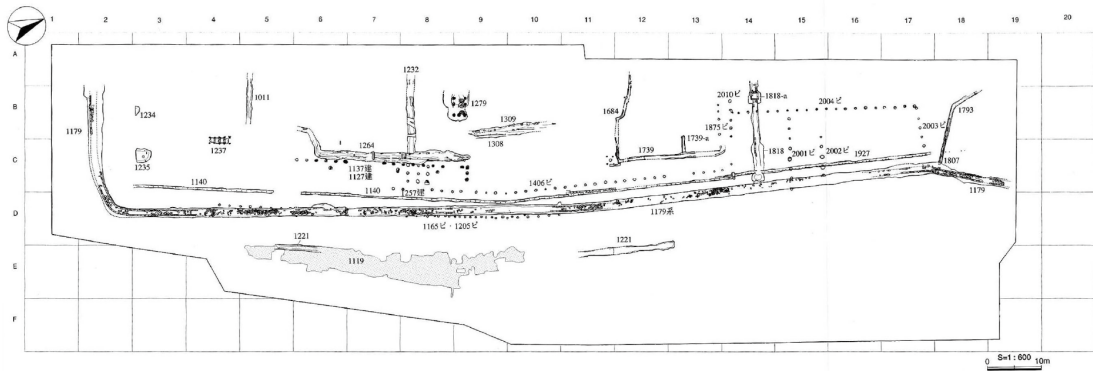
『慶長江戸絵図』(1608年)



『武州豊嶋郡江戸庄図』(1632年)

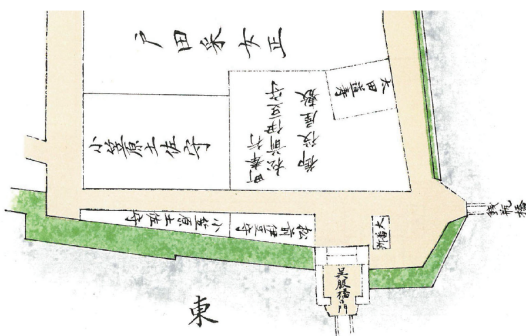


(トレースは千代田区 1998 による)



3期

『御府内沿革図書』(元禄 11 年以前)



『御府内沿革図書』(元禄 11 年)

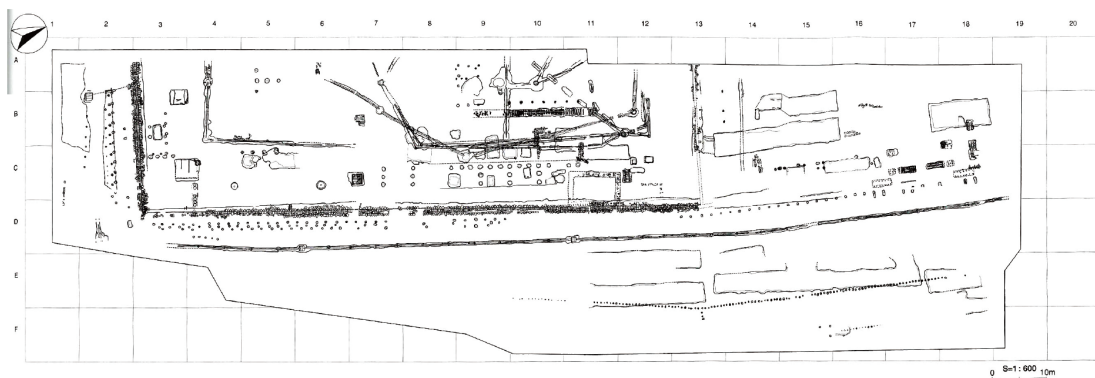


図 53 東京駅八重洲北口遺跡 2 期・3 期の遺構配置 (『慶長江戸絵図』、『武州豊嶋郡江戸庄図』は千代田区 1988、  
『御府内沿革図書』は朝倉 1985 による)



## 2. 文部科学省構内遺跡

文部科学省構内遺跡は延岡藩内藤邸である。屋敷は虎ノ門に隣接していて、西側は溜池である。発掘調査では虎ノ門に連なる石垣が主体で、藩邸の範囲は調査区のわずかな部分だった（文部科学省構内遺跡調査会 2004）。

内藤家長がここに屋敷を拝領するのは、家康の江戸入府から間もない1591年（天正19）のことである。以来、内藤家は幾度の転封を経るが、上屋敷は一貫してこの地にあった。

屋敷境はⅡ期<sup>129</sup>とⅢ期でみていくことにする（図54）。

### (1) Ⅱ期

#### 006b 遺構

006b 遺構は幅1.2m、深さ1.3mの素掘りの溝状遺構による屋敷境遺構1類である。出土遺物から17世紀初頭に廃絶したことがうかがえる。

遺構は調査区の南西から北東方向へと延びており、長さ33mにわたって検出した。近代の攪乱が著しいが、調査区が藩邸の東側の外郭部であったことと、遺構が外堀に平行している状況から、屋敷境の溝と考えられる。

### (2) Ⅲ期

Ⅲ期では次の3基の屋敷境を検出した（図54）。

#### (ア) 006a 遺構

幅0.6m、深さ0.3mの素掘りの溝による屋敷境遺構1類である。

#### (イ) 007 遺構

幅1.0m、深さ0.5mの素掘りの溝による屋敷境遺構1類である。006a 遺構とは軸を同じくして、0.8-1.8mの間隔がある。

#### (ウ) 005 号遺構

幅1.8m、深さ1.6mの素掘りの溝である。堀による屋敷境遺構6類である。

遺構の南側には板柵による護岸の痕跡が認められたが、石垣・石積みの痕跡はない。底部の堆積は褐色シルト層で、鉄分の付着が認められる。このことから水付きだったことがうかがえる。

遺構の廃絶時期は出土遺物から1630年代である。005号遺構には木組みの溝、暗渠が接続されていることから、屋敷内の排水が005号遺構に集約され、ここから外堀へと吐水したものと考えられる。出土遺物が外堀普請（1639年）よりも先行することから、それ以前の外堀に連な

---

<sup>129</sup> Ⅱ期は自然堆積層上に構築された最初期の遺構面（Ⅰ期）の上に盛土された遺構面である。

ることになる。007号とは一部で切り合っていて、重複関係から005号の方が新しいことが判明した。

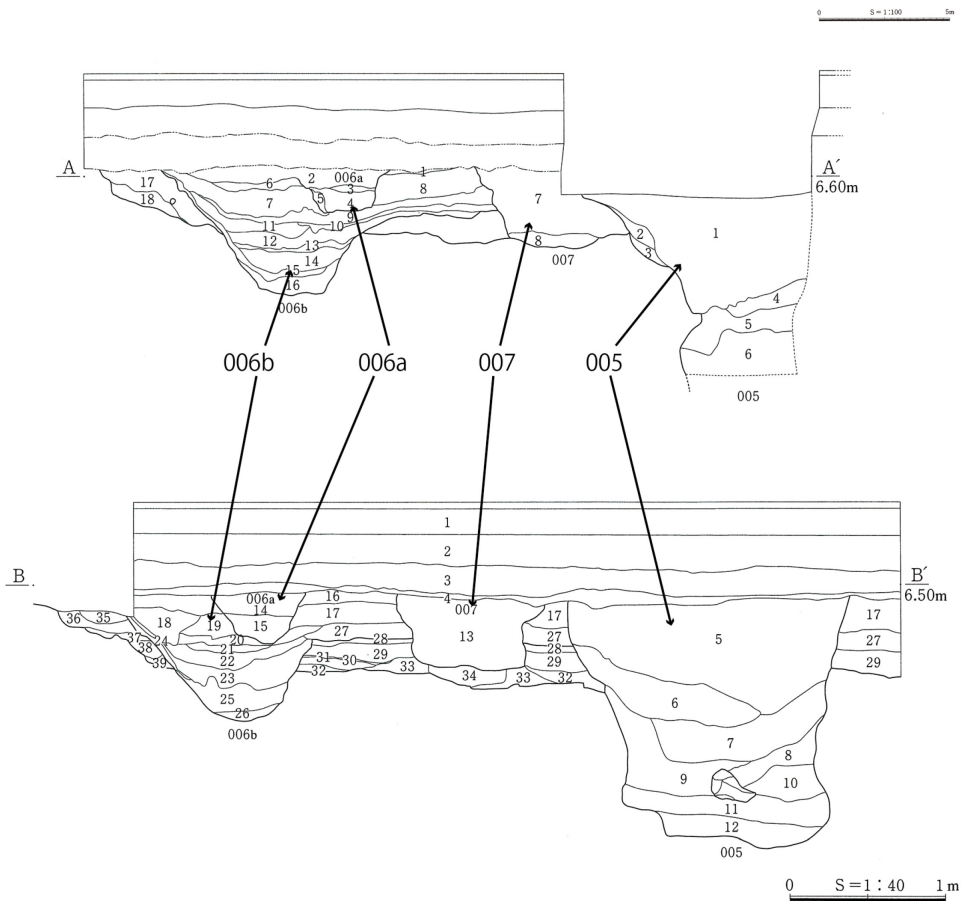
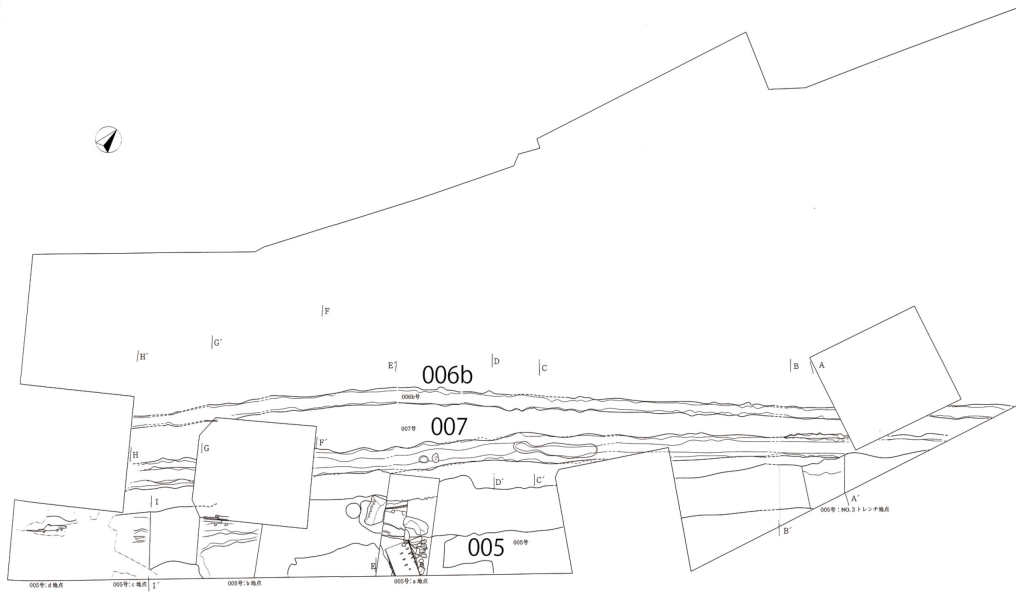


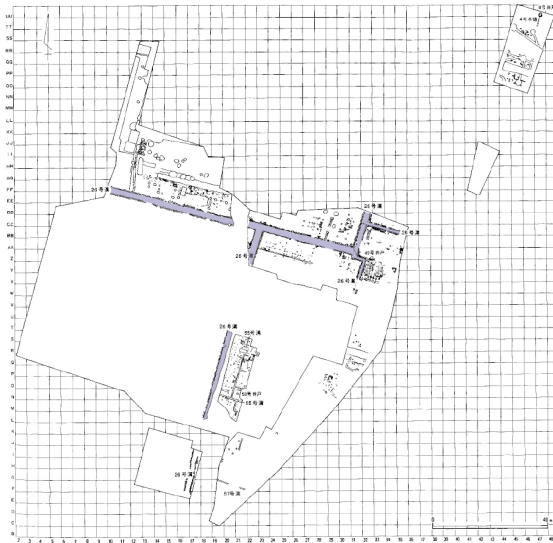
図 54 文部科学省構内遺跡Ⅲ期の屋敷境遺構（文部科学省構内遺跡調査会 2004）

### 3. 丸の内三丁目遺跡

丸の内三丁目遺跡は大名小路の一角にある（図 56）。調査では5つの生活面（1-5面）を検出した。生活面は1698年（元禄11年）の火災を画期に、それ以前（5-3面）と以後（2・1面）に分けられる（東京都埋蔵文化財センター1994・図 55）。

#### 丸の内三丁目遺跡の屋敷境遺構

1698年（元禄11）以前：26号溝（新）



1698年（元禄11）以後：1号溝

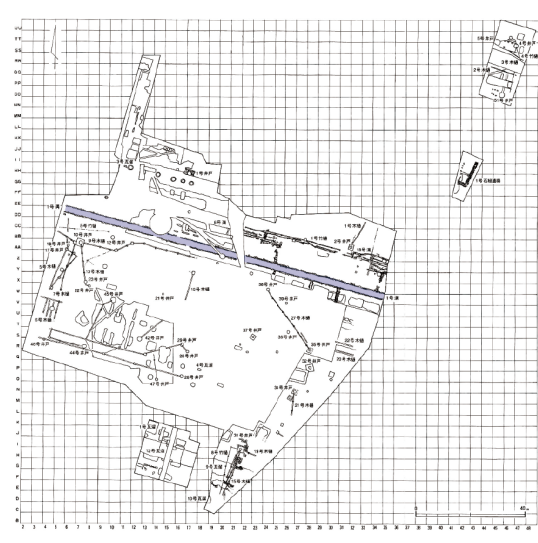


図 55 丸の内三丁目遺跡の屋敷境遺構（東京都埋蔵文化財センター1994）

#### (1) 5面

5面は自然堆積層上に構築された生活面である。屋敷境遺構は3面と5面とで重複して検出した。ここでは便宜的に5面段階の屋敷境遺構を26号溝（旧）、3面段階の屋敷境遺構を26号溝（新）と呼ぶ。26号溝（旧）は26号遺構（新）によって遺構の大部分が壊されており、形態は不明である。

26号溝（旧）の南北にはそれぞれ柱穴列（5号ピット、6号ピット）がある。5面の段階では、屋敷境として26号溝（旧）とともに、それぞれの屋敷に柵状の施設が併設されていたことがうかがえる。

#### (2) 3面

3面の屋敷境が26号溝（新）である。幅は0.7m-1.8m。深さ1.5mの堀による屋敷境遺構6類である（図 57）。底面の覆土は鉄分の多い砂層（6層）やヘドロ状の黒色粘土層なので、水付きだったことがうかがえる。

胴木の構造は、西側の胴木は杭で打ち込まれ、東側は胴木が据えられるという違いがある。これは調査地が日比谷入江の東岸に当たっているため、地盤の強さに応じた工法であることが指摘されている（東京都埋蔵文化財センター前掲）。

### (3) 1 面

1698 年(元禄 11 年)の火災以後の屋敷境となるのが 1 号溝である。1 号溝は築石積みの溝で、深さはおよそ 1.5m、幅は 1.8m で、堀による屋敷境遺構 6 類である (図 58)。

堆積状況は不明<sup>130</sup>だが、26 号溝(新)の覆土が水成堆積層だったことから、1 号溝の覆土も同様だと考えられる。

1 号溝の北側が土佐藩、南側が阿波藩となる (図 56-④)。1 号溝の護岸は南北で構造が異なっている。北側(土佐藩邸)は、南側(阿波藩邸)で用いられている築石よりも大きな石が用いられており、その形も揃っていない傾向が見受けられる (図 58 写真)。

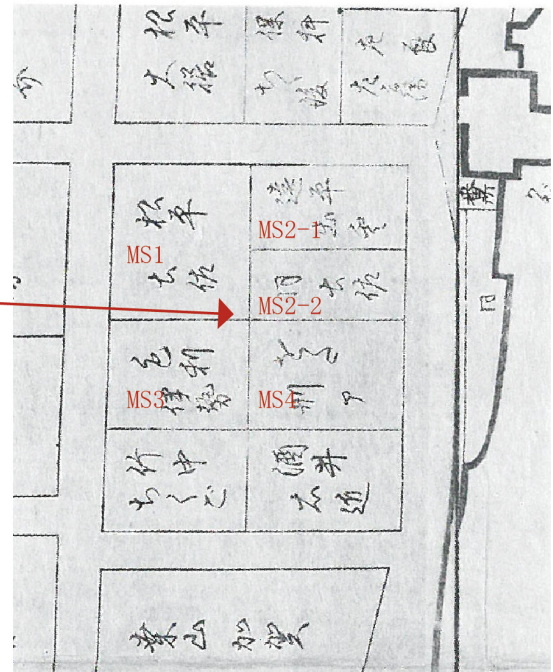
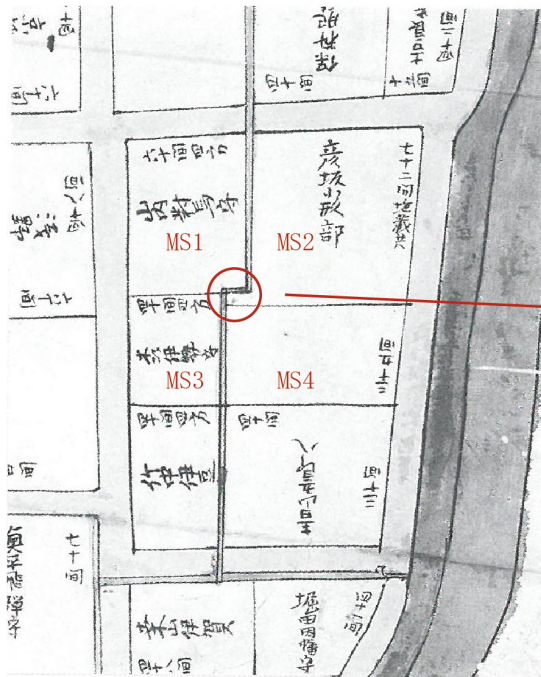
このことから、屋敷境の構築はそれぞれの拝領者自身が行ったことが指摘された(東京都埋蔵文化財センター前掲)。

---

<sup>130</sup> 該期の遺構の一部に関しては、「整理担当者の意志により、土層説明を記載していない」ものがある(東京都埋蔵文化財センター1994)。1 号溝もその一つであるため詳細は不明。

①『慶長江戸絵図』(1608年)

②『寛永御江戸絵図 完』(1624-43)



③『御府内沿革図書』元禄十一年以前之形 (1698 以前)

④『御府内沿革図書』元禄十一年之形 (1698)

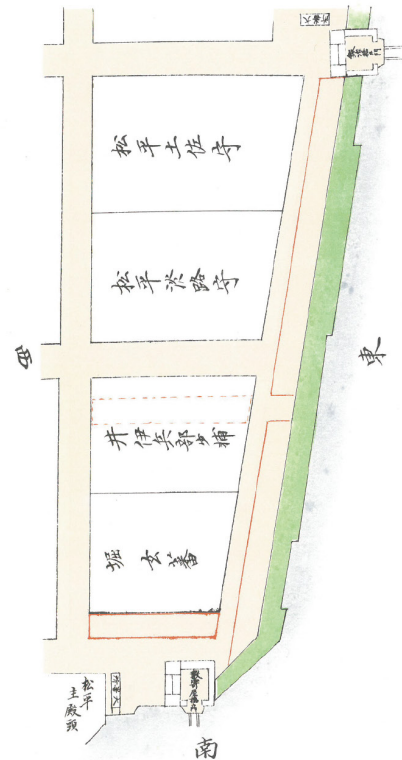
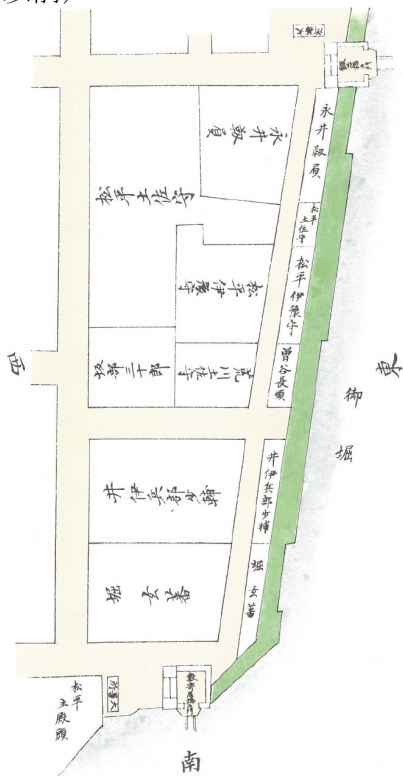
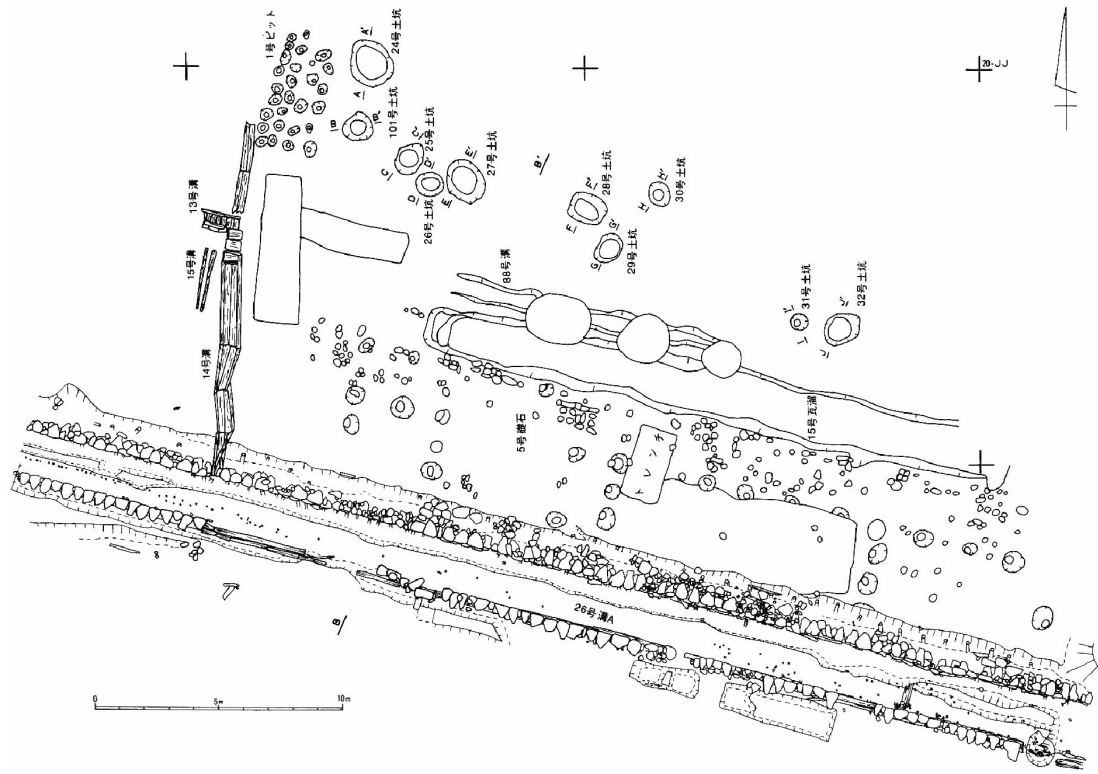
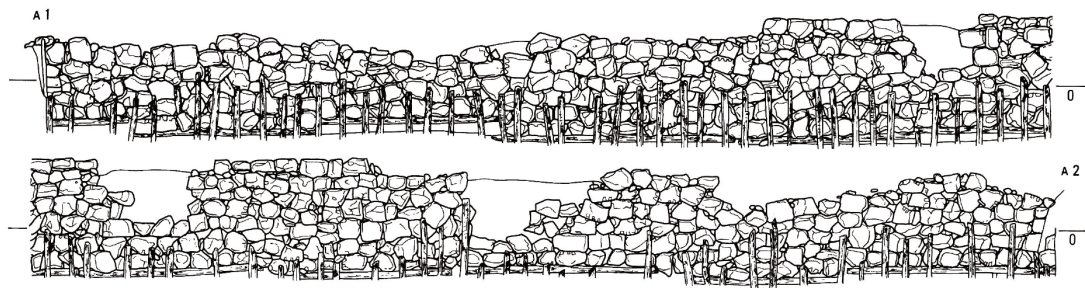


図 56 丸の内三丁目遺跡の居住者の変遷 (①・②: 東京都埋蔵文化財センター1994、③・④: 朝倉 1985 を基に作成)



北側石垣立面図



南側石垣立面図

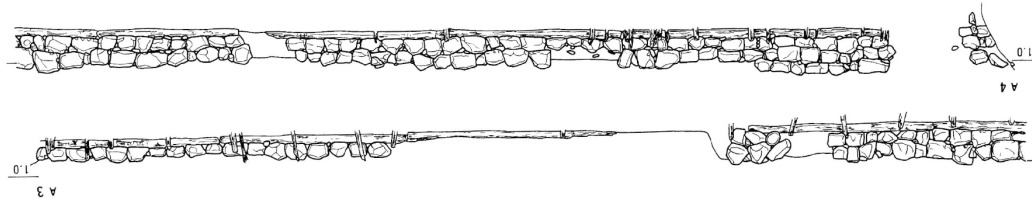
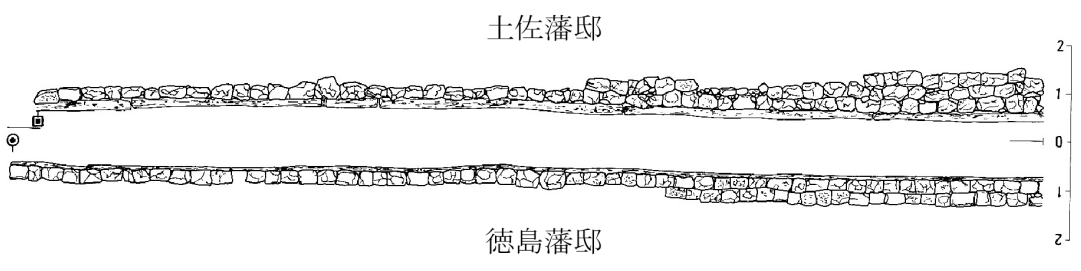
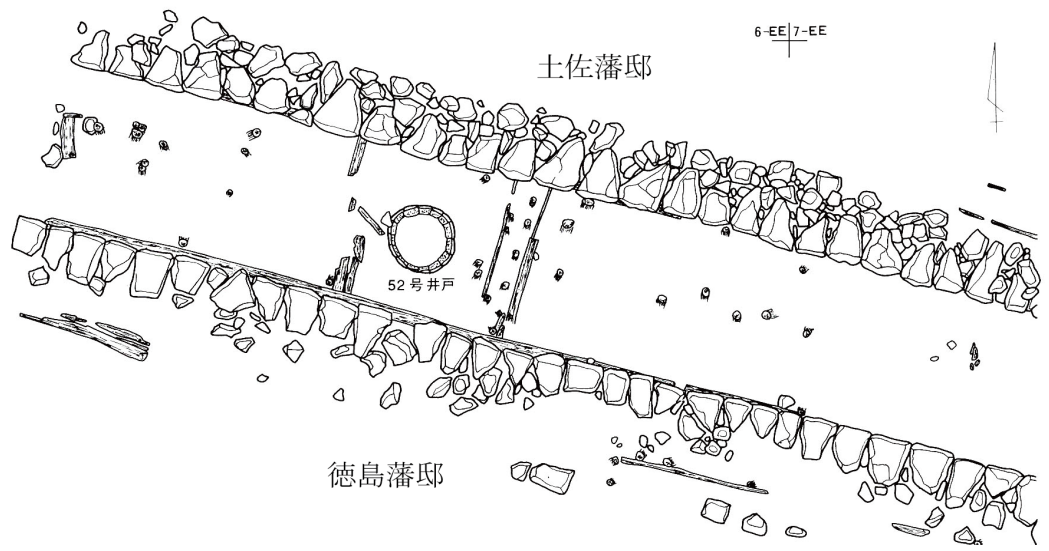


図 57 丸の内三丁目遺跡 26 号溝 (新) A (東京都埋蔵文化財センター1994)



土佐藩邸側の石垣検出状況



徳島藩邸側の石垣検出状況



図 58 丸の内三丁目遺跡 1号溝 (東京都埋蔵文化財センター1994)



#### 4. 有楽町二丁目遺跡

有楽町二丁目遺跡は、1606年（慶長11）に堀秀家らが屋敷を拝領した。最初の屋敷造成に伴う面（I期）の屋敷境遺構のあり方を、調査区BとCでみていくことにする（武蔵文化財研究所2006・図59）。

##### (1) S113系溝

S113系溝（S113溝・S204溝）は幅2.54m、深さ0.64mで、長さは現状で13.72mを測る。断面形は中央部がやや深くなるが、両側が緩やかに立ち上がる形状を呈している。堀による屋敷境遺構6類である。

S113溝からは磁器14点、陶器66点が、S204溝では磁器4点、陶器44点が出土している。瀬戸・美濃製陶器には天目茶碗や灰釉皿があり、1630-40年代に位置づけられている（武蔵文化財研究所前掲）。調査地北側は1630年（寛永7）に安中藩井伊直勝が拝領している<sup>131</sup>ので、この溝は井伊家と堀家を分ける屋敷境である。

##### (2) S113系溝の南側

###### (ア) S240溝

S240溝は幅0.79m、深さ0.32mで、東西方向7.8m分が確認されている。溝の底部には長軸30-50cm、短軸10-30cmの柱穴が設けられているので、溝の底部に柱穴を伴う屋敷境遺構3類である。

溝の底部に設けられた柱穴の間隔には2m間隔のものと3m間隔のものがあって、一定とは言えない。これとは別に木杭痕も検出されているが、S240溝との関係は不明である。

出土遺物は肥前製磁器1点、土器片2点、石製品1点の合計4点で、17世紀代に帰属するものと考えられるが、詳細は不明である。

###### (イ) S234系ピット列

S240溝と同じ位置にある柱穴列である。柱穴列による屋敷境遺構4類である。柱穴の規模は直径80-90cm、深さ20-70cm。間隔は1.5mである。時期は不明。

###### (ウ) S236系ピット

---

<sup>131</sup> 『東京市史稿 市街篇第4』の「井伊家譜」によると、桑山丹後守の屋敷から、水野監物、靱負佐（井伊直滋）の屋敷を経て拝領した。

S240 溝の北側 1.5m の場所には S236 系ピットがある。直径 39-48 cm、深さ 11-31 cm の柱穴からなり、柱穴の間隔は 1.9-2.0m である。柱穴列による屋敷境遺構 4 類である。17 世紀代。

(エ) S205 溝

S205 溝は S236 系ピットの北側に構築されている板組の溝である。溝による屋敷境遺構 1 類である。遺物が少ないため時期の詳細は不明だが、17 世紀前葉頃に比定されている。

以上のように S113 の南側には 17 世紀代の屋敷境遺構が複数ある。この部分は 1707 年（宝永 4）に南町奉行所となるまで堀家の屋敷だった。1698 年（元禄 11）の火災で堀家と井伊家はともに焼失し、それを機に井伊家の敷地が北側に縮小されるので、火災以降の屋敷境は調査区の北側に移ったはずである。

現状では遺構の切り合い関係を有する S240 溝と S234 系ピット列を除いて前後関係は詳らかではないが、屋敷境遺構の構築年代が 1606 年から 1698 年の間に限定できるので、17 世紀代の大名屋敷の屋敷境のあり方を知る上で重要な調査例といえる。

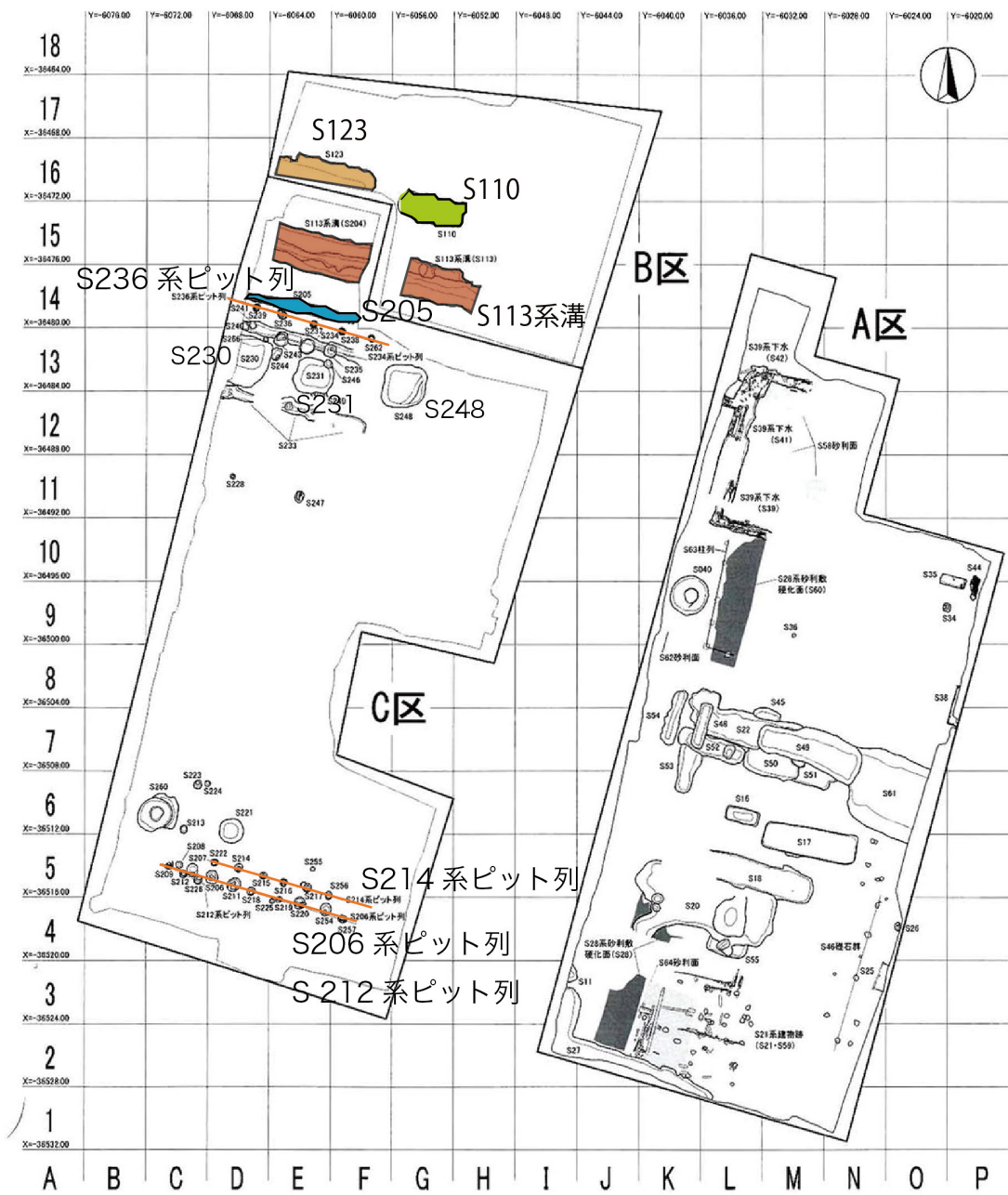


図 59 有楽町二丁目遺跡 I 期の屋敷境遺構 (武蔵文化財研究所 2006)

## 5. 紀尾井町遺跡

紀尾井町遺跡は溜池へ向かう谷に隣接した台地上に立地した遺跡で、屋敷地の傾斜を大規模な盛土造成によって平準化した痕跡が認められる（後藤宏樹 1990）。

SD34 は盛土造成が行われた部分を東西に掘り込んで構築した遺構である（千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988）。羽子板状を呈した大型の溝状遺構で、東側が幅 2.3m、深さ 0.9m、西側が幅約 13m、深さ約 4m である。遺構の北側が上山藩土岐家、南側が横須賀藩本多家の屋敷となる。

SD34 の底部には木樋（SZ39、SZ41）、石垣（SN38）、廃棄土坑（SR35）が構築されている。石垣は南側に対面する石垣が未検出だが、木樋が検出していることから本来は石組溝だった可能性もある。

SD34 の形態と規模は堀による屋敷境遺構 6 類に分類できる。しかし SD34 内部の遺構分布は、SD34 が単独で土岐邸と本多邸の屋敷境となっていたのではなく、屋敷外郭部に構築された“共同溝”のような存在だったと推測される。本来の屋敷境は木樋や石組溝といった排水施設だった可能性も考えられる。

## 6. 飯田町遺跡

飯田町遺跡は旧平川（神田川）によって開析された、麴町台地と本郷台地に挟まれた谷に位置する遺跡である（千代田区飯田町遺跡調査会 2001）。遺跡は1～3期の生活面が認められるが、ここでは1期と2期で屋敷境遺構をみていくことにする。

### (1) 1期（図 60）

#### ① 「堀跡」

調査区北側で逆「く」の字状に屈曲した幅 10-13m（南側部分）、深さ 1.0-1.5m の素掘りの「堀跡」<sup>132</sup>を検出した（図 61）。堀による屋敷境遺構 6 類である。

「堀跡」は調査区の北西側から南西方向へと向かい、途中（E-F ラインの境目附近）で逆「く」の字状に屈曲してほぼ南側へと伸びる。そして H-I ラインの境目で杭と矢板による土留（1960 号遺構）で閉鎖される。1960 号遺構は東西を石積遺構（1957 号遺構-a、b）に挟まれている。

遺構の覆土には黒色～黒褐色粘土層が堆積しており、この堆積状況から水付きの堀だったことがわかる。遺構下部の堆積層を中心に焼土を含む層が目立つ。特に 27 層は焼けた瓦を多く含む焼土層である（図 61）。これは「堀跡」の廃絶時に、火災瓦礫によって埋め戻されたことを示しており、遺物組成から 1657 年（明暦 3）の明暦の大火に伴う廃棄であったと考えられている<sup>133</sup>。

図 60 に掲載した『御府内沿革図書』（延宝以前ヨリ）と『正保年間江戸絵図』には、屋敷の拝領者は榊原式部とある。『正保年間江戸絵図』では外堀とは連結しない水路が「し」の字状にくねりながら江戸城北の丸方面へと伸びていって、そこで外堀に合流している。榊原邸は水路の東側で<sup>134</sup>、西側には旗本屋敷が 4 軒ある。堀跡は榊原邸と旗本屋敷との屋敷境をなした水路に相当する。

#### ② 6279 号遺構

---

<sup>132</sup> 報告書では遺構番号は付されておらず、「堀跡」として掲載されている。本稿でも遺構の名称として「堀跡」と呼称する。

<sup>133</sup> 遺物では磁器製の中皿が目立つ。特に蓋付きの曲げ物に収納された状態で出土した 8 枚の景德鎮窯系青磁皿は、17 世紀代の大名屋敷の宴会儀礼で供される什器組成の様相を示すとともに、大名屋敷での食器の保管状況を具体的に知る点でも重要である。

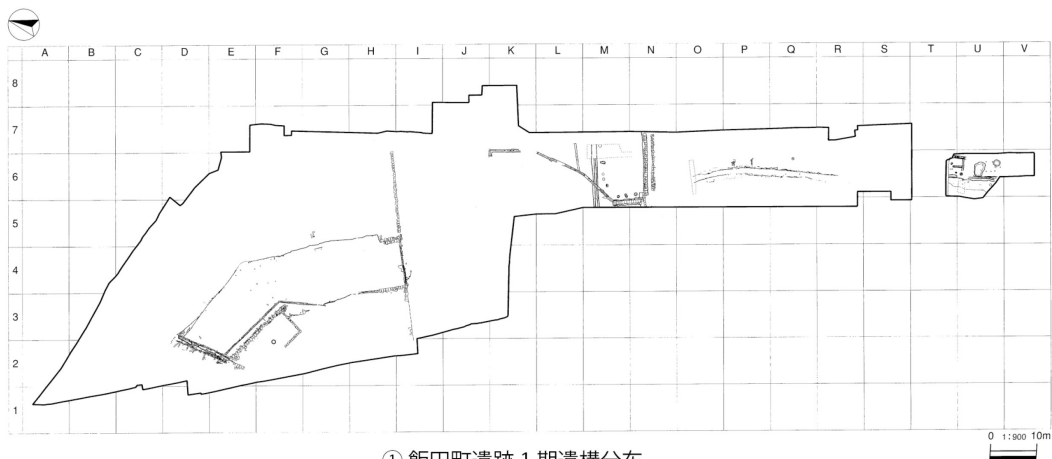
<sup>134</sup> 遺跡は 1705 年（宝永 2）に高松藩が上屋敷として拝領するまで、榊原家の上屋敷だった。榊原康政は家康入府直後の大知行取の知行割で池之端に屋敷を拝領している。1590 年代後半（天正末から慶長初年）に、小石川門外の当地に上屋敷を拝領する（岩淵 1995）。

榊原家の南側を画する屋敷境遺構は、明暦の大火の後に南側へと移った。「堀跡」から 54m 南の N ライン付近で検出した石組の溝（6279 号遺構）が、明暦の大火以降の榊原邸の屋敷境（石組溝・2 類）である（図 62）。

6279 号遺構は幅約 1.0m、深さ 1.0m の石組溝による屋敷境遺構 2 類である。北側（榊原家側）の石積みは 20 cm 角の胴木を 2 列敷並べた上に、角錐状の石（サイズに規格性はない）を用いている。それに対して南側（御台所衆屋敷側）では胴木を用いず、石も北側より小振りで、河原石も用いられているという構造の違いが認められた<sup>135</sup>（図 62）。

---

<sup>135</sup> 1705 年（宝永 2）に高松藩が屋敷を拝領した時点の屋敷境も 6279 号の位置だったが、その後南側の御台所衆屋敷などを拝領して拡大するのに伴い、南側の屋敷境は調査区南端の 6232 号へと移る。



① 飯田町遺跡 1期遺構分布



②『御府内沿革図書』延宝以前ヨリ之形 (1673 年以前)



③『正保年間江戸絵図』(1644 年以前)

図 60 飯田町遺跡 1 期の検出遺構と 17 世紀代の遺跡周辺 (①・③: 千代田区飯田町遺跡調査会 2001、②: 朝倉 1985 より)

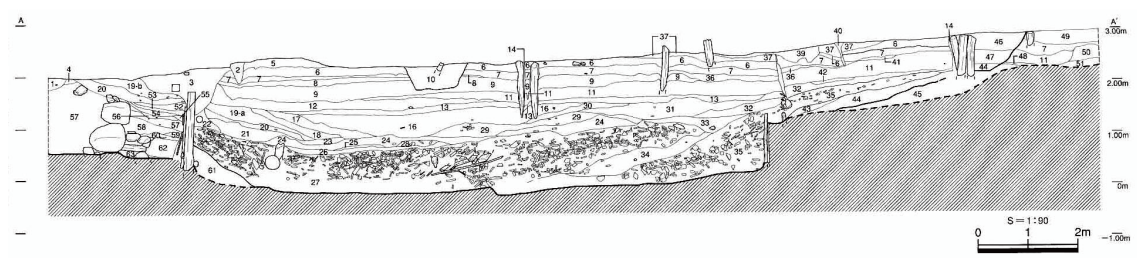
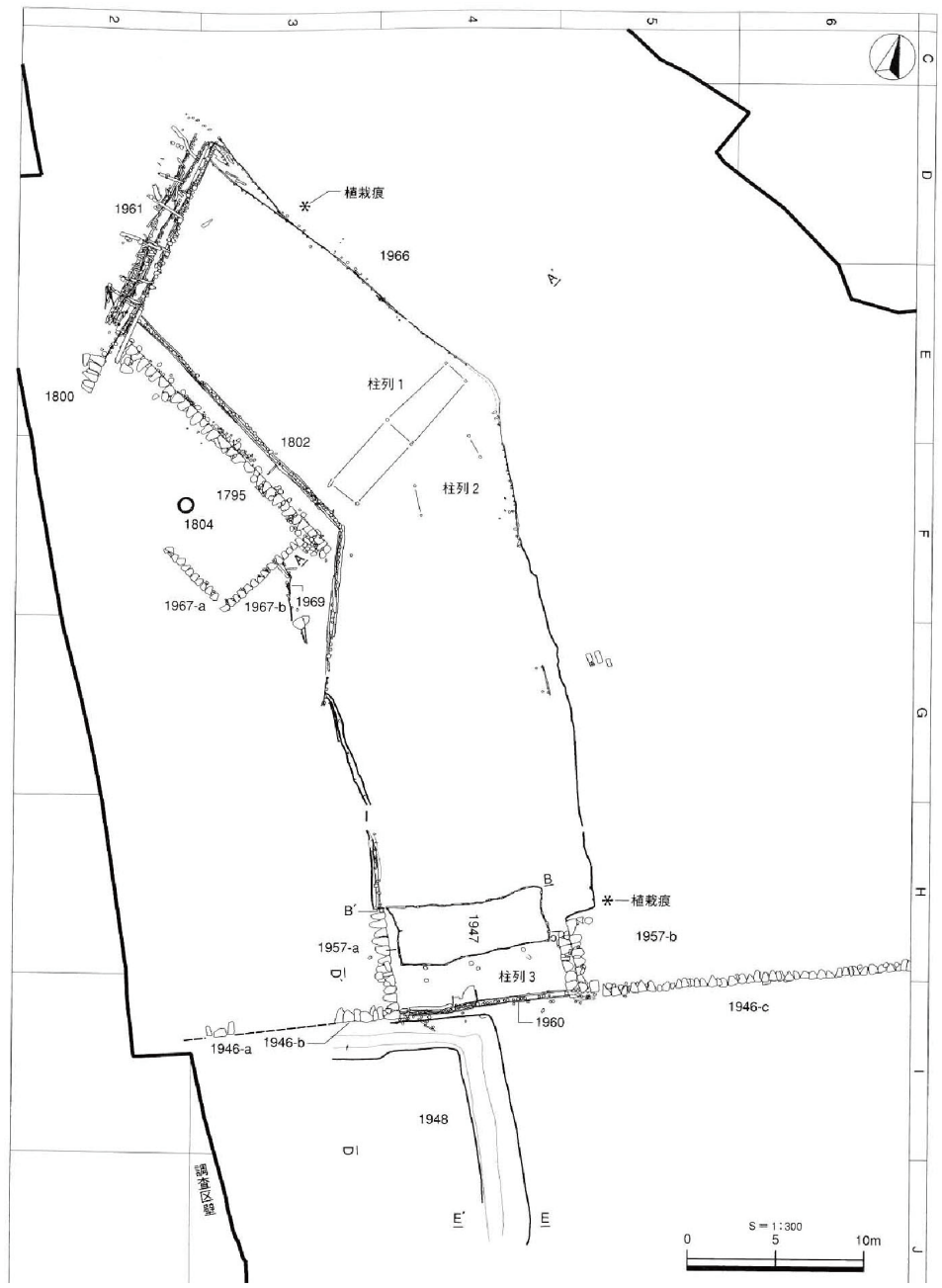


图 61 飯田町遺跡掘跡 (千代田区飯田町遺跡調査会 2001 一部改変)



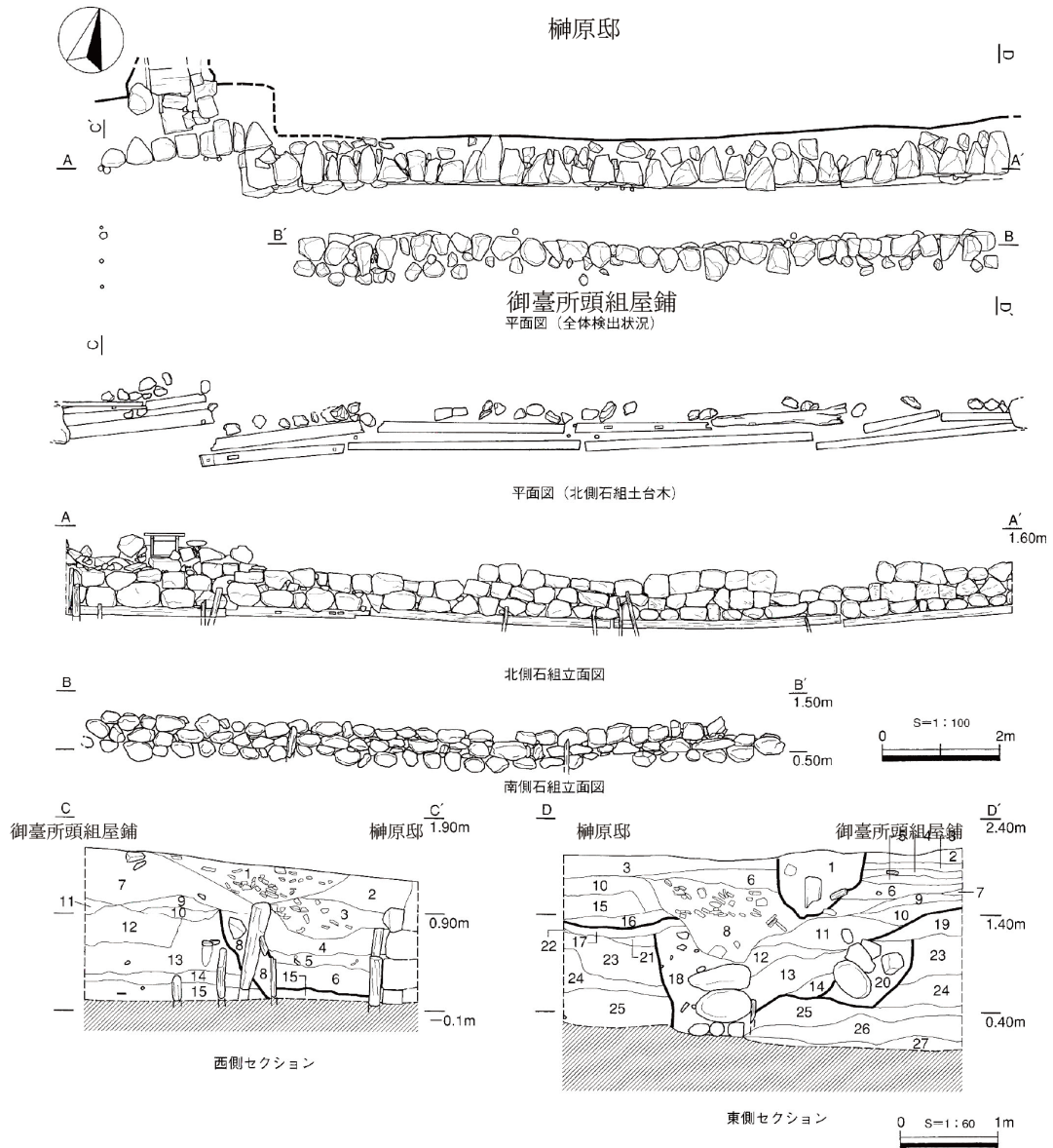


図 62 飯田町遺跡 6279 号遺構 (千代田区飯田町遺跡調査会 2001 一部改変)

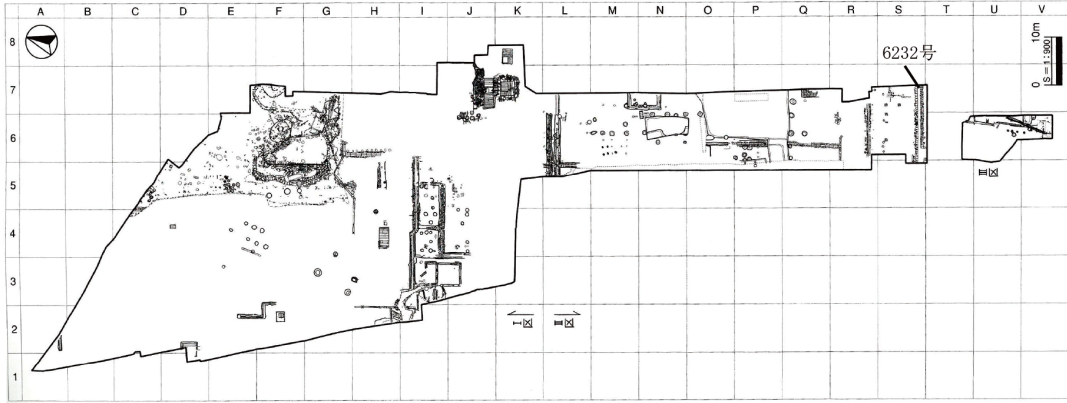
(2) 2 期

榊原邸は 1705 年（宝永 2）に上地となり、替わって高松藩が拝領した（図 63）。

6232 号遺構は調査区の南寄り（Ⅱ区）で検出した石組溝による屋敷境遺構 2 類である。溝幅は 0.5m、深さは 1.2m ある（図 64）。北側が高松藩邸、南側が道路となる。

石組の構造は南北で異なっている。北側は築石が 3 段、南側は築石が 2 段（場所によって 3 段）積まれている。北側の築石は、小面の短辺が 30-45 cm、長辺が 35-70 cm、控えは 30-60 cm で、裏込めに多量の礫が充填されている。南側の築石は、小面の短辺が 10-30 cm、長辺が 20-50 cm、控えは 20-40 cm である。胴木は北側・南側のどちらも据えられていないが、北側の築石は遺構確認面から 1.8m 掘り込んで据えられているのに対して、南側の掘り込みは 0.8m と浅い。

このように使用されている築石、掘り方ともに北側、すなわち高松藩邸側の護岸が堅固な構造となっている。



『御府内沿革図書』宝永七年之形（1710年）

図 63 飯田町遺跡 2 期の検出遺構と 18 世紀代の遺跡周辺（上：千代田区飯田町遺跡調査会 2001、下：朝倉 1985 より）

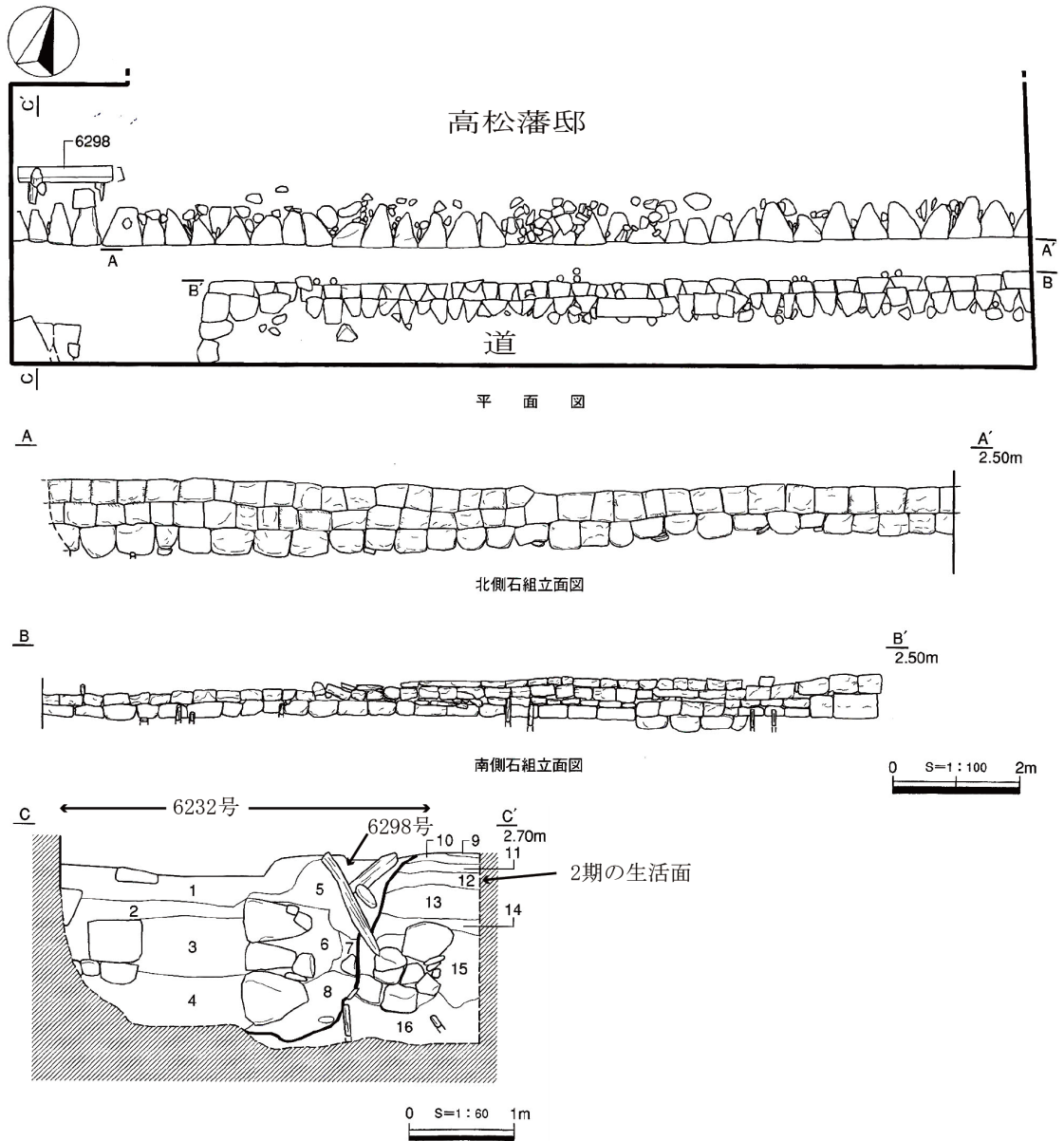


図 64 飯田町遺跡 6232 号遺構 (千代田区飯田町遺跡調査会 2001 一部改変)

## 第2項 港区内の大名屋敷跡遺跡

### 1. 播磨赤穂藩森家屋敷跡

播磨赤穂藩森家屋敷跡の調査区には森家と旗本神尾家の屋敷が含まれている(港区教育委員会2005・図 65 右下)。

#### (1) 1号遺構

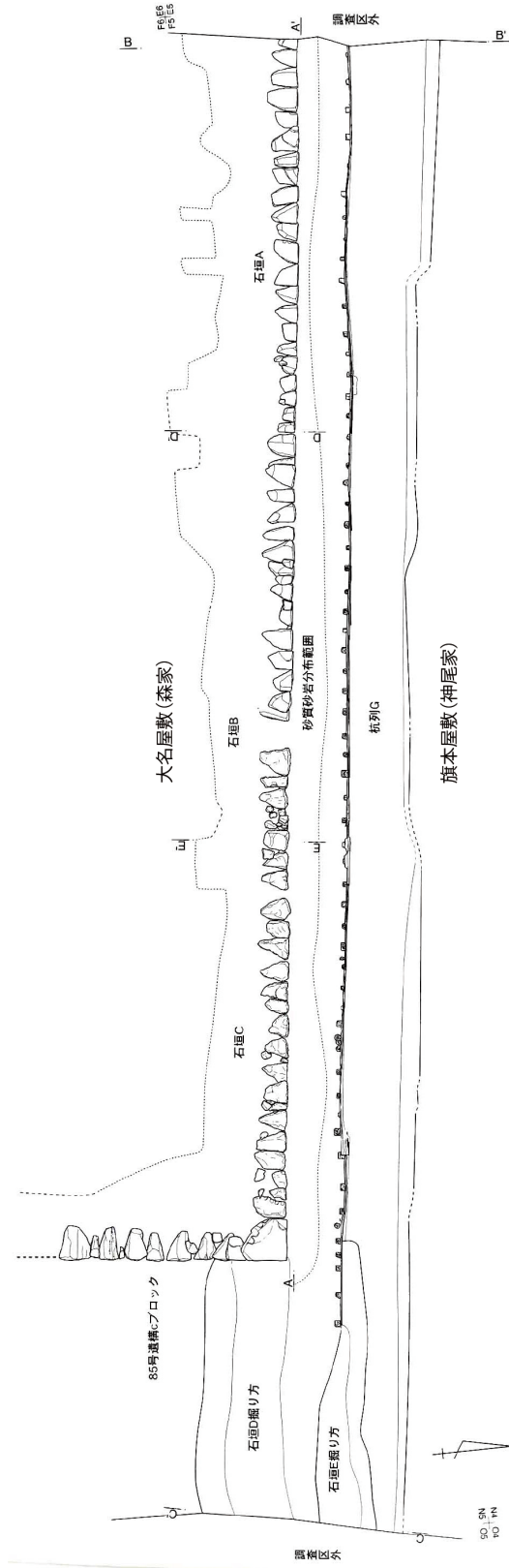
1号遺構は幅1.5m、深さ2.3mの堀(6類)である(図65)。護岸の構造は南北で異なっている。石垣があるのは南側のみで、北側は杭列となっている。

石垣は東側のコーナー部分が直方体の石を算木積みにした角石だが、それ以外は7-8段の築石を布積みにしている。胴木はみられず、自然堆積層(上部有楽町層)に直接積みあげている。

北側で検出した杭は60cm間隔で穿たれており、その間に厚さ4cm程度の板材が横向きに渡されていたことから、柵による護岸(土留)だったことがうかがえる。

#### (2) 85号遺構

1号遺構東側から90度まがり、南北方向にのびる石垣である。これは森邸の東側の屋敷境で、図65下左に掲載した『御府内沿革図書』(芝海手・延宝年間)では関邸との屋敷境となっている。調査範囲の関係で関邸側の土留は未調査だが、1号遺構と同様に堀による屋敷境遺構6類だったことが推測される。



旗本屋敷(森家) 旗本屋敷(神尾家)

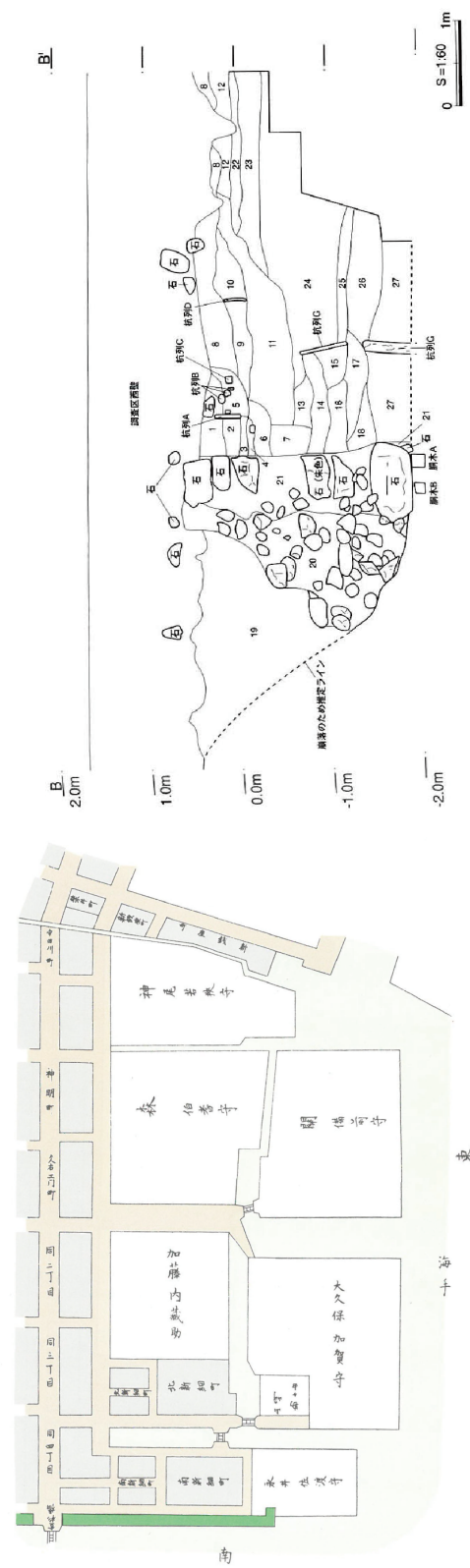


図 65 播磨赤穂藩森家屋敷 1 号遺構 (港区教育委員会 2005)・『御府内沿革図書』(朝倉 1985) にみる調査地点

## 2. 汐留遺跡

汐留遺跡は脇坂家・伊達家・保科家（会津藩松平家）の大名屋敷を含む、約 270,000 m<sup>2</sup>の遺跡である。保科家は 1639 年（寛永 16）、伊達家は 1641 年（寛永 18）にこの地を拝領した。脇坂家の拝領時期は不明ながら、『武州豊嶋郡江戸庄図』（1632 年・寛永 9）に「わき坂あち下やしき」とある。他の二家よりもやや先行して拝領と造成を始めたことがうかがえる<sup>136</sup>。

### ① 延宝年中之形（図 66-①）

1673 年-1681 年頃の状況を示している。3 屋敷ともに西側は日比谷二丁目町屋などの町屋と道を挟んで接している。伊達家と保科家との間には水路（会仙川）を挟んでいる。脇坂家の北側は道と明地がある。保科家の屋敷は南側から東側（海手）まで道で囲われている。東側の道の突端には、90 度曲がって東側へと続く橋が描かれている。これは浜御殿の中之門へと続くものである。一方、脇坂家の南東側から伊達家の東側は水路である。

### ② 当時之形（文久 2 年）（図 66-②）

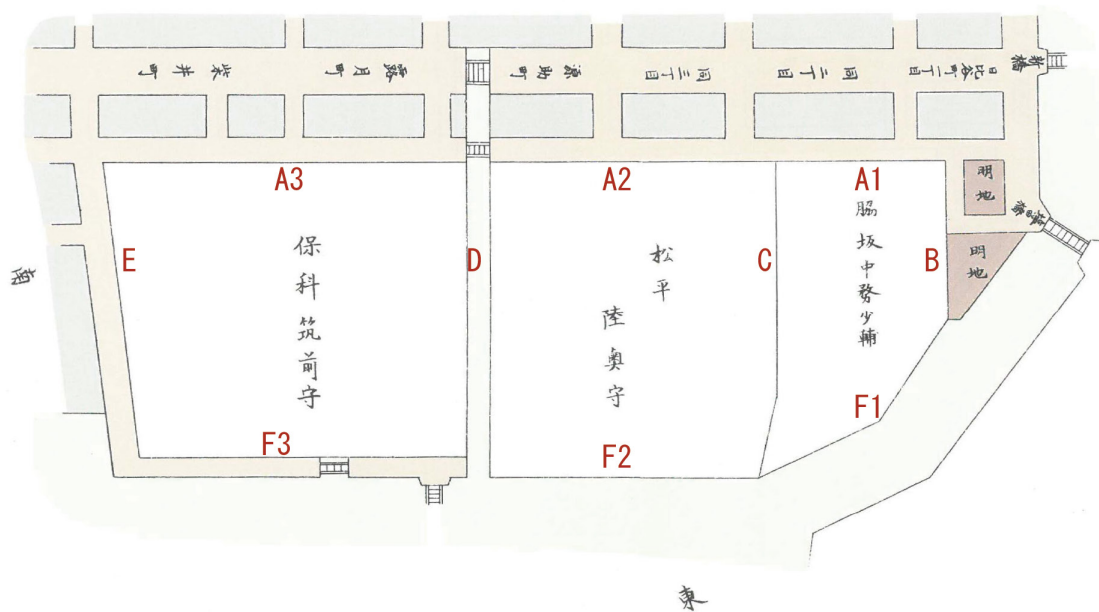
1862 年（文久 2）になると、脇坂家の南東側から伊達家の南側にかけても道が敷設され、水路は「御堀」と記されている。

図 66 の A～H は汐留遺跡に含まれる三つの大名屋敷の屋敷境を示している。調査区の関係で、図 66 の A～H が全て調査できたわけではない。発掘調査で明らかになったのは A2・B・C・F1・F2 の部分に該当する屋敷境のみである（表 34）。

<sup>136</sup> いずれの屋敷も当初は下屋敷として拝領したが、後に上屋敷または中屋敷へと唱替となる。

脇坂家	1657 年（明暦 3）	上屋敷
保科家	1658 年（元治元）	中屋敷
伊達家	1676 年（延宝 4）	上屋敷

①延宝年中之形 (1673-1681)



②当時之形 (文久2・1862)

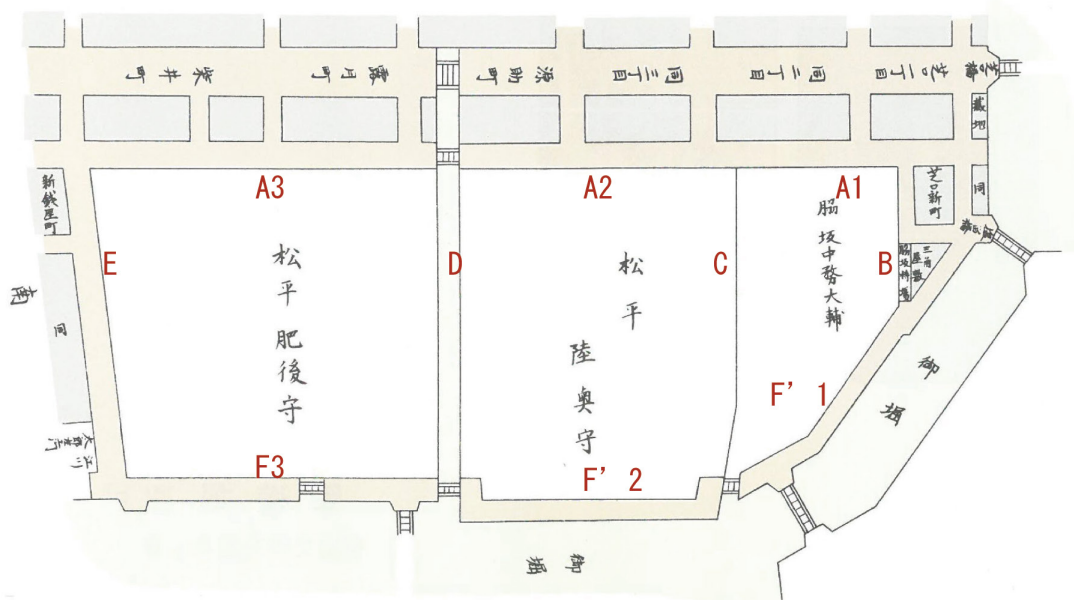


図 66 『御府内沿革図書』にみる汐留遺跡 (朝倉 1985 を基に作成)



境	遺構	類	構造差	上幅	下幅	深さ
A1	—					
A2-1	4K-007	2	不明	0.91	—	1.28
A2-2	1号溝(調査会)	2	○	0.48-0.55	—	0.86
A3	—					
B-1	6L-006	2	○	1.00	—	1.12
B-2	6K-0796	2		—	—	2.10
C-1	6J-335	6	○	3.80	3.80	2.40
C-2	6J-568	6	○	〃	〃	3.00
D	—(会仙川)					
E	—					
F1-1	6K-0412	7	—	—	—	—
F1-2	6K-0545/7J-044	2	不明	0.48	—	0.28
F2	6I-407		不明	0.40	—	0.32
F3	—					

表 34 汐留遺跡内の屋敷境遺構と屋敷境 (単位:m)

(1) A2 の屋敷境遺構

①4K-007

4K-007 は仙台藩邸の西側の屋敷境遺構である（東京都埋蔵文化財センター1997）。築石が積まれた石組の溝（2類）である。調査区の西端にあたるため、西側の石組は一部しか確認できていない（図 67 下）。東側は築石が3段積まれていたが、高さが不揃いなので上部が削平されている可能性が高い。現状では溝の幅が0.9m、深さ1.28mである。

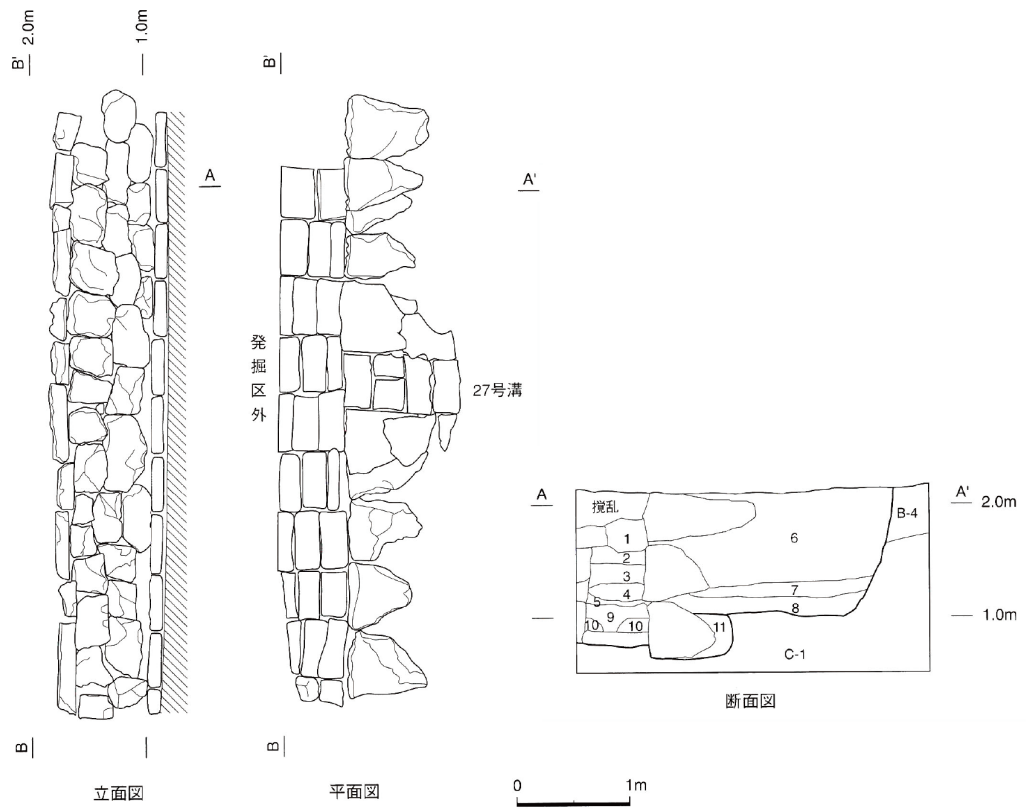
溝の東側（屋敷側）と西側（道側）で石積みの高さや構造に差が存在したかは不明である。溝底には底石が敷設されていた。北側で龍野藩邸と仙台藩邸との屋敷境（C）をなす6J-500と接続している。

②1号溝

汐留地区遺跡調査会が実施した調査区（図 67 上）で検出した（汐留地区遺跡調査会 1996）。1号溝は調査区外の西側（道側）の石積みについても立面図が提示されている（図 67 上）。それによれば、西側は築石が3段積まれている上に、布石が1段並べられて笠石となっている。

東側は築石が3段積まれているが、西側よりも大型の築石が用いられている。その結果、東側（仙台藩邸側）の石垣の方が現状で0.3mほど高い。

# 1号溝



# 4K-007

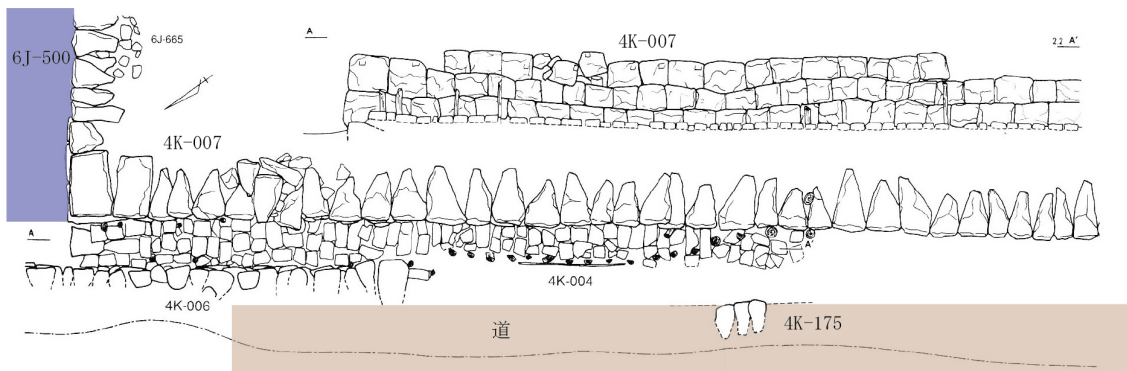


図 67 屋敷境 A2 の遺構 (1号溝・4K-007) (汐留地区遺跡調査会 1996・東京都埋蔵文化財センター1997 より)

仙台藩邸の屋敷境と表長屋・土坑の位置関係

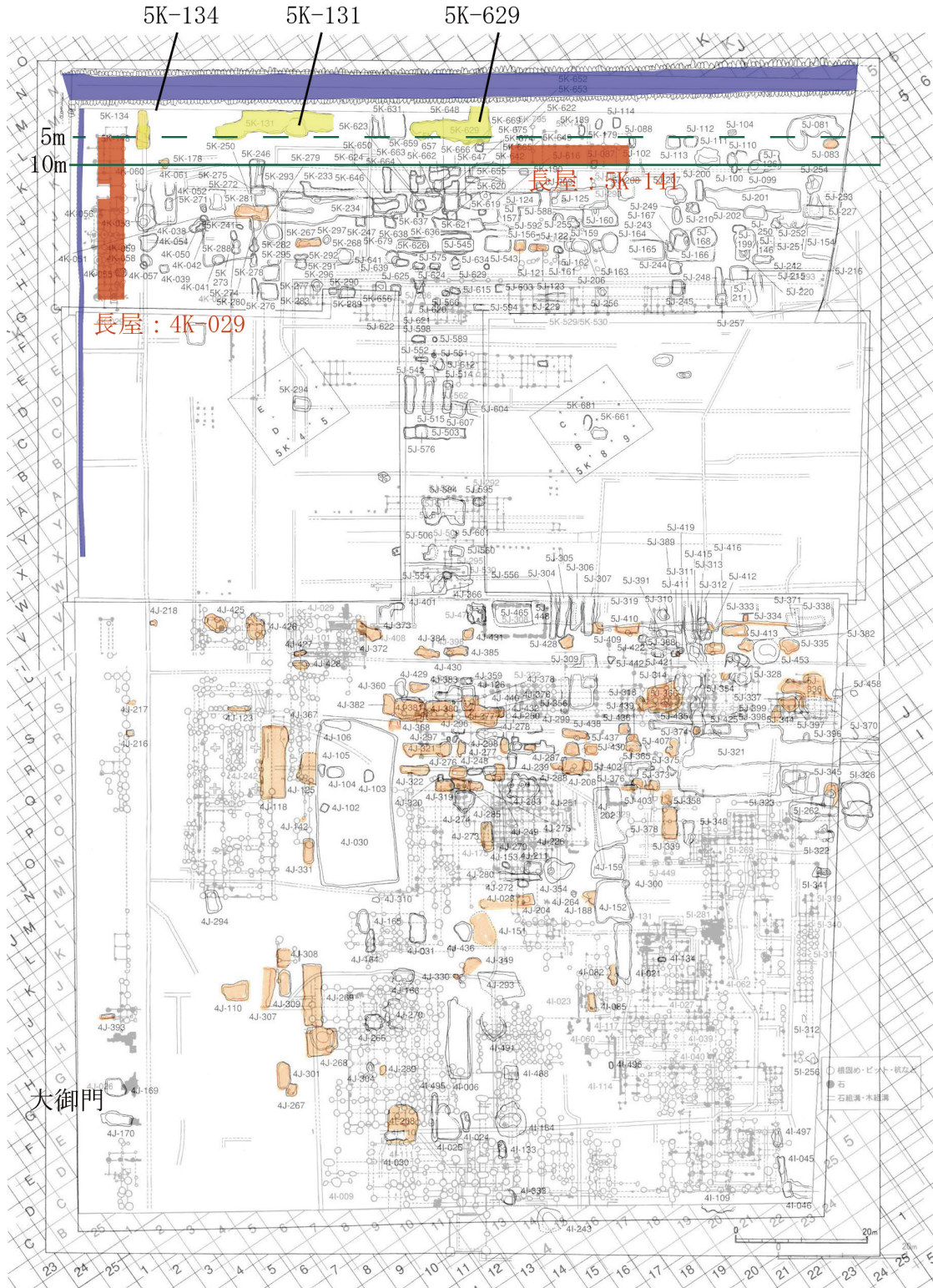


図 68 仙台藩邸の屋敷境と表長屋・土坑の位置関係 (東京都埋蔵文化財センター2000 を基に作成)

## (2) B の屋敷境遺構

屋敷境 B は龍野藩邸北側を画する屋敷境である。この部分の屋敷境は西側半分が道を挟んで明地と接し、東側が明地と直に接している（図 66①）。図 66②では明地がそれぞれ芝口新町と脇坂家の所有地になっているが、町割として大きく変わることはない。発掘調査で検出したのは図 69 にある 6L-006 と 6K-0796 である（東京都埋蔵文化財センター2000）。

### ① 6L-006

石組の溝による屋敷境遺構 2 類である。石組溝の規模は幅 1.0m、深さ 1.12m。石の積み方は南北で異なっている（図 70）。

南側（龍野藩邸側）は小面の一辺が 30-40 cm の築石が 2 段積まれた石垣である。北側（町屋側）は長辺 30-50 cm、短辺 20 cm、厚さ 10 cm の切石が積まれている（表 35）。

6L-006	構造	石	面(cm)	段数
北側(町屋側)	石組	切石	30-50×20	2
南側(藩邸側)	石垣	築石	30-40	2

表 35 汐留遺跡 6L-006 の構造

### ② 6K-0796

検出したのは南側（龍野藩邸側）の石垣のみだが、6L-006 とほぼ同一線上に並んでいる（図 69）ことから、連続した石組の溝（2 類）だったと推測される。

6K-0796 は東西で構造が異なっている。東側は掘り方を有楽町貝層まで掘り込んで構築して築石が 5 段積まれている。高さは 2.1m である。西側の築石は 2 段のみで、それよりも下は柵で護岸された盛土層のままである（図 71）。使用する築石も東側に比べて、西側は小型である。

残存している石垣の上面の標高は東側が 1.52m、西側が 1.72m である<sup>137</sup>。おそらくこの上にも本来は築石が積まれていたと思われる。

海側の東半分を堅固に構築しているが、遺構の途中で構造を変更した理由は不明である。

<sup>137</sup> 2 段積み部分は図 71 下の C-C'、5 段積み部分は同じく B-B' で計測した。

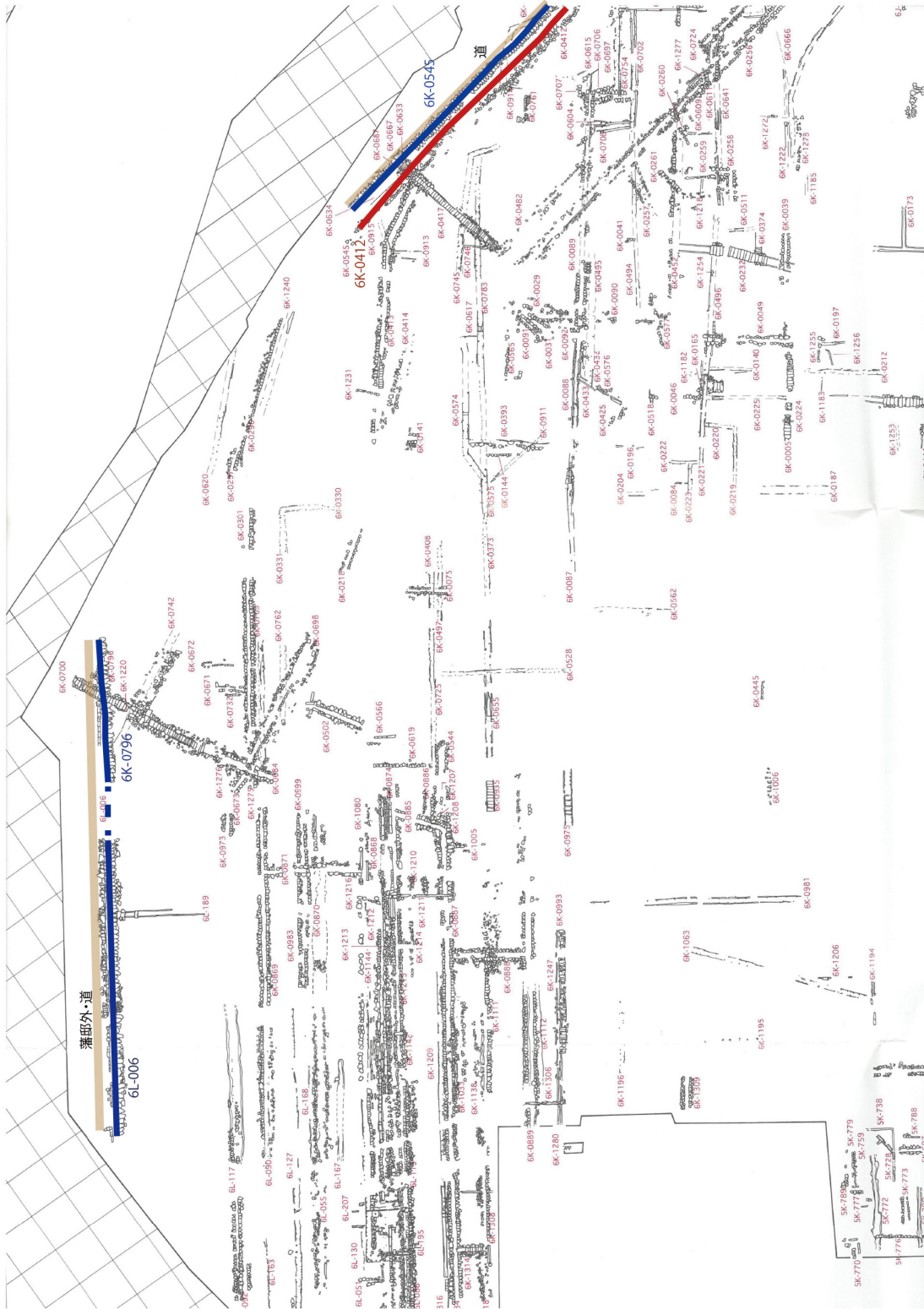
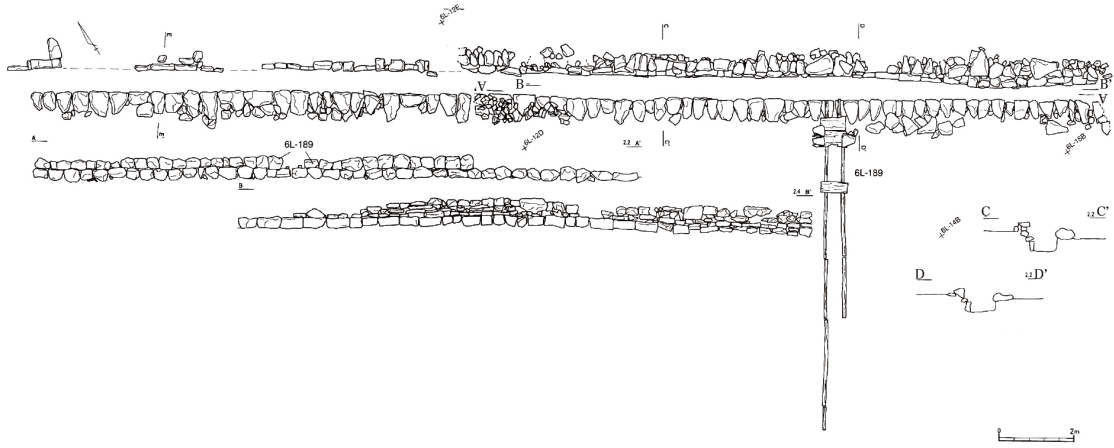


図 69 屋敷境Bと屋敷境F'1 (東京都埋蔵文化財センター2000より)

# 6L-006



# 6K-0796

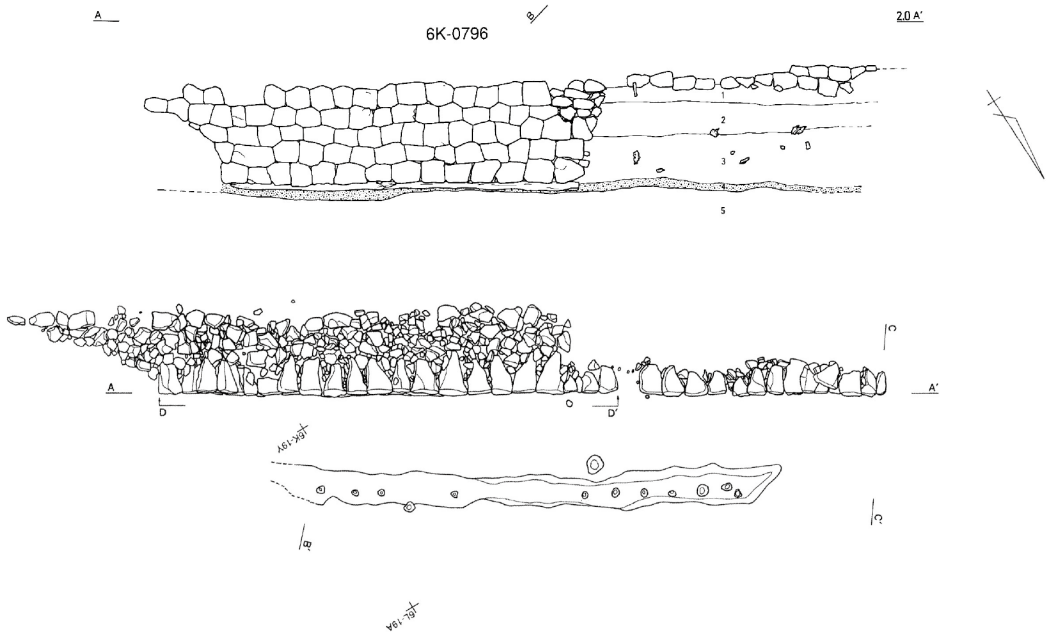


図 70 屋敷境 B の遺構 (6L-006・6K-0796) (東京都埋蔵文化財センター2000)

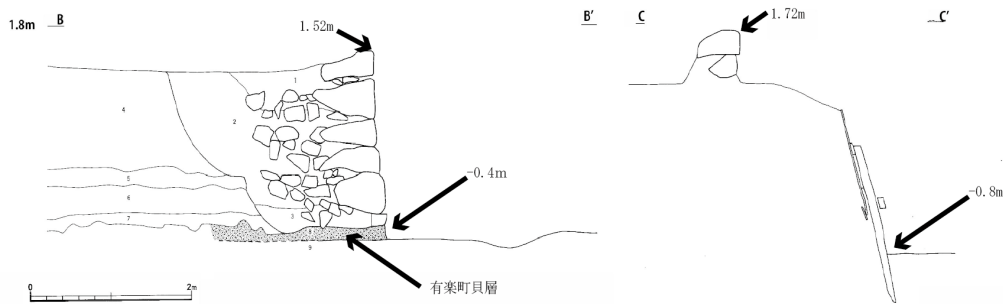


図 71 6K-0796 石垣部分の断面図（左：5 段積み部分、右：2 段積み部分）（東京都埋蔵文化財センター2000）

### (3) C の屋敷境

6J-500 は幅 3.80m、深さ 2.40m の堀である（東京都埋蔵文化財センター1997・図 72）。堀による屋敷境遺構 6 類である。

6J-500 は屋敷境としての堀そのものを指し、龍野藩邸側の石垣と、仙台藩邸側の石垣に関しては、それぞれ個別の遺構番号が付されている（表 34 の 6J-335、6J-568）。両者は構造に差が認められる。

仙台藩邸側の石垣（6J-335）は築石が 3-5 段積まれて（最大 8 段）高さは約 3m である。龍野藩邸側の石垣（6J-568）は築石が 3-5 段積まれて（最大 7 段）高さは約 2.4m である。

立面図（図 72 の赤枠内）で両者を比較すると、仙台藩邸側の築石の方が小面も控えも大型のものが用いられている。断面図（図 72 の青枠内）では、仙台藩邸側の石垣の掘り方の方が大型で、築石との間に栗石が多量に充填されている。一方、龍野藩邸側は築石の控えと掘り方との間隔はほとんど無い。

『仙台藩江戸上屋敷絵図』（松原家史料・渡辺洋一 1987）では、「御塚堀」の深さが「此の堀幅式間斗深さ六尺斗」と記されている。一尺を 30 cm で換算すると、幅 3.6m、深さ 1.8m の堀だったことがうかがえる。築石の上部が削平されていたことを考慮すれば、ほぼ 6J-500 の規模と同じである。

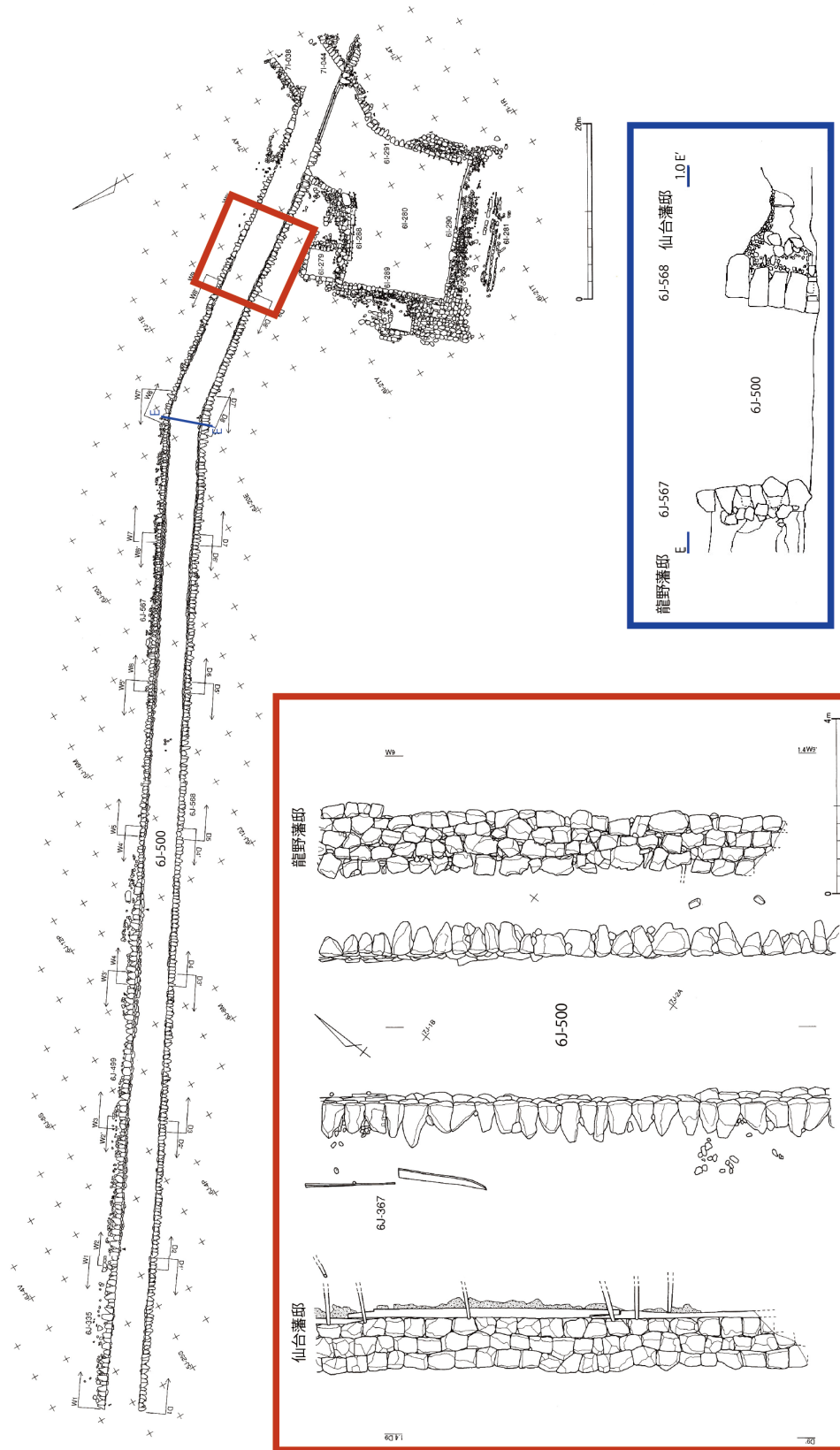


図 72 屋敷境 C の遺構 (6J-500) (東京都埋蔵文化財センター1997)



#### (4) 屋敷境 F'1

##### (ア) 6K-0545・7J-044

調査区東端で検出した 6K-0545 と 7J-044 は同一線上に並んでいることから、本来は連続した一つの石組溝による屋敷境(2類)だったと考えられる(東京都埋蔵文化財センター1997・図 73)。

6K-0545 は幅 0.48m、深さ 0.32m である。築石は 1 段分を検出している。7J-044 は幅 0.4m、深さ 0.25m である。

7J-044 西側の築石から東へ 1.2m の場所には、幅約 1m の範囲で硬化面が認められる。硬化面の堆積状況を示す図は報告書には未掲載だが、砂質土に円礫を 50% ほど含むという堆積状況から(東京都埋蔵文化財センター前掲)、舗装された道路であると考えられる。

硬化面(道路)の検出標高は 1.8m である。これを 7J-044 の断面図(C-C')に当てはめると、この部分で築石が据えられている面の標高は 1.18m なので、7J-044 は少なくとも深さ 0.7m 程度の側溝だったことがうかがえる。

図 66 で当該箇所を確認すると、屋敷境に道を伴うのは図 66-②の F'1 である。この道は 1707 年(宝永 4)に、龍野藩邸の東側の一部が収公されて敷設された。『宝永四年居屋敷北堀通道ニ成候ニ付差上候間敷之絵図』(たつの市立歴史民俗資料館蔵)には、藩邸端の収公された範囲が朱引きで表示されている(図 73 右下)。その範囲は藩邸の縁辺から 10 間ほどで、長屋、土蔵、作事小屋、番所が含まれている。

道が敷設され以前(図 66-①の F1)の屋敷境は調査区外にあたるため状況は不明である。

##### (イ) 6K-0412

6K-0545 の西側 0.9m に、これと並行する石組を検出した。石組には 4 基の築石が残っている(図 73 で 6K-0412 石垣と表記した部分)。この 4 基の築石以外は裏込めの栗石のみを残すだけだが、その全長は 67m に及ぶ(東京都埋蔵文化財センター1997)。

築石には胴木は無く、砂を基調とした整地層(粘砂質土層)上に直置きされている。この粘砂質土層は龍野藩邸内で堆積する宝永火山灰(1707 年/宝永 4)を含む土層と対応する<sup>138</sup>。これが石垣構築の下限年代となるので、(ア)でとりあげた 6K-0545・7J-044 と同時期の屋敷境遺構であることがわかる。6K-0545・7J-044 との距離は 0.9m である。

6K-0412 は向かい合う石垣が未検出なので、土留による屋敷境遺構 7 類である。屋敷境 F'1 は道と藩邸の間に石組の側溝が設けられ、その内側に石垣が築かれていたことが推測される。

---

<sup>138</sup> 脇坂家地区土層柱状図 W-3 における 7 層(東京都埋蔵文化財センター1997)。

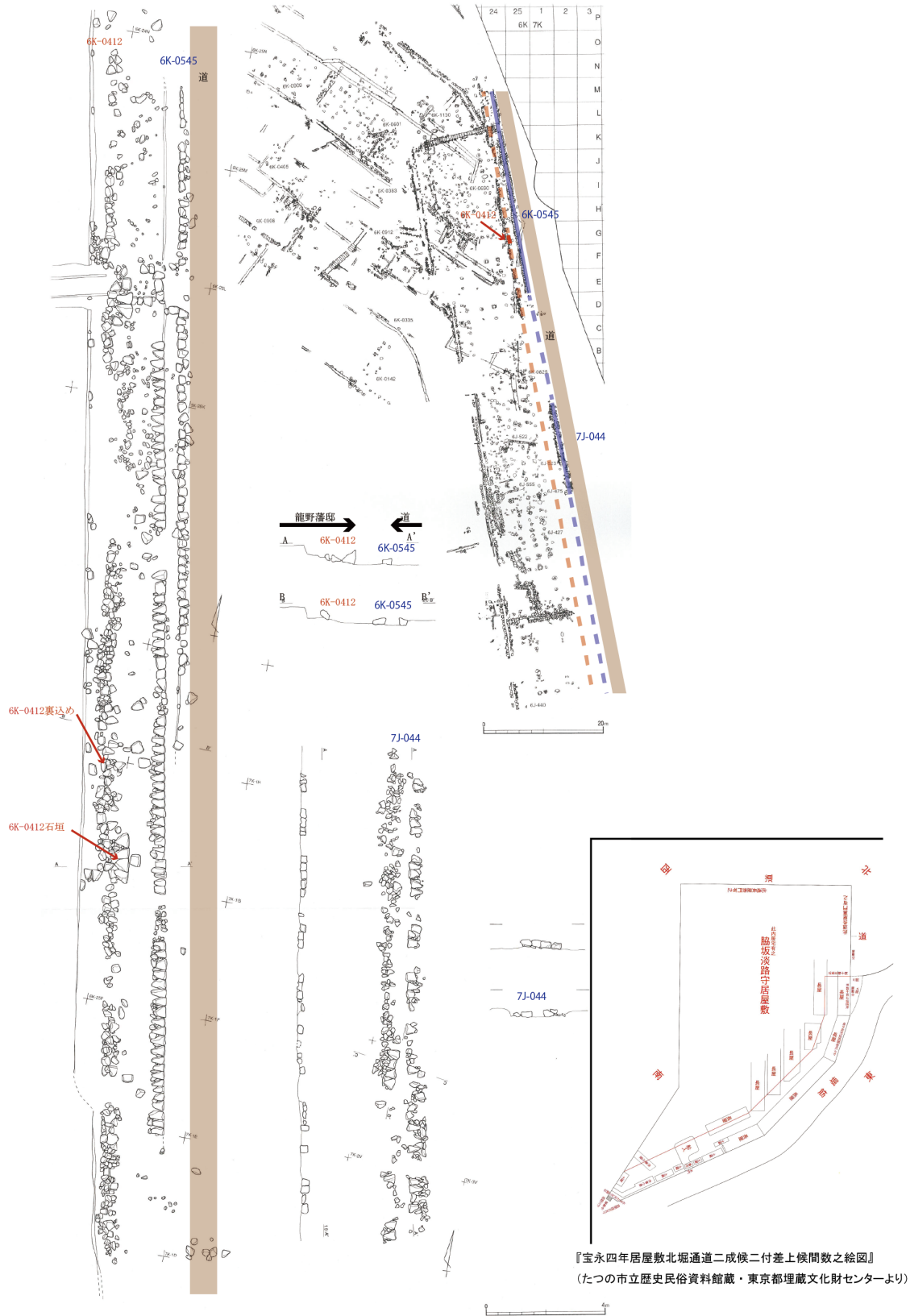


図 73 屋敷境 F1 の遺構 (6J-0545・7J-044・6K-0412) (東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成)

(5) 屋敷境 F2

6I-407 は幅 0.4m、深さ 0.32m の石組の溝 (2 類) である (東京都埋蔵文化財センター1997・  
図 74)。検出位置は調査区の東端にあたる (図 75)。

6I-407 に関しては周囲の遺構検出面との関係は詳らかでないが、調査所見として「藩邸東端  
の道の下」にあることが指摘されている (東京都埋蔵文化財センター前掲)。1707 年 (宝永 4)  
に敷設された道との間に構築された屋敷境 (石組溝・2 類) である (図 66-②の F'2)。

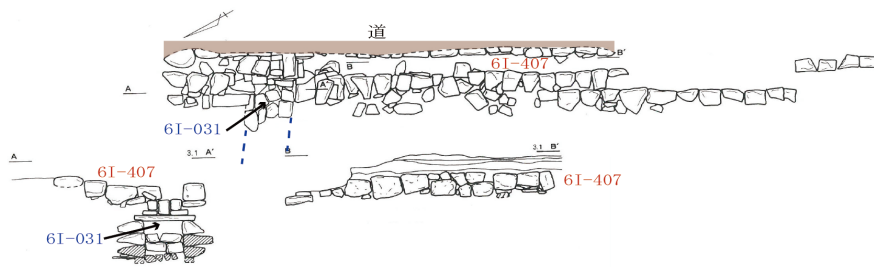


図 74 屋敷境 F'2 (6I-407) (東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成)

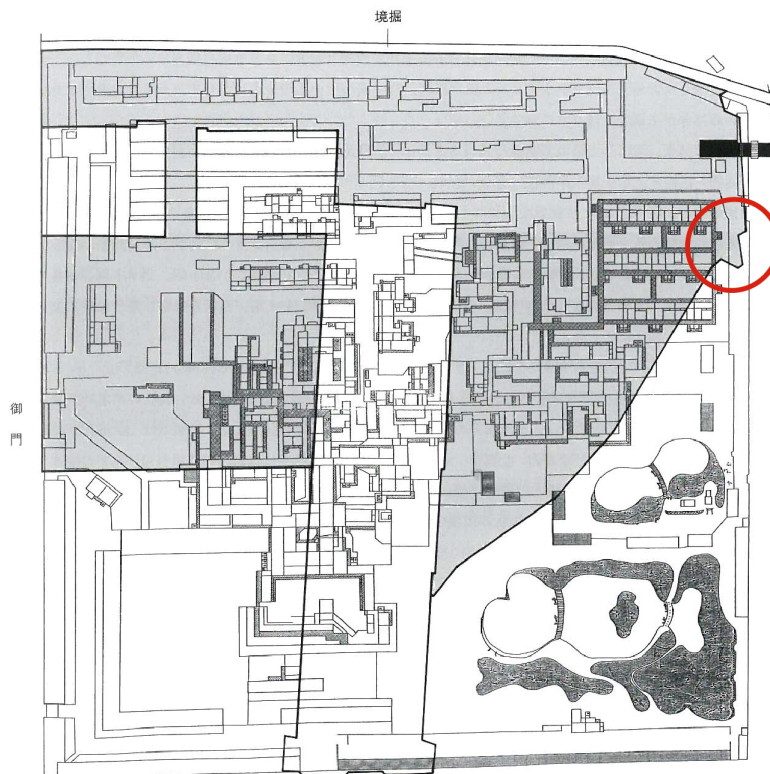
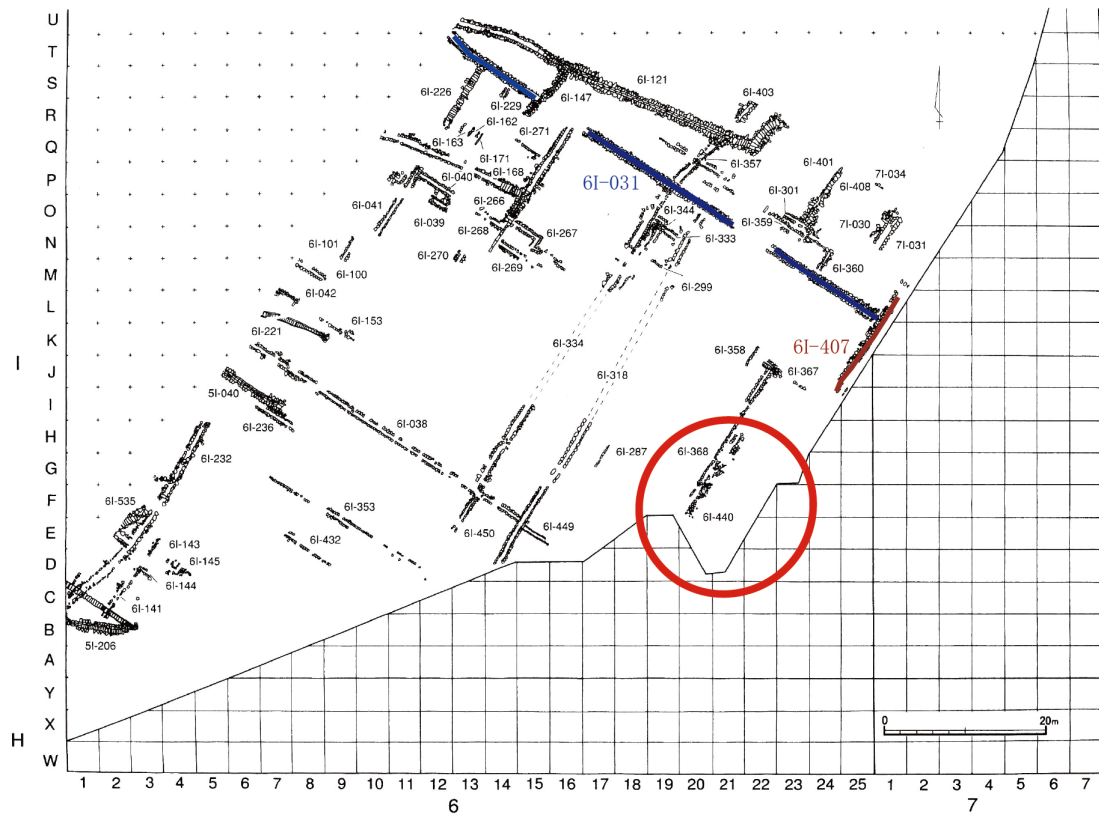


図 75 6I-407 と仙台藩邸（東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成）

### 第3項 文京区内の大名屋敷跡遺跡

#### 1. 春日町遺跡第IV地点

春日町遺跡第IV地点1号遺構は、南北方向にのびる幅約4mの築石積みの溝である（文京区遺跡調査会2000）。攪乱が著しいため本来の深さは不明だが、4段分の築石が残る部分では1.4mの深さがある（図76）。堀による屋敷境遺構6類である。

溝の西側が安志藩上屋敷、東側が小嶋藩上屋敷で、1号遺構が屋敷境となる。どちらも1万石程度の小藩で、安志藩の拝領は1657年（明暦7）、小嶋藩は1708年（享保3）である。少なくとも17世紀後半以降の屋敷境遺構である。

小藩の調査例が少ない大名屋敷跡遺跡の中で本例は、隣り合った小藩の屋敷境のあり方を知ることができる貴重な事例である。

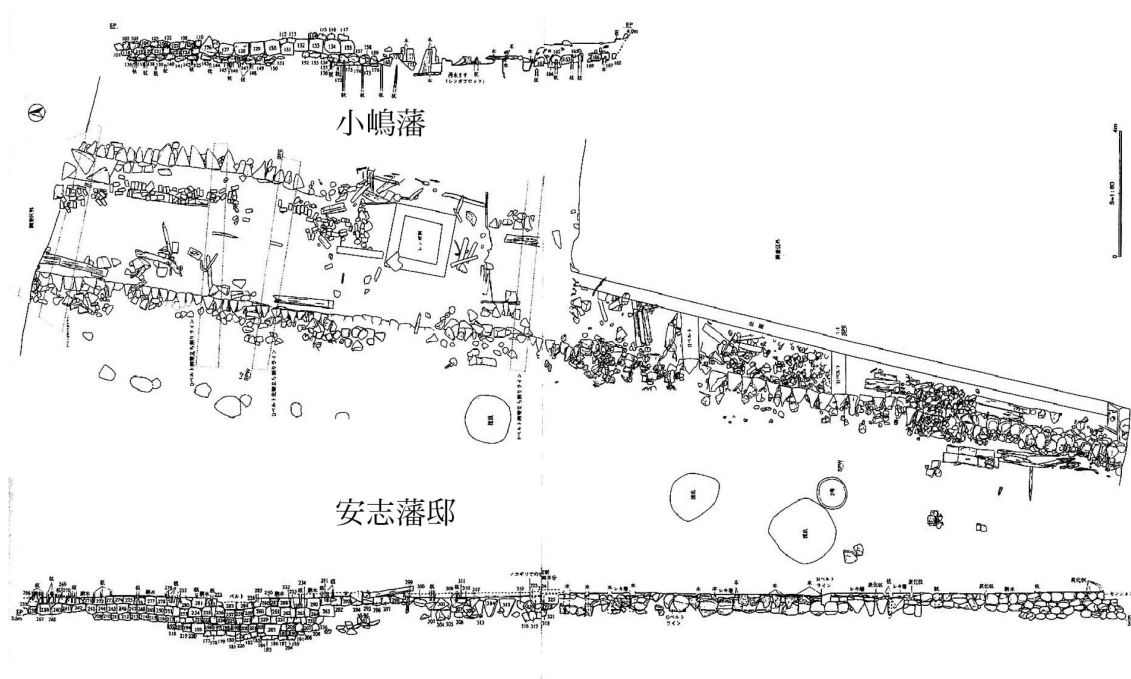


図76 春日町遺跡第IV地点1号遺構（下 文京区遺跡調査会2000を加筆）

## 2. 東京大学白山構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点

東京大学白山構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点 SD01 は幅 9.2m 以上、確認面からの深さは 2.7m 以上ある。遺構の確認面から 2.6m ほど掘り下げたあたりで遺構の壁面が粘土層から砂礫層へと変わり、湧水を確認した。これより下位の掘削は断念した。遺構両側の立ち上がりは確認できていないが、壁面の仰角は約 37°で、途中に犬走り状の施設を持つ（成瀬晃司 2004・図 15）。

調査面積が 45 m<sup>2</sup> と狭小のため遺構の完掘には至らなかったが、調査地点が小石川御殿の南西隅にあたることから、堀による屋敷境遺構 6 類と捉えられる。

遺物は少なく、破片も含めて十数点に過ぎなかった。肥前製の碗や鉢、カワラケが含まれている。遺物の年代からは 17 世紀後半から 18 世紀初頭に位置づけられる。

## 3. 白山御殿跡遺跡第 4 地点

白山御殿跡遺跡第 4 地点は白山御殿北東側に位置する。1 号遺構は幅 17m 以上、深さ 3m の溝である（文京区遺跡調査会 2003）。全体の形状は調査区からは窺い知ることができないが、平面形状が L 字状を呈している（図 16）。堀による屋敷境遺構 6 類である。

遺構の最下層に堆積している土は黄褐色土である。D トレンチでは灰色粘土層の下に褐色土層が堆積していて、観察所見によればロームの褐色土を貼り床状に構築したとある（文京区遺跡調査会前掲）。こうした覆土の堆積状況は前段の SD01 にみられた水成堆積とは対照的である。

遺物は肥前製の陶器碗 1 点、瀬戸・美濃製の陶器碗 1 点と、挿鉢 2 点が報告されている。肥前製陶器碗は「小松吉」の刻印を有した京焼風陶器である。ただし点数が少ないため遺物組成から年代を位置づけることは難しい。18 世紀代の遺構に切られていることから、1 号遺構は 17 世紀代に位置づけられる。

## 第 4 項 品川区内の大名屋敷跡遺跡

### 1. 仙台坂遺跡

仙台坂遺跡は仙台藩の下屋敷（下大崎の拝領屋敷）である。『諸向地面取調書』（1856 年・安政 3）によれば敷地は 16,680 坪を擁していた。調査地は屋敷北側の外郭部一帯にあたる

検出した屋敷境遺構は「堀跡」と呼ばれる上幅 5.0m、下幅 2.5m、深さ 2.0m の断面が逆台形を呈した遺構である（図 14）。軸は北西から南東方向で、藩邸北側にある道（仙台坂）に沿っている。堀による屋敷境遺構 6 類である。

堀は地山を掘削して構築されているが、断面には土留め施設の痕跡は存在しない。覆土には水付きの痕跡は認められない。

堀の屋敷側には、立ち上がりの肩の部分（平坦部）に3号塀跡がある（図 14 断面図）。これは堀の内側に巡っていた塀と推測される（品川区遺跡調査会 1990）。

## 第5項 渋谷区内の大名屋敷跡遺跡

### 1. 千駄ヶ谷五丁目遺跡

千駄ヶ谷五丁目遺跡は甲州街道沿いの江戸外縁部に立地する。約 20,000 m<sup>2</sup>の広大な遺跡で、大名屋敷ばかりでなく、旗本や御家人、百姓など居住者や土地利用は様々で、その入れ替わりも著しい。

0725号遺構(11~12C、7~12D、2-8Eグリッドで検出)は上幅3.84-4.44m、下幅1.2-1.32m、深さ1.38-1.59mの溝で、断面は箱薬研状を呈する(図77上)。東西ともに調査区外へと続いているので本来の長さは不明だが、調査区内では108mにわたって検出した(千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会1997)。堀による屋敷境遺構6類である。

図中の断面A-A'が調査区内における本遺構の最も北側の堆積状況だが、その最下層である7層は褐色土層、8層は暗褐色土層で、どちらも焼土を含んでいる。両層とも粘性は強いが水成堆積ではないので、0725号は空堀<sup>139</sup>だったことが推測される。

17世紀末の遺物が出土することから、遅くとも18世紀初頭には廃絶していたと考えられる。

調査地点の位置と変遷については及川登によって検討が行われている(及川1998)。0725号遺構は17世紀末から18世紀初頭に廃絶していることから、松江藩下屋敷(-1689年/元禄2)および柳沢出羽守下屋敷(1691-1695年/元禄4-8、佐貫藩から川越藩に転封)と、長延寺門前町屋との屋敷境である(図77下)。

---

<sup>139</sup> 阿部賢治の調査所見には、(粘土が堆積している遺構の)北側を除いて溝底を水が流れた様子は確認できなかったことが指摘されている(阿部1998)。



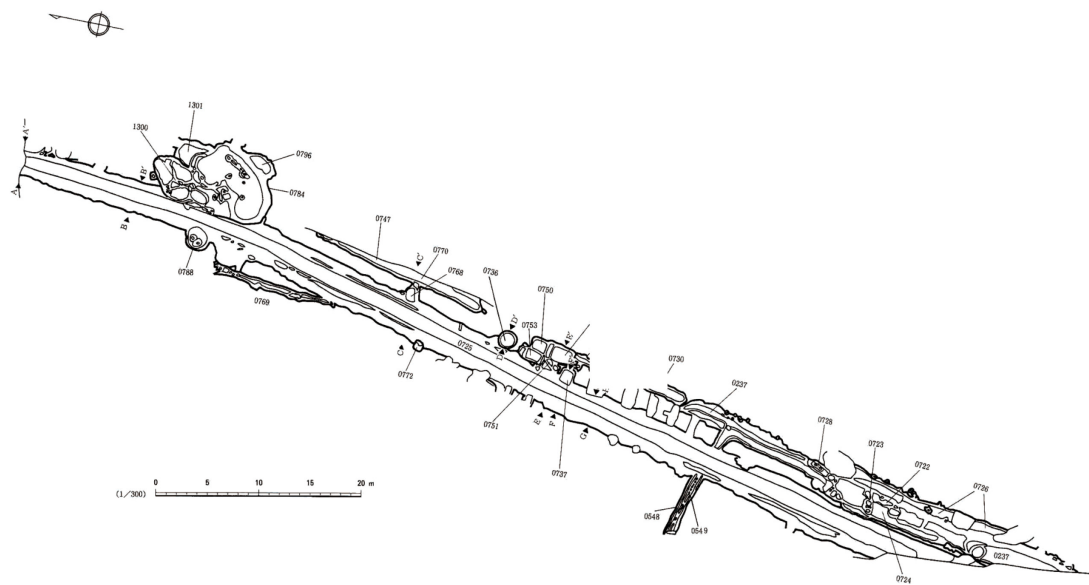
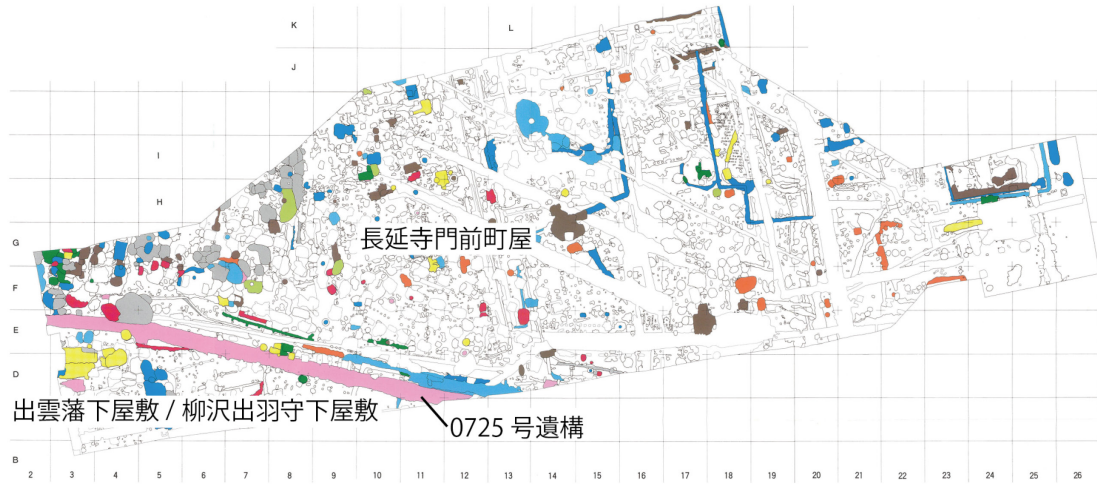


図 77 千駄ヶ谷五丁目遺跡 0725 号遺構 (千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997)

## 第6項 新宿区内の大名屋敷跡遺跡

### 1. 尾張藩上屋敷跡遺跡 3地点・4地点

尾張藩がこの地を上屋敷として拝領するのは1656年（明暦2）のことである。それ以前は板倉周防守の下屋敷だった。板倉邸の拝領時期は不明ながら、『正保年間江戸絵図』（正保元年/1644頃）には「板倉周防下ヤシキ」とあるので、少なくともその頃には拝領していたことがうかがえる（図78①）。

尾張藩邸は拝領当初は板垣家の屋敷地を引き継いでいたが（図78②）、1767年（明和4）に西側添地を獲得して西側へと敷地が広がる（図78③）。

3地点・4地点はこの屋敷境を含む調査区である（東京都埋蔵文化財センター1997）。

#### (1) 板倉邸の屋敷境遺構

##### 3-1号溝・4-1号溝

溝は一部が後代の石垣によって壊されているが、3-1号溝が上幅約2m、下幅が0.8m、4-1号溝が同様に1.6mと0.7mで、逆台形を呈している。深さは約1.0mである（図79・図80）。

3-1号溝の覆土最下層（8層）は暗褐色を呈していて、調査所見によれば水の浸透は受けているが、流水の痕跡は認められない（東京都埋蔵文化財センター前掲）。堀による屋敷境遺構6類である。

①『正保年間江戸絵図』（1644年以前）



②『御符内沿革図書』「延宝年中」と調査区

②『御符内沿革図書』「寛政七年」と調査区

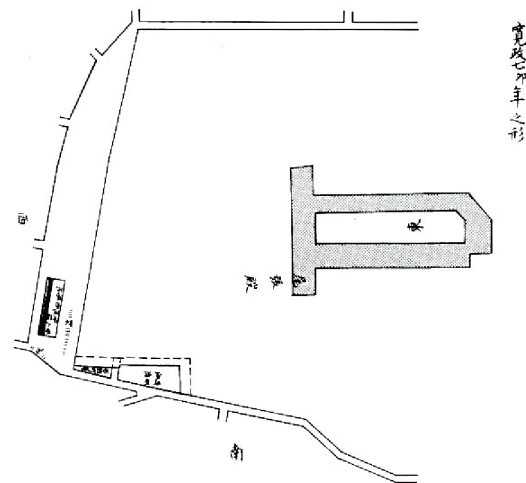
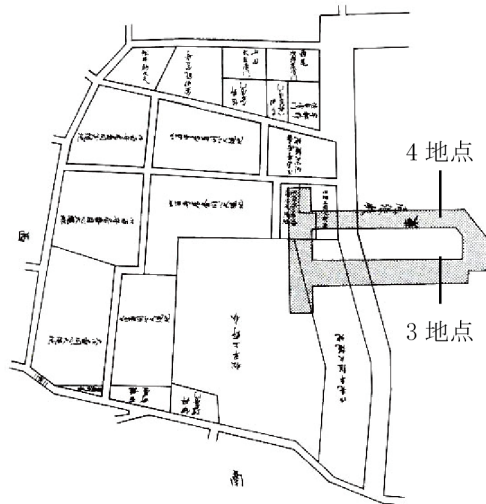


図 78 絵図にみる板倉邸・尾張徳川邸の西側屋敷境（東京都埋蔵文化財センター1997より）

(2) 尾張藩上屋敷の屋敷境遺構

(ア) 尾張藩西側の屋敷境遺構 3-1号石垣・4-1号石垣

3-1号石垣・4-1号石垣は3-1号溝・4-1号溝が造り替えられた屋敷境遺構である。堀による屋敷境遺構6類だが、護岸が石垣積みに変わっている。

3-1号石垣、4-1号石垣ともに胴木はなく、地山に直接据えられている(図80)。断面図にある1層が突き固めた粘土層である。詳細は不明ながら、これが市谷邸段階の道路面であるとするなら、板倉邸から尾張徳川邸へ変化する際に、3-1号溝が埋め立てられて、改めて道と屋敷境としての石垣が構築されたことになる。

(イ) 広瀬藩と御先手組大縄地などの屋敷境遺構 3-2号石垣

南北92mにわたって検出した。築石が2段積まれている石垣である(図79・図81)。築石の小面は全て東側に面しており、それに対面する石垣列はない。したがってこれは屋敷境としての石組溝ではなく、土留の石垣による屋敷境遺構7類に分類できる。

本来の高さは不明だが、2段積まれた現状の高さは0.6mである。

築石から西側に1.5mほどの間隔で土坑が並ぶ。土坑列の軸と石垣は水平なので、この列も広瀬藩の屋敷境だろう。3-2号石垣とは切り合い関係がないので、造り替えの可能性がある。3-2号石垣の高さが0.6mとそれほど高くないので、あるいは土留の石垣に付随した柵列だったことも考えられる。

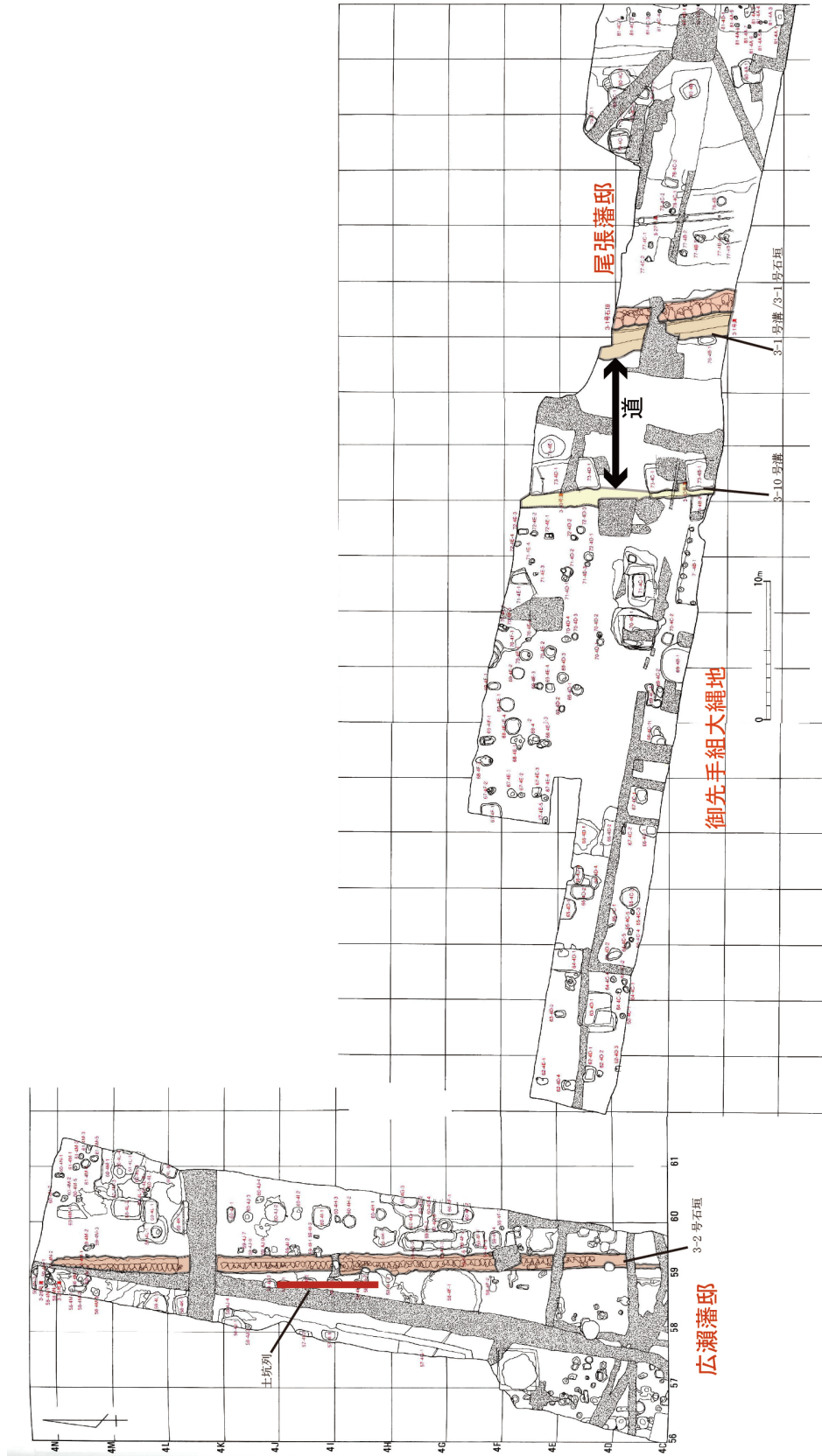


図 79 尾張藩・広瀬藩・大縄地の屋敷境遺構（東京都埋蔵文化財センター1997 を基に作成）

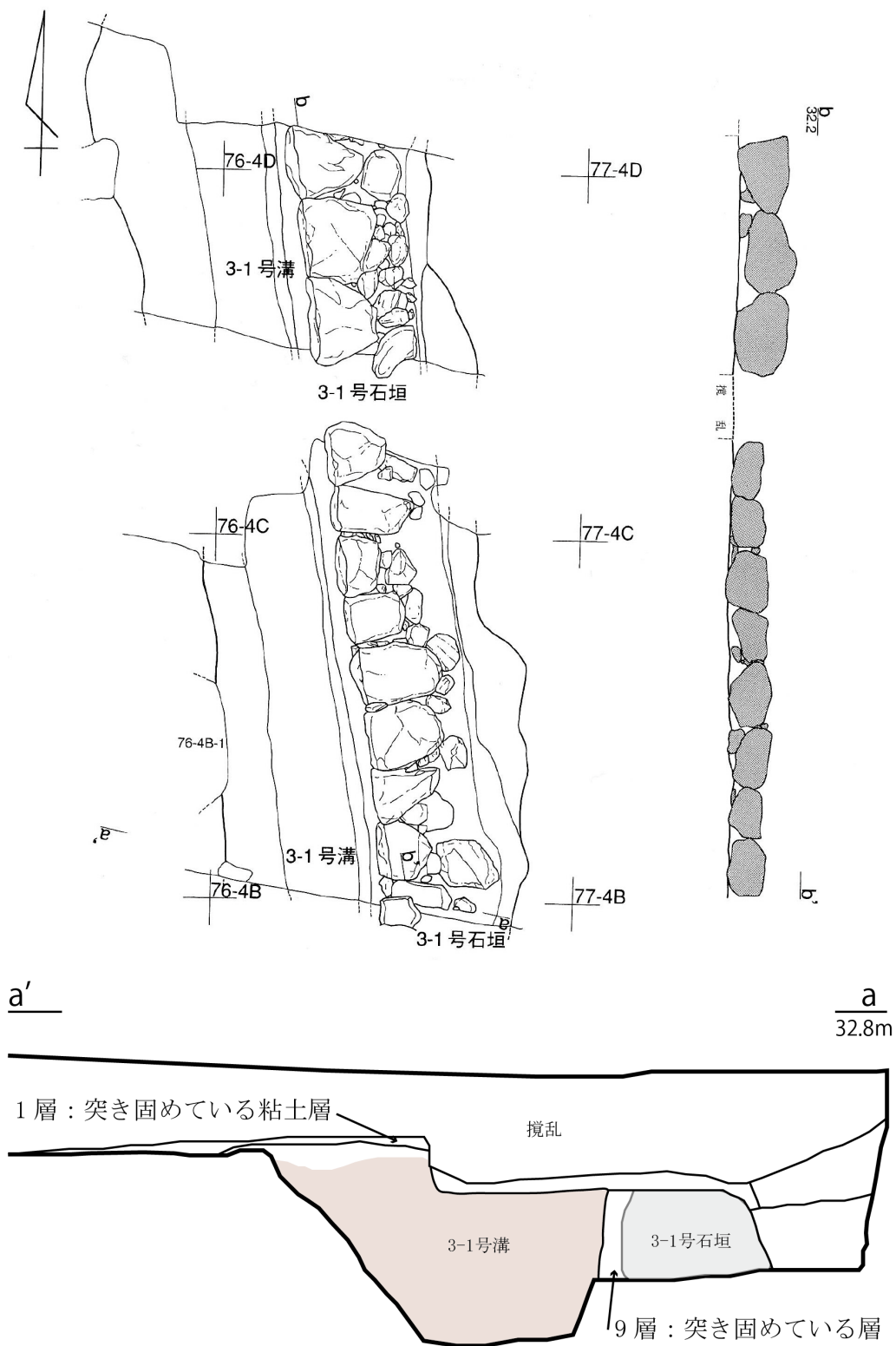


図 80 3-1号溝と 3-1号石垣 (東京都埋蔵文化財センター1997 を基に改変)

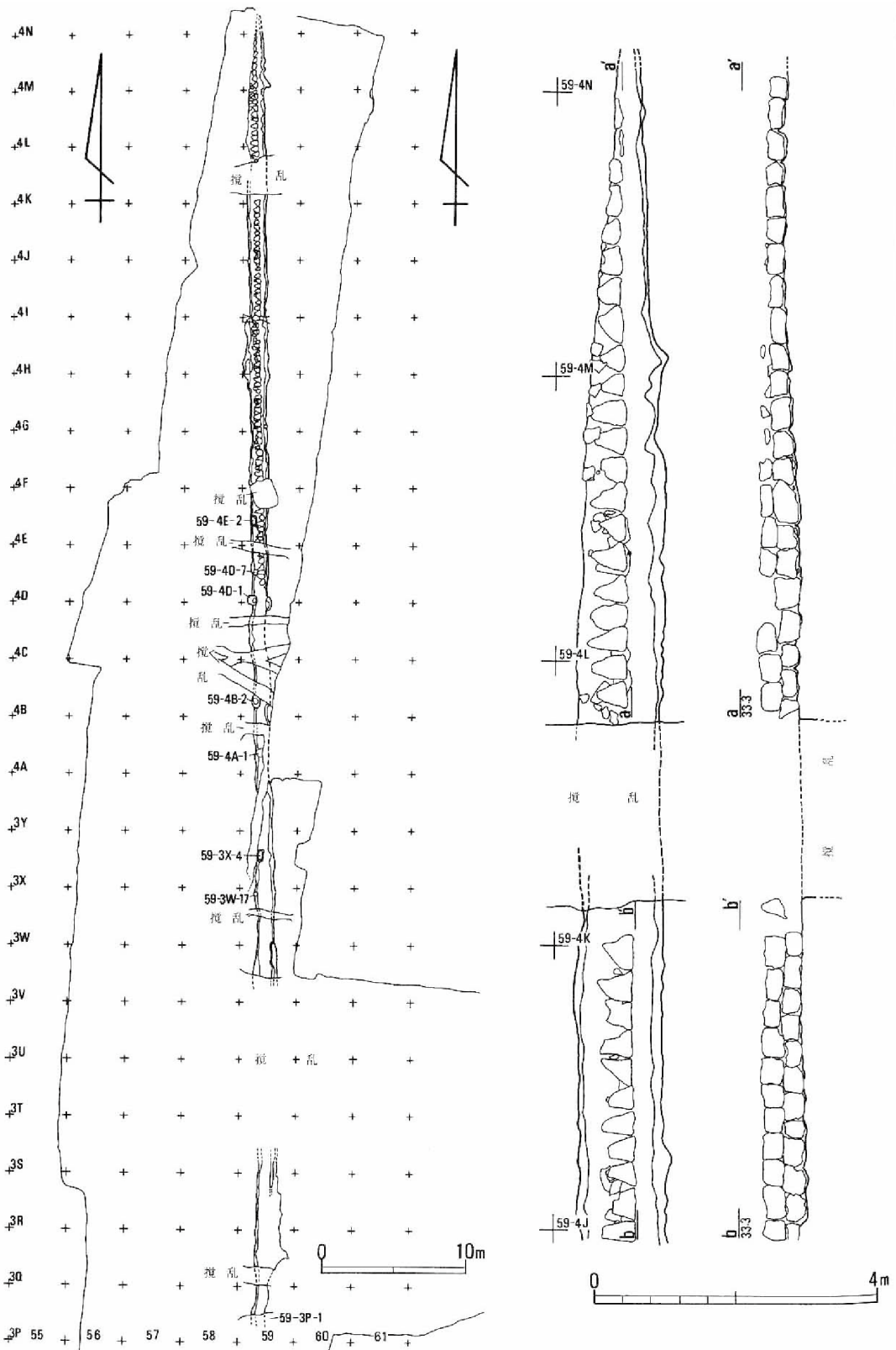


図 81 3-2 号石垣 (東京都埋蔵文化財センター1997 より)

## 2. 内藤町遺跡第4地点

内藤町遺跡は1590年に内藤清成が拝領した屋敷で、最初期の大木屋敷の一つである。

第4地点は屋敷の北側にあたる。1号遺構は逆L字状に屈曲する溝である（新宿区教育委員会2001）。溝の幅は上幅が1.2-1.6m、下幅が0.5-0.9mの箱葉研形で、深さは0.7m-0.8mである（図82）。部分的に上幅が1.5mを越えるが、全体の形状から素掘りの溝による屋敷境遺構1類である。

出土遺物に瀬戸・美濃製の坏（大窯期）や肩衝型茶入、初期伊万里様式の肥前製磁器が含まれていることから、廃絶年代は16世紀末から17世紀中葉に位置づけられる。やや年代幅があるが、拝領直後の内藤邸の屋敷境遺構である可能性がある。

1号遺構が廃絶した後、ほぼこれに平行した2号遺構が構築される。発掘調査では南北方向の8m分を検出したが、1号遺構のように南側で逆L字状に曲がるかは不明である。

幅は最大1.8m、深さ0.9-1.6mで、堀による屋敷境遺構6類である。17世紀前葉から後葉の遺物が出土した。

## 3. 新宿六丁目遺跡

遺跡は台地部と斜面部とからなる。そのうち大木屋敷は中央の平坦部分を占めている。南側の斜面部は東大久保村・西大久保村の耕作地で、西北側が鉄砲玉薬同心の屋敷と耕作地（給地手作場）だった（図83）。

出雲広瀬藩松平家が1675年（延享3）に、下屋敷（大久保新田下屋敷）として拝領した。その後、1859年（安政6）の屋敷替えで近江山上藩稲垣家の屋敷となった（東京都埋蔵文化財センター2005）。

### (1) 202溝・301溝

藩邸の西側は給地手作場との間に4m幅の道が設けられている。202溝・301溝はこの道と藩邸を区画する溝である。202溝は幅0.8-2.6m、深さ0.3-1.2mで、幅・長さともに一定しないが、遺構全体の形態から堀（6類）とする。

### (2) 2420溝

藩邸南側の、東大久保村・西大久保村の耕作地との間に構築された屋敷境遺構である。2420溝の構造は202溝とほぼ同じである。



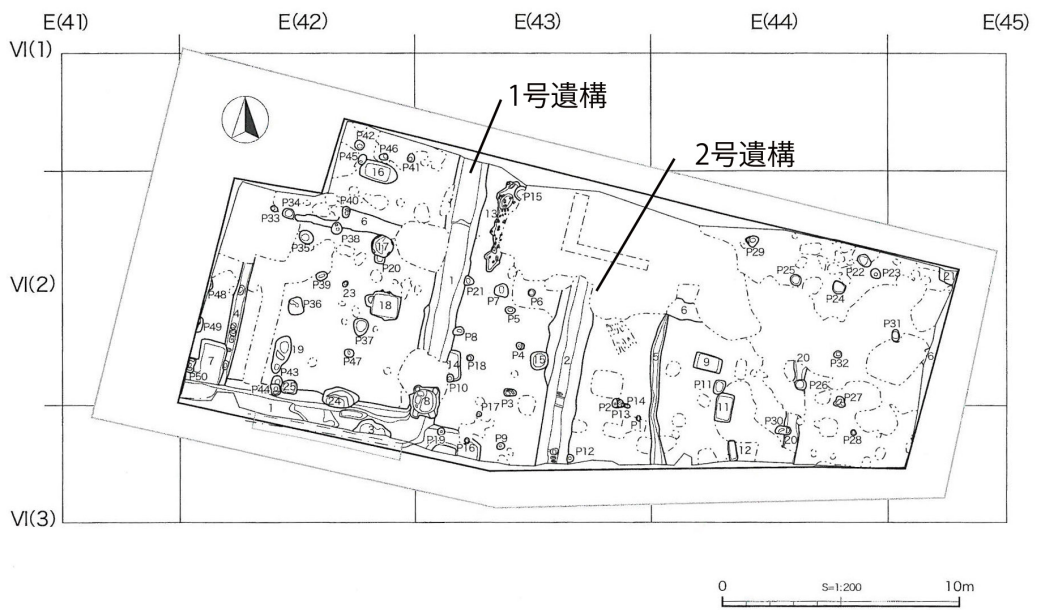
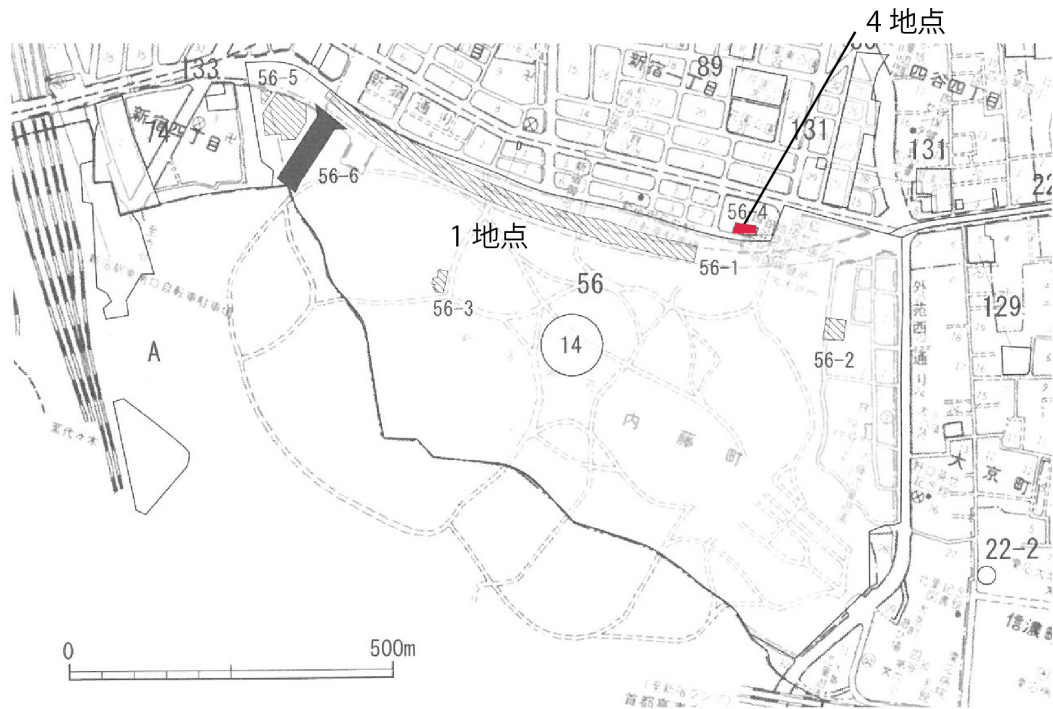


図 82 内藤町 4 地点と 1 号・2 号遺構 (新宿区教育委員会 2001)

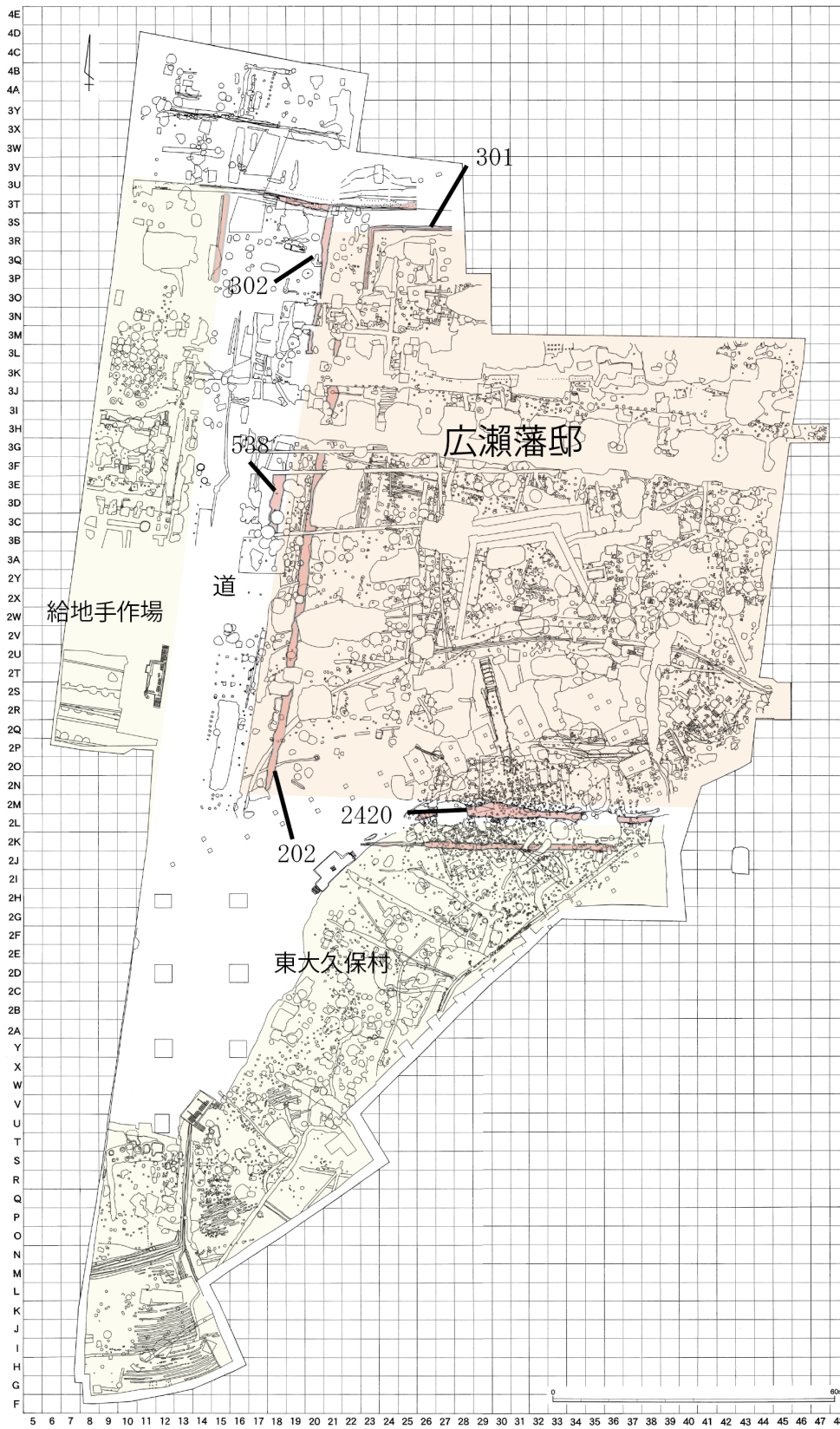


図 83 新宿六丁目遺跡の屋敷境と藩邸範囲（東京都埋蔵文化財センター2005 を基に作成）

## 第7項 豊島区内の大名屋敷跡遺跡

### 1. 染井遺跡

津藩藤堂家の下屋敷である。藤堂家がこの地に屋敷を拝領したのは、1657年（明暦3）の大火後のことだった。

東大本郷構内遺跡や尾張藩上屋敷跡遺跡とは異なり、明治時代以降は屋敷地が分筆されて民有地となっている。そのため上記の遺跡のような大規模な発掘調査は行われていない。しかし発掘調査の積み重ねによって、屋敷境遺構についても図 84 上のように把握されている。

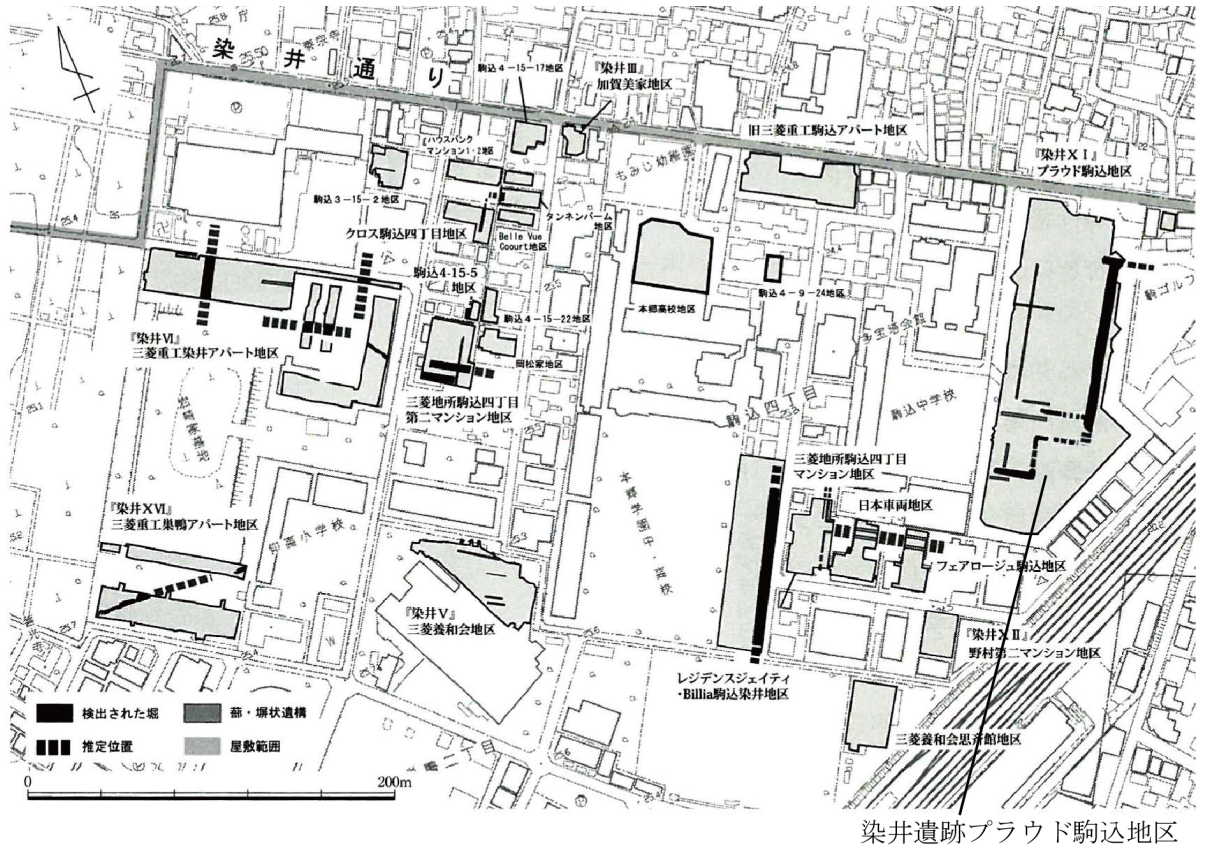
プラウド地区（豊島区教育委員会 2006）から検出した 313 号遺構・314 号・323 号・335 号・349 号・393 号・415 号・418 号は同一の遺構で、小川祐司は検出位置からこれらが屋敷境遺構であると位置づけている（小川 2011）。

313 号と 323 号の総延長は 88m 以上になり、遺構の規模は場所ごとに若干の違いはあるが、313 号で上幅 5.3-5.6m、下幅 1.6m、深さが 2.7-3.4m である。323 号で上幅 5.7m、下幅 2.1m、深さ 3.7m（図 84 下）で、どちらも堀による屋敷境遺構 6 類である。

三菱重工アパート地区（豊島区教育委員会 2001）で検出した 2 号遺構も同様に 6 類である。2 号遺構は上幅 6.0m、下端が 2.8m、深さ 2.0m。北東から南西にかけてゆるやかに傾斜している。606 号遺構は北北西から南南東方向に直線的にのびる堀で、上幅 6.0m、下端が 2.8m、深さ 1.6m である。

両遺構とも構築時期は不明だが、2 号遺構からは大量の瓦が出土しており、廃絶時期は 19 世紀である。図 84 が示すようにプラウド駒込地区 313 号など同一の遺構であると考えられる。

染井遺跡の屋敷境遺構検出状況（小川 2011 より）



染井遺跡プラウド駒込地区 323号遺構断面図

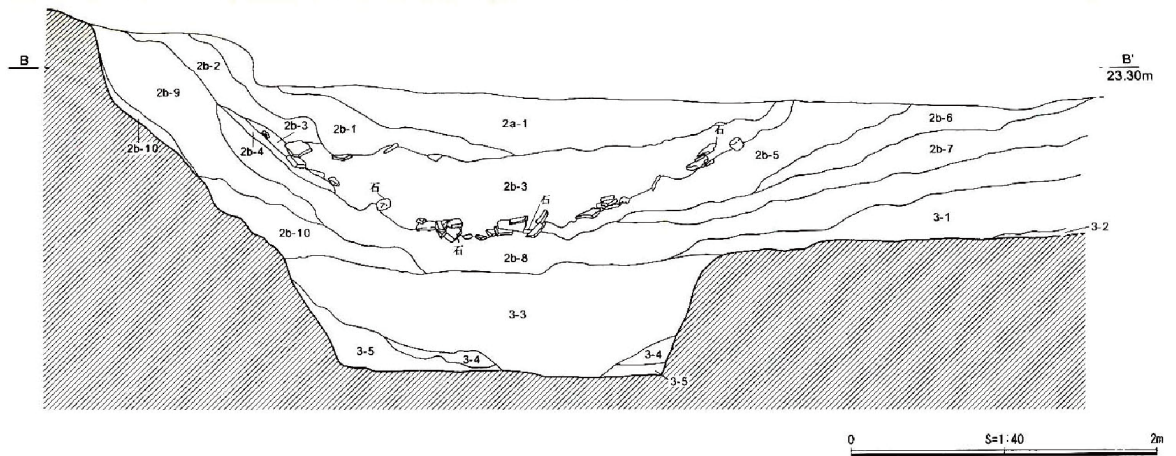


図 84 染井遺跡の屋敷境遺構（上：小川 2011、下：豊島区教育委員会 2006）

## 2. 巣鴨遺跡中野組ビル地区 1号遺構

巣鴨は中山道沿いに発展した地域で、街道の北側に津藩下屋敷（染井遺跡）や加賀藩中屋敷、旗本屋敷といった武家地が、南側に巣鴨町（町屋<sup>140</sup>）がひろがっていた。中野ビル地区は武家屋敷跡遺跡（巣鴨遺跡）である。

1号遺構は調査区の中央部やや西寄りを、北東-南西方向に直線的に延びた溝である（豊島区教育委員会 1994）。上幅 5.5m、下幅 2.5m、深さ 2mの箱薬研形を呈している。堀による屋敷境遺構 6類である。

底部は平坦で、北側への傾斜が認められる。主軸は南北に対して 36度東へぶれている。しかし調査地点付近を通る中山道にほぼ直交することから、道を軸としたものであることがうかがえる（図 85）。

覆土の最下層は白色粘土層で、遺構の底部に貼られていた状況がみてとれる。その上に堆積しているのはロームを主体とした黄褐色土層である。こうした堆積状況から水付きではなかったことがうかがえる。

遺構は調査区を南北方向に貫いているとはいえ、調査では 25m ほどしか確認していない。しかし遺構の規模と中山道に軸をとった構築状況から、この場所にあった大名屋敷の屋敷境遺構であると考えられる。

遺物は肥前製磁器が主体を占める。とりわけコンニャク印判が施された肥前製磁器碗や同半球碗が多い。こうした遺物組成から 17 世紀半ばに位置づけられる<sup>141</sup>。肥前製磁器碗のなかに、剣梅鉢紋があしらわれたものがみられる。当地は明暦の大火後に加賀藩が中屋敷を拝領しており、遺物の時期からみて 1号遺構が加賀藩中屋敷の屋敷境遺構であると推測される。

---

<sup>140</sup> 中山道南側に展開した町屋（巣鴨町遺跡）では、ランドマークビル地区（豊島区教育委員会 1996）、アーバンパレス地区（豊島区教育委員会 1999）などで幅 2m、深さ 1.5-1.7m程度の堀を検出している。これらは増上寺領であった巣鴨村内で、中山道に平行する道に沿って構築されている。橋口定志は遺構の規模や検出場所から、この堀が巣鴨町と巣鴨村とを画する境界だったと位置づけている（橋口 1993）。

巣鴨町は町奉行所支配の江戸の町屋とはいえ、巣鴨村から派生した江戸近郊に位置しているので、堀に囲まれた町屋のあり方は、江戸の町屋としては特殊な事例である。しかし堀の境界としての性格を考える上で示唆的な遺構である。

<sup>141</sup> 1号遺構とその周辺の遺構との切り合い関係、および宝永の火山灰を覆土に含む遺構の存在から、1号遺構の埋没時期は 1707 年（宝永 4）以前に位置づけられている（豊島区教育委員会 1994）。

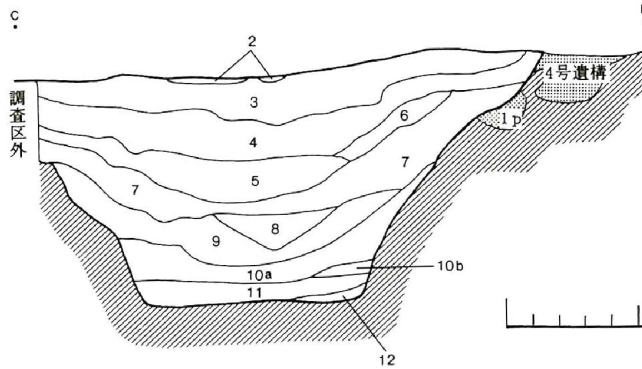
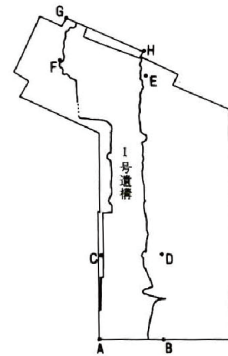
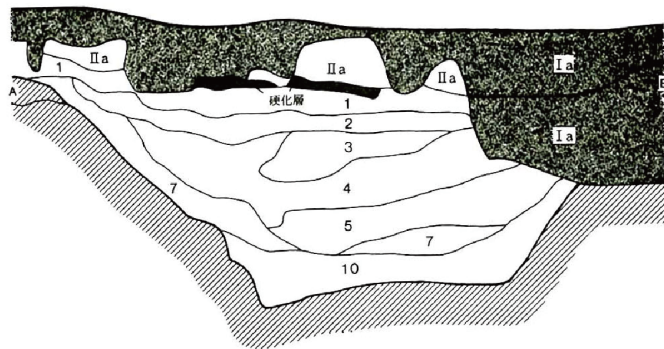
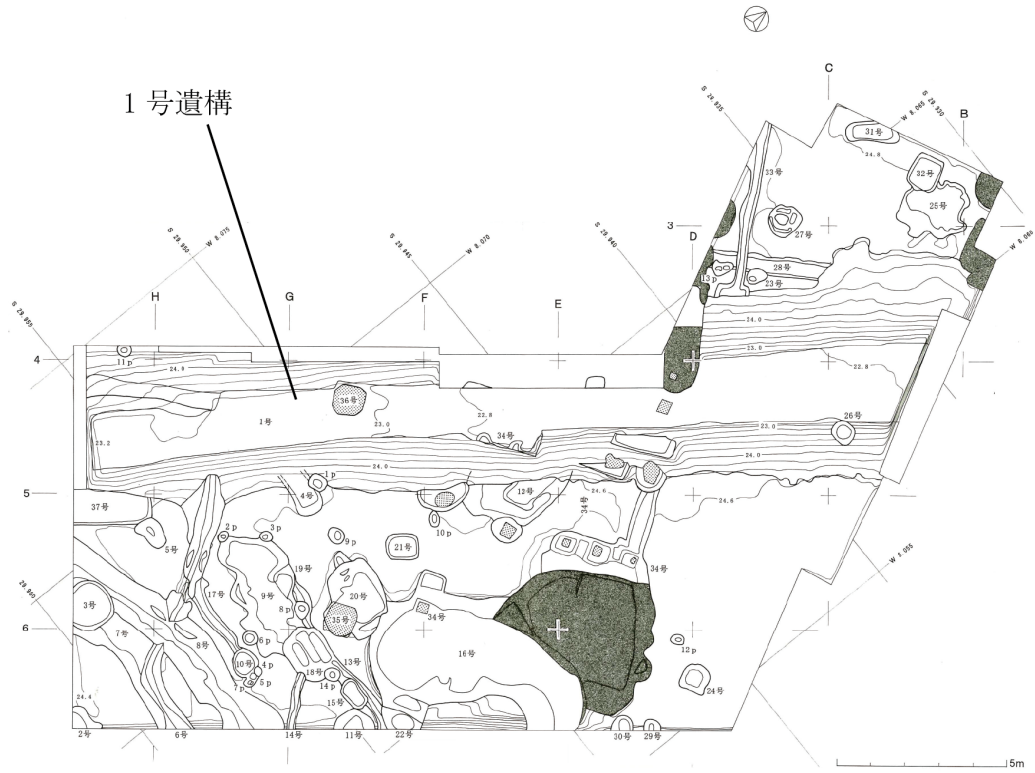


図 85 築鴨遺跡 (中野ビル地区) 1号遺構 (豊島区教育委員会 1994)

遺跡	遺構	時期	類型
東大工14	SB64	18	4
東大工14	SB65	18	4
東大伊藤国際	SB755	18	4
東大伊藤国際	SB312	18	4
東大伊藤国際	SB60・SD95・SB840	19	2
東大情報学環	SD8	19	2
東大情報学環	SD50	19	2
東大経済交流	SD15	19	2
東大懐徳門	SA01	18	7
東大懐徳門	SD96	18	2
東大入院棟2	柱穴群	17	4
東大入院棟2	SD9	17	3
東大入院棟2	SD7(旧)	17	3
東大入院棟2	SD7(新)	17	5
東大外来	SD45	17	6
東大CRC-A	SD 11473	17	6
東大理7	1号溝	17	6
東大中診	5号溝	17	1
東大中診	2号組石	17	2
東大中診	6号組石(組石部分)	17	6
東大中診	6号組石(南北部分)	17	2
東大中診	10号組石	17	2
東大中診	12号組石	17	2
東大中診	2号柱穴列	17	4
東大外来	SA155	17	5
東大中診	10号組石	17	2
東大病棟	SB1103	17	2
東大中診	12号組石(新)	17	2
東大第2中診	SD422	17	2
東大中診	2号溝	17	1
東大中診	1号溝	17	3
東大CRC-A	SD 12091など	未確定	1
東大設備管理	3号溝	16	1
東大設備管理	1号溝	18	6
東大設備管理	AB33・34区組石	19	2
八重洲北	1165	17	4
八重洲北	1205	17	4
八重洲北	1406	17	4
八重洲北	1140	17	3
八重洲北	1875	17	4
八重洲北	2010	17	4
八重洲北	1221	17	1
八重洲北	1161	17	4
八重洲北	0417	17	1
八重洲北	0905	17	4
八重洲北	0906	17	4
八重洲北	1770	17	4
八重洲北	1080	17	1
八重洲北	0106	17	2

八重洲北	0106-b	17	2
八重洲北	0189	17	2
八重洲北	1770	17	4
八重洲北	0106-a	17	2
八重洲北	0323	17	2
八重洲北	0040	18	2
八重洲北	0189	18	2
八重洲北	1526	18	2
文科省	006b	16	1
文科省	006a	17	1
文科省	007	17	1
文科省	005	17	6
丸三	26(旧)	17	1
丸三	5	17	4
丸三	6	17	4
丸三	26(新)	17	6
丸三	1	18	6
有楽二	S113系	17	6
有楽二	S240	17	3
有楽二	S234系	不明	4
有楽二	S236系	17	4
有楽二	S205	17	1
有楽二	S123	17	1
有楽二	S110	17	6
飯田町	堀跡	16	6
飯田町	6279	17	2
飯田町	6232	17	2
飯田町	6298	17	4
赤穂藩森家	1	17	6
赤穂藩森家	85	17	6
汐留	4K-007	17	2
汐留	1号溝	17	2
汐留	6L-006	17	2
汐留	6K-0796	17	2
汐留	6J-500	17	6
汐留	6K-0412	17	7
汐留	6K-0545/7J-044	17	2
汐留	6I-407	17	2
春日IV	1	17	6
東大白山博	SD01	17	6
白山御殿	1	17	6
駕籠町4	12	17	5
駕籠町4	土坑列	17	6
駕籠町4	13	17	3
駕籠町4	40	18	6
錦糸町北	54	17	1
仙台坂	堀跡	17	6
千駄ヶ谷五	0725	17	6
尾張上	3-1溝・4-1溝	17	6
尾張上	3-2石垣	17	7



尾張上	3-1石垣・4-1石垣	17	7
内藤4	1	16	1
内藤4	2	17	6
新宿六	202	17	6
新宿六	301	17	6
新宿六	2420	17	6
染井	プライド地区313など	17	6
巢鴨1	1	17	6

表 36 屋敷境遺構一覧



### 第3節 資料編3：御殿空間の宴会儀礼とカワラケー括廃棄遺構

#### 1. 大名屋敷の饗応と遺物研究

大名屋敷の出現は聚楽第の周囲に諸大名が設けた、正妻・嫡子とともに居住する本宅に求められる（横田冬彦 2001）。豊臣秀吉へ出仕するために上洛し、聚楽第周囲に屋敷を設けた諸大名にとって、秀吉の自邸への御成は臣従関係を構築する上で重要なものだった（佐藤豊三 1979）。大名たちはまた、秀吉との関係ばかりでなく、公家や大名間の交誼を結ぶことも心がけていた（仁木宏 2008）。そうした際に、聚楽第周辺の大名屋敷は請待（饗宴）や茶事といった饗応の場となったのである。

江戸につくられた初期の大名屋敷が、こうした京や伏見の大名屋敷の機能を引き継いだものであるという指摘は、既然大正時代に大熊喜邦が建築史の立場から言及している（大熊 1916）。大熊は『向念覚書』が伝える「桃山時代の遺風を傳へた」（大熊 1935）初期の大名屋敷の結構が、將軍の御成を迎えるためのものであるとする。そうした視点は戦後も、内藤昌（1966、1972）や平井聖（平井 1968）に引き継がれ、近年では波多野純の都市景観を構成する要素としての大名屋敷に関する研究（波多野 1996）にもみることができる。

佐藤巧は仙台城と江戸藩邸の接客空間の変遷に注目し、江戸藩邸では、「上使をはじめ諸大名、旗本、諸寺院、諸家の使者等の接見、そしてその饗応といういわば横の関係が主要な部分を占めていた」ことから、享保年間（1716-1735年）までに接客の場が広間から書院へと変化することを明らかにした（佐藤 1979）。

江戸に大名屋敷がつくられるようになったのは、徳川家康が江戸を新領国の経営拠点とした1590年（天正18）以降のことである。家康はこの関東転封の直後に、家臣団への地業割を行っている。特に知行高10,000石以上の大知行取と呼ばれる家臣への知行は、新領国の検地などよりも優先的に行われたことが中野達哉によって指摘されている（中野 2011）。

大名屋敷跡遺跡としては、1590年（天正18）に拝領した内藤清成邸（内藤町遺跡）、榊原康政邸（東京大学本郷構内遺跡・龍岡町遺跡）、1591年（天正19）に拝領した内藤家長邸（文部科学省構内遺跡）の屋敷において発掘調査が行われているが、この時期の遺跡の様相はまだ不明な点が多い。

ここで注目されるのが、家康の江戸入府に伴って出現した江戸の大名屋敷が、いずれも家康の家臣への賜邸だったことである。その後、家康への恭順を示すために参府や証人を差し出すことへの褒美として、大名への賜邸が行われるようになるとはいえ、豊臣政権下のこの時期、大名間の交誼を結び、且つ、深める饗応の場としての大名屋敷は、京・大坂の大名屋敷だったのである。

筆者は大名屋敷が妻子や嫡子が暮らした大名の本宅であり、拠点であるという先の横田の指摘を首肯する。そうした視点に立脚すると、江戸に大名の本宅としての大名屋敷が出現するのは、1620年代から40年代初頭にかけて制度化された大名妻子の江戸居住と参勤交代が契機となったと捉えられる。これを機に江戸の大名屋敷は、家康家臣団の屋敷や証人屋敷だった当初の性格

から、大名の本宅・本拠へと変容した。大熊らが指摘した御成を迎えるための大名屋敷、則ち、饗応の場としての大名屋敷の出現も、この時期に求めることができる。

1980年代半ばから始まった大名屋敷跡遺跡の発掘調査では、17世紀代の良好な遺構一括資料は限られたものだった。東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点では中国製磁器の多さが鈴木裕子・渡辺ますみによって注目された（鈴木・渡辺 1990）ほか、多量の磁器製大皿を出土する 678号の一括資料（図 86・図 87）のあり方が、大名屋敷で行われた宴会の食器として捉えられた（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）。

東京大学本郷構内遺跡中央診療棟地点（中診地点）では、1682年（天和2）の火災層を下限とする同一遺跡の遺物組成の中に、中国製磁器を含む高級磁器皿を主体とする L32-1 のような遺物組成と、日常的な食生活で用いられる陶磁器製の碗や皿などからなる H32-5 のような遺物組成とがあることが認識されていた。成瀬晃司・堀内秀樹は高級磁器皿を主体とする L32-1 の遺物組成（図 88・図 89）を、「明の青花や肥前製の上手の磁器のセットなど遺物自体がかなり趣味的要素をもって収集されたもの」と捉えている（成瀬・堀内 1990）。

藤本強は中診地点の遺跡のあり方を解明するのに際して、調査とほぼ同じ時期に吉田伸之によって提唱された大名屋敷の二元的な空間構造（吉田 1988）を取り入れた解釈を試みた。調査地点である大聖寺藩邸は加賀藩邸に比べて絵図資料が乏しい<sup>142</sup>が、藤本は L32-1 が示す遺物組成が、吉田のいう「御殿空間」の考古学的な様相であると捉えた（藤本 1990a、1990b、1990c）。

中診地点ではその他に、池状遺構から出土したカワラケ一括廃棄遺構が、相伴する木簡の年代から 1629年（寛永6）の御成に供された食器であると位置づけられた（藤本ほか 1987）。

御殿下記念館地点や中診地点で出土した宴会に関連する遺構一括資料は、堀内によって提唱された東京大学本郷構内遺跡の編年（堀内 1997）ではⅡ期～Ⅲb期に位置づけられるもので、実年代は概ね 1630・40年代から 1682年（天和2）の火災までである。東京大学本郷構内遺跡ではⅠ期<sup>143</sup>の良好な遺構一括資料は出土していない。

1990年代になると大名小路の一角に位置する丸の内三丁目遺跡 52号遺構（東京都埋蔵文化財センター1994）や丸の内一丁目遺跡 10号遺構（千代田区丸の内 1-40 遺跡調査会 1998）など、東大編年でいうⅠ期に該当する時期の遺構一括資料が出土するようになる。こうした調査事例の蓄積を背景として、1997年にシンポジウム『上方と江戸-近世考古学から見た東西文化の差異-』が開催された（関西近世考古学研究会 1998）。ここで成瀬晃司・長佐古伸也によって、慶長年間

---

<sup>142</sup> 『大聖寺藩史』（大聖寺藩史編纂會 1938）に掲載された『江戸藩邸上屋敷図』（文化年間）が知られているのみで、本図も既に焼失している。

<sup>143</sup> 加賀藩が屋敷を拝領した 1616年ないし 17年（元和2・3）以降をⅠb期、それ以前をⅠa期と細分する。

(1605年頃) から元禄年間後半(1690-1704年) までの江戸の遺物組成の様相がはじめて体系的に提示された(成瀬・長佐古 1997)。

2000年代になると千代田区内では東京駅八重洲北口遺跡、有楽町二丁目遺跡といった大名小路周辺の大名屋敷跡遺跡の調査事例が更に増え、江戸時代初頭の江戸の様相を考古学的に検証できる段階になった。そうした状況の下、堀内は17世紀代の遺物の出土状況からみた江戸における陶磁器の消費とその社会的背景について考察している(堀内 2007)。長佐古はそれらの成果をもとに、慶長期から寛永期(1590年代後半-1620年代前半) までの陶磁器編年を発表した(長佐古 2008)。

17世紀代の大名屋敷の宴会に伴う遺物組成を考える時、注目されるのは次の3点である。

(ア) 大皿を伴う遺物組成。

(イ) 中国製磁器や、肥前製でも長吉谷窯・柿右衛門窯に比定される上手の皿を中心とした遺物組成。

(ウ) カワラケを主体とする遺物組成。

大皿を伴う遺物組成は、前述の東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 678号(東京大学埋蔵文化財調査室 1990)のほか、汐留遺跡 SI060(東京都埋蔵文化財センター1997) などがある。成瀬・堀内は大皿の出土する遺跡が大・大名の大名屋敷跡遺跡に多い点から、大名屋敷での儀礼に伴う宴会に饗された食器であることと、それらが現在の美術的価値とは異なり、あくまでも実用品であることを指摘した(成瀬・堀内 1998)。

中診地点 L32-1 にみられるような高級磁器皿を主体とする遺物組成は、龍岡町遺跡 68号土坑(文京区遺跡調査会 1995)、尾張藩上屋敷跡遺跡 149-3N-5(東京都埋蔵文化財センター2001) や、破片ながら向柳原町遺跡 C区 7-F-IX層(東京都埋蔵文化財センター2005) などでも認められる。

堀内は L32-1 で出土した陶磁器を「コレクション形成」という視点から組成内容を検討し、L32-1 や尾張藩上屋敷跡遺跡 149-3N-5 から「江戸藩邸における大名の儀礼・行事などに伴う食膳様式が寛永期ごろから成立をみた証左」と位置づけている(堀内 2009)。堀内はこれらの資料の特徴を次の4点にまとめ、高級磁器皿を主体とする一括資料の性格を、御殿空間の儀礼に伴う宴会で使用された実用品であると位置づけた(堀内 2005)。

(1) 組成には大皿を含む磁器皿が多い。

(2) 高級磁器製品が主体を占める。

(3) 皿類の多くは揃いで使用・保存される。

(4) 皿類の口径は 6-7 寸が主体を占める。

森本伊知郎は東京大学本郷構内遺跡中診地点 L32-1 と龍岡町遺跡 68 号土坑の出土遺物<sup>144</sup>を比較して、どちらの組成にも認められる「同意匠の皿のセットや舶載磁器の盤は、17 世紀代の江戸藩邸でほぼ共通して所有されていた」可能性を指摘している（森本 1995）。

東京大学本郷構内遺跡には、L32-1 の他にも、1682 年（天和 2）の火災層にパッキングされた遺構や包含層でも良質な磁器製品が出土している。この包含層（C2 層）の出土遺物はほとんどが肥前製磁器皿で占められていた。それに中国製磁器が伴うことや、10 枚以上の揃いの製品がみられるといった遺物組成は中診地点 L32-1 と類似したものである。遺物には、医学部研究棟地点出土の遺物と接合するものがあり（堀内 2006）、加賀藩邸の御殿空間で使用されていた什器が、被災後に火災瓦礫として大聖寺藩邸内で捨てられたことがうかがえる。

---

<sup>144</sup> 中診地点の L32-1 が 1682 年（天和 2）の火災に伴う一括資料であるのに対して、森本は 68 号土坑の一括資料をそれよりもやや後出の様相として捉え、1716 年（正徳 6）の火災による一括資料と位置づけた（森本 1995）。

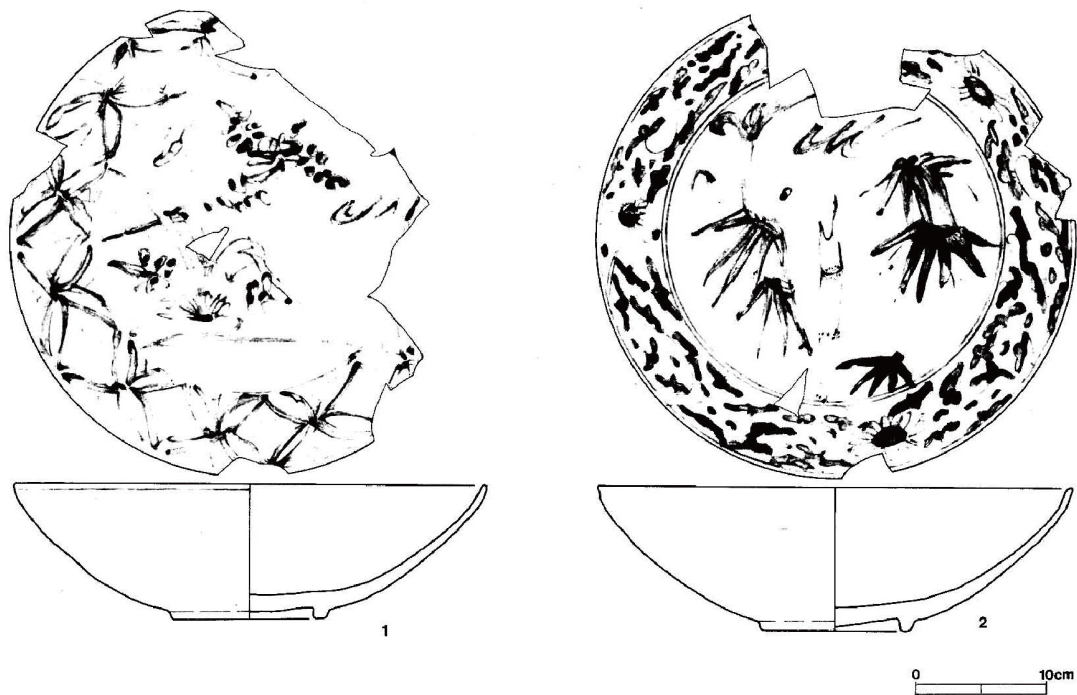
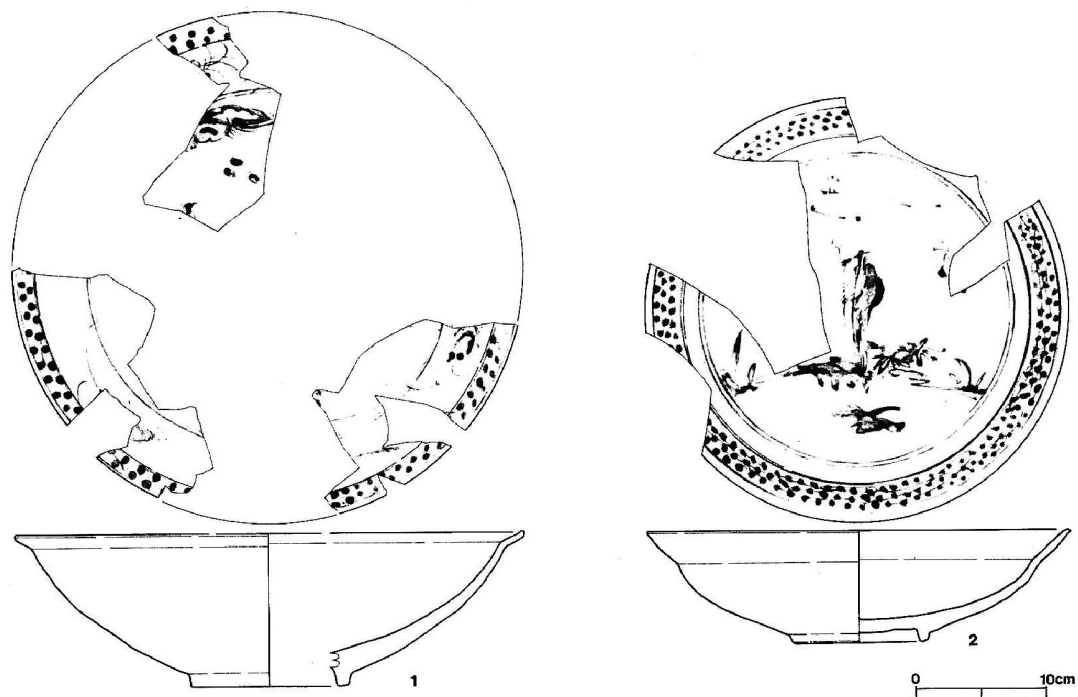


図 86 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 678 号出土遺物（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）

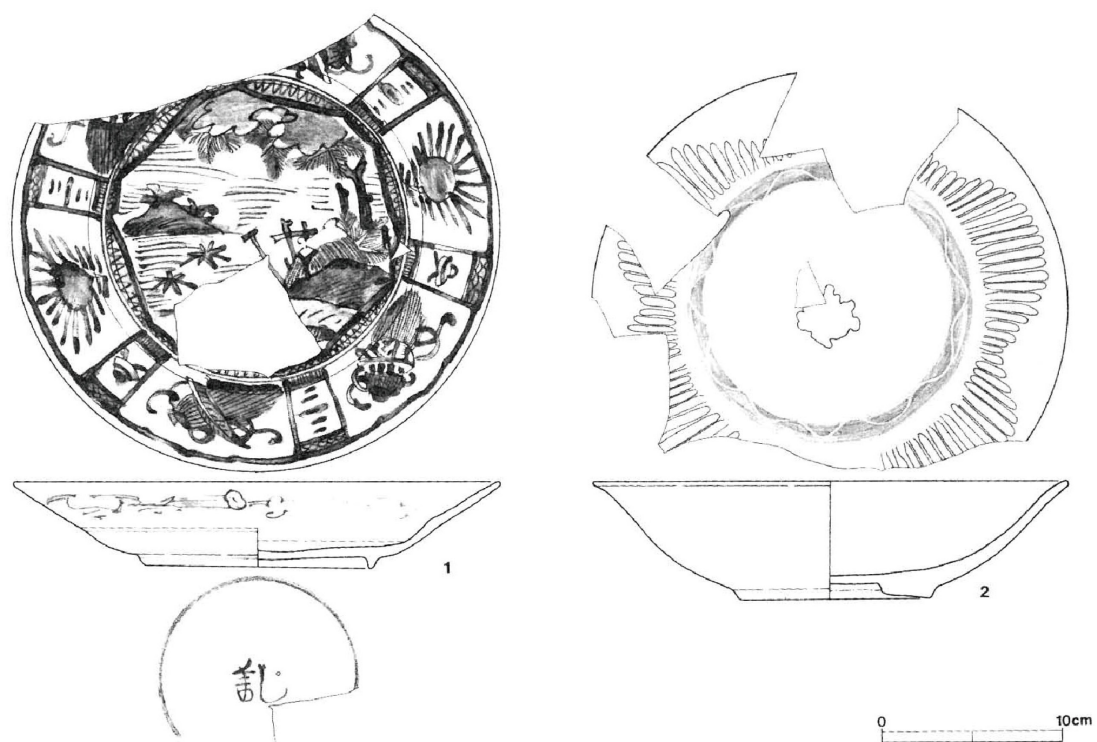
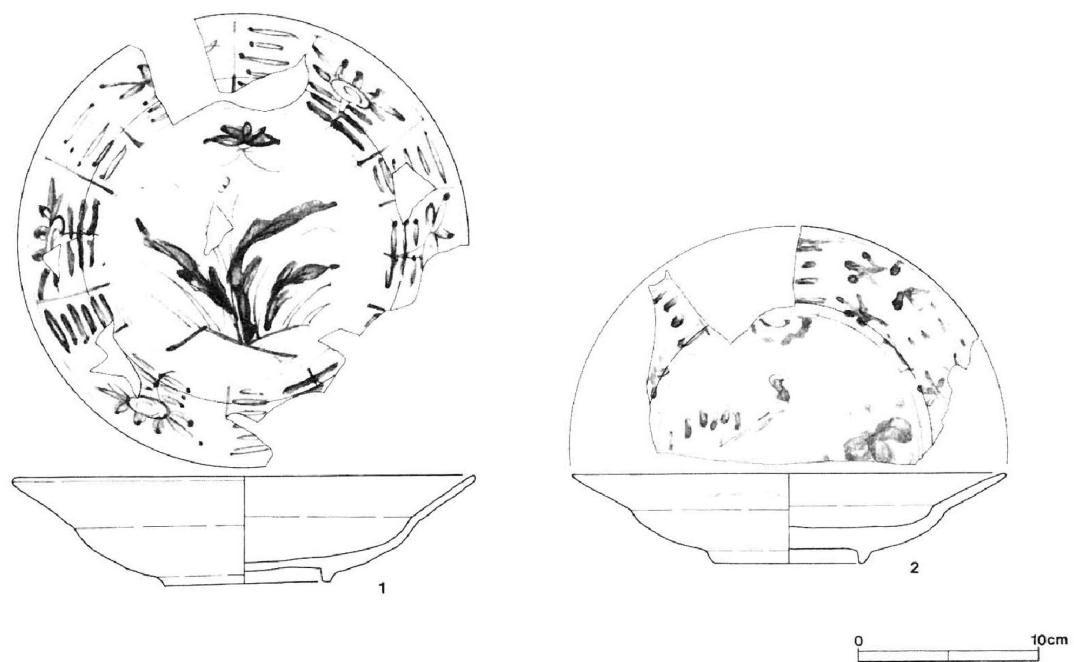
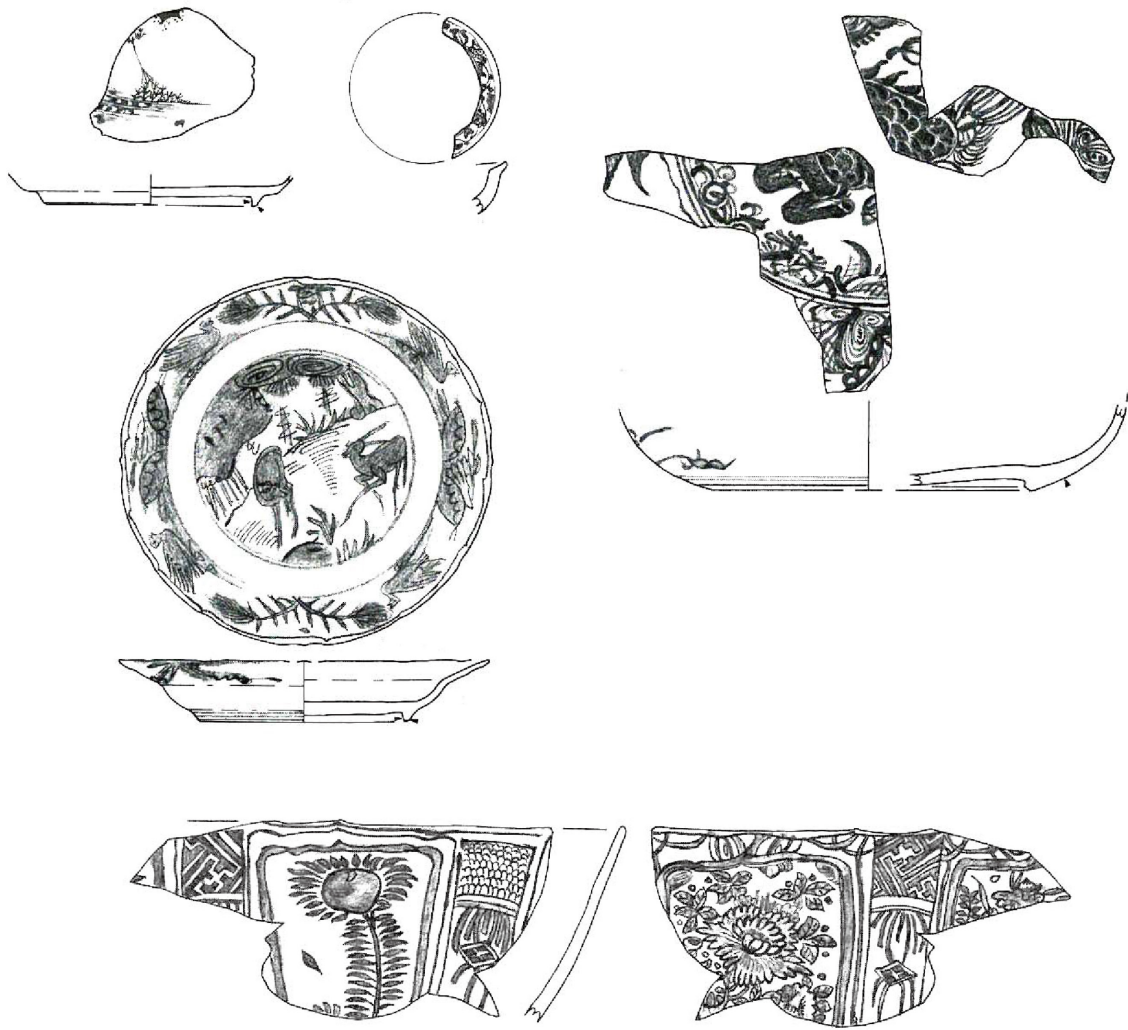


図 87 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 678 号出土遺物（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）



青花



青磁

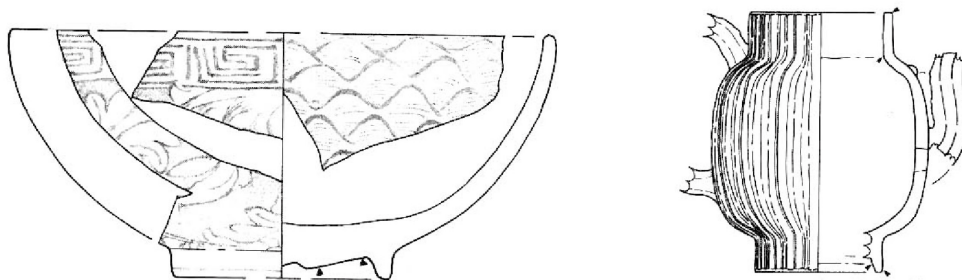


图 88 东京大学本郷構内遺跡中診地点 L32-1 出土遺物 (東京大学遺跡調査室 1990)

明末・景德鎮窯製

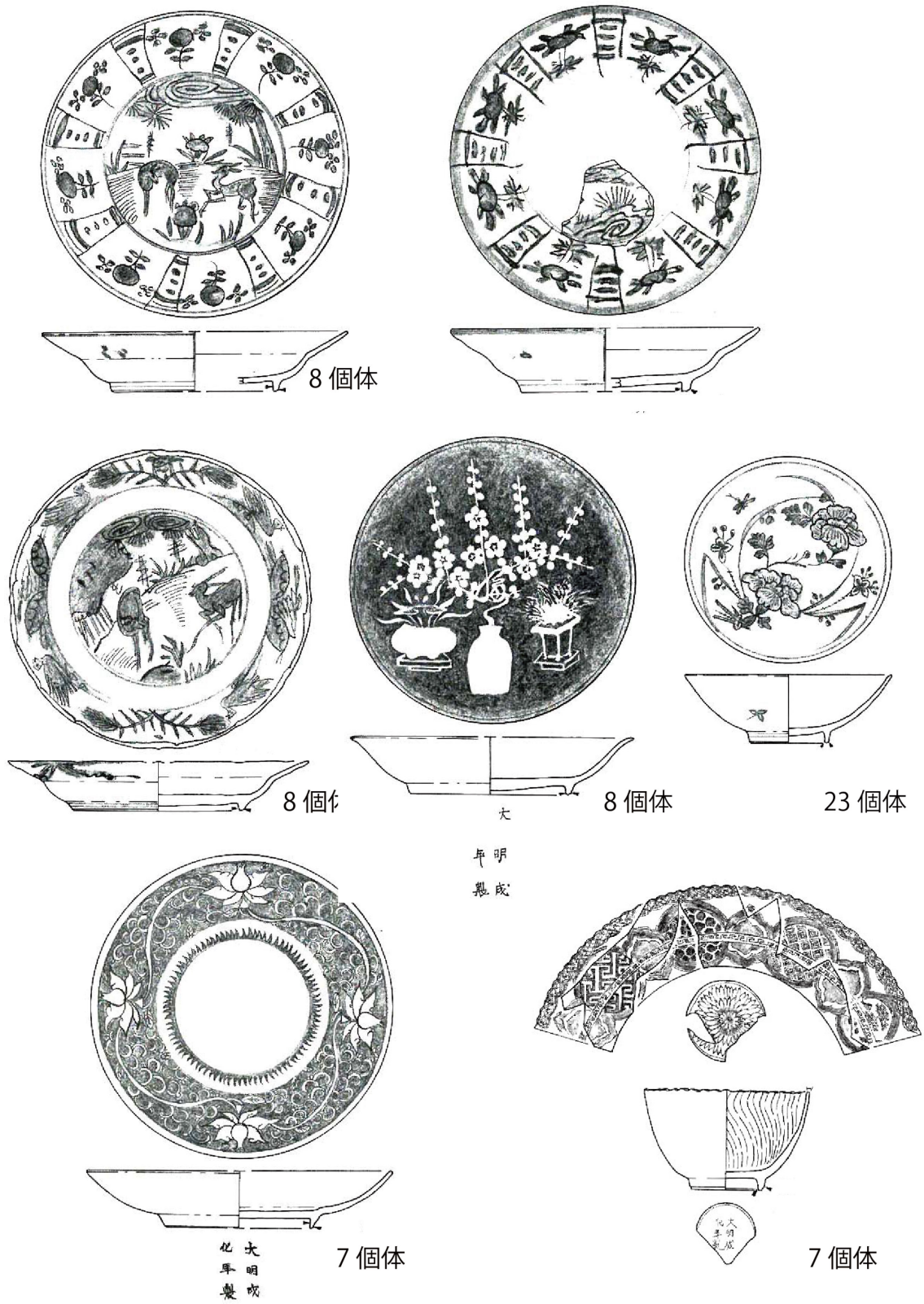


図 89 東京大学本郷構内遺跡中診地点 L32-1 出土遺物 (東京大学遺跡調査室 1990)

## 2. カワラケ一括廃棄遺構と宴会儀礼

大名屋敷跡遺跡ではカワラケが一つの遺構から多量に出土することがある(これを本論文ではカワラケ一括廃棄遺構と呼ぶ)。こうしたカワラケ一括廃棄遺構は鎌倉や平泉などの中世都市から発掘例がある。鎌倉では河野眞知郎によってカワラケの持つ、清浄さを伴う食器という特殊性と、それが大量に生産できる体制が論じられた(河野 1986)。藤原良章はカワラケの、大量生産・大量消費される安価なものでありながら特殊性を伴うという食器のあり方が平安時代の京都から始まると位置づけた(藤原 1998)。

大庭康時は博多遺跡群の土師器皿一括廃棄遺構(カワラケ一括廃棄遺構)の出土状況を「埋置」、「廃棄」、「その他」に分類し、土師器皿・坏が「日常生活に密着した器物」であったことが、博多遺跡群で多様な出土状況がみられる理由であるとした(大庭 1999)。

カワラケ一括廃棄遺構は 14 世紀頃に減少するが、15-16 世紀の中世都市で再度出土例を増す。検出例の多くが武家屋敷跡遺跡であることから、多くの遺跡でカワラケ一括廃棄遺構は武家儀礼に伴う非日常的な什器であると捉えられている(甲府市教育委員会 1998、山口剛志 1991、小野正敏 1994)。小野正敏はカワラケに権威を示す器と位置づけ、武家儀礼に際してそれを多量に使用し、廃棄することが、「京都との文化的なあるいは社会的な距離を示す」ものであるとした(小野 1993)

東京大学本郷構内遺跡中央診療棟地点池状遺構では 634 個体以上のカワラケ(図 91)と、多量の白木の箸や膳が出土した。共伴する木札には、1629 年(寛永 6)の墨書(図 92)があることから、藤本強らは同年 4 月に本郷邸で行われた将軍家光、大御所秀忠の御成に関連した什器であると位置づけた(藤本ほか 1987)。歴史的に特定の宴会(御成)と結び付けることができるカワラケ一括廃棄遺構は、江戸の遺跡では現在に至るまで本例が唯一のものである。

郵政省飯倉分館構内遺跡南区 1 号土坑では、280 個体のカワラケがマダイ、カツオ、サザエなど多量の食物残滓と共に出土した(港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986)。桜井準也は遺構各層に含まれる魚や貝の種類から廃棄季節を推測し、火鉢など季節性を反映する共伴資料の出土層位を参照することで、一つの土坑が堆積するまでの期間を検証した(桜井 1986)。

カワラケ一括廃棄遺構は大名屋敷以外の遺跡でも出土する。港区No.91 遺跡(旗本屋敷)の 1 号土坑は、多量の和傘の部材が出土し、居住者が和傘製作の内職に携わっていたことがうかがえる事例だが、その共伴遺物として多量のカワラケが出土した(南麻布福祉施設建設用地内遺跡調査団 1991)。

こうした大名屋敷以外の江戸の武家地におけるカワラケ一括廃棄遺構のあり方が注目されたのは、根来百人組与力組屋敷だった市谷仲之町遺跡第 3 次調査である(新宿区遺跡調査会 1995)。

井汲隆夫はカワラケが一括廃棄される「かわらけ溜」の江戸における事例を集成した上で、(1) 数種類の口径のカワラケが集中する事例、(2) 口径は変わらずに、「大」、「小」などの墨書が施されたカワラケが集中する事例、(3) 口縁部にススが付着した灯明皿としてのカワラケが集中する事例とに分類した。そしてカワラケが大名に限らず武家にとって儀式・宴会の際に必要な什器であると位置づけた(井汲 1995)。

宮間利之は「かわらけ溜り」の遺物組成と遺構の形態から、「かわらけ溜り」の分類を試みている（宮間 2000）。宮間はゴミ穴の上部や植栽痕といった窪地に形成される「かわらけ溜り」には食物残滓が伴わないことから、そうした「かわらけ溜り」が土地改変に伴う儀礼によって形成されたものであるとした。廃棄場所や廃棄状況の認定方法や、検出事例が武家屋敷跡遺跡に集中することの歴史的背景などに課題は残るが、カワラケー括廃棄遺構の形成要因として、武家儀礼に伴う宴会以外の要因をあげた点は、カワラケー括廃棄遺構研究に一石を投じるものだった。

### 3. 東京大学本郷構内遺跡のカワラケー括廃棄遺構

#### (1) 東京大学本郷構内遺跡中央診療棟地点池状遺構

東京大学本郷構内遺跡中央診療棟地点（中診地点）はキャンパス東側の病院地区に位置する（図 45）。本地点は 1682 年（天和 2）の火災で屋敷割を大きく変える部分である。火災前は調査区内に大聖寺藩邸（西側）、加賀藩黒田門邸（東側）、富山藩邸（北側）を含み、火災後は全域が大聖寺藩邸となる（図 44・図 45）。

池状遺構は南北最大 9.0m、東西最大 7.3m で、底面には 3 カ所の大きな落ち込みがあり、平面形、断面形ともに変化に富んだ遺構である。深さは最も深い南側で確認面から 2.4m、最も浅い西側で 1.2m である（図 90）。

遺構は自然面から掘り込まれており、最下層は灰黒色を呈した土層で、粘性が強い。調査グリッド 25 ラインの堆積状況は、漸位層よりも下層は水つきのローム層の堆積である。このことから池状遺構は調査地内でも湿潤な場所に構築されていて、遺構の開口時には湧水により池のような状況がみられたものと推測される（ただし給排水に関連する遺構は未検出）。

本遺構からは 634 個体のカワラケ、130 膳以上の折敷、1,480 本の膳が出土した（図 91）。

カワラケは大部分が手づくねによって作られており、胎土は白色を呈している。口径が明らかなカワラケ 560 個体を対象に、口径毎の個体数をまとめたのが表 37 である。カワラケは口径 12cm のサイズのもの、15 cm のサイズのもので構成され、そのうち口径 12 cm のカワラケが 437 点（78%）と最も多い。

	6cm	9cm	12cm	15cm	15cm以上	計
カワラケ	0	0	437	123	0	560

表 37 東京大学本郷構内遺跡中診地点池出土カワラケの口径別資料数

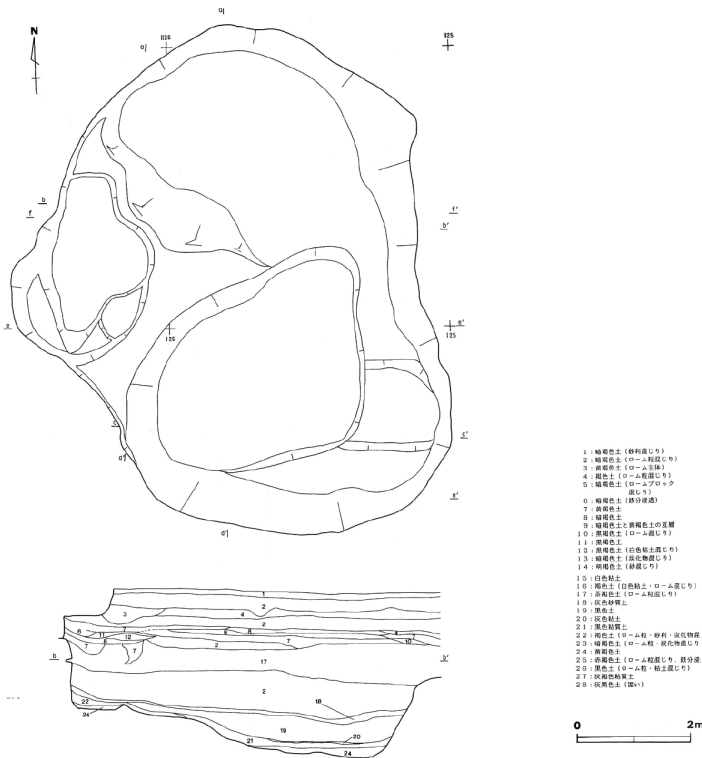
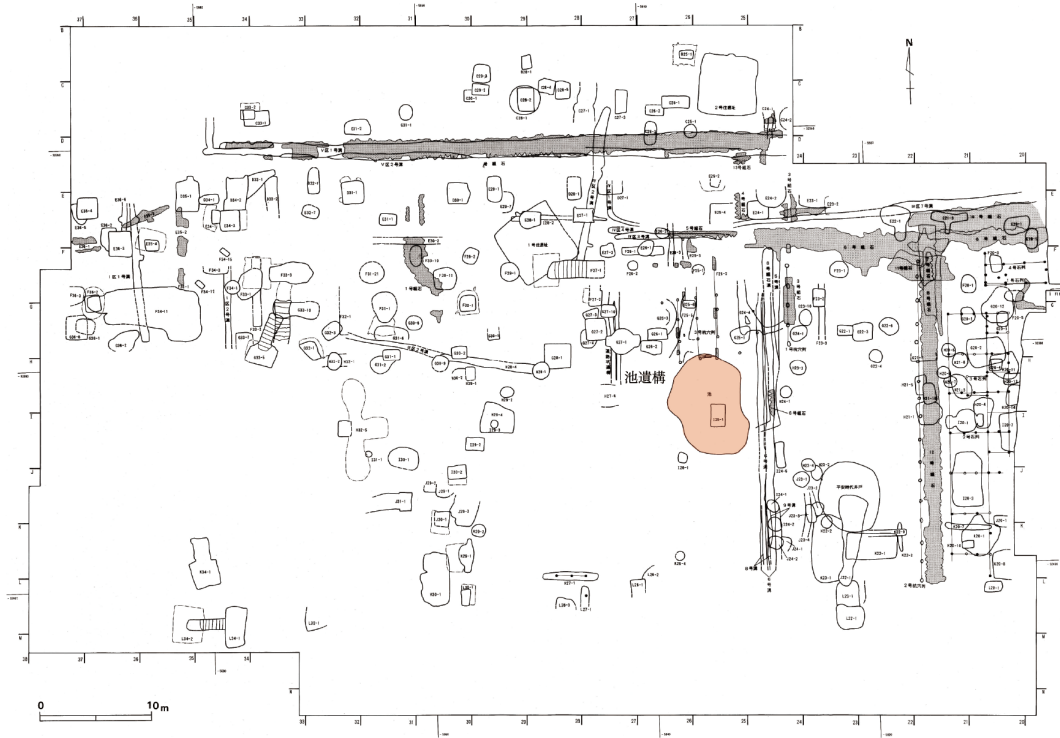


図 90 中央診療棟地点の池状遺構 (東京大学埋蔵文化財調査室 1990 より)

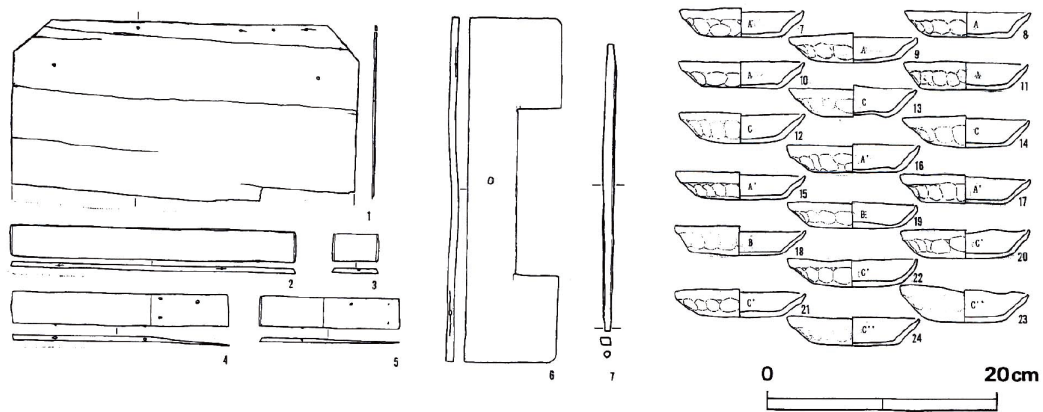


図 91 中診地点池状遺構出土のカワラケと折敷（東京大学遺跡調査室 1990 より作成）

池状遺構からは図 92 のような木簡が相伴している。

【1】

表) 「寛永六年

○ (穿孔) 三□□□□ 井□□左衛門

□□□□□□

裏) 「□□□□

○ (穿孔) 三百□□□□ 拾式□□

此 □□□□ □□□□

」

【2】

表) 「 寛永六年 □□□□□□□□

○ (穿孔)

三月十九日 井□□□□□×」

裏) 「 七千六百五拾式ノ内五百

○ (穿孔)

九貫目 あうはた□×

□□□□□

」

【4】

表) 「雁九ツ入

」

裏) 「□ (富カ) 山ニ有□ (御カ) 時 (柄カ) □

雁九ツ入 』

【5】

「高岡ニ有之□（御カ）時□□□（柄カ）  
かん拾弍入 』

【9】

「○（穿孔） ます十五入」

木簡に記された内容は断片的だが、次のような情報が記されている。

- ①年……寛永六年＝1629年
- ②地名……富山、高岡 など
- ③人名……井□□左衛門 など
- ④物品名……雁、あゆ（鮎）、ます（鱒） など
- ⑤数量 ……三百□拾弍、七千六百五拾弍ノ内五百、九ツ、十五入 など

特に木簡にある「寛永六年」の紀年銘から、藤本強・宮崎勝美・萩緒昌枝らは同年4月に本郷邸で行われた将軍家光、大御所秀忠の御成に関連した什器であると位置づけた（藤本ほか前掲）。

池状遺構ではカワラケや折敷などのような御成に直接結び付いた遺物と共に、陶器、土器、木製品が出土している。出土量は不明だが、遺構一括資料として遺物数が提示されていないことから<sup>145</sup>、カワラケに比べて少量だったものと思われる。

陶器には天目茶碗、京・信楽系播鉢、瀬戸・美濃製播鉢、肥前製唐津鉄絵皿、瀬戸・美濃製の皿がある。木製品には蒲鉾板、火鑽臼、曲物の蓋・底、ヘラ、栓のほか、人形・船形木製品、鳥形木製品、小刀の模造品、鏝の模造品、下駄などがある。特に下駄（2点）は歯がすり減った使い込まれたものである。

そもそも荷札木簡も本郷邸に物品が到着した段階でゴミとなるものであり、池状遺構のこうした雑多な廃棄状況から、萩尾は池状遺構を「下屋敷のなかでも辺鄙な地点」に構築されたゴミ捨て場と捉えて、寛永6年の御成が行われた空間は別にあったものと推測している（萩尾1990・萩尾1992）。

---

<sup>145</sup> 本地点では底部破片が100点以上の遺物が出土する遺構一括資料を対象に、器種別組成が提示されている（成瀬晃司1999）。

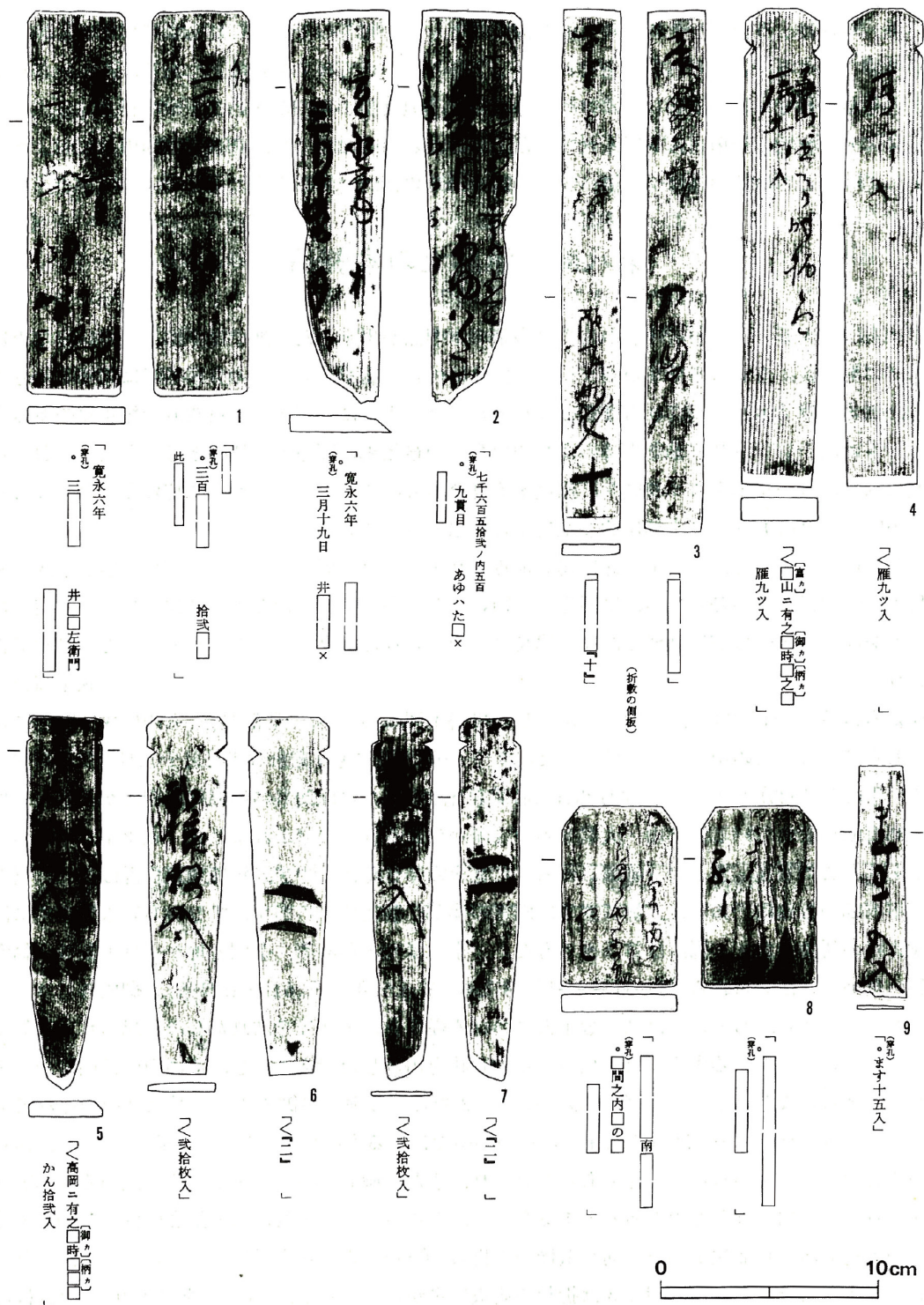


図 92 中診地点池状遺構出土の木簡 (東京大学遺跡調査室 1990 より作成)



(2) 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 395 号

東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 395 号は、第 2 焼土面と呼ばれる焼土にパックされたⅢ期に帰属する遺構である。Ⅲ期の遺構検出状況は、『武州本郷邸図』（前田育徳会尊経閣文庫蔵）に描かれた御殿空間内の建物と配置がほぼ合致することから、1688（元禄元）年を上限とし、1703（元禄 16）年の火災を下限とする時期に位置づけられている（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）。本遺構は「外局」の敷地内に該当する。

395 号は長軸 3.0m、短軸 1.0m、深さ 0.7m の平面が長方形を呈する土坑である（図 93）。出土遺物はカワラケが 885 点（以下、破片数）と主体を占めており、数点ずつ重ねられた状況で出土した。共伴遺物として瀬戸・美濃製、肥前製の皿や甕が数点出土している（図 94・図 95）。

カワラケはロクロ成形のものが 846 点を占め、他に精製カワラケが 38 点、手づくねによるカワラケが 1 点ある。カワラケの推定個体数は詳らかではない。報告書では墨書を有したカワラケが 102 個体掲載されており、それが全個体数の 5 割強と記載されていることから推測すると、200 個体程度であったと想定される。

報告書に掲載されているカワラケには、煤の付着から燈火具として利用されたことが推測されるカラケと、底部に穿孔が施されたカワラケもある。これらを除外した 91 個体を、宴会儀礼に供されたカワラケと位置づけ、口径毎の個体数を集計したのが表 38 である。

395 号では 3 つのサイズのカワラケが廃棄されている。そのうち最も多く出土したのが口径 12 cm のカワラケで 69 個体である。

69 個体のカワラケのうち、墨書が認められるのは 56 個体である<sup>146</sup>。墨書には「御十五」、「御十二日」、「五日 十八日 廿（カ）八日」、「九日 □（十カ）□□（日カ）廿三日」というように、数字が記されている例が多い。殊に日付との関わりが強いようにみられるが、その背景については不明である。

井汲は「かわらけ溜」を形成するカワラケのあり方として、複数の口径のカワラケからなる事例と、「大」、「小」などの墨書が施されたカワラケからなる事例とがあることを指摘した（井汲前掲）。筆者は 18 世紀代のカワラケの用い方は、異なるサイズのカワラケを併用することを基本とし、「大」、「中」、「小」などの墨書は、不足するサイズを補完するための見立てである可能性を指摘した（追川 2006）。

395 号のカワラケには墨書されたものが多いにもかかわらず、「大」、「中」、「小」などの墨書がみられない点は、カワラケを一括廃棄することになった宴会が、異なるサイズのカワラケを使用したことによるものと推測される。

---

<sup>146</sup>宴会に供されたカワラケの 8 割にのぼるが、掲載資料として抽出した際に意図的に選択された可能性も考慮する必要がある。

	6cm	9cm	12cm	15cm	15cm以上	計
カワラケ	11	11	69	0	0	91

表 38 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点 395 号出土カワラケの口径別資料数

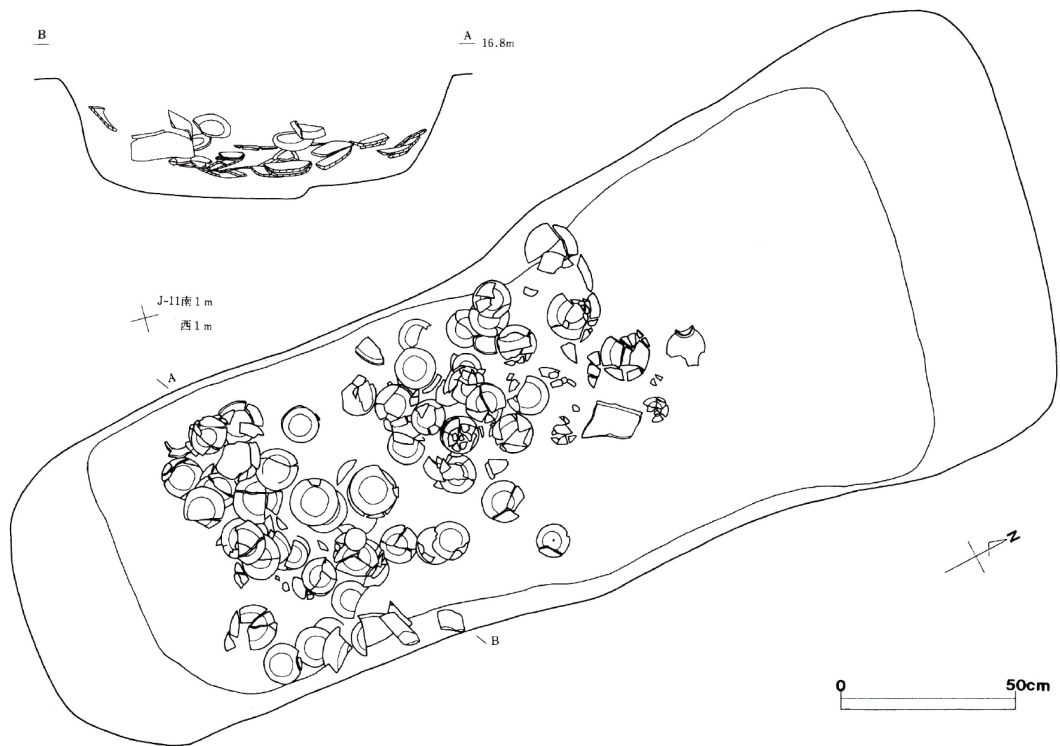


図 93 御殿下記念館地点 395 号遺物出土状況（東京大学遺跡調査室 1990）

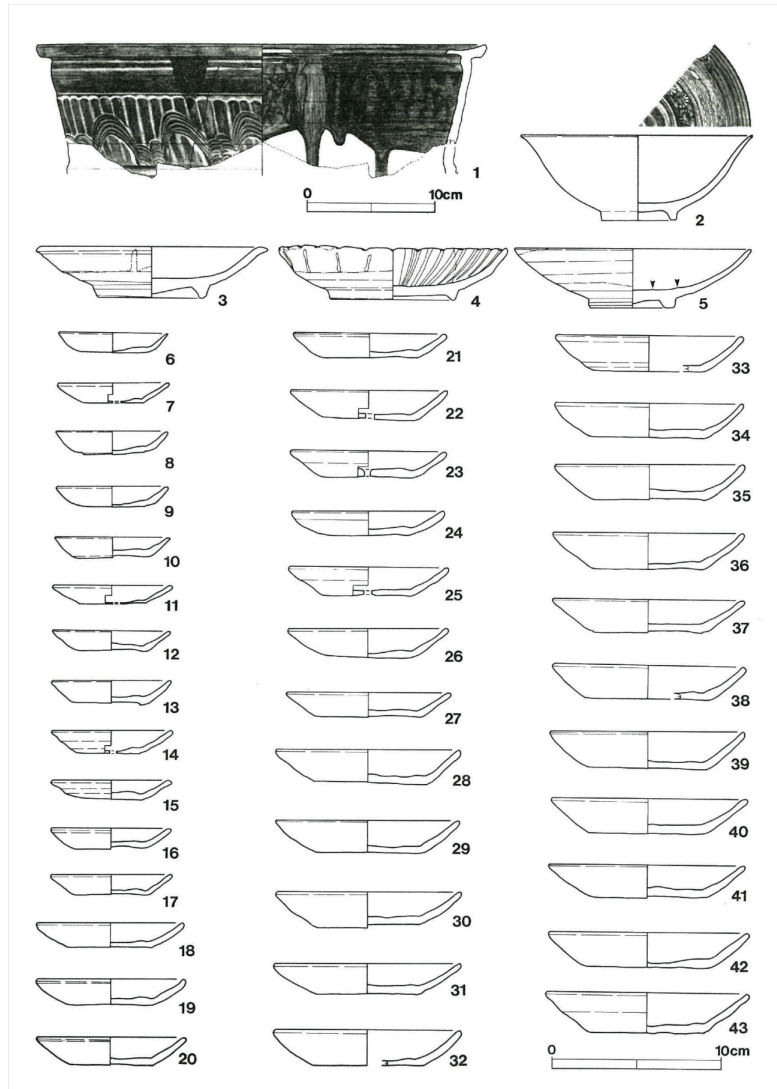


図 94 御殿下記念館地点 395 号出土遺物 (東京大学遺跡調査室 1990)

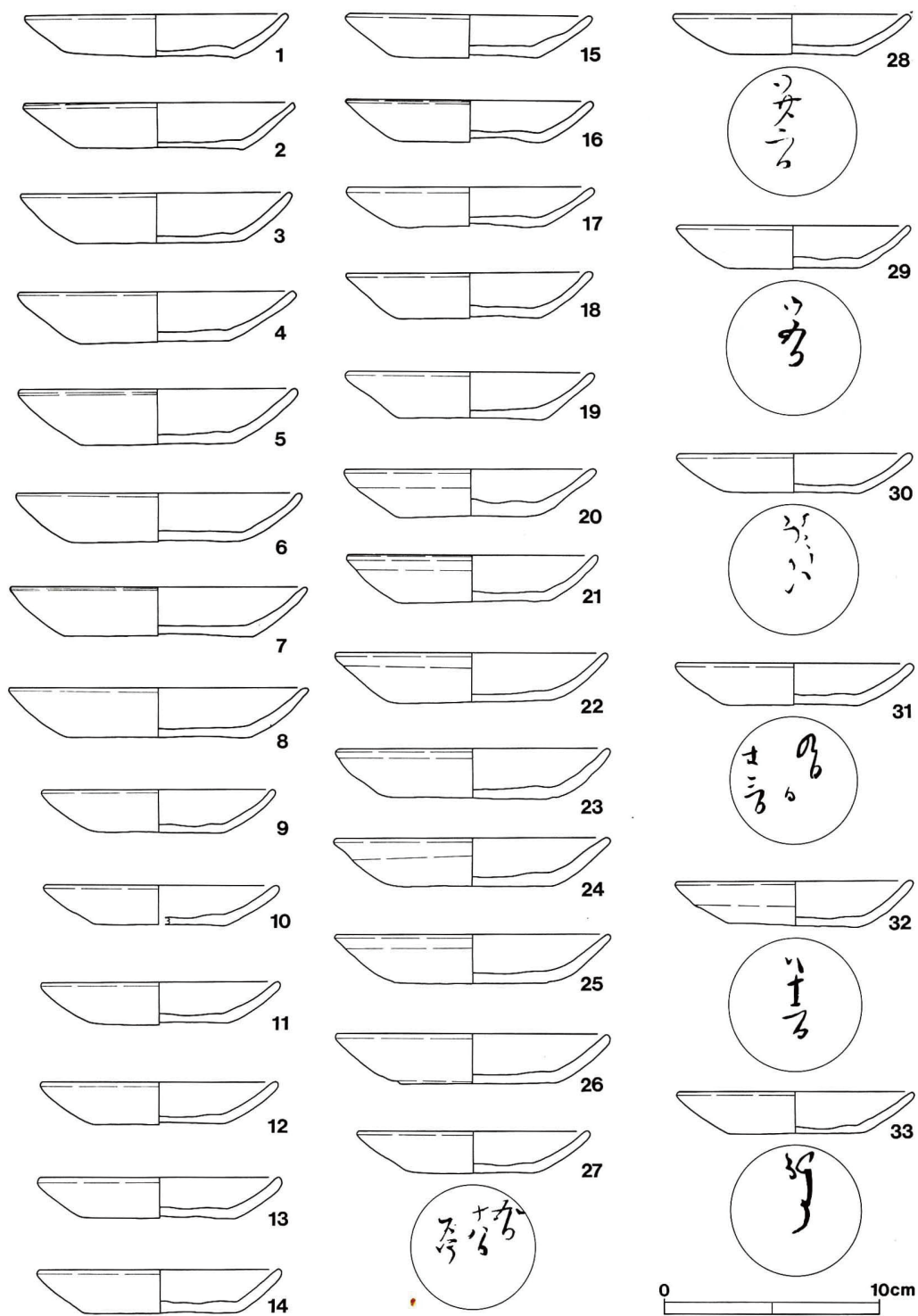


図 95 御殿下記念館地点 395 号出土遺物 (東京大学遺跡調査室 1990)



## 参考文献

### 【ア】

- 相川由美 1994 「大名屋敷の生活と規制」『歴史評論』536 民主主義科学者協会 pp. 27-40
- 安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 pp. 259-288
- 秋元智也子 1989 「陶磁器類」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』 東京大学遺跡調査室 pp. 320-341
- 秋元智也子 1991 「加賀藩上屋敷「御貸小屋」における食生活の一端」 江戸遺跡研究会編 『江戸の食文化』 吉川弘文館 pp. 243-258
- 秋山伸一 1997 「江戸の庭園管理と園芸書 一植木屋の諸活動を通して一」 竹内誠編 『近世都市江戸の構造』 三省堂 pp. 107-127
- 朝尾直弘 1975 「将軍政治の権力構造」 朝尾直弘ほか編 『新版岩波講座日本歴史 10 近世2』 岩波書店 pp. 2-56
- 朝尾直弘 1991 「「近世」とは何か」 朝尾直弘編 『日本の近世1 世界史のなかの近世』 中央公論社 pp. 7-52
- 浅川範之 2007 「「飯茶碗」の考古学」 鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：「新しい時代の考古学」の方法と実践』 慶應義塾大学出版会 pp. 49-70
- 朝倉治彦校訂 1985 『江戸城下変遷絵図集：御府内沿革圖書』 原書房
- 浅野長勲 1937 『浅野長勲自叙傳』 平野書房
- 麻布台一丁目遺跡調査会 1986 『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』
- 蘆田伊人編 1957 『大日本地誌大系 新編武蔵風土記稿』 雄山閣
- 蘆田伊人編 1958 『大日本地誌大系 御府内備考』 雄山閣
- 足利健亮 1994 「信長、秀吉、家康の城と城下町 一歴史地理学と考古学・歴史学一（後編）」『京都府埋蔵文化財情報』54 pp. 15-27
- 阿部賢治 1998 「江戸遺跡からみた 0725 号遺構の検討」 『千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 63-78
- 阿部常樹 2006 「ごみの廃棄単位及び過程復元への貝類遺体分析からの試み」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5 pp. 257-275
- 阿部直輔・蓬左文庫 1987 『尾藩世記』 名古屋市教育委員会
- 荒川正明 1996 「大皿の時代 一近世初頭における大皿需要の諸相一」『出光美術館研究紀要』2 出光美術館 pp. 71-103
- 荒川正明 1998 「大皿の時代 一宴の器一」『大皿の時代展 一宴の器一』 出光美術館 pp. 9-21
- 荒川正明 2004 「古九谷 一その歴史と造形の展開一」『古九谷』 出光美術館 pp. 9-21
- 飯田町遺跡調査会 1995 『飯田町遺跡』 飯田町遺跡調査会
- 五十嵐 彰 2007 「(遺跡)問題」 鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：「新しい時代の考古学」の方法と実践』 慶應義塾大学出版会 pp. 243-259
- 五十川伸矢 1992 「鑄造工人の技術と生産工房」 網野善彦・石井進編 『中世都市と商人職人』 名著出版 pp. 147-168
- 井汲隆夫 1992 「近世やきものの器種分化」『内藤町遺跡 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 373-383
- 井汲隆夫 1995 「市谷仲之町遺跡第3次調査の「かわらけ溜」に関する考察」『市谷仲之町遺跡Ⅲ（仮称）新宿区防災センター建設に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区遺跡調査会 pp. 118-138
- 池田悦夫 1993 「楽々園焼 一尾張徳川家江戸藩邸御庭焼一」 新宿区教育委員会編 『大名屋敷』 新宿歴史博物館 pp. 87-91
- 石神裕之 2011 「総括会津藩保科（松平）家屋敷跡遺跡の成果と課題」『会津藩保科（松平）家屋敷跡遺跡 慶應義塾中等部新体育館・プール建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 慶應義塾大学文学部民族考古学研究室 pp. 404-423
- 石川県図書館協会 1981 『加賀藩御定書 前編』
- 石川県立歴史博物館 1990 『加賀藩士小川家文書目録』 石川県立歴史博物館
- 石坂圭介 1993 「まとめ」『松平出羽守抱屋敷 初台遺跡』 渋谷区初台遺跡調査団 pp. 172-203

- 石崎俊哉 2004a 「汐留遺跡における大名江戸屋敷の変遷と出土陶磁器の位置」『受容層の違いによる九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会 pp. 61-116
- 石崎俊哉 2004b 「港区汐留遺跡・沿岸域の大名江戸屋敷 -その概要と播磨国龍野藩脇坂家芝屋敷について」『月刊考古学ジャーナル』514 ニューサイエンス社 pp. 4-8
- 石崎俊哉 2007 「続 汐留遺跡にみる大名屋敷の造成--保科家芝屋敷の形成について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』23 pp. 1-20
- 石崎俊哉 2008 「続続・汐留遺跡にみる大名屋敷の造成 一脇坂家芝屋敷の形成と沿岸域造成の一樣相一」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』24 pp. 29-58
- 石崎俊哉 2009 「汐留遺跡にみる大名屋敷の造成 補遺(1)土留め竹柵・板柵一」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』25 pp. 49-78
- 石崎俊哉 2011 「仙台藩伊達家芝屋敷の形成と変遷一沿岸域の大名江戸屋敷の造成」江戸遺跡研究会編『江戸の大名屋敷』吉川弘文館 pp. 93-127
- 石崎俊哉 2012 「芝口海手の大名江戸屋敷：汐留遺跡」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』26 pp. 305-329
- 石塚裕道 1971 「幕藩営軍事工業の形成-その内部矛盾と技術の体系化をめぐる-1-」『史学雑誌』80-8 史学会 pp. 1-38
- 石塚裕道 1971 「幕藩営軍事工業の形成-その内部矛盾と技術の体系化をめぐる-2-」『史学雑誌』80-9 史学会 pp. 36-57
- 石山秀和 2010 「勤番武士の余暇と行楽 秋田藩土貝塚清直の江戸日記を事例に」『東京都江戸東京博物館調査報告書 23 酒井伴四郎日記：影印と翻刻』 pp. 73-80
- 伊勢菰野藩土方家屋敷跡調査団 1992 『伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡発掘調査概報』
- 板橋区史編さん調査会 1996 『板橋区史 資料編 3』 板橋区
- 板橋区史編さん調査会 1998 『板橋区史 通史編 上巻』 板橋区
- 板橋区立郷土資料館 2010 『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』 板橋区立郷土資料館
- 市川寛明 1997 「大名藩邸と江戸の都市経済 一津山藩江戸藩邸の事例を通して一」竹内誠編『近世都市江戸の構造』三省堂 pp. 75-103
- 伊藤好一 1959 「江戸近郊の蔬菜栽培」地方史研究協議会編『日本産業史大系 4 関東地方篇』東京大学出版会 pp. 54-81
- 伊藤好一 1966 『江戸地廻り経済の展開』 柏書房
- 伊藤好一 1982 『江戸の夢の島』 吉川弘文館
- 伊藤好一 1983 「江戸におけるごみ・下水・尿尿の処理」豊田武・原田伴彦・矢守一彦編『講座・日本の封建都市 第2巻』文一総合出版 pp. 431-456
- 伊藤 健 2003 「第37・42・43・44・47 地点の遺構配置について」『尾張藩上屋敷跡遺跡IX』東京都埋蔵文化財センター pp. 544-550
- 伊藤 健 2005 「成果と課題」『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』東京都埋蔵文化財センター pp. 455-465
- 伊藤多三郎 1963 「成立期の藩財政」藩制史研究会編『藩制成立史の総合研究：米沢藩』吉川弘文館 pp. 737-799
- 伊藤裕久 2010 「都市空間の分節把握」吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市4 分節構造』東京大学出版会 pp. 73-107
- 伊東龍一編 1992 『城郭』 至文堂
- 井上純子 1990 「梅之御殿 厠跡から検出されたPbについて」『東京大学本郷構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 362-364
- 今井林太郎 1938 「中世に於ける武士の屋敷地」『社会経済史学』8-4 社会経済史学会 pp. 102-114
- 岩下哲典 1995 「近世国家における人参栽培と薬師信仰 -尾張藩薬園から日光山に献上された人参」『徳川林政史研究所研究紀要』29 徳川黎明会 pp. 103-127
- 岩淵令治 1991 「近世考古学の進展と近世史研究」『歴史評論』500 歴史科学協議会 pp. 277-292
- 岩淵令治 1993a 「江戸武家方辻番の制度的研究」『史学雑誌』102-3 史学会 pp. 404-430
- 岩淵令治 1993b 「江戸武家方辻番政策の再検討役と『請負』」『学習院史学』31 学習院史学会 pp. 76-98
- 岩淵令治 1995 「榊原家江戸屋敷と出入の者たち」『龍岡町遺跡』文京区遺跡調査会 pp. 76-90
- 岩淵令治 1997 「旧大名家当主嫡子の食生活と東京の商人職人」『東京都江戸東京博物館研究報告』2 東京都江戸東京博物館 pp. 225-272
- 岩淵令治 2000 「近世都市江戸のゴミ処理について 一大名屋敷の法令を中心に一」『考古学へのアクセス：ひと・世界・未来』学習院考古会 pp. 111-123
- 岩淵令治 2003 「江戸のゴミ処理再考 一リサイクル都市・清潔都市像を越えて一」『遺跡からみた江戸の



- ゴミ』江戸遺跡研究会 pp. 157-183
- 岩淵令治 2004a 『江戸武家地の研究』 塙書房
- 岩淵令治 2004b 「江戸のゴミ処理再考--"リサイクル都市"・"清潔都市"像を越えて」『国立歴史民俗博物館研究報告』118 pp. 301-336
- 岩淵令治 2007a 「八戸藩江戸勤番武士の日常生活と行動」『国立歴史民俗博物館研究報告』138 pp. 67-124
- 岩淵令治 2007b 「江戸の武家屋敷 江戸勤番武士の行動と交際」 都市史研究会編 『年報都市史研究 15 分節構造と社会的結合』 山川出版社 pp. 19-32
- 岩淵令治 2010a 「藩邸」 吉田伸之・伊藤毅編 『伝統都市』 東京大学出版会 pp. 129-162
- 岩淵令治 2010b 「八戸藩江戸勤番武士の行動と表象」『国立歴史民俗博物館研究報告』155 pp. 21-57
- 岩淵令治 2011 「17世紀前半の低地開発と拝領者」『文京区後楽二丁目南遺跡』 東京都埋蔵文化財センター pp. 331-373
- 岩淵令治 2014 「講演 近世考古学と近世史研究」『知多半島の歴史と現在 = Chita Peninsula, its history and present』18 pp. 43-50
- 岩本 馨 2002 「水戸藩における定府進展に伴う城下町および江戸藩邸の変容」『日本建築学会計画系論文集』560 日本建築学会 pp. 305-310
- ヴァポリス, コンスタンチン 1994 「江戸と土佐 土州江戸藩邸の一考察」『土佐史談』195 土佐史談会 pp. 1-11
- 宇井義典 2015 「龍岡町第7地点の発掘調査の成果」『龍岡町遺跡 第7地点』 大成エンジニアリング pp. 298-320
- 上田三平 1972 「改訂増補日本薬園史の研究」 三浦三郎編 『改訂増補 日本薬園史の研究』 渡辺書店 pp. 1-169
- 上田 真 1990 「かわらけの編年学的及び機能論的考察」『東京大学本郷構内の遺跡法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 pp. 895-900
- 上野恵司 2004 「仙台坂遺跡(仙台藩伊達家品川下屋敷)の調査」 品川区立品川歴史館編 『江戸大名下屋敷を考える』 雄山閣 pp. 115-136
- 上野佳也・渡辺ますみ 1990 「梅之御殿跡土壌中の鉛含有量測定結果からみた厠跡の考察」『東京大学本郷構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 364-368
- 上野富太郎・野津静一郎 1941 『松江市誌』 松江市
- 内田祥三・一桝悦三郎・濱田稔・平山嵩・武藤清・岸田日出刀 1933 「木造家屋の火災実験に就て」『建築雑誌』49-597 日本建築学会 pp. 1649-1722
- 内野 正 2000 「江戸と国元、その接点 尾張藩上屋敷跡遺跡出土遺物を中心として」『江戸と国元』 江戸遺跡研究会 pp. 14-32
- 内野 正 2001 「発掘調査の成果」『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ』 東京都埋蔵文化財センター pp. 479-489
- 内野 正 2004 「大名屋敷における廃棄遺構の検討 一尾張藩上屋敷の発掘調査から一」『続 遺跡からみた江戸のゴミ』 江戸遺跡研究会 pp. 83-102
- 内野 正 2004 「発掘調査成果からみた尾張藩市谷邸一尾張藩上屋敷跡遺跡」『月刊考古学ジャーナル』514 ニューサイエンス社 pp. 14-17
- 内野 正 2005 「出土陶器碗からみた尾張藩市谷邸の画期一柳茶碗・御小納戸茶碗・灰釉平碗の分析から」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』21 pp. 1-21
- 内野 正 2006a 「尾張藩市谷邸で使用された陶磁器・土器の様相(1)陶磁器碗類素描」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』22 pp. 41-64
- 内野 正 2006b 「調査の成果」『尾張藩上屋敷跡遺跡 XⅡ』 東京都埋蔵文化財センター pp. 383-390
- 内野 正 2010 「江戸遺跡の中の尾張・名古屋 尾張藩市谷邸(上屋敷)の発掘調査の成果から」『金鯱のみた夢 考古学からみた名古屋城とその城下』 考古学から名古屋開府400年を語る会 pp. 50-54
- 内野 正 2011 「尾張藩江戸屋敷の考古学的諸相」 江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』 吉川弘文館 pp. 60-92
- 内野 正 2012 「尾張藩上屋敷の発掘調査の成果：大名屋敷の広域発掘調査の意義」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』26 pp. 272-298
- 梅崎恵司 2008 「福岡藩黒崎銭場」『九州と東アジアの考古学(下)』 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会 pp. 713-732
- 海野 修 1996 「加賀藩下屋敷と足軽 - 「先祖由緒并一類附帳」の検討を中心に」『いたばし区史研究』5 板橋区史編さん調査会 pp. 35-56
- 海野 修 2010 「加賀藩下屋敷平尾邸での暮らしと屋敷の機能」『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』 板橋区

- 立郷土資料館 pp. 147-148
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
- 江戸叢書刊行会 1964 『江戸叢書巻の一』 名著刊行会
- 江戸東京博物館 2013 『花開く江戸の園芸』 東京都江戸東京博物館
- 江里口省三 1999 「尾張藩市谷邸庭園の池とその周辺について—東岸を中心として—」『尾張藩上屋敷跡遺跡IV』 東京都埋蔵文化財センター pp. 540-552
- 遠藤寛子 2004 「常陸水戸藩小石川(上)屋敷」『月刊考古学ジャーナル』514 ニューサイエンス社 pp. 22-25
- 遠藤寛子・加藤元信 2004 「小石川のあなぐら—都市と農村をむすぶもの」『東京考古』22 東京考古談話会 pp. 83-102
- 及川 登 1998 「千駄ヶ谷五丁目遺跡における遺構の変遷と土地利用」『千駄ヶ谷五丁目遺跡調の諸問題』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 1-62
- 追川吉生 2000 「本郷邸の御殿空間—考古学からのアプローチ—」『加賀殿再訪』西秋良宏編 東京大学出版会 pp. 37-41
- 追川吉生 2001 「漆器の絵付けに関連する絵図資料について—安代町ふるさと資料館収蔵品の分類から—」『東京都立大学考古学報告6 人類誌集報2001』 pp. 3-44
- 追川吉生 2002a 「総合研究棟(文・経・教・社研)地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3 pp. 14-19
- 追川吉生 2002b 「江戸時代の抱衣埋納に関する一考察—江戸遺跡における検出事例の分析を中心に—」『東京考古』20 東京考古談話会 pp. 127-172
- 追川吉生 2004a 「医学部附属病院第2中央診療棟地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 21-32
- 追川吉生 2004b 「インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 47-58
- 追川吉生編 2004c 「東京大学本郷構内の遺跡 農学部図書館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 95-111
- 追川吉生 2004d 『江戸のミクロコスモス：加賀藩江戸屋敷』 新泉社
- 追川吉生 2006 「17世紀のかわらけ一括廃棄遺構の—様相— 小石川植物園構内遺跡研究温室地点のかわらけ一括廃棄遺構の分析を中心に—」『東京大学白山構内の遺跡 理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告書』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 153-162
- 追川吉生 2007a 『江戸のなりたち1 江戸城・大名屋敷』 新泉社
- 追川吉生 2007b 『江戸のなりたち2 武家屋敷・町屋』 新泉社
- 追川吉生 2008a 『江戸のなりたち3 江戸のライフライン』 新泉社
- 追川吉生 2008b 「ベンチャープラザ地点(HVP06)発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6 pp. 33-39
- 追川吉生 2009a 「江戸遺跡の保存と整備」『都市遺跡の調査と保存・活用・整備』文化財保存全国協議会 pp. 45-49
- 追川吉生 2009b 「江戸遺跡から出土した埴塼の形態について—江戸における小規模鋳造の実態解明に向けて—」『アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』3 アジア鋳造技術史学会 pp. 48-51
- 追川吉生 2012a 「近世『東京考古』到達点と展望」『東京考古』30 東京考古談話会 pp. 122-127
- 追川吉生 2012b 「近世都市の考古学」『月刊考古学ジャーナル』623 ニューサイエンス社 pp. 3-6
- 追川吉生 2012c 「医学部附属病院立体駐車場地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 pp. 13-15
- 追川吉生 2015 「富山藩邸外郭部の土地利用状況—CRC地点の調査から—」『江戸富山藩邸の調査・研究報告会』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 1-6
- 及川良彦 2008a 「個別遺構の特徴」『尾張徳川家下屋敷跡遺跡V』 東京都埋蔵文化財センター pp. 360-398
- 及川良彦 2008b 「調査の成果と課題」『尾張徳川家下屋敷跡遺跡V』 東京都埋蔵文化財センター pp. 399-415
- 扇浦正義 1990 「江戸遺跡研究の一視点—江戸の武家地における塵芥処理問題—」『牟邪志』3 牟邪志同人会 pp. 57-69
- 大熊喜邦 1916 「江戸時代に於ける住宅建築概論」『住宅建築 建築世界十周年記念』 建築世界社 pp. 54-110
- 大熊喜邦 1921 「江戸時代住居に関する法令とその影響」『建築雑誌』420 建築学会 pp. 535-566
- 大熊喜邦 1934 「御茶の水に発見された地下横穴に就て」『建築雑誌』588 建築学会 pp. 887-890
- 大熊喜邦 1935 「近世武家時代の建築」『岩波講座日本歴史 七』 国史研究会編 岩波書店 1-77頁

- 大阪市文化財協会 1998 『住友銅吹所跡発掘調査報告住友銀行鰻谷新システムセンター建設に伴う発掘調査報告書』
- 大阪市文化財協会 2004 『大坂城下町跡Ⅱ』
- 大成可乃 1997 「天和2年の火災で焼失した長屋に伴う炉状遺構について-東京大学医学部附属病院病棟地点出土事例を中心に」『東京考古』15 東京考古談話会 pp. 117-144
- 大成可乃 2004 「医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 9-66
- 大成可乃 2011 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 pp. 223-314
- 大貫浩子 2005 「加賀藩邸における陶磁器消費の諸相 —SK01出土の遺物からみた19世紀前葉の様相—」『東京大学本郷構内の遺跡工学部1号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 162-181
- 大野広城・江戸叢書刊行会編 1980 『江戸叢書第二巻 青標紙』日本図書センター
- 大場磐雄 1934 「お茶の水発見の地下坑」『歴史公論』3-8 歴史公論 pp. 47-63
- 大庭康時 1999 「博多かわらけ考 I」『博多研究会誌』7 博多研究会 pp. 61-80
- 大橋康二 1989a 『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 大橋康二 1989b 「理学部7号館地点出土の17世紀の肥前磁器」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室 pp. 472-479
- 大橋康二 1990 「東南アジアに輸出された肥前陶磁」佐賀県立九州陶磁文化館編 『海を渡った肥前のやきもの展』 pp. 88-176
- 大橋康二 2004 『世界をリードした磁器窯・肥前窯』新泉社
- 大橋康二 2007 『将軍と鍋島・柿右衛門』雄山閣
- 大橋康二 2009 「鍋島焼生産目的と出土遺跡の性格について」『扶桑：田村晃一先生喜寿記念論文集』青山考古学会田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会 pp. 309-338
- 大橋康二 2010 「江戸幕藩体制を特色づける陶磁器」『季刊考古学』110 雄山閣 pp. 14-17
- 大八木謙司・成田涼子 1993 「市谷本村町遺跡の溝状遺構について」『東京都新宿区尾張藩徳川家上屋敷跡：大蔵省印刷局市谷倉庫増築に伴う緊急発掘調査報告書』新宿区市谷本村町遺跡調査団 pp. 82-88
- 岡長三郎 1940 「戸山荘に就いて」『造園雑誌』7-2 日本造園学会 pp. 83-92
- 岡野友彦 1999 『家康はなぜ江戸を選んだか』教育出版
- 小川恭一編 1992 『江戸幕藩大名家事典 下』原書房
- 小川 望 1992 「大名屋敷出土の焼塩壺」江戸遺跡研究会編 『江戸の食文化』吉川弘文館 pp. 128-162
- 小川 望 2003 「遺跡からみた江戸のゴミ」『遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会 pp. 1-7
- 小川 望 2004 「続 遺跡からみた江戸のゴミ」『続 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会 pp. 1-6
- 小川 望 2008 『焼塩壺と近世の考古学』同成社
- 小川祐司・阿部常樹 2002 「第4号遺構内の“ごみ”の堆積過程およびその背景」『坂町遺跡』新宿区生涯学習財団 pp. 127-136
- 小川祐司 2011 「江戸周縁の大名屋敷 -藤堂家染井屋敷-」江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』吉川弘文館 pp. 159-180
- 萩尾昌枝 1992 「江戸時代初期の宴会の食器類 —東京大学医学部附属病院中央診療棟建設予定地点「池」出土の木製品—」江戸遺跡研究会編 『江戸の食文化』吉川弘文館 pp. 205-219
- 桶谷繁雄 1965 『金属と人間の歴史』講談社
- 小沢朝江・水沼淑子 2006 『日本住居史』吉川弘文館
- 小沢詠美子 1990 「江戸の火災と町屋敷—三井家江戸抱屋敷を中心に—」『文化財の保護』22 東京都教育委員会 pp. 101-112
- 小野晃嗣 1934 「近世都市の発達」『日本歴史』岩波講座(小野晃嗣 1993 『近世城下町の研究(増補版)』法政大学出版局収録)
- 小野晃嗣 1940 「京都の近世都市化」『社会経済史学』10-7 社会経済史学会 pp. 643-674
- 小野高尚・山田 忠雄編 1992 『官府御沙汰略記』文献出版
- 小野 均 1928 『近世城下町の研究』至文堂(小野晃嗣 1993 『近世城下町の研究(増補版)』法政大学出版局収録)
- 小野正敏 1993 「中世みちのくの陶磁器と平泉」平泉文化研究会編 『日本史の中の柳之御所跡』吉川弘文館 pp. 37-78
- 小野正敏 1994 「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』46-3 信濃史学会 pp. 54-80

【カ】

- 貝塚爽平 1979 『東京の自然史（増補第二版）』 紀伊国屋書店
- 楯西光速 1959 「序説」 地方史研究協議会編 『日本産業史大系 4 関東地方篇』 東京大学出版会  
pp. 1-11
- 楯西光速 1965 『日本産業資本成立史論』 お茶の水書房
- 梶原 勝 1991 「八王子市宇津木台地区の調査と問題点」『発掘された江戸時代』 江戸遺跡研究会  
pp. 45-67
- 梶原 勝 2001 「江戸周辺地域における食器様相一碗・皿・土瓶を中心として」『食器にみる江戸の食生活』 江戸遺跡研究会 pp. 266-279
- 家世実紀刊本編纂委員会 1988 『会津藩家世実紀』 14 吉川弘文館
- 勝海舟全集刊行会 1977 『勝海舟全集 6 吹塵録』 講談社
- 葛飾区郷土と天文の博物館 1995 『東京低地の中世を考える』 名著出版
- 加藤 晃 1990 「近世瓦の編年学的考察（Ⅰ）」『東京大学本郷構内の遺跡法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 pp. 882-894
- 加藤建設株式会社 2007 『上野広小路遺跡』
- 加藤建設株式会社 2008 『東京都文京区本郷五丁目東遺跡：（仮称）本郷五丁目計画における埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 加藤晋平 1985 「江戸遺跡の研究・今後の課題」『都心部の遺跡 一貝塚・古墳・江戸一』 東京都教育委員会 pp. 290-293
- 加藤元信 1999 「水戸藩小石川屋敷跡と陸軍砲兵工廠跡地の考古学的調査」『春日町遺跡第Ⅵ地点』 文京区遺跡調査会 pp. 315-319
- 加藤祐三 1994 「ペリー来航と日本開国」 田中 彰編 『日本の近世 18 近代国家への志向』 中央公論社 pp. 25-64
- 香取祐一 2004 「加賀藩本郷邸表長屋の変遷」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告書』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 187-193
- 金沢市史編さん委員会 1996 『金沢市史 通史編 2 近世』 金沢市
- 金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1989 『加賀藩御細工所の研究』 金沢美術工芸大学美術工芸研究所
- 金子 智 2003 「近世屋敷地成立以降の調査地の変遷と玉川上水」『東京駅八重洲北口遺跡』 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 pp. 919-926
- 金子 智 2011 「資料紹介 江戸遺跡出土の金箔瓦」 江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』 吉川弘文館 pp. 225-238
- 金子浩昌 1990 「加賀藩江戸藩邸内出土の動物質食料残滓研究の一例」『東京大学本郷構内の遺跡法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 pp. 917-958
- 金子浩昌 1990 「山上会館・御殿下記念館出土の動物遺体」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点第 3 分冊』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 344-361
- 金箱文夫 1984 「近世の釘-川口市赤山陣屋の事例を中心に-」『物質文化』 43 物質文化研究会 pp. 39-55
- 金丸義一 1985 「遺構から見た江戸建築の一例」『都心部の遺跡 一貝塚・古墳・江戸一』 東京都教育委員会 pp. 265-274
- 金行信輔 1993 「尾張藩上屋敷・市ヶ谷屋敷御殿の機能と空間構造」 新宿区教育委員会編 『大名屋敷』 新宿区歴史博物館 pp. 70-75
- 金行信輔 1996 「市谷邸西御殿の空間構成」『尾張藩上屋敷跡遺跡 I』 東京都埋蔵文化財センター pp. 460-478
- 金行信輔 2000a 「市谷邸の空間」『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ 絵図集成編』 東京都埋蔵文化財センター pp. 24-30
- 金行信輔 2000b 「描かれた大名屋敷」 西秋良宏編 『加賀殿再訪』 東京大学出版会 pp. 40-45
- 上敷領 久 1988 「大久保百人町遺跡について」『東京考古』 6 東京考古談話会 pp. 132-146
- 亀田駿一 1990 「江戸復原図作成の方法と課題」『文化財の保護』 22 東京都教育委員会 pp. 1-12
- 亀田康範 1991a 「参勤大名の江戸生活 一小川仙之助「御参勤御供中日記」から」『石川県立歴史博物館紀要』 4 pp. 25-42
- 河越逸行 1965 『掘り出された江戸時代』 丸善
- 川田貞夫 1962 「徳川家康の関東転封に関する諸問題」『書陵部紀要』 14 宮内庁書陵部 pp. 54-78
- 河野真知郎 1986 「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』 21 神奈川考古同人会 pp. 192-205
- 紀尾井町 6-18 遺跡調査会 1994 『尾張藩麹町邸跡（仮）新日鐵紀尾井ビル建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書』

- 紀尾井町6-34遺跡調査会 1997 『尾張藩麹町邸跡 ハウス食品株式会社東京本社ビル新築工事に伴う遺跡発掘調査報告書』
- 菊地隆男 1980 「古東京湾」 『アーバンクボタ』18 久保田鉄工株式会社 pp. 16-21
- 菊地 真 2003 「長府藩毛利家屋敷地の事例に見る江戸城下町の形成と土地改変」 『歴史地理学』45-3 歴史地理学会 pp. 18-31
- 北垣聰一郎 1981 「堀」 平井聖・児玉幸多・坪井清足編 『日本城郭大系別巻1 城郭研究入門』 新人物往来社 pp. 258-261
- 北垣聰一郎 1984 「城郭石垣」 永原慶二・山口啓二編 『講座・日本技術の社会史 六・土木』 日本評論社 pp. 300-315
- 鬼頭 宏 1989 「江戸=東京の人口発展-明治維新の前と後」 『上智経済論集』34-1 pp. 48-69
- 北原糸子 1990a 「町家のなかの武家地主-武家拝領町家について-」 『文化財の保護』22 東京都教育委員会 pp. 68-88
- 北原糸子 1990b 「江戸の下水道」 『紅葉堀遺跡 地下鉄有楽町線飯田橋駅出入口工事に伴う緊急発掘調査報告書』 東京都新宿区教育委員会 pp. 22-33
- 北原糸子 1992 「内藤家と四谷屋敷」 『内藤町遺跡 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 2-9
- 北原糸子・奥 須磨子 1985 「武家抱屋敷 -江戸から東京へ」 『地図で見る新宿区の移り変わり 戸塚・落合編』 新宿区教育委員会 pp. 481-497
- 北野 隆編 1993 『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』 至文堂
- 北野信彦 2002 「坂町遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」 『坂町遺跡』 新宿区生涯学習財団 pp. 113-121
- 北野信彦・菅井裕子・佐藤昌憲・肥塚隆保 1999 「春日町第VI地点出土の一括漆工関連用具の分析」 『春日町遺跡第VI地点』 文京区遺跡調査会 pp. 304-314
- 北野信彦・降幡順子・肥塚隆保 2006 「工学部14号館地点の一括廃棄土坑から出土した「鉄丹ベンガラ」の生産関連資料に関する調査」 『東京大学本郷構内の遺跡工学部14号館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 522-530
- 木下正史 2010 「序説」 『讃岐高松藩・陸奥守山藩下屋敷跡 東京学芸大学附属竹早中学校校地内遺跡発掘調査報告』 東京学芸大学附属竹早中学校埋蔵文化財発掘調査団 pp. 1-10
- 旧芝離宮庭園調査団 1988 『旧芝離宮庭園』
- 共和開発株式会社 2007 『千駄木三丁目南遺跡第2地点』
- 共和開発株式会社 2013 『尾張徳川家下屋敷VI 一敷地内病棟建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 近世史料研究会 1994 『江戸町触集成第一巻』 塙書房
- 熊坂正史 2006 「埧埧について-新宿区内遺跡出土例を中心に-」 『舟町遺跡』 武蔵文化財研究所 pp. 85-89
- 倉田 守 2003 「加賀藩の軍制改革と壮猶館」 『北陸史学』52 北陸史学会 pp. 33-57
- 蔵原清人 2000 「金沢における洋学の展開と壮猶館-西洋流砲術の受容を中心に」 『工学院大学共通課程研究論叢』37-2 pp. 13-27
- 栗田 彰 1995 「江戸時代・明治維新期の下水史料を獵歩する」 東京下水道史探訪会編 『江戸・東京下水道のはなし』 技報堂出版 pp. 9-64
- 栗田 彰 1997 『江戸の下水道』 青蛙房
- 栗田 彰・柳下重雄 2006 「江戸下水の町触集」 日本下水文化研究会
- 栗原柳庵 1976 「文政年間漫録」 三田村鳶魚編 『未刊随筆百種』 中央公論社
- 栗三直隆 2008 「富山藩の江戸屋敷」 『富山市日本海文化研究所紀要』21 富山市日本海文化研究所 pp. 10-21
- 黒板勝美・国史大系編修会編 1929 『徳川実紀』 国史大系刊行会
- 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 2011 『会津藩保科(松平)家屋敷跡遺跡 慶應義塾中部部新体育館・プール建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 下水改良事務所 1913 『東京市下水道沿革誌』 (復刻版 明治後期産業発達史資料第396巻 府県産業篇(7) 龍溪書舎 1998)
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』 柏書房
- 古泉 弘 1990 『江戸の穴』 柏書房
- 古泉 弘 2004 「下屋敷発掘の現状と展望」 『江戸大名下屋敷を考える』 品川区立品川歴史館編 雄山閣 pp. 75-94
- 古泉 弘 2004 「大名屋敷の考古学」 『月刊考古学ジャーナル』514 ニューサイエンス社 pp. 2-3

- 幸田成友 1938 「江戸の町人の人口」『社会経済史学』8-1 社会経済史学会 pp. 1-23
- 甲府市教育委員会 1998 『史跡武田氏館跡Ⅲ』
- 小坂井孝修 2004 「萩藩毛利家屋敷跡遺跡の調査」品川区立品川歴史館編 『江戸大名下屋敷を考える』雄山閣 pp. 95-114
- 小島正裕 2000 「脇坂家屋敷の庭園について」『汐留遺跡Ⅱ：旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター pp. 189-191
- 越村 篤 1999 「市谷本村町遺跡の花壇跡について」『市谷本村町遺跡Ⅳ』新宿区市谷本村町遺跡調査団 pp. 90-107
- 小杉雄三 1981 『旧芝離宮庭園』郷学舎
- 小寺武久 1989 『尾張藩江戸下屋敷の謎』中央公論社
- 後藤宏樹 1990 「大名屋敷と国元 ―紀尾井町遺跡の事例から―」『文化財の保護』22 東京都教育委員会 pp. 37-48
- 後藤宏樹 1994 「尾張藩徳川家麴町邸跡の変遷」『尾張藩麴町邸跡』紀尾井町6-18遺跡調査会 pp. 257-276
- 後藤宏樹 2001 「飯田町遺跡の変遷」『飯田町遺跡』千代田区飯田町遺跡調査会 pp. 309-318
- 後藤宏樹 2004 「江戸の原型と都市開発―作り替えられる水域環境」『国立歴史民俗博物館研究報告』118 pp. 119-135
- 後藤宏樹 2006 「尾張藩麴町邸跡の発掘調査」『徳川御三家 江戸屋敷発掘物語 尾張家への誘い』新宿歴史博物館 pp. 50-55
- 後藤宏樹 2009 「徳川御三家の屋敷と都市水道管理」『季刊 collegio』38 之潮 pp. 9-15
- 後藤宏樹 2011 「江戸の大名屋敷跡―江戸城外郭での屋敷整備―」江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』吉川弘文館 pp. 1-25
- 小林 克 1987 「まとめ」『真砂遺跡』真砂遺跡調査会 pp. 389-393
- 小林 克 1989 「千川上水を引き込んだ大名屋敷 ―文京区真砂遺跡の事例から―」『江戸の住空間とその周辺』江戸遺跡研究会 pp. 17-30
- 小林謙一 1986 「瓦質・土師質土器」『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会 pp. 258-279
- 小林謙一 1991 「江戸遺跡における廃棄の研究」『東京考古』9 東京考古談話会 pp. 143-178
- 小林謙一 2003 「江戸遺跡における廃棄研究 ―廃棄遺構・廃棄の場の検討―」『遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会 pp. 81-135
- 小林謙一 2007 「近世・近現代考古学のライフサイクル論」鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：「新しい時代の考古学」の方法と実践』慶應義塾大学出版会 pp. 193-206
- 小林謙一・両角まり 1992 「江戸における近世土師質塩壺類の研究」『東京考古』10 東京考古談話会 pp. 111-144
- 小林正彬 1966 「近代工業の形成―幕藩営工業の継続と断絶において」『歴史教育』14-1 歴史教育研究会 pp. 46-54
- 古板江戸図集成刊行会 2000 『古板江戸圖集成』中央公論美術出版
- 小山靖憲 1966 「東国における領主制と村落 平安末～鎌倉期の上野国新田庄を中心に」『史潮』94 大塚史学会 pp. 1-18, 68
- 近藤磐雄 1909 『加賀松雲公』羽野知頭

## 【サ】

- 斎藤鋭雄 1991 「仙台藩下級家臣に関する素描 ―番士と組士」『宮城県農業短期大学学術報告』39 pp. 67-72
- 斎藤鋭雄 1992 「仙台藩の職制：「司属部分録」の成立」渡辺信夫編 『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社 pp. 317-344
- 斎藤悦正 2011 「昌平橋内譜代大名上屋敷の屋敷交替 ―寺社奉行役宅と長屋空間に注目して―」『神田淡路町二丁目遺跡』四門 pp. 284-300
- 齊藤 修 1985 『プロト工業化の時代』日本評論社
- 齊藤 信・小高敬寛 1998 「溝状土坑（花壇状遺構）」『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査報告書』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 405-406
- 阪口豊 1990 「東京大学の土台 ―本郷キャンパスの地形と地質」『東京大学史紀要』8 東京大学史史料室 pp. 17-34
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁 古唐津・伊万里の流通をさぐる』

- 坂本賞三 2012 「江戸時代を「近世」ということ」『日本歴史』769 日本歴史学会 pp. 105-114
- 作事記録研究会 2013 『萩藩江戸屋敷作事記録』 中央公論美術出版
- 桜井準也 1986 「自然遺物」『郵政省飯倉分館構内遺跡』 港区麻布台一丁目遺跡調査会 pp. 316-322
- 佐々木 彰 1990 「江戸時代のカワラケの動態と推移」『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点』 東京大学遺跡調査室 pp. 871-891
- 佐々木達夫 1978 「茶碗と播鉢の文化史」『月刊 多摩湖の記録』 多摩湖遺跡群調査会 pp. 1-8
- 佐々木達夫・佐々木花江 1975 「東京都日枝神社境内遺跡の調査」『考古学ジャーナル』105 ニューサイエンス社 pp. 15-19
- 佐藤 巧 1963 「寛文度伊達家愛宕下の上屋敷について」『東北大学建築学報』10 東北大学建築学科 pp. 561-564
- 佐藤 巧 1979 『近世武士住宅』 叢文社
- 佐藤豊三 1974 「将軍家御成について（一） 室町将軍家の御成」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 457-470
- 佐藤豊三 1975 「将軍家御成について（二） 足利義教の「室町殿」と新資料「室町殿行幸御飭記」および「雑華室印」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 463-479
- 佐藤豊三 1976 「将軍家御成について（三） 『小河御所并東山殿御飭図』と『君台観左右帳記』画人録の一考察」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 511-536
- 佐藤豊三 1977 「将軍家御成について（四） 足利将軍の寺家への御成と献物」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 559-576
- 佐藤豊三 1979 「将軍家御成について（五） 織田信長と豊臣秀吉の御成」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 523-563
- 佐藤豊三 1980 「将軍家御成について（六） 徳川将軍家の御成 その一 徳川幕府創始期の御成」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 537-575
- 佐藤豊三 1981 「将軍家御成について（七） 徳川将軍家の御成 その二 徳川幕府確立期の御成」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 565-626
- 佐藤豊三 1984 「将軍家御成について（八） 徳川将軍家の御成 その三 徳川幕府安定期の御成」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 303-365
- 佐藤豊三 1986 「将軍家御成について（九） まとめ」『金鯨叢書：史学美術史論文集』 徳川黎明会 pp. 313-361
- 佐藤豊三 2004 「大名庭園 尾張徳川家の御屋敷と御庭」『大名庭園』 徳川美術館 pp. 55-61
- 佐藤律子・遠藤香・堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部新館地点 SE67 出土遺物の年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 pp. 263-277
- 佐藤洋・吾妻仁 2000 「仙台城とその城下」『江戸と国元』 江戸遺跡研究会 pp. 109-139
- 参謀本部陸軍部測量局・日本地図センター編 1984 『五千分一東京図測量原図』 日本地図センター
- 汐留地区遺跡調査会 1996 『汐留遺跡 汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 史籍研究会 1982 『諸向地面取調書(一)』 汲古書院
- 品川区遺跡調査会 1988 『仙台坂遺跡（I） 仙台藩主松平（伊達）陸奥守下屋敷における味噌醸造所跡の第1次調査』
- 品川区遺跡調査会 1990 『仙台坂遺跡—東京都都市計画道路補助第26号線（仙台坂）工事に伴う発掘調査報告書』
- 品川歴史館 2004 『江戸大名下屋敷を考える』 雄山閣
- 箱田直紀 2006 「ツバキ・サザンカの園芸史」『園芸学会雑誌 別冊 園芸学会大会研究発表』75-2 園芸学会 pp. 64-65
- 篠田鈺造 1996 『増補 幕末百話』 岩波書店（岩波文庫）
- 柴田孝夫 1975 『地割の歴史地理学的研究』 古今書院
- 渋谷区初台遺跡調査団 1993 『松平出羽守抱屋敷 初台遺跡』
- 渋谷葉子 1994 「尾張藩江戸藩邸のなかの麹町邸」『尾張藩麹町邸跡—（仮）新日鐵紀尾井ビル建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書—』 紀尾井町6-18 遺跡調査会 pp. 219-232
- 渋谷葉子 1996 「尾張藩市谷邸の歴史の変遷」『尾張藩上屋敷跡遺跡 I』 東京都埋蔵文化財センター pp. 433-459
- 渋谷葉子 2000 「尾張藩市谷邸絵図史料の編年と考察」『尾張藩上屋敷跡遺跡V 絵図集成編』 東京都埋蔵文化財センター pp. 3-23
- 渋谷葉子 2004 「肥前大村藩白金下屋敷について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 271-292

- 渋谷葉子 2006a 「小石川植物園」の土地利用に関する歴史的変遷『東京大学構内遺跡調査研究年報』5  
東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 172-208
- 渋谷葉子 2006b 「尾張徳川家江戸屋敷-市谷・麴町・戸山-絵図集成」『徳川御三家 江戸屋敷発掘物語 尾張家への誘い』 新宿歴史博物館 pp. 78-105
- 渋谷葉子 2008 「尾張徳川家戸山屋敷における空間構成の推移-長屋地を中心に-」『新宿区尾張徳川家下屋敷Ⅴ 国立医療センター新棟整備第1期工事に伴う調査-』 東京都埋蔵文化財センター pp. 340-359
- 嶋崎 丞 2000 「加賀藩前田家の文化施策-美術工芸の世界を中心に-」『日本温泉気候物理医学会雑誌』 64-1 日本温泉気候物理医学会 pp. 9-11
- 島田勇雄校注・伊勢貞丈 1985 『貞丈雑記』 平凡社
- 島田貞彦 1931 「山城幡枝の土器」『考古学雑誌』21-3 日本考古学会 pp. 188-204
- 島根県 1968 『新修島根県史通史編1』
- 島村妙子 1972 「幕末下級武士の生活の実態：紀州藩一下士の日記を分析して」『史苑』32-2 立教大学 pp. 45-77
- 四門 2011 『神田淡路町二丁目遺跡』
- 四門 2013 『千駄ヶ谷五丁目遺跡3次調査 新宿駅南口本屋基礎解体・鉄道防護工事他に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 四門 2014 『九段坂上貝塚遺跡 -和洋学園九段校M棟造築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 四門 2014 『市谷砂土原町三丁目遺跡Ⅴ -滋賀銀行佐土原志賀寮建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 司法省原編・法制史学会編・石井良助校訂 1959 『徳川禁令考 前集三』 創文社
- ジョアン・ロドリゲス（江馬 務ほか訳注） 1967 『日本教会史・上』 岩波書店
- 庄田知充 2005 「近世日本海沿岸地域における播鉢の流通」 長谷川成一・千田嘉博編 『日本海域歴史大系第四巻 近世篇Ⅰ』 清文堂出版 pp. 417-440
- 庄田知充 2012 「金沢・城と城下町の調査成果」『考古学ジャーナル』623 ニューサイエンス社 pp. 12-15
- 新宿区遺跡調査会 1995 『市谷仲之町遺跡Ⅲ（仮称）新宿区防災センター建設に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区遺跡調査会 1996 『百人町三丁目遺跡Ⅲ -東京都清掃局新宿中継所建設工事他-』
- 新宿区市谷本村町遺跡調査団 1993 『東京都新宿区尾張藩徳川家上屋敷跡：大蔵省印刷局市谷倉庫増築に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区市谷本村町遺跡調査団 1995 『市谷本村町遺跡 尾張藩徳川家上屋敷跡』
- 新宿区教育委員会 1990 『紅葉堀地下鉄有楽町線飯田橋駅出入口工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区教育委員会 2001 『内藤町遺跡Ⅳ』
- 新宿区生涯学習財団 2001 『尾張徳川家下屋敷跡遺跡：（仮称）F新宿戸山店新築工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区生涯学習財団 2002 『水野原遺跡』
- 新宿区生涯学習財団 2002 『坂町遺跡』
- 新宿区戸山遺跡調査会 2003 『尾張徳川家下屋敷跡Ⅱ -早稲田大学新学生会館（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『内藤町遺跡 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区払方町遺跡調査団 1999 『東京都払方町遺跡』
- 新宿区補助第七二号線遺跡調査会 1998 『東京都新宿区百人町三丁目遺跡Ⅴ』
- 新宿区役所 1955 『新宿区史区史』
- 新宿歴史博物館 1993 『大名屋敷』 新宿区教育委員会
- 新宿歴史博物館 2006 『徳川御三家 江戸屋敷発掘物語 尾張家への誘い』 新宿歴史博物館
- 新免歳靖・二宮修治 2002 「新宿区坂町遺跡第4号遺構出土の埴塼」『坂町遺跡』 新宿区生涯学習財団 pp. 122-124
- 菅谷通保 1990 「「地下式坑」の系列と変遷」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 pp. 844-859
- 杉森哲也 1990 「梅之御殿」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館地点・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 60-73
- 菅沼聡也・広瀬謙二・渡部朋子 1994 「加藤平左工門（預）屋敷に関する研究：御広間の復元と格の考察（歴史・意匠）」『一般社団法人日本建築学会東海支部研究報告集』32 日本建築学会 pp. 753-756
- 鈴木公雄 1988 「近世考古学の課題」『村上徹君追討論文集』 村上徹君追討論文集編集委員会 pp. 203-



- 鈴木公雄 2007 「近世・近現代考古学とはなにか」 鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：新しい時代の考古学』の方法と実践』慶應義塾大学出版会 pp. 3-12
- 鈴木賢次 1984 「旗本居住地の都市における存在形態―敷地規模と住居規模の関係、および両者の家禄高に対する関係について―」『建築史学』2 建築史学会 pp. 2-39
- 鈴木賢次 1987 「上級旗本住居の平面構成における階層的性格について：幕末期、旗本・池田家屋敷の主屋の平面と居室からの検討」『日本建築学会計画系論文報告集』371 日本建築学会 pp. 126-135
- 鈴木 茂 2005 「自然科学分析」『台東区向柳原町遺跡』東京都埋蔵文化財センター pp. 191-195
- 鈴木 進 1971 『江戸図屏風』 平凡社.
- 鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行 1967 『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』 東京大学出版会
- 鈴木理生 1978 『江戸の川・東京の川』 日本放送協会
- 鈴木 靖 1993 「小浜藩酒井家牛込矢来屋敷」『大名屋敷』 新宿区教育委員会 pp. 98-103
- 鈴木裕子・渡辺ますみ 1990 「遺物」『東京大学本郷構内の遺跡 御殿下記念館地点の調査』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 94-167
- 鈴木裕子 2008 「「天下一宗四郎」銘の土器について」『東京考古』26 東京考古談話会 pp. 55-66
- 墨田区教育委員会 2011 『陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡』
- 墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団 1996 『墨田区錦糸町駅北口遺跡 I』
- 墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団 1996 『墨田区錦糸町駅北口遺跡 II』
- 住友史料館 2015 『鼓銅図録の研究：書誌と系譜』 住友史料館
- 諏訪春雄・内藤昌・宮 睦夫 1972 『江戸図屏風』 毎日新聞社
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史 陶磁史篇 6』 瀬戸市
- 全国味噌工業協会編 1968 『味噌沿革史』 全国味噌工業協会
- 仙台市史編さん委員会 2004 「江戸屋敷と大名の交際」『仙台市史\_通史編 5 近世 3』 仙台市
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口 RC ビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998 『千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題 江戸遺跡の考古学的調査から』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査報告書 新宿駅貨物跡地再開発に伴う事前調査』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会

## 【タ】

- 大聖寺藩史編纂會 1938 『大聖寺藩史』.
- 大成エンジニアリング 2007 『龍岡町遺跡第2地点：集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 大成エンジニアリング 2008 『本郷台遺跡群 第1地点：店舗・事務所用新築ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 大成エンジニアリング 2008 『龍岡町遺跡第3地点：(仮称)湯島4丁目プロジェクト新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 大成エンジニアリング 2012 『駕籠町遺跡第4地点』
- 大成エンジニアリング 2015 『龍岡町遺跡第7地点：文京区湯島四丁目11番地内の開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 台東区文化財調査会 2005 『茅町二丁目遺跡 池之端一丁目5番地点(本郷台遺跡群・湯島両門町遺跡湯島四丁目12番地点)』
- 高島緑雄 1987 「建武元年正統庵領鶴見寺尾郷図の研究-中世南武蔵の水田と水利-」『明治大学人文科学研究紀要』25 pp. 33-68
- 高野良徳 1997 「宇都宮藩戸田越前守下屋敷・抱屋敷地」『千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口 RC ビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 125-139
- 高橋精一 1981 「江戸時代の社会救済—江戸下級武士の職禄と生活」『経済論集』32 大東文化大学経済学会 pp. 41-65
- 高橋精一 1982 「江戸時代の社会救済—地方大名家の下級武士の職種と生活」『経済論集』33 大東文化大学経済学会 pp. 63-86
- 高柳真三・石井良助編 1934 『御觸書寛保集成』 岩波書店
- 高山 優 1990 「都心と江戸と埋蔵文化財」『文化財の保護』22 東京都教育委員会 pp. 160-180
- 高山 優 2005a 「芝四丁目旧雑魚場地区埋蔵文化財有無確認試掘調査報告」『港区埋蔵文化財調査年報』2

- pp. 7-22
- 高山 優 2005b 「芝田町五丁目の鋳物師」『芝田町五丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』 港区教育委員会 pp. 164-168
- 高山 優 2006 「屋敷の空間構成と遺構分布」『上野沼田藩土岐家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』 pp. 347-361
- 高山 優 2007 「近世都市「江戸」の考古学」鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：「新しい時代の考古学」の方法と実践』 慶應義塾大学出版会 pp. 165-178
- 高山優・毎田佳奈子 2008 「まとめ」『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』 港区教育委員会 p. 159
- 高山 優・板倉敏之 2013 「総括」『豊後日出藩木下家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』 港区教育委員会 pp. 157-163
- 高山 優ほか 2007 『芝四丁目鹿島神社境内の文化財調査報告』 港区教育委員会 pp. 111-128
- 滝口正哉 2001 「史料にみる遺跡の変遷」『東京都千代田区飯田町遺跡 千代田区飯田橋二丁目・三丁目再開発事業に伴う発掘調査報告書』 千代田区飯田町遺跡調査会 pp. 281-308
- 田口 勇 1993 「渋谷区初台遺跡から出土した鉄滓などの自然科学的研究」『松平出羽守抱屋敷 出雲国松江藩抱屋敷発掘調査報告：初台遺跡』 初台遺跡調査団 pp. 206-252
- 竹内 誠 1983 「江戸の地域構造と住民意識」豊田武・原田伴彦・矢守一彦編 『講座日本の封建都市 第2巻 機能と構造』 文一総合出版 pp. 291-316
- 竹内誠・石山秀和 2010 「酒井伴四郎日記について」『東京都江戸東京博物館調査報告書 23 酒井伴四郎日記：影印と翻刻』 pp. 55-72
- 竹内理三編 1979 『家忠日記』 臨川書店
- 田嶋正和 1996 「大聖寺藩家老屋敷跡の調査 一享保 14 年（1729）大火に伴う資料一」『第 6 回九州近世陶磁学会資料』 九州近世陶磁学会 pp. 128-132
- 田嶋正和 1998 「大聖寺藩江戸藩邸の御膳所記録」『江渟の久爾』 43 加南地方史研究会 pp. 76-87
- 田嶋正和 2007 「大聖寺藩の城下町」『金大考古』 59 pp. 23-25
- 忠田敏男 1993 『参勤交代道中記 一加賀藩史料を読む一』 平凡社
- 伊達研次 1935 「江戸に於ける諸侯の消費的生活について（一）」『歴史学研究』 4-4 歴史学研究会 pp. 75-91
- 伊達研次 1937 「江戸に於ける諸侯の消費的生活について（二）」『歴史学研究』 6-5 歴史学研究会 pp. 75-100
- 館野 孝 2004 「萩藩毛利家屋敷跡遺跡」『月刊考古学ジャーナル』 514 ニューサイエンス社 pp. 18-21
- 田中純男 2000 「尾張藩上屋敷跡遺跡の調査」『江戸と国元』 江戸遺跡研究会 pp. 3-13
- 田中政幸 1995 「加賀藩邸上屋敷本郷邸における長屋類型と詰人空間構成」『東京大学史紀要』 13 東京大学史史料室 pp. 17-54
- 田中喜男 1977 『伝統都市の空間論・金沢』 弘詢社。
- 田中喜男 1981 「金沢城下町の形成」豊田武・原田伴彦・矢守一彦編 『講座日本の封建都市 第3巻：地域的展開』 文一総合出版 pp. 219-241
- 谷 晃 2001 『茶会記の研究』 淡交社。
- 谷川章雄 1992 「総括」『内藤町遺跡 放射 5 号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 112-115
- 谷川章雄 1993 「考古学からみた近世都市江戸 -考古学と歴史学の関係をめぐって-」『史潮』 32 歴史学会 pp. 25-45
- 谷川章雄 1994 「尾張藩麴町邸跡の調査の成果と課題」『尾張藩麴町邸跡』 紀尾井町 6-18 遺跡調査会 pp. 275-276
- 谷川章雄 1998 「発掘された江戸の庭園」『ランドスケープ研究』 61-3 日本造園学会 pp. 218-222
- 谷川章雄 1998 「総括 一ツ橋二丁目遺跡の庭園遺構をめぐって一」『一ツ橋二丁目遺跡』 千代田区一ツ橋二丁目遺跡調査会 pp. 245-246
- 谷川章雄 1999 「江戸の生活史と考古学」『民衆史研究』 57 民衆史研究会 pp. 39-54
- 谷川章雄 2006 「江戸の大名屋敷の考古学と尾張藩邸」『徳川御三家江戸屋敷発掘物語 尾張家への誘い』 新宿歴史博物館 pp. 75-77
- 谷川章雄 2009 「巨大都市江戸の土木工事」『季刊考古学』 109 雄山閣 pp. 51-54
- 谷川章雄 2010a 「「中世」と「近世」の間」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編 『中世はどう変わったか』 高志書院 pp. 3-18
- 谷川章雄 2010b 「穴蔵 江戸の地下収蔵」吉田伸之・伊藤毅編 『伝統都市；3 インフラ』 東京大学出

- 版会 pp. 231-241
- 谷本雅之 2005 「産業の伝統と革新」 歴史学研究会・日本史研究会編 『日本史講座7 近世の解体』 東京大学出版会 pp. 233-264
- 田畑貞寿 1984 「緑被地からみた江戸と東京の都市構造に関する研究」『造園雑誌』47-5 日本造園学会 pp. 298-303
- 田畑貞寿 1987 「江戸東京の緑」 小木新造ほか編 『江戸東京学事典』 三省堂 pp. 117-118
- 玉井哲雄 1983 「江戸町人地の構造」 豊田武・原田伴彦・矢守一彦編 『講座日本の封建都市 第3巻：地域的展開』 文一総合出版 pp. 30-45
- 玉井哲雄 1985 「江戸の町割と庶民の生活空間」『都心部の遺跡 一貝塚・古墳・江戸一』 東京都教育委員会 pp. 275-289
- 玉井哲雄 1986 『江戸：失われた都市空間を読む』 平凡社.
- 玉井哲雄 1992 「近世都市空間の特質」 吉田伸之編 『日本の近世9 都市の時代』 中央公論社 pp. 33-80
- 段木一行 1981 「千代田区大手町出土の銅鐘をめぐって」『戦国史研究』11 東国戦国史研究会 pp. 14-16
- 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1994 『和泉伯太藩上屋敷跡』
- 千代田区飯田町遺跡調査会 2001 『東京都千代田区飯田町遺跡 千代田区飯田橋二丁目・三丁目再開発事業に伴う発掘調査報告書』
- 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988 『紀尾井町遺跡調査報告書』
- 千代田区教育委員会 1995 『和田倉遺跡』
- 千代田区麹町6丁目遺跡調査会 1995 『麹町六丁目遺跡：尾張藩麹町邸の発掘調査報告書』
- 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003 『東京駅八重洲北口遺跡』
- 千代田区丸の内1-40遺跡調査会 1998 『丸の内一丁目遺跡』
- 千代田区丸の内一丁目遺跡調査会 2005 『丸の内一丁目遺跡Ⅱ』
- 塚本 明 1994 「徳川家康の居所と行動」 藤井譲治編 『近世前期政治的主要人物の居所と行動』 京都大学人文科学研究所 pp. 250-261
- 土屋喬雄 1937 『日本資本主義史論集』 育成社
- 角田真弓 2000 「写された大名屋敷」 西秋良宏編 『加賀殿再訪』 東京大学出版会 pp. 46-52
- 勅使河原 彰 1995 『日本考古学の歩み』 名著出版
- 勅使河原 彰 2013 『考古学研究法』 新泉社
- 寺島孝一 2002 「どんぶり考 附・わりばしの始まり」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3 pp. 43-65
- 寺島孝一 2004 「江戸のゴミをめぐる二三の問題について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 257-271
- 寺谷美眸子・高野良徳 1997 「松江藩松平出羽守下屋敷地」『千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口RCビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 110-124
- 東京学芸大学附属竹早中学校埋蔵文化財発掘調査団 2010 『讃岐高松藩・陸奥守山藩下屋敷跡 東京学芸大学附属竹早中学校校地内遺跡発掘調査報告』
- 東京地盤調査研究会 1959 『東京地盤図』 技報堂
- 東京市役所 1914 『東京市史稿 市街編第二』
- 東京市役所 1928 『東京市史稿 市街編第三』
- 東京市役所 1929 『東京市史稿 遊園編第二』
- 東京市日本橋区役所 1937 『日本橋区史 上巻附録』
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点：医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「東京大学本郷構内の遺跡 山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本郷構内の遺跡工学部1号館地点』

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006a 『東京大学本郷構内の遺跡工学部 14 号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006b 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 5
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006c 『理学兼研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告 理学系研究科・理学部 1 号館前地点発掘調査報告』（『東京大学構内遺跡調査研究年報』 5）
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 6
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008 『東京大学白山構内の遺跡 総合研究博物館小石川分館地点発掘調査報告』（『東京大学構内遺跡調査研究年報』 6）
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2009 『情報基盤センター変電室 1 地点；工学部風工学実験室地点；工学部風工学実験室支障ケーブル地点；工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点；工学部武田先端知ビル地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011 『教育学部総合研究棟地点；インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 7
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2015 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 9
- 東京大学百年史編集委員会 1985 『東京大学百年史』
- 東京都 1965 『都史紀要 13 明治初年の武家地処理問題』
- 東京都 1968 『東京市史稿 産業編第 12』
- 東京都江戸東京博物館 1994 『東京湾変遷模型原図』 東京都江戸東京博物館
- 東京都江戸東京博物館都市歴史研究室 2010 「酒井伴四郎日記：影印と翻刻」『東京都江戸東京博物館調査報告書』 23 東京都江戸東京博物館
- 東京都教育庁社会教育部文化課 1989 『江戸復元図』 東京都情報連絡室情報公開部都民情報課
- 東京都千代田区 1998 『新編千代田区史』
- 東京都千代田区教育委員会 2001 『岩本町二丁目遺跡』
- 東京都土木技術研究所 1969 『東京都地盤地質図：23 区内』
- 東京都埋蔵文化財センター 1994 『東京都千代田区丸の内三丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 1996 『尾張藩上屋敷跡遺跡 I』
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『尾張藩上屋敷跡遺跡 II』
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『汐留遺跡 I：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『尾張藩上屋敷跡遺跡 II』
- 東京都埋蔵文化財センター 1998 『尾張藩上屋敷跡遺跡 III』
- 東京都埋蔵文化財センター 1999 『尾張藩上屋敷跡遺跡 IV』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡 II：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『尾張藩上屋敷跡遺跡 V』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡 VII』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡 VIII』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡 IX』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡 X』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡 XI』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『市谷本村町遺跡：尾張藩上屋敷跡：市ヶ谷北地区』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『市谷本村町遺跡：尾張藩上屋敷跡：市ヶ谷西地区』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『宇和島藩伊達家上屋敷：宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡 政策研究大学院大学建設に伴う調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『汐留遺跡 III：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『千代田区永田町二丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『市谷本村町遺跡市谷本村町マンション計画に伴う発掘調査報告書』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『新宿六丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『台東区向柳原町遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『市谷本村町遺跡 市谷本村町マンション計画に伴う発掘調査報告書』
- 東京都埋蔵文化財センター 2006 『汐留遺跡 IV：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2006 『尾張藩上屋敷跡遺跡 XII』
- 東京都埋蔵文化財センター 2007 『千代田区和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷跡遺跡 -平成 18 年度参議院新議員会館整備等事業に伴う調査-』

- 東京都埋蔵文化財センター 2007 『新宿区内藤町遺跡：環状第5の1号線(新宿御苑)整備事業に伴う調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2008 『尾張徳川家下屋敷跡Ⅴ：新宿区：国立国際医療センター新棟整備第1期工事に伴う調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2008 『大塚遺跡：文京区：茗荷谷駅前地区市街地再開発事業に伴う発掘調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2008 『豊前小倉藩下屋敷跡遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2009 『千代田区江戸城跡：北の丸公園地区の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2009 『愛宕下遺跡Ⅰ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2010 『文京区後楽二丁目南遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2014 『愛宕下遺跡Ⅱ』
- 東京都港区教育委員会 1993 『播磨龍野藩脇坂家屋敷跡遺跡・新橋停車場構内跡遺跡発掘調査報告書』
- 東京百年史編集委員会編 1979 『江戸の生誕と発展：東京前史』 ぎょうせい
- 動坂貝塚調査会 1978 『動坂遺跡』
- 徳川義宣 1992 「徳川家康の遺産」『家康の遺産 一駿府御分物一』 徳川美術館 pp. 189-209
- 徳川美術館・蓬左文庫・中日新聞社 2004 『大名庭園』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井Ⅰ』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井Ⅱ』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井Ⅲ』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井Ⅳ』
- 豊島区教育委員会 1993 『巣鴨町Ⅰ 東京都豊島区・巣鴨遺跡(区立巣鴨つつじ苑地区)の発掘調査』
- 豊島区教育委員会 1994 『巣鴨Ⅰ』
- 豊島区教育委員会 2001 『染井Ⅵ 三菱重工業染井アパート地区』
- 豊島区遺跡調査会 2006 『染井ⅩⅠ プラウド駒込地区』
- 榎木 真 1992 「内藤町遺跡における廃棄の考察」『内藤町遺跡 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 91-100
- 榎木 真 1996 「地下室再考」『住吉町遺跡 新宿区住吉町社会教育会館改築工事に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区遺跡調査会 pp. 128-137
- 榎木 真 1997 「寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化」『市谷御門外橋詰・御堀端 第2分冊』 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 pp. 461-487
- 榎木 真 2003 「「龍門滝」の構造と改変」『尾張藩徳川家下屋敷跡Ⅱ』 新宿区戸山遺跡調査会 pp. 213-222
- 都内重要遺跡等調査団 1998 『都内重要遺跡等調査報告書』
- 外村直彦 1999 「幕末マニュファクチャー論争の総決算」『岡山大学環境理工学部研究報告』4-1 pp. 159-174
- 富田景周・太田敬太郎校正 1972 『景周先生小著集』 石川県図書館協会
- 鳥居龍蔵 1929 「日本橋白木屋下の地層とその遺物について」『武蔵野』14-4 武蔵野会 pp. 17-26
- 都立一橋高校内遺跡調査団 1985 『江戸：都立一橋高校地点発掘調査報告』
- 都立文京盲学校遺跡調査班 2000 『小石川牛天神下：都立文京盲学校地点における発掘調査報告書』

## 【ナ】

- 内藤 昌 1966 『江戸と江戸城』 鹿島研究所出版会
- 内藤 昌 1972 『江戸の都市と建築』(『江戸図屏風』別巻) 毎日新聞社
- 内藤 昌・大野耕嗣・中村利則 1971 「聚楽第：武家地の建築：近世都市図屏風の建築的研究：洛中洛外図・その2」『日本建築学会論文報告集』180 pp. 61-71, 76
- 長井光彦 2005 「萩藩毛利家屋敷跡遺跡出土の萩と推定される陶器について」『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』 東京都埋蔵文化財センター pp. 478-482
- 中尾佐助 1986 『花と木の文化史』 岩波書店
- 中川成夫・加藤晋平 1969 「近世考古学の提唱」『日本考古学協会第三五回総会研究発表要旨』 p. 27
- 長佐古真也 1990 「近世江戸市場の動向と窯業生産への影響」『東京大学本郷構内の遺跡法工学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 pp. 860-881
- 長佐古真也 1994 「江戸遺跡における18世紀後半の陶磁器組成 -尾張藩麴町邸跡出土一括資料を中心に-」『尾張藩麴町邸跡(仮)新日鐵紀尾井ビル建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書』 紀尾井町6-18遺跡調査会 pp. 130-144

- 長佐古真也 2000 「日常茶飯のこと—近世における喫茶習慣素描の試み—」 江戸遺跡研究会編 『江戸文化の考古学』吉川弘文館 pp. 99-126
- 長佐古真也 2002 「「お茶碗」考—江戸における量産陶磁器の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』94 pp. 61-82
- 長佐古真也 2003 「水に流す—流路への廃棄に関する覚え書—」『遺跡からみた江戸のゴミ』 江戸遺跡研究会 pp. 193-194
- 長佐古真也 2008 「江戸における慶長・元和・寛永期の陶磁器相—千代田区内の一括資料による陶磁器編年試案—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』24 pp. 1-28
- 長佐古真也 2012 「江戸遺跡を通してみる近世の陶器生産」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』26 pp. 301-304
- 中津川章二 1959 「川口の鋳物」 地方史研究協議会編 『日本産業史大系 4 関東地方篇』 東京大学出版会 pp. 210-218
- 中野達哉 1990 江戸近郊における大名屋敷の設立状況について『江東区文化財研究紀要』1 pp. 36-58
- 中野達哉 2011 「関東転封直後における徳川氏の知行割と検地—天保十八年知行宛行の実状の分析を中心に—」久保田 昌編 『松平家忠日記と戦国社会』 岩田書院 pp. 337-369
- 中部よし子 1991 「近世都市の塵芥処理」『神戸学院経済学論集』23-3 pp. 121-143
- 仲光克顕 1998 「墨田区江東橋二丁目遺跡にみる江戸の土製品生産—製作技法の検討を中心に—」『東京考古』16 東京考古談話会 pp. 113-129
- 中山 学 2011 「弘前藩津軽家上屋敷の成立」『陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡』 墨田区教育委員会 pp. 277-316
- 長山直治校訂 2004 『大梁公日記』 前田育徳会
- 成瀬晃司 1990 「江戸藩邸内土地利用研究の一指針」『東京大学本郷構内の遺跡法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 pp. 813-831
- 成瀬晃司 1991 「東大構内出土の「清水」銘陶器の一例」『東京考古』9 東京考古談話会 p. 100
- 成瀬晃司 1994a 「肥前産蛇ノ目凹形高台皿（高）の初現について—東大構内法学部4号館地点出土資料を例に—」『東京考古』12 東京考古学会 pp. 127-134
- 成瀬晃司 1994b 「江戸藩邸の地下空間」宮崎勝美・吉田伸之編 『武家屋敷：空間と社会』 山川出版社 pp. 93-121
- 成瀬晃司 1996 「東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点—天和2（1682）年・元禄16（1703）年の火災に伴う資料—」『第6回九州近世陶磁学会資料』 九州近世陶磁学会 pp. 99-111
- 成瀬晃司 1999 「東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点（中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点）遺構出土陶磁器組成表の掲載にあたって」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 pp. 109-136
- 成瀬晃司 2000a 「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相—竹石健二先生・澤田大多郎両先生の還暦を祝う会編『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』 竹石健二先生・澤田大多郎両先生の還暦を祝う会 pp. 197-212
- 成瀬晃司 2000b 「江戸遺跡における実年代資料—18・19世紀を中心に—」『近世の実年代資料』 関西近世考古学研究会 pp. 109-148
- 成瀬晃司 2000c 「考古学から見た加賀藩本郷邸「詰人空間」」西秋良宏編 『加賀殿再訪』 東京大学出版会 pp. 166-179
- 成瀬晃司 2003 「江戸遺跡出土の鍋島」『鍋島の生産と流通—出土資料による—』九州近世陶磁学会 pp. 85-125
- 成瀬晃司 2003 「大名藩邸における廃棄の一例—災害と造成からみた—」『遺跡からみた江戸のゴミ』 江戸遺跡研究会 pp. 17-34
- 成瀬晃司 2004 「総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 67-72
- 成瀬晃司 2005 「外来診療棟地点における藩邸周縁部土地利用—遺構属性による空間復元の試み—」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 495-520
- 成瀬晃司 2008 「白山御殿の惣囲いについて」『総合研究棟小石川分館地点発掘調査報告』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 171-184
- 成瀬晃司 2009 「肥前産「呉器手」碗の需要に関する予察—竹石健二先生・澤田大多郎先生の古希を祝う会編『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』 六一書房 pp. 207-223
- 成瀬晃司 2011a 「経済学研究科学術交流棟地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 pp. 50-59
- 成瀬晃司 2011b 「加賀藩本郷邸東域の開発—斜面地にみる大名屋敷の造成—」 江戸遺跡研究会編 『江

- 戸の大名屋敷』 吉川弘文館 pp. 159-180
- 成瀬晃司 2012 「伊藤国際学術研究センター地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 pp. 22-51
- 成瀬晃司・大成可乃 2008 「情報学環・福武ホール地点 (HJF06) 発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6 pp. 41-67
- 成瀬晃司・長佐古真也 1998 「江戸遺跡における17世紀代の「供膳具」の様相」『上方と江戸-近世考古学から見た東西文化の差異』 関西近世考古学研究会 pp. 9-17
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1990 「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析」『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点』 東京大学遺跡調査室 pp. 821-840
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1998 「江戸遺跡出土の大皿 一加賀藩本郷邸出土品を中心として」『大皿の時代展 一宴の器一』 出光美術館 pp. 121-131
- 新見由治 1951 「尾張藩軽輩の内職公認と蠟燭心問屋」『社会経済史学』17-5 社会経済史学会 pp. 343-355
- 仁木 宏 2001 「近世社会の成立と城下町」『日本史研究』470 日本史研究会 pp. 20-22
- 仁木 宏 2002 「近世社会の成立と城下町」『日本史研究』476 日本史研究会 pp. 51-67
- 西川幸治 1972 『日本都市史研究』 日本放送出版協会
- 西木浩一 1993 「江戸藩邸の塀の中一小浜藩酒井家の江戸詰家臣について」『大名屋敷』 新宿区教育委員会 pp. 92-97
- 西澤 明 2003 「伊達家屋敷における御殿と長屋」『汐留遺跡 III: 旧汐留貨物駅跡地内の調査』 東京都埋蔵文化財センター pp. 91-99
- 西澤 明 2004 「陸奥国仙台藩伊達家江戸屋敷」『月刊考古学ジャーナル』514 ニューサイエンス社 pp. 9-11
- 西村睦男 1980 「藩領人口と城下町人口」『歴史地理学』111 歴史地理学会 pp. 1-15
- 西山博章 2004 「宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡における廃棄遺構の様相」『続 遺跡からみた江戸のゴミ』 江戸遺跡研究会 pp. 29-41
- 西山博章 2012 「江戸城の考古学：知られざる火災の記憶」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』26 pp. 334-341
- 野間晴雄 2010 「17~19世紀江戸・東京近郊の花き園芸の発達と空間的拡散-グローバル/ローカルな視点からの菊の歴史地理」『東アジア文化交渉研究』3 関西大学 pp. 395-431
- 野村兼太郎 1959 「近世の江戸」地方史研究協議会 『日本産業史大系 4 関東地方篇』 東京大学出版会 pp. 23-42

## 【ハ】

- 初台遺跡調査団 1993 『松平出羽守抱屋敷 出雲国松江藩抱屋敷発掘調査報告：初台遺跡』
- 萩尾昌枝 1990 「江戸時代の儀礼的な宴会の食器について」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』 東京大学遺跡調査室 pp. 908-911
- 橋口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5 東京考古談話会 pp. 133-160
- 橋口定志 1990 「中世東国の居館とその周辺 ー南関東におけるいくつかの発掘調査事例から」『日本史研究』330 日本史研究会 pp. 70-97
- 橋口定志 1991 「江戸の郊外 植木の里」江戸遺跡研究会編 『甦る江戸』 新人物往来社 pp. 113-142
- 橋口定志 1993 「町を囲うこと」『考古学ジャーナル』356 ニューサイエンス社 pp. 21-25
- 橋口定志 2006 「武家の屋敷の境界施設のあり方をめぐって」『近世の屋敷境とその周辺』 四国城下町研究会 pp. 121-129
- 橋本鉄男 1979 『ろくろ』 法政大学出版局
- 長谷川孝徳 2000 「大江戸単身赴任事情」西秋良宏編 『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』 東京大学出版会 184-189
- 長谷川孝徳 2010 「街道と加賀藩」『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』 板橋区立郷土資料館 pp. 121-124
- 長谷川正次 1994 「加賀藩拝領屋敷関係資料 ー下屋敷を中心として」『いたばし区史研究』3 板橋区史編さん調査会 pp. 50-63
- 長谷川正次 2010 「高遠藩の下屋敷」『内藤町遺跡 新宿御苑大温室の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査』 東京都埋蔵文化財センター pp. 138-156
- 長谷部由紀 1993 「大名屋敷の花壇」『大名屋敷』 新宿区教育委員会 pp. 76-81
- 波多野 純 1996 『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城II (侍屋敷)』 至文堂
- 八丁堀三丁目遺跡調査会 2003 『八丁堀三丁目遺跡 II』
- 服部之総 1933 「維新史方法上の諸問題」『歴史科学』1933 4-7月号 (『服部之総著作集1 維新史の方法』)

- 理論社 pp. 91-194)
- 服部実喜 1995 「都市鎌倉と周辺の陶磁器」『貿易陶磁研究』15 貿易陶磁学会 pp. 26-51
- 濱岡伸也 2010 「「参勤交代」と加賀藩」『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』板橋区立郷土資料館 pp. 125-129
- 浜田明美・林 淳一 1989 「江戸幕府の接待にみられる江戸中期から後期の饗応の形態」『日本家政学会誌』40-12 日本家政学会 (芳賀登・石川寛子 (監) 1998 『全集日本の食文化第7巻』雄山閣 pp. 1073-1081)
- 浜田耕作 1919 「遺物遺跡と民族」『民族と歴史』1-2 日本學術普及會 pp. 21-24
- 浜田耕作 1922 『通論考古學』大鑑閣
- 浜中邦弘 2010 「近世京都の考古学 -公家の事例-」『同志社大学考古学シリーズX 考古学は何を語るか』同志社大学考古学シリーズ刊行会 pp. 527-538
- 林 玲子 1968 「江戸地廻り経済圏の成立過程 -繰綿・油を中心として」大塚久雄ほか編 『資本主義の形成と発展』東京大学出版会 pp. 255-271
- 林 玲子 1974 「近世における塵芥処理」『流通経済論集』8-4 流通経済大学 pp. 72-86
- 原田多加司 2003 『屋根：檜皮葺と柿葺』法政大学出版局
- 原田伴彦 1957 『日本封建都市研究』東京大学出版会
- 原田佳伸 1990 「江戸近郊の武家抱屋敷」『東京学芸大学近世史研究』4 東京学芸大学近世史研究会 pp. 157-172
- 原田佳伸 1997 「大名下屋敷と地元百姓のかかわり -岡山藩大崎屋敷出入の先地主百姓の動向-」竹内誠編 『近世都市江戸の構造』三省堂 pp. 235-263
- 原 史彦 2011 「参勤交代と巨大都市江戸の成立」『江戸の大名屋敷』吉川弘文館 pp. 26-59
- 原 祐一 2000 「近世の金属遺物」西秋良宏編 『加賀殿再訪』東京大学出版会 pp. 96-101
- 原 祐一 2002 「東京大学医科学研究所 (旧大村藩下屋敷) から出土した鉛塊について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3 pp. 66-68
- 原 祐一 2004 「薬学系総合研究棟地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 85-91
- 原 祐一 2006 「薬学系系総合研究棟地点 (2004年度) 1次調査・2次調査」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5 pp. 43-65
- 原 祐一 2011 「水戸藩駒込邸の地形と構造、江戸時代の発掘調査」『弥生誌 向岡記碑をめぐって』東京大学総合研究博物館 pp. 47-56
- 原 祐一 2012 「医学部附属病院受電設備棟地点と確認された低地の土地利用状況と江戸時代以降の造成と雨水処理」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院受電設備棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 101-115
- パリノ・サーヴェイ 1993 「自然科学分析調査」『市谷本村町遺跡』市谷本村町遺跡調査団 pp. 68-81
- 日暮義晃 2000 「水戸小石川藩邸への将軍御成」『春日町Ⅲ・Ⅳ地点一文京区役所庁舎建設に伴う発掘調査報告書一』文京区遺跡調査会 pp. 173-179
- 樋田 薫 1961 「岩村藩に於ける知行制と武士耕作地」『日本歴史』158 日本歴史学会 pp. 20-29
- 一ツ橋二丁目遺跡調査会 1998 『一ツ橋二丁目遺跡』
- 氷室史子 2005 「大名藩邸における御守殿の構造と機能：綱吉養女松姫を中心に」『お茶の水史学』49 お茶の水女子大学史学科読史会 pp. 77-117
- 平井 聖 1968 『日本の近世住宅』鹿島研究所出版会
- 平田禎文 1986 「近世都市江戸における武家地空間の研究」『港郷土資料館研究紀要』3 pp. 1-132
- 平田禎文 2000 「上級旗本屋敷地内における家臣の居住空間」頌寿記念会編 『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版 pp. 943-960
- 二木謙一・荘 美知子校訂 1990 『木下延俊慶長日記：慶長十八年日次記』新人物往来社
- 藤野 保・清水紘一 1994 『大村見聞集』高科書店
- 藤村聡 1996 「近世後期における江戸武家屋敷の上水・橋々組合について」『歴史学研究』682 歴史学研究會 pp. 18-27
- 藤本 強・宮崎勝美・萩尾昌枝 1987 「東京・東京大学構内遺跡 (医学部附属病院中央診療棟建設予定地点)」『木簡研究』9 木簡学会 pp. 78-81
- 藤本 強 1990a 「江戸時代の基準尺度について」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室 pp. 811-820
- 藤本 強 1990b 「あとがき -まとめにかえて-」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室 pp. 949-950
- 藤本 強 1990c 『埋もれた江戸』平凡社



- 藤原良章 1988 「中世の食器考くかわらけ」ノート 網野善彦ほか編 『列島の文化史』5 日本エディタースクール出版部 pp. 59-94
- 文京区遺跡調査会 1991 『真砂遺跡』
- 文京区遺跡調査会 1995 『龍岡町遺跡：三菱史料館建設に伴う埋蔵文化財調査報告』
- 文京区遺跡調査会 1996 『春日町遺跡第V地点』
- 文京区遺跡調査会 1999 『春日町遺跡第VI地点』
- 文京区遺跡調査会 2000 『春日町遺跡第III・IV地点』
- 文京区遺跡調査会 2003 『白山御殿跡ほか』
- 文京区遺跡調査会 2003 『真砂町遺跡第V地点』
- 文京区遺跡調査会 2004 『春日町遺跡第VII地点』
- 文京区遺跡調査会 2004 『駒込鰻縄手遺跡第II地点』
- 文京区教育委員会 2011 『本郷台遺跡群第2地点 一文京区新総合体育館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 文京区教育委員会 2015 『龍岡町遺跡第6地点』
- 文京区真砂遺跡調査会 1990 『真砂遺跡第3地点』
- 平凡社 2011 『日本分県大地図』 平凡社
- 細川 義 1989 「文献史料からみた理学部7号館地点」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』 東京大学遺跡調査室 pp. 480-506
- 細川 義 1990 「加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 24-46
- 堀内秀樹 1990 「江戸における井戸の有する二側面」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室 pp. 832-843
- 堀内秀樹 1992 『備前系焼絞め播鉢』の系譜—17世紀以降の備前播鉢及び堺播鉢について『東京考古』10 東京考古談話会 pp. 91-110
- 堀内秀樹 1995 「磁器の概観 一遺構内出土陶磁器群の年代的な位置づけ」『飯田町遺跡』 飯田町遺跡調査会 pp. 237-249
- 堀内秀樹 1997 『東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察』『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 pp. 279-305
- 堀内秀樹 2000a 「考古資料から見た江戸時代の料理と器具」 江戸遺跡研究会編 『江戸文化の考古学』 吉川弘文館 pp. 86-98
- 堀内秀樹 2000b 「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその画期」 竹石健二先生・澤田大多郎両先生の還暦を祝う会編 『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』 pp. 213-231
- 堀内秀樹 2000c 「史料から見た御成と池遺構出土資料」 西秋良宏編 『加賀殿再訪』 東京大学出版会 pp. 138-143
- 堀内秀樹 2005a 「外来診療棟地点出土陶磁器・土器類について」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 521-536
- 堀内秀樹 2005b 「加賀藩・大聖寺藩江戸屋敷で使用された肥前磁器と「古九谷」」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 543-560
- 堀内秀樹 2005c 「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 149-161
- 堀内秀樹 2006 「江戸大名藩邸における京焼の消費 一京焼と伊万里の出土様相の相違から一」『京焼の成立と展開 一押小路、栗田口、御室一』 関西陶磁史研究会 pp. 85-115
- 堀内秀樹 2007 「17世紀の陶磁器からみた江戸社会」『関西近世考古学研究』15 関西近世考古学研究会 pp. 84-110
- 堀内秀樹 2009 「宴会道具としての貿易陶磁器の再評価—大聖寺藩邸出尾の当駅陶磁器L32-1—」 竹石健二先生・澤田大多郎先生の古希を祝う会編 『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』 六一書房 pp. 185-206
- 堀内秀樹 2010a 「都市江戸の成立と出土遺物の江戸的様相」 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編 『中世はどう変わったか』 高志書院 pp. 73-100
- 堀内秀樹 2010b 「江戸大名屋敷出土の陶磁器」『季刊考古学』110 雄山閣 pp. 27-30
- 堀内秀樹 2011a 「懷徳門地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 pp. 60-67
- 堀内秀樹 2011b 「大名藩邸で使用された陶磁器と御殿の生活」 江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』 吉川弘文館 pp. 181-206
- 堀内秀樹・坂野貞子 1996 「江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁」『東京考古』14 東京考古談話会

【マ】

- 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会 1998 『埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取扱いについて（報告）』
- 毎田佳奈子 2004 「染井の植木屋 -遺構・遺物にみる植木屋らしさ-」『続 江戸からみた江戸のゴミ』 江戸遺跡研究会 pp. 7-27
- 毎田佳奈子 2005 「鑄造関連の遺構とその使用段階について」『芝田町五丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』 港区教育委員会 pp. 181-185
- 毎田佳奈子 2007 「江戸の土取場と『西久保城山土取場』の発掘調査」『考古学ジャーナル』553 ニューサイエンス社 pp. 27-32
- 前田育徳会 1958 『加賀藩史料 幕末編上巻』 広瀬豊作
- 前田家編集部 1929 『加賀藩史料』 石黒文吉
- 真砂遺跡調査団 1987 『真砂遺跡』
- 増山 仁 2000 「金沢城下の様相」『江戸と国元』 江戸遺跡研究会 pp. 140-156
- 増山 仁 2005 「近世日本海域の流通 -金沢城下町遺跡の遺物組成から-」 長谷川成一・千田嘉博編 『日本海域歴史大系第四巻 近世篇 I』 清文堂出版 pp. 441-459
- 松方冬子 1992 「加賀藩の機構と江戸家老」『史学雑誌』102-9 史学会 pp. 25-44
- 松本剣志郎 2005 「江戸武家屋敷組合と都市公共機能」『関東近世史研究』58 関東近世史研究会 pp. 48-73
- 松本四郎 1959 「江戸の職人」 地方史研究協議会編 『日本産業史大系 4 関東地方篇』 東京大学出版会 pp. 43-53
- 松本豊寿 1971 『城下町の歴史地理学的研究・増訂版』 吉川弘文館
- 丸山雍成 1993 「近世における大名・庶民の食生活 その料理献立を中心として」『九州文化史研究所紀要』38 九州大学文学部九州文化史研究施設 1 pp. 25-180
- 丸山雍成 2007 『参勤交代』 吉川弘文館
- 三浦浄心 1980 「慶長見聞集」江戸叢書刊行会編 『江戸叢書 第二巻』
- 三浦三郎 1972 「解説（上田三平著 日本薬園史の研究）」 三浦三郎編 『改訂増補 日本薬園史の研究』 渡辺書店 416-449 頁
- 三木 弘 1992 「遺構よりみた各区の特徴」『内調町遺跡 -放射 5 号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 79-90
- 三木弘・棚木真・井汲隆夫・青山正昭 1992 「発掘成果からみた内藤町遺跡の歴史的変遷」『内調町遺跡 -放射 5 号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 101-107
- 水江漣子 1981 「江戸市中の形成」 豊田 武ほか編 『講座日本の封建都市；第 3 巻 地域的展開』 文一総合出版 pp. 8-29
- 水野瑞夫 1972 「尾張藩の薬園」 三浦三郎編 『改訂増補 日本薬園史の研究』 渡辺書店 pp. 264-274
- 水藤 真・加藤 貴 2000 『江戸図屏風を読む』 東京堂出版
- 水本和美 1998 「消費地遺跡出土の「鍋島」」『東京考古』16 東京考古談話会 pp. 77-111
- 水本和美 2001 「発掘された食器に見る暮らしの変化」 木村 礎・林 英夫編 『地方史研究の新方法』 八木書店 pp. 192-193
- 水本和美 2004 「紀伊新宮藩水野家下屋敷-新宿区水野原遺跡」『月刊考古学ジャーナル』514 ニューサイエンス社 pp. 26-29
- 水本和美 2010 「江戸における鍋島出土状況」『季刊考古学』110 雄山閣 pp. 18-22
- 水本和美 2011a 「神田淡路町二丁目遺跡で鍋島が出土した意味について」『神田淡路町二丁目遺跡』 四門 pp. 316-323
- 水本和美 2011b 「徳川幕閣の江戸上屋敷の発掘 -淡路町二丁目遺跡が示した大名屋敷研究の新たな意味-」『神田淡路町二丁目遺跡』 四門 pp. 345-349
- 港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986 『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』
- 港区伊皿子貝塚遺跡調査会 1981 『伊皿子貝塚遺跡』
- 港区教育委員会 1994 『筑前福岡藩黒田家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2002 『長門府中藩毛利家屋敷遺跡発掘調査報告書 I』
- 港区教育委員会 2002 『薩摩鹿兒島藩島津家屋敷跡第 1 遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2002 『長門府中藩毛利家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2003 『越後糸魚川藩松平家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』

- 港区教育委員会 2004 『長門長府藩毛利家屋敷跡・麻布桜田町町屋跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2005 『播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡発掘調査報告書 I』
- 港区教育委員会 2006 『豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2007 『陸奥盛岡藩南部家屋敷跡遺跡発掘調査概要報告書』
- 港区教育委員会 2008 『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2009 『肥後熊本藩細川家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2010 『播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡発掘調査報告書II』
- 港区教育委員会・共和開発 2004 『近江山上藩稲垣家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会 2005 『筑前福岡藩黒田家屋敷跡第2遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会・岡三リビング株式会社 2005 『芝田町五丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会・共和開発 2006 『上野沼田藩土岐家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会・共和開発ほか 2007 『筑前秋月藩黒田家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会・パスコ・森トラスト 2012 『陸奥八戸藩南部家屋敷跡遺跡・陸奥八戸藩南部家屋敷跡下層遺跡発掘調査報告書』
- 港区教育委員会・共和開発株式会社 2013 『豊後日出藩木下家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 南麻布福祉施設建設用地内遺跡調査会 1991 『港区No.91 遺跡』
- 美濃部達也 2001 「宿場のうつわ 内藤町遺跡から出土した文字資料からのアプローチ」『食器にみる江戸の食生活』 江戸遺跡研究会 pp. 113-127
- 宮城県味噌醤油工業協同組合 1959 『仙台味噌の歴史』
- 宮腰松子 1971 「幕末ある大名の「御献立帖」」『風俗』10-1 日本風俗史学会 pp. 26-40 (芳賀登・石川寛子(監) 1997 『全集日本の食文化 第10巻』にて「幕末のさる大名の「御献立帖」として再録 雄山閣)
- 宮腰松子 1973 「加賀藩の武家料理と菌部流」『神戸女学院大学論集』19-3 pp. 85-104
- 宮腰松子 1984 「加賀藩の食事規定」『飲食史林』5 飲食史林刊行会 p. 40, pp. 22-23
- 宮崎勝美 1989 「江戸の武家屋敷地」『日本都市史入門 1 空間』 高橋康夫・吉田伸之編 東京大学出版会 pp. 85-106
- 宮崎勝美 1990 「加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊考察編』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 5-23
- 宮崎勝美 1992 「江戸の土地—大名・幕臣の土地問題」 吉田伸之編 『日本の近世 ; 9 都市の時代』 中央公論社 pp. 129-172
- 宮崎勝美 1994a 「大名屋敷の境界装置 —表長屋の成立とその機能—」 宮崎勝美・吉田伸之編 『武家屋敷 : 空間と社会』 山川出版社 pp. 3-28
- 宮崎勝美 1994b 「近世考古学の進展と武家屋敷研究 —あとがきにかえて—」 宮崎勝美・吉田伸之編 『武家屋敷 : 空間と社会』 山川出版社 pp. 251-255
- 宮崎勝美 1994c 「尾張藩麴町邸絵図について」『尾張藩麴町邸跡—(仮) 新日鐵紀尾井ビル建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書—』 紀尾井町6-18 遺跡調査会 pp. 233-255
- 宮崎勝美 1995 「武家屋敷」 朝尾直弘編 『岩波講座日本通史』 岩波書店 pp. 321-337
- 宮崎勝美 2000 「江戸本郷の加賀屋敷」 西秋良宏編 『加賀殿再訪』 東京大学出版会 pp. 30-37
- 宮崎勝美 2008 『大名屋敷と江戸遺跡』 山川出版社
- 宮崎勝美 2011 「大名江戸屋敷の展開過程」 江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』 吉川弘文館 pp. 207-224
- 宮崎勝美 2013 「萩藩江戸屋敷の作事記録と絵図」 作事記録研究会編 『萩藩江戸屋敷作事記録』 中央公論美術出版 pp. 505-548
- 宮崎勝美・藤川昌樹 1999 『近世都市における巨大建設技術に関する総合的研究』
- 宮路淳子 2002 「Archaeological Analysis of Dry Cultivated Field Soils with Regard to Soil Micromorphology (畑土壌の考古学的研究—土壌微細形態分析から)」『考古学と自然科学』44 日本文化財科学会 pp. 17-32
- 宮間利之 2000 「江戸遺跡の所謂「かわらけ溜り」について」『東京考古』18 東京考古学会 pp. 125-148
- 妙正寺川 No.1 遺跡調査会 1987 『妙正寺川 No.1 遺跡』
- 向井 互 2013 「近世から近代の遺構と遺物」『千駄ヶ谷五丁目遺跡3次調査 新宿駅南口本屋基礎解体・鉄道防護工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 四門 pp. 24-207
- 武蔵文化財研究所 2006 『有楽町二丁目遺跡』
- 村井益男 1964 『江戸城 : 将軍家の生活』 中央公論社
- 村井益男 1984 「近世初期の城郭建設」 永原慶二・山口啓二編 『講座・日本技術の社会史六・土木』

- 日本評論社 pp. 261-298
- 村田香澄 2001a 「明和5年(1768)西側添地拝領の過程 -街区の復原図作成を通して」『尾張藩上屋敷跡遺跡VI』 東京都埋蔵文化財センター pp. 582-596
- 村田香澄 2001b 「尾張藩市谷邸のトイレ -文献資料からの考察-」『尾張藩上屋敷跡遺跡VIII』 東京都埋蔵文化財センター pp. 490-496
- 村田香澄 2002 「コメント 『江戸御小納戸日記』にみる長屋の暮らし」『尾張藩上屋敷跡遺跡IX』 東京都埋蔵文化財センター pp. 551-553
- 村田香澄 2003 「市谷邸の堀と土 -復原図作成を通しての課題-」『尾張藩上屋敷跡遺跡IX』 東京都埋蔵文化財センター pp. 554-558
- 村田香澄 2005 「文献調査」『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』 東京都埋蔵文化財センター pp. 464-454
- 百瀬正恒 2001 「聚楽台の築城と都市の発展」 日本史研究会編 『豊臣秀吉と京都』 文理閣 pp. 135-167
- 森きく子 1987 「富山藩江戸屋敷の火災と再建 -於前田正甫公の時代」『富山史壇』93 富山史壇会 pp. 26-38
- 森下 徹 1990a 「加賀藩割場と足軽・小者」『史学雑誌』99-3 史学会 pp. 345-365, pp. 455-454
- 森下 徹 1990b 「育徳園」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊考察編』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 47-59
- 森下 徹 1994 「加賀藩江戸藩邸における奉公人」 宮崎勝美・吉田伸之編 『武家屋敷：空間と社会』 山川出版社 pp. 193-222
- 森島康雄 2001 「考古学からみた伏見城・城下町」 日本史研究会編 『豊臣秀吉と京都』 文理閣 pp. 183-197
- 森本伊知郎 1986 「陶磁器」『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』 港区麻布台一丁目遺跡調査会 pp. 252-257
- 森本伊知郎 1991 「江戸市中の物資流通と生活用具-遺跡出土の陶磁器から」 江戸遺跡研究会編 『甦る江戸』 新人物往来社 pp. 143-180
- 森本伊知郎 1995 「近世遺物について」『龍岡町遺跡』 文京区遺跡調査会 pp. 105-114
- 森本伊知郎 2002 「威信財としての近世陶磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告』94 pp. 15-33
- 森本伊知郎 2003 「近世陶磁器の数量把握について--異なる算定方法による遺物組成の比較」『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』34 pp. 1-21
- 森本伊知郎 2005 「紀年銘を記した近世陶磁器--生産者・生産地に関する銘文の検討を中心に」『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』36 pp. 29-43
- 森本伊知郎 2006 「東海道における近世陶磁器の流通 -産地組成からみた地域差-」『文化情報学部紀要』5 椋山女学園大学文化情報学部 pp. 133-151
- 森本伊知郎 2007 「近世陶磁器研究の現状と課題」 鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：「新しい時代の考古学」の方法と実践』 慶應義塾大学出版会 pp. 25-48
- 森本伊知郎 2008 「出土陶磁器からみた近世の時代区分と時期区分」『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』39 pp. 87-103
- 森本伊知郎 2009 『近世陶磁器の考古学：出土遺物からみた生産と消費』 雄山閣
- 森本伊知郎・鈴木裕子 1995 「天明期の墨書を記した植木鉢-江戸における植木栽培・園芸との関係から-」『東京考古』13 東京考古談話会 pp. 119-148
- 両角まり 2007 「江戸在地系土器の現在・過去・未来」 鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：「新しい時代の考古学」の方法と実践』 慶應義塾大学出版会 pp. 119-133
- 師橋辰夫 1990 「江戸・東京朱引考」『文化財の保護』22 東京都教育委員会 pp. 13-24
- 文部科学省構内遺跡調査会 2004 『文部科学省構内遺跡』
- 文部科学省構内遺跡調査会 2006 『文部科学省構内遺跡2』

## 【ヤ】

- 八木合名会社仙臺味噌醸造所 1914以降 『仙臺味噌：元祖』
- 柳下重雄 1993 「江戸神田の下水 類聚撰要巻之二十「神田大下水・小下水」を読む」 日本下水文化研究会
- 安田善三郎 1916 『釘』(明治後期産業発達史資料；第452巻 龍溪書舎 1999)
- 山内家史料刊行委員会 1980 『第二代忠義公紀 第1編』
- 山形万里子 1989 「近世・近代の遺跡周辺 文献調査の成果より」『白金館址遺跡III 研究編』 白金館址遺跡調査会 pp. 1-15
- 山口剛志 1991 「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』27

- pp. 115-126
- 山口剛志 2000 「中・近世における遺構間接合資料の検討：小田原城下・欄干橋町遺跡第IV地点の事例から」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』 竹石健二先生・澤田大多郎両先生の還暦を祝う会 pp. 139-164
- 山口剛志・羽生淳子・細川義 1989 「絵図面と考古資料との対比」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』 東京大学遺跡調査室 pp. 511-518
- 山田揆一 1922 「仙台物産沿革」(『仙台叢書』別集第2巻) 仙台叢書刊行会
- 山田邦和 2001 「豊臣秀吉と京都」 日本史研究会編 『伏見城とその城下町の復元』 文理閣 pp. 198-240
- 山田四郎右衛門・日置 謙校訂 1931 『三壺聞書』 石川県図書館協会
- 大和 智 2000 『城と御殿』 至文堂
- 山中共吉 1916 「東京市井旧事」『郷土研究』3-11号 郷土研究社 pp. 49-50 (複製版 名著出版 1975)
- 山本英二 1993a 「文献・絵図史料からみた市谷本村遺跡」『尾張徳川家上屋敷跡 大蔵省印刷局市谷倉庫遺跡に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区市谷本村町遺跡調査団 pp. 52-60
- 山本英二 1993b 「尾張徳川家江戸屋敷と楽々園焼」新宿区教育委員会編 『大名屋敷』 新宿歴史博物館 pp. 82-86
- 山本英二 1995 「尾張藩江戸屋敷と楽々園焼」『市谷本村町遺跡』 新宿区市谷本村町遺跡調査団 pp. 272-276
- 山端 穂 2006 「元禄期における將軍御成と白山御殿」 東京学芸大学近世史研究会編 『千川上水・用水と江戸・武蔵野』 名著出版 pp. 87-108
- 横田冬彦 2001 「豊臣政権と首都」 日本史研究会編 『豊臣秀吉と京都：聚楽第・御土居と伏見城』 文理閣 pp. 18-42
- 吉崎雅規 2003 「近世期の水野原遺跡と屋敷拝領者の変遷」『水野原遺跡』 新宿区生涯学習財団 pp. 290-306
- 吉田伸之 1988 「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科・日本の歴史・別冊・歴史の読みかた』2 朝日新聞社 pp. 21-30
- 吉田伸之 1992 「都市の近世」 吉田伸之編 『都市の時代(日本の近世9)』 中央公論社 pp. 7-32
- 吉田伸之 1994 「加賀藩江戸藩邸の火消組織について」 宮崎勝美・吉田伸之編 『武家屋敷：空間と社会』 山川出版社 pp. 223-249
- 吉田伸之 1995 「巨大城下町-江戸」 朝尾直弘ほか編 『岩波講座日本通史15(近世5)』 岩波書店 pp. 151-188
- 吉田伸之 2000 『巨大城下町江戸の分節構造』 山川出版社
- 吉田伸之 2001 「城下町の構造と展開」 佐藤信・吉田伸之編 『都市社会史(新体系日本史6)』 山川出版 pp. 87-117
- 吉田伸之 2010a 「序 ソシアビリテと分節構造」 吉田伸之・伊藤毅編 『伝統都市4分節構造』 東京大学出版会 pp. i-xiv
- 吉田伸之 2010b 「江戸・内・寺領構造」 吉田伸之・伊藤毅編 『伝統都市4分節構造』 東京大学出版会 pp. 3-41
- 吉田正高 2003 「幕末尾張藩における川田久保屋敷の利用-「川田久保御屋鋪御長屋之図」の分析を中心に-」『水野原遺跡』 新宿区生涯学習財団 pp. 307-312
- 吉田政博 1993 「加賀藩下屋敷関係の史料について -絵図の検討を中心に-」『いたばし区史研究』2 板橋区史編さん調査会 pp. 82-91
- 吉田政博 2010 「加賀藩江戸下屋敷平尾邸をめぐる一下屋敷絵図の検討を中心に-」『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』 板橋区立郷土資料館 pp. 154-158
- 吉永 昭 1977 「東北諸藩における藩政改革の展開」『愛知教育大学研究報告 人文科学・社会科学』26 pp. 232-218
- 吉永 昭 1978 「関東諸藩における藩政改革の展開」『愛知教育大学研究報告 人文科学・社会科学』27 pp. 342-329
- 吉永 昭 1979 「四国諸藩における藩政改革の展開」『愛知教育大学研究報告 人文科学・社会科学』28 pp. 246-231 頁
- 吉永 昭 1980 「近畿諸藩における藩政改革の展開」『愛知教育大学研究報告社会科学』29 pp. 92-77
- 吉永 昭 1981 「近畿諸藩における藩政改革の展開」『愛知教育大学研究報告社会科学』30 pp. 68-53
- 吉原健一郎 1980 『江戸の町役人』 吉川弘文館
- 吉原健一郎・俵元昭・中川恵司 1994 『復元江戸情報地図』 朝日新聞社

- 吉村豊雄 1989 「参勤交代の制度化についての一考察：寛永武家諸法度と細川氏」『熊本大学文学部紀要』  
29 pp. 28-49
- 吉原健一郎 1985 「江戸の町の構造について」『都心部の遺跡 一貝塚・古墳・江戸一』 東京都教育委員会  
pp. 253-264
- 四番町歴史民俗資料館 2009 『海と千代田の6000年』 千代田区立四番町歴史民俗資料館
- 林野庁六本木宿舎跡地内遺跡調査団 1995 『陸奥八戸藩南部家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 渡辺洋一 1987 「仙台藩江戸上屋敷略絵図」について『仙台郷土研究』復刊12 仙台郷土研究会  
pp. 48-55

【その他】

- 編著者不明 1915 『水戸藩史料 別記下』 徳川家蔵版（複製 吉川弘文館 1970）
- Dietler, M. and Hayden, B. 2001 Feasts : archaeological and ethnographic perspectives on food, politics, and power. Smithsonian Institution Press
- Vaporis, C. N. 2010 Tour of duty : samurai, military service in Edo, and the culture of early modern Japan. University of Hawai'i Press.